

沖縄県文化財調査報告書 第121集

湧田古窯跡(Ⅱ)

—県庁舎議会棟建設に係る発掘調査—

1995年 3月

沖縄県教育委員会



巻首図版 1 遺構の状況



卷首図版 2 張床土壙



卷首図版 3 上：土取り場跡 下：方形瓦敷遺構

序

本報告書は、県庁舎建設局からの分任を受け、1989年度から1990年度にかけて実施した県庁舎議会棟建設工事に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

県庁舎の建設は主要施設である行政棟、議会棟、警察棟の3棟の建設が順次進められ、1992年度に最後の警察棟が完成しております。本地域一帯は琉球王府が編纂した文献「球陽」に記録のある湧田窯があったとされる地域として知られていましたが、確実な場所の特定には至っておりませんでした。

それが1985年度から1986年度にかけて実施された行政棟建設に伴う緊急発掘調査により保存良好な平窯形式の窯跡、その窯で焼かれたものと考えられる瓦など夥しい量の遺物や窯場で働く人達の作業場や生活用品、さらに居住空間を思わせる各種の遺構や井戸など、窯場で作業する人達の息吹が聞こえてきそうな状態でわたしたちの目の前にその姿を現しました。これらの成果はセンセーショナルな話題として窯業関係者を中心に多くの県民の関心を集めました。このような状況から同じ敷地内の議会棟地区や警察棟地区も湧田窯の範疇に入るものと予想され、建設工事前に発掘調査を実施した結果、予想に違わず各種の遺構や多量の遺物などが得られております。

今回報告します議会棟地区では張床土壌、瓦敷遺構、砂利敷遺構、ピット群、土取り場跡、瓦列遺構、溝状遺構などの検出、沖縄産の陶器や陶質・瓦質土器それに瓦類などの地元の焼き物を中心に中国産の陶磁器、タイ産の磁器、タイ産の陶器、肥前系の陶磁器などの遺物が出土していると聞いております。今回の成果は、既に報告されています行政棟地区の成果に新資料を追加し、湧田古窯の全体像の解明に新たな一ページを記したものと考えます。

本報告書が文化財保護思想の普及や地域文化財への関心並びに歴史に対する認識と理解を深め、さらに学術研究の一助として多方面に御活用願えれば幸いに存じます。

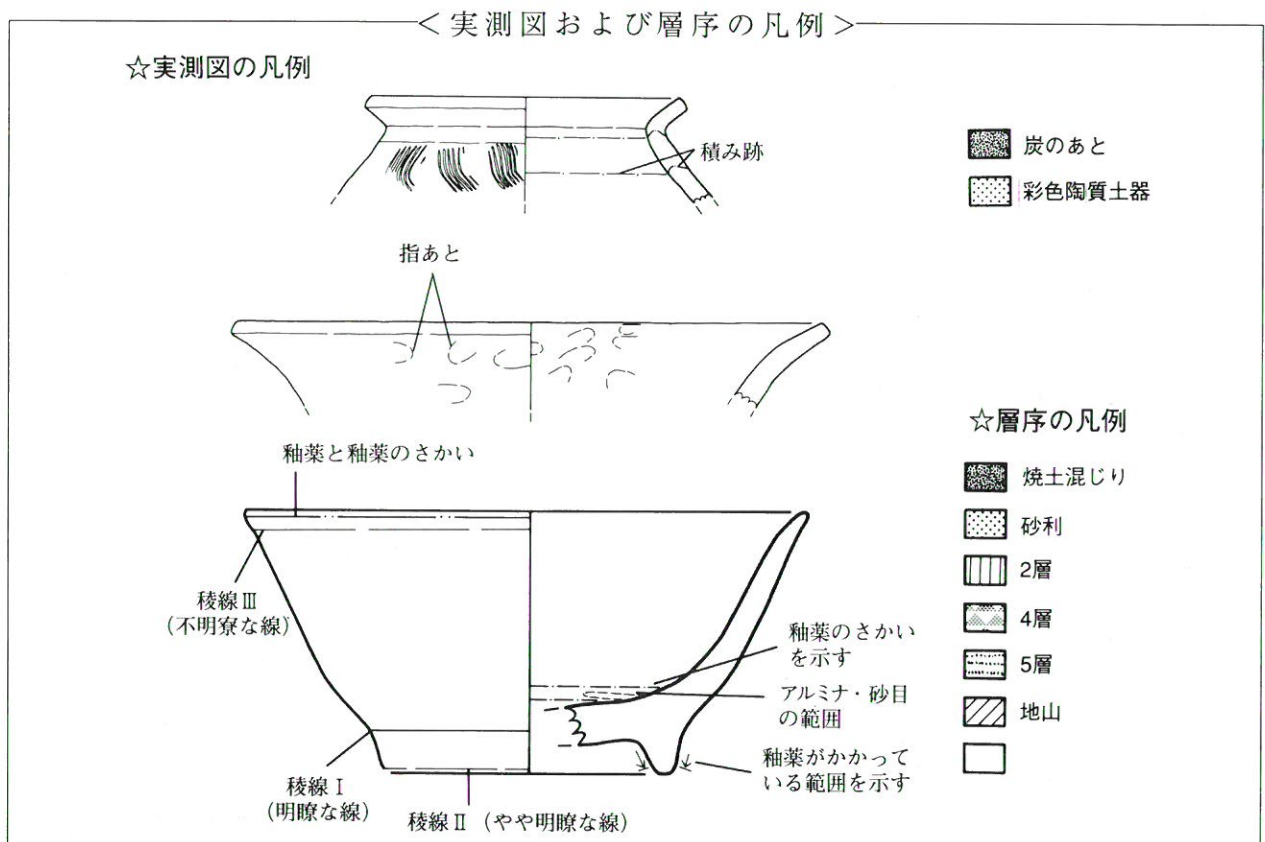
末尾になりましたが、発掘調査および資料整理作業にあたり、多大なる御指導・御協力を頂きました関係各位に深く感謝いたします。

平成7年3月

沖縄県教育委員会
教育長 嘉 陽 正 幸

例 言

1. 本報告書は1989年度から1990年度に実施した県庁舎議会棟建設に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は県庁舎建設局からの分任事業として県文化課が行った。
3. 第Ⅲ章で使用した国土基本図（1/2500）は建設省国土地理院発行のものである。
4. 本書に表した高度値は海拔高である。
5. 出土遺物の鑑定は下記の方々による。記して謝意を表します。
 - 陶磁器類 大橋 康 二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）
 - 獣・魚骨類 金子 浩 昌（早稲田大学考古学研究室）
 - 貝 類 黒住 耐 二（千葉県立中央博物館動物課技師）
6. 各章の執筆は下記のように分担し、編集は島袋春美の協力を得て、島袋洋が行った。
 - 島 袋 洋（第Ⅰ章第1～2節、第Ⅱ章、第Ⅴ章第1～8・10・11・20・22・25節）
 - 金 城 亀 信（第Ⅴ章9・12～16節）
 - 豊見山 禎（第Ⅲ章、第Ⅳ章第1～2節、第Ⅵ章）
 - 島 袋 春 美（第Ⅴ章第17～19・23・24・27節）
 - 仲 間 留 美（第Ⅴ章第21節）
 - 金 子 浩 昌（第Ⅴ章第26節）
7. 本書に掲載した遺物の写真撮影および現像・焼付などは長田剛、瑞慶覧尚美、立津春枝による。
8. 発掘調査で得られた遺物および実測図や写真類などの記録は、総て県文化課資料室にて保管している。



目 次

卷首図版

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査体制…………… 1

第Ⅱ章 位置と環境…………… 4

第Ⅲ章 調査経過…………… 8

第Ⅳ章 層序と遺構…………… 11

第1節 層 序…………… 11

第2節 遺 構…………… 16

1. 土取り場跡…………… 16

2. 張床土壇…………… 18

3. 井戸…………… 20

4. ピット群と砂利敷遺構…………… 20

5. 瓦敷遺構…………… 22

第Ⅴ章 出土遺物…………… 23

第1節 青磁…………… 23

第2節 白磁…………… 38

第3節 染付…………… 47

第4節 褐釉陶器…………… 60

第5節 色絵…………… 65

第6節 三彩…………… 66

第7節 瑠璃釉…………… 66

第8節 その他の陶磁器…………… 68

第9節 東南アジアの陶磁器…………… 71

第10節 本土産陶磁器…………… 75

第11節 須恵器…………… 81

第12節 沖縄産施釉陶器…………… 81

第13節 沖縄産無釉陶器…………… 111

第14節 土器…………… 127

第15節 陶質土器…………… 128

第16節 瓦質土器…………… 134

第17節 青銅製品…………… 149

第18節 骨製品…………… 149

第19節 古銭…………… 151

第20節 キセル…………… 154

第21節 円盤状製品…………… 155

第22節	埴埴	162
第23節	石製品	162
第24節	土錘	162
第25節	窯道具	165
第26節	脊椎動物遺体	167
第27節	貝類遺存体	181
第VI章	総括	182

目 次

第1図	沖縄本島及び那覇市の位置と湧田古窯跡の位置	5	第29図	染付 1 (碗)	49
第2図	湧田村の古地図	6	第30図	染付 2 (碗)	51
第3図	湧田古窯の範囲(推定)とその周辺(那覇市歴史地図より)	7	第31図	染付 3 (小碗)	53
第4図	現県庁舎と発掘調査箇所	9	第32図	染付 4 (皿)	55
第5図	グリット設定と遺構の配置	10	第33図	染付 5 (皿・鉢・袋物)	57
第6図	ニ・ネラインの層序	12	第34図	染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋)	59
第7図	30・33ラインの層序	13	第35図	褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)	63
第8図	井戸遺構と溝	15	第36図	褐釉陶器 2 (水甕・壺)	64
第9図	ネコ検出状況	15	第37図	色絵と三彩	67
第10図	古銭集中地(ネ・32第3層)	15	第38図	瑠璃釉、その他の陶磁器(青磁・鉄釉染付)	70
第11図	土取り場跡(平面)	16	第39図	東南アジア陶磁器	74
第12図	土取り場跡(断面)	17	第40図	本土産陶磁器 1	77
第13図	張床土壌(平面)	18	第41図	本土産陶磁器 2	79
第14図	張床土壌(断面)	19	第42図	本土産陶磁器 3	80
第15図	ピット群	20	第43図	須恵器	81
第16図	ピット群のプラン	21	第44図	沖縄産施釉陶器 1 (碗)	102
第17図	方形瓦敷遺構	22	第45図	沖縄産施釉陶器 2 (小碗)	103
第18図	瓦敷遺構	22	第46図	沖縄産施釉陶器 3 (小杯)	84
第19図	青磁 1 (碗)	28	第47図	沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)	104
第20図	青磁 2 (碗)	29	第48図	沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)	105
第21図	青磁 3 (碗)	30	第49図	沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)	106
第22図	青磁 4 (皿)	33	第50図	沖縄産施釉陶器 7 (蓋類)	107
第23図	青磁 5 (盤)	34	第51図	沖縄産施釉陶器 8 (乗燭・火取・香炉・花瓶・茶入)	108
第24図	青磁 6 (袋物)	36	第52図	沖縄産施釉陶器 9 (水滴・壺・油壺)	109
第25図	青磁 7 (香炉・その他)	37	第53図	沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)	110
第26図	白磁 1 (碗)	44	第54図	沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢)	121
第27図	白磁 2 (皿)	45	第55図	沖縄産無釉陶器 2 (壺)	122
第28図	白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)	46	第56図	沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)	123

第57図	沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢・小鉢) ……………	124	第70図	瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物・急須・鍔釜) ……………	148
第58図	沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手) ……………	125	第71図	青銅製品・骨製品 ……………	150
第59図	沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部) ……………	126	第72図	古銭拓影 ……………	153
第60図	土器 ……………	127	第73図	キセル ……………	154
第61図	陶質土器 1 (鍋・火炉) ……………	131	第74図	円盤状製品の大きさと種類と相関 ……………	155
第62図	陶質土器 2 (鍋の蓋・水鉢・急須・撮・蓋) ……	132	第75図	円盤状製品 1 ……………	160
第63図	陶質土器 3 (急須・壺・球状製品) ……………	133	第76図	円盤状製品 2 ……………	161
第64図	瓦質土器 1 (植木鉢) ……………	142	第77図	上：埴埴・石製品、下：土錘 ……………	163
第65図	瓦質土器 2 (こね鉢) ……………	143	第78図	土錘の長さとの重さの相関 ……………	165
第66図	瓦質土器 3 (摺鉢) ……………	144	第79図	窯道具 ……………	166
第67図	瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢) ……………	145	第80図	ウシ歯の年齢構成グラフ ……………	176
第68図	瓦質土器 5 (浅鉢・碗・水盤・大皿) ……………	146	第81図	切痕をもつ骨 ……………	179
第69図	瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉) ……………	147	第82図	切痕をもつ四肢骨 (ウシ) ……………	180
			第83図	生息地別出土状況 ……………	181

表 目 次

第1表	青磁出土状況 ……………	24	第20表	イヌ出土量 ……………	169
第2表	白磁出土状況 ……………	39	第21表	ネコ出土量 ……………	169
第3表	染付出土状況 ……………	47	第22表	ネコ歯牙出土量 ……………	170
第4表	染付観察一覧 ……………	48	第23表	ウマ出土量 ……………	170
第5表	その他の陶磁器出土状況 ……………	62	第24表	ウマ歯牙出土量 ……………	171
第6表	本土産陶磁器出土状況 ……………	75	第25表	ウシ歯牙出土量 ……………	173
第7表	本土産陶磁器観察一覧 ……………	76	第26表	ウシorウマ出土量 ……………	173
第8表	沖縄産施釉陶器出土状況 ……………	93	第27表	ブタ歯牙出土量 ……………	174
第9表	沖縄産施釉陶器観察一覧 ……………	96	第28表	ゴンドウクジラ出土一覧 ……………	175
第10表	沖縄産無釉陶器観察一覧 ……………	116	第29表	ネズミ出土一覧 ……………	175
第11表	陶質土器観察一覧 ……………	130	第30表	ヒト出土一覧 ……………	175
第12表	瓦質土器観察一覧 ……………	138	第31表	トリ出土量 ……………	175
第13表	古銭出土状況 ……………	151	第32表	ヤギ歯牙出土量 ……………	175
第14表	有文銭観察一覧 ……………	152	第33表	ヤギ出土量 ……………	175
第15表	無文銭観察一覧 ……………	152	第34表	ブタ出土量 ……………	177
第16表	円盤状製品出土状況 ……………	155	第35表	ウシ出土量 ……………	178
第17表	円盤状製品観察一覧 ……………	156	第36表	巻貝出土状況 ……………	183
第18表	土錘観察一覧 ……………	164	第37表	二枚貝出土状況 ……………	184
第19表	魚類出土量 ……………	168			

図版目次

- 図版1 作業風景
図版2 発掘の状況
図版3 作業風景
図版4 層序 上：ニ-31~33東壁 中：ネ-31~33東壁
下：ヌ~ノ-33南壁
図版5 遺構の全体状況
図版6 遺構の検出状況
図版7 張床土壌
図版8 ピット群検出状況
図版9 土取り場跡の検出状況
図版10 砂利敷遺構の状況
図版11 瓦敷遺構の状況
図版12 溝状遺構
図版13 敷石遺構の状況
図版14 B区井戸の状況
図版15 B区ネコ検出状況
図版16 遺物出土状況
図版17 青磁 1 (碗)
図版18 青磁 2 (碗)
図版19 青磁 3 (碗)
図版20 青磁 4 (皿)
図版21 青磁 5・7 (盤・香炉・その他)
図版22 青磁 6 (袋物)
図版23 白磁 1 (碗)
図版24 白磁 2 (皿)
図版25 白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)
図版26 染付 1 (碗) (上：外面、下：内面)
図版27 染付 2 (碗) (上：外面、下：内面)
図版28 染付 3 (小碗) (上：外面、下：内面)
図版29 染付 4 (皿) (上：外面、下：内面)
図版30 染付 5 (皿・鉢・袋物) (上：外面、下：内面)
図版31 染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋)
(上：外面、下：内面)
図版32 褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)
図版33 褐釉陶器 2 (水甕・壺)
図版34 色絵と三彩
図版35 上：瑠璃釉、下：その他の陶磁器 (青磁・
鉄釉染付一下左：外面、下右：内面)
図版36 東南アジア陶器
図版37 本土産陶磁器 1 (上：外面、下：内面)
図版38 本土産陶磁器 2 a (上：外面、下：内面)
図版39 本土産陶磁器 3
図版40 上：本土産陶磁器 2 b、下：須恵器
図版41 沖縄産施釉陶器 1 (碗)
図版42 沖縄産施釉陶器 2 (小碗) (上：外面、
下：内面)
図版43 沖縄産施釉陶器 3 (小杯) (上：内面、
中：側面、下：外面)
図版44 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)
図版45 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)
図版46 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)
図版47 沖縄産施釉陶器 7 (蓋類) (上：外面、
下：内面)
図版48 沖縄産施釉陶器 8 (乗燭・火取・香炉・
火炉・花瓶・茶入)
図版49 沖縄産施釉陶器 9 (水注・壺・油壺)
図版50 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)
図版51 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢) 外面
図版52 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢) 内面
図版53 沖縄産無釉陶器 2 (壺)
図版54 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)
図版55 沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢
・小鉢)
図版56 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急
須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の
把手)
図版57 沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)
図版58 土器
図版59 陶質土器 1 (鍋・火炉)
図版60 陶質土器 2・3 (鍋の蓋・水鉢・急須・
蓋・撮・壺・球状製品)
図版61 瓦質土器 1 (植木鉢)
図版62 瓦質土器 2 (こね鉢)
図版63 瓦質土器 3 (摺鉢)
図版64 瓦質土器 3 (摺鉢)
図版65 瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)

図版66 瓦質土器 5 (浅鉢・碗・水盤・大皿)
図版67 瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉)
図版68 瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物
・急須・鍔釜)
図版69 青銅製品・骨製品
図版70 古銭 (上：表面、下：裏面)
図版71 上：古銭 (鳩目銭)、下：キセル
図版72 円盤状製品 1 (上：外面、下：内面)
図版73 円盤状製品 2 (上：外面、下：内面)
図版74 上左：埴塼、上右：石製品、下：土錘
図版75 窯道具
図版76 上：カニ・魚、下：トリ・イヌ
図版77 ゴンドウクジラ

図版78 ウマ歯
図版79 ウマ・ウシ
図版80 ブタ
図版81 ブタ歯 (上：上顎骨、下：下顎骨)
図版82 ブタ歯
図版83 ブタ
図版84 上：ブタ、下：ヤギ
図版85 ウシ歯
図版86 ウシ
図版87 巻貝
図版88 巻貝
図版89 二枚貝

報 告 書 抄 録

ふりがな	わくた こよう あと							
書名	湧田古窯跡(Ⅱ)							
副書名	県庁舎議会棟建設に係る発掘調査							
巻次								
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第121集							
編著者名	島袋洋・金城亀信・豊見山禎・金子浩昌・島袋春美・仲間留美							
編集機関	沖縄県教育委員会 文化課							
所在地	〒900 沖縄県那覇市泉崎1丁目2-2 TEL 098-866-2731~2733							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わくたこようあと 湧田古窯跡	おきなわけん 沖縄県 なはしいずみざき 那覇市泉崎	47201		26°	127°	1989.11.8	2,000	県庁舎議会 棟建設工事
				12'	40'	}		
				31"	59"	1990.7.14		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湧田古窯跡	生産遺跡	近世	土取り場跡 張床土壇 ピット群 井戸遺構 方形瓦敷遺構		青磁 白磁 染付 褐釉陶器 色絵と三彩 瑠璃釉 黒釉陶器 東南アジア陶器 本土産陶磁器 須恵器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 土器 陶質土器 瓦質土器 青銅製品 古銭			

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

県庁舎建設基本構想の中の主要な建物である行政棟・議会棟・警察棟の建設が順次進められ、1993年の警察棟の完成により建物の建設工事は終結をみた。行政棟建設の際には発掘期間中の工事ストップなど工事着手前の詳細な協議調整がなされなかったことに起因して大幅な遅れがでた。そのことが大きな教訓となり以後は建設局と文化課の間で協議調整が密に行われ、発掘調査の後に工事着手と建設計画の進行に支障のないスムーズな対応がとられた。

行政棟建設に伴う発掘調査により一大窯業地であった湧田の窯場の息遣いが聞こえてくるような成果が得られている。このことから本地域一帯はすでに知られているとおり、湧田窯が展開していた地域であることが判明した。そのことは議会棟・警察棟の建設予定地内においても当然のこととして予想された。

行政棟建設が一段落し、議会棟予定地内にあった武徳殿の解体撤去がなされた後の確認調査により、本予定地内も湧田窯の窯場の一角をなしていることが判った。それを受けて文化課と県庁舎建設局は協議調整を行った結果、建設局からの分任事業として文化課が発掘調査を1989年11月から実施することになった。

註

註1. 「湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－」【沖縄県文化財調査報告書第111集】 沖縄県教育委員会
1993年3月

註2. 「図録沖縄の古窯 やちむん会10周年記念特別号」【やちむん】 やちむん会 1979年

第2節 調査体制

発掘調査（平成元年度）から資料整理および報告書の刊行（平成6年度）まで、下記の体制で実施した。

調査主体	沖縄県教育委員会
教育長	高良 清敏（平成元年度～平成2年度）
〃	津留 健二（平成3年度～平成4年度）
〃	嘉陽 正幸（平成5年度～）
文化課課長	宜保榮治郎（平成元年度～平成3年度）
〃	金城 功（平成4年度）
〃	糸数 兼治（平成5年度）
〃	西平 守勝（平成6年度）
文化課課長補佐	平田 與進（平成元年度）
〃	上江洲 均（平成元年度～平成2年度）
〃	伊佐 真一（平成2年度～平成3年度）
〃	知念 勇（平成3年度～平成6年度）
〃	川満 一成（平成4年度～平成5年度）

文化課課長補佐……………新垣 末子 (平成6年度)

調査事務

文化振興係長……………仲里 哲雄 (平成元年度～平成3年度)

文化振興係・管理係長……………大村 光仁 (平成4年度～平成5年度)

〃……………比屋根正治 (平成6年度)

主事……………波平 淳 (平成元年度)

〃……………上原 節子 (平成元年度)

〃……………照屋 邦雄 (平成元年度～平成2年度)

〃……………新垣 昌頼 (平成元年度～平成3年度)

〃……………仲里 富代 (平成元年度～平成2年度)

〃……………玉村 良子 (平成2年度～平成4年度)

〃……………上間 尚子 (平成2年度～平成4年度)

〃……………比嘉美代子 (平成3年度～平成5年度)

主任……………伊波 盛治 (平成4年度～平成6年度)

主査……………新垣 和子 (平成5年度～平成6年度)

副主査……………宮城 直子 (平成5年度～平成6年度)

〃……………新崎 文子 (平成6年度)

調査総括

埋蔵文化財係長……………安里 嗣淳 (平成元年度～平成2年度)

〃……………大城 慧 (平成3年度～平成6年度)

発掘調査委員……………豊見山 禎 (充指導主事 現開邦高校教諭)

〃……………長嶺 均 (文化課専門員)

〃……………金城 透 (文化課専門員)

発掘調査補助員……………大城 聖子 (文化課嘱託調査員)

〃……………安次富智子 (文化課嘱託調査員)

発掘調査協力……………松沢 亜生 (奈良国立文化財研究所 考古計画研究室室長)

〃……………小田 静夫 (東京都教育庁文化課 学芸員)

〃……………山田 史子 (東京大学史料編纂所 文部教官助手)

発掘調査作業員

平良ツル子、鳩間利恵子、多和田順子、渡慶次賀三、仲間末子、山川トシ子、鳥袋文子、上原美枝、大城ひとみ、宮国恵子、中塚末子、中田邦子、与那嶺勢津子、外間喜久枝、新里造一、浦添栄一、平良百合子、金城由美子、安田春子、平良典子、津覇八重子、山畑キミ、金城ツネ子、鳥尻三郎、大城豊子、新垣直美、諸見里幸子、金城一美、比嘉すが子、並里富子、赤嶺春美、平良貴子、安次富マサ子、辺土名キヨ子、森田良子、金城春江、喜屋武和子、兼城光子、諸見里豊子、具志常子、幸地マサ子、根保康史、末吉敏恭、熱田和則、赤嶺和美、上原美智子、西銘パトロシニア、宮城サダ子、金城敬子、川上益子、与儀恵子、比嘉まり子、大村由美子

資料整理作業員

安次富智子、安西いずみ、安和千代子、伊礼章子、岡村綾子、我那覇悠子、外間瞳、外間峰子、吉田昌子、宮城サダ子、宮城成子、宮平優子、玉寄智恵子、玉城初子、金城敬子、金城克子、金城美祈、金城礼子、金武雅子、源河秀子、呉屋恵子、高良三千代、座間味美津子、崎原美智子、手嶋永子、小嶺禮子、照屋美智子、照屋利子、上原園子、上原博美、上原美智子、城間悦子、城間桂子、城間千鶴子、新垣ゆかり、新垣千恵子、新垣由美子、新城さゆり、新城礼子、新里マサ、神村英樹、神村英世、瑞慶覧尚美、杉山知寿子、西銘パトロシニア、西銘定子、石橋朝子、石嶺さゆり、石嶺真由美、川上益子、川満美賀子、大城淳子、大城勝江、大城聖子、大城茂美、大村由美子、池原直美、池田悦子、中村美江子、仲宗根三枝子、仲村恒子、長嶺初子、津覇園枝、津波古好子、田中睦美、知念純子、豊見山ゆかり、当山慶子、鳩間利恵子、比嘉まり子、比嘉昌子、比嘉優子、備瀬枝美子、浜元春江、普天間直也、譜久村郁子、平良貴子、豊見山小百合、木佐貫るみ子、与儀恵子、与儀清美、又吉純子、仲間留美、田中ゆきの、新城恵、島袋里美、島京美、島袋春美

遺物洗浄作業員

上原美穂子、中村昌子、嘉数キミエ、饒平名安子、真境名百合子、吉田トヨ子、牧志珠代、大城好明、大城敏子、小沢紀美子、岡村綾子、伊志嶺ひとみ、上原涼子、親泊貞子、新垣かおり、山城淳子、上原菊枝、新垣直美、中嘉夏樹、平良加代

第Ⅱ章 位置と環境

湧田古窯跡は那覇市泉崎一丁目・二丁目および壺川の一部を含む広大な範囲に展開した一大窯業地であり、瓦を焼く窯、荒焼（無釉陶器）を焼く窯、上焼（施釉陶器^(註1)）を焼く窯に分かれていたことなどが知られている。

県庁所在地である那覇市は沖縄本島の南西側、東シナ海に面して位置し、中部から南部の方へ「く」の字状に東シナ海へ突出した周辺一帯に占地する。北側に浦添市と接し、東から南にかけて西原町、南風原町、豊見城村の各町村と接している。上部（西側）が若干M字状になる略台形状を呈している。地形的には西側（海側）に低地が展開し、それを囲むように東側（内陸側）に台地や丘陵が発達している。地質をみると島尻層群（砂岩、泥岩）が基盤をなし、内陸側は琉球石灰岩がそれを覆い、さらにその風化土である赤褐色粘土（島尻マージ）が分布する。海側は沖積層の堆積がみられる。

那覇市はもともと海上に浮かぶ大小の島々からなり、尚巴志王代のころに貿易港としてにぎわいをみせ、それとともに周辺の村落も繁栄し、西・東・泉崎・若狭町が那覇四町と呼ばれる商業の中心地となった。1451年、尚金福王が国相壊機に命じて築造させた長虹堤により首里地区との行き来が便利になり、また、中国からの冊封使を迎える宿舎の建設や寺社などの建立が増加していったことなどが文献から知られる。

湧田古窯は識名丘陵がゆるやかに傾斜してくる北西部に位置し、海側の低地部に接している。南側に久茂地川、北側を国場川がそれぞれ略東西方向に流れており、両方の川を利用できる位置にあることが判る。つまり、これまでに収集された遺物や県庁舎建設に伴う調査（第1次～第3次）などから国場川に近い南側の傾斜に上焼の窯場、中央付近の西側斜面に荒焼の窯場、久茂地川に近い北側の場所に瓦を焼く窯場があったようである。1970年に壺川の工事現場から多量の灰釉碗^(註1)などが出土したようである。

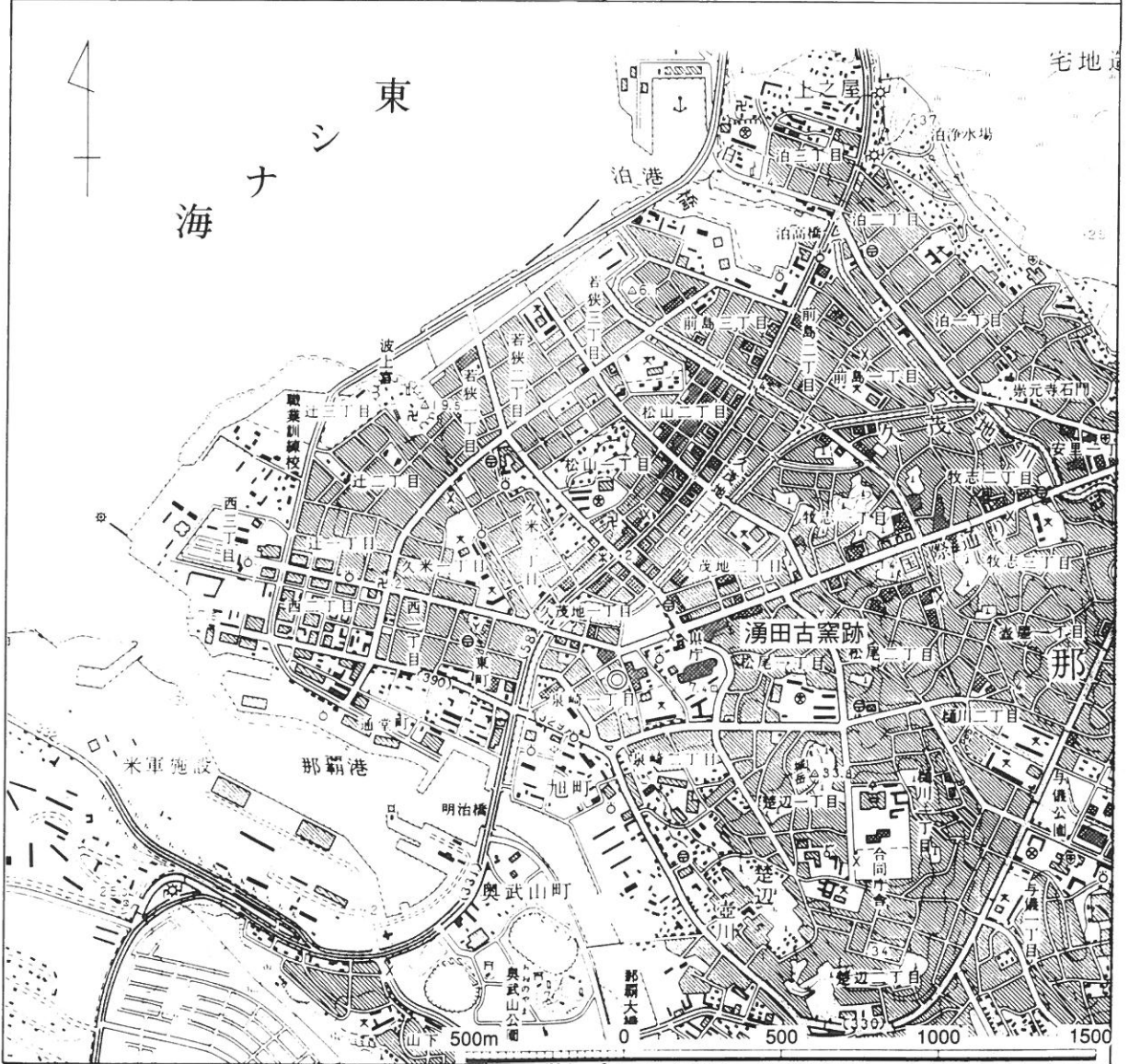
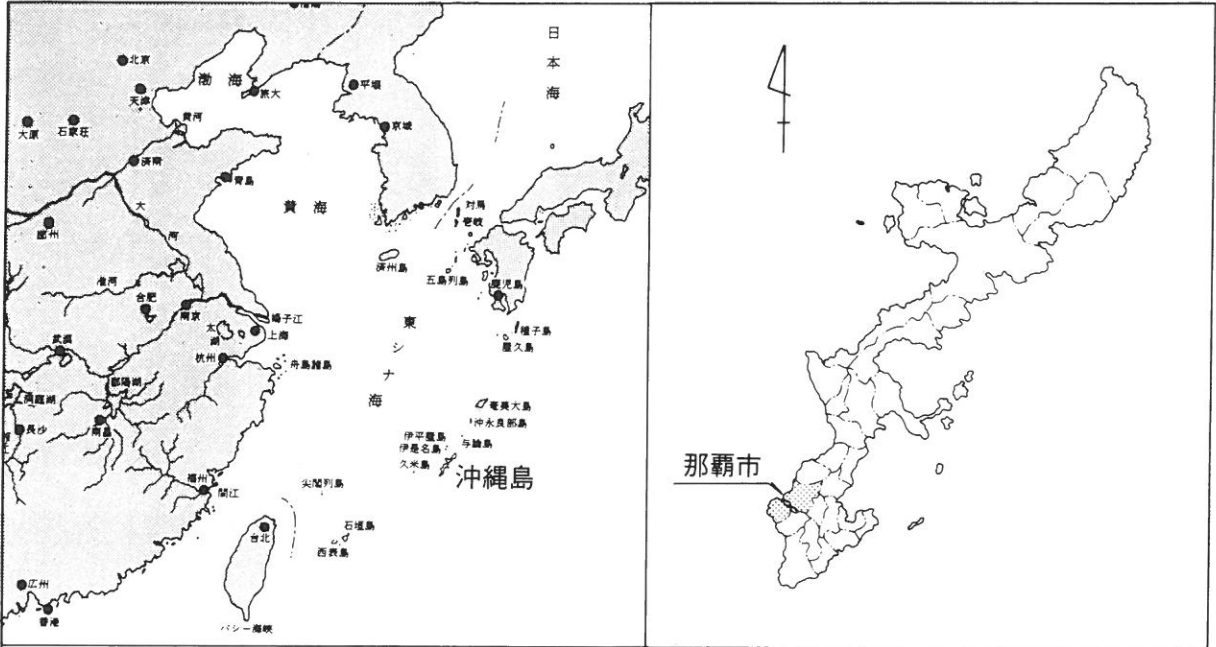
湧田窯の開始時期については判然としないが、1616年に薩摩から一六・一官・三官を招聘して焼き物の技術指導を行うことが文献にみえる。このことから湧田の地にはそのような素地があったとされる。1682年の壺屋統合まで窯業の中心地として活気を呈し、陶業史をかざる名陶工、仲村渠致元や平田典通なども作陶にはげんだといわれている。また、壺屋への統合は順次行われたようで、その後も窯業地として営まれたとされる。

湧田と呼ばれた地域一帯は、現在、県庁や警察署、小学校や住宅などが立ち並び、当時の面影はまったくといっていいほど残ってない。ただ、那覇市歴史地図^(註2)をみると当時の地名やその名残が点々とみられるだけである。（第3図）

註

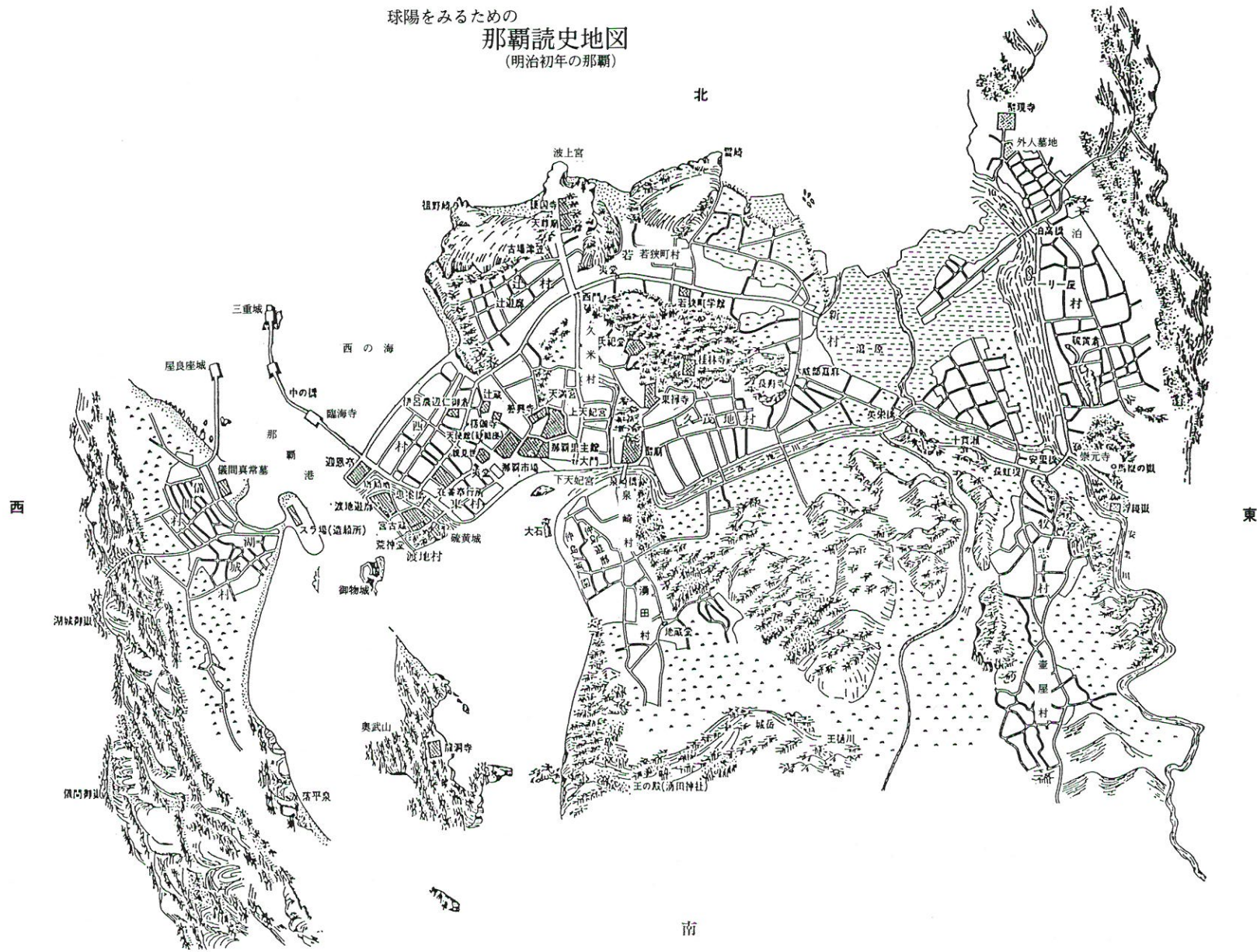
註1、「図録 沖縄の古窯」 やちむん会10周年記念 やちむん特別号 やちむん会 1979年

註2、「那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書—」 那覇市教育委員会 1986年3月



第1図 沖縄本島及び那覇市の位置と湧田古窯跡の位置

球陽をみるための
那覇読史地図
 (明治初年の那覇)



第2図 湧田村の古地図



第3図 湧田古窯の範囲 (推定) とその周辺 (那覇市歴史地図より)

第Ⅲ章 調査経過

調査は1989年11月8日～1990年7月14日までの約9カ月に亘り実施した。調査対象地域は議会棟建設予定地内の南側地域で、県庁敷地の北端部分（旧第4庁舎一帯）および一段低くなった旧武徳殿前である。しかし、調査開始当初は行政棟建設工事が進行中であり、それに伴う作業用地として行政棟側に近い地域が使用されていたため、工事に支障のない北側地域から調査を始めることになった。

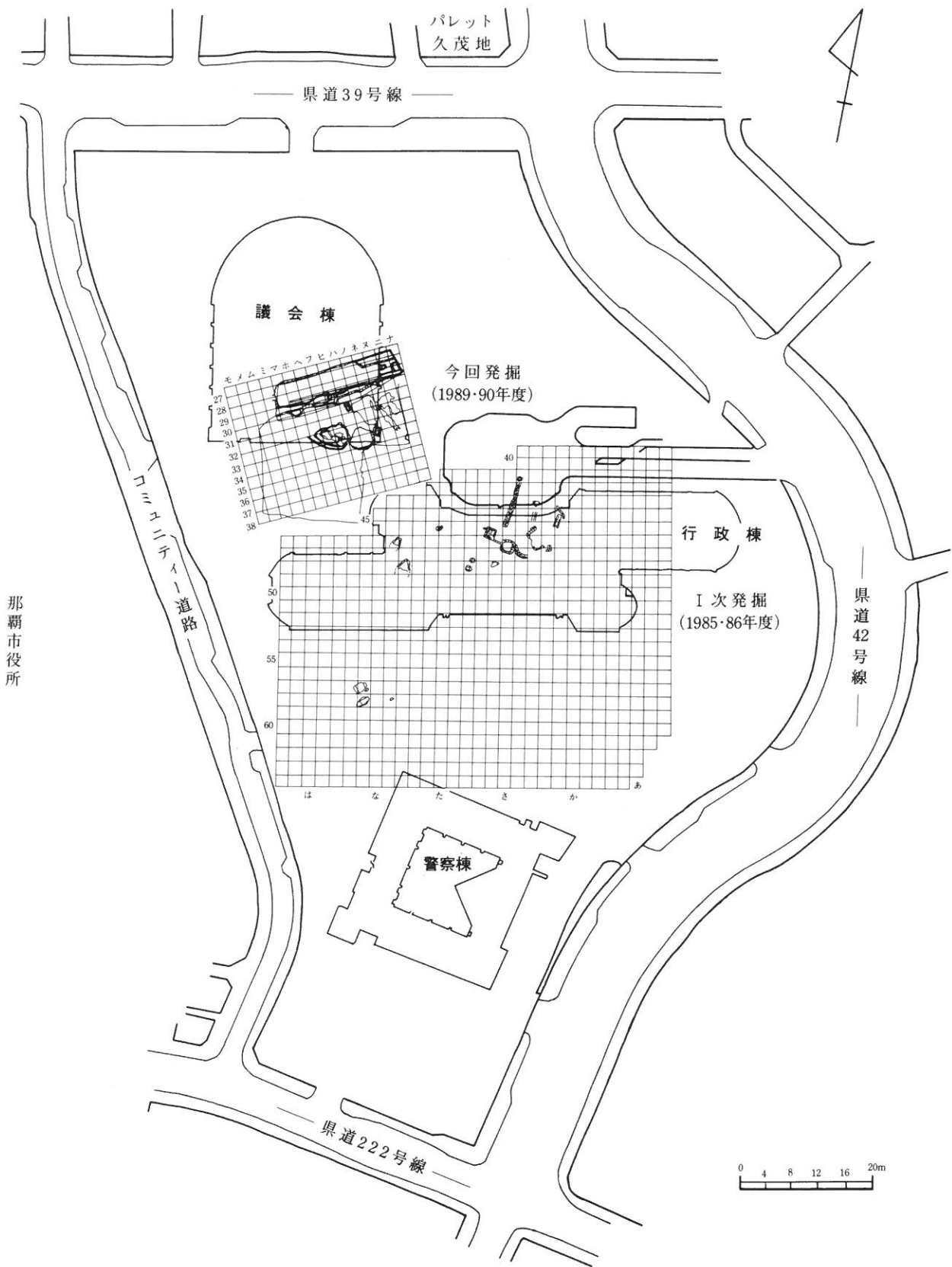
グリット設定は行政棟地区の発掘調査の際の基準に合わせて行ったほうが理解しやすいかと考えたが、その時の基準杭は撤去されたのか確認できず、仕方なく大体の方向あわせを行ない任意に基準点を設けた。調査区のほぼ中央にみられる井戸から西側へ流れる排水溝のラインに沿うように東西の基準ラインを決め、このラインに直交するように南北のラインを設け、調査区一帯に4m×4mを単位とする方眼枠を組んだ（第5図）。北東隅の杭を示準し、東西方向へ50音、南北方向へ算用数字で表した。グリットの呼称は井戸の際をハ-30とし、ヒ-30、フ-31などとした。

発掘調査は対象区域の北側、29・30ラインから開始した。ただ、この地区は海拔3m前後の低地であり、1m程度掘り下げると水が湧き出してくるため、ポンプを使用しながらの発掘調査となった。また、1990年1月には行政棟建設に伴い作業用地になっていた区域の調査が可能になり、29・30ライン発掘調査と並行してバックホーによる表土剥ぎを行った。しかし、この年の1・2月は雨が多く、しばしば現場の作業が中断され、表土剥ぎが終了したのは2月中旬となった。

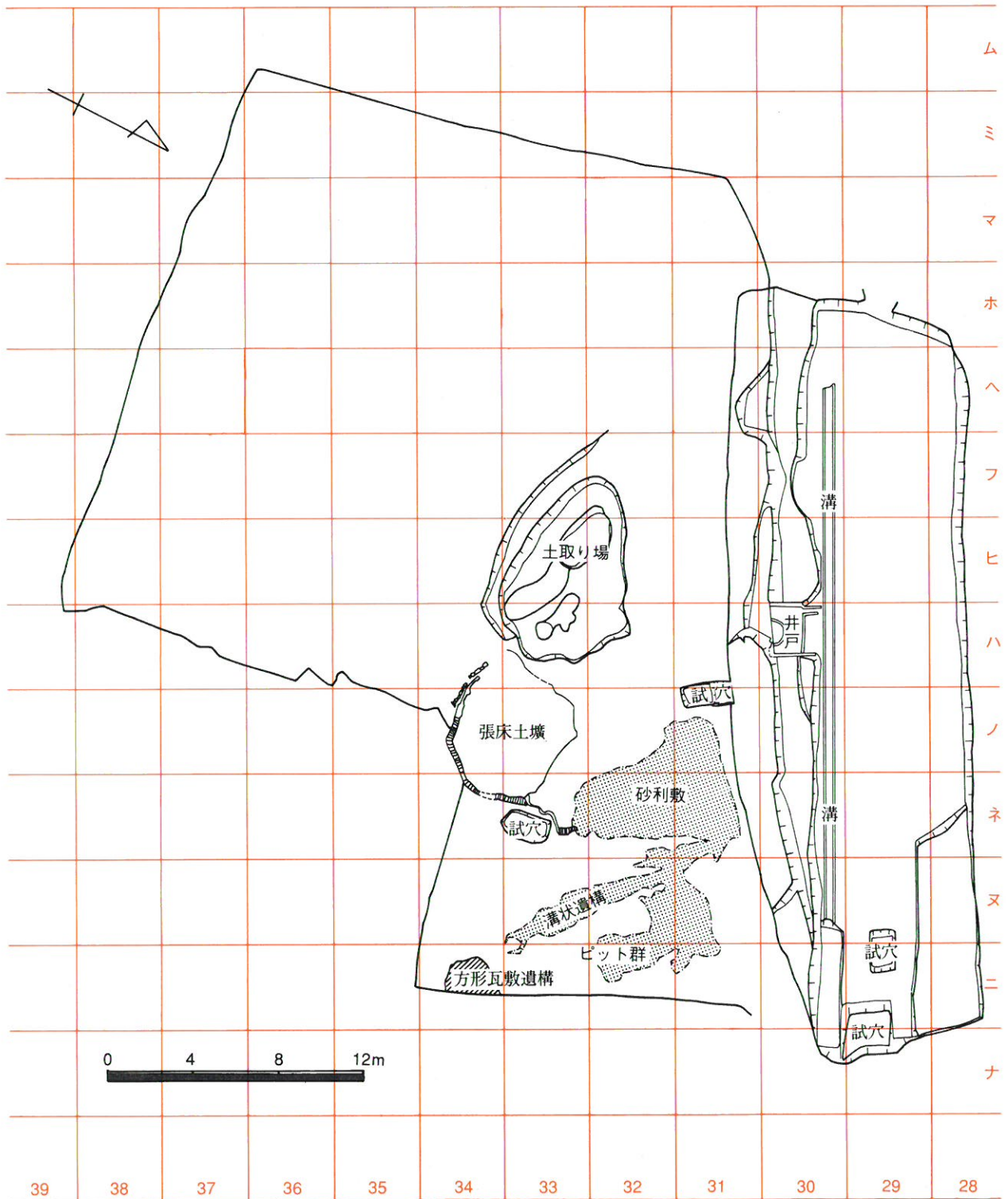
先に実施していた29・30ラインの発掘調査の状況から、この部分は未攪乱の遺物包含層がなく、水の湧き出してくる深さまで攪乱されていることが判明した。そのためこのライン以北については調査の対象から除外してもよいと考えられ、以後は30ライン以南の調査に全力を注いだ。

表土剥ぎの終了した30ライン以南は発掘調査の進行に伴い、瓦敷遺構（第17・18図）、ピット群（第15・16図）、土取り場跡（第11・12図）、張床土壇（第13・14図）など当初の予想を大きく上回る遺構が検出された。このような未攪乱の堆積層の確認に伴い、出土遺物も質・量とも増加してきた。本地区のこのような状況は既に調査の終了している29・30ラインの状況と大きく異なっていることから、この地区をA区、30ライン以北をB区とした。

発掘調査の進行とともに季節も夏に向かい、春先とはうって変わった晴天続きの中、小十字を振りおろすと火花を散らすほど堅く締まった土との悪戦苦闘を強いられ、また、次々に顔を出す種々の遺構の実測作業に追われる日々が続いた。冬場から夏場まで約9カ月間という長期に亘る発掘調査も、1990年7月14日の実測作業および全体の完掘写真の撮影を終了し、県庁舎議会棟建設予定地の発掘調査業務を完了した。



第4図 現県庁舎と発掘調査箇所



第5図 グリット設定と遺構の配置

第IV章 層序と遺構

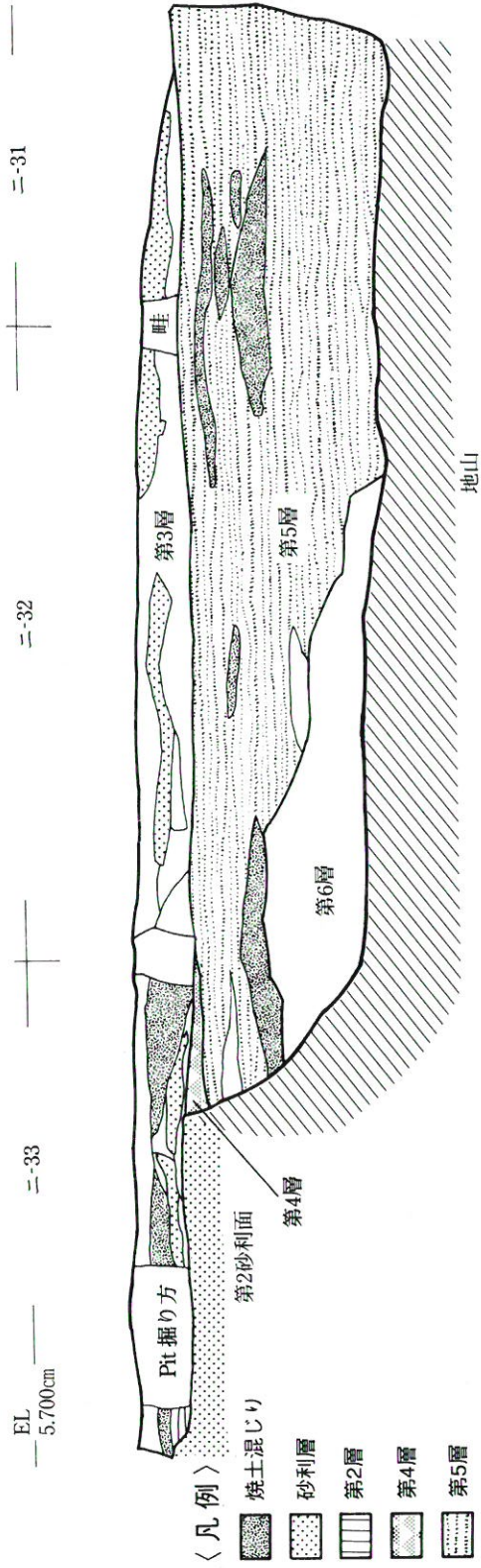
第1節 層序

本地区の堆積層は、調査区全体では、東西方向はほぼ水平に堆積し、南北方向では遺跡の立地する微丘陵の傾斜に沿って堆積するという状況を示している。次に各層の平面分布をみると、微丘陵上の調査区をN-30ラインで東西に分けると、西半部南側では、表土下はすぐ地山となり、遺物包含層の堆積は見られず、地山まで旧庁舎の建物基礎部分が入り込み攪乱を受けている。西半部北側では、表土下に第2層、第3層が堆積し、第3層下に土取り場遺構が地山を掘り込んでいる。東半部は第2層は調査区前面を被覆するが、第3層の堆積は見られず、第4層が全面に分布し、次いで第5層が堆積し、地山となっている。この第4層は、焼土や灰混じりの土層が薄く幾重にも堆積しているが、分布はいずれも部分的で、全面を覆うものではない。この層より各種の遺構が検出されている。同層は、土層断面観察から上部は削平されており、この面より遺構が検出され始めることから、第4層上面が本地区の最終期の生活面と考えられる。また、この面より下部でも薄い砂利層などの間層を挟んでいくつもの遺構が検出されている。地山は西半部は第3紀砂岩（ニービ）で、東半部は青灰色粘土（クチャ）となっている。

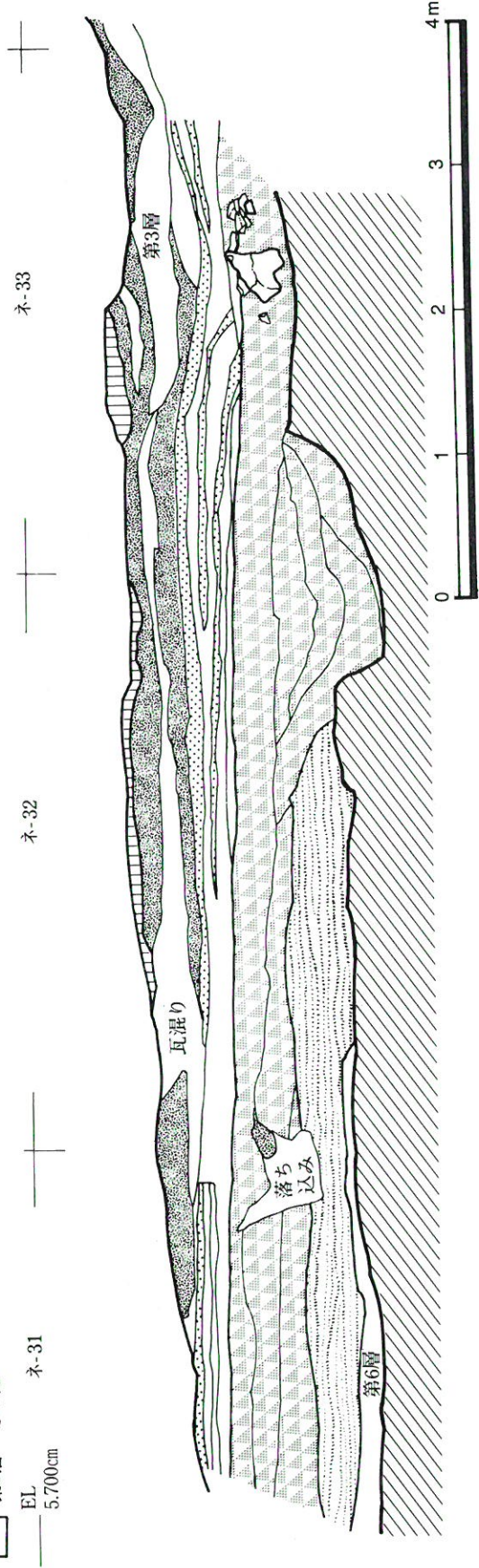
以下、各層の状況について略述する。

- 表土 —旧庁舎の基礎及びコーラル・青灰色粘土からなる整地層である。層厚は調査区南側で最大1mを越える。
- 第2層 —赤褐色土層で、調査区のはほぼ全面を覆う。本来は近世期に属すると思われるが明治時代以降、この地に県庁舎が建設される前後に整地されたとみられ、かなり攪乱を受けている。遺物は17世紀後半以降に属する中国産陶磁器および沖縄産陶器が多く、他に青磁・明染付等、近現代の遺物が混在している。
- 第3層 —黄褐色土層で、調査区の西半部を覆う層である。上層からの掘り込みによるほかは攪乱は受けていない。この層は土取り場跡、張床土壌を被覆している。遺物は近世期の陶磁器類が混在するが、明代の青磁・白磁・染付が量的には多い。灰色瓦類の出土もこの層から目立ってくる。
- 第4層 —焼土や灰、窯滓等が混入する土層で、本調査区の東半部を覆うものである。この層は単一層ではなく、前述の混入層が薄く部分的に幾重にも堆積し、平面的にも部分的にしか分布しないため全体としての把握が困難なため、これらの層をまとめて第4層とした。この層の上面は前述したように人為的に削平されているようで、張床土壌はこの面から掘り込んでいる。またピット群や砂利面、瓦列遺構もこの面から検出されている。またいくつかの間層を挟んで方形瓦敷遺構も検出されるなど、本地区の生活層を形成しているものと推定される。遺構は明代の陶磁器類、灰色瓦類、瓦質土器が出土している。
- 第5層 —地山への移行層で、後述する如く地山の土質の反映して、調査区西半部では黄褐色粘質土、東半部では灰色粘質土となっている。明代の陶磁器類、灰色瓦類、瓦質土器が出土するが量的には少ない。
- 地山 —本地区の基盤をなす。東半部は青灰色粘土層（クチャ）、西半部は第3紀砂岩（ニービ）となっている。

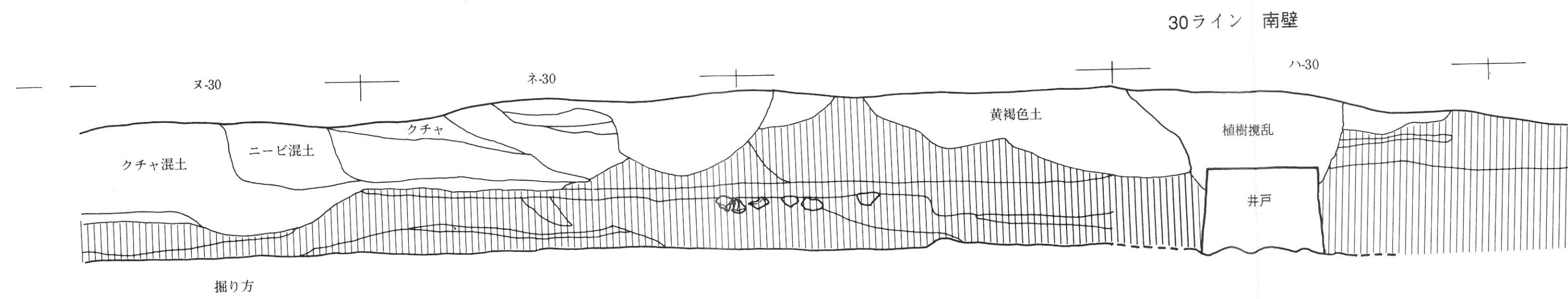
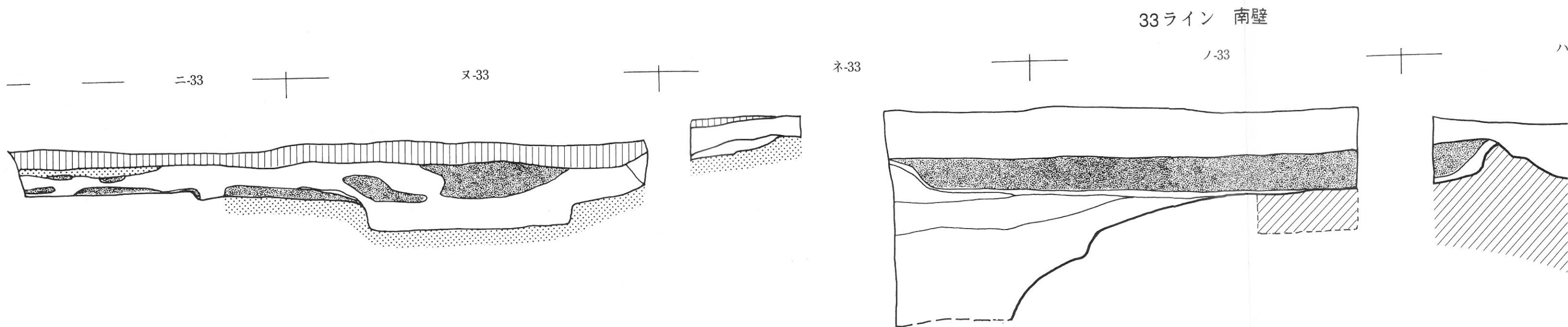
ニライイン西壁



ネライイン東壁

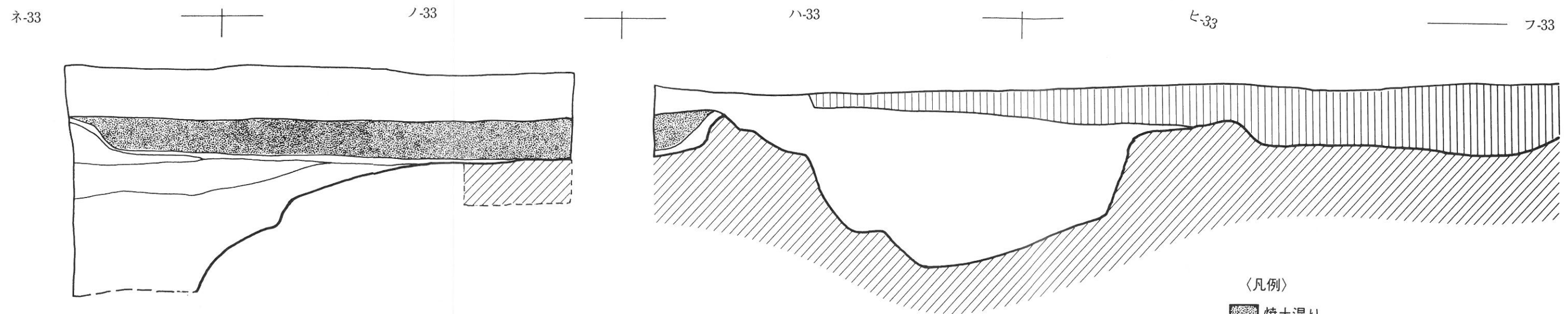


第6図 ニ・ネライインの層序

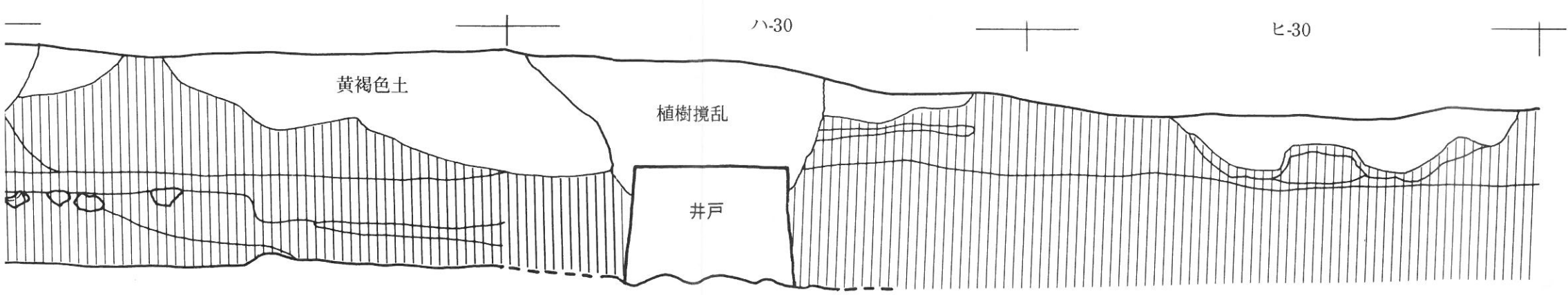









第7図 30・33ラインの層序

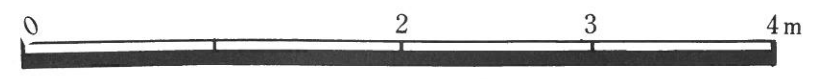
33ライン 南壁

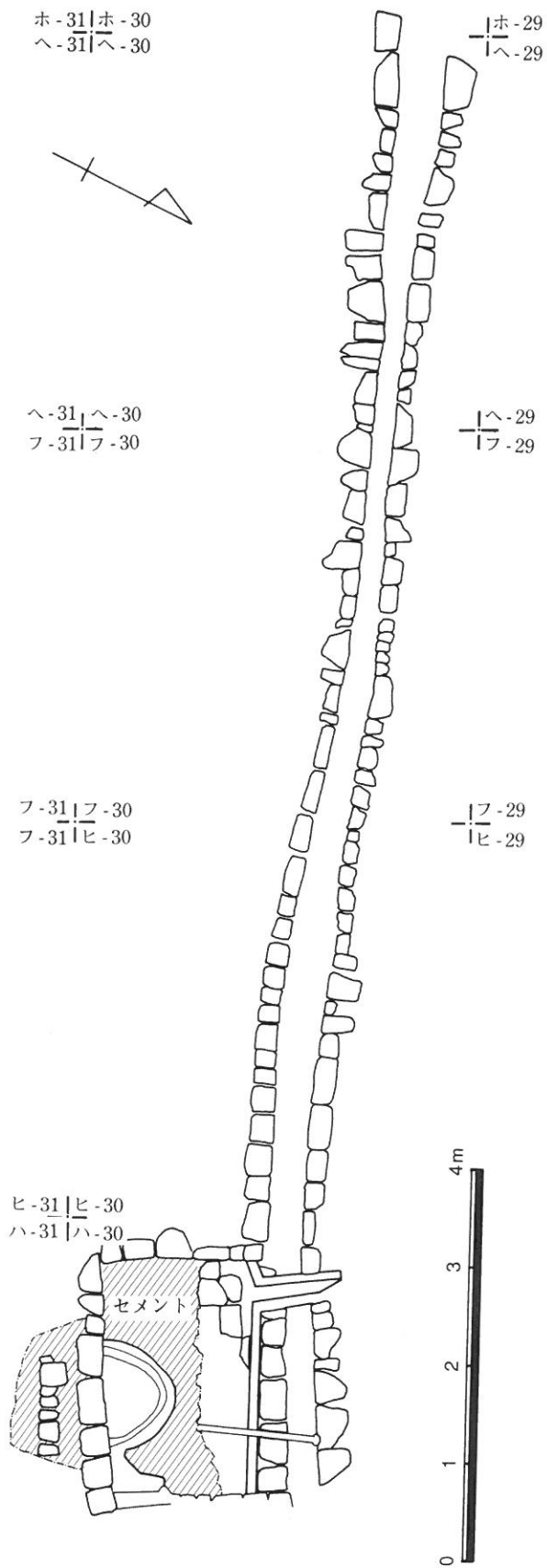


30ライン 南壁

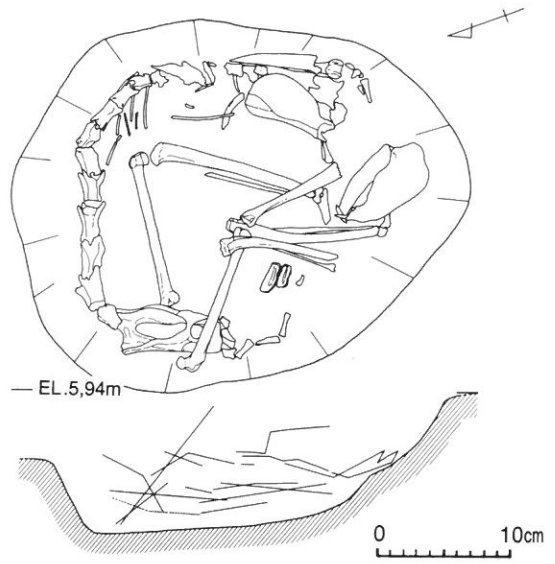


- 〈凡例〉
-  焼土混り
 -  砂利層
 -  第2層
 -  第4層
 -  第5層
 -  地山
 -  第3層、その他

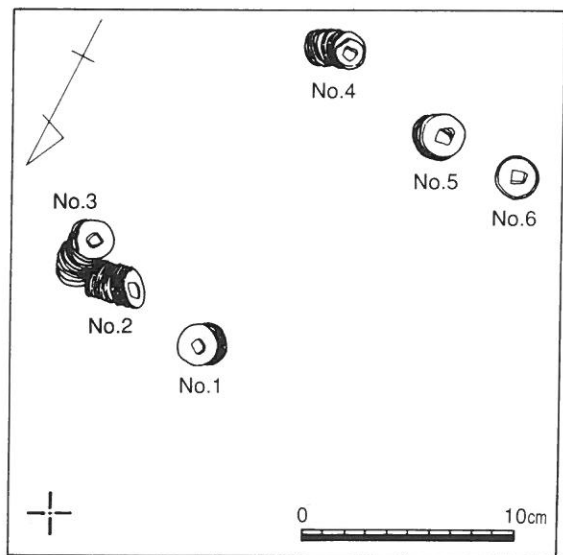




第8図 井戸遺構と溝



第9図 ネコ検出状況



第10図 古銭集中地 (ネ-32第3層)

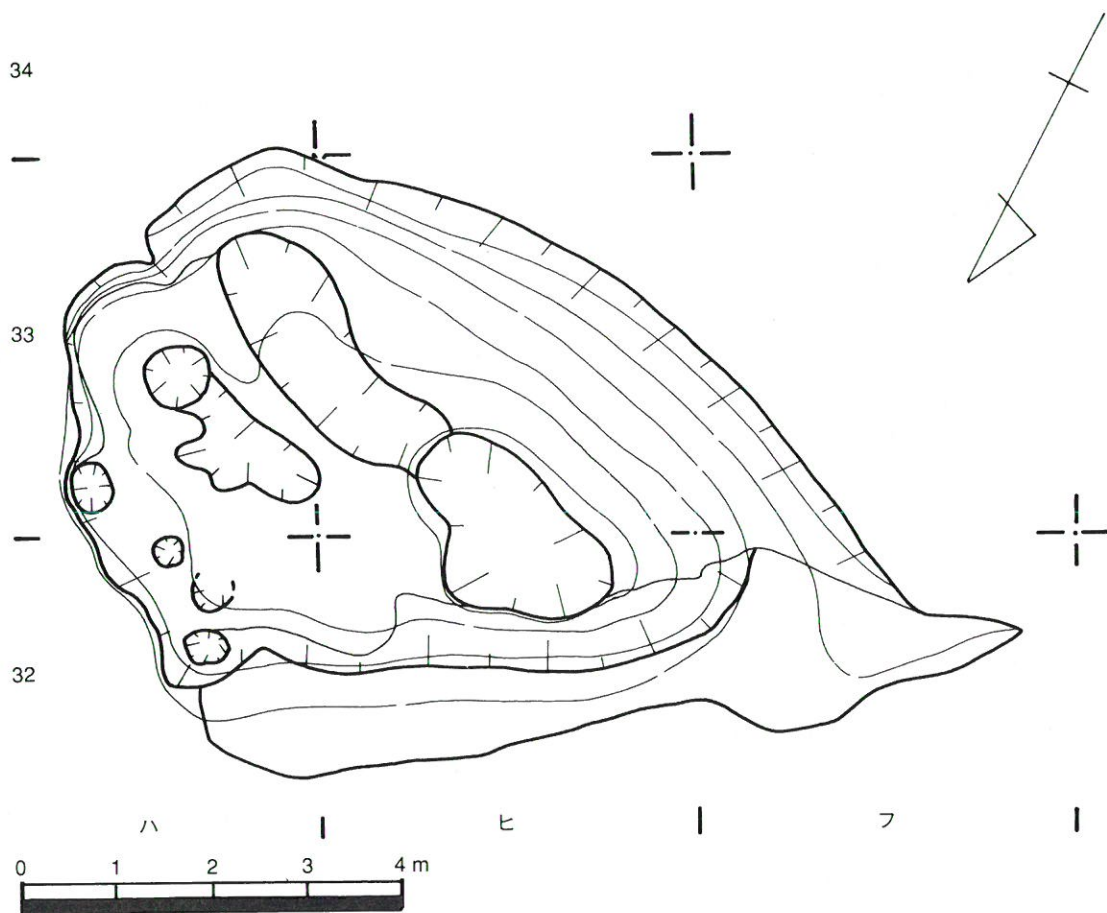
第2節 遺構

1. 土取り場跡 (第11・12図)

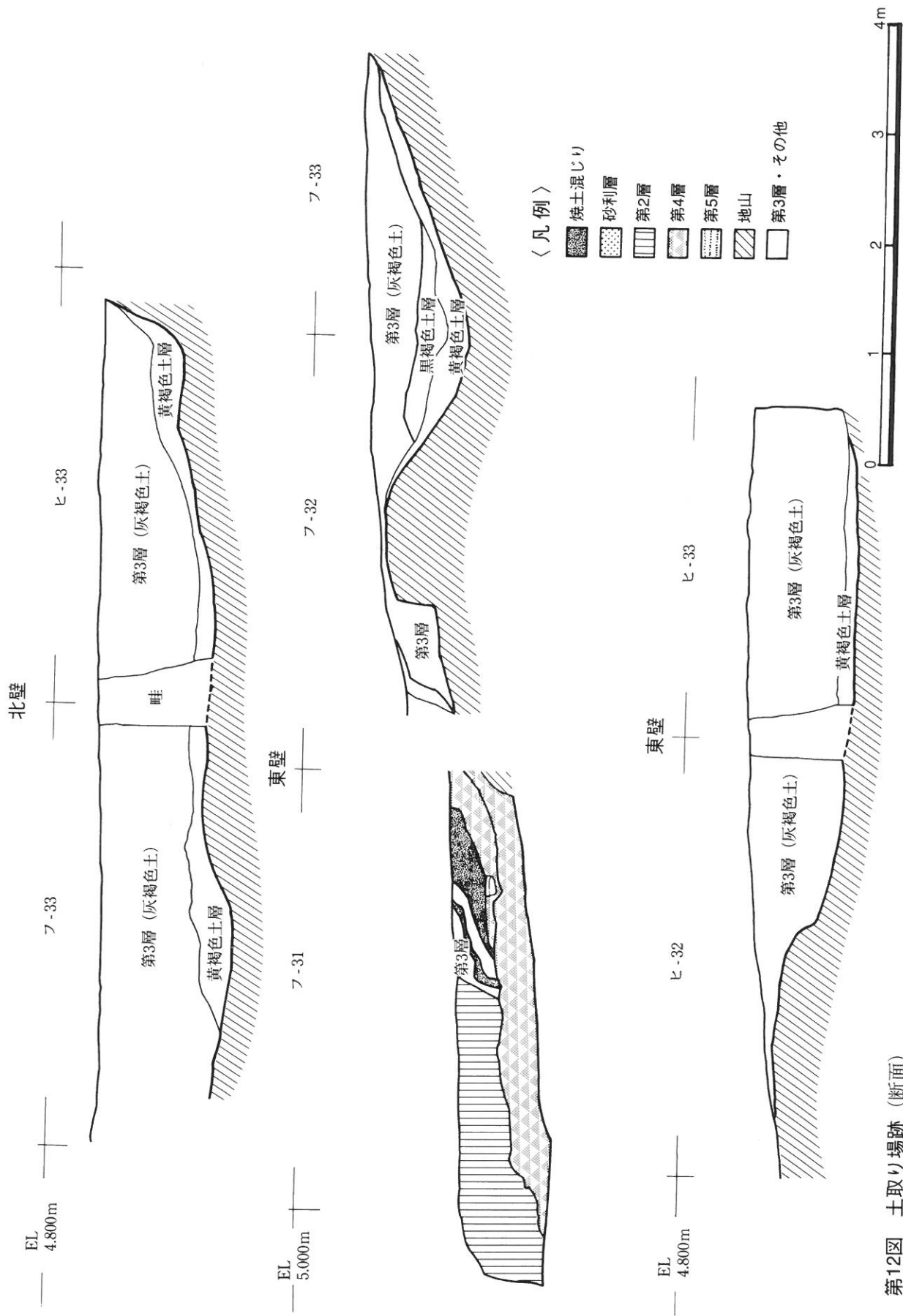
ハ・ヒ・フー32~34に位置する。平面観は直径約8 m、短径約5 mを測る楕円形を呈し、第5層を掘り込み、地山(ニービ)に達する土壙である。土壙内は第3層が被覆している。側面及び底面には土を採取したと見られるような小さな掘り込みがいくつもある。採取の対象となった土は地山直上の黄色~黄褐色土のようである。^(註1)

註

註1 陶芸家の松島朝義氏の御教示による。なお、同氏に同遺構内の土をサンプルとして焼成してもらったところ、同遺構の土は荒焼及び瓦の焼成には適してるとの見解を頂いた。



第11図 土取り場跡 (平面)



第12図 土取り場跡 (断面)

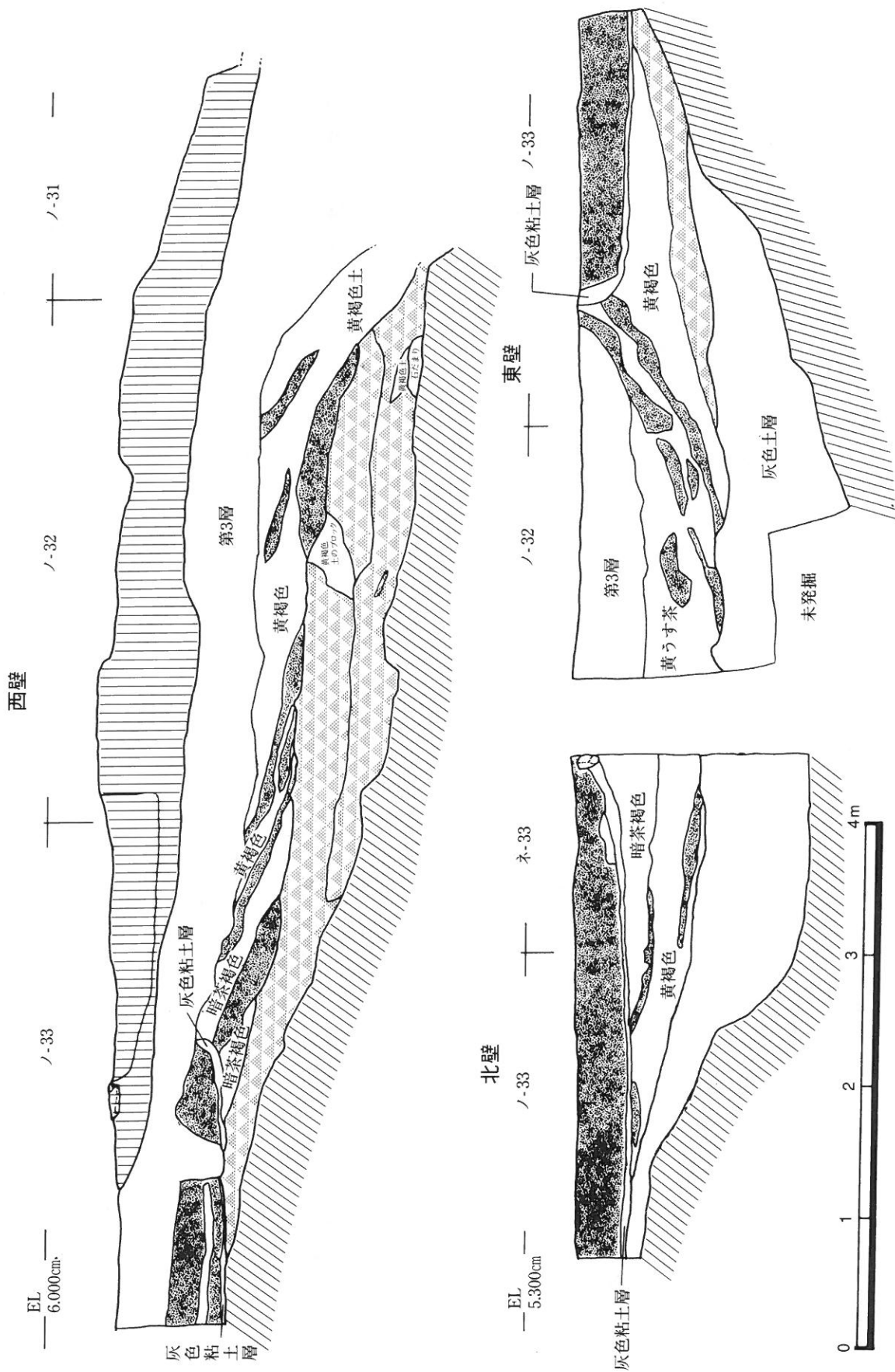
2. 張床土壌 (第13・14図)

ネ・ノ-33・34に位置する。直径約3mを測り、ほぼ円形を呈する。土壌は第4層を掘り込んでおり、土壌内の側壁から床面にかけて厚さ数cmの灰色粘土が覆っている。土壌内は赤褐色の焼土が埋土となっており、この上面を第3層が覆っている。この土壌の北半部を瓦列が巡る。瓦列は最下列にレンガを配し、この上に平瓦を交互に重ねる形で、4段確認されている。本来はこの土壌全体を取り巻いていたと推定されるが、南半部は残存していない。また、この瓦列は検出された土壌の縁辺を外れて取り巻いている。さらに、この瓦列の後方には石灰岩の土留め石積みが一部残存している。

以上の状況から、数回にわたって作り直された可能性がある。



第13図 張床土壌 (平面)



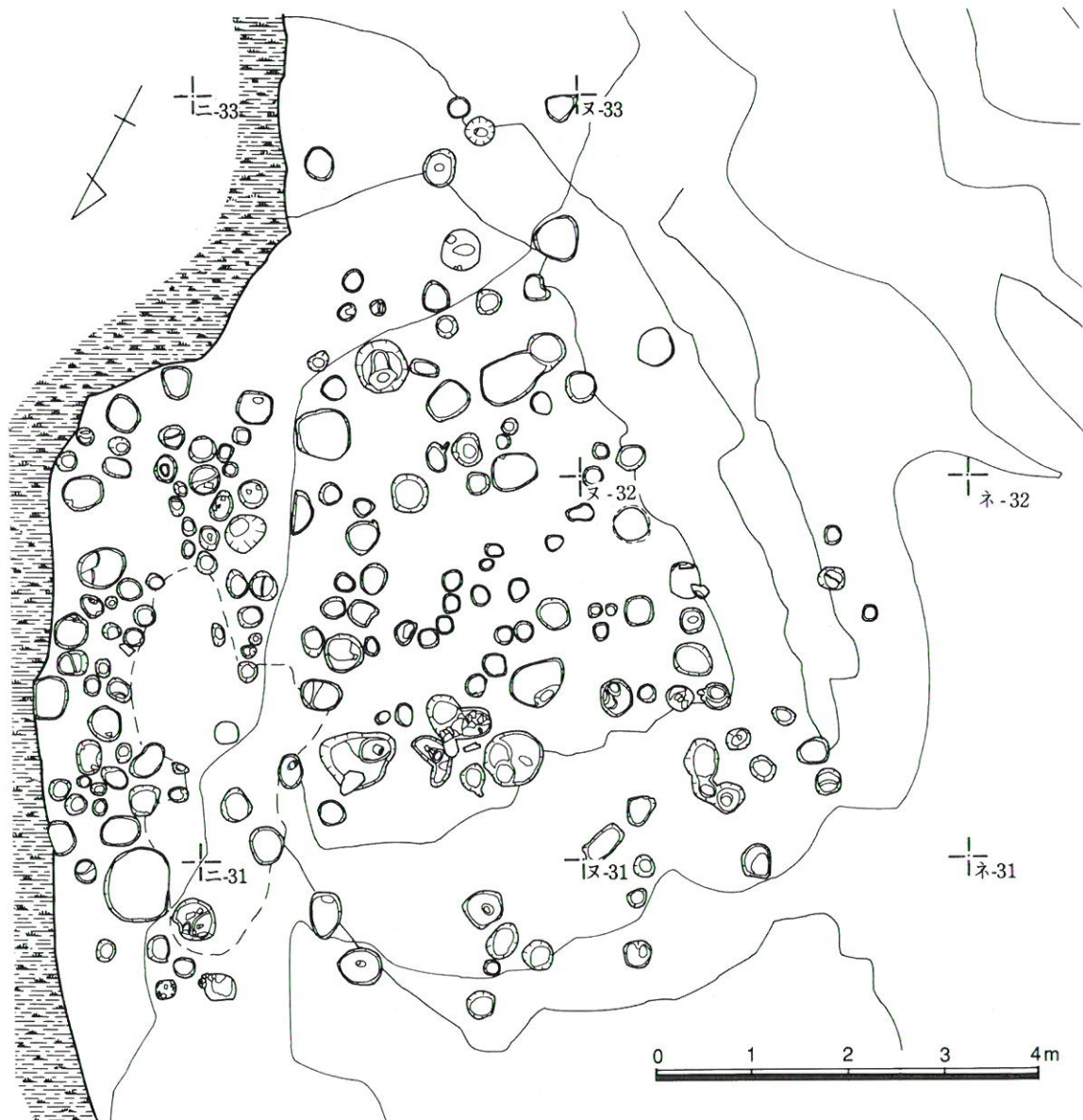
第14図 張床土壌 (断面)

3. 井戸（第14図）

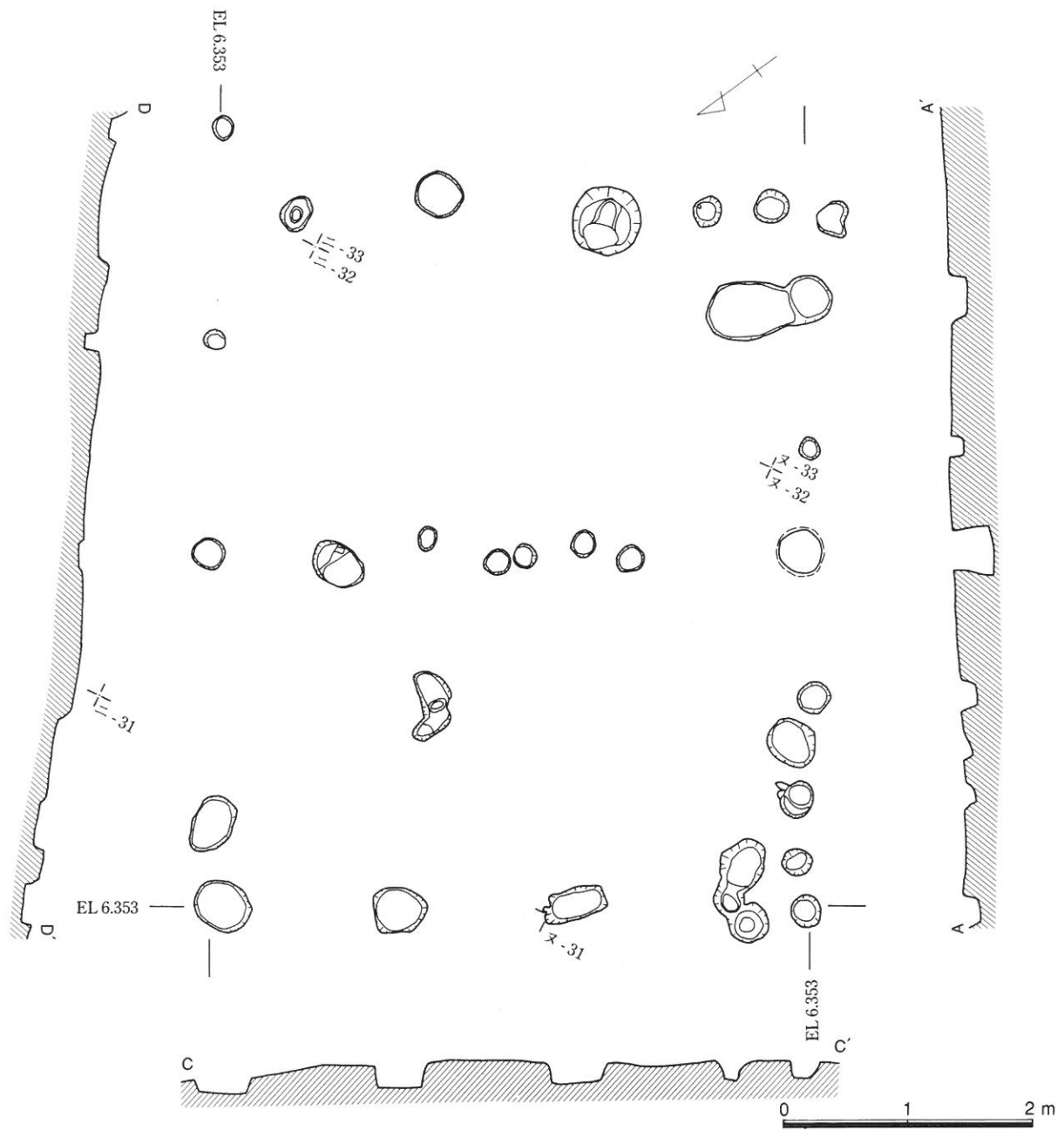
ハ-30～ホ-30にかけて検出されている。井戸は最近まで信仰の対象となっていたが、本調査の結果この井戸に接続して排水溝が検出された。

4. ピット群と砂利敷遺構（第15・16図）

第4層上面で検出されている。ピット群は調査区東半部で多数確認されており、同じくこの面に、サンゴ膏の砂利敷が「ロ」字状に広がっている。この砂利敷はピット群と関わりで、何らかの施設を取り巻いていたものと考えられる。このうち遺構として可能性のあるものを図示した。第16図は柱間が4間×3間である。また、このピット群の検出中にネ-32では、鳩目銭がまとまって出土している（第10図）。



第15図 ピット群



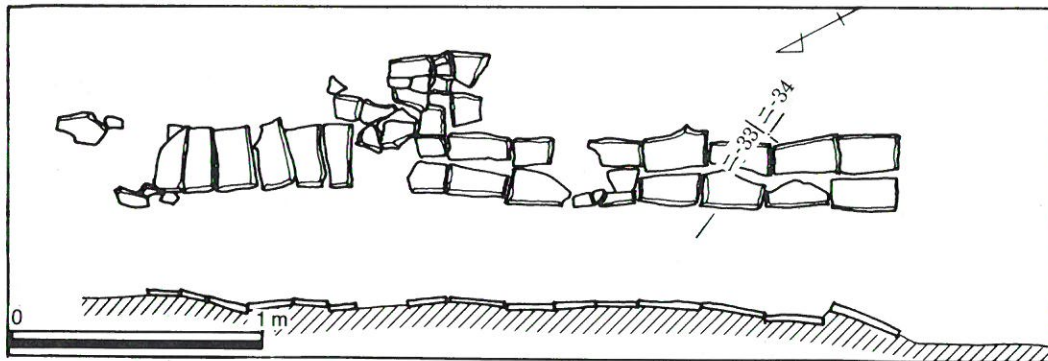
第16図 ピット群のプラン

5. 瓦敷遺構 (第17・18図)

第4層中で検出されている。残存部はほぼ2 m四方で、このうち1辺を瓦列が巡り、内部を瓦・磚で埋めている。この遺構の周辺にも砂利敷が取り巻いており、何らかの施設の跡と思われるが性格は不明である。内部の瓦・磚の中には丸に大のスタンプを付したものがいくつか出土している。



第17図 方形瓦敷遺構



第18図 瓦敷遺構

第V章 出土遺物

第1節 青磁

総数で500点近く得られているが(第1表)、破片のものが多く復元して全形の窺える資料には恵まれなかった。時期的には14~16世紀頃のものを中心に、18世紀頃のもの若干みられる。器種的に明確なものは碗・小碗・鉢・皿・盤・瓶・壺・香炉・小杯とバラエティに富んでいる。量的には碗が圧倒的に多く、皿、盤と続き、この3器種で全体の約88%を占める。量的に少ないものは壺・小杯で、それぞれ3点、2点となっている。

大枠としては行政棟地区のものとおなじような内容として把握される。特徴的なものを第19図~第25図に示した。以下、器種別に略述する。

a. 碗

最も多く得られている器種であるが、先述したとおり全形の窺える資料はあまり得られていない。第19図11、第20図17、第21図22に示した3点が全形の窺える資料である。時期的な面からみると14世紀後半~16世紀頃の所産と考えられるものが大半で、特に15世紀後半~16世紀前半頃の所産と考えられるものが中心のようである。

これらの資料の中で口縁部について、文様や器形に注目し下記の様に分類した。

第1種-外体面にヘラ描き文を配するもので、口縁部が外反するもの

第2種-無文のもので、口縁部は外反するもの

第3種-無文のもので、口縁部は直口を呈すもの

第4種-外面の口縁近くに圈線を1本廻らし、口縁部が直口状を呈すもの

第5種-雷文帯を配すもので、直口口縁のもの

第6種-蓮弁文を配し、直口口縁のもの

第7種-外面に横位沈線と格子目状の文様を配し、直口口縁のもの

以上の7種で、量的には第6種が圧倒的に多く得られており、他の資料はいずれもそれほど多くない。第7種は第21図27に示す1点だけである。

・第1種

特徴的なもの3点を第19図1~3に示した。1・2は外体面にヘラ描き文を配すもので口縁部は無文のままのようである。2はヘラ描き文と無文部との間に1本の圈線を廻らしている。内面は無文。3は口縁部直下からヘラ描き文を外面に配し、内面には青海波文が認められる。口唇部は1・3が舌状をなし、2はやや丸味を持って仕上げている。1・2は腰部がやや脹らみかげんになる。1は推算口径の算出ができ、約20cmを測る。

釉は1・3が青緑色を呈し、2が暗緑色である。2は内外面に、3は外面に荒い貫入が認められる。素地は1が乳白色でやや粗く、2・3は灰白色でやや細かい。

・第2種

1点だけを第19図4に示した。口縁部は折り曲げるように外反させ、口唇部は舌状につくる。青緑色の透明釉が施釉され、内外面に荒い貫入がみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第3種

第19図5に示したものである。腰部はあまり脹らまず、口縁部の方へやや開き気味に向かう。口唇部

第1表 青磁出土状況

出土地			不明	トレンチ	A 区						小計	B 区				合計	
器種	時期	部位			第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層		第1層	第2層	第3層	第4層		小計
碗	14~15前半	口縁部			1	10	12	3						1	1	27	
		胴部	4		1	5	9	1	1						0	21	
		底部			2	2	7	1	2			1	1		2	16	
	14後半~16	口縁部	1				21	4	3						0	29	
		胴部				7			1						0	0	
		底部													0	8	
	15c	口縁部			2										0	2	
		胴部				1					1				1	2	
		底部				1	1								0	2	
	15~16前半	口縁部	3		4	23	43	11	12					1	3	5	101
		胴部	1		6	16	60	7	17	1				1	1	109	
		底部		1		3	2	4	1		1				1	12	
		完形		1											0	1	
	16c	口縁部													0	0	
胴部						1								0	1		
底部														0	0		
18~19c	口縁部													0	0		
	胴部				1	1								0	2		
	底部													0	0		
小碗	14~15前半	底部						1						0	1		
	18~19c	口縁部			2									0	2		
		胴部			3	3								0	6		
鉢	14~15前半	口縁部				1	1							0	2		
		胴部					2							0	2		
	14~15前半	口縁部				1	13					1			1	15	
胴部						2								0	2		
底部					6	3		1						0	10		
完形					1									0	1		
皿	14後半~16	口縁部												0	0		
	底部					8								0	9		
	口縁部	3	2	3	2	10	3		1				1	2	26		
	胴部			1	1	5	5	1					1	1	14		
15~16前半	底部		1		2	2								0	5		
	口縁部		1		10	1	1							0	13		
	胴部				6	1	1				1			1	9		
	底部			1	2	1								0	4		
盤	完形										1			1	1		
	明					2								0	2		
	口縁部		1											0	2		
瓶	14~15前半	胴部	1	5		1	1							0	8		
	明				3	1								0	4		
壺	14~15前半	胴部			1	4								0	5		
	14~15前半	胴部				1								0	1		
香炉	14~15前半	底部				1								1	2		
	14後半~16	胴部	1			1					1			0	1		
	明					1								0	1		
袋物	14~15前半	口縁部					2	1						0	3		
	胴部													0	0		
小杯	14~15前半	口縁部				1								0	1		
	胴部				1		1							0	2		
	15c	口縁部					1								0	1	
		胴部													0	0	
底部														0	0		
不明	14~15前半	口縁部				2								0	2		
	胴部					3								0	3		
	明										1			1	1		
	底部										1			1	1		
15~16前半	口縁部					4								0	5		
	胴部		1											0	0		
	底部													0	0		
合計			8	14	31	109	228	47	40	2	479	2	13	1	4	20	499

はやや丸くつくる。推算口径は約14cmを測る。釉は発色が悪く、暗茶褐色を呈す。内面の口縁部には釉垂れが見受けられ、内外面とも細かな貫入が密にみられる。素地は赤味のある灰褐色を呈し、やや細かい。釉・素地の状況からすると焼成不良の資料と考えられる。

・第4種

3点を第19図6～8に示した。6・8は口縁部上端に、7はやや口縁部の下方に1本の圈線を廻らす。6・8は口縁がやや直方向になるもので、7は若干内彎気味になる。6・8は口唇部が舌状になり、7は比較的丸くつくる。8は推算口径が約14cmである。6は青緑色、8は暗緑色の失透性の釉で、7は淡緑色の透明釉である。6は内外面に細かく密な貫入が走る。素地はいずれも灰白色のやや粗いものである。

・第5種

雷文帯を配すもので、第19図9～11に示した。9・10は小破片であるが、11は全形の示せる資料である。9はヘラ描き、10・11はスタンプによるものである。

全形の判明する11をみると腰部の脹らみがほとんどなく、ゆるやかなカーブを描きながら口縁部に向かうもので、口唇部は丸く仕上げている。口縁部は胴部よりも若干厚くなっている。高台は厚く安定感があり、畳付の両側を斜位に面取りしている。そのため畳付は狭くなっている。外側の削りよりも内側の方が大きく面取りしており、高台が外側へ開く感じになっている。

推算口径が約16cm、高さ9.1cm、底径6.6cmを測る。比較的大振りの碗で、行政棟地区出土のものや尻川原遺跡出土のものと同様大きな大きさである。文様は内外面の口縁部上端にスタンプの雷文帯を廻らし、内側面に唐草文を描く。内底面には印花文を配すが、判然としない。釉は暗緑色の失透性のものである。素地は灰白色でやや細かいが、赤味を帯びた部分も見受けられる。

10は文様や口縁部の形状などが11と同じものであるが、内面の文様は口唇下約1.5cmの所に配されている。釉は淡緑色でわりあい透明度があり、内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は乳白色のやや粗いものである。

9は外面にヘラ描きの雷文帯を廻らすものである。口縁部がやや開き気味になり、胴部から口縁部へほぼ同じ厚みである。口唇部は舌状を呈す。灰緑色の比較的透明度のある釉を施す。内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第6種

最も多く得られているものである（第20図および第21図22～26）。ほとんど破片の資料であるが、第20図17・第21図22の2点は全形の窺えるものである。ラマ式蓮弁文を配すものと、剣先蓮弁文を施すものが確認でき、前者は第20図12に示す1点だけで、他は後者の資料である。

ラマ式蓮弁文

底部の資料が1点だけみられ、第20図12に示した。高台脇にラマ式蓮弁文の弁尻が認められるもので、推算底径は約7cmである。見込にヘラ彫り文が認められるが、破片のため全体的な様子とはつかめない。腰部の膨らみはあまりみられず、高台は方柱状につくる。畳付は斜めに整形しており、内側だけが地につく。釉は青緑色の失透性のもので、全釉のあと外底を蛇ノ目釉剥ぎしている。素地は灰白色のやや細かなものである。

剣先蓮弁文

本種のほとんどがこの形状の蓮弁文を施すもので、特徴的なものを第20図13～21・第21図22～26に示した。この種の蓮弁文は①弁幅が狭く、剣頭と蓮弁文がほぼ一致するもの、②弁幅が広くなり、剣頭と蓮弁文が一致しないもの、③弁幅が広くなり、剣頭がなくなるものの3種に細分されることが知られている。得られた資料をみるとほとんどが①のグループに属するものようで、②・③の資料はあまりみられない。

第20図13～20に示したものは①に属すものである。器形的には腰部がほとんど張らずに高台際からゆるやかなカーブを描きながら口縁部に向かうもので、口唇部は舌状を呈すものが主流のようである。ただ、20に示した推定図は腰部がやや丸味を帯びている。高台は比較的しっかりとつくるが、19は17・18に比べ高台が低い。17・19は畳付の外面を面取りするもので、18は畳付を斜めに仕上げている。また、17・18は内底面をほぼ平坦にするが、19は窪む感じに整形されている。19は17・18に比べ高台が低くつくられている。

大きさについては全形の推定できる17をみると、推算口径が約14cm、高さが約8cm、高台径は5.6cmである。この資料以外に推算口径の算出できた14～16・20や高台径の判明する18・19をみると14～16・20はそれぞれ約13cm、約15cm、約11cm、約13cmを測り、18・19はそれぞれ約5.5cm、約5.8cmとなっている。これらの推算口径や推算底径の状況や行政棟地区のものをみても、17は本種では普通の大きさのものようである。

文様をみると剣頭の配される位置が13・14・17・20は口唇部に近く、15・16は口唇部から若干下がる。特に13は剣頭が鋭角的になり、口唇部までおよんでいる。14・20は剣頭が弧状を呈し、15～17は波状を呈す。多くの蓮弁文は比較的深い線彫りによるが、14は非常に浅く施文されている。また、20は他の資料に比べ細線になっており、異なる印象をあたえるものである。弁尻は高台際までのものが普通であるが、19は高台外面までおよんだのか斜位の短線が廻っている。

15・17～19からすると内底面の周囲には捻花文が施されるものが多いようで、15・19は線描きで描かれ、17・18は櫛描きにより施文されている。また、内底面には17・18のように字を印刻するものも割りとみられるようである。釉は深緑色のやや透明度のあるものを厚めに施釉するものがほとんどである。14・20は割りと薄く施釉しており、14が青緑色の透明度のあるもの、20が黄緑色の失透性のものである。17～19の底部は3点とも外底面を蛇ノ目釉割ぎしている。また、内外面に貫入の認められるものが多い。

素地は灰白色のやや粗いものが主流のようであるが、14は灰白色の粗いもの、20は黄白色のやや粗いものである。

第20図21は蓮弁の幅がやや広めになっているが、剣頭と蓮弁文が一致していること、推算口径が13cm台であること、施釉の状況や素地は14と似ていることなどから上記のグループのなかで捉えてもよいかと考えられる。釉は青緑色の失透性のものである。

第21図22・23は鉤状に蓮弁文を描いていくもので、蓮弁文は連続せず剣頭の左側部分が一旦途切れる形になっている。形としては剣頭と蓮弁文が一致するのでここに示した。22は全形の窺えるもので、高台際からスムーズな曲線で口縁部に向かう。胴部から口縁部の方へ厚さを減じ、口唇部は舌状につくる。高台は低く作りだされ、畳付外面を斜めに面取りしている。推算口径は約13.6cm、高さが6.8cm、高台径の推算が約5.8cmを測る。

釉は青緑色で失透性のものを比較的厚めに施釉しており、高台際まで施される蓮弁文が胴下半部で見えなくなっているところが多い。高台から外底面は露胎のようであるが、高台外面には釉垂れがかなりみられる。畳付まで釉垂れする部分がみられ、そこでは砂粒の熔着も見受けられる。素地は灰白色の粗いものであるが、外底面の近くは黄白色になっている。また、高台内面や外底面の仕上げは雑で、ざらついた部分や空洞の部分などが見受けられる。それぞれの特徴が①とはかなり異なっている。

23も22と同じような蓮弁文を配すが、他の特徴は①とほぼ同じようである。胴部から口縁部へ同じような厚さで至り、口唇部は舌状に整形する。推算口径は約14cm。釉は青緑色の失透釉で、内外面に細かな貫入が密にみられる。素地は灰褐色で粗い。

24は剣頭がみられず、蓮弁文だけのものである。焼成不良なのか釉が白濁色になっており、表面には

気泡も散見される。胴部から口縁部へほぼ直方向にむかうもので、口唇部は舌状を呈す。器形的には第20図20と似たような感じになるかと考えられる。推算口径は約14cm。素地は白濁色のやや粗いものである。

25・26は剣先蓮弁文の底部資料である。2点とも腰部が張らずに、高台際からスムーズな曲線で口縁部に向かうもののようである。高台は方柱状につくり、畳付の外側を斜めに面取りしている。25は高台際に溝状のものを廻らしている。高台径は25が5.4cm、26が5.2cmを測る。25は高台際まで、26は高台内側まで施釉するが、25は高台外面まで釉垂れしている。2点とも薄めの施釉で、25は灰緑色の失透釉、26は焼成が不良なのか濁った感じの色合になっている。素地は灰褐色の粗いものであるが、26は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

・第7種

第21図27に示す1点だけである。口縁部が外側へ開き気味になり、腰部がやや丸くなる器形が想定される。直口口縁で、口唇部は舌状を呈す。推算口径は約12cmで、比較的小振りの碗である。文様は外面の口縁部と胴部および内面の口縁部に3本の圈線を廻らし、外面の口縁部と胴部に廻らされた圈線間にはラフな格子目様の文様が配される。釉は暗緑色の比較的透明度のあるもので、内外面には貫入が多くみられる。素地は灰白色の粗いものである。

第21図28～32は底部の資料で、32だけが内底面に印花文を配さない。いずれも畳付外面を斜めに面取りするものであるが、28・31・32は削り出しが雑で高台外面に段差ができています。32は腰部がやや丸味を帯び、口縁部の方へ直方向に向かうもののようである。他は高台際で破損しており、腰部の状況などは不明。

高台径は28が5.8cm、29・31が5.4cm、30・32が5.6cmを測る。釉は28が深緑色、29が暗緑色、30～32が青緑色を呈す。30は比較的透明度のあるもので、他は失透性のものである。28・30・32は外底面は露胎で、29は外底面を蛇ノ目釉剥ぎしている。31は高台無釉である。30・32は内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は28・29が灰白色のやや細かなもので、30～32は灰白色の粗めのものである。

第21図33・34は内面に印花文を配す胴部の小破片で、器形や大きさなどは窺えない。2点とも暗緑色の失透性の釉を施し、素地は灰白色の粗いものである。

b. 小 碗

総数9点と量的には多くなく、内訳は口縁部が2点、胴部が6点、底部が1点である。時期的な面からみると14～16世紀頃のもの、18～19世紀頃のもの、大半が後者に属するものようである。この中から特徴的な1点を第21図35に示した。剣先蓮弁文を外体面に施すもので、器形的には剣先蓮弁文の碗と同様である。推算口径は約8cm。施文はヘラ彫りで、剣頭は波状に連続的に施され、剣頭と蓮弁は一致している。釉は深緑色で失透性のものを比較的薄めに施釉している。内外面に細かな貫入が密に認められる。素地は灰白色のやや粗いものである。15世紀後半～16世紀前半頃のものである。

c. 皿

総数82点と碗に次いで多く得られている。しかし、ほとんどが破片の資料で、全形の窺えるものは4点（第22図3・4・7・8）だけである。時期的な面からすると14～16世紀頃に属するようである。特徴的なものを第22図3～14に示した。以下に略述する。

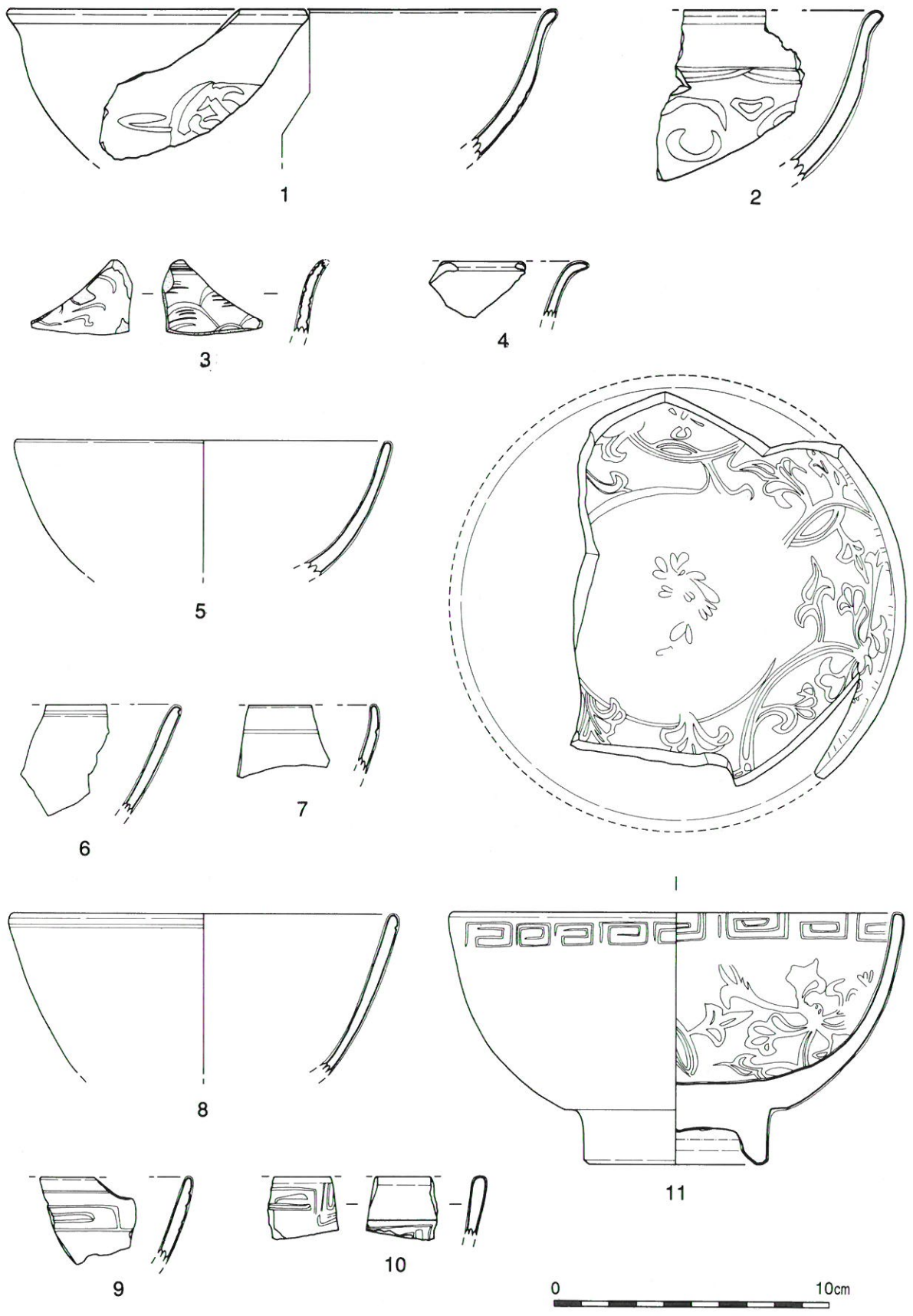
口縁部の形状からすると下記のように大別できると考えられる。

第1種—口縁部上端が若干肥厚するように仕上げるもの（3）

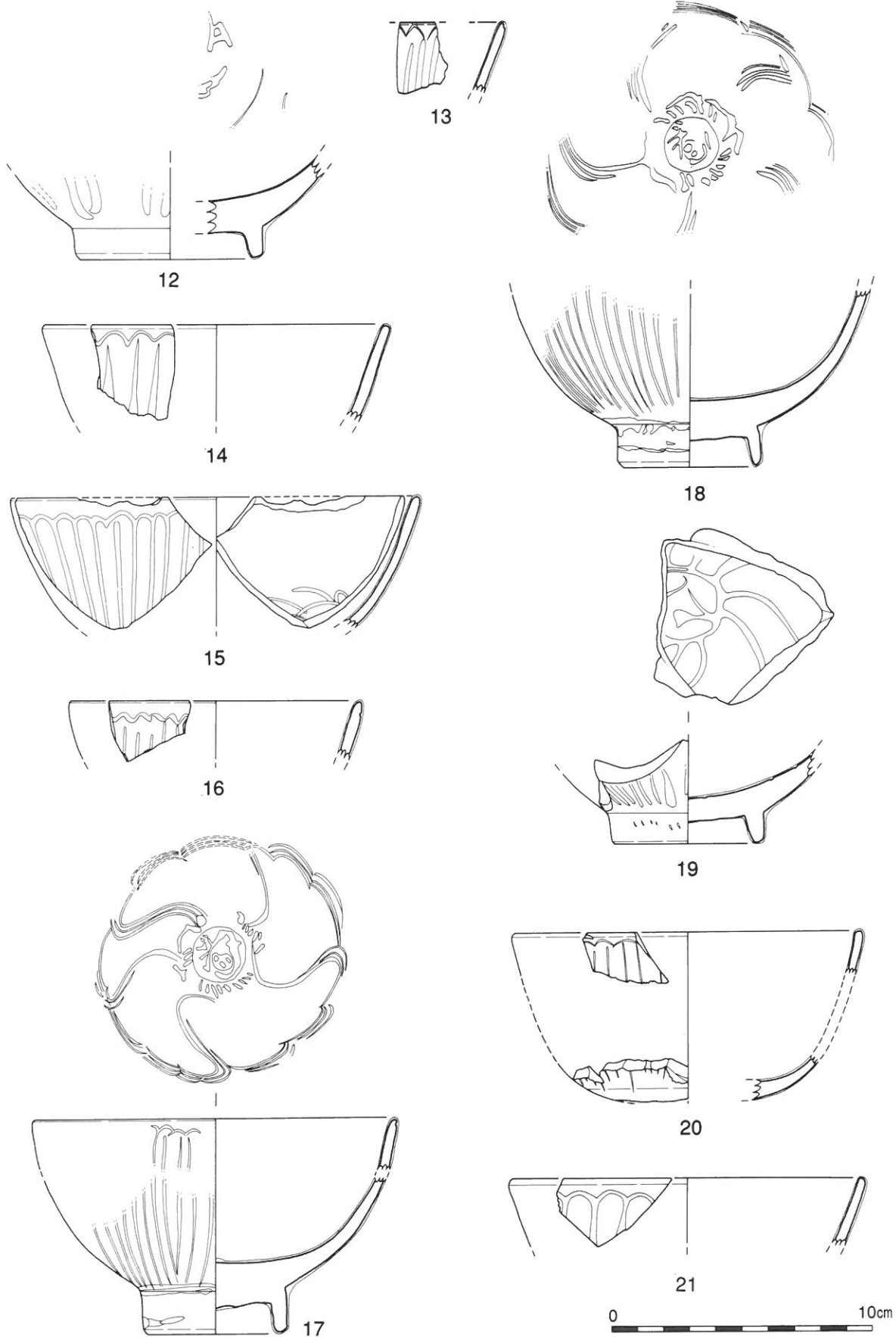
第2種—直口口縁を呈すもの（4・5）

第3種—口縁部上端が折れ曲がるように外反するもの（6）

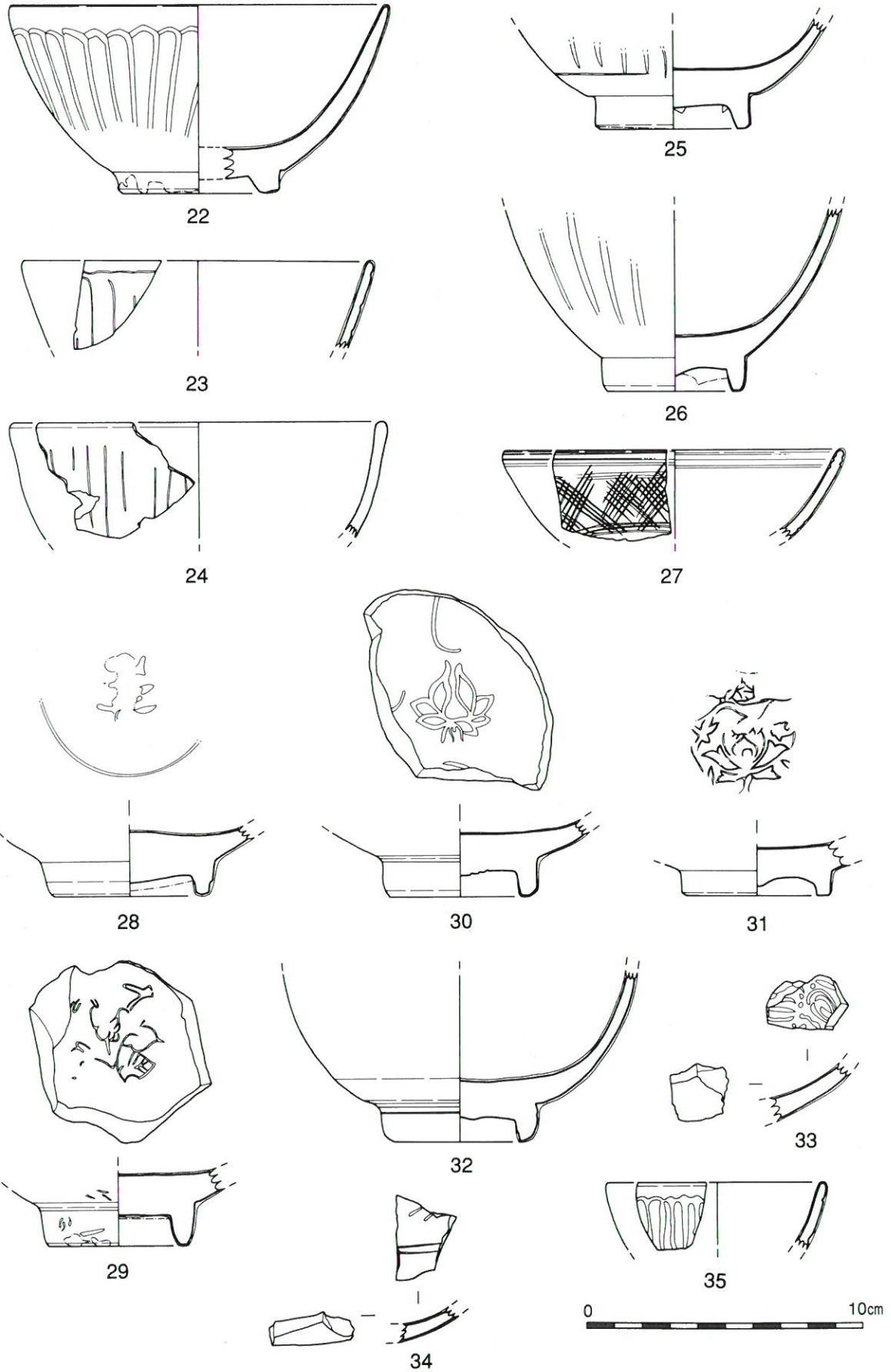
第4種—口縁部が外反し、口唇部が波状を呈す、いわゆる稜花皿のもの（7～11）



第19图 青磁 1 (碗)



第20图 青磁 2 (碗)



第21图 青磁 3 (碗)

以上の4種である。量的には第4種がほとんどで、他の種は僅少である。以下、種別に簡記する。

・第1種

特徴的なものを第22図3に示した。接合してほぼ完形の示せる資料で、口径が10.1cm、高さ2.7cm、高台径が5.5cmを測る。高台は畳付の方へ細くなるようにつくり、畳付は平坦に仕上げている。高台脇から口縁部の方へ直線的に開きながら向かい、口縁上端部を若干肥厚させる。口唇部は丸味を帯びるように整形している。また、内底面と内体部の境目に段差がみられ、両者を区切っているようである。文様は見受けられない。

釉は深緑色の失透釉で、内体部下半から内底面は露胎となっている。内体部上半から外面および外底面は全釉であるが、畳付部は釉を削り取っている。内外面に粗い貫入が認められる。内底面には重ね焼の際の熔着痕があり、外底面には繊維様のものが付着している。素地は乳白色のやや細かなものである。

・第2種

4・5に示したものは本種に属すものである。4は全形の窺えるもので、5は口縁部の資料である。4は高台をやや外側へ開く感じで方柱状につくり、畳付外面を斜めに面取りする。高台際からゆるやかなカーブを描いて口縁部に向かい、口唇部は舌状を呈する。推算口径は約9cm、高さが3cm、高台径が4.8cmで、3よりもやや小さめである。文様はみられない。釉は青緑色の失透性のもので、内外面に細かな貫入が認められる。全釉のあと外底面の釉を削り取っているが、中央部に若干釉の部分が残る。素地は灰白色のやや粗いものである。

5は口縁部の立ち上がりが4よりも直方向になるもので、口唇部は舌状を呈す。口径の推算が約9cmで、4と似たような大きさのようである。無文。釉は深緑色の失透釉で、素地は灰白色のやや粗いものである。

・第3種

6に示したものが本種に属す。胴部からゆるやかなカーブできたものが、口縁部上端で折り曲げるように外反する。口唇部は尖り気味につくる。小破片のため詳細は不明。釉は明緑色のやや透明度のあるものであるが、表面が風化のためか白色化している。そのため文様の有無については判然としない。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第4種

いわゆる稜花皿のグループで、最も多く得られている。特徴的なものから5点を7～11に図示した。7・8は全形の窺えるもので、9は口縁部の、10・11は底部の資料である。器形的には高台際から若干水平方向に向かい、すぐに直方向に立ち上がり、体部がゆるやかな弧を描いて口縁部に至る。そのため、高台脇で比較的明瞭な稜をつくる。口唇部は7～9とも舌状に仕上げており、削りや抉りの配し方はそれぞれ若干異なるようである。高台のつくりをみると、7・10のように畳付の外面を斜めに面取りし、畳付を平坦にしあげるものと8・11のように畳付を斜めにつくるものが見受けられる。

大きさは全形の窺える7・8をみると、2点とも口径が約11cm、高さが約3cm、高台径が約5cmである。9の推算口径が約11cm、10の推算高台径が約6cm、11の推算高台径が約5cmとなっており、7・8の大きさは本種の一般的なサイズであったかと考えられる。文様は8～10のように内面に唐草文を配すものが普通のものであるが、7は口縁部上端に2本の平行線を描くだけである。外面は無文。内底面は7・8が無文で、10・11は破片のため不明。

釉は7が深緑色、8・10が暗緑色、9・11が青緑色を呈し、いずれも失透性のものである。11以外は内外面に細かく密な貫入が認められる。施釉の状況を見ると7は高台内無釉で他は全釉、8は全釉のあと外底面を蛇ノ目釉剥ぎしている。11は内底面を円形に釉剥ぎし、畳付から外底面にかけても露胎している。素地はいずれも灰白色のやや粗いものであるが、8・11は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

第22図12～14に示したのは高台際で破損している底部資料である。12は高台畳付を平坦にし、その外面を斜めに面取りしているものである。推算高台径は約6cm。内底面に「惟」の字が認められる。釉は青緑色で割りと透明度があり、高台内面の中ほどまでの施釉である。そこから外底面にかけては無釉。内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は灰白色の粗いものである。

13は高台が完全に残るもので、畳付を斜めに整形している。高台径は5.6cm。内底面に印花文を施し、その中央部に「吉」の字が認められる。釉は青緑色のやや失透性のもので、内外面に細かく密な貫入がみられる。外底面を蛇ノ目釉剥ぎしている。素地は灰白色の粗いものである。

14は碁笥底の資料であるが、小破片のため全体的な様子は窺い得ない。内底面に七宝つなぎ文の一部が認められる。また、高台内側には1本の沈線が廻る。推算底径は約6cm。釉は深緑色の失透釉で、素地は黄白色のやや粗いものである。

d. 盤

30点近く得られているものの、ほとんどが小破片である。時期的な面からみるとほとんどが14世紀後半～15世紀前半頃のものようである。第23図6だけがある程度全形の窺える資料である。特徴的なものを第23図に示した。以下に簡記する。

口縁部の形状から下記のように分類してみた。

第1種—鏝縁口縁で、端部を上方へつまみあげるもの

第2種—鏝縁口縁で、鏝を平坦にして鏝端を稜花形にするもの

第3種—口縁部上端を僅かに外反させるもの

の3種に分けられるようである。以下、種別に略述する。

・第1種

第23図1に示すもので、推算口径は約27cmを測る。鏝縁部の外面は若干削り込んで段差がつき、また、口唇外面部は凹面をつくる感じで仕上げている。内面には数本1組の楯描きによる蓮弁文が施されるが、破片のため本数ははっきりしない。釉は深緑色で比較的透明度があり、内外面に粗い貫入が認められる。素地は灰白色のやや細かなものである。

・第2種

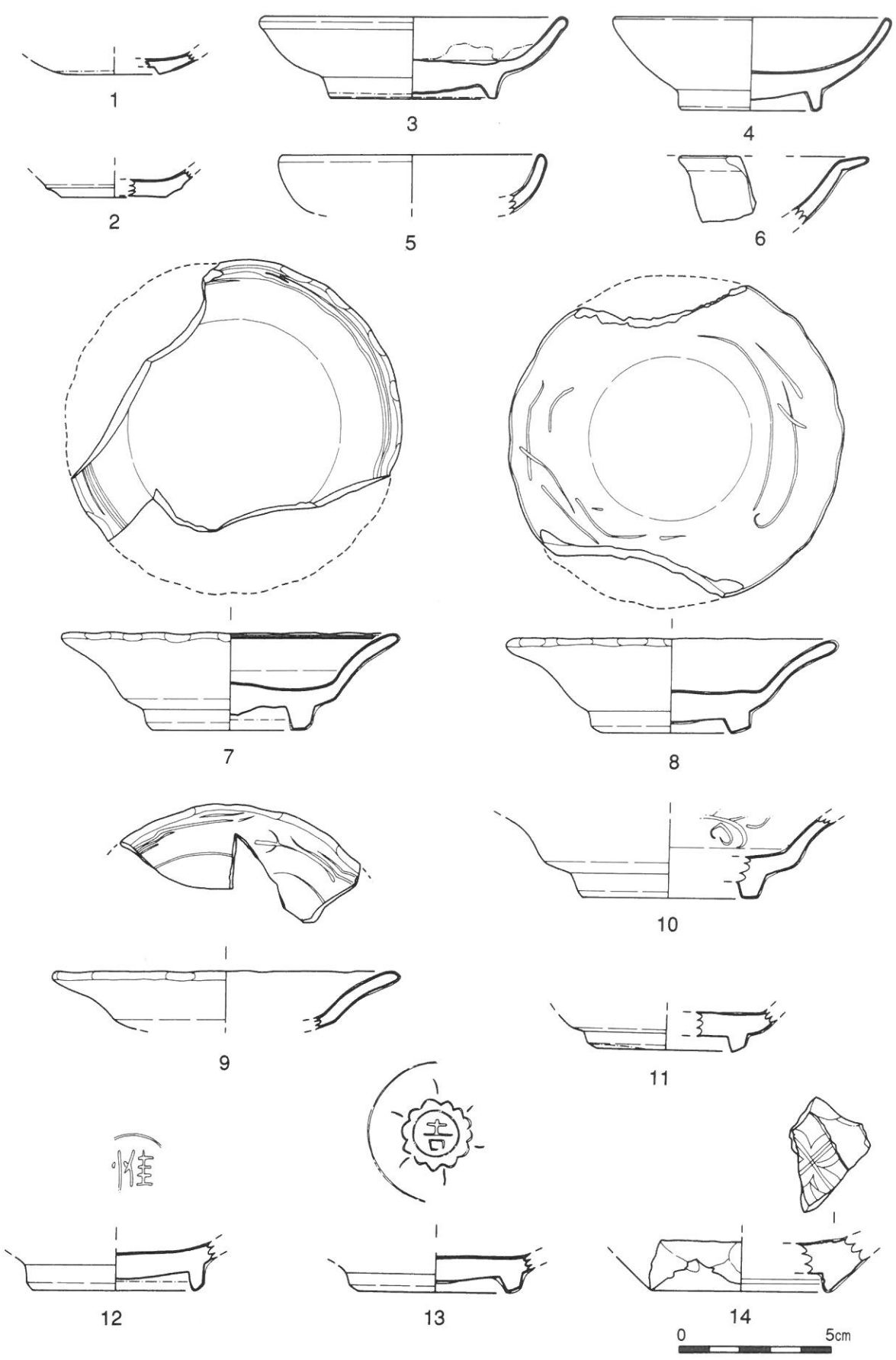
第23図2～5に示すものが本種に属す。鏝縁部の上面はやや凹面気味に仕上げられており、長さには若干のばらつきが見受けられる。内面の稜は比較的明瞭なもの(2～4)、はっきりしないもの(5)がみられる。口唇部は2・4が平坦に整形し、3・4はやや丸く仕上げている。また、口唇部の挟りはゆるやかに配すもの(2～4)と間隔を狭めて配すもの(5)がみられる。

推算口径の算出できるものは2だけで、約22cmである。文様は2・3が口唇部の形状に沿う形で鏝縁部に楯描き文を施し、4は1本の沈線が廻る。5は無文。釉は3が暗緑色でやや透明度があり、他は青緑色の失透性のものである。3は細かく密な、4は粗い貫入が内外面にみられる。2は風化のためか釉の表面が白く濁っている。素地はいずれも灰白色のやや細かなものである。

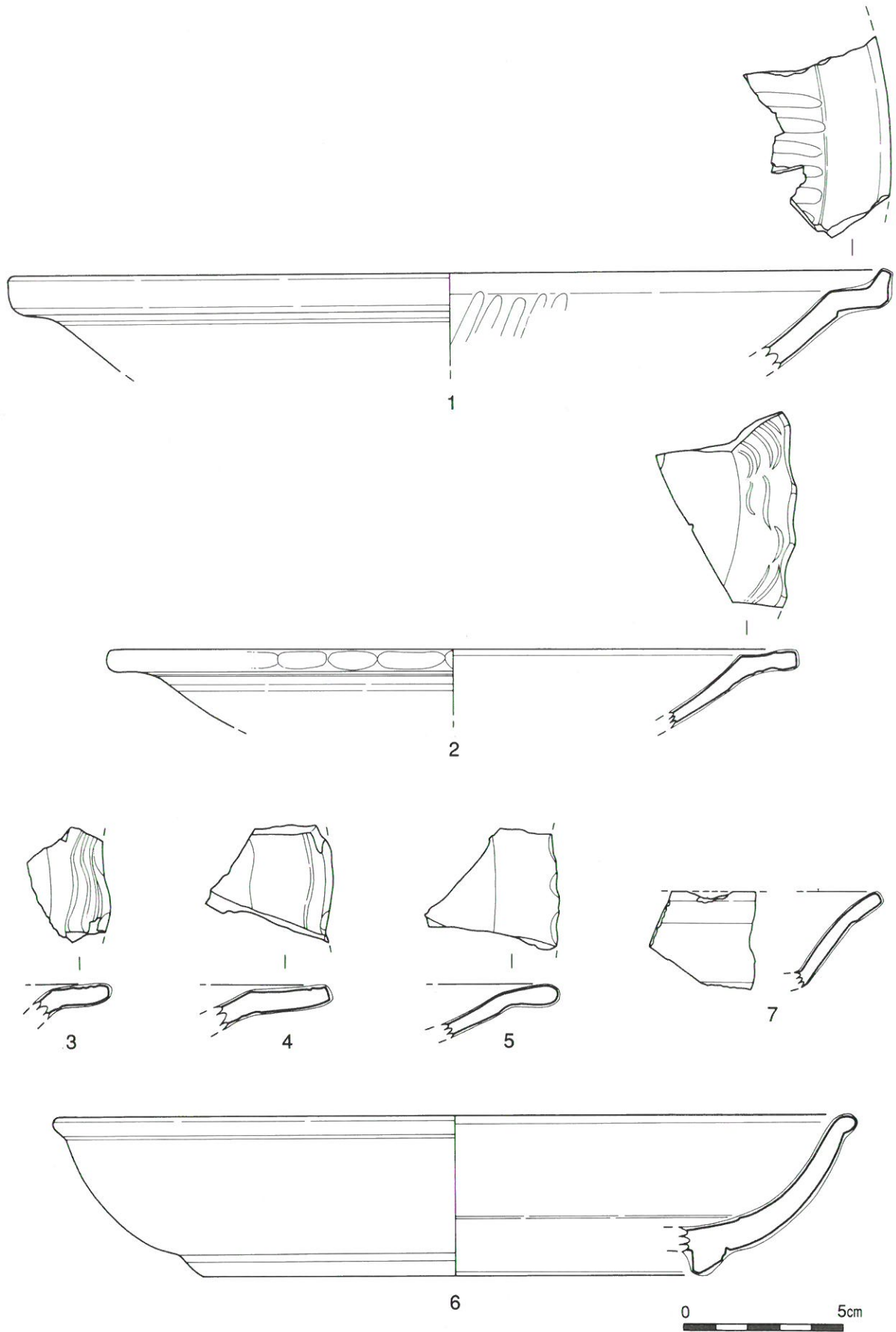
・第3種

6に示したものが典型的なものである。底面部の状況を除き、ほぼ全体の形状が窺える資料である。腰部が若干膨らむようにゆるやかな弧を描いて口縁部へ向かい、上端部を僅かに外反させる。口唇部は丸味を持って整形している。高台は低く、広くつくりだし、畳付は斜めにしている。内体面の下方では若干の段差がみられる。

大きさは推算口径が約25cm、高さが約5cm、高台径が約15cmを測る。残っている資料でみると無文で全釉。釉は暗緑色の失透性のものであるが、外面には灰黒色の部分が約1cm幅で半楕円形状に認められる。



第22图 青磁 4 (皿)



第23図 青磁 5 (盤)

灰黒色のラインで囲まれた箇所には気泡がみられ、内面にも部分的に気泡がみられる。素地は灰白色のやや細かなものである。

7は皿のようであるが、判然としないのでここに示した。外反口縁の資料で、外面の口縁部に若干の段差を設けアクセントをつけている。口唇部はやや平坦に仕上げている。釉は風化のためか濁り、色合いは判然としない。素地はやや粗いもので、焼成不良のためか橙褐色を呈す。

e. 瓶

頸～胴部片12点、底部1点の13点確認できた。いずれも小破片のため器形や大きさなどの詳細は不明。ほとんど14世紀後半～15世紀前半頃のものようである。特徴的なものを第24図1～4に示した。1は頸部の資料で、推算の径は約2cm、残存部は約4cm。2・3は頸部から肩部にかけての資料で、2点ともナデ肩のものである。3は飾りの一部が残るものの、破損が著しく形状は不明。図は双耳として示した。2は上部の推算径が約3.4cm、下部の推算径が約7.0cm、3は上部の推算径が約4.4cm、下部の推算径が約6.4cmである。

3点とも資料の全面に施釉されている。1は内外面とも同じ厚みで施釉されるが、2・3は外面が内面より厚く施釉される。1は粗い貫入が、2・3は細かく密な貫入が内外面にみられる。素地はいずれも灰白色のやや粗いものである。

4は底部の資料で高台径は約7cmを測る。高台は外側へ開くようにつくられ、畳付は平坦に仕上げ、その外側を斜めに面取りしている。外底面は中央部が下がり、内面は削り痕を明瞭に残す。釉は暗緑色の失透性で、本資料からすると全釉のあと畳付とその外面を釉剥ぎしている。貫入は見受けられない。素地は灰白色のやや細かなものである。

f. 壺

2点だけ確認でき、1点を第24図5に示した。酒会壺の胴部片で、外面に蓮弁文が施される。小破片のため詳細は不明。釉は青緑色の失透性のもので、素地は灰白色のやや細かなものである。

第24図6～8は瓶か壺の胴部片である。(第1表では壺に含めた。)6は外面に花文を陽刻し、7・8は唐草文を施す。8は唐草文の上方に2本の横線が配される。いずれも内面より外面が厚く施釉されている。釉は6が深緑色、7が青緑色、8が黄緑色を呈し、3点ともやや透明度がある。8は内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は6・7が灰白色のやや細かなもので、8は黄白色のやや細かなものである。

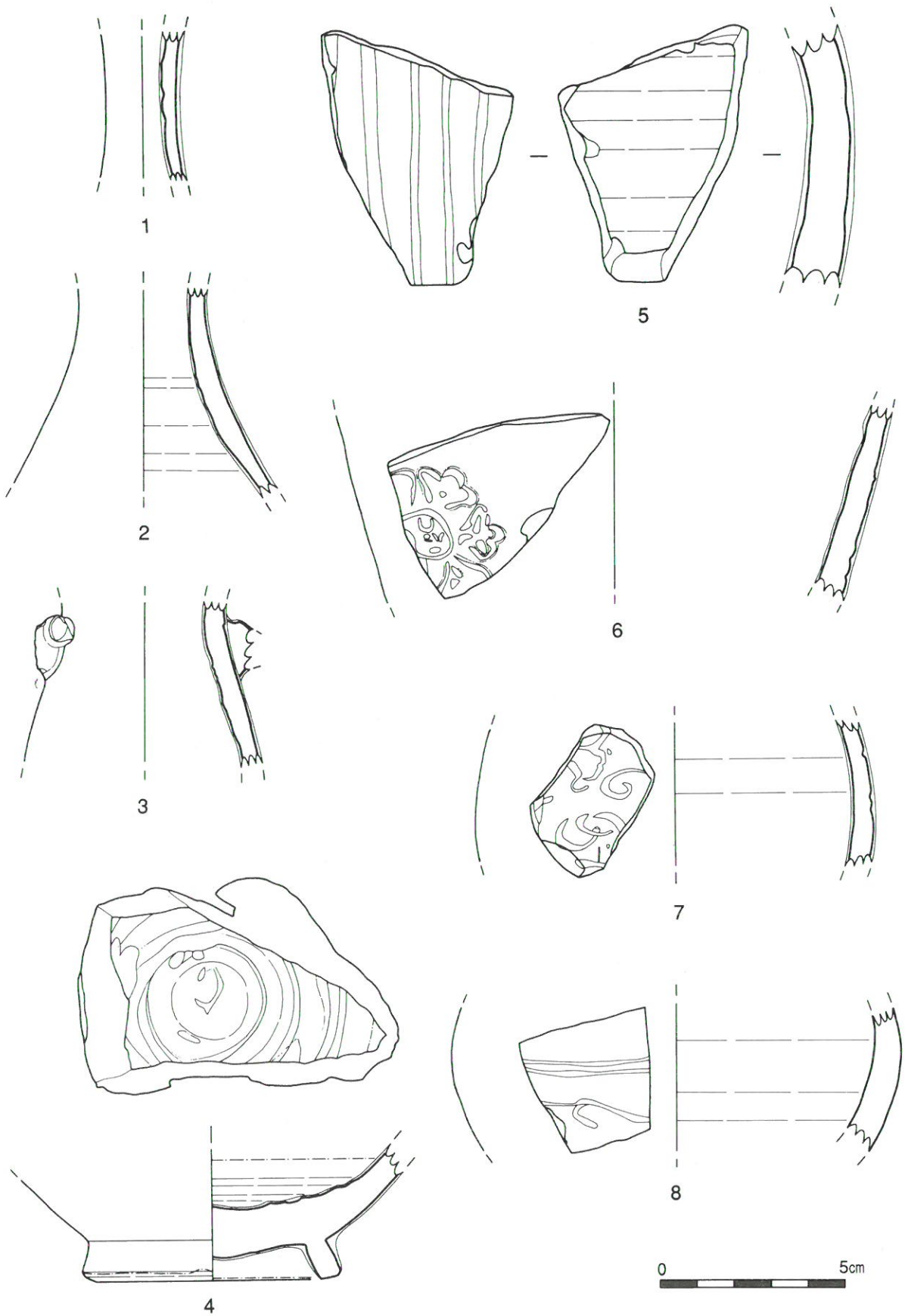
g. 小杯

本器種に属すかと考えられるものが4点得られている。第25図1・2に示すもので、2点とも口縁部の資料である。両者とも外反口縁で、1は口縁部上端が僅かに外反し、2は口縁部がラップ状に大きく外反するものである。推算口径は1が約7cm、2が約6cmを測る。文様は1が内外面にヘラ彫りの、2が外面に線描きの文様が認められるものの、全体的な様子は判然としない。これらの特徴は行政棟地区から報告されているものとはほぼ似通っている。2点とも釉は灰緑色の失透釉で、素地は灰白色のやや細かなものである。

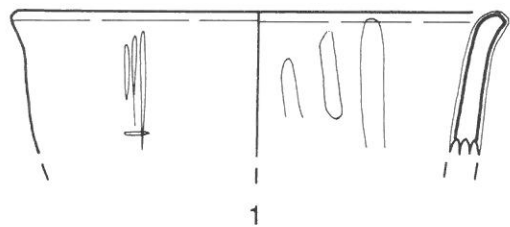
h. 香炉

6点確認でき、内訳は口縁部1点、胴部3点、底部2点である。そのうち特徴的な口縁部と底部を第25図3～5に示した。3は口縁部の資料で、上端が内側へ鉤状に折れ曲がるものである。推算の口径が約7cmを測る。風化のためか釉が白く濁り、器面の状況は判然としない。素地は橙褐色のやや細かなもので、全体の様子からすると焼成不良のものかと考えられる。

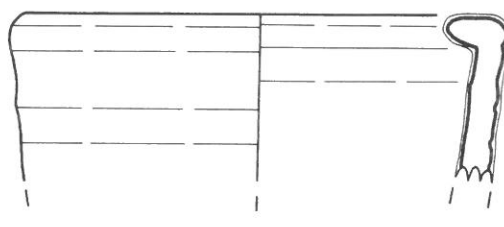
4・5は底部の資料で、高台径は4が推算約5cm、5は3.8cmである。4は腰折れのように、その部分の推算径は約7cm。2点とも高台は低く、端部を斜めに面取りし、内削りが非常に浅い。両者とも足の有



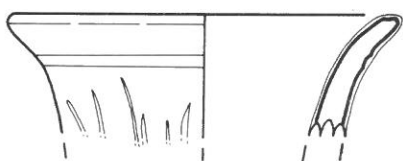
第24図 青磁 6 (袋物)



1



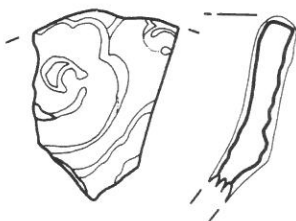
3



2



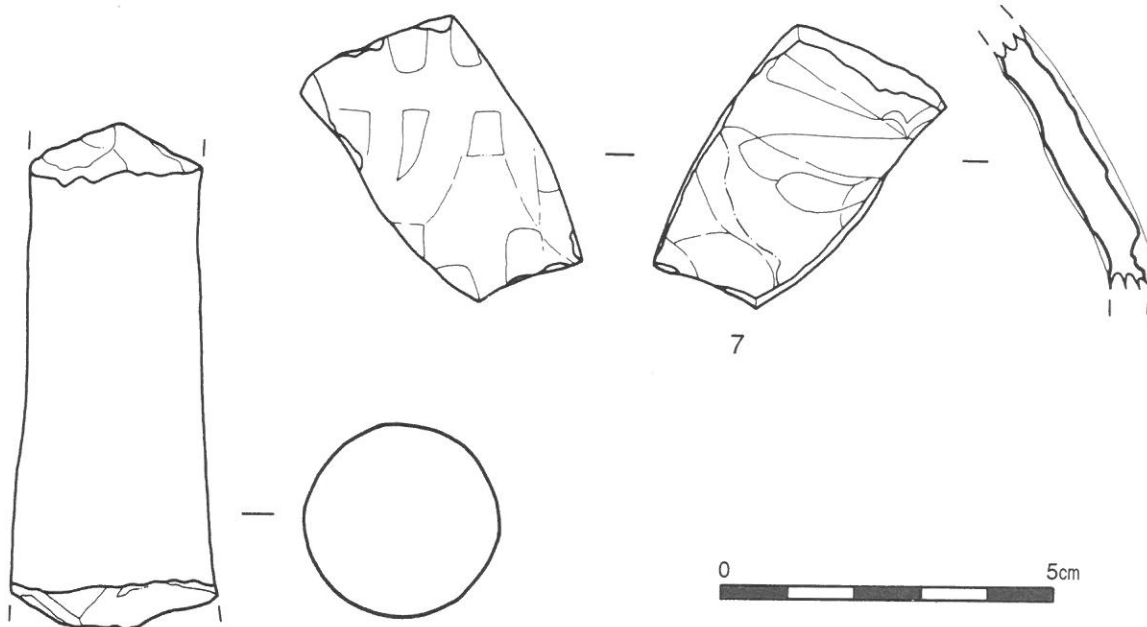
4



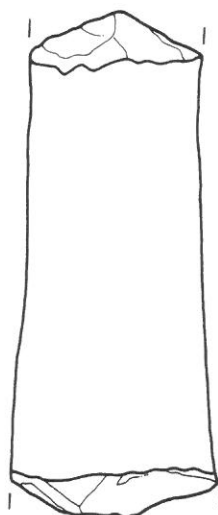
6



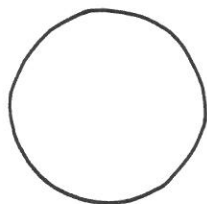
5



7



8



第25図 青磁 7 (香炉・その他)

無は不明。釉は4が暗緑色でやや失透性の、5が淡緑色のやや透明度のあるものを施釉している。4が内底面・外底面とも露胎で、5は外底面だけが露胎である。4は外面に粗い貫入が認められ、内底面には熔着痕もみられる。5は内底面に付着物が数ヶ所に認められる。素地は2点とも灰白色のやや細かなものである。

第25図6～8は器種不明のものである。6は外面に陽刻による花文が描かれる口縁部の資料であるが、小破片のため器形や文様など全体的な様子とはつかめない。釉は深緑色のやや失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。7は外面に縦位の幅広短線を廻らす胴部の小破片で、全体の状況は判然としない。裏面に明瞭な指頭痕を残し、下方には無釉の部分も見受けられる。釉は暗緑色の失透釉で、素地は灰白色の細かなものである。8は上下の部分が欠失した脚台部の資料かと考えられる。上端部の径が約2.5cm、下端部の径が約3cmで、下方がやや広くなる感じである。長さは約6cm。青緑色の失透性の釉を施し、器面に細かな貫入が密にみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

同図4は碁笥底の資料であるが、小破片のため詳細は不明。器厚が約2mmとかなり薄手のつくりである。推算の底径は約3cmを測る。畳付周辺から外底面にかけては露胎にし、他は全釉のようである。青緑色の透明釉を薄く施釉し、内外面に細かな貫入がみられる。畳付周辺には砂粒の熔着も見受けられる。素地は灰白色のやや細かなものである。

同図5はベタ底の資料である。本品も小破片のため詳細は不明。器厚が約3mmと薄手のつくりで、推算底径は約3cm。内面だけ施釉されており、外面は露胎である。青灰緑色の失透気味の釉で、細かな貫入が認められる。素地は灰白色のやや細かなものである。

第2節 白 磁

総数660点余り得られているものの、ほとんど小破片で全形の窺える資料には恵まれていない。時期的な面からみるとほとんどのものは15～19世紀頃に属すようであるが、12～13世紀頃のものも若干含まれるようである。15～16世紀頃のもの、17～18世紀頃のもの2つの時期が主流のようである。器種別にみると碗が圧倒的に多く、皿・小杯・小碗の順に減少し、小鉢と灯明具がそれぞれ1点ずつ得られている。碗は17～19世紀のものが圧倒的で、皿は15世紀後半～16世紀のものが中心のようである。特徴的なものを第26図～第28図に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 碗

過半数を越える出土量であるが、全形の窺えるものは第26図7に示す1点だけである。17～19世紀頃のものを中心で、15世紀後半～17世紀頃のものや12～13世紀頃のものそれぞれ若干得られている。特徴的なものを第26図に示した。以下、時期別に簡単に述べる。

・12～13世紀頃のもの

第26図1～3に示したもので、いわゆる玉縁口縁の碗である。1は玉縁部が小さく、口唇部は尖る。玉縁部直下に約7mm幅の浅い凹線状のものを廻らしており、玉縁部を誇張する感じになっている。2・3は玉縁部が大きなもので、2はやや扁平、3は厚みがある。2点とも口唇部は丸味を帯びる。いずれも口縁部が直線的に外側へ開くものようであるが、小破片のため胴部以下の状況は不明。1は推算口径の算出ができ、約13cmを測る。

1・3は緑味のある灰白色の釉を施し、2は乳白色の釉を施釉している。素地は1が灰白色のやや粗いもので、2・3は灰白色の細かなものである。

第2表 白磁出土状況

出土地			壁	A 区						B 区			合計		
器種	時期	部位		第1層	第2層	第3層		第4層	第5層	小計	第2層	第5層		小計	
							下部								
碗	12~13c	口縁部			1	2				3			0	3	
		胴部				2				2				0	2
	15後半~16c	口縁部								0				0	0
		胴部						1		1				0	1
		底部	1	1	2					4				0	4
	16c	口縁部	1							1				0	1
		胴部								0				0	0
		底部			1					1				0	1
	16~17c	完形	1							1				0	1
		口縁部								0				0	0
		胴部				1				1				0	1
	16後半~18c	底部		1		1		1		3				0	3
		胴部				3				3				0	3
		底部				3				3				0	3
	17~19c	口縁部	1			6	26		2	35				0	35
		胴部	3			54	45		4	106	7			7	113
		底部	2			3	13			18				0	18
	18c	口縁部			2	2				4	1			1	5
胴部				10					10				0	10	
底部				3	4				7				0	7	
18~19c	口縁部			14	28	3			45	3			3	48	
	胴部			18	30	7			55	3			3	58	
	底部			13	15	5			33	5			5	38	
	完形					1			1				0	1	
14後~17(明)	口縁部			2					2				0	2	
皿	15後半~16	口縁部		1	16	21		5	3	46	2		2	48	
		胴部	1	1	13	27		4		46	1		1	47	
		底部	3	2	11	25		2	5	48	1		1	49	
	16c	口縁部				1	1	1	2	5				0	5
		胴部			2	2				4				0	4
		底部			2		1			3				0	3
	16後半~17c	口縁部					1			1				0	1
		胴部					1			1				0	1
		底部				1	1			2				0	2
	17~18c	口縁部							1	1				0	1
胴部				1	1				2				0	2	
底部				1	1				2				0	2	
18~19c	口縁部			7	2	1			10				0	10	
	胴部			1					1				0	1	
	底部			2					2				0	2	
明治頃	底部			1				1					0	1	
小皿	15~16c	底部				1			1				0	1	
	明	口縁部				3			3				0	3	
小杯	15c	口縁部				1			1				0	1	
	15~16前半	口縁部		1	2				2	5			0	5	
	明末~18c	口縁部					3			3				0	3
		胴部					2			2				0	2
		底部				1				1				0	1
	清	口縁部		2	1					3				0	3
		胴部		1						1				0	1
底部			1	2					3				0	3	
完形				1					1				0	1	
瓶	清	胴部			1				1				0	1	
壺	14後~17(明)	胴部			1			1	2				0	2	
不明	18~19c	底部				1			1					0	1
		口縁部	1	6	7	1				15	1		1	16	
		胴部	3	21	16	13				53	1		1	54	
	19c	底部			3	1				4				0	4
		口縁部		4						4				0	4
		胴部		8	1					9		1	1	10	
	明 明治以降 不明	底部				1				1				0	1
		底部	1							1				0	1
		胴部				6				6				0	6
		底部				1				1				0	1
合計			18	133	236	218	1	23	11	640	25	1	26	666	

・15世紀後半～17世紀頃のもの

胴部と底部が得られており、16～17世紀頃の底部3点を第26図4～6に示した。いずれも高台脇までの資料である。4は高台を低くつくり、畳付の外側を斜めに面取りしている。畳付は平坦にし、内側の削りは外側よりも深く、高台が開く感じで斜めに削られている。5・6は高台が畳付の方へ細くなっており、5は6よりも低い。両者とも畳付の外側を斜めに面取りしており、畳付は平坦で狭くなっている。5は内底面の周囲に溝状の凹線を配し、体部との境目を明瞭にしている。高台径は4が5.4cm、5が5.2cm、6が約6cmである。

4は内底面および外面の高台脇から外底部にかけてを露胎にしている。5は内底面を蛇ノ目釉剥ぎし、外面は畳付だけを無釉にしている。6は全釉のあと畳付を釉剥ぎしている。5は畳付の周囲および内底面に重ね焼きの際の熔着痕が認められる。6は畳付の周辺に砂粒の熔着がみられる。4は白濁色の、5・6は乳白色の失透性の釉を施しており、5は光沢を有す。素地は4が黄白色のやや粗いもので、5・6は灰白色のやや粗いものである。

・17～18世紀頃のもの

第26図7～15に示したものである。7は唯一全形の窺える資料で、8～12は口縁部の、13～15は底部の資料である。7～11をみるとほとんど薄手のものである。

7は口径が13.6cm、高さが4.5cm、高台径が5.8cmを測る。高台径が大きく、高さの低い安定感のある資料である。高台際から直線的に開いて口縁部に至り、上端部で僅かに外反し、口唇部を水平につくる。高台は広く、低く削りだし、畳付の外側を斜めに面取りしている。畳付は平坦。外体面には調整の際の削り痕が明瞭に残る。内底面および高台脇から外底面を露胎にしている。釉は灰白色の失透性のもので、内外面に細かな貫入が密に認められる。また、露胎にしている内底面や高台の周辺には赤みを帯びる部分も見受けられる。素地は乳白色のやや粗いものである。

8～12の口縁部をみると8～10は体部から口縁部へ直線的に開き、上端部で若干外反ぎみになるものである。8・9は口唇部が尖る。10は舌状につくった口唇部の内側を斜めに削っており、口縁部の内側に明瞭な稜を有す。いずれも外面に比較的明瞭な削り痕がみられる。8・9は推算口径の算出ができ8が約13cm、9が約15cmを測る。3点とも破片の全面に施釉され、8・10は黄白色の、9は灰白色の失透釉である。8・10は両面に細かく密な貫入がみられ、9は内外面とも破片の下方に粗い貫入が認められる。素地は8・10が黄白色のやや粗いもので、9は灰白色のやや細かなものである。

11・12は外反口縁の資料で、口唇部は11が尖り、12が丸味を帯びる。12は口唇部の両側を若干削り、明瞭な稜をつくる。11の推算口径は約12cm。2点とも破片は全釉で、緑味を帯びた灰白色の失透釉を施している。素地は灰白色の細かなものである。

13～15は底部の資料である。13は高台を方柱状につくり、外側の中央部から先端部側を階段状に削っている。畳付は平坦で、外側を若干斜めに面取りしている。推算の高台径は約5.6cmを測る。施釉される部分は見受けられない。素地は黄白色のやや粗いものである。14は高台を逆台形状に低くつくりだす。内側の削りが斜めになり、高台が外側へ開く感じになっている。高台の内側は外底面よりも深く削り、畳付は若干斜めに整形している。外面は高台脇から高台および外底面は露胎にし、内底面は蛇ノ目釉剥ぎしている。釉は暗灰色の透明釉で、内底面に重ね焼きの熔着痕が認められる。素地は灰白色のやや粗いものである。15は高台が畳付の方へ若干細くなり、畳付を斜めに整形している。推算高台径は約6cm。畳付と外底面、さらに内底面が露胎のようである。黄灰色でガラス質の透明釉を施しており、内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は黄白色のやや細かなものである。

16・17は高台脇で角度をもって折れ曲がり、口縁部の方へ直線的に立ち上がっていくものである。16

は高台が逆三角形で、畳付を斜めにしている。17は蛇ノ目高台をつくるもので、畳付の外側を斜めに面取りしている。推算の高台径は16が約4cm、17が約5cmであるが、高台脇の折れ曲がり部の推算径は2点とも約7cmを測る。16は外面の胴部中央付近に陽刻の細線が1本廻る。16は畳付、17は畳付および外底面を除き全釉である。16は乳白色の釉で、17はやや緑味を帯びたガラス質の透明釉を施す。素地は2点とも乳白色の細かなものである。16の類例資料が行政棟地区から報告されている。

b. 皿

総数170点余りと碗に次いで多く得られているものの、図上復元を試みたものが3点だけであり、ほとんどが小破片の資料である。本器種の場合、碗よりもやや古手のもの为主体をなしており、注意される点である。特徴的なものを第27図に示した。1～15に示したものは15世紀後半～16世紀頃のもの、16・17は16世紀頃のもの、18・19は18～19世紀頃のものである。以下に簡記する。

15世紀後半～16世紀頃のものである1～15をみると、器形や施釉の状況などから次の3種に分けられるようである。

第1種—口縁部が内彎気味で、方柱状の高台をつくり、外面の胴部以下を露胎にするもの

第2種—口縁部が内彎気味で、切高台をつくり、全釉のもの

第3種—碁笥底のもので、畳付を露胎にし、内底面を蛇ノ目状に釉剥ぎするもの

第4種—口縁部上端が外反し、高台は細くつくり、畳付を釉剥ぎするもの

第5種—胴部下半からゆるやかに外反し、高台は細くつくり、畳付を釉剥ぎするもの

量的には第4・5種のもものが主流で、全釉のあと畳付部を釉剥ぎするものが多くなるようである。

第1種に属すものは1～3に示すものである。1は口縁部の、2・3は底部の資料である。1は推算の口径が約10cmを測り、口唇部は舌状になる。口唇部の内側に比較的明瞭な稜が認められる。白濁色の失透性の釉で、内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は乳白色の細かなものである。2は推算高台径が約4cm、3は推算高台径が約3cmを測る。2点とも畳付外面を斜めに面取りし、外底面は円錐状に中央部が盛り上がる。両者とも釉は白濁色の失透性のもので、施釉されている部分には細かく密な貫入がみられる。2点とも素地は乳白色の細かなものである。

第2種は4・5に示すものである。4は全形の窺えるもので、口径の推算が約8cm、高さが約1.7cm、推算高台径が約4cmである。大きさからいえば小皿の部類に入るものである。口唇部は平坦につくる。高台の付け根まで切り込んでおり、図では4脚として示した。内底面には重ね焼の際の痕跡が認められる。釉はやや黄色味をおびた白濁色の失透性のもので、素地は乳白色の細かなものである。5は高台径が約4cmを測る底部資料で、5脚をつくる。切り込みは高台の付け根までは及んでない。釉は灰白色のガラス質のもので、内底面には細かく密な貫入がみられる。また、内底面には5脚の重ね焼の際の痕が残る。素地は黄白色の細かなものである。

第3種は6に示す底部資料で、推算の底径は約3cmである。白濁色の失透釉で、内外面に細かな貫入が認められる。素地は黄白色のやや細かなものである。

第4種に属すものは7～11に示したものである。7は全形の窺えるもので、口径の推算が約9cm、高さが2cm、推算高台径は約5cmを測る。小振りの資料といえる。口唇部はやや丸味を帯び、高台は畳付の方が内側へ傾く感じできつくれる。畳付の周辺には砂粒の熔着も見受けられる。灰白色の失透性の釉を施し、素地は灰白色の細かなものである。他は口縁部の資料で、いずれも推算口径の算出ができ、8・9は約14cm、10は約19cm、11は約11cmである。比較的バリエーションのある大きさとなっている。11は他の資料に比べ、深いイメージを与える。口唇部の形状は8がやや丸味を帯び、9・10は尖り気味、11は平坦に仕上げている。釉は8・11が白濁色の失透性のもので、9・10が灰白色の失透性のものである。素地

はいずれも灰白色の細かなものである。

12・13は底部資料である。12は畳付を平坦につくり、その外側を斜めに面取りするもので、13は畳付を斜めに整形するものである。推算の高台径は12が約6cm、13が約7cmと、いずれも7よりもやや大きめである。畳付の周辺には砂粒の熔着も認められる。釉は2点とも失透性のものであるが、12は白濁色、13は灰色味の強い灰白色を呈す。素地は12が乳白色の細かなもので、13は灰白色のやや粗いものである。

第5種は14・15に示す2点である。14は口唇部が舌状を呈し、底部は碁笥底状につくる。推算口径が約11.5cm、高さが2.5cm、推算底径が約6.5cmを測る。他の資料に比べ厚手のつくりである。釉は灰色味のある白濁色の失透釉で、素地は灰白色のやや粗いものである。15は薄手のつくりという点を除けば、口唇部形状や口径、釉・素地などの特徴は14とほぼ同様である。

16・17は16世紀頃のものである。16は上端部が外反する口縁部資料で、口唇部を平坦に仕上げる。口唇部の周辺を釉剥ぎし、鉄釉を塗付している。小破片のため詳細は不明。釉は灰白色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。17は推算高台径が約11cmを測る底部資料である。高台は細く、やや内傾気味につくる。全釉のあと畳付の両側を斜めに削っており、畳付は尖り気味になる。内底は凹面を形成するようである。釉は白濁色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。

18・19は18～19世紀頃のものである。18は全形の窺えるもので、推算口径は約9cm、高さは2.5cm、推算高台径は約6cmを測る。高台は逆三角形状に低くつくり、腰部が若干膨らみ、口縁部上端で僅かに外反する。口唇部と畳付は丸味のある仕上げとなっており、両方とも全釉のあと釉剥ぎしている。畳付の内側には目砂の熔着が見受けられる。釉は乳白色の失透性のもので、素地は乳白色の細かなものである。19は直口口縁の資料で、推算口径は約9cmである。口唇部は尖り、18と同様その部分の釉を剥ぎとる。灰白色の失透性の釉で、素地は乳白色の細かなものである。

c. 小 碗

18～19世紀頃のものほとんどで、型成形で口禿に類するものかと考えられる。特徴的な4点を第28図1～6に示した。1～3は口縁部の、4～6は底部の資料である。1は口縁部上端で若干外反するもので、2・3は直口口縁の資料である。3点とも口唇部が尖りその周辺は釉剥ぎされている。推算口径は1が約9cmで、2・3は約6cmである。同じ大きさのものが行政棟地区からも出土している。釉は1が白濁色の失透性、2・3は青灰白色の失透性のものである。素地はいずれも乳白色の細かなものである。

4～6は底部資料で、推定の高台径はいずれも4cm前後である。3点とも高台は逆三角形状で、4・5は畳付を釉剥ぎしている。また、4は外底面を露胎にしており、砂粒の熔着部も見受けられる。釉は4が青灰白色の、5・6が乳白色の失透性のものである。6は風化のためかやや茶色味を帯びる。素地は3点とも乳白色の細かなものである。

d. 小 杯

15～16世紀頃のもの、17～18世紀頃のもの得られている。量的には後者に属するものが多い。特徴的なものを第28図7～13に示した。以下に略述する。

7・8に示したものは15～16世紀頃のもので、八角小杯の口縁部資料である。口縁の山形部、胴部の面取り部が認められるもので、口唇部は平坦に仕上げている。7は8に比べ薄手である。小破片のため詳細は不明。2点とも黄灰白色の失透釉で、内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は両者とも乳白色の細かなものである。

9～13は17～18世紀頃のものである。9は全形の窺えるもので、10～12は口縁部の、13は底部の資料である。9は推算口径が約3cm、高さが1.8cm、推算高台径が約1.4cmである。口縁部上端が若干外反するもので、口唇部は尖り気味になる。高台は逆台形状に低くつくる。乳白色の失透性の釉を全体に施すよう

である。畳付の周辺には砂粒の熔着が認められる。素地は乳白色の細かなものである。10・11も口縁部上端が外反するもので、11は比較的強く折り曲げるものである。11は推算口径の算出ができ約4.6cmを測る。2点とも灰白色の失透釉で、素地は乳白色の細かなものである。12は直口口縁の資料で、推算口径は約4cmである。口縁部上端の内側を斜めに削っており、そのため口唇部は尖る。灰白色の失透釉で、素地は乳白色の細かなものである。

13は底部の資料で、推算高台径は約1.8cmを測る。高台は逆台形状に低くつくる。全釉のあと畳付だけを釉剥ぎしている。畳付の内側には砂粒の熔着も認められる。釉は灰白色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。

e. 袋物

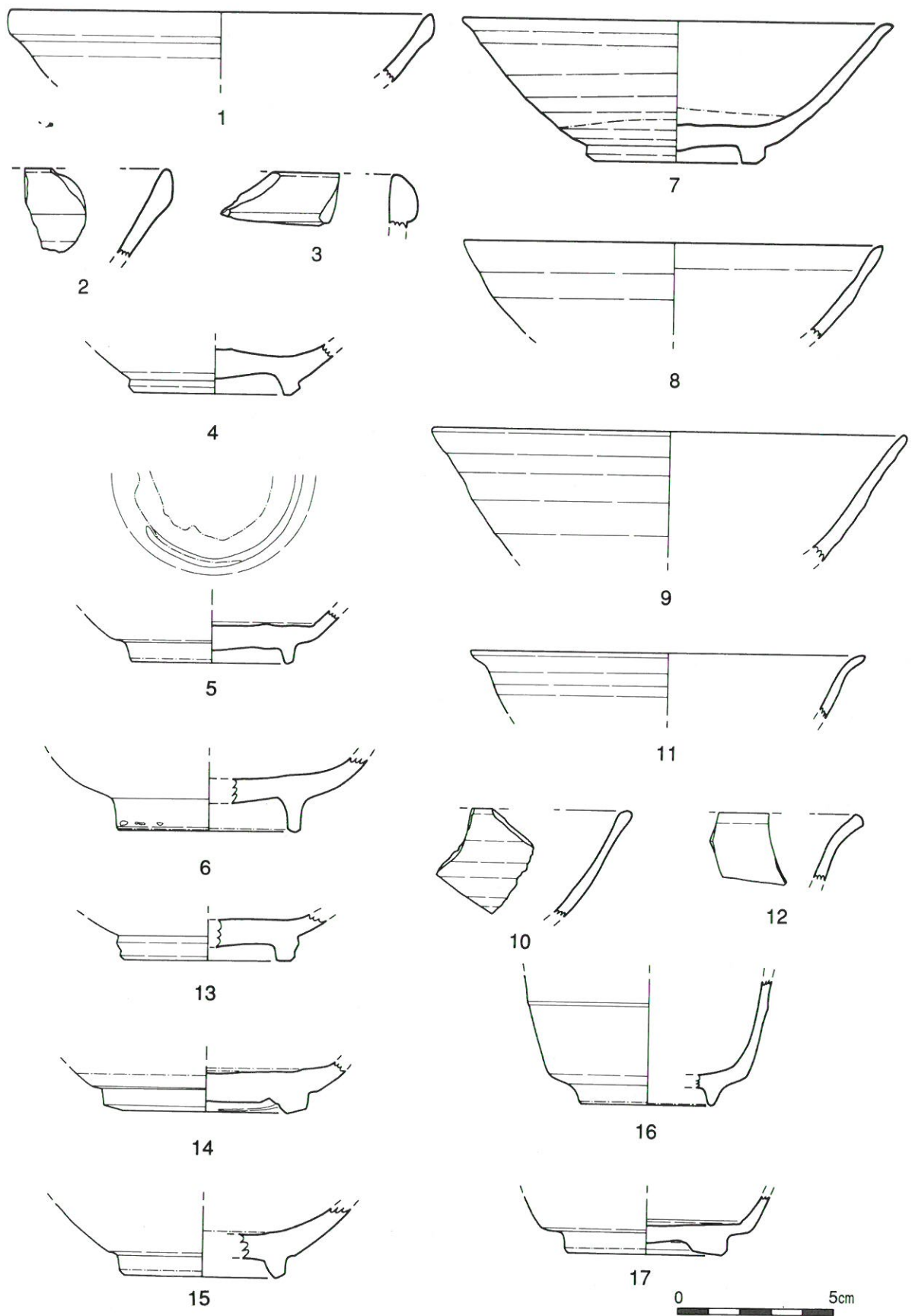
袋物になるかと考えられる資料が数点得られている。胴部と底部があり、口縁部は含まれてない。唯一の底部資料を第28図14に示した。高台脇から胴部の方へ直線的に外側へ開きながら向かうものである。高台はやや外側へ開き、畳付外面を斜めに面取りしている。畳付は平坦に仕上げ、安定感のあるつくりである。高台際をやや深く削り込み、外底面の削りは浅い。内外面に調整痕が明瞭に残る。高台径は4.8cmである。

釉は緑味を帯びた灰白色の失透性のもので、本資料では内面にだけ施釉されている。細かく密な貫入がみられ、内底面には砂粒の熔着も見受けられる。素地は黄灰白色のやや細かなものである。

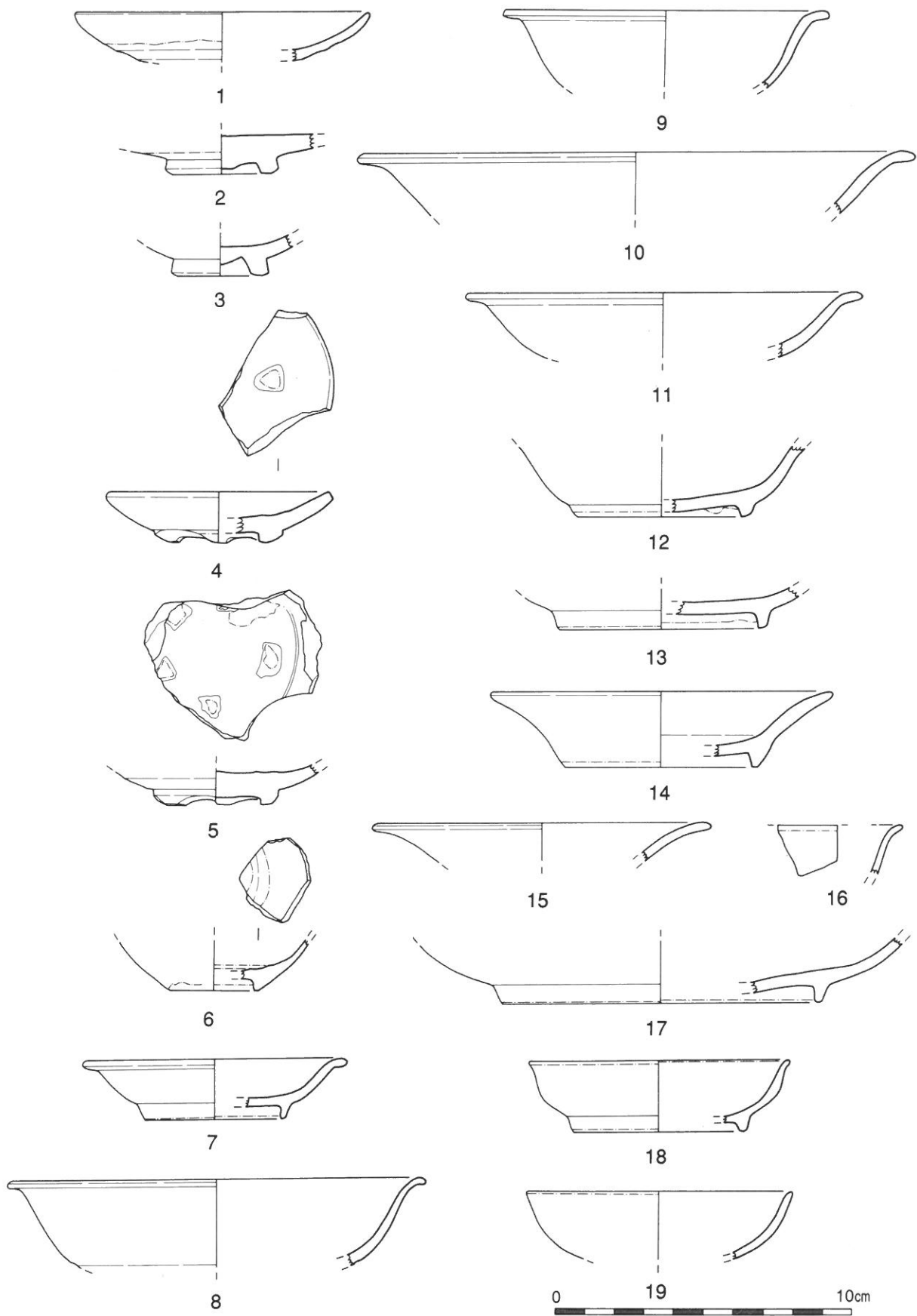
f. 灯明具

ヒョウソクの底部が1点得られている。底径は3.5cmで脚部の高さは1.5cmを測る。底面部の方へラップ状に開き、縁部を平坦に面を整えている。受け皿部の状況は不明。芯部は上部の方へ若干細くなる筒状につくり、一方側の面を半分削っている。高さは2cm、上端部の径が0.7cm前後、下端部の径が1.0cm前後を測る。底面は上げ底状になり、周縁部が地につく。中央部は直径0.6cm前後の孔がみられ、脚台部は空洞になっている。

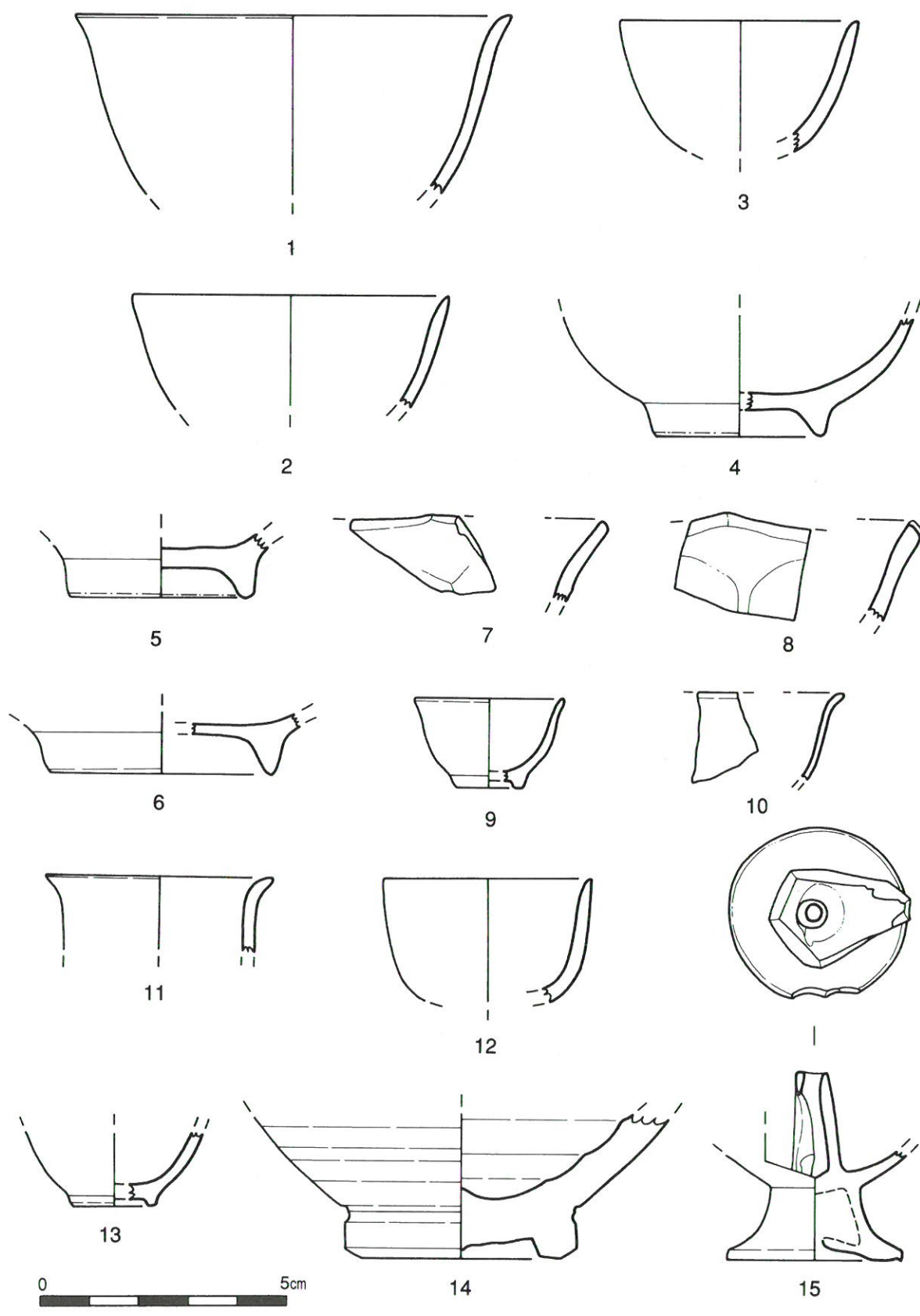
淡灰白色の失透性の釉が底面部を除き総釉されるようで、底面の縁には釉垂れがみられる。素地は乳白色の細かなものである。18～19世紀頃のもののようなものである。



第26図 白磁 1 (碗)



第27图 白磁 2 (皿)



第28図 白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)

第3節 染付

総数1350点と輸入陶磁器の中では最も多く得られているものの、ほとんどが小破片の資料であり、全形の窺える資料は碗や小碗・皿などに若干見受けられるだけである。得られた資料を時期的な面からみると15世紀後半～19世紀頃までと非常に幅があるものの、量的には17世紀後半以降のものが多いようである。以下、詳細は第4表の観察一覧に示した。

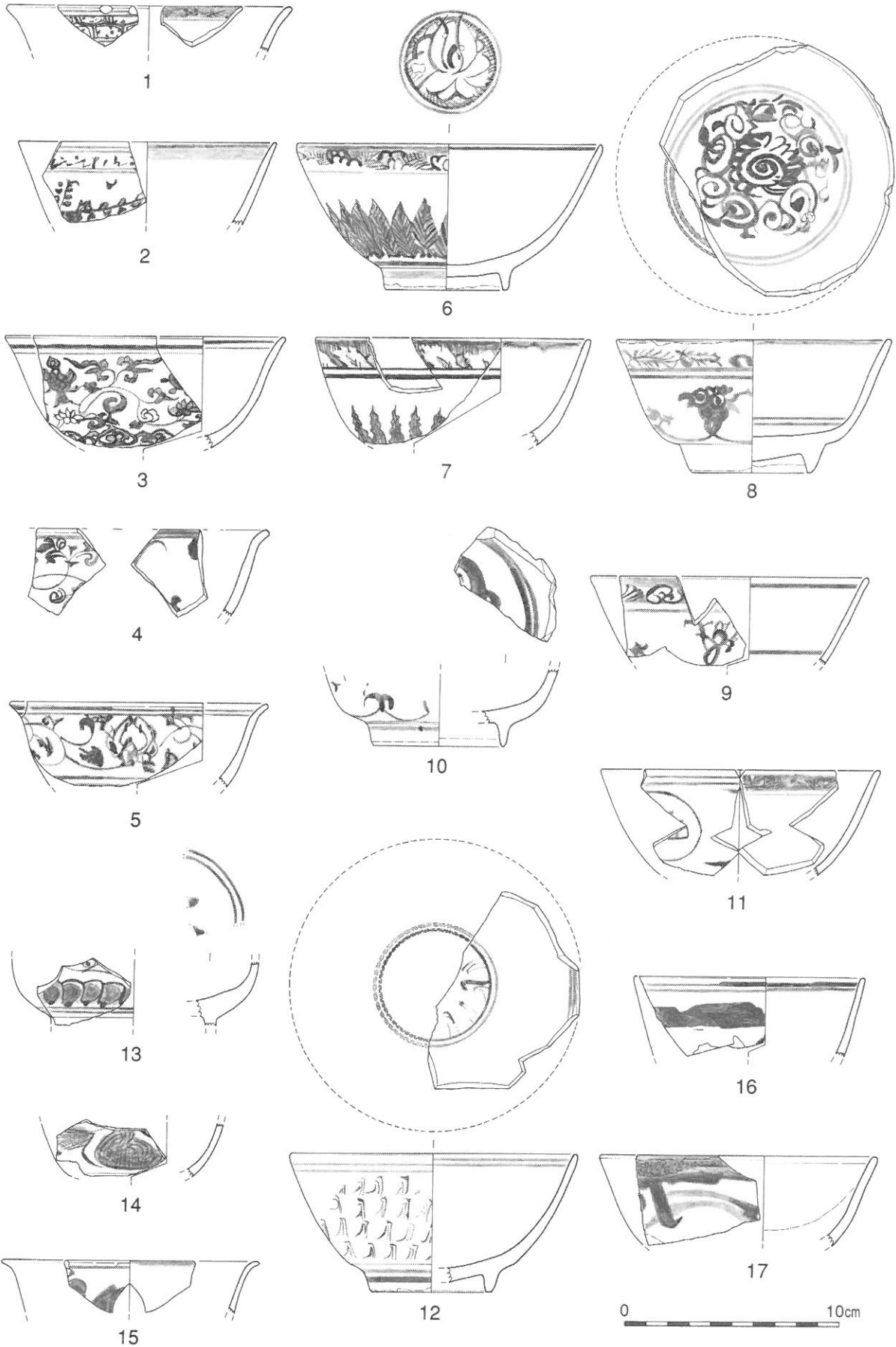
第3表 染付出土状況

出土地 層序			A 区						小計	B 区			小計	合計		
器種	時期	部位	壁	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層		第6層	攪乱	第2層 b			第3層	
碗	15～16C	口縁部	7	2	18	30	3	5			58		1	1	66	
		胴部	4	13	24	73	4	2			116	3		3	123	
		底部		8	6	19	2	2			37	1		1	38	
		完形			2	1					3			0	3	
	16～17C	口縁部			3						3			0	3	
		胴部	1		1	5					6			0	7	
	17～19C	口縁部	2	7	52	16					75	2		2	79	
		胴部		39	93	18					150	12		12	162	
		底部			27	2					29	6		6	35	
		完形				1					1			0	1	
	18後半～19C	口縁部	3	29	30	12					71	1	6	1	9	83
		胴部	5	65	65	19					149	10		10	164	
		底部	1	20	28	5					53	10		10	64	
		完形									0	1		1	1	
	明(14後半～17)	口縁部	1		30	5					35	6		6	42	
胴部				1	7					8			0	8		
明か清	胴部			2						2			0	2		
	底部			8	3					11	1		1	12		
小碗	15～16C	口縁部	1		1	1				2			0	3		
		胴部		1	2					3			0	3		
		完形						1		1			0	1		
	18後半～19C	口縁部		1							1	1		1	2	
胴部			1							1			0	1		
底部					1					1			0	1		
清(17後半～19)	口縁部			1					1				0	1		
鉢	17後半～18前半	口縁部				1				1			0	1		
		胴部			2					2	1		1	3		
皿	15～16C	口縁部	1		1	5	37	2	1	46				0	47	
		胴部	4			1	11	1	1	14				0	18	
		底部	1	1	1	4	13	1		20				0	21	
	16～17C	口縁部			1						1			0	1	
		胴部					1				1			0	1	
		底部					3				3			0	3	
	17後半～18前半	口縁部			4	1					5			0	5	
		胴部			5						5			2	7	
		底部		1	1						2	4		4	6	
	18～19C	口縁部	6	4							10	3		3	13	
		胴部	3	3	1						7			0	7	
		底部	3	4	3						10	1		1	11	
完形				1						1			0	1		
小皿	16前半～中葉	底部				1				1			0	1		
	18後半～19C	底部		1		1				2	1		1	3		
角皿	17C	口縁部			3					3	1		1	4		
		胴部			3					3			0	3		
		底部			2						2			0	2	
小杯	16後半	口縁部			1		1			2			0	2		
	16～17前半	口縁部				3				3			0	3		
		胴部				3				3			0	3		
		底部				1					1		0	1		
18後半～19C	口縁部		1							1			0	1		
	底部		2							2			0	2		
高足杯	16後半	胴部				1				1			0	1		
	16～17前半	底部	1							0			0	1		
合子の蓋	16後半	胴部					1			1			0	1		
瓶	15末～16中葉	口縁部			1	1				2			0	2		
		胴部		1	5	6				12			0	12		
		底部			1	1				2			1	2		
	17C	底部								0	1		1	1		
清朝	口縁部				1					1			0	1		
	胴部		1	1	2					4			0	4		
	底部									0		1	1	1		
壺	15末～16中葉	口縁部	1							0			0	1		
	16～17前半	胴部	1							0			0	1		
壺の蓋	16前半～中	胴部				1				1			0	1		
	16後半	胴部				1				1			0	1		
壺か袋物	16後半	胴部				1				1			0	1		
碗か皿	15末～16中葉	胴部					1			1			0	1		
		底部					2			2			0	2		
碗or小杯	18後半～19C	底部							1	1			0	1		
		胴部				1				1			0	1		
不明	16～17前半	口縁部		1						1			0	1		
		胴部		2						2			0	2		
	16～19C	口縁部		24	14	5					43	2		2	45	
		胴部	1	7	79	71					157	8	1	9	167	
		底部			2	2					4			0	4	
	明か清	口縁部			1						1			0	1	
胴部		1	10	5						15			0	16		
合計	底部		36	251	541	341	75	14	9	1225	1	83	1	4	89	1350

第4表 a 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	特徴	年代	出土地	備考
第 29 図 版	1	碗	口 縁 部	13.2 — —	外反口縁。胴部から直線的に外側へ開き、口縁部上端で若干外反。口唇部は丸みを帯びる。文様は外面に亀甲繫ぎ文、内面に四方褙文を配す。	15C後 ～16C 前	A ノ-51 トワフ	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。やや濁った感じになっている。呉須は淡く発色し黒ずんだ部分もみられる。素地は白濁色の細かなものである。
	3	碗	口 縁 部	13 — —	外反口縁。腰部がゆるやかに膨らみ、口縁部がゆるやかに外反する。口唇部は尖り気味になる。文様は外面の口縁部に界線を2本廻らし、胴部に唐草文、腰部に如意頭繫ぎ文を配す。内面は口縁部に2本、腰部下方に界線を廻らす。	15C後 半～16 C前半	A ノ-34 第2 b 層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍く部分的に黒ずむ所あり。素地は乳白色のやや細かいものである。
	5	碗	口 縁 部	12 — —	外反口縁。腰部がやや膨らみ、口縁上端がわりときつく外反する。口唇部は平坦にする。文様は外面の口縁部と腰部にそれぞれ2本の界線を廻らし、その間に牡丹唐草文を配す。内面の口縁部に2本の界線が廻る。	15C後 半～16 C前半	A ニ-30, 31 壁	黄灰白色の釉が破片の全面にみられる。内外面に細かく密な貫入がみられる。呉須は黒ずむ部分があり全体に緑っぽく発色。焼成酸化気味の資料。素地は白濁色のやや粗いものである。
	4	碗	口 縁 部	— — —	外反口縁。胴部からはほぼ直線的に開きながら口縁部に向かい、上端部で若干外反する。口唇部はわりと平坦に仕上げている。文様は外面の口縁部に1本の界線、胴部に唐草文を配す。内面は口縁部に2本の界線、胴部にも施されるが構図など不明。	15C後 半～16 C中葉	A ノ、ネ-31 攪乱 土管	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。内外面には粗い貫入がみられる。呉須の発色は鈍い。内面は黒ずんでいる所もみられる。素地は白濁色のやや粗いものである。
	2	碗	口 縁 部	14 — —	直口口縁。胴部から直線的に開くもので、口唇部を平坦につくる。文様は外面の口縁部に波濤文帯、胴部に樹木のような文様が施される。内面の口縁部に界線が1本廻る。	15C末 ～16C 中葉	A ニ-31 第3層 下部	青灰白色の釉が破片全体にみられる。呉須の発色は淡く、黒ずんだ部分もみられる。素地は乳白色の細かいものである。
	6	碗	口 ～ 底 部	14.2 5.6 6.8	直口口縁。腰部がゆるやかにカーブしながら外側へ開いて口縁部に向かう。口唇部は平坦にするが、部分的に外面が削れ尖り気味のところあり。高台は逆三角形に細くつくり、畳付は平坦にしている。文様は外側の口縁部に波濤文帯、腰部に蕉葉文を配す。高台際に界線を2本廻らす。内面は口縁部に1本の界線を廻らし、内底面に2本の界線と蓮花文を施す。連子形。	15C末 ～16C 中葉	A ニ-33 焼土混 じり (溝状)	青灰白色の釉を総釉のあと畳付の周辺を釉剥ぎしている。呉須の発色は淡い。内底面に砂粒の溶着あり。素地は乳白色の細かいものである。
	7	碗	口 縁 部	12.8 — —	直口口縁。腰部がやや急カーブで、そこから直線的に開いて口縁部へ至る。口唇部は平坦に仕上げる。文様は外面の口縁部に波濤文帯、腰部に蕉葉文を施す。内面の口縁部にやや幅広の界線を廻らす。	15C後 半～16 C前半	A ノ-31 第5層	淡青白色の釉で、気泡が密にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなもの。
	8	碗	口 ～ 底 部	12.6 5.5 6.2	直口口縁。腰部のカーブが急で、そこから直線的に口縁部へ向う。口唇部は平坦に仕上げ、高台は逆三角形につくる。畳付は平坦にする。文様は外面の口縁部に界線と波濤文帯、胴部にアラベスク文。内面の口縁部に1本、腰部下方に1本界線を廻す。内底面に花唐草文を配す。	15C末 ～16C 中	A ノ-33 焼土混 じり	青灰白色の釉を施すが、全体に濁っている。総釉のあと畳付周辺を釉剥ぎしている。高台際では釉が素地から剥がれる所が目立ち、口縁部でも剥がれる部分が見られる。呉須の発色は鈍く、内底面は黒ずんでいる。素地は灰白色の粗いもので、黄色味を帯びる部分が多い。
	9	碗	口 縁 部	13 — —	直口口縁。胴部から直線的に開いて口縁部へ至る。口唇部は平坦にする。文様は外面の口縁部に界線と波濤文帯、胴部にアラベスク文。内面は口縁部と胴部下方にそれぞれ1本の界線を配す。	15C末 ～16C 中葉	A ヒ-31 第4層 焼土混 じり	青灰白色の釉が全面にみられる。釉は濁った感じである。呉須の発色は鈍く、黒ずんだ所もみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。
	10	碗	底 部	— 6 —	腰部下方がかなり急カーブで立ち上がっていく。高台は細く逆三角形で畳付の方へ幅が狭くなる。文様は高台外面に2本の界線、外面にアラベスク文。内底面の文様は構図不明。	15C～ 16Cか?	A ヒ-32 第3層	青灰白色の釉を施したあと、畳付の周囲を釉剥ぎする。呉須の発色は淡い。素地は灰白色の細かなものである。
	11	碗	口 縁 部	13 — —	直口口縁。腰部のカーブはゆるやかで、外側に開きながら口縁部に向かう。口唇部は平坦に仕上げる。文様は外面の口縁部に2本の界線、胴部に丸文と如意雲状の文様を上・下に配す。内面の口縁部に四方褙文を配し、腰部に界線が認められる。	16C前 半～16 C中葉	A ノ-33 第2b層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。
	12	碗	口 ～ 底 部	13.4 5.6 6.5	直口口縁。高台際からゆるやかな弧を描き、外側へ開き気味に口縁部へ向う。口唇部は平坦に仕上げる。高台は内側へすぼむ感じで、畳付の方へ細くつくる。畳付は平坦にする。文様は口縁部の内外面及び高台外面と内底面にそれぞれ2本の圏線を廻らしている。外面及び内底面には梵字文が配される。	16～17 C	A ノ-31 溝状遺 焼土混 じり	淡青白色の釉を畳付を除き総釉。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色で粗い。
	13	碗	底 部	— — —	腰部のカーブが急である。文様は外面の高台際に2本の界線、その上方に蓮弁文を配すが胴部の文様は不明。内面は腰部下方に2本の界線を配すが、内底面の文様は不明。	16C	A ノ-31 第3層	青灰白色の釉が全面にみられる。内外面に細かい貫入がみられる。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	14	碗	胴 部	— — —	腰部の資料で、丸みを持って立ち上がっていくものようである。文様は外面の腰部下方に1本の圏線、その上方に花文を配す。	16C後 半～17 C	A ノ-32 第3層 上部	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須はややはっきりと発色する。素地は乳白色で細かい。
	15	碗	口 縁 部	12 — —	外反口縁。腰部から直線的に開いて口縁部に至り、上端でややきつく外反する。口唇部は尖る。文様は外面の口縁部に界線を廻らし、胴部に鳥文(?)の一部がみられる。内面の口縁部には幅広の界線を廻らしている。	明か清 前半	A ニ-33 トワフ第 3層下 部	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや細かいものである。
	16	碗	口 縁 部	10.8 — —	直口口縁。腰部からはほぼ直線的に外側へ開きながら口縁部へ向う。口唇部は丸みを帯びる。文様は口縁部の内外面にそれぞれ2本の圏線。外面には雲文の一部が認められる。	17C後 半～18 C	A ノ-34 第2層	淡灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は比較的よい。素地は乳白色で細かい。
	17	碗	口 縁 部	16 — —	直口口縁。腰部がゆるやかにカーブし、外側へ開きながら口縁部に至る。口唇部は尖り気味。文様は外面の口縁部にみられるものの全体の構図は不明。	17C後 半～18 C	A ノ-33 第3層 (上部)	淡灰白色の釉を施し、内外面とも胴下半部は露胎のようである。口唇外面も釉剥ぎし、鉄釉を施す。両面とも細かい貫入が走る。呉須の発色は鈍い。素地は乳白色の細かいものである。

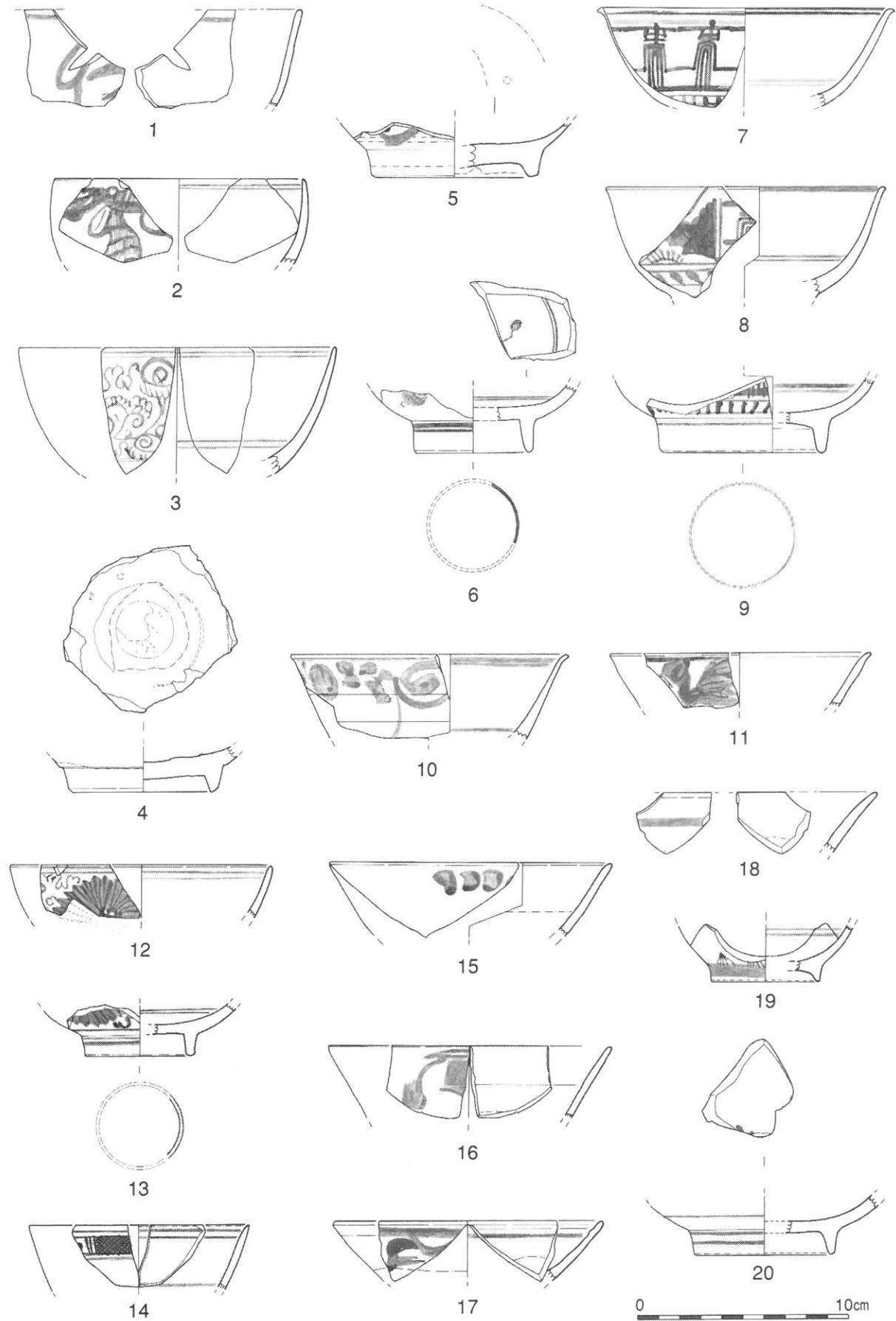


第29图 染付 1 (碗)

第4表b 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底器高	特徴	年代	出土地	備考
第30図・図版27	1	碗	口縁部	-	直口口縁。腰部から直線的に外側へ開きながら口縁部に至る。口唇部は尖り気味になる。文様は口縁部の内外面に1本の界線を廻らす。外面の胴部には文字様の文様がみられるものの、判然としない。	17C後半~18C	A h-32 第3層	黄灰白色の釉が破片の全面にみられる。灰色味の強い部分もみられる。呉須はやや緑味を帯びた発色で鈍い。素地は灰白色のやや粗いものである。福建・広東系。
	2	碗	口縁部	11.8	直口口縁。腰部がほとんど膨らまずに口縁部に向う。口唇部は尖り気味。文様は口縁部の内側に2本の圈線。外面に不明な文様が認められる。	17C後半~18C	B f-30 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は乳白色で細かい。
	4	碗	底部	6.6	高台際から直線的に開きながら立ち上がるもので、高台は逆三角形形状につくる。畳付は斜めに仕上げる。	17C後半~18C	A 7-32 第2層	青灰白色の釉が施釉され、外面は高台際まで、内面は腰部下方までと内底面中央部に施す。素地は灰白色の細かいものである。
	3	碗	口縁部	15.0	直口口縁。高台際からゆるやかな弧を描いて口縁部に至る。口唇部は丸みを帯びる。文様は内外面とも口縁部と腰部下方にそれぞれ2本の圈線を廻らす。外面には唐草文を配す。	17C後半~18C	A f/30, 31 第2層	淡青白色の釉で、外面には気泡が目立つ。破片の全面に施釉。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色で細かい。
	5	碗	底部	7.8	腰部があまり膨らまず、直線的に立ち上がっていくものである。高台は逆台形状をつくり、畳付を斜めに整形する。文様は外面の腰部に丸文の一部が認められる。	17C~18C	B h-30 第2層 攪乱	淡黄灰色の釉を施すが、畳付とその外側及び高台際に露胎部があり、内底面の中央部に施釉されるがそこから腰部は露胎のようである。素地は黄白色のやや粗いものである。
	6	碗	底部	5.4	腰部がゆるやかにカーブして立ち上がる。高台は畳付の方へ細くなるように高くつくり、畳付は平坦にする。畳付の外側を斜めに面取りしている。内外の高台際および内面の腰部下方に界線を廻らす。内底面に草花文。外面の胴部にも部分的に施文する。	17C後半~18C	A h-33 第2層	青灰白色の釉が畳付を除き全釉されているが、全体に濁っている。呉須の発色は比較的良好である。素地は白濁色の細かいものである。
	7	碗	口縁部	14	外反口縁。腰部のカーブがややきつく、直方向に立ち上がって口縁部に向かい、口縁部上端が若干外反する。文様は外面の腰部に蓮弁文のくずれたもの、胴部に寿字文を配す。内面は口縁部と腰部に2本の界線を施している。	18C頃	A t-31 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍く、黒ずむ部分あり。素地は灰白色のやや細かいものである。福建・広東系。
	8	碗	口縁部	13.2	外反口縁。腰部のカーブがややきつく、直方向に立ち上がって口縁部に向かい、口縁部上端が若干外反する。文様は外面の腰部に蓮弁文のくずれたもの、胴部と寿字文と花文を交互に配す。内面は口縁部に1本、腰部に2本の界線を廻らす。	18C頃	B t-30 井戸前 排水溝 攪乱	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。福建・広東系。
	9	碗	底部	7.6	腰部が比較的急なカーブを描いて立ち上がる。高台は割合厚く、高く、しっかりとつくる。畳付の方へ若干厚さを減じる。畳付は平坦にし、両側を斜面に面取りしている。文様は高台際と内面腰部下方に2本の界線。外底面に1本の界線、外面胴部に寿字・梅花散らし文を配す。	18C頃	B f-30 第2層	青灰白色の釉を総釉のあと畳付とその周辺を釉剥ぎしている。呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かいものである。
	10	碗	口縁部	13.2	外反口縁。腰部から直線的に外側へ開いて口縁部に向かい、口縁部上端が若干外反する。外反部は細く、内側に稜を有す。口唇部は丸味を帯びる。文様は外面の口縁部に渦巻文と草花文を配し、内面の口縁部と腰部に界線を配す。	17C末~19C前半	B t-30 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は比較的良好。素地は灰白色のやや細かいものである。福建・広東系。
	11	碗	口縁部	12.4	外反口縁。腰部から直線的に外側へ開いて口縁部に向かい、口縁部上端が若干外反する。口唇部は丸味を帯びる。文様は外面だけで口縁部に1本の界線、胴部に鳥文(?)が施文される。	17C末~19C前半	A 7-34 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。気泡が目立つ。呉須は鈍く発色し、黒ずむ部分がある。素地は灰白色の細かいものである。
	12	碗	口縁部	11	直口口縁。腰部からスムーズな曲線を描いて口縁部に至る。口唇部は平坦につくる。文様は内外面の口縁部に2本の界線を廻らし、外面の胴部に菊唐草文を配す。	18C~19C前半	A t-31 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須はやや緑色に発色。内面は淡い。素地は灰白色のやや細かいものである。
	13	碗	底部	5.2	腰部が若干膨らむので、高台は方柱状に高めにつくる。高台の内外面とも中央部付近で若干凹み、凹面をなす。畳付は平坦で、その外側を斜めに面取りしている。文様は外底部の周囲、高台外面、腰部下方および内面の腰部下方に界線を2本廻らし、外面の胴部に菊唐草文を施す。	18C~19C前半	A h-31 第2層	淡青白色の釉が施されるが、畳付及びその外側を釉剥ぎする。呉須は緑色っぽい発色で他は淡い発色。素地は乳白色の細かいもの。
	14	碗	口縁部	10.4	直口口縁。腰部から外側へ直線的に開いて口縁部へ至る。口唇部は斜めに整形している。文様は外面の口縁部に四方櫛文を配す。内面の口縁部に2本の界線、腰部下方にも界線がみられる。	18C~19C	A t-32 第2層	淡青白色の釉を施す。口唇部は釉剥ぎする。呉須の発色は淡い。素地は白濁色のやや細かいものである。型成形。福建系。
	15	碗	口縁部	13.4	直口口縁。腰部から口縁部へ直線的に開くもので、口唇部を舌状につくる。文様は外面の口縁部に幅広の点状の文様を残つつ配す。	18C~19C	A t-34 第1層	青灰白色の釉を施すが、内面は胴部下半は露胎のようである。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色の細かいものである。
	16	碗	口縁部	13.4	直口口縁。腰部から直線的に開きながら口縁部へ向かうものであるが、口縁部の近くで若干外側へ膨らむ。口唇部は舌状に仕上げている。文様は外面のみみられる。	17C末~19C前半	A t-31 第2層	暗灰白色の釉で外面は全面にみられるが、内面は腰部以下は露胎である。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや細かいものである。福建・広東系。
	17	碗	口縁部	12.8	直口口縁。腰部から直線的に外側へ開き口縁部に至る。口唇部は尖る。内面の口縁部に隆帯様に釉の厚くなる部分がみられる。その直下に1本の界線を配す。外面には口縁部と幅広(約6mm)の横線を施し、その下方に曲線文を描いている。	17C末~19C前半	A f/30, 31 第2層	灰白色の釉を口縁部に施釉し、内外面とも胴下半は露胎のようである。呉須は銅分が多いのか緑っぽく発色、黒ずむ部分あり。素地は灰白色の細かいものである。福建・広東系。
	18	碗	口縁部	-	直口口縁。腰部から直線的に外側へ開く。口唇部は舌状を呈す。文様は外面の口唇部約1.5cmの箇所に5mm幅の横線を1本廻らす。	清	A 7-31 第3層	釉が白く濁った感じで釉色は判然としない。呉須は淡く発色するが、釉が濁っているため不明瞭。素地は灰白色のやや粗いもの。胴下半は露胎のようである。
	19	碗	底部	5.2	腰部が膨らまずにスムーズに立ち上がっていく。高台は逆三角形形状に外側へ開くようにつくる。畳付は尖り気味。文様は高台外面に幅広の圈線を廻らし、高台際に松葉文を廻らす。内面は腰部に2本の界線がみられる。	18C~19C	B h-21 第2層	青灰白色の釉を施し、畳付の部分だけ釉剥ぎしている。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。型成形の口ハゲ。福建系。
	20	碗	底部	6.4	腰部が若干膨らむものよう、高台は逆三角形形状に細く高くつくる。畳付はやや斜めに整形している。文様は外面の腰部下方、高台外面に界線を配す。内面は腰部下方に界線を配し、内底面に花文を施すようである。	18C頃	A t-31 第3層	青白色の釉を施し、畳付とその内側の釉を剥ぎ取っている。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。

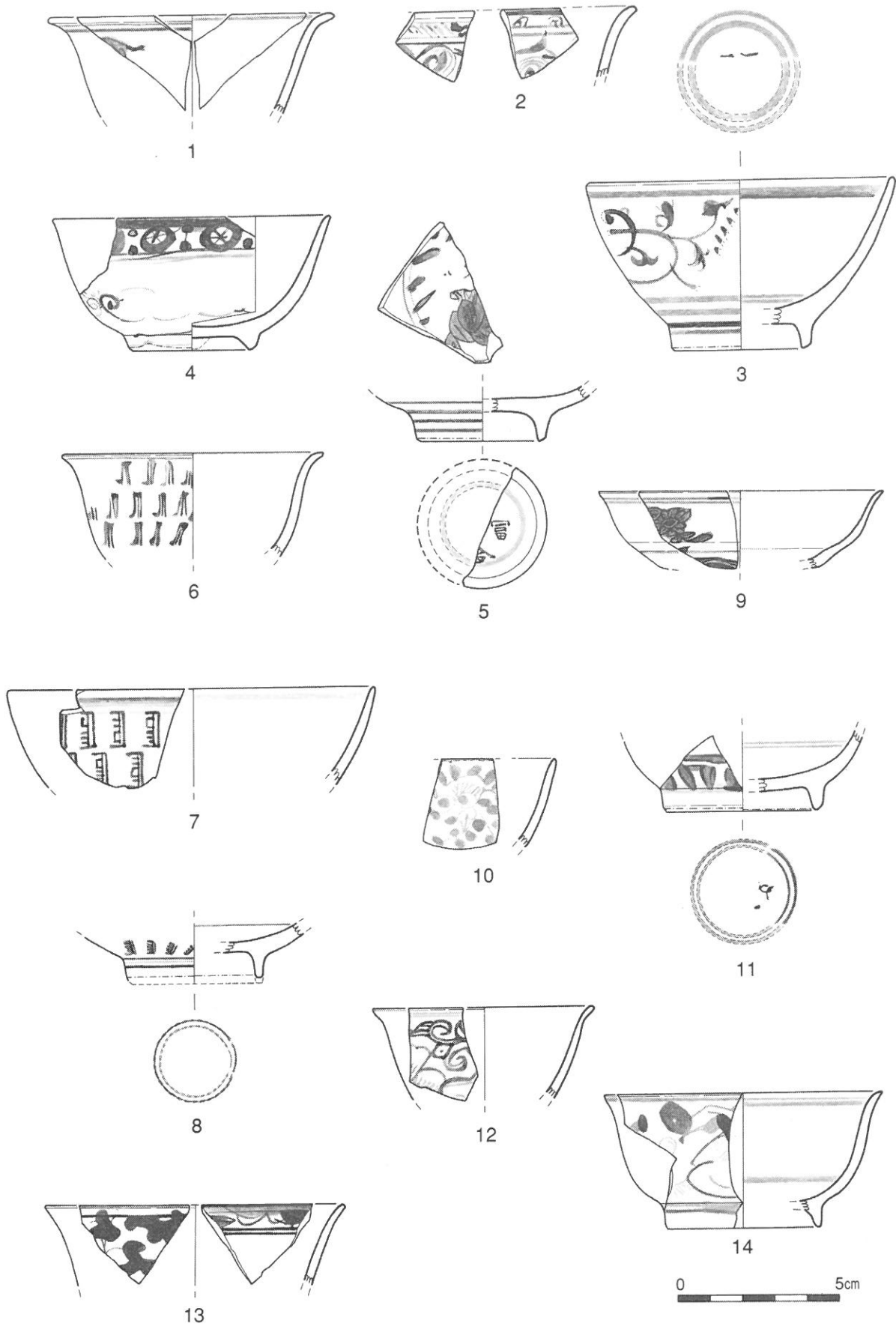


第30図 染付 2 (碗)

第4表C 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	特徴	年代	出土地	備考
第31 図 版 28	1	小碗	口縁部	8.8	外反口縁。腰部から直線的に開きながら口縁部へ向かい、上端で比較的強く外反。口唇部は平坦。文様は内外面の外反部に2本の界線を廻らす。外面の口縁部に部分的に施文する。	15C	A i-32 第3層	青灰白色の釉が全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は白濁色の細かいものである。
	2	小碗	口縁部	-	外反口縁。胴部から直線的に開きながら口縁部に至り、上端部が外反する。口唇部は平坦に仕上げる。文様は内外面の胴部に草花文。外面の口縁部に波濤文帯。内面の口縁部に雷文帯くずれを配す。	15C~ 16C	A i-33 溝状遺構焼土混じり	淡青白色の釉。呉須の発色は淡い。素地は白濁色の細かいものである。
	3	小碗	口~ 底部	9.6 5.4	直口口縁。腰部は膨らまずスムーズに口縁に向かうもので、やや内湾気味になる。口唇部は丸味を帯びる。高台は方柱状につくり、畳付外側に斜めに面取りする。畳付は平坦にする。文様は外面の口縁部に1本、腰部及び高台に2本の界線、胴部に花唐草文を配す。内面は口縁部に1本、見込みに2本の圏線を廻らし、内底面にも施文する。	16C前 半~16 C中葉	A f,-31 第5層 焼土混 じり	淡青白色の釉を総釉のあと畳付及びその外面を釉剥ぎしている。呉須は淡く発色。素地は乳白色の細かいものである。
	4	小碗	口~ 底部	8.2 4.2	直口口縁。腰部からゆるやかにカーブし、口縁部へ直線的に立ち上がる。口唇部は丸味を持って仕上げる。高台は低く逆台形状に仕上げる。畳付は平坦にする。文様は外面の口縁部に四方禪文様のものを配す。	16C後 半~17 C前半	A 7-31 第3層	青灰白色の釉を総釉のあと口唇部と畳付部を釉剥ぎする。高台の内外に砂粒の溶着多い。呉須の発色淡く、黒ずむ部分あり。素地は乳白色の細かいものである。
	5	小碗	底部	3.6	高台はやや内傾する感じで、割と細くつくられる。畳付は斜めに仕上げる。文様は外面の高台脇、高台際、高台外面に圏線を廻らし、内底面に樹下人物文を配す。	16C後 半	A h-31 第3層 黄褐色 混じり	淡青白色の釉を施したあと、畳付を釉剥ぎする。呉須の発色は淡い。素地は白濁色の細かなもの。外底面に字を配すが「富」だけが確認できる。
	6	小碗	口縁部	8.1	外反口縁。腰部が丸味を帯び、そこからほぼ直方向に立ち上がり、口縁部上端で外反するもの。口唇部は平坦に仕上げる。文様は外面の口縁部に1本の界線を廻らし、胴部に梵字文を配す。	16C~ 17C	A h-32 第2層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は白濁色の細かいものである。
	7	小碗	口縁部	11.4	直口口縁。胴部からゆるやかな弧を描いてやや直方向に口縁部へ至る。口唇部は舌状を呈す。文様は内外の口縁部に1本の界線を廻らし、外面の胴部に梵字文を配す。	16C~ 17C前半	A i-34 第2層	青灰色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや鈍い。素地は乳白色の細かいものである。
	8	小碗	底部	4.4	高台際から若干丸味をもって腰部へ移行するものである。高台は細く、方柱状につくる。畳付は不明。文様は高台外面、外底面に2本の界線を廻らす。腰部に梵字文を配す。内面の腰部にも界線がみられる。	16C~ 17C前半	A h-32 第2層	淡青白色の釉を施すが畳付部は釉剥ぎしている。呉須の発色は鈍い。素地は乳白色の細かいものである。
	9	小碗	口縁部	8.8	外反口縁。薄手のもので、腰部下方に段を設ける。段の部分からゆるやかにカーブし、外側へ開き気味に口縁部へ向かい、口縁部上端で若干外反する。口唇部は平坦にする。段の下方では厚くなる。文様は外面にだけみられ、口縁部に2本、段の部分に1本の界線を廻らす。胴部に草花文を配す。	清朝	A x-33 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は良好である。素地は乳白色の細かいものである。景德鎮系。
	10	小碗	口縁部	-	直口口縁。腰部からゆるやかにカーブして口縁部に至る。口唇部は尖る。文様は外面にだけみられる。豹皮状の文様に鳥を描いているようである。	17C~ 18C	B 7-28 茶褐色	淡灰白色の釉を施すが、口唇部は釉剥ぎしている。呉須の発色はやや淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	11	小碗	底部	4.8	腰部がやや丸味を帯びる。高台は逆三角形につくり、畳付は斜めに仕上げる。文様は外面の高台脇に1本の界線、高台際に蓮弁文のくずれたもの。内面の腰部に2本の界線、外底面に2本の界線と文字を配す。	18C	B h-29 明茶	青灰色の釉を総釉のあと、畳付部を釉剥ぎしている。呉須の発色は鈍い。素地は白濁色の細かいものである。
	12	小碗 あるいは 小杯	口縁部	7	外反口縁。腰部から口縁部へほぼ直線的に至り、上端部をゆるやかに外反させる。口唇部は尖る。文様は外面の口縁部に2本の界線、胴部に2本線による草花文を配す。	18C~ 19C	A i-32 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。
	13	小碗	口縁部	9.4	外反口縁。胴部から口縁部の方へ大きく外反するもので、口唇部は平坦に仕上げている。文様は外面の口縁部に1本の界線を廻らし、胴部には草花文を配す。内面は口縁部に四方禪文様の文様を配す。上方の界線は口唇部までおよんでいる。	18C~ 19C	A i-34 焼土層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。細かな気泡が密にみられる。呉須の発色は比較的良好である。素地は乳白色の細かいものである。
	14	小碗	口~ 底部	8.6 4.8 4.2	外反口縁。腰部はそれほど膨らまずに口縁部へ向かい、上端部で若干外反する。口唇部は尖り気味。文様は内面の口縁部と腰部、外面の口縁部と高台に界線を廻らす。外面の胴部には唐草文を配す。	19C	B 7-30 第2層	青灰白色の釉を総釉のあと口唇部の釉を剥ぐ。呉須はやや緑味を帯びて発色。素地は乳白色の細かいものである。福建系。

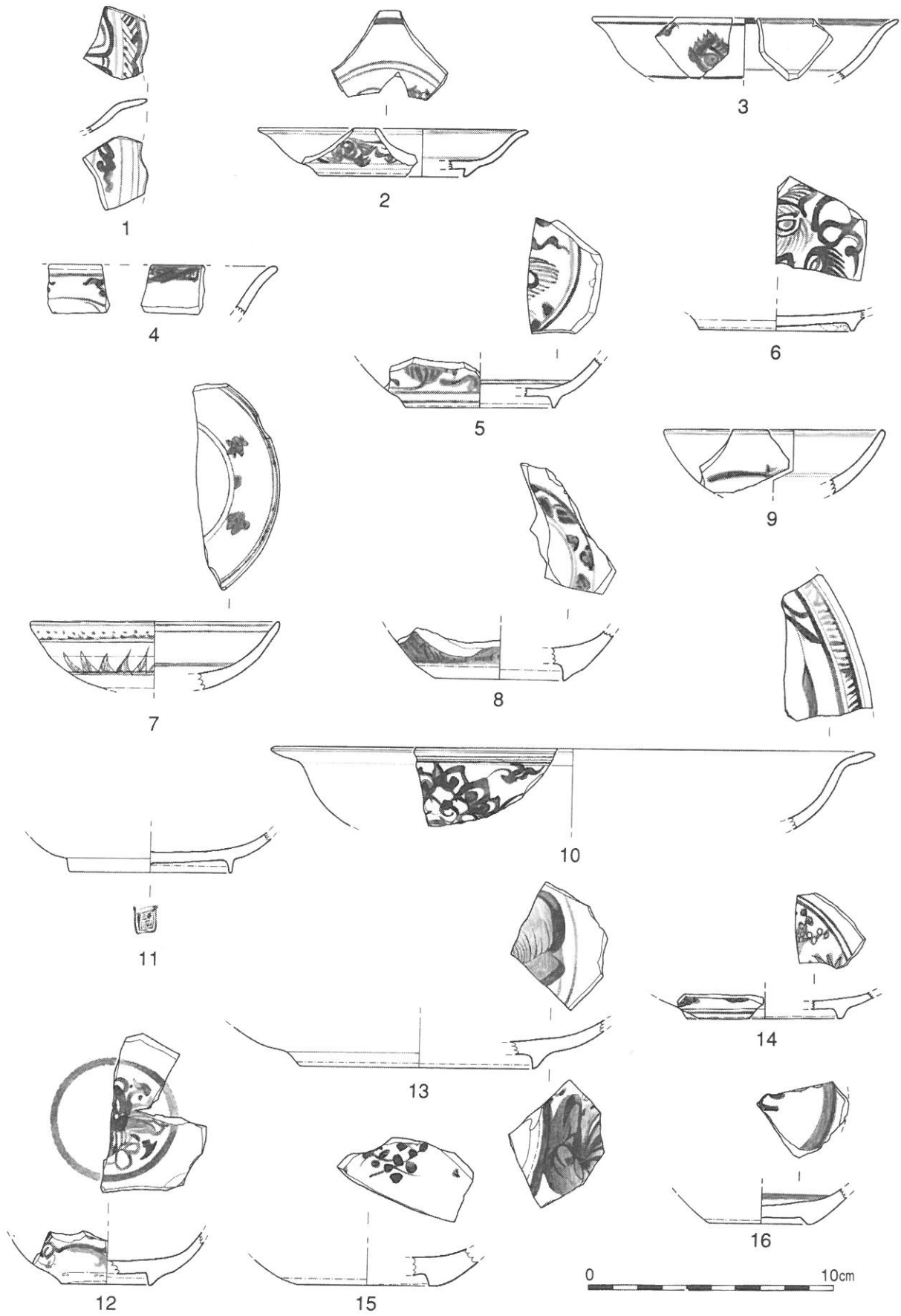


第31图 染付 3 (小碗)

第4表d 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	特徴	年代	出土地	備考
第 32 図 版	1	皿	口 縁部	— — —	口折れの稜花皿。口折れ部の稜は不明瞭。内面胴部は若干の凹凸面を形成。その凸面と口唇部の挟り部が一致するようである。口唇部は平坦にする。文様は外面の口折れ部に界線、胴部に唐草文を配す。内面は口折れ部に口唇の形状に沿うように四方禪文、胴部の凹面に蓮弁文を配し、凸面に2重線を配しつなぐ。	14C後 ～15C 前	表採	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや淡く、黒ずむ箇所もみられる。素地は灰白色のやや細かいものである。
	2	皿	口 ～ 底部	11 6 1.9	外反口縁。腰部が急なカーブを描き、直方向に口縁部へ向い、口縁部上端が若干外反する。高台は外側の面を内側へかなり斜度をもってつくり、内側の面はほぼ直に削る。畳付は狭く、平坦に仕上げる。文様は外面の口縁部、腰部、高台際に界線を廻らし、胴部に獅子文を配す。内面は口縁部に1本、内底面の縁部に2本の界線を施し、内底面にも施文する。	15C後 半～16 C中葉	A h-32	青灰白色の釉を施し、畳付およびその外側、外底面の縁部までを釉剥ぎする。呉須の発色は淡く、黒ずむ部分あり。素地は淡灰白色のやや細かなものである。
	3	皿	口 縁部	11.4 — —	外反口縁。腰部が張らずにゆるやかなカーブで口縁部に向かい、そのまますムーズに外反する。口唇部は丸味を帯びる。文様は内面の口縁部と腰部下方に界線を配し、外面の口縁部に界線、胴部に宝相華唐草文を施す。	15C後 半～16 C中葉	A 7-32 第3層	やや緑味を帯びた淡灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡く、緑味を帯びる。素地は白濁色の細かなものである。
	4	皿	口 縁部	— — —	外反口縁。口縁部上端がゆるやかに外反するもので、口唇部は尖る。外反部の外面をやや深く削り、そのため最も薄い部分となっている。文様は外面に界線と唐草文、内面の口縁部に四方禪文がみられる。	15C後 半～16 C中葉	A t-32 第3層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は淡灰白色のやや細かなものである。
	5	皿	底 部	6.1 — —	腰部がほとんど膨らまずに立ち上がっていくもので、高台は逆三角形状につくる。畳付は狭く、平坦である。文様は外面の胴部に宝相華唐草文、高台外面に2本の界線。内面の腰部下方に2本の界線。内底面に玉取獅子文を配す。	15C後 半～16 C中葉	A x-32 第3層 下部	やや緑味のある淡青白色の釉を施し、畳付およびその内側を釉剥ぎする。呉須の発色は鈍い。素地は淡灰白色の細かなものである。
	6	皿	底 部	6.3 — —	高台は畳付の方へ若干細くなるようにつくる。畳付は平坦に仕上げる。文様は高台外面に界線を配すが、その部分の釉が厚く不明瞭。内底面は玉取獅子文である。	15C後 半～16 C中葉	A x-33 第3層 下部砂 利中	青灰白色の釉を施し、畳付およびその周辺を釉剥ぎする。高台内側周辺には砂粒の溶着部も見受けられる。呉須の発色はやや淡く、黒ずむ箇所もみられる。素地は淡灰白色の細かなものである。
	7	皿	口 縁部	10.4 — —	碁筈底。ゆるやかな弧を描いて口縁部へ至る。直口口縁で口唇部は丸く仕上げている。文様は外面の口縁部に波濤文帯、胴部に蕉葉文を配す。内面は口縁部に波濤文くずれ、胴部に人形？を配し、その下方に2本の界線を廻らす。	15C末 ～16C 中葉	A t-31 第3層 下焼土 混じり	青灰白色の釉を施し、外面の腰部下方に施釉の切れ目がみられる。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	8	皿	底 部	3.8 — —	碁筈底。文様は外面に渦状唐草文を施す。内底面の周辺には間をあけて界線を廻らし、その中に雲状の小文様を互い違いに施している。内底面側の界線は2本。	15C末 ～16C 中葉	A t-31 第3層	青灰白色の釉を施し、腰部下方から底部内側半分ほどを釉剥ぎする。呉須の発色は鈍い。素地は乳白色の細かいものである。
	9	皿	口 縁部	8.2 — —	直口口縁。腰部からゆるやかなカーブを描いて口縁部に至る。口唇部は平坦に仕上げる。文様は内外面の口縁部に界線を1本廻らし、内面の腰部下方には2本の界線を廻らす。外面胴部には折れ松葉様の文様を配す。	16C前 半～16 C中葉	A t-31 第3層 下	淡灰白色の釉で、細かな気泡が目立つ。破片の全面に施釉されている。呉須の発色はやや緑味を帯びる。素地は灰白色のやや細かなものである。
	10	皿	口 縁部	— — —	折れ縁の口縁。腰部はそれほど膨らまず、やや直方向に立ち上がり、口縁部を折り曲げるように外反させる。口唇部は舌状に仕上げている。文様は内面の折れ縁部に四方禪文と2本の界線、胴部に唐草文を配す。外面には折れ縁部に3本の界線、胴部に牡丹唐草文を施す。	16C	A 7-33 t-31	青灰白色の釉を総釉のあと口唇部を釉剥ぎする。口唇部にはさび釉を施す。いわゆる口紅タイプ。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。景德鎮系。
	11	皿	底 部	6.6 — —	高台際からスムーズなカーブで立ち上がる。高台は細く逆三角形状につくり、畳付は平坦にする。文様は見受けられない。外底面のほぼ中央に二重線で四角に縁取りされた中に「福」字を書いている。	16C	第3層 下部 焼土混 じり 溝状遺 構	淡灰白色の釉を施しており、畳付と高台内側半分を釉剥ぎする。外底面の呉須はやや緑がかって発色。素地は乳白色のやや細かなものである。
	12	小 皿 ？	底 部	3.6 — —	高台際からゆるやかな弧を描いて胴部へ向う。高台は畳付の方へ細くなる感じであるが、つくりは雑である。畳付は平坦で、その外側を斜めに面取りする。文様は外面の胴部に唐草文、内底面に1本の圈線とその中に十字花文を配す。	16C前 半～16 C中葉	A x-32 第3層	釉は青灰白色でやや濁った感じのものである。畳付およびその周辺を釉剥ぎする。内外面に細かい貫入あり。呉須の発色は鈍く、くすんだ感じである。素地は黄灰白色のやや粗いものである。
	13	皿	底 部	— — —	高台際からゆるやかな弧を描き、やや外側へ開き気味に立ち上がっていく。高台は逆三角形状につくり、やや内側へ傾く。文様は内底面、外面の胴部に花文を配し、外面の高台際に1本の界線、内底面の周縁に2本の界線を廻らすようである。	16C前 半～16 C中葉	A t-31 第3層 下焼土 混じり	やや緑味を帯びた青灰白色の釉で、畳付の周辺を釉剥ぎする。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	14	皿	底 部	6.4 — —	高台を逆三角形状に畳付の方へ細くつくる。内側の面はほぼ垂直にし、外側の面は斜めになっている。そのため高台は内側へ傾斜する感じになっている。畳付は平坦にし、両側を若干斜めに面取りする。文様は外面の胴部に草花文、高台外面に2本の界線を配し、内底面に2本の界線と梅竹文が認められる。外底面にも界線の一部がみられる。	16C後 半～17 C前半	A A-31 第3層 黄褐色 混じり	淡青白色の釉を施し、畳付およびその両側を釉剥ぎしている。呉須の発色はやや淡い。素地は灰白色の細かなものである。景德鎮系。
	15	皿	底 部	5.4 — —	碁筈底。文様は内底面に梅文のような文様がみられる。	16C	A i-31 第4層	青灰白色の釉を施す。腰部下方から畳付まで釉剥ぎする。呉須の発色は鈍く、丸点の部分は黒ずんでいる。素地は灰白色のやや細かなものである。
	16	皿	底 部	4.2 — —	碁筈底。文様は内底面にだけみられ、幅広の界線とその中に施文している。破片のため文様は不明。	16～17 前	A t-32 第3層	青灰白色の釉を施し、腰部下方から畳付、外底面まで露胎する。呉須の発色は鈍い。素地は黄灰白色のやや細かなものである。

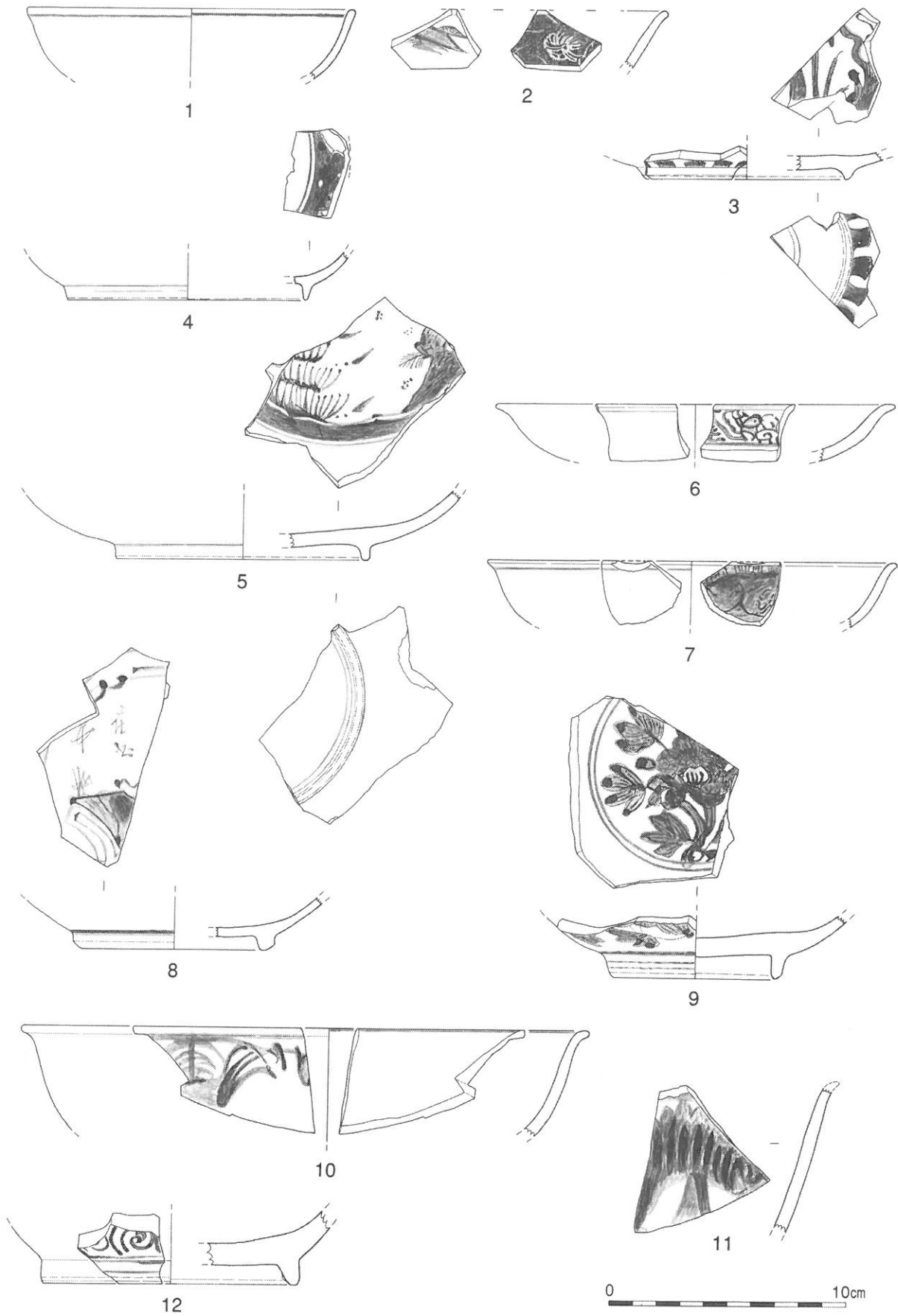


第32図 染付 4 (Ⅲ)

第4表 e 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	特徴	年代	出土地	備考
第33号 * 図 版	1	皿	口縁部	13.8 — —	直口口縁。腰部がほとんど張らずにやや直方向に口縁部へ至る。口唇部は丸味を帯びる。文様は内外面の口縁部に1本の界線がみられる。	17~18 C	A 第3層	淡青白色の釉で若干濁った感じがする。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
	2	皿	口縁部	— — —	直口口縁。胴部から口縁部へ直線的に開くもので、口縁部を若干肥厚させる。口唇部は丸くなる。文様は内面にダミ技法による花文を配し、外面には山水文?が描かれる。	17C~ 18C	A A-31 第2層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	3	皿	底部	8.4 — —	高台を低い三角形状につくる。畳付は尖る。文様は外面高台際に蓮弁文のくずれたものを配し、外底面には2本の圏線がみられる。内底面は草花文が施されるようである。	17C後 半~18 C	B I-30 第2層	淡青白色の釉を施すが、畳付は釉剥ぎしている。呉須の発色は比較的良好である。素地は灰白色の細かなものである。景德鎮系。
	4	皿	底部	10.2 — —	高台際からゆるやかな弧を描いて直方向に立ち上がるもので、高台は逆三角形状につくる。畳付の両側を斜めに面取りしており、畳付は尖る。文様は高台外面に2本の界線、内底面の周縁に2本の界線、胴部にも施文、胴部のもはダミ。	17C後 半~18 C	A I-32 第3層	青灰白色の釉を施し、内外面に細かな貫入あり。畳付の周囲は釉剥ぎする。呉須の発色はわりと良好。素地は灰白色の細かなものである。
	5	皿	底部	10.6 — —	高台際からゆるやかなカーブを描き、外側へ開きながら立ち上がる。高台は方柱状に低くつくり、畳付の両側を斜めに面取りする。畳付は平坦。文様は内底面に樹下人物文を配し、外底面の縁部と高台際に界線を配す。	17C~ 18C	B I-29	青灰白色の釉を施し、畳付およびその外側を釉剥ぎする。呉須の発色は比較的良好。素地は灰白色のやや粗いものである。
	6	皿	口縁部	17.2 — —	外反口縁。腰部からゆるやかなカーブで口縁部に至り、口縁部上端を外反させる。口唇部は尖る。文様は内外の口縁部に1本の界線を施し、内面の胴部の上下に界線、その間に渦状唐草文を施す。さらに下方にも界線あり。	18C頃	A I-33 第2層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
	7	皿	口縁部	17.3 — —	外反口縁。腰部からゆるやかなカーブを描いて口縁部に至り、上端部が若干外反する。口唇部は丸味を帯びる。文様は内外面の口縁部に1本の界線を廻らし、内面の胴部にダミ技法による花文を配す。	18C頃	A I-31 第3層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや淡く、黒ずむ部分もある。素地は乳白色のやや細かなものである。
	8	皿	底部	7.7 — —	高台際から直線的に開くように立ち上がっていく。高台は低く方柱状につくり、畳付の外面を大きく斜めに面取りする。畳付は平坦。文様は外面高台際に1本の界線が廻り、内底面には「志在書中」?を配す。	18C頃	A I-32 第2層	淡青白色の釉が施され、畳付とその外面の斜位に面取りした部分は釉剥ぎしている。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
	9	鉢	底部	7 — —	腰部があまり膨らまずに立ち上がっていくものである。高台はやや内側へ傾く感じで方柱状につくり、畳付の両側を斜めに面取りしている。特に外側を大きく面取りする。畳付は狭く平坦。文様は内底面に2本の界線とその中に花文を描き、外面の胴部に草花文、高台際及び高台外面に界線を配す。	15~16 C	表採	青灰白色の釉を施し、畳付およびその両側を釉剥ぎする。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや細かなものである。
	10	鉢	口縁部	22 — —	外反口縁。腰部がゆるやかな丸味をなして口縁部に向い、口縁部上端を外反させる。口唇部は平坦に仕上げる。文様は内外面の口縁部に1本の界線を廻らし、外面胴部に松竹文を配す。	17C~ 18C	A I-32 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
	11	鉢	胴部	— — —	口縁部上端が欠失しているが、状況からすると外反口縁の資料か。器形的には腰部から直線的に外側へ開いて口縁に至るものようである。文様は外面にだけみられ、口縁部に界線、胴部に大きな花文風のものを描く。	17C~ 18C	A A30,31 第2層	緑色味を帯びた青灰白色の釉で、破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍く、やや緑味を帯びる。素地は乳白色のやや細かなものである。
	12	袋物	底部	11 — —	高台際から腰部へスムーズな曲線を描いて向かうものである。高台は逆三角形状に畳付の方へ細くなる感じでつくり、高台内側の傾斜が急で全体に外側へ開くような印象を受ける。畳付は平坦で、両側を若干斜めに面取りしている。文様は高台際および高台外面に界線を廻らし、腰部に渦文を連続的に施す。	15~16 C	I/32,33 トコフ	淡青白色の釉で、畳付およびその両側を釉剥ぎする。呉須の発色はやや鈍い。素地は灰白色の細かなもの。高台内側および外底面に著しく砂粒が溶着する部分あり。



第33図 染付 5 (皿・鉢・袋物)

第4表 f 染付観察一覧

単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	特徴	年代	出土地	備考
第 34 図 版 31	1	小杯	口縁部	9.8 — —	短筒型腰折れのもので、外体部の中位に隆園線が廻る。口唇部は平坦。文様は外面隆園線の上方に如意頭雲ぎ文、下方に草花文。内面の口縁部に1本の界線を配す。	15C～ 16C前半	A ネ-31 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡く、黒ずむ部分あり。素地は乳白色の細かいものである。景德鎮系。
	2	小杯	口縁部	9.8 — —	短筒型腰折れか？。外体部の上位に隆園線が廻る。口唇部は平坦。文様は外面の口縁部に1本の園線。外面隆園線の下方に部分的に施文。	15C後 半～16 C後半	A ニ-32 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は白濁色の細かいものである。景德鎮系。
	3	小杯	底部	— — —	短筒型腰折れの底部。1とは逆に隆園線の下方に如意頭雲ぎ文を配す。高台際に1本の園線。内底面は2本の園線と梅の図が認められる。	15C～ 16C前半	A #32.33 第2b層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。高台は欠損しており不明。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。景德鎮系。
	4	小杯	口縁部	4.6 — —	外反口縁。腰部から直線的に開くように口縁部へ向かい、口縁部をゆるやかに外反させる。口唇部は尖る。文様は外面にだけみられ、口縁部に界線を1本廻らし、胴部に山水文？がみられる。	16C～ 17C前半	A ヒ-31 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや鈍い。素地は乳白色のやや細かなものである。
	5	小杯	口縁部	7.9 — —	外反口縁。腰部の方からはほぼ直方向に立ち上がり、口縁部上端を折り曲げるように外反させる。口唇部は尖る。文様は内面の口縁部と腰部下方に界線を配し、外面の口縁部、腰部の下方にも界線がみられ、胴部には草文を配す。	16C頃	B ハ-29 明茶	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや細かなものである。
	6	小杯	底部	— 2.3 —	高台は細く、内側へすぼまるようにつくる。畳付は平坦に仕上げる。文様は外面の高台際およびその上方に1本の界線が廻り、胴部に草花文の一部がみられる。内底面の周縁に1本の界線を廻らし、内底面には「壽」字を配す。外底面には「福」字を配している。	16C～ 17C前半	A マ-34 第3層	淡青白色の釉を施すが、畳付およびその周囲を釉剥ぎする。内底面には釉が器面からはじかれた感じの所がみられる。呉須の発色は鈍い。素地は淡灰白色の細かなものである。
	7	小杯	口縁部	8.2 — —	直口口縁。腰部からスムーズに口縁部に至る。口唇部は尖る。文様は外面にだけみられ、口縁部に波状文と界線、腰部の下方に界線と蓮弁文くずれが認められる。	17C～ 18C	A #31.33 第4層	青灰白色の釉が破片の全面にみられるが、焼成不良でやや光沢が失われている。呉須の発色は黒みを帯び鈍い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	8	小杯	口縁部	2.7 — —	外反口縁。形成形か。腰部から直方向に立ち上がり、口縁部上端を若干外反させる。文様は口唇下約2mmから胴部にかけてみられ、豹皮様の文様に草文がみられる。	17C～ 18C	表探	淡青白色の釉を施すが、口唇部は無釉である。呉須の発色は比較的良好。素地は乳白色の細かなものである。
	9	小杯	底部	— 1.6 —	形成形。高台際からわずかに膨らみ、直方向に立ち上がっていく。高台は逆三角形形状につくり、畳付を平坦にする。文様は外面にだけみられ、高台際に界線を1本廻らし、胴部に豹皮様の文様に草文を配している。畳付部に焼成の際の溶着痕がみられる部分あり。	17C～ 18C	B ニ-28 茶褐色	淡青白色の釉を畳付を除き総釉。呉須の発色は比較的良好。素地は乳白色の細かなものである。8と同一個体か？
	10	小碗	底部	— 2.4 —	腰部から直方向に立ち上がっていくものである。高台は逆三角形形状にやや外側へ開き気味につくる。畳付は斜めにしている。文様は外面の胴部に唐草文を配し、その下方から高台外面に3本の界線を廻らす。外底面には「月」字を配す。	18C～ 19C	A マ-34 第3層	淡灰白色の釉を総釉のあと畳付を釉剥ぎする。呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなものである。
	11	高足杯	胴部	— — —	腰部がやや急カーブをなし、直方向に立ち上がっていく。文様は内外面の胴部に2～3本の界線がみられ、内底面および脚部の際にも施文するが不明である。	16Cか	A ト-33 第3層	青灰白色の釉が全面にみられる。呉須の発色は鈍い。素地は灰白色のやや細かなものである。
	12	高足杯	脚部	— 3.3 —	上方に隆園線を1本廻らし、脚部下方から底面部へラップ状に開くものである。底面際を斜位に成形し、底面部を角度を変えて斜位に成形する。底面側からみると3重の稜がみられ、中央の稜だけが地につく。中央部は径8mmの孔があげられている。脚部の高さは約4cmである。文様は脚部の際、隆園線の直下、脚部下方に幅広の界線を1本づつ廻らす。	16C～ 17C	B E-29 灰色	淡青白色の釉を脚台部に施す。底面部およびその際、中空部は無釉。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。
	13	高足杯	脚部	— 3.2 —	脚部下方の資料で、形状やつくりなど12の資料とほぼ同じである。底面部に焼成の際の溶着痕がみられる部分あり。文様は中央部と下方に幅広の界線が1本づつ認められる。	16C～ 17C	A ノ-31 トレンフ	青灰白色の釉を脚台部に施し、底面部およびその際、中空部は無釉である。釉は白く濁った感じになっている。呉須の発色は判然としない。素地は灰白色のやや粗いものである。
	14	瓶	口縁部	— 7.2 —	外反口縁。口縁部下方からゆるやかに大きく外反する。口唇部は舌状を呈す。文様は内面の口縁部に2本の界線、外面の口縁部に1本の界線を配す。	明	A ヒ-31 第3層 下焼土 混じり	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや淡い。素地は淡灰白色のやや細かなものである。
	15	瓶	口縁部	— 1.6 —	直口口縁。筒状を呈すもので、口唇部は尖る。文様は外面に渦巻状の唐草文を配す。	16C～ 17C	B ハ-29 茶褐色	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須は緑味を帯びて発色。素地は灰白色のやや細かなものである。
	16	瓶	胴部	— — —	肩部の破片か。文様は外面にのみみられる。上方に界線、胴部に牡丹唐草文？を配している。	17C～ 18C	A ハ-34 第3層	淡青白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなものである。
	17	瓶類	口縁部	— 1.9 —	直口口縁。筒状を呈すもので、口唇部は舌状を呈す。文様は外面の口縁部に2本の界線を廻らす。	清朝か	A ニ-31 第3層	青灰白色の釉を施すが、口唇部を釉剥ぎする。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
	18	瓶類	胴部	— — —	肩部の破片か。内面にクロク痕が認められる。文様は外面に草花文？がみられる。	清朝か	A 7-32 第3層	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の発色は鈍く、黒ずむ部分あり。素地は淡灰白色の細かなものである。
	19	瓶類	底部	— 5.8 —	高台は逆三角形形状にやや内側へすぼむ感じにつくり、畳付の両側を斜位に面取りする。畳付は平坦。文様は高台際に1本の界線がみられるだけである。	清朝か	A ニ-32 第3層	青灰白色の釉を施すが、全体的に濁った感じである。畳付およびその周囲を釉剥ぎする。呉須の発色はやや淡い。素地は淡灰白色の細かなものである。
	20	壺の蓋	鏝部	— 14.0 —	なだらかな傾斜の甲から水平方向へ鏝が延びるもので、かえしの部分はやや内傾気味である。かえし部の内面は凹面になる感じで斜位に削られ、甲内面との境に稜が認められる。かえし部の底面は丸味を帯びる。文様は鏝部の表面に雷文帯を描き、甲部の表面に草花文を配す。	16C頃	A ノ/35.36 東壁	淡青白色の釉を鏝から甲および甲内面に施し、鏝下面からかえし部の外面は露胎。呉須の発色は淡い。素地は淡灰白色の細かなものである。
	21	壺の蓋？	つまみ部	— — —	そばん玉状の宝珠で、最も膨らむ部分は丸みをもってつくられている。高さは約1cmである。内面には宝珠を接合した際のへこみの部分が見受けられる。文様は外面にだけ認められる。宝珠の部分にはうず巻き文が施され、甲の部分には宝珠から放射状の線がみられる。	16C頃	A ニ-33 第3層	淡青白色の釉が表面だけにみられ、裏面は露胎となっている。宝珠部の釉がやや濁る。呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなものである。



第34图 染付 6 (小杯·小碗·高足杯·瓶·盖)

第4節 褐釉陶器

200点近く得られているものの、ほとんど小破片の資料で全形の窺えるようなものは見受けられない。時期的には15世紀前後のものが主流のようで、器種的にはほとんどが壺形に属するものようである。その他に量的には僅少であるが水瓶、茶入壺、瓶類、すり鉢などの器種が見受けられ、比較的多くの器種が確認できた。壺形の大きさには大小がみられ、小さいものは口縁部が玉縁状に肥厚するものが多く、大きいものは口縁部が方形状を呈すものが主体のようである。特徴的なものを第35図・第36図に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 壺

先述したとおり大きさに大小があり、小型のものを第35図1～7、大型のものを第36図3～7に示した。破片のものがほとんどで、全形の窺えるものは見受けられない。

第35図1～7に示したものは、推算口径が10cm前後を測るもので小型壺になると考えられるものである。1は素地や器面調整などから同一個体と考えられる口縁部と胴部の資料から、全形を推定復元してみた。それからすると口径が約9cm、高さが約17cm、底径が約10cmと想定され、胴部中央のやや上方に最大径がある。胴部の最大径が高さよりも若干大きく、寸づまり気味の感じを受ける。口縁部は玉縁状の肥厚を呈し、頸部は「8」の字状に若干下方へ開く。そこからゆるやかに膨らみ、そのままスムーズな感じで底部へ移行する。肩部の上方には4ヶ所にブリッジ状の外耳が付される。薄手のつくりで、釉は現資料でいえば外面から内面の口縁部に施釉され、内面の頸部以下は露胎となっている。内面の肩部上方には指頭痕もみられる。素地は黒色や白色を呈す鉱物の微砂粒を密に含む細かなものである。

2～5は口縁部の資料であるが、破片のため肩部以下の状況は不明。口縁部の状況はそれぞれ若干異なる。2は口縁部上端を極端に折り曲げ肥厚口縁のようにみせるもので、その直下から胴部へ移行していく。3は口縁部上端が外側へ張りだすように肥厚し、その直下に僅かに頸部をつくり胴部に移行する。この2点は口縁部がすぼまるという似たような状況にあり、推算の口径も2が約10cm、3が約9cmと似通っている。4は2・3と違い外反口縁の資料で、口縁部上端の肥厚は微弱である。推算の口径は約12cmと前二者よりやや大きい。3は口唇部を平坦にするが、2・4は丸味を帯びる。いずれも黒味の比較的強い釉を施すが、4は口縁部の周囲に釉の剥がれている部分が目立つ。外面から内面の口縁部に施釉される。素地は灰黒色の細かなものである。

5は直方向に立ち上がる頸部（7mm前後）が認められるもので、口縁部上端は断面が略台形状の肥厚を示す。口唇部は平坦にし、外側はわりと角張るが内側は丸味を持って仕上げている。推算口径は約13cmと最も大きい。釉は黒味の強いもので、2～4と同様な施釉範囲であるが、外面の頸部の釉を剥いでいる。素地は灰黒色の細かなものである。

6は底部の資料である。推算底径が約10cmであり、ここに示すようなグループの底部になるかと考えられる。底面からの立ち上がり部の稜は比較的明瞭で、全面に施釉されている。素地は暗灰色を呈す部分と暗茶褐色を呈す部分がみられる。

7は1～6のグループよりは大きめになるかと考えられる肩部の資料である。10mm近い厚みがあり、素地は灰白色の精緻なものである。縦横の沈線で区画された中に草花文などを配すようで、本資料では葉の部分が確認できる。暗緑色の釉を表裏面に施釉するが、裏面は薄く施している。

第36図3～7に示したものは大型の壺になると考えられるもので、3・4は口縁部の、5は胴下半部の、6・7は底部の資料である。3・4は似通った器形・口径・施釉状況・素地の具合を示すものである。口縁部上端が概ね逆「コ」の字状になり、口唇部が約2cmと幅広く斜めに整形されている。内面は下端部

が内側へ突き出し、口縁部内面は凹面を形成する。その直下から「八」の字状に開くように2cm前後の頸部があり、そこから外側へ大きく張りだすように肩部へ移行する。頸部外面には3が2本、4が1本の稜が認められる。推算口径は約19cmを測る。表裏面に施釉されており、3は暗緑褐色、4は暗黄褐色を呈す。両者とも表裏面に細かく密な貫入がみられる。4は肩部に大粒の胎土目の熔着が3箇所認められる。素地は暗灰色のやや粗いもので、大きめの鉱物粒が散見される。

5は胴下半部の資料で、上端部の推算径が約32cm、下端部の推算径が約22cmを測る。表裏面には凹線様の調整痕がみられ、暗黄褐色の釉が表裏面に施釉されている。素地は暗茶褐色のやや粗いもので、粒の大きめな白色の鉱物が散見される。

7は底部の資料で、推算底径は約12cmを測る。底面は上げ底状になり、底面からの立ち上がり部は若干くびれた感じになる。表裏面の底面近くまで凹線様の調整痕がみられる。暗黄褐色の釉が表裏面に施釉されるが、底面部は無釉である。底面部には胎土目の熔着も認められる。素地は暗灰色のやや粗いもので、粒の大きめな白色の鉱物が散見される。

5・7は3・4のグループに属す胴部および底部資料かと考えられる。

6は上記4点とは異なるグループの底部資料である。底面からの立ち上がり部が若干くびれ、それから外側へ開くように胴部へ向かう。底面は縁部の約1cmを平坦にし、そこから中央部の方へ上げ底状にしている。推算底径は約18cmを測る。現資料に施釉される部分は見受けられない。表面は赤褐色を呈し、裏面は灰褐色を呈す。素地はやや細かく、砂粒を密に含む。

b. 水 甕

第36図1・2に示すものである。口縁部の資料で、2点とも推算口径が約28cmを測るものである。1は口縁部が横長の長方形に肥厚するもので、口唇部が2.5cm前後と幅広くなっている。口唇部は水平方向になり両端に1本づつ凹線を廻らす。また、肥厚部外面はほぼ中央にやや深めの凹線を廻らし、下端部を若干間隔を開けて上方に押し上げ、波打つ感じにしている。その直下の頸部には肥厚部の接着痕が比較的明瞭に残る。内面はやや内彎気味になっている。黒味の強い釉を薄く塗付するように施している。素地は灰黒色のやや細かなもので、白色の微砂粒が密に含まれる。

2は口縁部がT字状に肥厚するもので、口唇部は斜めに平坦にしている。口唇部の両側はやや丸く仕上げ、内面は内彎気味になっている。内面は滑らかで比較的丁寧な仕上げとなっているが、外面は肥厚部直下にラフな削り痕がみられるなど仕上げはやや雑な感じを受ける。釉は黒味の強い暗茶褐色のもので、内外面全釉の後、口唇部を軽く釉剥ぎしている。内外面には釉垂れの部分が見受けられる。素地は灰黒色のやや粗いものである。本資料は1に比べ器壁が薄く、鉢の可能性も十分考えられる。

c. 茶入壺

1点だけ確認でき、第35図8に示した。口縁部上端が外側へ張り出し、口唇部が幅広くなる。外側の縁部は上下から斜めに整形しており、中央部に稜を有す。口縁部の張り出し部下方から内側へゆるやかなカーブを描くように約15mmの頸部がみられ、そこから肩部が張り出していくものようである。推算口径は約12cmを測る。器厚は3mm前後と薄手のつくりで、素地は暗茶褐色の精緻なものである。ヌー33第3層下部から出土。

d. 瓶

第35図9～11に示すもので、9は肩部の、10・11は底部の資料である。9は3mm前後の薄手のつくりで、表面にだけ暗黄褐色の釉を施している。裏面は成形の際の調整痕が明瞭に残る。破片の上端部の推算径が約6cm、下端部の推算径が約8cmである。素地はやや粗いもので、赤味を帯びた灰褐色を呈す。10はベタ底のもので、ゆるやかにカーブを描きながら立ち上がっていく。推算底径は約7cm。現資料では外

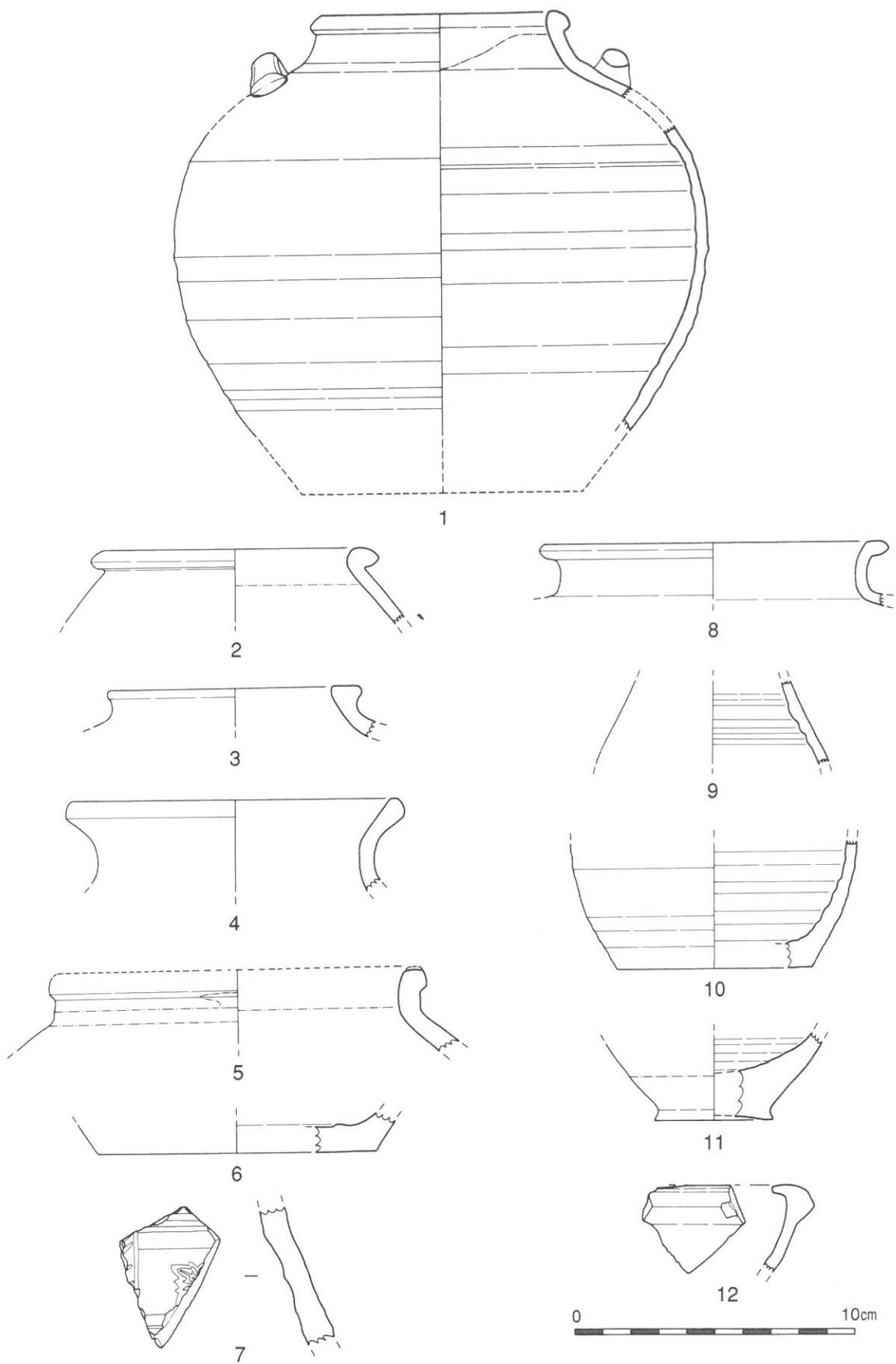
面無釉になっており、裏面に黒味の強い釉が塗付される。素地は灰褐色のやや細かなもので、底面部は橙褐色を呈し、その上方は赤味を帯びた灰褐色を呈す。11は底面部から約5mm直方向に立ち上がり、そこから外側へ開いて胴部に移行する。底面部には糸切り痕が明瞭に認められる。推算底径は約4cmである。暗黄褐色の釉が外面の腰部下方までみられ、そこから底面部にかけては露胎となっている。内面は無釉。素地は暗茶褐色の細かなもので、粒の粗い砂粒が比較的目につく。9はハ-33南壁、10はヒ-31第3層、11はヘ-32攪乱部から得られている。

e. 摺鉢

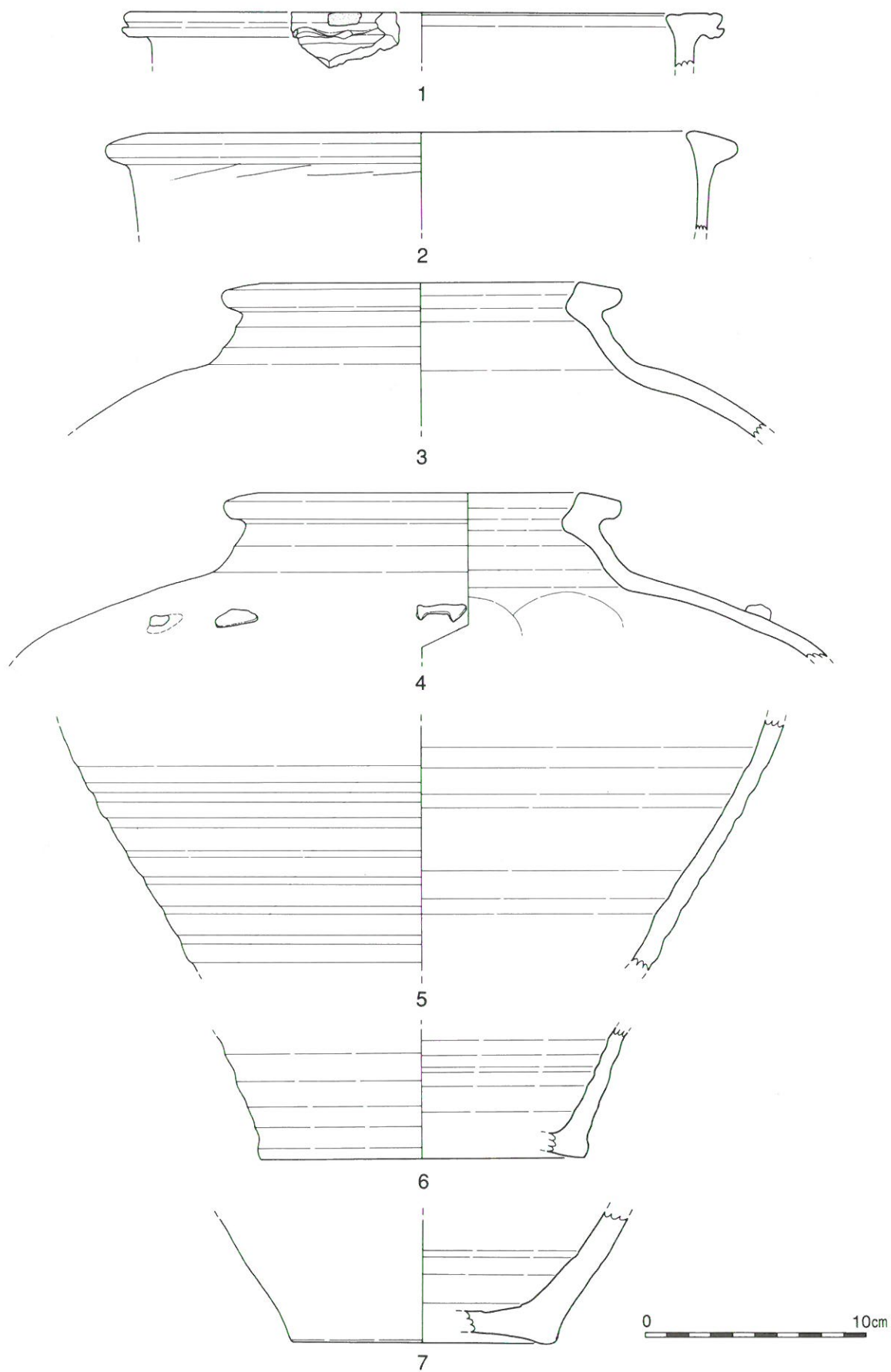
第35図12に示した1点だけ確認できた。口縁部が鳥の嘴状に内側へ飛び出すようにつくり、外端部も三角形に張り出す。口唇部は角度を変えて削り整形しており、その境目では稜をつくる。特徴的な口縁部のつくりで、推算口径は約16cmを測る。釉は黒味の強いもので、外面から口唇部まで施釉するが、口唇部は釉剥ぎして整形している。口縁部の内側へ飛び出している部分の裏側に釉垂れがみられる。口唇部の内側縁部に砂粒の熔着する部分がみられる。内面は無釉で、下方からかきあげられた櫛目が7本認められる。素地は灰褐色のやや細かなものである。ヒ-33第3層の出土。

第5表 その他の陶磁器出土状況

出土地				A区								B区					合計		
				攪乱	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	焼じり混	小計	攪乱	第1層	第2層	第3層		第4層	小計
褐釉陶器	壺		口縁部		1		3			1		5			1		1	6	
			胴部						1		1		1			1		2	
			底部	1			1				2		1			1		3	
	小壺			1					1							0	1		
	すり鉢					1				1						0	1		
小計				1	0	2	0	5	0	1	1	0	10	0	0	3	0	3	13
天目	小杯	18C~19C	胴部	1	1	2						4				0		4	
			底部										0	1		1		1	
			完形	1		1					2					0		2	
	小碗		18C~19C	底部			1					1				0	1		
	?		胴部								0	1				1	1		
	?		14C~16C	胴部					2			2					0	2	
小計				2	1	4	0	1	3	1	0	0	12	1	0	1	0	2	14
瑠璃中国	碗		底部			1						1					0	1	
			胴部		2	7		6		1		2	18		2		2		20
青磁染付	?		口縁部			1						1					0	1	
			胴部	1		1					2						0	2	
	小碗		口縁部			1						1					0	1	
			胴部	2		3					5						0	5	
	碗	18C後半~19C	口縁部			2						2					0	2	
底部					2					2						0	2		
小計				2	1	4	0	1	3	1	0	0	12	1	0	1	0	2	14
鉄釉染付	碗か		胴部		2	1		1				4					0	4	
			口縁部			1					1						0	1	
	小碗	18C~19C	口縁部			1						1					0	1	
			胴部	1							1		1			1		2	
	小碗	17C後半~18C	底部		2	1						3				1		4	
			胴部								0		2			2		2	
			底部	1								1					0	1	
			胴部															0	1
小計				5	4	15	1	1	0	0	0	0	26	0	0	4	0	4	30
ベトナムタイ産磁器土器	鉢		胴部				1					1				0	1		
			底部										1			1		1	
	?		口縁部	1							1					0	2		
刀物の蓋			口縁部			3						4					0	4	
			口縁部	1		1		2			3						0	3	
小計				2	0	4	0	3	0	0	0	1	10	0	0	2	0	2	12



第35図 褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)



第36図 褐釉陶器 2 (水甕・壺)

第5節 色 絵

量的にはそれほど多くない。ほとんど小破片の資料であるが、第37図6に示した皿は全形の窺えるものである。時期的には16世紀～19世紀頃と比較的幅がみられるものの、18世紀頃のものが多い。器種的には碗、小碗、皿、小杯、蓋などが認められ、出土量からするとわりとバリエーションに富んだ内容といえる。全体的に絵付けの色が剥げ落ちており、判然としないものが多い。特徴的なものを第37図1～9に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 碗

1～3に示したもので、1・2は口縁部、3は胴部である。これからすると胴部から口縁部の方へ開き気味に至り、口縁部上端で若干外反する器形のものである。口唇部は尖り気味。大きさは不明。文様は1が丸文、2が唐草文が外面に認められ、1は赤と青、2は赤と緑の配色のものである。3は内面に花文が陽刻されているが、花の内側や周縁部に配された色は退色し判然としない。素地は1・2が淡灰白色の細かなもので、3は淡灰白色の粗いものである。

b. 小 碗

4・5に示すもので、4は口縁部の、5は底部の資料である。4は胴部の方から開き気味に口縁部に至り、口縁部上端が若干外反する。口唇部は尖り、その部分の釉を剥ぎ取っている。推算口径は約8cmを測る。文様は外面に草花文が配され、内面は点だけが認められる。青・赤・緑の色が使用されているようである。5は型成形と考えられるもので、推算高台径は約5cmを測る。高台は逆三角形状で低い。畳付は平坦につくるが、内側の縁は丸味を帯びる。畳付から外底面にかけては露胎である。文様は内面に青・赤の色を使い草花文を配している。4・5とも素地は乳白色の細かなものである。

c. 皿

6・7に示したものである。6は半欠品の資料で、全形の窺えるものである。推算口径が約7cm、高さが2cm、推算底径が約5cmを測り、小皿の部類に入る。高台は逆三角形状で低く、腰部がやや丸くなり、外側へ開き気味に口縁部に至る。口縁部上端で僅かに外反し、口唇部は尖る。全釉のあと口唇部だけを釉剥ぎしている。文様は内面に赤・緑・黄色の配色により花文を描く。外面は無文。外底面に文字様の凹凸部が認められるが、判然としない。素地は淡灰白色の細かなものである。7は推算高台径が約9cmを測る底部資料である。高台は細く方柱状につくるが、畳付部は破損している。そのため畳付部の状況は不明。器形的には高台際からかなり外側へ開くもののものである。文様は外面および内底面に草花文が認められ、外底面に弧状の線が確認できる。赤色の部分だけがかすかにその色を留め、他の色については判然としない。素地は淡灰白色の細かなものである。

d. 小 杯

8に示す底部資料で、推算高台径は約3cmを測る。高台は逆三角形状に低く、小さくつくる。内面はほぼ垂直になるものの、外面は畳付の方へ斜めになっており、内側へすぼむ感じになっている。畳付は斜めに整形している。腰部のカーブは急で、そこからやや直方向に立ち上がっていくようである。文様は外面の高台際に2本の界線を配し、胴部に草花文を施す。内底面には蛇ノ目釉剥ぎした部分に蓮弁文くずれが認められる。いずれも赤色による絵付けである。また、外底面には呉須による銘の一部が認められるものの、判読はできない。全釉のあと畳付と高台の内側を釉剥ぎし、内底面も蛇ノ目釉剥ぎしている。素地は淡灰白色のやや粗いものである。景德鎮系。

e. 蓋

9に示す1点だけ確認できた。撮み部および縁部とも破損しており、形状や大きさなどは不明。表裏面

とも施釉されており、表面にだけ呉須による草花文が施される。染付の草花文をなぞるように色絵付けされるが、完全に剥げ落ちている。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。

第6節 三 彩

量的には僅少である。総て小破片の資料であり、器種や器形など判然としない部分が多い。特徴的なものを第37図10～15に示した。これらを素地や成形および施釉の状況などの特徴をみると、10・11のように内外面に白化粧し施釉するもの、12～14のように外面だけ白化粧し施釉するもの、15のように外面だけ施釉するが白化粧をしないものの3種に分けられるかと考えられる。これは器種・器形の違いによるものかと思われる。

10・11は素地が黄白色でやや粗く、ロクロ成形により仕上げており、内外面とも白化粧を施している。白化粧の施される内外面に施釉される。しかし、両者ともかなり釉が剥げ落ち、特に内面は著しい。ただ、11の外面は良好に釉が残る。10は外面のほぼ全面に緑釉を施し、破片の右下方の隅に黄色の釉が線状に認められる。11は外面に黄色の釉を配した花文がみられ、その上方に僅かに緑釉の部分が残る。

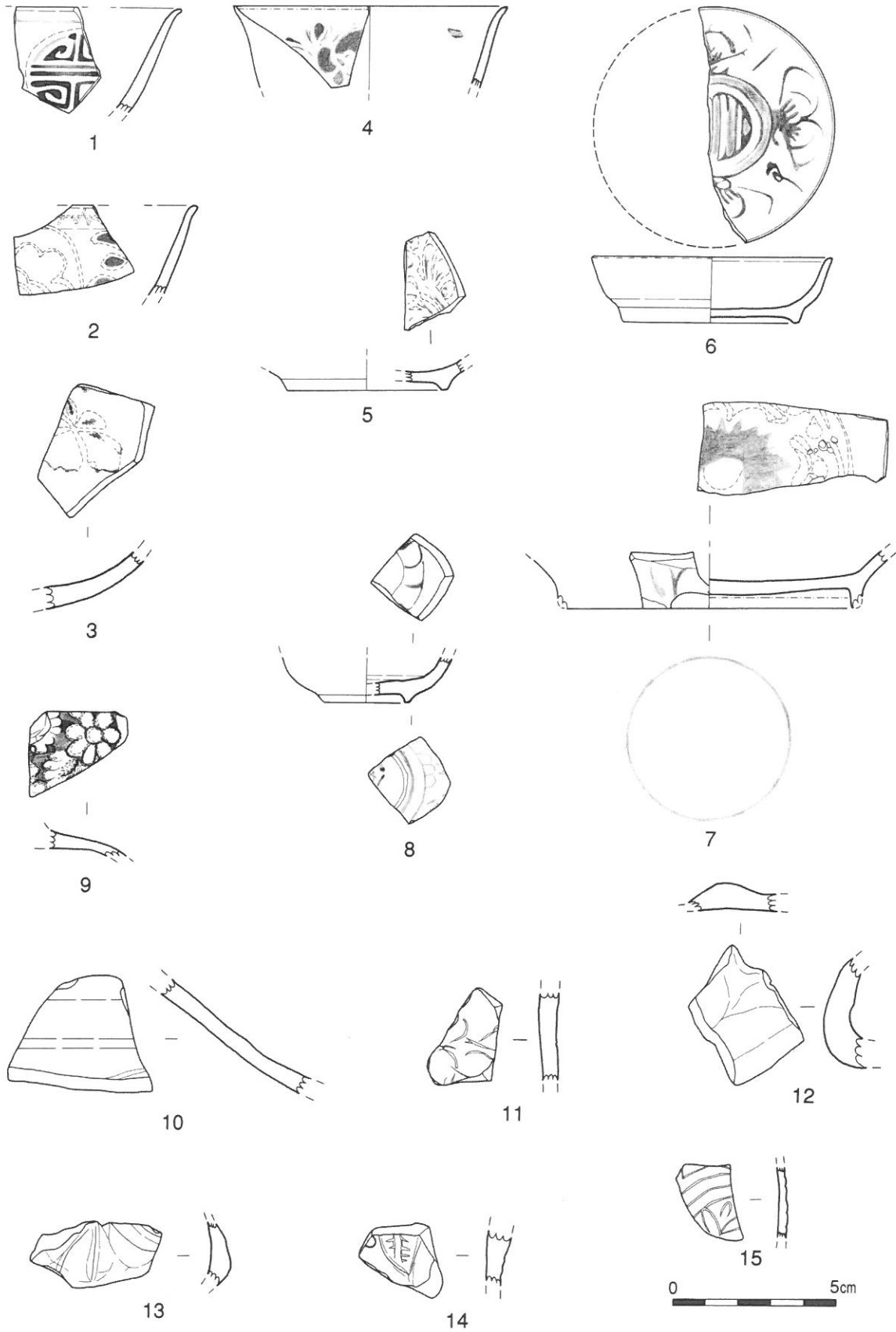
12～14は素地が黄白色でやや粗く、内面にわりと指頭痕を有す凹凸面がみられることから型成形のものと考えられ、外面にだけ白化粧を施す。白化粧の施される外面だけに施釉しており、内面は露胎である。12は無文の部分のようで、緑釉が施される。釉の剥げ落ちている部分が散見される。13は文様の部分のようであるが、かなり釉が剥げ落ち判然としない。14は他の2点に比べ、釉の保存状況が良好である。葉っぱ様の文様が陽刻され、その部分に黄色の釉、上下に緑釉が施されている。

15は素地が淡灰白色でやや細かく、磁質である。内面にロクロ成形の際の調整痕が明瞭にみられる。他の資料に比べ非常に薄手のつくりで、白化粧は施されない。外面に4本の沈線と線彫りの花文が配され、緑釉が施釉される。内面は露胎。

第7節 瑠璃釉

10点と量的には僅少である。18世紀～19世紀頃のものほとんどで、器種的には小杯や小碗・碗・瓶などが見受けられる。得られたものは小破片の資料ばかりであり、全形の示せるものは第38図1の1点だけである。特徴的なものを第38図1～7に示した。全体的な特徴を記すと小杯・小碗は型成形によるものようである。また、施釉の状況は外面に瑠璃釉、内面に白磁釉のものがほとんどであるが、6は口縁部内面まで瑠璃釉を施す。小杯の場合には1のように外底面まで瑠璃釉が施釉されるものや3のように底面部は露胎にするものなどが見受けられる。素地は淡灰白色の細かなものがほとんどである。以下、個々のものについて簡記する。

1～3は小杯である。1は全形の窺えるもので、口径が約4cm、高さが2.2cm、底径が約2cmを測る。高台は逆三角形に低くつくり、畳付は丸味を帯びる。腰部が若干カーブし、やや外側へ開く感じで口縁部に至る。直口口縁で、口唇部は若干内傾するように仕上げている。また、外底面は平坦であるが、内底面は中央部が盛り上がる。畳付の周囲には熔着物が見受けられる。2は直口口縁の資料で、推算口径が約5cmを測る。胴部からやや直方向に立ち上がり、口唇部はやや丸味を帯びる。口縁部上端の内面に浅い溝状の凹部が廻る。外面の瑠璃釉は1よりも黒味が強い。3は推算底径が約2cmである。高台はつくり、



第37図 色絵と三彩

腰部下方のくびれ部の端を斜めに面取りし、そこから外底面が若干凹むように削っている。瑠璃釉は腰部下方までの施釉で、底面部は露胎にしている。

4・5は小碗かと考えられるもので、4は胴部、5は底部の資料である。4は腰部の推算径が約6cmを測り、腰部から直方向に口縁へ向かうものようである。外面の瑠璃釉は鮮やかな発色である。5は底部の資料で、推算の高台径は約5cmを測る。高台は逆三角形を呈し、畳付は尖り気味になる。瑠璃釉は高台外面までの施釉のようで、外底面のものは釉垂れの部分と考えられる。全体的に光沢が失われている。

6・7は袋物の資料で、6は口縁部、7は胴部である。2点とも小破片のため詳細は不明。6は外反口縁の資料で、口唇部は平坦に整形している。また、頸部よりも口唇部の方が厚くなっている。

8に示すものは著しく熔変した碗の資料である。釉の状況が判然とせず、畳付および外底面の釉から瑠璃釉の可能性が高いと考えられここに示した。破損面もガラス質の釉状のものが覆っている。高台は方柱状につくり、畳付の外面を斜めに面取りする。畳付は平坦に仕上げている。推算の高台径は6cm弱である。

第8節 その他の陶磁器

ここで扱うものは翡翠釉、黒釉、青磁染付、鉄釉染付など出土量が僅少なものをまとめた。前二者は陶器で、後二者は磁器である。本来的にはそれぞれ項を改めて記述すべきものであるが、今回はとりあえずここに一括して記述することにした。それぞれの出土状況は第5表のとおりで、特徴的なものを第38図9～20に示した。

1. 翡翠釉

1点だけ確認でき、9に示した。外反口縁の資料で、口唇部は平坦に整形している。内外面に白化粧を施したあと翡翠釉が施釉されるが、風化のためか釉の剝落が目立つ。特に裏面では著しい。素地は橙褐色のやや細かなものである。ノ-31トレンチ出土。

2. 黒釉陶器

14世紀～16世紀頃のいわゆる天目茶碗が得られている。大きめのもの2点を10・11に示した。10は腰部の、11は底部の資料である。10は高台際の水平な削り部の推算径が約6cmを測り、そこから直線的に外側へ開きながら立ち上がっていく。内面は全釉であるが、外面は胴部下半以下は露胎である。内底面は一段低くなるように削られており、胴部下方と内底面の境に稜が認められる。素地は灰白色のやや粗いもの。ヒ-31第4層の出土。

11は推算の高台径が約4cmを測るものである。割れ面に素地の合わせ目が明瞭に認められ、高台のつくりだしも割りと雑である。外底面の削りは浅く、丁寧ではない。外面2ヶ所に高台まで釉垂れしている部分がみられ、内底面では図の右側の方に釉が厚くなっている。黒釉の表面の大部分がのぎめ様の茶褐色を呈す。素地は灰白色のやや粗いもの。ナ-32第4層の出土。

3. 青磁染付

ほとんど18世紀～19世紀頃のもので、碗と小碗だけが確認できた。12～17に示した6点で、12～14は口縁部の、15～17は底部の資料である。いずれも第2層からの出土である。口縁部の3点をみるといずれも腰部から口縁部の方へ直線的に開くものようで、12は直口口縁、13・14は外反口縁である。12は口唇部が舌状を呈し、13・14は口唇部が尖る。13は推算口径の算出ができ、約10cmを測る。また、後者の2点は前者よりも若干薄手である。施釉の状況は3点とも外面に淡緑色の青磁釉を施し、口唇部から内面にかけては淡青白色の透明釉を施釉している。内面には呉須による文様が認められ、いずれも口縁部に

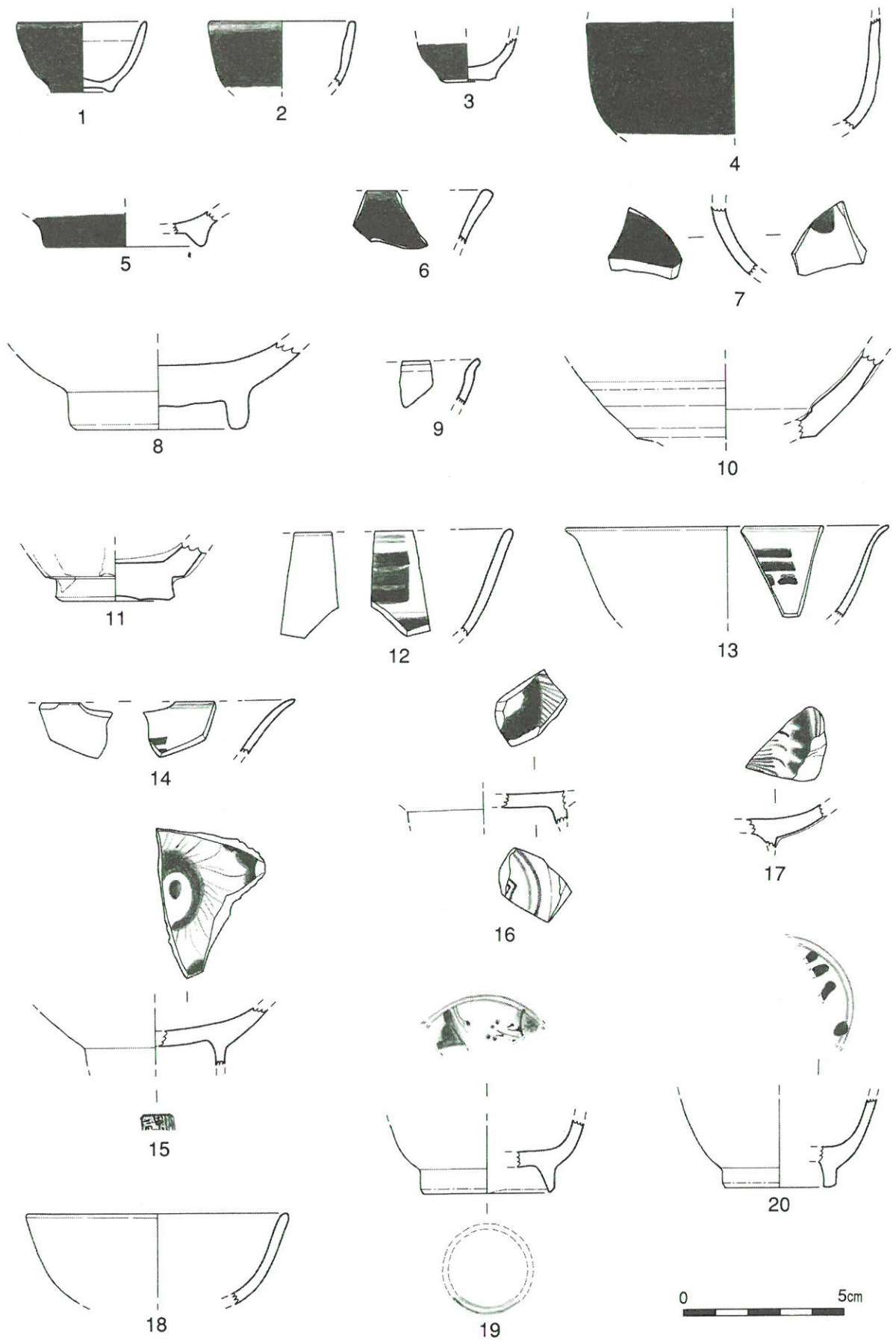
2本の界線を廻らし、胴部に算木文風の横位文を配す。12は腰部にも施文する。3点とも呉須の発色はやや淡く、素地は乳白色の細かなものである。

15～17に示した底部資料は、いずれも腰部のあまり膨らまないものようである。高台は破損しており、形状など不明である。15は高台際の推算径が約4.5cmである。施釉の状況は3点とも淡緑色の青磁釉が高台外面まで施され、内底面と外底面に淡青白色の透明釉を配す。内底面に文様を描き、外底面にはスタンプを押しているものの、破片のため構図など詳細は不明。いずれも呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなもの（15・16）と淡灰白色の細かなもの（17）が見受けられる。

4. 鉄釉染付

18世紀～19世紀頃のものほとんどで、碗と小碗が確認できた。18～20に示すもので、18は口縁部の、19・20は底部の資料である。この3点を見ると外面に茶褐色（20は黒褐色を呈す）の鉄釉を施し、口唇部から内面および高台内に青灰白色の透明釉を施釉する。畳付外面を斜めに面取りしており、その部分の釉は剥ぎ取られている。文様は内底面と外底面が対象になっている。素地は灰白色のやや細かなものである。

18は腰部がゆるやかにカーブして、やや開き気味に口縁部へ向かう直口口縁のものである。口唇部は舌状を呈し、推算口径は約8cmである。ヌー32第2層の出土。19は高台脇からやや直方向に立ち上がるもので、高台は逆三角形形状につくる。畳付は平坦で、狭い。内底面に2本の界線と山水文が、外底面に2本の界線が認められる。呉須の発色は鈍い。推算高台径は約4cm。ヌー32第1層の出土。20は腰部からやや外側へ開き気味に立ち上がっていくもので、高台は逆三角形形状につくる。畳付は平坦で、狭い。畳付の内側には釉溜まりになっている部分も見受けられる。内底面に2本の界線と文様を施すが、破片のため構図は不明。呉須の発色は鈍く、内側の文様は黒ずんでいる。推算高台径は約3.5cm。ハー30灰茶褐色の出土。



第38図 瑠璃釉、その他の陶磁器（青磁・鉄釉染付）

第9節 東南アジアの陶磁器

東南アジア産の陶磁器として取り扱った資料は、タイの半練（土器）、タイの鉄絵、タイの褐釉、ベトナム産染付（中国南部を含む）である。以下、タイ産陶磁・ベトナム産染付の順に記述を行なうことにする。

1. タイ産陶磁

タイ産陶磁の種類として半練（土器）の蓋と身、鉄絵合子の蓋と身・壺・褐釉陶器壺などである。一応、半練（土器）もここに含めた。

a. 半練（土器）

半練（土器）の蓋の破片が4点得られていて、4点とも落し蓋である。その他に叩きのある胴部の小破片が1点出土している。以下にその特徴を記述する。

・蓋

第39図1は蓋の直径が12.4cmを測る。蓋端部を折り曲げて仕上げているが、断面を隅丸の三角形状に篋で削り出して調整するのが本品の特徴である。内面は折り曲げの先端部分に篋削りを加えている。蓋甲は篋削りを加えて丸味を出している。色合いは黄褐色を呈し、焼成は脆弱である。胎土は細かく、混入物として淡茶色・茶褐色・黄白色の鉱物と粗い石英などを多量に含んでいる。ハ-33第3層より出土。

同図2は蓋径が、11.4cmを測る。蓋端部を折り曲げ、折り曲げた端部を丁寧に仕上げている。断面は三角形状に篋で削り調整している。蓋甲も篋削りで調整する。色合いは黄白色を帯びている。焼成は良好で硬い。胎土は細かく、混入物として淡灰色・茶褐色と、灰褐色の鉱物と粗い石英や白色鉱物を多量に含んでいる。ヘ-31攪乱層より出土。

同図3は蓋径が11.2cmを求めた。蓋端部を折り曲げ、折り曲げた端部を平坦に仕上げた後に端部近くに削りを入れて窪ませている。同様な手法で蓋甲縁端近くに削りを浅く入れて、窪ませている。他は篋削りとナデで調整する。色合いは明黄茶色を帯びる。焼成は良く、硬い。胎土は細かく、混入物として淡茶色・茶色の鉱物と細かい石英を多量に含んでいる。ヌ-32第3層下部。

同図4は蓋径が、10.2cmを求めることが出来た。蓋端部の仕上げ方や蓋甲縁端近くに削りを入れて仕上げる手法は同図3と共通している。蓋甲の調整は篋削りとナデが観察できる。色合いは明黄茶色を呈する。焼成は堅緻である。胎土は細かく、混入物として淡灰色・茶色・褐色の鉱物と粗い石英が多量に含まれている。同図3と同一個体である可能性も考えられるが判然としないところである。ヌ-32砂利敷層直上より出土。

・身

第39図5は身の破片で全体的に摩滅するが、外面に平行叩きを入れている。内面には当て具の使用による浅い楕円形状の窪みがみられる。色合いは淡灰色を帯びている。焼成は他と比較して良好で硬い。胎土は精選されているが、粗い石英と白色の物質・灰褐色の鉱物を少量ながら含んでいる。ヌ-32第3層。

b. 鉄絵合子

合子の蓋や身（底部）と壺の底部とみられるものが得られている。その内訳は蓋が4点、身は1点であった。

・蓋

第39図6は蓋の最大径が8.3cmを測る。外面には鉄釉で圏線・縦線・斜め・格子状の文様を描いた後に灰白色の透明釉を施している。細かい貫入がみられる。素地は淡灰白色の細粒子で、粗い黒色や灰色の鉱物を少量含んでいる。フ-32第3層上部より出土。

同図7は最大径が10cmを測った資料である。外面には鉄釉で重円文・縦沈線文・斜位の格子文を描いて

いる。釉色は黄味がかかった灰白色の透明釉である。素地は淡灰白色の細粒子である。素地に細かい黒色や白色の鉱物が僅かに混入している。ハ-33第3層より出土。

同図8は最大直径が10cmを求めた。外面には鉄釉で重円文・縦沈線文・斜め格子文を描いている。釉は淡灰青色を帯びた失透釉である。素地は粗粒子で、淡灰白色を帯びている。素地に細かい黒色や白色の鉱物を多量に含んでいる。ハ-33第3層より出土。

同図9は最大直径が11.3cmを測る。外面は鉄釉で丸文に斜位格子文と花文を描く。釉色は淡灰青色を帯びた透明釉である。素地は淡灰白色の粗粒子で、粗い黒色や白色の鉱物を多量に含んでいる。出土地点および出土層は不明である。

・身

第39図10は身の高台破片で、高台径は7cmを求めた。高台は「ハ」の字状に開き、高台脇から畳付まで鉄釉が塗られている。高台の内削りは平坦に且つ丁寧に削り取っている。見込みには同心円状のロクロ痕の上から白色の釉を施している。素地は白味の強い灰色の細粒子である。微細な黒色の鉱物などを多量に含んでいる。ハ-28灰茶褐色土層。

c. 褐釉陶器壺

第39図11は口径が18cmと求めることが出来た大型の壺とみられるもので、口縁が大きく外反し、玉縁状に肥厚する。肥厚は折り返しで成形している。頸部のみ薄い茶紫色の釉を施す。口縁と頸下部には茶褐色の失透釉を施している。内面は茶褐色の釉を施しているが、黄白色に曜変している。素地は明るい灰紫色の粗粒子で、粗い茶色や白色の鉱物と細かい石英を多く含んでいる。ノ-30・31溝状遺構内焼土混じりより出土。

同図12は高台径が7.4cmを測る壺の破片資料である。高台の内削りは浅く、丁寧に仕上げている。釉は施されていないが、内面見込みのロクロ痕から壺として判断された。素地は淡灰色の細粒子で、細かい黒色鉱物を多く含んでいる。ハ-29茶褐色土層より出土。

2. ベトナム産染付

ベトナムもしくは中国南部の染付をここでは取り扱った。確認された器種は鉢・碗・皿の3器種のみであった。

a. 鉢

第39図13は高台径7.6cmを測る大振りの鉢とみられる染付で、見込みに灰緑色の呉須で花文を描く。釉色は淡灰白色の透明釉で内面及び高台脇まで施している。高台の内削りは深く、丁寧に平坦に仕上げている。素地は淡灰白色細粒子である。見込みには重ね焼きの際に使用した胎土目の目痕がみられる。同定の結果、本品は17~18世紀代に位置付けられているようである。産地はベトナムである。ヌ-33第1層より出土。

b. 碗

第39図14は推算口径が12.4cmと求められた染付の内彎碗である。両面の口縁には灰緑色の呉須で圏線を施している。釉色は淡灰白色の釉を施すが、外面は釉色がくすんでいる。貫入は外面にのみ細かく入っている。素地は淡灰白色の微粒子である。土取り場のセクションベルトから出土。(産地はベトナムもしくは中国南部)。

c. 皿

第39図15は口縁が僅かに外反する厚手の皿である。口縁の内外面に圏線を施し、外面には花文?と雲文とみられるものを描いている。呉須は淡青色と濃紺を帯びているものを用いている。釉色は淡黄白色の釉で両面に施している。両面に荒い貫入がみられる。素地は白色の細粒子で、半磁胎となっている。16世

紀代に位置付けられているようである。出土地点及び層位は不明。(産地はベトナムである)。

3. 小 結

タイの半練は、前回、蓋の撮み(1点)と追加の新資料で蓋3点、身3点の計7点が得られている。今回のものは蓋4点、身1点の5点であり、湧田古窯からは合計12点の資料が得られていることになる。今回の資料で第39図1の蓋端部を折り曲げて、断面を隅丸三角形状に削りで成形しているものが注目された。このタイの半練は、今のところ14世紀末から17世紀までの時代幅があるが、一般的には16・17世紀の遺跡から多く出土している傾向にあることが窺える。出土量も120点近くあり、グスクや集落跡などから出土している。

タイの合子は伊原遺跡^(註2)・今婦仁城跡^(註3)などで出土していて、タイの半練に次いで多く出土しているが、金武正紀氏による緻密な論文^(註4)では、タイ産大型褐釉陶器四耳壺については、「今後、グスクやグスク相当期の遺跡からの報告が増えると考えられる。」としている。最近では、南風原町の宮平ノ口殿内遺跡^(註5)などから出土している。伝世品としては竹富島の喜宝院蒐集館^(註6)や玉城村中央公民館^(註7)で確認することが出来た状況などから、広く県内に流布していることが予想されるところである。

ベトナム産染付の皿・鉢については、1995年2月下旬に来日したハノイ国立考古学研究所歴史考古部門部長 鄭高想 (TRINH CAO TUONG) 氏に同定をして戴いた。記して謝意を表わす。

註

註1. 金城亀信「グスク出土の“その他の土器”・“移入系土器”について」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員会 1991年。

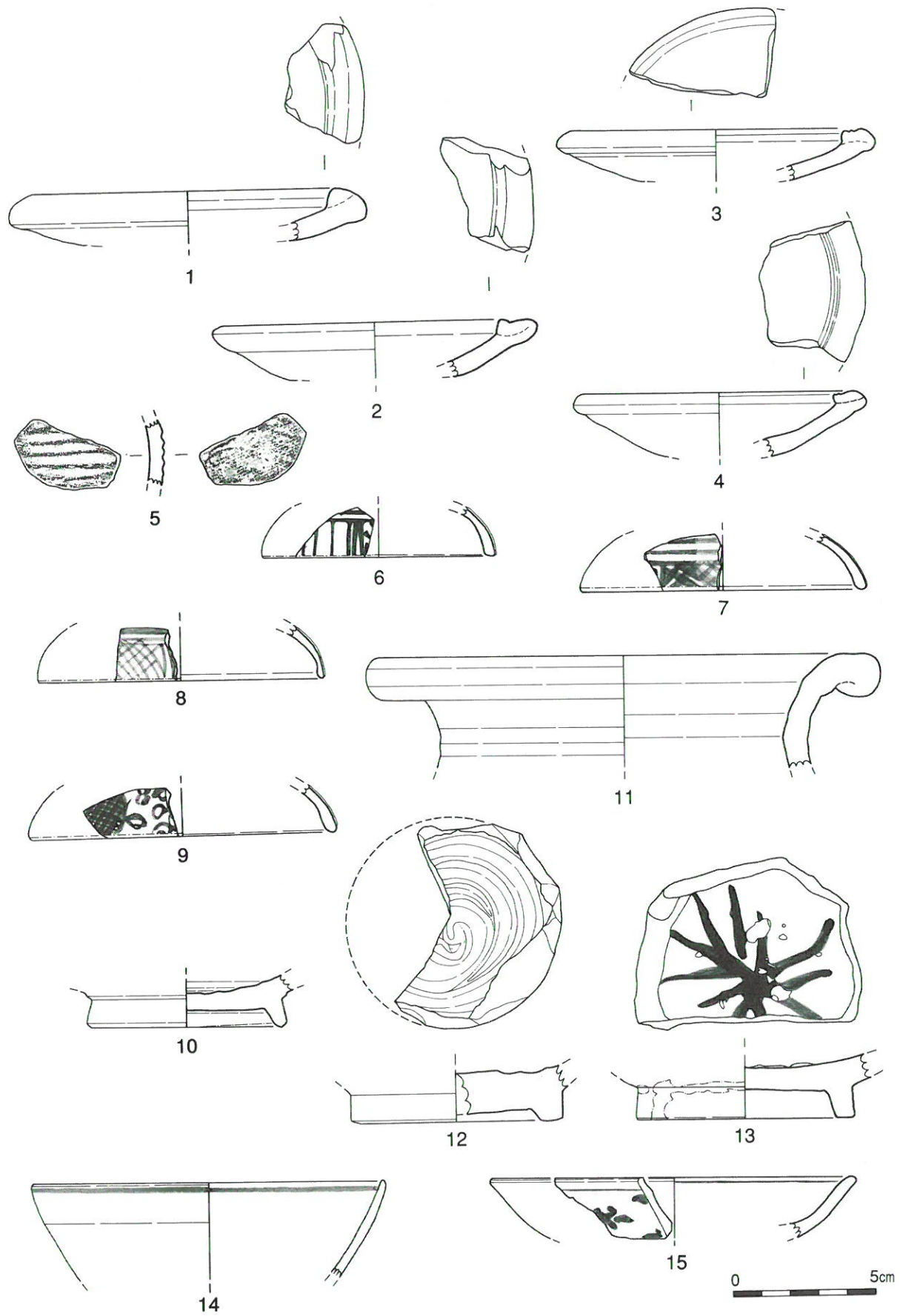
註2. 島袋 洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年。

註3. 金武正紀・宮里末廣ほか『今婦仁城跡発掘調査報告I』今婦仁村教育委員会 1983年。

註4. 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No11 日本貿易陶磁研究会 1991年。

註5. 南風原町教育委員会『南風原町の遺跡』1993年。

註6・7 県文化課の金城亀信が現地で確認した。

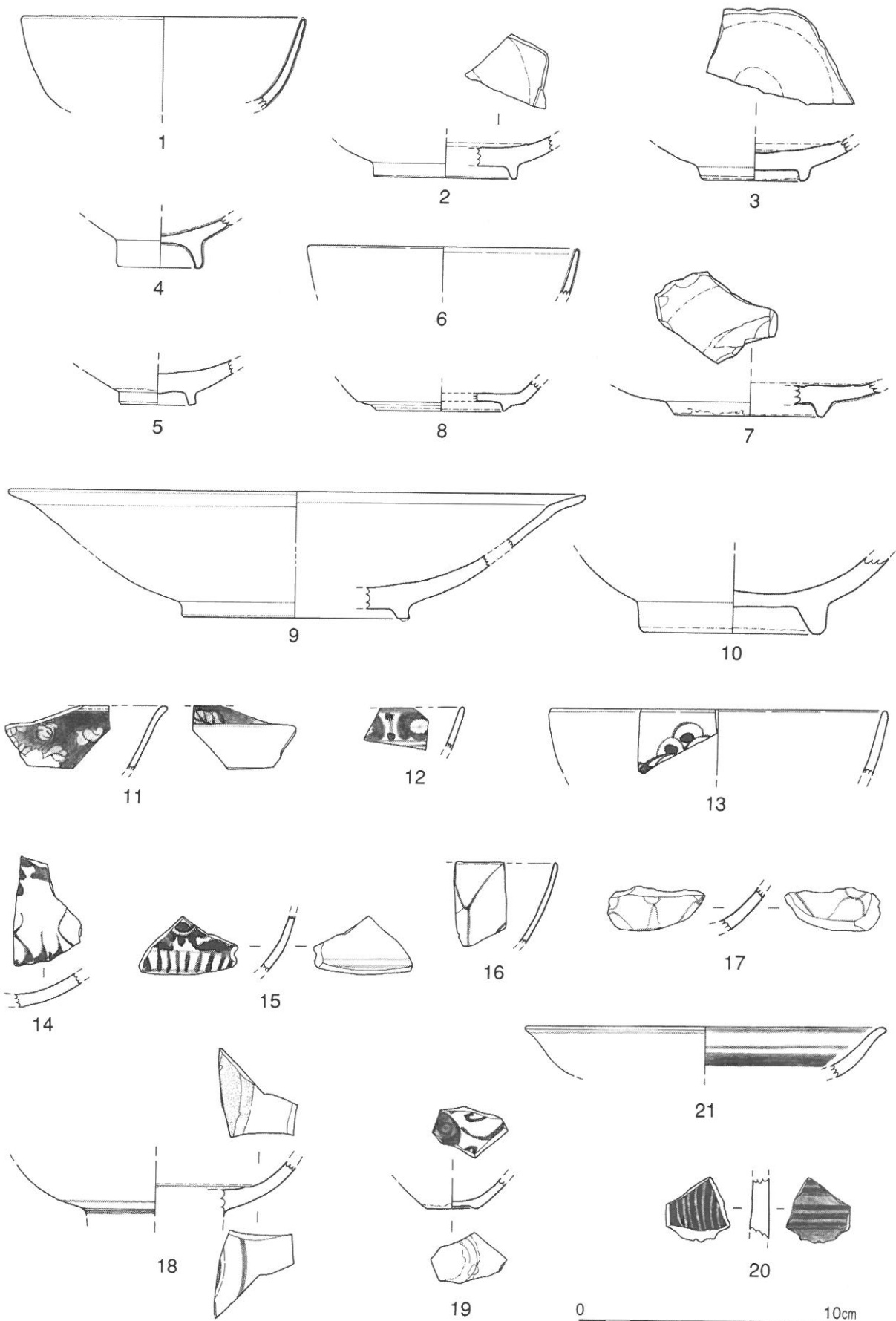


第39図 東南アジア陶磁器

第7表 a 本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

図版	番号	器形	部位	口径 底径 器厚	素地	特徴	出土地	備考
第40 図 ・ 図 版 37	1	碗	口縁部	10.8 — —	淡灰白色 でやや粗 い	口縁部が外側へ開き気味になり上部で僅かに外反。口唇部は尖り気味で、内側の稜は比較的明瞭。	警察棟 フ-6 第2層	肥前系 18c
	2	碗	底部	— 5.6 —	淡灰白色 でやや細 かい	低く、細い高台で、総釉のあと畳付の釉を掻き取り整形。畳付の内側やや斜め。また、内底面は蛇の目状に微砂粒が認められる。	A ニ-33 第3層	肥前系 18c
	3	碗	底部	— 4 —	淡灰白色 でやや細 かい	低く、細い高台で、総釉のあと畳付を釉剥ぎ。畳付の外側を斜めに面取り。内底面は蛇の目状に釉剥ぎ、微砂粒が畳付周辺に熔着。内外面に粗い貫入あり。	A t-33 第2層	肥前系 18c
	10	碗	底部	— 6.8 —	乳白色で 細かい	安定感のある高台で、逆三角形に畳付の方へ厚さを減じる。総釉のあと畳付の釉を剥き取り、両側を斜めに面取り。	第1層	本土産 19c か
	4	碗	底部	— 3.2 —	黄灰白色 でやや粗 い	総釉のあと畳付部を釉剥ぎ。高台の内側はやや丸みを持つ。畳付は平坦で、その外面を斜めに面取り。内外面に細かな貫入あり。	B ハ-30 茶褐色土層	肥前系か 1 7c前半
	5	皿	底部	— 3 —	黄白色で やや粗い	高台は小さく、やや外側へ開く。畳付は平坦で、外側を斜めに面取り。高台および外底面は露胎。内外面に細かく密な貫入あり。釉は白く濁る。		中国か
	6	碗	口縁部	10.6 — —	灰白色で やや粗い	口縁部が開き気味、外面の上部を若干削る。口唇部は舌状。	A ネ-32 第1層	内野山窯 青緑釉 17c ~18c前半
	7	皿か	底部	— 5.8 —	淡灰白色 でやや細 かい	高台を逆三角形に低くつくり、畳付は平坦。畳付の内側を斜めに面取り。総釉のあと畳付部を釉剥ぎ。内底面は蛇ノ目状に釉剥ぎ。	A ニ-31 第1層	肥前系 18c
	9	皿	口縁部 ~底部	22.4 8.8 4.9	暗灰色で やや細か い	高台際からほぼ直線的に外側へ開く。口縁部が角度をもって外反し、口唇部は舌状を呈す。高台は低く方形につくり、畳付は平坦。口縁部上端の内外面および口唇部は露胎。畳付と高台内側も露胎。畳付に胎土目の熔着あり。	A ハ-33, t-32 第4層、第 3層	唐津系?
	11	碗	口縁部	— — —	乳白色で 細かい	口縁部上端が若干外反し、口唇部の釉を掻き取る。口唇部はやや丸みをもつ。外面の胴部にダミ技法の花文を配す。内面は口縁部に同様な技法により施文。	表採	伊万里系
	12	碗	口縁部	— — —	淡灰白色 でやや細 かい	直口口縁で、口唇部は平坦。外面の口縁部に四方釋文?。内面は無文。総釉のあと口唇部を釉剥ぎ。呉須の発色はやや淡い。淡青白色の透明釉で内外面に粗い貫入あり。	表採	伊万里系
	13	碗	口縁部	13.2 — —	淡灰白色 でやや粗 い	直口口縁で、口縁部が若干開く。口唇部は舌状。文様は外面に施すが、構図は不明。呉須はやや黒ずんで発色。淡灰白色の失透釉。		肥前系
	15	碗	胴部	— — —	淡灰白色 でやや粗 い	外面に蓮弁文くずれとその上下に1本の圈線を配し、その上方にタコ唐草文を施す。内面に2本の圈線。呉須の発色は比較的良好。淡青白色の透明釉で、内外面に粗い貫入あり。		伊万里 18c 半~19c中
	16	碗	口縁部	— — —	白濁色で 細かい	口縁が若干内湾。口唇部舌状。薄手。外面に網目文。呉須の発色はやや淡い。淡青白色の釉で、内外面に細かな貫入が密。	A t-34 第2層	伊万里 17c 中~17c後
	17	碗?	胴部	— — —	乳白色で 細かい	内外面とも下方に圈線、その上方に網目文を配す。呉須の発色は淡い。釉は淡青白色の透明釉。	表採	伊万里 17c 中~17c後
	18	碗	胴部	— — —	淡灰白色 で細かい	外面の下方および高台外面に1本づつ圈線が認められる。呉須の発色は鈍い。内底面は蛇の目状に釉剥ぎ。		肥前系か
	19	杯?	底部	— 2 —	白濁色で 細かい	碁筭底様の底部で、畳付周辺だけ釉剥ぎ。内面に施文しているが、構図は不明。呉須の発色は比較的良好。淡青白色の透明釉。	表採	伊万里系 特殊
	20	盤?	胴部	— — —	暗茶褐色 で細かい	両面とも白化粧を施したあと櫛状のもので掻き取り、暗緑色の釉を施す。	A ハ-31 第2層	唐津系?
	8	皿	底部	— 5 —	乳白色で 細かい	高台脇で明瞭な稜を有す、いわゆる腰折れの資料。高台は小さく、低く、外底面の削りが深い。総釉のあと畳付を釉剥ぎし、斜位に整形。内底面に丸文様の絵付を施すが、すべて剥げ落ちている。	A ニ-34 第1層	本土産色絵 明治頃
	14	皿	胴部	— — —	白濁色で やや粗い	内面に草花文?を施す。呉須の発色は比較的良好。	表採	伊万里
	21	皿	口縁部	14 — —	乳白色で 細かい	口縁部上端で若干外反。口唇部は舌状を呈し、外側の稜は比較的明瞭。外面の頸部、内面の口縁部および胴部に圈線を1本づつ廻らし、胴下半部にはダミ技法様のものがみられる。呉須の発色は鈍い。	表採	伊万里
第41 図 ・ 図 版 38	1	碗	底部	— 7.8 —	淡灰白色 で細かい	しっかりした高台をつくるが、畳付部破損。外面高台際に1本の圈線、その上方に略「S」字状の縦線を約5mm間隔で配す。いずれも朱色。	A フ-34 第1層	色絵
	2	皿	口縁部 ~底部	15.6 8.2 3.1	淡灰白色 で細かい	高台は低く、畳付、内側を斜めに削る。口縁部上端が外反し、口唇部は尖り気味。総釉のあと畳付部を釉剥ぎ。内体面の下方に1本の圈線、上方に縦横の線で区画した中に格子文を配す。薄く朱色が残る。	A ニ-33 第2層	色絵
	3	皿か	底部	— 6.2 —	乳白色で 細かい	逆三角形の低い高台。内底面に青色による花文。総釉。	A フ-33 第1層	18c後半~1 9c色絵

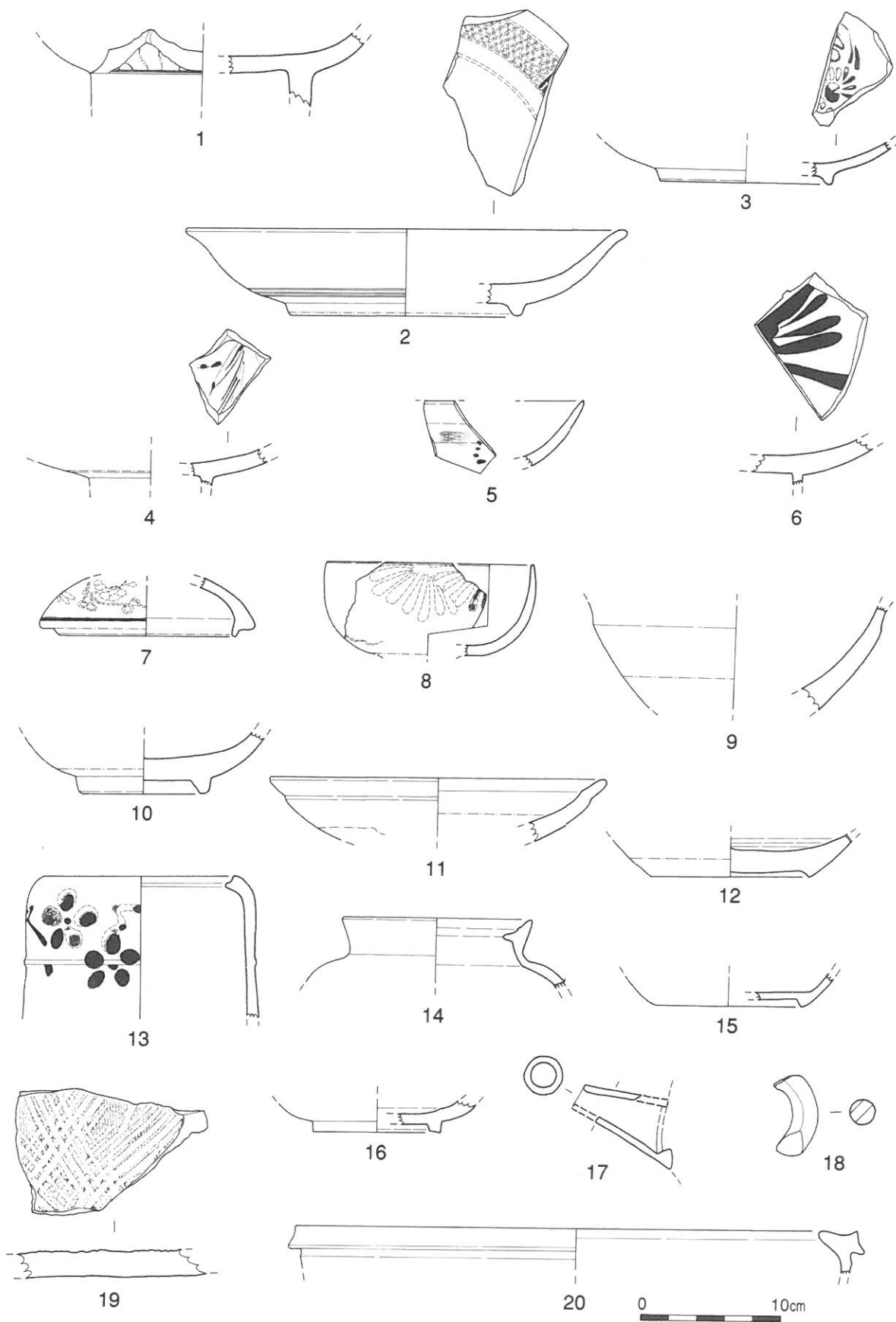


第40図 本土産陶磁器 1

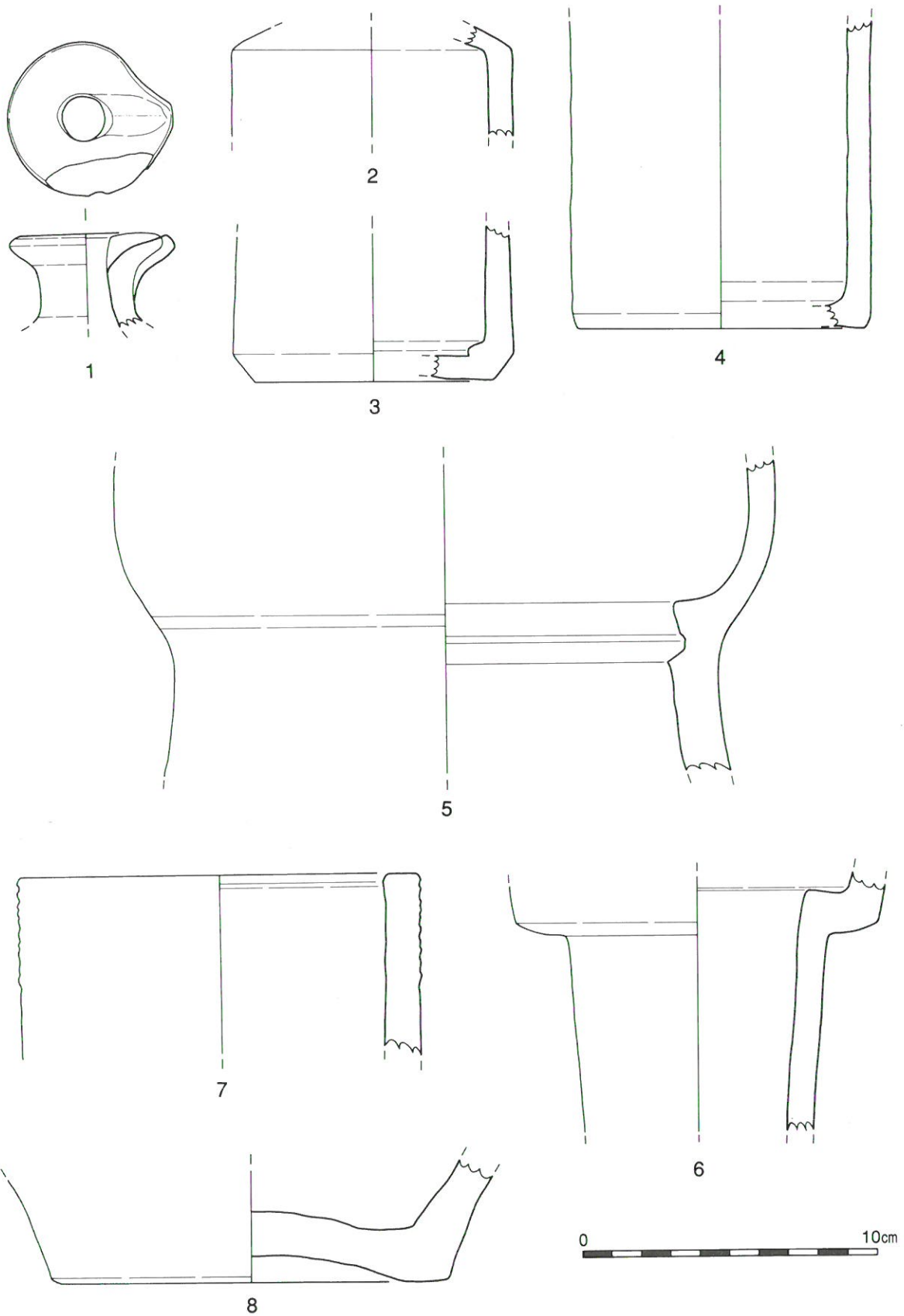
第7表-b 本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

図版	番号	器形	部位	口径 底径 器厚	素地	特徴	出土地	備考	
第41 図版	4	皿か	底部	4.2	黄白色でやや粗い	高台脇まで施釉。内底面に地文様の草文を鉄絵で施し、赤色の絵付けを施す。内外面とも細かく密な貫入あり。	A 7-32 第1層	京焼系(肥前の可能性あり)18c	
	5	碗か 皿	口縁部	-	黄白色でやや粗い	ゆるやかな弧を描き口縁部は尖る。破片の全面に釉が見られる。外面の胴部に茶と緑による絵付けを施す。	警察棟 黒褐色土層	関西系 18c 代	
	6	碗か 皿	底部	-	黄白色でやや粗い	高台は細く、高台際から外底面は露胎。灰釉を施し、内底面に赤と緑の色絵付けで花文を描く。	警察棟 黒褐色土層	関西系 18c 代	
	7	蓋	口縁部	6.2	灰白色で細かい	縁に沿うように呉須による圏線を1本廻らし、甲部に絵付けで花文を配すが、色は不明。受け部と接する部分を除き総釉。	A 7-31 第2層	肥前系?	
	8	碗	口縁部	7.4	黄白色で粗い	胴部が膨み、口縁部は内湾気味。口唇部は平坦。外面の口縁部に菊花様の花文を廻らす。朱色の絵付けが、ほとんど剥げている。外面の腰部以下を除き総釉。内外面に細かく密な貫入あり。	A 7-33 第2層	京焼系?	
	9	碗?	胴部	10.2	灰白色でやや粗い	外面の上方で不明瞭な稜がみられ、そこから上部が薄くなる。腰部下方は露胎。釉は濁った感じになっている。	A 7-31 第3層	沖縄産灰釉	
	10	碗	底部	4.4	灰白色で細かい	高台は逆三角形状で、畳付は平坦。外面を斜めに面取り。高台脇から高台および外底面は露胎。内外面とも密な貫入あり。	A 7-32 第3層	沖縄産灰釉	
	11	皿	口縁部	12.2	灰白色でやや粗い	口縁部近くで厚さを減じ、そこから口縁部にかけて縁を意識している。口唇部は丸味帯びる。内外面とも腰部以下は露胎。	A 7-33 第1層	沖縄産灰釉	
	12	袋物?	底部	5.6	淡黄白色でやや細かい	碁笥底の袋物か。内面と外底面に透明釉を施し、外面に緑釉を施す。腰部下方から外底面の縁にかけて釉剥ぎ。	表採	本土産?	
	13	茶入れ?	口縁部	6.8	茶褐色の微粒子。	胴中央部が若干凹む筒形。口縁部上端が急に内傾し、蓋受け部をつくる。胴中央部に陽圏線、胴部に梅?文を配す。	A 7-31 攪乱	常滑焼?	
	14	急須?	口縁部	6.8	〃。	脛部が外側へ直線的に開き、胴部が球状に膨らむ。内側の蓋受けは脛部の中ほどで、黒味を帯びる。頸部と肩部の境目は凹線様。	B 7-29 明茶	常滑焼?	
	15	〃	底部	5.2	〃。	碁笥底。	A 7-30, 31 第2層	常滑焼?	
	16	〃	底部	4.6	〃。	高台は低く、小さく、畳付は若干凹む。腰部が丸味をもつ。	A 7-31 第2層	常滑焼?	
	17	〃	注口部	-	〃。		A 7-33 第2層	常滑焼?	
	18	〃	把手	-	-		表採	常滑焼?	
	20	鍋?	口縁部	21	灰褐色の胎土で、微砂粒の混入が目立つ。	口縁部を内側へカギ状に突出させ、その外側に断面が方形の突帯を廻らす。凸帯の外面は凹線様。口唇部は幅広く平坦で、蓋受け様になる。内面は弧状。内側の突出部は舌状。	A 7-33 第3層	土器 中世か(鎌倉・室町?)	
	第42 図版	1	瓶子	口縁部	5.6	灰白色の粗粒子。	円筒形の瓶子。頸部が直線的で短く、口縁部は逆「L」字状。一端を下側から持ち上げ、注ぎ口をつくる。明茶褐色の釉を施す。	表採	
		2	〃	肩部	9.4	灰褐色の粗粒子。	円筒形の瓶子の肩部。表面は明茶褐色、内面は緑釉を施す。	表採	
3		〃	底部	9.0	明灰色の粗粒子。	円筒形の瓶子の底部(ベタ底)。底面からの立ち上がり部を斜位に面取り。外面に気泡が目立つ。内面は露胎。	表採		
4		〃	底部	10.0	灰白色の粗粒子。	円筒形の瓶子の底部(ベタ底)。底面からの立ち上がり部を斜位に面取り。明茶褐色の釉を総釉。立ち上がり部直上にマークあり。	表採		
5		不明	胴部	18.6	橙褐色の粗粒子。	焼き締め陶器で、全体形は不明。「S」字状を呈し、上部はやや丸味を帯びる。下部は直線的で厚くなる。内面カギ状で、受け部か。	B 井戸前排水溝攪乱		
8		甗・ 壺類	底部	9.5	灰褐色の粗粒子。	底面部の縁を1.5~2.0cmほど平坦にし、そこから中央部へは上方押し上げる。立ち上がり部は比較的明瞭な角を有し、その近くまで施釉。底面部及び内面は無釉。外底面に十字のマーク様のものあり。	A 7-37 溝状遺構焼土混じり		
第39 図版	6	土管	胴部	12.0	-	類例は御細所跡にある。	A 7-31 焼土混じり		



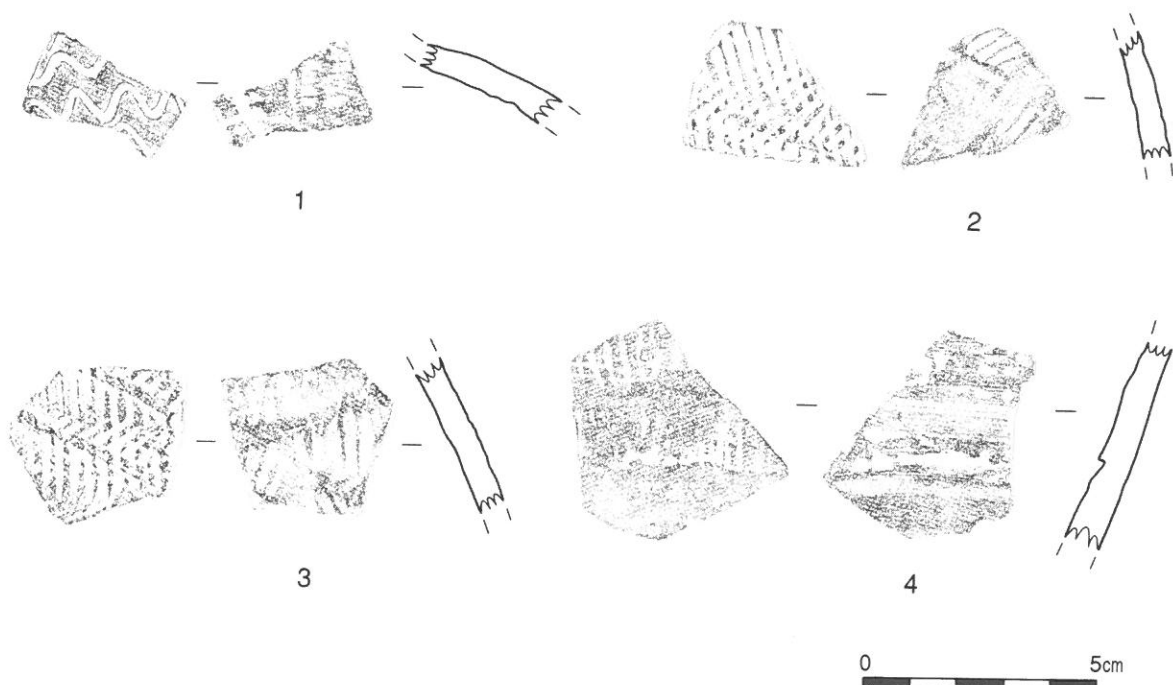
第41図 本土産陶磁器 2



第42図 本土産陶磁器 3

第11節 須 恵 器

4点得られており、第43図1～4に示した。いずれも灰黒色の器肌を有し、胎土に白色の微砂粒を多く含むという特徴がみられ、南島須恵器の範疇で捉えられるものと考えられる。4点とも小破片のため器種・器形などの詳細は判然としない。1は表面に3条の波状沈線文が認められるもので、壺形の肩部付近の資料かと考えられる。裏面には当て具の痕が残る。他は無文の胴部資料で、表面には綾杉状の叩き痕、裏面には当て具の痕が残るものである。4は表面にナデ、裏面に線状痕が仕上げとして施れされており、叩き痕や当て具の痕は2・3ほど明瞭ではない。2・3は全体的な特徴から同一個体の可能性もある。



第43図 須 恵 器

第12節 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器として分類したものは、器の表面に釉を掛けたものであり、一般的に「上焼」と呼称されるものを中心とするものが主体である。

今回出土した沖縄産施釉陶器の器種は、碗・小碗（茶碗を含む）・小杯（盃）・小皿・大皿・小鉢・大鉢・酒器（俗称：カラカラ）・急須・鍋・合子・乗燭・火取・香炉・瓶子・花瓶・壺（茶入壺・油壺を含む）・片口鉢の18種類が確認されている。これらの器に釉掛けされた釉の種類として、灰釉・鉄釉・透明釉・鉛釉・瑠璃釉・緑釉の6種類が基本的な釉色となっている。その他に素地に白色や茶色の化粧土を塗付した例や、白色のものには白化粧を施した後に透明釉を施す例がある。茶色の化粧土のものは鉄釉（褐釉を含む）を施釉するものがある。茶色の化粧土のまま放置する例は前回の報告では多い傾向にあったが、今回

の資料にはこれが確認できなかった。釉の掛け分けについてみると、三彩では明青色・濃青色の呉須系統と黄緑色・黄茶色の飴釉系統、その他に淡緑色の緑釉系統の釉が使用されているようである。三彩を施した器種として小碗・急須（大型急須を含む）で確認されている。次に呉須を施した線彫りの染付（釘彫染付）の例では、碗・茶碗で認められている。

施文具や文様の種類としては、線彫り（釘彫を含む）・櫛描き・片切り彫りなどで草花文・格子文・縦沈線文・斜沈線文・交差沈線文などを描くものと筆描き（指などを含む）で草花文・花樹文・巴文・花文・竹葉文などを描くものがある。その他に陰刻された文様に白色土（白色釉？）を文様に埋め込む白土象嵌（三島手）の資料も今回、再確認された。象嵌された器の種類として小碗・合子・火取・香炉・急須の5種類が認められた。

以下、各器種の器形や釉色（施釉手法）などの分類については、基本的に前回報告の分類概念を踏襲して行ったが、新しいタイプの出現や分類概念の再検討が生じていることが確認されたので、分類及び分類概念の見直しを行ったのでこれも以下に記述することにする。個々の特徴については観察表第9表a～hまでに呈示した。分類概念については前回のものを再録し、新しく確認したタイプを追加する方法で記述を行う。

a. 碗

器形や施釉などからⅠ～Ⅶ類に分類できた（分類概念の変更や追加等については、Ⅳ類のd種とⅤ類のc種を追加）。

・Ⅰ類（灰釉無文碗）

直口口縁の碗で高台脇から口縁にかけて、外側に開きながらストレートに移行する器形である。高台が高い無文碗である。いわゆる灰釉碗と称されるものである。施釉の手法は「フィガキー^(註1)」である。（第44図1～4）。

・Ⅱ類（灰釉有文碗）

外反口縁の碗で高台脇から外側に幾分丸味を持たせる器形である。見込みを浅く窪ませるのも特徴のひとつである。外面に鉄釉で草花文を描く。（第44図5）。

・Ⅲ類

外反口縁の碗であるが、外反の度合いに強弱があった為、釉掛けや釉の掛け分けなどでa～cの3種類に分けた。以下にその特徴を略記する。

a種…外面鉄釉、内面灰釉。見込みに丸文と圏線を鉄釉や白釉で描く。（第44図6～8）。

b種…両面鉄釉、フィガキーで施釉。見込みに鉄釉で丸文を描く。（同図9）。

c種…外面鉄釉、内面透明釉（下地に白化粧土）。（同図10）。

・Ⅳ類

口縁の外反の度合いは微弱となり、直口する碗も含まれている。釉色の違い（掛け分け）や施釉の範囲にも変化が見られたので、a～cの3種類に細分した。これらに共通する点は両面を総釉した後に内底面や畳付の釉を除去することである。

a種…外面淡青色、内面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す緑釉の碗。（今回は検出されなかった）。

b種…両面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す。有文と無文があり、有文の場合は線彫りや丸彫りで丸文に三葉文・花文などを組み合わせる。中には文様に呉須を施す「釘彫染付」も含まれている。（第44図11・12）。11は口縁に淡青緑釉を掛け分けて施す。

c種…両面鉄釉。外底面も鉄釉を施している。（今回は未検出）。

d種（新設定）…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）を施すもの（同図13）。

・V類

外反する碗で他と器形は共通するが、白化粧土の施し方などに違いが見られたので、a～cの3種類に分けた。これも両面に総釉後に内底面や畳付の釉を除去する点でⅢ類と共通する。

a種…外面透明釉（白化粧）、内面透明釉。（今回は未検出）。

b種…外面透明釉、内面透明釉（白化粧）。このタイプには有文と無文があり、有文の場合は線彫りで草花文を描いた後に文様へ呉須を施す。（今回は未検出）。

c種（新設定）…両面に透明釉と白化粧を施す。（同図14）。

・VI類

このタイプは、口縁造りから外反口縁・内彎口縁の2種類に分けられるが、両者は口縁の造りが微妙な違いである為、釉色や施釉などの方法でa・bの2種類に分けた。（今回は未検出である為、a・b種の細分類については省略する）。

・VII類

外反口縁と内彎口縁の2種類が含まれているが、両面及び外底まで白化粧を施した後に呉須を主体に飴釉・緑釉などで草花文・花文などを描き透明釉を施す。この中には三彩碗や赤絵が含まれている。これらの類似点は両面に総釉した後に内底面と畳付の釉を除去することである。（同図15～17）。今回は赤絵の碗が検出されなかったことを付記する。

b. 小碗

茶碗としての利用が主体とみられたので、碗と区別した。小碗も器形や施釉などを基本にⅠ類～Ⅴ類に大別し、必要に応じて細分した。（今回はⅤ類b種とⅥ類を新しく設定した）。

・Ⅰ類

外反と内彎の小碗がある。前者はa種、後者をb種として2種類に分けた。

a種…両面透明釉（白化粧）のものと外面透明釉、内面透明釉（白化粧）を施すものを主体とするが、器にアクセントをつける為に飴釉と緑釉を施したものがある。釉の掻き取りは総釉後に見込みと畳付の釉を除去するものと畳付の釉のみ除去するものが含まれている。この手は口縁が外反するものである。（第45図18～23）。

b種…両面透明釉（白化粧）を施すものと外面に鉄釉・透明釉、内面が透明（白化粧）を施すものがある。有文と無文の両者があり、有文の場合は呉須や白釉で花文・渦巻文などを描く。この種は内彎する小碗である。（同図24・25）。

・Ⅱ類

Ⅰ類a種と同様に外反する小碗である。外反の度合いには強弱の変化が認められる。施釉の手法などから2種類の変化が認められた。これは外面鉄釉・内面透明釉（白化粧）のタイプと外面鉄釉・内面透明釉のみを釉掛けするタイプのものである。いわば異色の釉を掛け分けているものである。（同図26・27）。

・Ⅲ類

内彎気味の有文の小碗である。文様の構成や器形などから三島手の範疇に入るものとみられる。文様は圏線・菊花文・縦沈線を描いた後に鉄釉？もしくは茶色の化粧土で象嵌を施す。（同図28）。

・Ⅳ類

腰部を篋削りで面取りした小碗で、口縁が外反する。有文と無文があり、後者のものが多い。釉掛けは両面に透明釉（白化粧）を施すものを基本とするが、透明釉（白化粧）以外に黄緑色や淡緑色の飴釉でアクセントをつけるものがある。異色の釉で器に加飾するものも文様の一種として把握し、このグループに含めた。この分類概念に今回、瑠璃釉を追加することにした。（同図29～31）。

・V類

V類は肩部が「く」の字状に折れ、口縁で外反する。文様は線彫りによる圏線と刻文を描いた後に白土で象嵌を施す。このV類を新しく、a・bの2種類に細分し、a種は前述の白土象嵌のもの、b種は無文で外面に鉄釉、内面は透明釉（白化粧）を施すものとした。器形は両者とも共通する。V類a種は今回未検出である。V類b種は第45図32に示したものである。

・VI類

新しく設定したタイプの小碗で器形が円筒状となる茶碗である。両面に透明釉（白化粧）を施す。

c. 小杯（盃）

前回は小杯が一例のみ確認されていたので、分類を実施しなかったが今回は器形や施釉・釉色などで変化が認められたので、I～III類に大別した。また、必要に応じて細分した。以下に分類概念を記述する。尚、前回のものはIII類に分類したい。

・I類

口縁が僅かに外反する小杯である。釉色や施釉方法などからa～cの3種類に細分した。

a種…両面とも淡緑灰色や淡緑黄色の透明釉を施すもので、灰釉の無文小杯である。（第46図34・35）。

b種…両面とも透明釉（白化粧）を施す。施釉手法はa種と類似する。（同図36）。

c種…外面は灰緑色の透明釉、内面が透明釉（白化粧）を施す。外面に白色の釉で斜位の点描で雫文を施す。（同図37）。

・II類

II類はI類と器形を比較した場合、高台からの立ち上がりで丸味を保持しながら内側に閉じ気味に胴上部へ移行する点で異なっている。しかし、施釉手法はI類c種と共通する。II類は外面淡灰白色の透明釉、内面が透明釉（白化粧）を施している。（第46図38）。

・III類

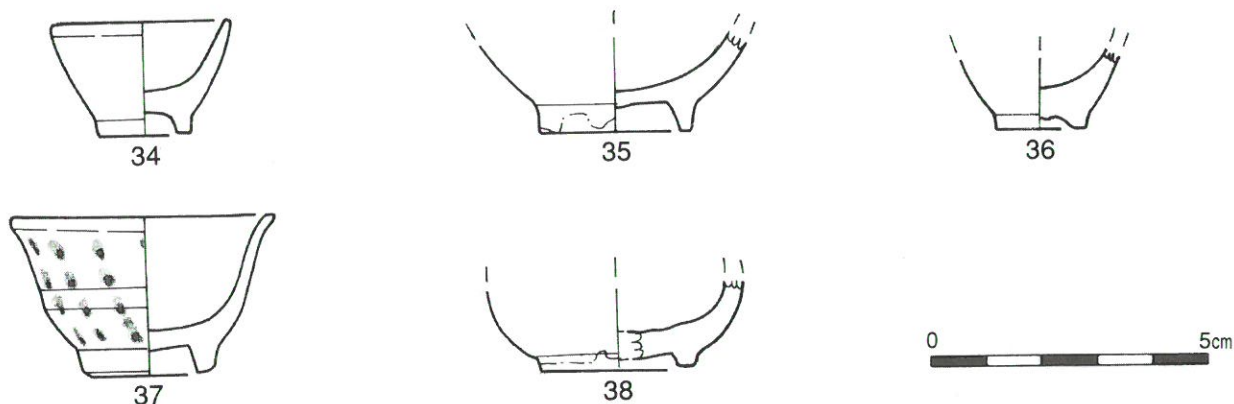
II類と同様の内彎タイプの小杯で、両面に濃緑色の釉を施す。（今回は未検出）。

d. 小皿

銘々皿の可能性もあったので大皿（盛り付け）と区別し、小皿として独立させて分類したものである。小皿は器形や施釉手法などからI類～V類までに大別し、状況に応じて細分したが今回、III類c種の新設定、IV類a・bとV類a・bの分類の見直し及び追加があったので、従来分類に追加して付記する。

・I類

I類には内彎するものと外反もしくは直口するものに分けられる。内彎する小皿は有文である。外反



第46図 沖縄産施釉陶器 3（小杯）

もしくは直口するタイプの小皿は無文であった。これらの特徴以外に施釉手法などから a～c の 3 種類に分けた。今回、この I 類は出土していないので、I 類 a 種～c 種の分類概念を省略した。

・ II 類

口縁の造りは口縁端部に指圧を加え稜花状に仕上げる小皿で、口唇に篋削りを加え面を取るものである。釉掛けの状況などから a・b の 2 種類に分けた。

a 種…両面に透明釉（白化粧）を施す。外底面にも施釉。内面に呉須で雲文？・花文などを描く。

線彫りの場合は草文・圏線を描いた後に呉須で文様に沿って筆描きを行っている。（第47図39）。

b 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文と有文があり、有文の場合は線彫りによる圏線を描く。

今回、b 種の出土はなかった。

・ III 類

口縁の外反が微弱な小皿である。施釉や釉色などの組み合わせの違いで a・b の 2 種類に分けられる。今回、新たに c 種を追加して、a～c 種の 3 種類に細分した。

a 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文の小皿である。中には口縁端に三角形の突起を貼り付けた灯明皿と判断できるものが含まれているが、釉色の変色や煤の付着がない為、灯火以外に使用されたものと理解されたので本種に含めてある。（第47図40・41）。

b 種…a 種と同様に鉄釉・透明釉（白化粧）を施すが、内面に緑釉の筆描きで花文状に施す三彩小皿である。今回は出土していない。

c 種（新設定）…a 種と同様に口縁端に三角形の突起を貼り付ける点で共通しているが、施釉手法や釉色で違いが認められる。この種は外面が灰緑色、内面は透明釉（白化粧）を施すものである。（同図42）。

・ IV 類

内彎の小皿で、両面に鉄釉をフィガキー手法で施している。IV 類を a・b の 2 種類に分類した。従来のフィガキー手法のものを a 種とした。（第47図43）。b 種は a 種と同様の鉄釉を両面に施すが施釉で a 種のフィガキーとは異なり、見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取っている。（同図44）。

・ V 類

赤絵小皿で、両面に透明釉（白化粧）を施した後に赤茶色や明緑色の釉で草花文を描いている。この V 類を a・b の 2 種類に細分した。a 種は従来の赤絵小皿である。b 種は新しく設定したもので、施釉の方法は透明釉（白化粧）を両面に施している点で a 種と共通しているが本品は無文である。V 類 a 種は今回出土されていない。V 類 b 種は第47図45に図化したものである。

e. 大皿

盛り付け用の皿とみられるものを大皿と仮に分類した。口縁形態や釉色も変化に富んでいる為、I 類～IV 類までの 4 種類に大別し、必要に応じて細分した。今回、新たに細分類の中で I 類 d・e 種と IV 類 d・e 種を追加した。

・ I 類

内彎する大振りの皿で、施釉などの状況から a～e の 5 種類に細分した。

a 種…両面に透明釉（白化粧）を施す。白化粧を施した後に鉄釉で圏線・斜沈線を筆描きする。大振りの内彎皿である。（今回は未検出である）。

b 種…外面透明釉、内面透明釉（白化粧）を施すものと両面に透明釉（白化粧）を施すものが含まれている。内面に線彫りの丸文に縦沈線文・波文などを施したのものや文様に淡緑色・淡茶色の釉を施すものがある。外反のきついものとゆるく微弱に外反するものがある。（今回は未検出である）。

c 種…両面に透明釉（白化粧）をフィガキー手法で施す。大振りの内彎皿である。（これも未検出である）。

d 種（新設定）…両面に透明釉を施し、鉄釉で圏線や斜沈線を筆描きする内彎の大皿である。施釉方法はフィガキー手法で施すものである。高台のみ出土している例からこの手法であることが読み取れるところである。（同図46～48）。

e 種（新設定）…直口气味の大皿で、両面に透明釉を施す。内面には濃緑色の釉で圏線を描く。（同図49）。

・Ⅱ類

口縁端部に指圧を加えて稜花状に仕上げる。両面に透明釉をフィガキー手法で施す。内面には鉄釉で圏線を2本描いた後に圏線の中に白色の釉を施している。また、見込みには鉄釉で丸文を描く。（今回は未検出）。

・Ⅲ類

口縁が肥厚する大皿で、疑似肥厚口縁タイプと肥厚口縁のタイプの2種類がある為、施釉・釉色などからa・bの2種類に分類した。今回は未検出のものである為、a・bの細分分類の概念を省略する。

・Ⅳ類

この手の大皿は口縁を三角形に肥厚させて仕上げているもので、釉の掛け分けや釉色などからa～cの3種類に細分したが、新たにd・eの2種類を追加した。

a 種…外面鉄釉、内面透明釉。外面の釉は高台脇で止まり、内面が総釉後に蛇ノ目状の掻き取りを行っている。（今回は未検出）。

b 種…両面に鉄釉や透明釉をフィガキー手法で釉掛けする。見込みに丸文や圏線を鉄釉・茶色の化粧土で描いている。（第47図50～53）。

c 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。外面は高台脇で釉が止まる。内面は総釉後に蛇ノ目状の掻き取り、内面及び内底面に青緑色の釉で花文を表現する。（今回は未検出）。

d 種（新設定）…口縁が三角形に肥厚するもので、施釉は外面が透明釉（白化粧）、内面は灰緑色の釉を施す。内面に白色の釉で花文を描く。（同図54）。

e 種（新設定）…施釉の手法がd種とは反対で、外面は灰緑色の釉を施し、内面に透明釉（白化粧）を施す。内面が白化粧のみで終了し、透明釉の釉掛けを忘れたものもこれに含めることにした。文様は灰緑色の釉で点描による花文を表現する。（同図55）。

f. 小鉢

本品は口縁形態や製作手法などでⅠ類からⅢ類に分類し、必要に応じて細分類を実施したが、今回、新資料の発見でⅠ類とⅡ類の分類概念の見直しと追加分類が生じたので、これを追記することにする。

・Ⅰ類

このタイプは口頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁が外側に開き傾いている。鏝付きの口折れ小鉢で、口縁内面は蓋を受けやすくする為に窪みをつける。高台脇からの立ち上がりの状態や施釉手法などからa～cまでの3種類に細分したが、資料の新発見で新たにd・e種の2種を追加した為、Ⅰ類はa～eの5種類が確認されることになった。また、Ⅰ類c種の分類概念に新たに呉須や飴釉で文様を描くことも追記して、分類の幅を広くした。

a 種…両面に黄緑色の釉を施す。外面に線彫りによる刻文・圏線・縦沈線（櫛描き）を施した後に白色釉（化粧土？）を文様に象嵌する「三鳥手」の手法である。（今回は未検出）。

b 種…両面は透明釉（白化粧）を総釉した後に畳付を露胎させたり、内底釉を蛇ノ目状に掻き取って

る。(第48図56)。

c種(分類の見直し)…両面ともb種と同様に透明釉(白化粧)を施す。内面の線彫りの格子文と波濤文を描いた後に呉須や鉄釉(飴釉の可能性あり)を文様に施すものと呉須と飴釉で文様を描くものもある。(同図57)。

d種(新設定)…両面に鉄釉を施すもの。口縁形態はI類a～c種とは若干、異なり「口折れ」となる。(同図58)。

e種(新設定)…両面に黄緑色の釉を施す。文様は白色の釉で交互に点文を飛びカンナ様に描く。(同図59)。

・II類

腰部が「く」の字状に折れる面取りの小鉢である。面取りは口縁から腰部まで篋で面を削り取り、面数を八面にして仕上っている。内面は面同士の折れの部分(面の角)に青緑色の釉を流し花卉を表現しているものであるが、今回II類をa・bの2種に分けることにした。a種は前述した面取りの腰折れ小鉢、b種は釘彫染付で、^(註2)両面とも透明釉(白化粧)を施すものである。(第48図60)。a種は今回検出されなかった。

・III類

この手は口縁が内側に強く内傾する内彎の小鉢である。施釉手法や器形の変化などからa～cの3種に分類した。今回、このIII類は出土していないので、各種の分類概念を割愛する。

9. 大鉢

大振りの鉢を仮称して大鉢とした。他器種との特異な点として高台に1・2個程度の孔を穿っている。紐通しの小孔とみられる。口縁部の特徴を掲げると外反口縁、肥厚口縁、輪花状口縁などが認められる。口縁形態や釉の状況などからI～IV類に大別される。これに新しく出土したタイプを追加・設定することにした。追加のタイプはI類にd～fの3種類、V・VI類は追加の設定となった。

・I類

口縁形態から口縁を外反させるもの、口縁を三角形状に肥厚させるもの、口縁を逆「L」字状に肥厚させるものの3つのタイプに細分できる。このタイプにd～fの3種を追加した。

a種…外面鉄釉、内面透明釉(白化粧)。口縁を外反させて口造りを行って。 (今回は未検出)。

b種…外面鉄釉、内面透明釉。口縁を三角形状に肥厚させる。(同図61)。

c種…外面に鉄釉、内面が透明釉を施す点はb種と共通するが、口造りが口縁を逆「L」字状に肥厚させている。また、緑釉で花文を表現する点などで相違がみられる。(同図62)。

d種(新設定)…両面とも透明釉(白化粧)を施す。口縁が僅かに外反する。(同図63)。

e種(新設定)…両面とも透明釉を施すものと外面鉄釉、内面に透明釉を施すものがある。口縁は逆「L」字状に肥厚する。(同図64～66)。

f種(新設定)…外面鉄釉、内面透明釉(白化粧)を施す。口縁は外反し、口唇端部が尖るものである。施釉の手法はI類b種と同様に施しているが、釉色の違いや白化粧の有無で分けられる。(同図67)。

・II類

この大鉢は口縁の内端部に指圧を加え輪花状に仕上っている。施釉や釉掛けなどからa・bの2種類に分けられるが、今回未検出の為、細分したa・bの記述を省略する。

・III類

口縁の肥厚が大きくなり、大鉢I類c種より強調される。口縁は逆「L」字状に肥厚させるが、肥厚の

突出が外側に撮み出される為に、錨状の口縁となる。施釉や釉色の違いなどから a・b の 2 種類に分けられた。

a 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。内面に青緑色や鉄釉で花文を描く。外面に凸帯状の陽圏線を施す。（第48図68）。

b 種…両面とも鉄釉をフィガキーの手法で施釉する。内面に茶褐色の化粧土で丸文と圏線を描いている。（同図69）。

・IV類

高台から丸味を保持しながら胴上部まで立ち上がらせた後に口縁を内側にきつく内彎（内傾）させる大振りの鉢である。外面には鉄釉を施し、内面に透明釉（白化粧）を施しているものであるが、今回は検出されていない。

・V類

口縁の肥厚は他と比較して肥大化するもので、口縁の肥厚を折り返して製作するものや口唇に波状の凸帯を施すものがある。a・bの2種類に分類した。両者とも明青緑色の釉を両面に施す点で一致する。

a 種（新設定）…口縁が逆「L」字状に肥厚する。肥厚は折り返して製作する。（第48図71）。

b 種（新設定）…口縁が「く」の字状に肥厚し、口唇が幅広となる。（同図72）。

・VI類

この手は火鉢の可能性が高いものである。両面に透明釉（白化粧）を施す。口縁形態が特異であり、胴部から逆「ハ」の字状に開き、口縁で「く」の字状に折り曲げて垂直に近い状態で口縁を成形している。文様は呉須で、波濤文を口縁に描き、胴部へは草花文？などを描いている。（第48図73）。

h. 鍋

鍋は口頸部が「く」の字状に折れ曲がり、底部に三角錐状の突起を貼り付けたものである。これらの鍋は口縁の造りや把手の貼り付けなどから I 類と II 類に分類した。II 類については未検出の為、分類概念を削除した。

・I類

器形は胴下部で膨れ、胴中央から若干、内側に閉じ気味になりながら頸部へ移行する。口縁部で外反させている。底部は丸底で三角錐状の突起を3個貼り付けている。紐状の把手を口縁に貼り付ける点でも II 類と区別出来る。釉色は茶褐色・黄緑色・灰緑色の透明釉を両面に施している。（第49図74～77）。その他に第50図91～95・98・99に図示した鍋の蓋も出土しているが、身の分類と一致させるのは困難であったので、一部を除いて蓋の分類は実施しなかった。

i. 酒器

いわゆるカラカラと俗称されるもので、その用途は酒入れである。器形や文様の有無で a・b の 2 種類に分けられるが、今回、種類も豊富となったので、従来の a・b 種を I 類 a・b と改め、II・III 類を新しく設定することにした。以下に記す。

・I類

器形や文様の有無で a・b の 2 種類に分類した。

a 種…無文の酒器で、胴部に丸味を持たせて頸部で極端に細まっている。口縁は酒を入れやすいように口縁を外側に一端強く突出させた後に口縁端部を撮み上げている。（今回は未検出）。

b 種…有文の酒器である。胴部中央で算盤玉のように成形させる為、屈曲がきつくなっている。文様は丸彫りによる緻密な縦沈線と圏線を施す。（第49図82）。

・Ⅱ類

今回、新しく設定したタイプである。器形は円筒形に近いものと円筒形のものがある。口造りから a～c の 3 種類に細分した。

a 種（新設定）…肩部を「く」の字状に折曲させるもので、両面に透明釉（白化粧）を施す。（同図78）。

b 種（新設定）…口縁を内方向に直角にきつく折り曲げている。外面は透明釉（白化粧）。内面が透明釉のみである。（同図79）。

c 種（新設定）…口縁を内側にきつく折り曲げる為、形態は鉤状となる。外面は青緑色の釉、内面が透明釉を施している。（同図80）。

・Ⅲ類

吊鐘状の酒器で今回、初めて確認されたタイプである。高台は「ハ」の字状の幅広高台である。外面に鉄釉を施す。内面は無釉で露胎する。（同図83）。

j. 急須

急須の蓋と身を文様や釉色などから両者（蓋と身）を一致させた分類概念を記述する。分類概念は前回報告した身の分類でⅠ類～Ⅲ類と3種に分けたものに今回、Ⅳ～Ⅵ類を追加することにした。蓋を含めて分類することにした。各類の項目の後に括弧で部位名等をかこんで表示する。また、レイアウトの関係上、図番号・遺物番号が飛び交うことを付記する。

・Ⅰ類（身・蓋共通）

無文の急須で、底部に三角錐状の突起を3個貼り付けて脚とするものである。釉色や釉掛けの相違から a・b の 2 種類に分けた。

a 種…両面に透明釉を施す。外面は口唇と底面を除き施釉し、内面は口縁のみ露胎する。（未検出）。

b 種…外面に黒釉を施し、釉は外面が口縁から胴下部まで施している。内面は頸部の釉垂れを除き露胎する。（第50図86・第53図136～141）。

・Ⅱ類（身・蓋共通）

有文の急須で、異色の釉で文様などを表現するものや線彫りによる格子文・圏線・丸文などを描いた後に異色の釉を文様に掛けてあるものがある。このタイプは全て三彩急須として把握できるものである。三彩急須の範疇に入るものとして考えられた。（第50図87・第53図142・143）。

・Ⅲ類（身）

三鳥手の急須である。外面や把手の部分に線彫りによる沈線・圏線などを描いた後に白土を文様に埋め込んでいる（象嵌技法）。第53図144・145。144は象嵌はないが白土の代わりに釉を文様に施す。文様の構成は象嵌のタイプと一致した構成である為、このタイプに含めた。白土の象嵌を忘れた可能性が高い。

・Ⅳ類（身・蓋共通）…新設定

染付の急須であり、この中には釘彫染付も含めてある。蓋は外面（蓋甲）が透明釉（白化粧）、内面は白化粧のみである。一方、身は両面とも透明釉（白化粧）を施している。（第50図88・第53図146）。

・Ⅴ類（蓋のみ）…新設定

蓋甲の文様や施釉などから a・b の 2 種類に分けた。蓋甲の裏面は両者とも露胎である。

a 種…蓋甲は透明釉（白化粧）を施す。3本単位の櫛描きの沈線を施す。（第50図89）。

b 種…蓋甲は透明釉のみを施す。線彫りの圏線と沈線を施し、沈線間を菊花文のスタンプで施している。（同図90）。

・Ⅵ類（身のみ）…新設定

注ぎ口のみが出土しているが、瑠璃釉である為、設定した。大型急須には瑠璃釉が確認されたので、小

型の瑠璃釉急須の存在が濃厚となった。(第53図147)。

k. 合子・水滴

合子と水滴?の蓋とみられるものが2点出土している。合子の蓋は白土象嵌の三島手のものである(第50図100)。水滴?の蓋は呉須で「天」の字を筆描きしたものである。(同図101)。その他に水滴(第52図127)の底部片とみられるものが1点出土している。器形は側面観が扁楕円形状となるもので、底造りは碁筒底状に仕上げている。

l. 乗燭

「ウドンモー」と称されているもので、器内に灯心を支える切り込みのある円筒状の突起をもつものである。円筒状の突起は貼り付けである為、脚と身の製作過程にも注目し、I類a種~I類c種の3タイプに分類したが、改めてII類を追加し再分類を行うことにした。

・I類

a種…両面に灰緑色の釉を施す。口縁が直口し、脚上部から丸味を持っている。脚と身(器)は同一工程で製作され、脚から身までは一挙に造り上げている。(今回は未検出であった)。

b種…両面に灰緑色の釉を施す点は、I類a種と同じであるが、口縁を内側にきつく内傾させている。脚は中空である為、脚と身は別工程で製作し、最終的に身と脚を貼り付けて完成させている。(今回は未検出である)。

c種…両面に黒釉を施す。器形はI類b種と類似するが脚が短く、身と脚は同一工程で一挙に造り上げている。(第51図102)。

・II類

このタイプは製作工程がI類a種に近い方法で仕上げているが、II類は外底面への穿孔がない点で区別できる。II類の特徴は外底面に高台を貼り付けている点である。両面に淡青緑色の釉を施している。(同図103)。

m. 火取

円筒状で高台を持つ器形のみである。外面に丸彫りによる圏線と緻密な縦沈線や波文を施すものと線彫りで圏線・縦沈線と型押しの上華文を施すものの2種があり、前者をa種とし、後者をb種としたが、今回、新たに内彎形の器形をもつものや施釉・釉色などから分類の見直しが生じたので、これを記す。

・I類

従来、単にa・b種として取り扱ったものであるが、ここではI類a・b種として改めた。また、b種の分類に追加資料を加え再度見直した。

a種…丸彫りによる圏線と緻密な縦沈線や波文を施すもの。(同図104・105)。

b種…白土で象嵌する三島手のもので丸彫りの疎密のある斜沈線と丸彫り・片切り彫りの短沈線・圏線を施したものである。(同図106・107)。

・II類

器形はI類と同様に円筒形のものであるが、施釉や釉色などからa~c種の3種類に分類した。

a種(新設定)…外面は淡灰緑色、内面が無釉。口縁内端が僅かに肥厚する。(同図108)。

b種(新設定)…外面は透明釉(白化粧)、内面が白化粧のみ施す。(同図109)。

c種(新設定)…両面に鉄釉と青白色の釉を掛け分けている。口縁内端が僅かに肥厚する。(同図110)。

・III類

口縁が内彎するタイプの火取で、施釉や釉色などからa~cの3種類に分けた。

a種(新設定)…外面は淡黄茶色や灰釉色の釉を施す。内面は露胎のものや透明釉のものがある。有文

と無文の二者があり、有文の場合は丸彫りの圏線を施している。(同図111・113)。

b種(新設定)…外面は鉄釉と淡灰白色の釉を掛け分けて施し、内面が露胎のもの。(同図112)。

・IV類

このタイプもⅢ類(新設定)と同様に内彎する火取である。丸彫りの圏線と交差沈線を施した後に白土で象嵌する三鳥手のものである。(同図114)。

n. 香炉

香炉については、前回、分類を実施していなかったため、ここでも分類の実施を見送ることにした。基本的な特徴を前回の報告から抜き出す。香炉は三足香炉で、底部は丸味のある平底や外底面に浅い抉りを入れ碁笥底状に仕上げるものがある。口縁はきつく外反するものや「く」の字状に折れるものがある。釉色や他の釉との掛け分けなどに変化が見られ豊富である。前は三彩・灰釉・鉄釉・緑釉の香炉が確認されたが、今回は同図115の鉄釉(白化粧)を施すものと同図116の三鳥手(口唇に有軸羽状の文様を丸彫りした後に白土で象嵌するもの)が出土している。

o. 火炉

急須や鍋などを置いて炭火で保温(再加熱を含む)する炉で、両面の口縁端部に三角形状の大型の突起を貼りつけている。また、炭を入れやすくする為に、口縁を「U」の字状に抉り取っていたり、穿孔された把手を外面胴部に貼り付けているのも特徴である。把手には獅子面が施されているのも特徴である。獅子面が彫りによるものか型によるものかは今回確認できなかったが、状況から考えられたのは後者の型物の可能性であった。器形の変化などからⅠ類～Ⅲ類に分けた。今回の発掘調査ではⅡ・Ⅲ類は出土していないので分類概念を割愛する。Ⅰ類のみを記すことにした。

・Ⅰ類

高台から丸味を持ったまま立ち上がり、胴上部から口縁は内側へ強く内傾する。全体的に丸味のある器形となっている。有文と無文の二者が確認された。有文の場合は口縁から胴部に片切り彫りの緻密な縦沈線を施している。釉色は黒褐色や茶褐色を帯びたものを両面に施していて、中には天目茶碗にみられる褐錆斑が認められるものもある。(同図117)。

p. 瓶子

瓶子は器形や釉色などの変化が著しい為、a～c種の3種類に分けられた。a種は外面に透明釉(白化粧)+緑釉+飴釉を施した三彩の瓶子で、器形は胴長のナデ肩である。頸部から口縁方向に向かって細まってくる。b種は外面に黒釉と透明釉を掛け分けて施している。頸部は細長く、胴部で丸味を帯びている。c種は両面に明茶色の釉を施し、器形が円筒形となる瓶子である。口縁は逆「L」字状に屈曲し、一端をつまみ出して注ぎ口とする。今回はb種(同図118)のみ確認された。その他に瓶子の口縁と胴・底部とみられるものが3点出土している。(同図121・122、第52図126)。126は糸切りの底である。

q. 茶入

薄手の茶入壺が1点出土している。怒り肩のタイプとみられるもので、両面に濃茶色の釉(鉄釉)を施している。口縁は小さい玉縁状の肥厚である。(第51図120)。

r. 花瓶

前は大型の花瓶の底部片が1点出土していた。底造りは高台を「ハ」の字状に成形する脚状のものであったが、今回も、同様な成形で高台を造るものであり、1点のみ出土している。外面に鉄釉を施している。(同図119)。その他に花瓶の胴部片が3点(同図122・123・125)得られているので、これを図化した。

s. 油壺

この小壺は髭付け油用とみられるもので、すべて黒釉である。器形や底造りなどから a～c までの 3 種類に分けた。a 種は怒り肩気味の小壺で、高台外面を削り出し、底造りを意識して強調するもの。b 種はナデ肩気味の小壺である。底造りはベタ底のままですべて終了しているもの。c 種は肩部が屈曲するが、全体的には円筒形状に近い小壺である。底面のみ削り出して、畳付を造っているものである。今回は b・c 種は確認されなかった。第52図127に図示した a 種が 1 点出土している程度である。

t. 壺

器形や釉色などから I～III 類の 3 種類に分類した。分類概念は以下に略記する。

・ I 類

外反する黒釉の壺である。全体的に丸味を帯びている。内面に茶褐色の化粧土を塗付する。今回は未検出である。

・ II 類

いわゆる嘉瓶と称されるもので、黒色の釉を施す。胴中央で一端細まる。今回は確認されていない。

・ III 類

広口の壺で、食用油専用の四耳壺である。耳は穿孔され縦長に貼り付けられる。(第52図130～135)。その他に第51図124と第52図128に図示した壺の底部片 2 点が得られている。前者は鉄釉を施し、後者は黄緑色の釉を施している。

u. 大型急須

大振りの急須で「アンビン」と称されているものである。前回出土した大型急須の釉色は全て黒釉を施しているものであったが、今回のものは釉色が、黒釉以外に透明釉（白化粧）と濃青色の釉などが使用され、三彩や瑠璃釉のものが初めて確認された。(第53図148～152)。

v. 片口鉢

同図153は高台脇から腰下部は大きく丸味をもちながら膨らみ、腰下部から口縁方向へは垂直に立ち上がって来る。器形は大振りの深鉢である。高台脇が僅かに残存する状況や口造りなどから片口鉢と分類した。口縁の両端が突出する為、口唇は幅広となっている。

w. 小 結

前回、報告(行政棟)^(註3)した分類と今回、新たに設定し、追加したグループから湧田窯系の特徴のひとつであるフィガキー手法で、灰釉と鉄釉を施したものを器種分類ごとに抜き出してみることにする。これによって湧田窯系で、どのような器種を焼成したかをある程度、推定できるものと考えたからである。湧田から出土する上焼には壺屋窯系のものが混在し、両者を区別する為にも、ひとつの手掛かりとして湧田窯系の伝統的な手法と伝えられるフィガキー手法を基本に各器種の各分類から抽出することにした。

湧田窯系出土のフィガキー手法が、単純にフィガキー＝湧田焼ではなく、湧田窯系にはフィガキー手法＋Xの手法も加味されていくことが予想できる。フィガキー＋X＝湧田窯系のXの要素のひとつは、多和田真淳氏の提示した朝鮮陶工の影響と判断した菊花の象眼等花三島風のものや釘彫染付の導入であろう。もうひとつは平田典通や仲村渠致元が中国・薩摩から導入された技法などを加えなければならないようである。これによって湧田窯系がどのような製品を製作していたかをある程度解明できるものとして考えるところである。

初めにフィガキー手法で灰釉（緑灰色・灰緑色・淡灰色・黄緑色など）を施した器種は、碗（I類・II類）、小杯I類a種、小皿I類a種、大皿（I類c・d種、IV類b種）、小鉢III類c種、大鉢III類b種、香炉（灰釉）の7器種10種類であった。

次にフィガキー手法で鉄釉（茶褐色・茶黒色など）を施した器種は、碗Ⅲ類b種、小皿Ⅳ類a種、大皿Ⅳ類b種、小鉢Ⅲ類c種、大鉢Ⅲ類b種、香炉（鉄釉）の6器種6種類であった。

以上がフィガキー手法による器種構成であるが、両者は小杯以外は共通してみられる。

三島手の技法について抽出することにするが、行政棟（報告済み）の第Ⅰ地区、第1瓦層から出土した火鉢には透明釉（白化粧）に三島手技法の楡描き文と圏線を施した後に呉須を施したものが出土している。この火鉢の内面には青緑色の釉を掛けていて、17世紀中頃に比定される資料として考えられる。少なくとも17世紀中頃には、三島手技法以外に透明釉（白化粧）と呉須を施す手法や青緑色などを掛け分けていく技法がある程度、出現していたものとして今のところ考えられる。

三島手技法（白土象嵌や茶色釉の象嵌）で製作されたものや三島手の影響を受けたものを抽出するとその器種は、碗Ⅵ類b種、小碗（Ⅳ類・Ⅴ類）、小鉢Ⅰ類a種、急須Ⅲ類、火取Ⅰ類b種、香炉（三島手）の6器種7種類で、前述したフィガキー手法（灰釉・鉄釉）の器種とは小碗・急須・火取の3器種はダブりが無いことが判る。その他に多和田真淳氏が、釘彫染付も湧田窯系の特徴として考えておられたが、これについては紙数の関係上省略することにした。

今回、新たに確認された器種や追加などを行ったタイプは、碗（Ⅳ類d種、Ⅴ類c種）、小碗（Ⅴ類b種、Ⅵ類）、小杯（Ⅰ・Ⅱ類）、小皿（Ⅲ類c種、Ⅳ類b種、Ⅴ類b種）、大皿（Ⅰ類d・e種、Ⅳ類d・e種）、小鉢（Ⅰ類c・d・e種）、大鉢（Ⅰ類d・e種、Ⅴ類、Ⅵ類）、酒器（Ⅱ・Ⅲ類）、急須（Ⅴ類・Ⅵ類）、乗燭Ⅱ類、火取（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）の11器種28種類であった。それ以外に香炉の中に鉄釉（白化粧）を施すもの（第51図115）と三島手（口唇に有軸羽状の文様に白土の象嵌）を施すもの（第51図116）が確認されている。同様なことが大型急須の第53図147の透明釉（白化粧）・同図151の三彩・同図152の瑠璃釉が確認された。瑠璃釉は急須Ⅵ類にも認められている。今回の出土品の傾向をみると赤絵のものが確認されていたことが注目された。その他に第45図23の小碗Ⅰ類（三彩小碗）と同図27の小碗Ⅱ類の2点は素地に「荒焼」の陶土を用いて製作しているものが含まれていることが判明した。上焼用の陶土が不足した為に、一時的に荒焼の陶土を使用したのかあるいは試験的に焼いたのかどうかは判然としないところである。

最後に第51図120の茶入壺が今回、初めて確認されたことは貴重な発見であり、注目される資料として理解される。この手の茶入壺は今のところ報告例がないようである。

今回、フィガキー手法（灰釉・鉄釉）・三島手技法に注目したが、フィガキー手法や三島手技法は、首里王府によって1682年に壺屋に窯を統合した後も引き継がれていることが、『壺屋古窯群Ⅰ』^(註5)でも確認されている。1682年の壺屋統合後のフィガキー手法・三島手技法（象嵌）・釘彫染付の器種構成で器種が減少しているかを確認することが必要であろう。今後、素地も含めて検討すれば、湧田と壺屋がある程度の区別は可能かと考えられたが、時間的な制約で、今回は見送ることにした。

註

註1. 釉薬に浸して掛ける手法で、見込みと高台が露胎する点に特徴がある。

註2. 多和田真淳「琉球陶器の分類学的考察」『琉球の文化』創刊号 1972年。

註3. 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡（Ⅰ）— 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 —』1993年。

註4. 註2に同じ。

註5. 島 弘・玉城安明ほか『壺屋古窯群Ⅰ— 個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査 —』那覇市教育委員会 1992年。

第9表a 沖縄産施釉陶器観察一覽

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉(外面)	釉(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第44 図 版	1	碗Ⅰ	11.0 — —	淡灰色。透明釉	同左。	灰白色。微粒子。	口縁は総釉。	同左。	口縁は丸味を帯び、口縁に鉄釉を施す。両面に細かい貫入。	ノ-30 第2層
	2	碗Ⅰ	12.9 — —	灰緑色。透明釉。	同左。	灰白色。微粒子。	腰部まで施釉	腰下部まで施釉。	口縁は尖り気味に雑な篋削りで成形。両面に粗い貫入。	表採
	3	碗Ⅰ	7.0 — —	淡黄色。透明釉。	同左。	淡黄白色。細粒子。半磁胎	腰部まで施釉	同上。	フィガキー手法で、腰下部から高台は露胎する。両面に細かい貫入。見込みは丸味を持たせて成形される。	ヒ-32 第2層 砂利混り
	4	碗Ⅰ	6.4 — —	灰緑色。透明釉。	無釉。	灰白色。微粒子。	高台脇まで施釉。	無釉。	フィガキー手法で、腰下部から高台は露胎する。両面に細かい貫入。見込みは丸味を帯びる。	表採
	5	碗Ⅱ (鉄絵碗)	— — —	青灰色。失透釉	同左。	灰白色。微粒子。	腰部まで施釉	同左。	口縁が僅かに外反する灰釉有文碗。外面に鉄釉で草花文を描く。	ノ-28 灰茶色土層
	6	碗Ⅲa	— — —	鉄釉。失透釉。	淡灰色。透明釉。	灰白色。微粒子。	胴部まで施釉	腰下部まで施釉。	腰部が緩やかに膨む。内面に白色の釉で圏線を描く。内面に細かい貫入。	ノ-30 第2層
	7	碗Ⅲa	5.9 — —	鉄釉。失透釉。		淡黄白色。細粒子。半磁胎	高台脇まで施釉。	全面施釉後に釉を一部掻き取る。	内底釉を蛇ノ目状に掻き取る。見込みに白色釉で丸文を描く。高台内外端と畳付に砂目(石灰分?)が付着。見込みに目痕がみられる。内面に細かい貫入。	表採
	8	碗Ⅲa	6.1 — —	鉄釉。失透釉。	灰緑色。透明釉。	淡灰色。細粒子。	同上。	同上。	内底釉を蛇ノ目状に掻き取る。見込みに鉄釉で丸文を描く。高台内外端と畳付に砂目(石灰分?)が付着。見込みに目痕がみられる。内面の貫入は細かい。	フ-30 壁面
	9	碗Ⅲb	13.2 6.4 6.1	鉄釉。透明釉	同左。	淡黄白色。細粒子。半磁胎	同上。	同上。	腰部で緩やかに膨みながら腰上部まで移行するが、口縁からは直線的に移行。見込みに鉄釉で丸文を描いた後にフィガキー手法で施釉。高台内外端に石灰分?が付着。両面に細かい貫入。	ノ-30 第2層
	10	碗Ⅲc	11.9 — —	鉄釉。失透釉。	透明釉。白化粧	淡黄白色。細粒子。半磁胎	口縁は総釉。	口縁は総釉。	口縁で僅かに外反する。内面に細かい貫入。	ヌ-30 第2b層
	11	碗Ⅳb (無文)	14.0 — —	透明釉。白化粧。口縁は淡青緑釉。	同左。	淡黄白色。細粒子。	同上。	同上。	口縁の外反は微弱である。両面に細かい貫入。	ノ-30 東壁
	12	碗Ⅳb (有文)	10.0 — —	透明釉。白化粧。	同左。	淡灰色。細粒子。	同上。	同上。	口縁の外反はゆるやかに微弱。両面に細かい貫入。外面に線影りの草花文を描いた後に呉須を施す。釘彫染付。	ヌ-32 第1層
	13	碗Ⅳd	4.9 — —	鉄釉。失透釉。	透明釉。白化粧。	淡黄白色。細粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	全面施釉後に釉を一部掻き取る。	見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。畳付に砂目(石灰分?)が付着。	表採
	14	碗Ⅴc	11.9 — —	透明釉。白化粧。	同上。	淡灰色。微粒子。	総釉。	腰下部まで施釉。	腰下部に掻き取り。両面に細かい貫入。	ハ-30・31 第2層
	15	碗Ⅵ	12.6 6.0 5.9	同上。	同上。	淡黄白色。微粒子。	高台内面途中まで施釉した後に畳付の釉を除去	全面施釉後に見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。	口縁が外反する。呉須で草花文を描く。両面に細かい貫入。	ハ-30 攪乱層
	16	碗Ⅵ	6.5 — —	同上。	同上。	同上。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	同上。	呉須で花樹文と巴文を描く。内面に呉須で圏線を2本描く。細かい貫入。	表採
	17	碗Ⅵ	13.8 6.5 7.2	同上。	同上。	同上。	同上。	同上。	呉須と総釉で花文を描く。花文は3ヶ所に配置。両面に細かい貫入。見込みと畳付に砂目(石灰分?)が付着。	ヒ-30 第2層 炬跡
第45 図 版	18	小碗Ⅰa	9.8 — —	同上。	同上。	淡黄白色。微粒子。	口縁は総釉。	口縁は総釉	無文の外反小碗。両面に細かい貫入。	フ-31 第3層
	19	小碗Ⅰ	4.2 — —	同上。	同上。	淡黄白色。微粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉後に畳付の釉を蛇ノ目状に掻き取る。	見込みと畳付に砂目(石灰分?)が付着。透明釉が黄色く、くすんでいる。両面に貫入。	ノ-30 東壁
	20	小碗Ⅰa	8.6 — —	同上。	同上。	灰黒色。微粒子。	口縁は総釉。	同左。	呉須で圏線・区画文・竹葉文を描く。両面に細かい貫入。	表採
	21	小碗Ⅰ	3.8 — —	同上。	同上。	淡黄白色。微粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉。	見込みに呉須で花文を描く。両面に細かい貫入。	フ-31 攪乱
	22	小碗Ⅰa	9.4 — —	同上。	同上。	淡黄白色。細粒子。半磁胎	口縁は総釉。	総釉後に見込みの釉を掻き取る。	内面に呉須で構図不明のものを描く。両面に細かい貫入。	ニ-34 第2層
	23	小碗Ⅰ (三彩小碗)	3.9 — —	同上。	同上。	淡紫色。細粒子(荒焼の素地を用いる)。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉。	線影りで構図不明を彫り込んだ後に呉須で線を埋めている。部分的に淡緑色と濃青色の釉が掛けられている。内面に粗い貫入。	表採
	24	小碗Ⅰb	8.4 3.9 4.5	黄緑色。透明釉。	同左。	淡黄白色。微粒子。半磁胎	同上。	同上。	両面に白色の釉で「共進会」の銘や高卷き文が施されている。両面に細かい貫入。	ハ-30 茶褐色土層
	25	小碗Ⅰb	7.1 3.5 4.2	灰緑色。透明釉。	同左。	灰白色。微粒子。	同上。	同上。	内面は刷毛で調整か。外面に細かい貫入。	ヒ-30 井戸攪乱
	26	小碗Ⅱ	8.4 3.9 4.7	鉄釉。失透釉	同左。	淡黄白色。細粒子。	同上。	総釉後に見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。	口縁を外反させた後に口縁に丸彫りで削り出しを行ない口縁を強調。見込み及び高台の内外端に白色(石灰分?)の目痕がみられる。内面に細かい貫入。	ノ-30 第2層

第9表 b 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉(外面)	釉(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第45図 ・ 図版42	27	小碗Ⅱ	— 4.2 —	鉄釉。失透釉。	白化粧のみ。	淡橙色。細粒子。	高台脇まで施釉。	総釉後に見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。	陶土に荒焼きの素地を使用。透明釉が施されていない点が注目される。貫入はない。	A区ヌー34第1層
	28	小碗Ⅲ(象嵌)	— — —	淡茶色。失透釉。	同左。	淡黄白色。細粒子。半磁胎。	口縁は総釉。	同左。	外面に鉄釉の圏線で文様帯を造り、その直下に白色釉を施した後に釘彫りで、長短のある斜沈線文を描き、鉄釉で象嵌。両面とも刷毛目で調整。貫入はない。	A区ハー32第2層 砂利混り
	29	小碗Ⅳ(面取り)	8.4 — —	透明釉。白化粧。	同左。	淡黄白色。細粒子。半磁胎。	同上。	同左。	口縁を外反させた後に口縁直下に削りを入れて口縁を強調する。外面は篋削りで、六角形(縦長で歪な)の面を取る。両面に細かい貫入。	不明
	30	小碗Ⅳ(瑠璃釉)	— 3.6 —	瑠璃色。白化粧。透明釉。	同上。	淡黄白色。細粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉。	外面は篋削りで六角形(縦長で歪な)の面を取る。両面に粗い貫入。	A区ニー31 クチャ 攪乱
	31	小碗Ⅳ(鉄釉)	— 3.5 —	茶褐色。失透釉。	同上。	灰白色。細粒子。	同上。	同上。	外面は篋削りで六角形(縦長で歪な)の面を取る。内面に細かい貫入。外面は白化粧が施されていない。	フー27 明茶色土層
	32	小碗Ⅴb	— — —	鉄釉。失透釉。	同上。	灰色。細粒子。	口縁は総釉。	同左。	外反口縁で肩部が「く」の字状に折れる。口唇先端を篋削りで尖らせて仕上げる。内面に貫入。	フー31 第1層
	33	小碗Ⅵ	7.8 4.2 7.0	透明釉。白化粧。	同上。	同上。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉。	釘彫で「部」の銘と構図不詳を描き、呉須を文様に施す。外底面に大きな亀裂あり。	表探
第46図 ・ 図版43	34	小杯Ⅰa	3.3 1.7 2.0	淡緑灰色。透明釉。	淡緑灰色。透明釉。	淡灰白色。微粒子。	畳付、高台内面・外底面が露胎。	同上。	口縁直下に浅く篋削りを入れ口縁の外反を強調する。両面に粗い貫入。両面に小さな気泡状の歪な円が多くみられる。	不明
	35	小杯Ⅰa	— 2.8 —	淡緑黄色。透明釉。	同左。	灰白色。微粒子。	同上。	同上。	素地が非常に細く、精選される。高台の造りも丁寧。腰下部は若干丸味を帯び外側に開き気味。両面に粗い貫入。	ハー29 攪乱層
	36	小杯Ⅰb	— 1.6 —	透明釉。白化粧。	同左。	白色。細粒子。半磁胎。	同上。	同上。	高台が他と比較して低く、内削りも浅い。	不明
	37	小杯Ⅰc	4.8 2.4 3.0	灰緑色。透明釉。	同上。	淡灰色。微粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	同上。	外反口縁。口縁直下に削りを入れて口縁を強調。外面に白色の釉で斜位の点描で雲文を表現。外面口縁から内面口縁に明黄色の釉を帯状に施す。内面に粗い貫入。	表探
38	小杯Ⅱ	— 2.8 —	淡灰白色。透明釉。	同上。	淡灰白色。細粒子。	同上。	同上。	畳付に白色(石灰分?)が付着。外底面及び見込みに鉄分を多く黒色の鉱物が付着。鉄片などを重ね焼きの跡、使用か。貫入はない。	ノー29 茶色土層	
第47図 ・ 図版44	39	小皿Ⅱa	12.2 — —	透明釉。白化粧。	同上。	淡灰色。微粒子。	口縁は総釉。	同左。	口縁端部に指圧を加えた稜花状小皿。口唇は鉄釉を掛ける。両面に細かい貫入。	ノー32 第1層
	40	小皿Ⅲa	8.0 3.5 2.5	茶褐色。失透釉。	同上。	淡灰色。細粒子。	総釉後に畳付の釉を掻き取る。	総釉後に見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。	外反口縁碗。内面に貫入。	井戸前排水 攪乱
	41	小皿Ⅲa	9.4 4.1 2.6	同上。	同上。	同上。	同上。	同上。	外反口縁碗。内面に貫入。	ハー30 茶褐色土層
	42	小皿Ⅲc	— — —	灰緑色。透明釉。	同上。	同上。	口縁は総釉。	同左。	口縁が僅かに外反する。内面に粗い貫入。	ノー32 第2層
	43	小皿Ⅳa	10.5 — —	茶褐色。失透釉。	同左。	同上。	腰下部まで施釉。	口縁まで施釉	内彎の小皿。鉄釉をフィガキー手法で施す。貫入はない。	不明
	44	小皿Ⅳb	10.2 4.4 3.2	茶黒色。失透釉。	同左。	同上。	口縁のみ施釉	総釉後に見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。	内彎の小皿。外底面から腰下部が煤ける。畳付と高台内面に煤の固まりあり。	ヌー34 第1層
	45	小皿Ⅳb	11.3 — —	透明釉。白化粧。	同左。	淡灰白色。微粒子。	口縁から胴部まで施釉。	同左。	内彎小皿。両面に細かい貫入。	ノー29 茶褐色土層
	46	大皿Ⅰd	— — —	透明釉。淡緑灰色。	同左。	淡灰白色。細粒子。	口縁は総釉。	同左。	内彎大皿。内面に鉄釉で圏線や斜沈線文を描く。貫入はない。	ヒー31 第2層
	47	大皿Ⅰd	— — —	同上。	同左。	同上。	腰下部まで施釉。	同左。	内彎大皿。外面に鉄釉で斜沈線文?を筆描き、内面のみ細かい貫入。	フー32 第2層
48	大皿Ⅰd	— 10.5 —	——	——	白色。微粒子	高台無釉。	同左。	フィガキー手法で施されたものとして考えられる。	ハー30 明茶色土層	
49	大皿Ⅰe	— — —	緑茶色。失透釉。	淡灰緑色。透明釉	淡黄白色。細粒子	口縁は総釉。	腰下部まで施釉。	直口気味の大皿。口縁が僅かに肥厚。内面に濃緑色の釉で圏線を2本描く。	ノー28 茶褐色	
50	大皿Ⅳb	20.0 — —	濃茶色。失透釉。	淡灰緑色。失透釉	同上。	同上。	口縁は総釉。	口縁が三角形に肥厚。貫入はない。	ヌー33 第1層	
51	大皿Ⅳb	— 8.0 —	淡灰色。透明釉。	同左。	淡黄白色。微粒子。	高台脇まで施釉。	腰下部まで施釉。	内面に鉄釉で圏線を描く。外面に細かい貫入。	ヒー30 壁面	
52	大皿Ⅳb	22.0 — —	淡灰白色。透明釉。	同左。	淡灰白色。微粒子。	口縁は総釉	同左。	口縁が三角形に肥厚。両面に細かい貫入。	フー31 第3層	

第9表c 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉(外面)	釉(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点	
第47図・図版44	53	大皿IVb	— 8.3 —	淡緑灰色。 透明釉。	同左。	淡黄白色。 細粒子。	高台脇まで施 釉。	腰下部まで施 釉。	フィガキー手法で施釉。見込みに淡茶色の釉で丸文。 内面には緑茶色の釉で圏線。	ノ-30 第2b層。焼 土混じり。	
	54	大皿IVd	— 24.0 —	透明釉。 白化粧。	灰緑色。	淡茶色。 細粒子。	口縁は総釉。	同左。	口縁が三角形に肥厚。肥厚帯直下に削りを入れて肥 厚を強調。内面に白色の釉で花文を描く。	ノ-30 第2層	
	55	大皿IVe	— — —	— — —	灰緑色。	白化粧。	淡黄白色。 微粒子。	胴部は総釉。	同左。	透明釉の施しが無い。内面に灰緑色の釉で花文を描く。	ノ-30 第2層
第48図	56	小鉢Ib	— 16.6 —	透明釉。白化 粧。淡黄白色	同左。	黄白色。 細粒子。	口縁は総釉。	同左。	口頸部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁端部を内 側に内彎させる。両面に粗い貫入。	ヌ-30 壁面	
	57	小鉢Ic	— 19.5 —	— — —	同上。	同上。	同上。	同左。	口頸部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁端部を内 側に内彎させる。内面に呉須で区画文を描いた後に区 画内に筋釉を施す。	ナ-31・32 焼土混じり	
	58	小鉢Id	— 12.8 —	鉄釉。 茶褐色。	同左。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	口頸部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁端部を内 側に内彎させる。外面の口頸部を丸腕で削り折れを強 調する。内面の屈曲は明瞭な稜が入る。	フ-30 第2層	
	59	小鉢Ie	— — —	黄緑色。透明 釉。	同左。	淡黄白色。 微粒子。	同上。	同左。	口縁外端は削り。口縁内端は三角形に突出。外面 に白色の釉で交互に点文を描く。両面に粗い貫入。	ヌ-31 不明	
	60	小鉢IIb (釘彫染付)	— — —	透明釉。白化 粧。淡黄色。	透明釉。白化 粧。淡黄白色	同上。	同上。	同左。	腰部の平面観は「へ」の字状に折れる。線彫りで区画 文と交差沈線を描いた後に呉須を施す。	表探	
	61	大鉢Ib	— 18.0 —	鉄釉。 茶褐色。	透明釉。淡黄 茶色。	同上。	同上。	同左。	口縁が僅かに肥厚する。内面に細かい貫入。	ナ-31・32 茶色土層	
	62	大鉢Ic	— 30.0 —	同上。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	口縁が逆「L」字状に屈曲させる。口唇は幅広である。 口唇の中央付近から釉が掛け分けられる。	不明	
	63	大鉢Id	— 22.6 —	透明釉。白化 粧。淡黄白色	同左。	淡灰白色。 細粒子。	同上。	同左。	口縁が僅かに外反する。内面に細かい貫入。	ヘ-28 茶褐色土層 攪乱	
	64	大鉢Ie	— 26.0 —	淡黄茶色。 失透釉。	同左。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。口唇外端近くに丸彫りの圏線。 両面に細かい貫入。	ヘ-29 茶褐色土層 攪乱	
	65	大鉢Ie	— 25.0 —	濃緑色。 失透釉。	淡灰白色。 失透釉。	淡黄白色。 細粒子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。口唇の中央付近から釉の掛け 分け。内面は筆描きの縦沈線。	ノ-29 茶褐色土層	
	66	大鉢Ie	— 9.4 —	鉄釉。 茶褐色。	淡黄緑色。 透明釉。	淡黄白色。 微粒子。	高台脇まで施 釉。	総釉後に釉を 蛇ノ目状に掻 き取る。	見込みに淡青緑色の釉で丸文を描く。内面に細かい貫 入。	ノ-30 第2層	
	67	大鉢If	— 22.0 —	鉄釉。 茶黑色。	透明釉。白化 粧。淡黄白色	淡灰白色。 微粒子。	口縁は施釉	同左。	口唇外端を突出させて、外反口縁とする。内面に茶黒 色の釉で点描や斜沈線を描く。	ノ-31・32 焼土混じり	
	68	大鉢IIa	— 24.8 —	灰緑色。 失透釉	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。内面に細かい貫入。	フ-30 井戸前排水 溝	
69	大鉢IIb	— 27.0 —	鉄釉。 濃緑茶色。	同左。	淡黄白色。 微粒子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。釉が鍋筋斑となる。	ヘ-29 茶褐色土層		
70	大鉢I?	— 11.6 —	灰緑色。 失透釉。	淡灰白色。	淡黄白色。 細粒子。	高台のみ露胎	総釉後に釉を 蛇ノ目状に掻 き取る。	内面は化粧土の上に淡黄白色の釉で圏線と丸文を描く。	ノ-29 茶褐色土層		
71	大鉢VIa	— 26.0 —	— — —	明青緑色。	同左。	淡灰白色。 細粒子。	口縁は総釉	同左。	口縁の肥厚は折り返して逆「L」字状の肥厚とする。 釉が部分的に剥げ落ちる。	ヌ-31	
72	大鉢VIb	— — —	— — —	同上。	同上。	淡黄白色。 細粒子。	同上。	口縁で釉が止 まる。	口唇外端は波状凸部。	ニ-31 第3層	
73	大鉢VII	— 31.2 —	透明釉。白化 粧。淡黄白色	透明釉。白化 粧。淡黄白色	淡黄白色。 粗粒子。	同上。	同左。	口頸部を「く」の字状に折り曲げる。口縁に波濤文と 花文を胴部に草花文々と構図不詳を描く。	表探		
第49図・図版46	74	鍋I	— 19.6 —	— — —	茶褐色。	同左。	淡灰色。 細粒子。	同上。	口頸部に総釉し た後、口縁の釉 を掻き取る。	口頸部を「く」の字状に折り曲げる。内面口縁の釉を 掻き取った後に白化粧土を塗付。	ネ-29 茶褐色土層
	75	鍋I	— 16.6 —	— — —	同上。	同上。	淡黄白色。 細粒子。	同上。	同上。	同上。	ノ-30 第2層
	76	鍋I	— — —	— — —	淡黄色。	同左。	淡灰色。 粗粒子。	同上。	同上。	口頸部を「く」の字状に折り曲げる。窯変による釉色 の変化。	ノ-30 第2層
	77	鍋I	— 8.0 —	— — —	無釉。	青茶色。	青茶色。 細粒子。	無釉。	総釉。	底面に三角錐状の突起を貼り付ける。	ヌ-32 第1層
	78	酒器IIa	— 6.0 —	透明釉。白化 粧。淡黄白色	同左。	淡黄白色。 細粒子。	残存部は施釉	同左。	蓋受けの釉を掻き取っている。両面に細かい貫入。最 大直径6.0cm。	ネ-30 茶褐色土層	

第9表 d 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉 (外面)	釉 (内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第49 図版	79	酒器Ⅱb	10.0 — —	透明釉。白化粧。淡黄白色	淡黄灰色。透明釉。	淡黄白色。細粒子。	残存部は施釉	同左。	口縁内面の釉を掻き取る。外面に粗い貫入。最大直径10.0cm。	フー31 第3層
	80	酒器Ⅲ	9.6 — —	青緑色。鉄釉掛け分け。	淡緑灰色。透明釉。	淡灰白色。細粒子。	同上。	同左。	口縁内面の凸帯上面の釉を掻き取る。下地に鉄釉を施す。	ノー30 第2層
	81	酒器	4.8 — —	茶褐色。	同左。	淡灰白色。微粒子。	同上。	同左。	酒器の注入口、口唇内端を上方に突出させる。	ヌー31
	82	酒器Ⅰb	— — —	茶褐色。鉄釉掛け分け。	無釉。	淡黄白色。微粒子。	同上。	無釉	胴部が算盤玉のように屈曲する。	ハー31 第2層 砂利混じり
	83	酒器Ⅵ	— 8.0 —	茶褐色。	同上。	淡灰白色。微粒子。	高台際まで施釉。	同上。	吊鐘状の器形。幅広い高台で壘付を斜位に削り出して成形。	ノー30 第2層 瓦層
	84	酒器底部	— 8.4 —	黒褐色。	同上。	淡灰色。細粒子。	同上。	同上。	幅広い高台で、壘付を斜位に削り出して成形。	フー30 第2b層 焼土混じり
	85	酒器底部	— 8.1 —	同上。	同上。	同上。	同上。	同上。	幅広い高台で、壘付を斜位に削り出して成形。	ノー30 第2層
第50 図版	86	急須Ⅰb	— — —	鉄釉。濃茶色	同上。	淡灰白色。微粒子。	蓋甲のみ。	無釉。	壘みが欠落。最大直径7.0cm。貫入はない。	ハー31 攪乱黄褐色 混じり
	87	急須Ⅱ (三彩)	— — —	透明釉。白化粧。	同上。	同上。	同上。	同上。	壘みが欠落。最大直径5.8cm。粗い貫入。蓋甲に直径4～5mmの孔を穿つ。明青色・黄緑色の釉を施す。	ハー30・31 第2層
	88	急須Ⅳ	— — —	同上。	白化粧。	淡黄白色。粗粒子。	同上。	白化粧を総施した後に壘付の化粧土を除去。	壘みが欠落。最大直径5.2cm。粗い貫入。草文・花文を線彫りした後に具須を施す。	ヌー32 第2層
	89	急須Ⅴa	— — —	同上。	無釉。	淡灰白色。細粒子。	同上。	無釉。	壘みが欠落。最大直径7.4cm。粗い貫入。3本単位の桶指きで沈線を施す。	ノー30 第2層
	90	急須Ⅴb	— — —	同上。	同上。	白色。微粒子。	同上。	同上。	壘みが欠落。最大直径5.6cm。粗い貫入。線彫りの圏線と2本一組みの沈線。沈線間に印花文。	ヌー32 第1層
	91	鍋の蓋	— — —	鉄釉。淡茶色。	鉄釉。茶褐色。	淡黄白色。細粒子。	同上。	蓋縁近くは施釉。	高台状の壘み。蓋甲の内外面に施釉。釉は壘みの脇で止まる。壘みの直径6cm。	ノー29 茶褐色土層
	92	鍋の蓋	— — —	鉄釉。茶黒色。	無釉。	同上。	壘付を除き施釉。	無釉。	高台状の壘み。細かい貫入がみられる。壘みの直径6cm。	フー30 壁
	93	鍋の蓋	— — —	鉄釉。茶褐色。	同上。	淡灰色。粗粒子。	壘みの脇まで施釉。	同上。	高台状の壘み。最大直径6.8cm。	ヌー33 第2b層
	94	鍋の蓋	— — —	同上。	同上。	茶紫色。粗粒子。	蓋甲の縁端近くは露胎。	同上。	縁部が逆「へ」の字状に屈曲。最大直径14.4cm。	ハー29 灰茶色土層
	95	鍋の蓋	— — —	同上。	鉄釉。茶褐色。	灰白色。粗粒子。	同上。	同左。	縁部が端反る。縁部の釉を両面とも比較的丁寧に掻き落とす。最大直径17cm。	ハー29 明茶色土層
	96	油壺蓋	— — —	鉄釉。黄茶色。	無釉。	明茶色。粗粒子。荒焼きの素地。	総釉。	無釉。	壘みが欠落。蓋甲に4～5mmの孔を穿つ。稜部に丸彫りの圏線。最大直径7.6cm。	ヒー30
	97	油壺蓋	— — —	鉄釉。茶褐色。	同上。	淡黄白色。細粒子。	残存部は施釉	同上。	縁部に丸彫りの圏線を二条施す。最大直径12.4cm。	ノー28 茶褐色土層
	第47 図版	98	鍋Ⅰの蓋	— — —	茶褐色。	同上。	淡灰色。粗粒子。	縁端近くまで施釉。	同上。	外端を寛削りで釉を掻き落とし、尖らせる。
99		鍋Ⅰ・Ⅱの蓋	— — —	灰緑色。透明釉。	白化粧のみ	淡灰白色。細粒子。	同上。	同上。	外端を寛削りで釉を掻き落とし、尖らせる。	ハー28 茶褐色
100		合子の蓋 (三島手)	— — —	黄灰色。透明釉。	無釉。	同上。	蓋甲は総釉。	無釉。	縁部に丸彫りの圏線を二条施した後に白色の釉で象嵌。	フー31 第2層
第51 図版 48	101	水滴の蓋 (染付)	— — —	透明釉。白化粧。	白化粧土が垂れる。	淡黄白色。細粒子。	同上。	同上。	水滴などの落し蓋。具須で「天」の字を筆描き。最大直径5.6cm、最少直径3cm。	ナ・ニー31 クチャ混り (攪乱)
	102	乗燭Ⅰc	— 4.3 —	鉄釉。黄緑色。	同左。	同上。	脚台縁まで施釉。	総釉。	脚台付きの乗燭。切り込みのある円筒状の灯心を貼り付ける。外底面に直径4.5mm、深さ1cm。外面に粗い貫入。外底面は糸切り跡が明瞭である。	ニー33 第2層
	103	乗燭Ⅱ	— 3.7 —	淡青緑色。失透釉。	同左。	淡黄白色。粗粒子。	高台際まで施釉。	同上。	脚台付きの乗燭。外面は糸切りの後に高台を貼付けているが高台の平面観は歪である。	表探
	104	火取a	— 10.0 —	鉄釉。茶黒色。	同左。	淡灰白色。細粒子。	口縁は総釉。	口縁内端まで施釉。	円筒形の火取。丸帯で圏線、2条と縦沈線を施す。	ハー29 灰茶色土層

第9表 e 沖縄産施釉陶器観察一覧

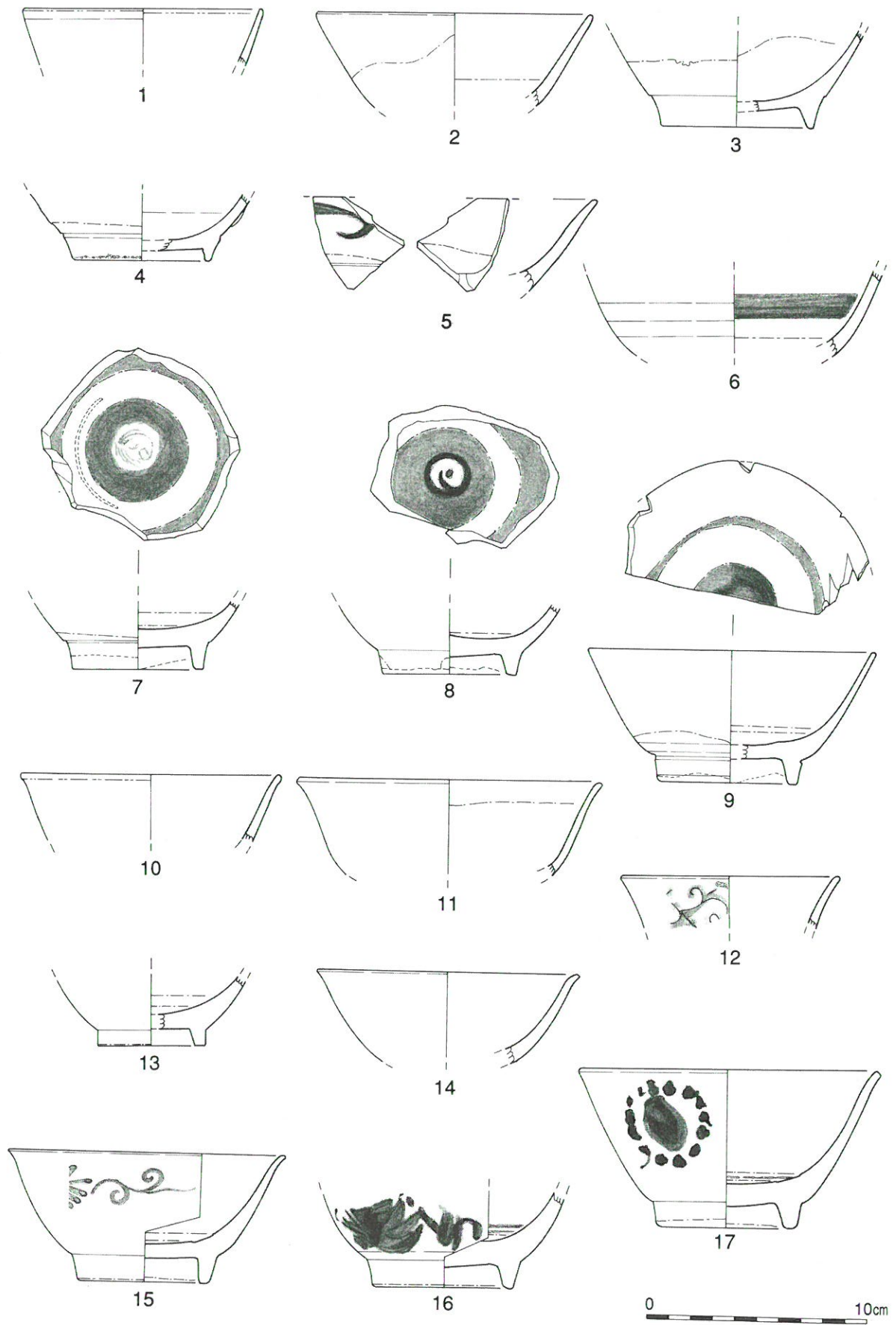
単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉(外面)	釉(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第 51 図 版	105	火取a	— 7.5 —	鉄釉。 茶黒色。	無釉。	淡橙色。 細粒子。	胴下部の折れ まで施釉。	露胎。	円筒形の火取。丸腕で緻密な圏線を施す。	ネー30・31 壁
	106	火取b (三島手)	11.3 — —	黄灰色	灰緑色。	淡黄白色。細 粒子。	口縁外端のみ 露胎。	同左。	口禿げの円筒形の火取。丸腕で疎密のある斜沈線文を 施した後に白色の釉で象嵌。	ネー32 第1層
	107	火取b (三島手)	— 6.8 —	同上。	無釉。	同上。	胴下部の折れ まで施釉。	露胎。	円筒形の火取。線彫りの圏線と片切彫りの短沈線を施 した後に白色の釉で象嵌。	ヌー34 第1層
	108	火取Ⅱa	10.8 — —	淡灰緑色。 失透釉。	同上。	淡灰白色。 細粒子。	口縁は施釉。	同上。	円筒形の火取。口縁内端が僅かに肥厚。	ヒー33 第2層
	109	火取Ⅱb	— 8.2 —	透明釉。 白化粧。	白化粧。	淡黄白色。 細粒子。	総釉後に置付 の釉を掻き取 る。	総釉。	円筒形の火取。白化粧は胴下部の折れまで施すが、透 明釉は置付除き外底面まで施す。	茶褐色土層 (攪乱)
	110	火取Ⅱc	9.0 — —	鉄釉。茶褐色。 青白色。	同左。	同上。	口縁は総釉。	口縁端まで施 釉。	円筒形の火取。内面口縁は僅かに肥厚する。	表採
	111	火取Ⅲa	11.7 — —	淡黄茶色。 鉄釉?	無釉。	淡橙色。 細粒子。	同上。	同上。	内彎する火取。鉄釉が窯変か?	ノー32 第1層
	112	火取Ⅲb	9.3 — —	鉄釉。淡灰白 色の釉 (掛け分け)	無釉。	淡灰白色。 細粒子。	胴中央部が露 胎。	露胎。	内彎する火取。胴上部と下部に丸彫りの圏線。胴中央 部に片切彫の交差沈線。	ニー32 第1層
	113	火取Ⅲa	— — —	鉄釉。 透明釉。	同左。	灰白色。 細粒子。	口縁は総釉。	同左。	内彎する火取。胴上部に丸彫りの圏線を2条施す。	ヌー43 第1層
	114	火取Ⅳ (三島手)	14.8 — —	灰緑色。	同左。	同上。	同上。	同上。	内彎する火取。胴上部に丸彫りの圏線と交差沈線を施 した後に白色の釉で象嵌。	ハー30 第2層
	115	香炉	10.8 — —	淡灰白色。鉄 釉。白化粧。	同左。	灰白色。 細粒子。	同上。	口縁のみ施釉	口縁が「く」の字状に屈曲。口唇に鉄釉を施す。	西壁
	116	香炉 (三島手)	16.3 — —	黄緑色。 透明釉。	同左。	淡灰白色。 細粒子。	同上。	口縁は総釉。	口縁が「フ」の字状に屈曲。口唇に線彫りや丸彫りで 有軸の羽状文を施した後に白色釉で象嵌。	ノー28 茶褐色土層
	117	火炉Ⅰ	— — —	黒釉。	同左。	同上。	同上。	同上。	内彎する火炉。内面口縁に三角形の突起を貼り付け る。	ノー29 茶褐色土層
	118	瓶子b	6.2 — —	透明釉。 黒釉。	透明釉。	同上。	同上。	同上。	外反のゆるい瓶。頸部に鉄釉で筆描きか。	フー31 第3層
	119	花瓶	7.6 — —	鉄釉。 黄茶色。	無釉。	淡黄白色。 細粒子。	脚上部に釉垂 れ。	内面は露胎。	「ハ」の字状の脚をもつ花瓶か。	ハー34 第2層
120	茶入	4.8 — —	鉄釉。 濃茶色。	同左。	同上。	残存部は総釉	口縁のみ施釉	小さい玉縁の口縁で頸部は軽く折れる。	グリット・ 層とも不明	
121	瓶子?	2.9 — —	鉄釉。 茶褐色。	同左。	淡黄白色。 微粒子。	同上。	同上。	頭の長い細首の瓶子?口縁で軽く外反させる。	ヌー33 第2b層	
122	瓶胴部	— — —	無釉。	白色。 透明釉。	白色。 微粒子。	露胎。	残存部は総釉	瓶の胴部片。最大直径7.2cm。	ハー30 焼土?攪乱	
123	花瓶胴部	— — —	鉄釉。 灰茶色。	無釉。	灰白色。 粗粒子。	高台脇まで施 釉。	無釉。	高台が僅かに残る。内面の胴上部に紋目が見られる。	井戸前排水 路	
124	壺底部	6.2 — —	鉄釉。 黄茶色。	露胎。	淡橙色。 細粒子。	同上。	露胎。	丸味のある壺?	ヌー32 第1層	
125	花瓶底部	5.6 — —	鉄釉。 茶黒色。	同上。	淡黄白色。 細粒子。	同上。	同上。	胴長の花瓶とみられる。天目釉に類似。 外底面にハマが付着か。	ハー29 攪乱層	
第 52 図 版 49	126	瓶底部	7.1 — —	灰緑色。	茶灰色。	淡橙色。 粗粒子。	底部近くまで 施釉	総釉。	底面から立ち上りはやや内側に閉じ気味に移行する。 糸切り底。外面に細かい貫入。	ヒー31 第2層
	127	水注	4.4 — —	濃灰緑色。	無釉。	淡黄白色。 細粒子。	底部近くまで 施釉。外底に 施釉。	露胎。	器形の側面観は扁楕円形状。底は碁筋底。外面に粗い 貫入。	ネー33 第1層
	128	壺底部	17.9 — —	黄緑色。	同上。	同上。	高台際まで施 釉。	同上。	置付は高台の外面を三角形に削り取って成形する。	ホー31 攪乱
	129	油壺a	— — —	鉄釉。 茶黒色。	同左。	淡灰白色。 細粒子。	残存部は総釉	口縁のみ施釉	怒り肩気味の小壺。	ノー30 第2層
	130	壺Ⅲ (油壺)	6.9 — —	同上。	鉄釉。 茶黒色。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	残存部は総釉	内彎する壺で、口縁「フ」の字状に肥厚する。口唇の 釉を掻き取って口禿とする。	フー29 明茶色

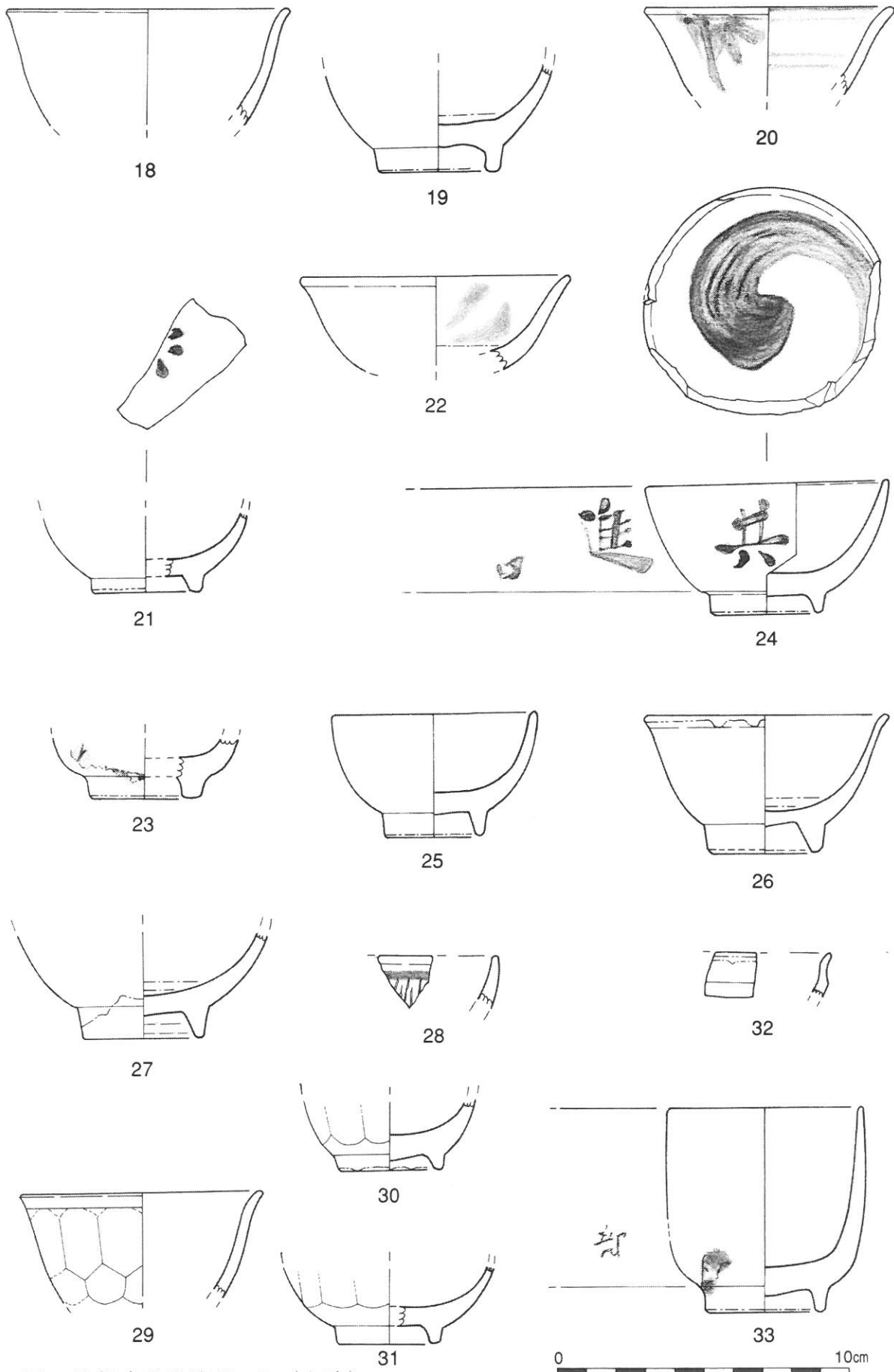
第9表 f 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

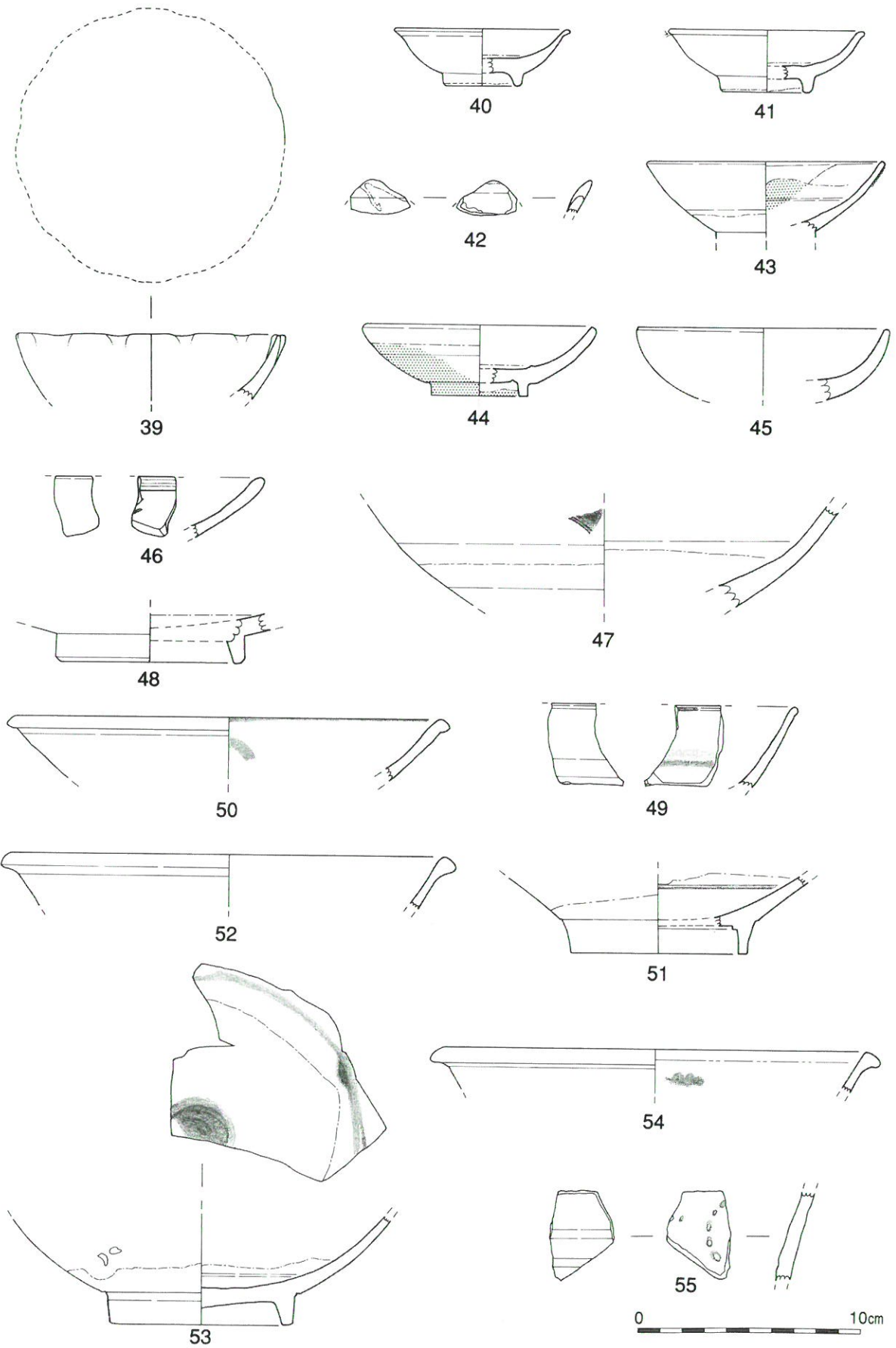
図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	釉(外面)	釉(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第52図・図版49	131	壺Ⅲ (油壺)	10.3 — —	鉄釉。茶黒色	灰茶色。	淡黄白色。 細粒子。	残存部は総釉	同左。	内彎する壺で、口縁が「フ」の字状に肥厚する。口唇の釉を掻き取って口禿とする。	ネ・ノ-31 攪乱土層
	132	壺Ⅲ (油壺)	— 15.7 —	灰緑色。	茶褐色。	同上。	高台のみ露胎	同上。	大型の油壺の底部片。外底の施釉方法は筆もしくは指で実施。	ノ-30 第2層
	133	壺Ⅲ (油壺)	— 12.3 —	鉄釉。茶褐色	灰緑色。	同上。	高台脇と外底面が施釉。	同上。	同上。	ノ-30 第2層
	134	壺Ⅲ (油壺)	— 11.6 —	同上。	同上。	灰白色。 細粒子。	高台内面のみ露胎。	同上。	同上。	ノ-30 東壁
	135	壺Ⅲ (油壺)	— 11.0 —	鉄釉。黒褐色	黒褐色。	同上。	畳付を除き施釉。	同上。	大型の油壺の底部片。外底の施釉方法は筆もしくは指で実施。外面の黒褐色の釉は天目茶碗にみられる。褐錆斑がみられる。下地に茶褐色の化粧土を塗付する。	ナ・ニ-31
第53図・図版50	136	急須Ⅰb	— — —	鉄釉。茶黒色	同左。	同上。	残存部は総釉	口頸部に残存	把手の外面に片切り彫りの沈線に密に施す。	ハ-29 茶褐色土層
	137	急須Ⅰb	— — —	同上。	無釉。	同上。	同上。	露胎。	把手に直径6mmの孔を両側から穿つ。	ハ-29 茶褐色土層
	138	急須Ⅰb	— — —	同上。	同左。	淡黄白色。 微粒子。	同上。	残存部は総釉	内面に10~11mmの孔を穿った後に注ぎ口を貼り付けている。	ヌ-34 第1層
	139	急須Ⅰb	— 7.0 —	同上。	無釉。	淡灰白色。 細粒子。	胴下部まで施釉。	露胎。	三足の急須で、三角形の突起を貼り付けている。	ヌ-34 第2層
	140	急須Ⅰb	— 4.6 —	鉄釉。茶褐色	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	三足の急須で、三角形の突起を貼り付けている。外底面を篋で削り取り基部底に成形する。	ハ-30 攪乱
	141	急須Ⅰb	— 7.8 6.0 8.5	鉄釉。明茶色	同左。	灰色。粗粒子	同上。	口縁を除き総釉。	口唇と内面口縁の釉は掻き取って露胎。把手外面に陽刻文(波文と縁取り沈線)。把手の孔のサイズは直径6mm。胴部に三ヶ所の孔(直径6~7mm)を穿つ。	フ-30 第2層 焼土 混じり
	142	急須Ⅱ (三彩)	— 18.5 —	透明釉。白化粧。淡緑白色	同左。	淡黄白色。 細粒子。	残存部は総釉	口縁のみ施釉	口唇の釉を掻き取って口禿とする。陶線と線彫りによる斜沈線文・交差文を施した後に呉須と黄茶色の釉を掛けている。	フ-30 第2層
	143	急須Ⅱ (三彩)	— 7.6 —	同上。	同左。	同上。	口唇と底部は露胎。	頸部のみ施釉	口唇の釉を掻き取って口禿とする。頸部と胴下部に陶線。把手は縁取りの沈線。把手に直径6mmの孔を穿つ。陶線に呉須を施す。胴部には淡緑色や淡青色の釉を掛けている。	ヒ-30 壁面より
	144	急須Ⅲ (三鳥手)	— 5.9 —	緑灰色。	露胎。	淡灰色。細粒子。	残存部は施釉	露胎。	口唇は口禿。線彫りの陶線と飛びカンナによる刻文を施した後に白土で文様へ象嵌。	ヒ-31 第2層
	145	急須Ⅲ (三鳥手?)	— 5.8 —	透明釉。白化粧。淡緑白色	同上。	同上。	同上。	同上。	口唇は口禿。印花花文、桶描きの縦沈線文、線彫りの交差沈線文を施した後に濃緑色の釉を文様に施す。文様構成は三鳥手を模倣する。	ノ-30 攪乱
	146	急須Ⅳ (染付)	— 8.0 —	同上。	透明釉。白化粧。	淡灰白色。細粒子。	同上。	蓋受けの箇所のみ露胎。	口縁内面に蓋受けの為の突起を造る。外面に呉須で陶線と波状文を描く。	表探
	147	急須Ⅳ (瑠璃釉)	— — —	濃青色。白化粧。	露胎。	淡黄白色。微粒子。	同上。	露胎。	注ぎ口の破片で内面に身と接着する際に使用した淡茶色の陶土が付着する。	表探
	148	大型急須	— 10.2 —	茶褐色。	同左。	淡黄白色。細粒子。	同上。	頸部のみ施釉	把手の根元が確認される。口唇は口禿。	ノ-30 第2層
	149	大型急須	— — —	黒褐色。	同左。	同上。	同上。	同上。	把手の根元と注ぎ口の根元の部分が確認できる。	ノ-30 第2層
	150	大型急須	— — —	同上。	同左。	淡灰色。細粒子。	同上。	残存部は施釉	把手の破片で幅は4.1~4.2cmを測る。横断面は扁平な半円形状を呈する。	ニ-30・31 壁面
151	大型急須 (三彩)	— — —	透明釉。白化粧。	同左。	淡黄白色。細粒子。	同上。	同上。	把手の破片で幅は3.1cmを測る。濃青色・黄茶色・淡黄緑色の釉を施す。	ハ-29 茶褐色 (攪乱)	
152	大型急須 (瑠璃釉)	— — —	濃青色。	同左。	白色。微粒子	同上。	同上。	幅2cm程度を有する把手の破片。横断面が三日月状を呈する。中国製か。	不明	
153	片口鉢	— 7.1 —	茶褐色。	同左。	淡黄白色。細粒子。	同上。	同上。	口唇は幅広で口禿。口縁の断面は「T」の字状となる。両面に粗い貫入。	フ-30 第2層	



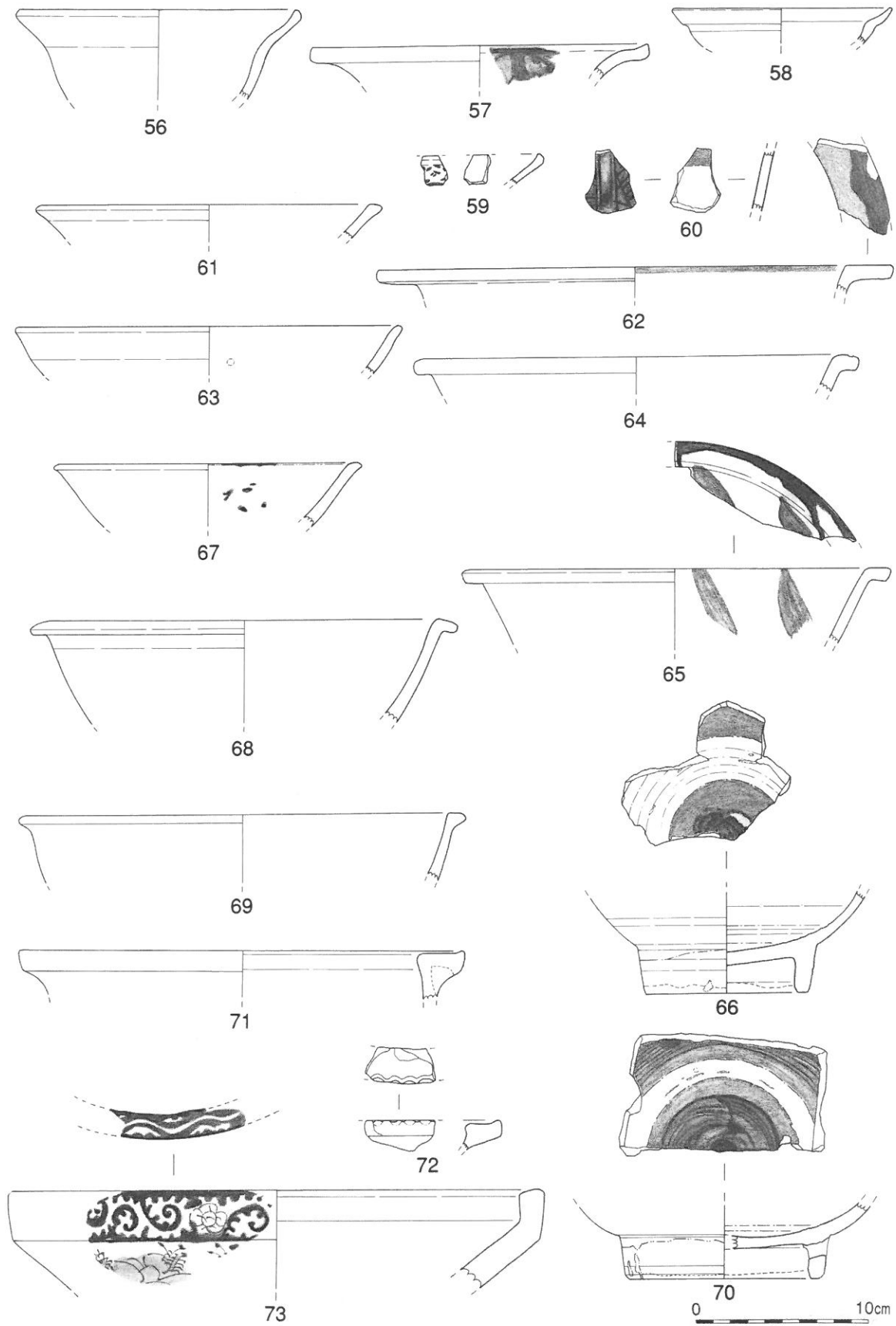
第44図 沖縄産施釉陶器 1 (碗)



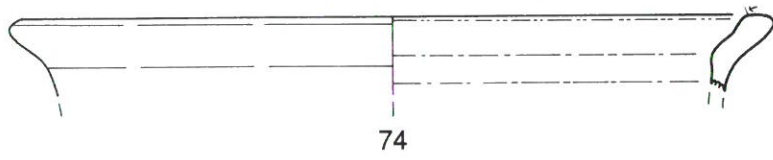
第45図 沖縄産施釉陶器 2 (小碗)



第47図 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)



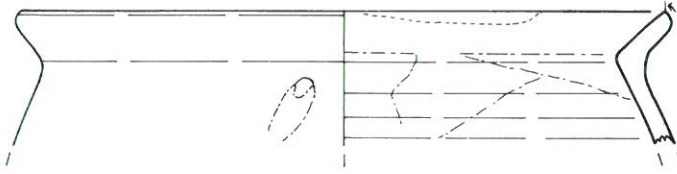
第48図 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)



74



81



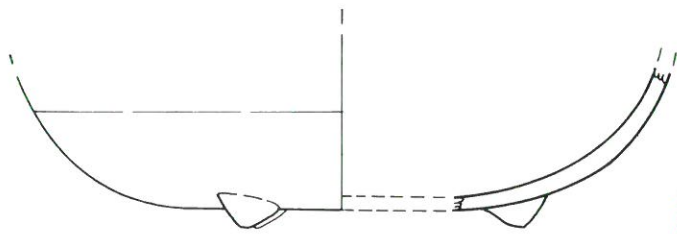
75



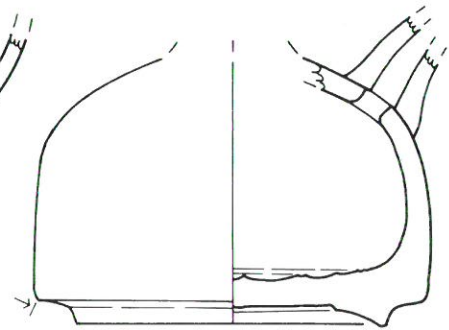
76



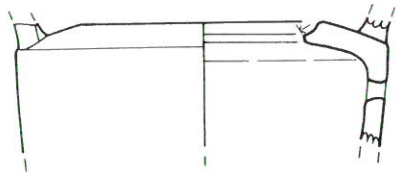
82



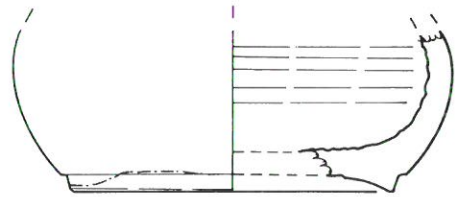
77



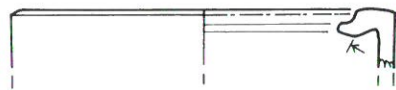
83



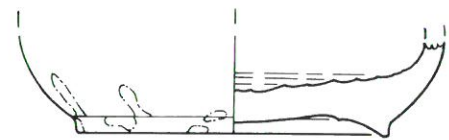
78



84



79



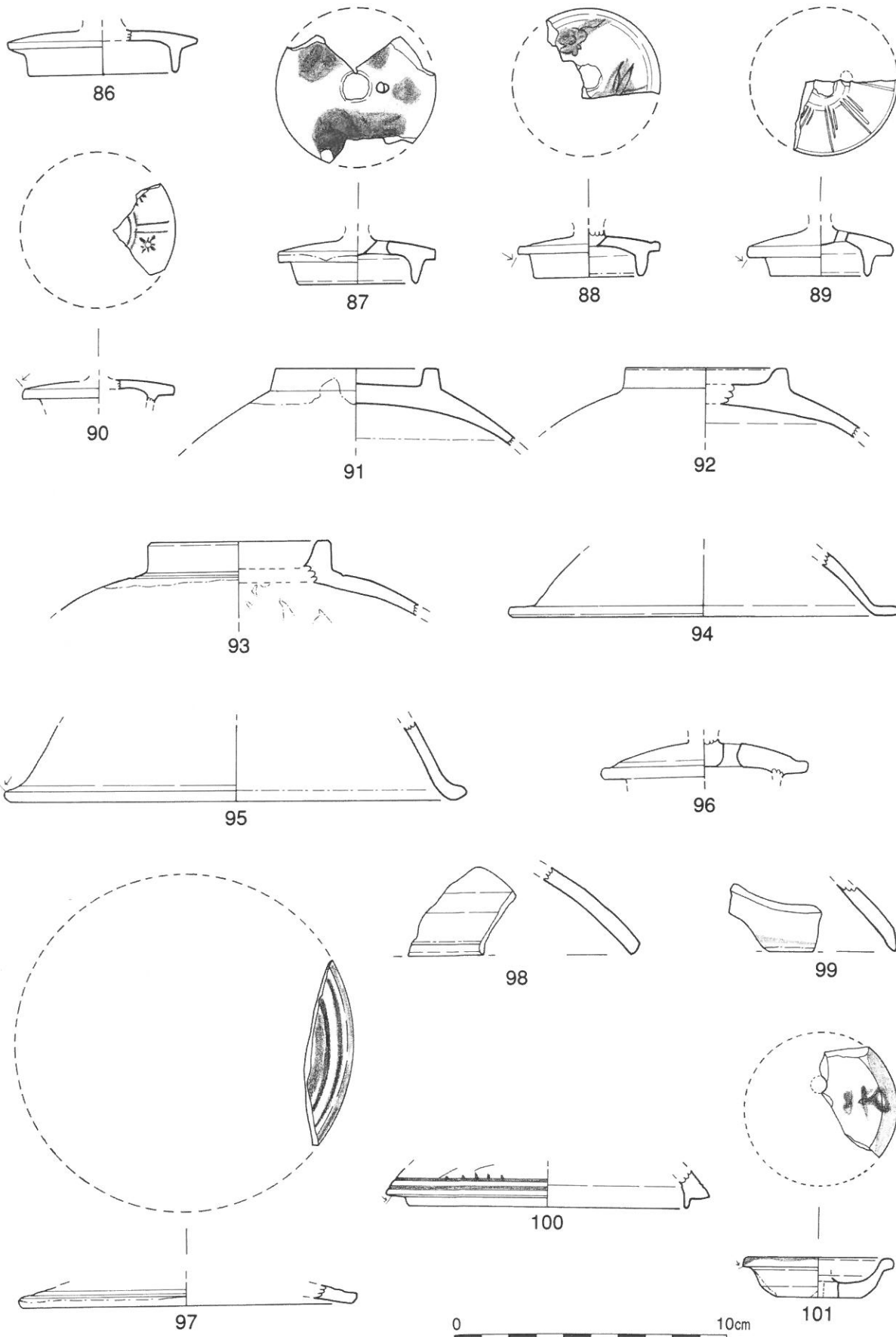
85



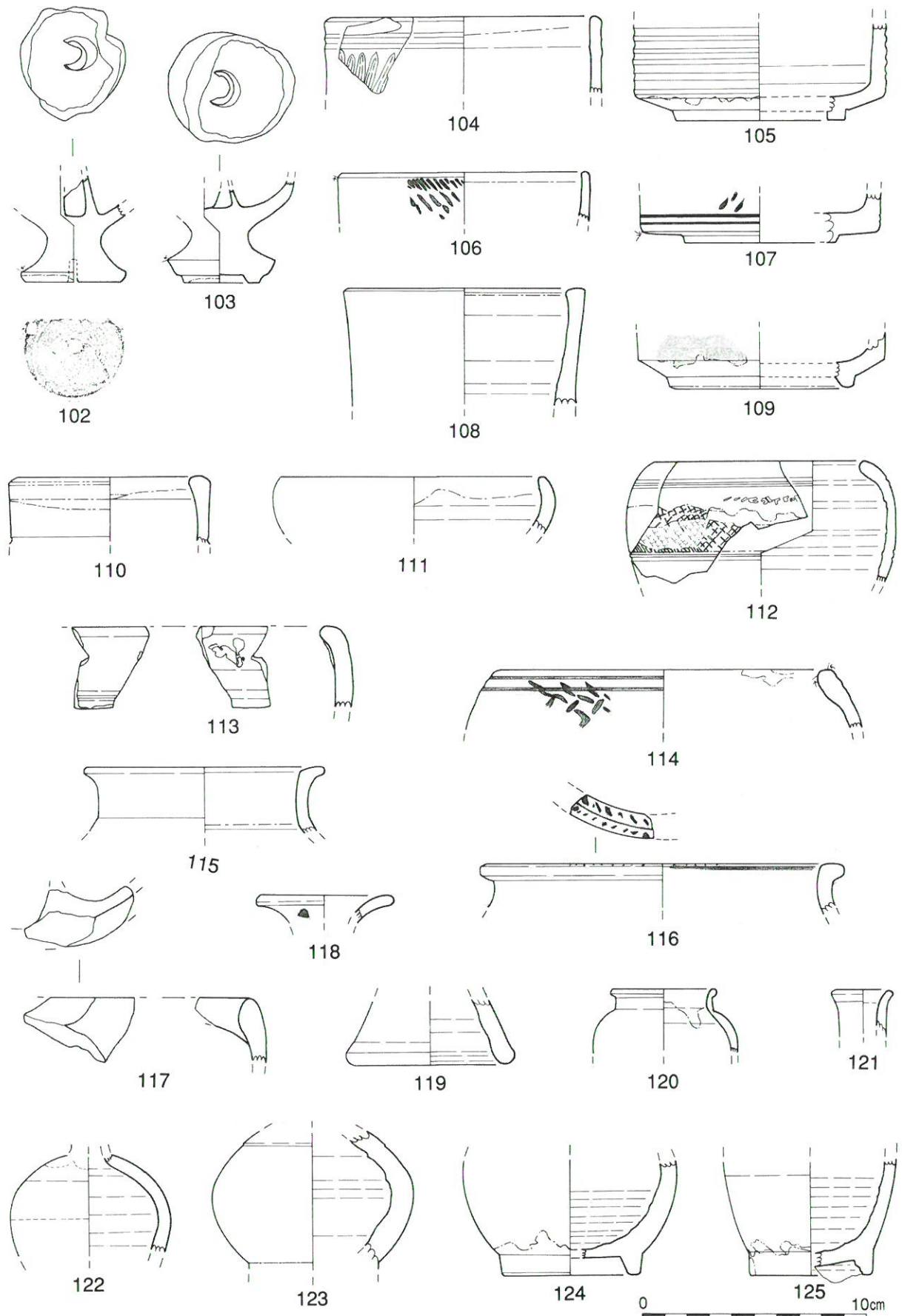
80



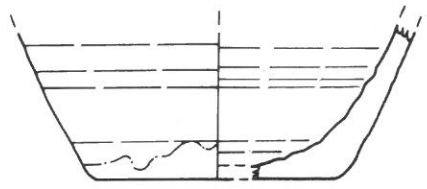
第49図 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)



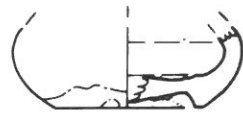
第50図 沖縄産施釉陶器 7 (蓋類)



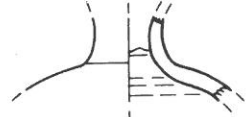
第51図 沖縄産施釉陶器 8 (乗燭・火取・香炉・火炉・花瓶・茶入壺)



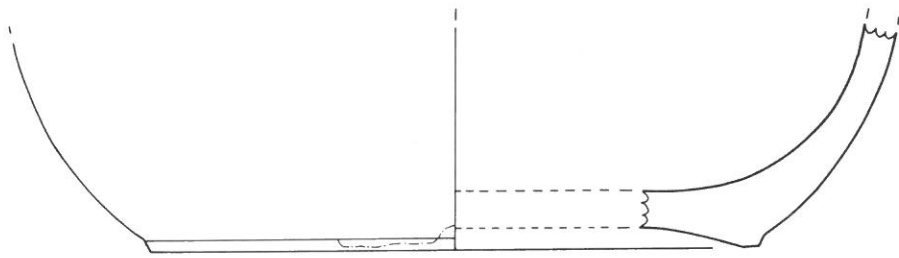
126



127



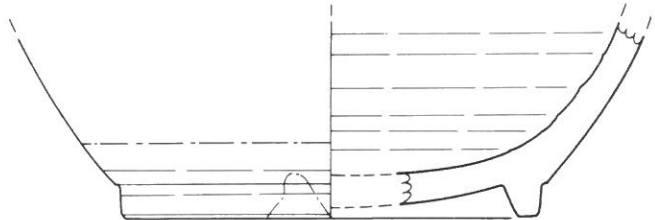
129



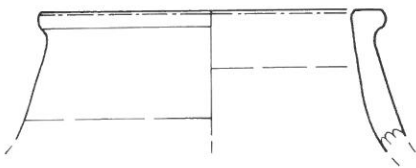
128



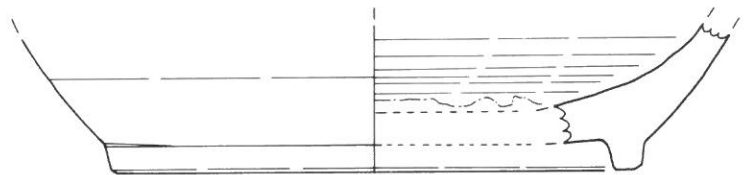
130



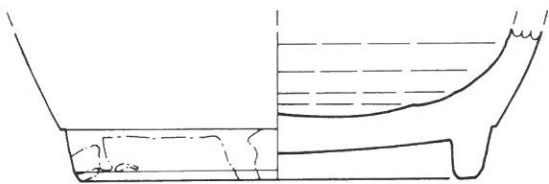
133



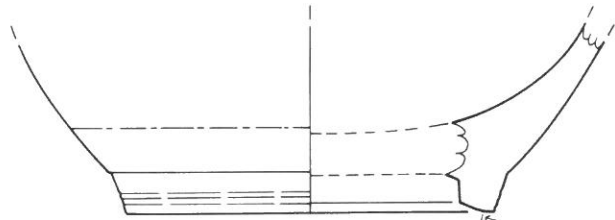
131



134



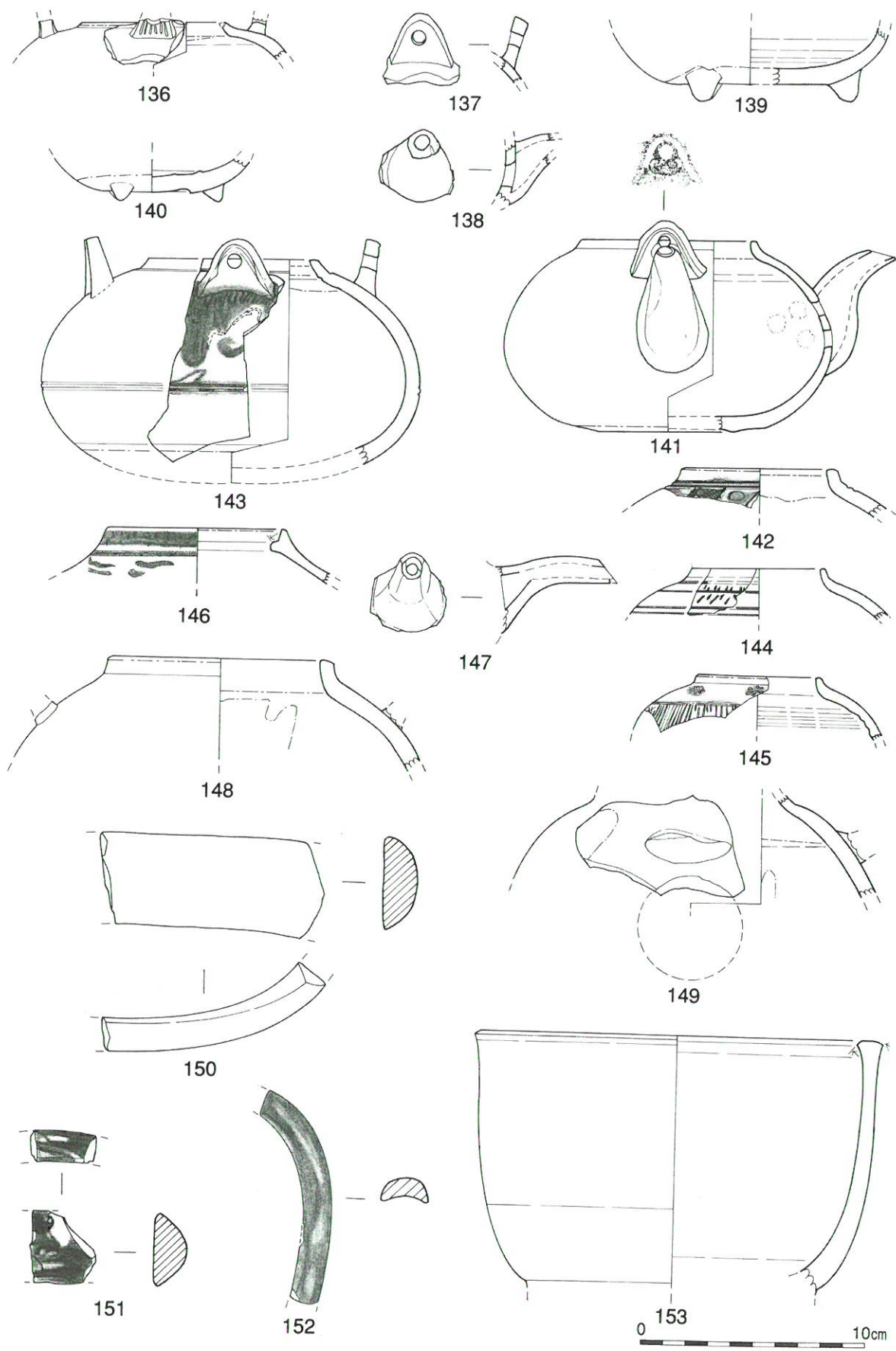
132



135



第52図 沖縄産施釉陶器 9 (水滴・壺・油壺)



第53図 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)

第13節 沖縄産無釉陶器

1. 備前系摺鉢

備前系の摺鉢が2点得られている。正式な同定を得ていないので備前焼きとはせず備前系の摺鉢として報告することにした。(第54図1・2)

県内では今帰仁城跡^(註1)・阿波根古島遺跡^(註2)などで出土していて、グスクや集落遺跡からも出土していることが窺い知ることができるがその出土量は数少ない。今帰仁城跡出土のものは14世紀中葉のもの1点と15世紀末～16世紀に位置付けられる資料が3点得られている。湧田出土の摺鉢の口縁形態は今帰仁城跡出土の摺鉢で15世紀末～16世紀に位置付けられる資料に近いようである。伊東晃氏の「15世紀から17世紀の備前焼」(講演記録)湧田出土の素地と近いものが存在することが判明したので、以下、講演内容を記す「…それから、胎土の問題ですが、Ⅲ期のものは山土をそのまま使ったりしていますが、Ⅳ期には水漉しを行ったり、田の土を混ぜたり、きめの細かい緻密な胎土になってきます。Ⅴ期のある時期から、これは器種にもよりますが、胎土が砂っぽくなってきます。…」、湧田出土のものは粗い石灰質砂粒と細かい石灰質砂粒などが混入している状況から判断すると備前焼そのものではないにしても前述した伊東氏の講演内容のⅤ期の時期と平行する可能性があり、このⅤ期は1550年前後からそれ以降(江戸時代を含むか)が考えられるところである。湧田出土の摺鉢は口縁形態などから16世紀中頃から17世紀前半頃が考えられるかもしれない。とにかく、正式な同定に期待される資料とみられる。これは瓦質土器の摺鉢や沖縄産無釉陶器の摺鉢に直接ないしは間接的に影響を与えたことが予想されるからである。

註

註1 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年。

註2 沖縄県教育委員会 『阿波根古島遺跡』 1990年。

註3 伊東 晃 「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年。

参考文献

・安里 進・上原政昌・家田淳一「摺鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』名護博物館紀要・3 名護博物館 1987年。

2. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器の用途や器種が判明したのものとして、摺鉢・壺・瓶子・水壅・厨子壅・水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉などであった。

個々の特徴は観察表(第10表)に呈示したが、ここでは前回、報告した分類概念を再録する。さらに今回、新しく確認された資料は、前回の分類に追加(見直し)もしくは新設定して記述することにした。今回出土していないものは、(未検出)などと分類概念中に記入することにした。また、検出されているものは図番号を記した。

a. 摺鉢

摺鉢は口縁形態などからⅠ～Ⅲ類に大分類を行い必要に応じた細分類を実施した。以下、特徴のみを記す。

・Ⅰ類

Ⅰ類は口縁の造りや文様などからa～dの4種類に分けた。

a種…口縁を一端内彎させた後に口縁端部を撮み出して口縁を外反させているもの。(未検出)。

b種…口縁をハブラシ状に肥厚させた後に肥厚帯に圈線を施す。また、肥厚帯直下に篋で調整し肥厚を強調するもの。(第54図3・4)。

c種…口縁を「く」の字状に屈曲させる。肩部を意識した回転による指圧を深く入れて強調するもの。
(同図5～7・9)。

d種…Ⅰ類c種と同様に口縁を屈曲させるが、Ⅰ類c種と比較して屈曲は微弱なもの。(同図8)。

・Ⅱ類

Ⅱ類は口縁を逆「L」字状に屈曲させる為、口縁が突出し、口唇も幅広となるものである。口唇に圏線を施すものである。(明確なものは未検出である。Ⅱ・Ⅲ類としたものが同図11・12に図示)。

・Ⅲ類

脚台付きの摺鉢であるが、口造りはⅡ類と共通するものである。(同図13～15)。

b. 壺

壺は口縁形態などからⅠ類からⅢ類に前回、分類したが、今回追加や新しいタイプの存在が確認された為、Ⅳ類～Ⅶ類を新しく設定し、細分類を実施した。

・Ⅰ類

Ⅰ類は基本的にナデ肩の壺であるが、外反の度合でa・bの2種類に分けた。

a種…外反のきつい玉縁口縁の壺で、肥厚帯下端を篋で削り取っているもの。(第55図16～18)。

b種…a種と同様に外反のきつい玉縁口縁であるが、a種より肥厚が大きく肥大化するものである。
(未検出)。

・Ⅱ類

本タイプはタマゴ形の器形を呈する壺であり、口造りが玉縁状に肥厚させる点でⅠ類と類似するが全体の器形が異なっている。(未検出)。

・Ⅲ類

本タイプは方形の肥厚をもつものである。器形の微弱な変化からa・bの2種類に分けた。

a種…口縁部を逆「L」字状に屈曲させ、肥厚帯下端を僅かに突出させているものである。(同図19・20)。

b種…口縁部の屈曲はⅢ類a種よりもゆるくなり、ルーズな肥厚を造る。(同図21・22・24～26)。

・Ⅳ類

今回、新しく設定したタイプの壺である。基本的に外反する壺で、口縁の肥厚はなく、疑似肥厚タイプの口縁である。口縁部の外反の度合いなどからa・bの2種類に分けた。

a種…口縁の外反がゆるいもの。(第55図27)。

b種…口縁の外反がきついもの。(同図28)。

・Ⅴ類

口縁の縦断面が「フ」の字状に屈曲するものであり、1点のみ出土している。(同図29)。

・Ⅵ類

口縁部を一端、外反させた後に口縁端部を上方に撮み上げ「カギ」状に成形する為、正面観が疑似肥厚となる。「カギ」状のものは蓋受けを兼ねたものとして考えられる。(同図30)。

・Ⅶ類

この種の壺は、全体的に大きく内側に内傾するもので、口造りからa・bの2種類に細分した。

a種…口縁を垂直気味に仕上げ、口唇に丸味を持たせて成形するものである。(同図31)。

b種…口縁の肥厚は折り返しでつくり、口縁の縦断面は歪な梯形状(方形)の肥厚となる。(同図32)。

本品に関して、素地などから移入品が考えられるところである。その他に壺の胴部や底部資料が得られている。(第56図33～35・41・45・46、第59図87・88)。

c. 瓶子

瓶子の口縁とみられるものが4点得られている。いずれも口縁がラッパ状に開き外反するものである。瓶子には厚手と薄手の2種類があり、前者の厚手のものをa種(同図36・37)とし、後者の薄手のものをb種(同図38・39)として分類した。その他に瓶子の胴部片や底部片が得られている。(同図40・42~44)。

d. 水甕

水甕も口縁部の形状などからⅠ類~Ⅲ類に分類し、状況によって細分類を実施した。

・Ⅰ類

Ⅰ類は頸・胴部で軽く内側に締り、口縁を屈曲させている。口縁は突出させた後に口縁下端を軽く撮み出している。(第57図47)。

・Ⅱ類

本タイプも口造りなどからa・bの2種類に分けた。

a種…口縁を逆「L」字状に屈曲させる。全体的な器形としては垂直もしくは若干、外傾気味に直線的に口縁に移行するものが推定される。今回、a種の中に口縁が肥大化するものを含めることにした。(同図48)。

b種…口縁を屈曲させた後に口縁下端に釣状に仕上げて肥厚をつくる。口唇外端に縄目文を貼り付けている。(未検出)。

・Ⅲ類

肥厚の形状などからa・bの2種類に分けられた。肥厚の肥大化の傾向が認められるものである。

a種…肥大化した方形状の口縁で、頸部で軽く締っているもの。(未検出)。

b種…肥大化した玉縁状の口縁。ナデ肩気味の甕が考えられる。(同図49)。

その他に甕の胴部片が2点得られている(同図50・51)か、水甕のものなのかあるいは厨子甕のものなのかは判らなかった。

e. 厨子甕

厨子甕は、沖縄では「ジーシガーミ」と俗称されているものである。口縁形態などからⅠ・Ⅱ類に分類した。

・Ⅰ類

全体的に胴上部から内側に内傾する甕で、口縁が玉縁状に成形されたもので、俗にボージャージーシと称されるものである。(同図52)。

・Ⅱ類

口縁の縦断面が長方形に肥厚するものと口縁の肥厚が微弱なものの2種類が存在する。

a種…長方形に肥厚するもので、頸部で締っているもの。(同図53)。

b種…口縁が肥厚しないで、口唇を幅広く成形する為、疑似肥厚とするもの。(同図54)。

その他に厨子甕の胴部片が3片得られている。(同図55~57)。

f. 水鉢

前回、口縁形態などからa・bの2種類に分類したが、今回、新しいタイプが確認されたので、これを追加し、分類を見直すことにしたが、従来のa種をⅠ類に昇格させ、b種をⅡ類として新しく分けた。

・Ⅰ類

口縁形態からa・bの2種類に分けた。

a種…口縁の縦断面が「フ」の字状に折れるもので、口造りは一端、内彎させた後に口縁を外側へ折り

曲げて肥厚をつくるもの。(同図58・59)。

b種…胴上部まで逆「ハ」の字状に開いた後に内側へ口縁を内傾させるもの。(同図60・61)。

・Ⅱ類

洗濯用の水鉢で、専ら下着洗いに使用された為、俗にメーチャーアラヤーと称されるものが主流である。器形は摺鉢と類似するが摺り目の有無で区別出来る。口造りなどからa・bの2種類に分類した。

a種…口唇が幅広のもので、口縁の縦断面が「L」字状の形態をなすもの。(同図63・64)。

b種…口縁の縦断面が鍵状に折れるもので、口唇の幅はa種よりも狭いもの。(同図65)。

水鉢の底部とみられるものが2点出土しているもので、同図62に図示した。

g. 花鉢

前回出土した花鉢と素地・器色などの特徴が類似していて、素地に粗い軽石などを多量に含んでいて形が歪である。(第58図67)。

h. 鍋

蓋受けのための突起を造る鍋が出土した為、前回、未分類であった鍋を今回、a・bに分類することにした。

a種…胴上部が逆「ハ」の字状に開くもので、口頸部が微弱に折れるもの。(未検出)。

b種…胴上部がa種よりも内側に閉じるもので口頸部が「く」の字状にきつく折れるもの。(同図68)。

i. 突起および蓋などの資料

今回出土した突起および蓋などの資料として、急須の突起(同図69・70)・厨子甕の蓋(同図71・72)・鍋の蓋とみられるもの(同図73)・大型急須の把手とみられるもの(同図85・86)が得られている。中でも大型急須の把手とみられるものは、釉が他の器種と比較して厚く施されている。

j. 碗底部

碗の底部片が1点のみ出土している。高台の造りが確りしていて高台脇に篋削りを加えている。(同図74)。

k. 灯明皿

本品は内彎するベタ底皿で、口唇や口縁内外に煤が付着する状況などから灯明皿として取り扱ったものであり、第58図75・76にこれを図示した。前回は1点のみ出土していた。

l. 小皿

器形は前述した灯明皿と同様にベタ底の内彎皿で、器形も灯明皿と類似するが、煤の付着した痕跡がないので、灯明皿と区別した。(同図77)。

m. 香炉

香炉の口縁と底部とみられるものが得られている。香炉には文様はなく、器形が円筒状のものである。(同図78)。香炉の底部には台形状の円盤を貼り付けている。(同図79)。

n. 火炉

火炉には円筒状の器形を保持するものと肩部が「く」の字状に折れるものがあり、前者の円筒状のものをⅠ類(同図80)とし、後者のものをⅡ類(同図81)とする。Ⅱ類は口唇を浅く弧状に篋で削り成形しているのが特徴のひとつである。

o. 器種不明.

類似例がない為、器種不明としたが、ある程度、可能性のある器種名を個々の観察表に記入した。

鉢などの可能性が考えられた資料は、第58図82・83に図示した2点であり、2点とも浅鉢かもしれない。壺などの可能性があるものは第58図84に示したもので、頸部のない無頸の内彎壺が予想されるが判然と

しないところである。

P. 小結

沖縄産無釉陶器の中で、摺鉢の各タイプの出土傾向を前回と比較してみることにする。今回、確認された摺鉢のタイプはⅠ類b種（第54図3・4）、Ⅰ類c種（同図5～7・9）、Ⅰ類d種（同図8）、Ⅲ類（同図13・14）の3タイプであった。他にⅡ・Ⅲ類のいずれかに所属するとみられるものが2点得られている。（同図11・12）。Ⅰ類c種がもっとも多く4点を数えている。Ⅰ類b種とⅢ類は各2点ずつ出土している。摺鉢のⅠ類a種・Ⅱ類が今回は出土していない状況にあることが窺える。これらを安里進氏らの編年に対応させると湧田のⅠ類b種の一部とⅠ類c種の一部は安里進氏ほかの播鉢Ⅰ式に近いものが存在し、湧田のⅢ類が安里氏らの播鉢Ⅳ式に類似していることが判り、これによって湧田の摺鉢の時期を絞り込んでいくとⅠ類b種の一部とⅠ類c種の一部は、17世紀代、Ⅲ類が19世紀後半～20世紀前半となる可能性が出てくるが、Ⅰ類b・c種とⅢ類の間を埋めるものは前回、出土したⅠ類d種（17世紀後半～18世紀後半に比定されるもので、安里氏らの播鉢Ⅱ式に比定）であるが、安里氏らの播鉢編年Ⅲ式＝18世紀後半～19世紀前半に位置付けられる資料は今回は確認されなかったが、仮に安里氏らの播鉢編年Ⅲ式（註1）の範疇にはいるものとするれば、今回出土した摺鉢Ⅰ類d種が含まれるかもしれないところである。

註

註1. 安里進・上原政昌・家田淳一「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』名護博物館紀要・3 名護博物館 1987年。

註2. 同上。92ページ、古我地焼播鉢 第7図23。

第10表 a 沖縄産無釉陶器観察一覧

図・図版	番号	器形	口径 底径 器高 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
第54図 ・ 図版51	1	摺鉢 備前系	24.0 — —	外面淡褐色の釉。 内面明茶色。	茶紫色の微粒子。粗い石灰質砂粒が微量に混入。	外面回転擦痕 内面回転擦痕	口頸部で「く」の字状に折れ、口縁は垂直に立ち上がる。折れ部(頸部)に回転斲削りを施すが消え切っていない。	B区ネー30 木の根攪乱
	2	摺鉢 備前系	— — —	外面橙灰色 (無釉) 内面淡褐色	淡灰色の粗粒子。細かい石灰質砂粒と微細な石英が少量混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕	口頸部で「く」の字状に折れる。口縁は内側へ内傾する。口縁部の上・下端近くを丸鋸で浅く窪ませている。比屋根背前系。	A区ハー33 第3層
	3	摺鉢Ⅰb	26.0 — —	外面灰褐色 (無釉) 内面明茶色	茶紫色の細粒子。細かい石灰質砂粒と微細な石英と茶色の物質が少量混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	肥厚直下に斲削りを入れ、肥厚を強調する。肥厚帯には強弱を入れた回転斲削りで陽圏線を2条施す。	A区ハー39 畦
	4	摺鉢Ⅰb	— — —	内面灰褐色。 (無釉)	茶褐色の細粒子。微細な石英と茶色の物質や石灰質微砂粒が少量混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	口頸部に強弱のある擦痕を入れた陽圏線を1条施した後に陽圏線の突端及び周辺に軽く削りを入れている。内面とは7条一組みの摺り目を浅く入れている。	A区ノー32 第3層
	5	摺鉢Ⅰc	31.0 — —	外面褐色の釉 内面茶紫色。	茶紫色の細粒子。石灰質の粗砂粒と微細な茶色の鉱物が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	口縁を逆「L」字状に屈曲させ、頸部を深めに窪ませる。圏線で肩部を意識して区別する。斲削りは肩部から下に施す。内面の摺り目の単位は不明。	A区フー31 トレンチ第2層
	6	摺鉢Ⅰc	36.0 — —	外面淡褐色。 (無釉) 内面明茶色。	明茶色の細粒子。細かい石灰質の砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕・指圧 内面回転擦痕。	口縁を「へ」の字状に折り曲げている。口縁直下に肩部を区別する為の指圧を強く入れる。内面の摺り目の単位は不明。	出土地不明。
	7	摺鉢Ⅰc	37.6 — —	外面暗灰色(無釉) 内面淡茶紫色。	茶紫色の細粒子。細かい石灰質の砂粒が少量混入。	両面とも回転擦痕と 回転斲削りナデ?	口縁内端を欠く。肩部は「く」の字状に成形させ、口縁を外側にきつく外反させる。内面に9条一組みの摺り目を施す。	B区ノー29 茶褐色
	8	摺鉢Ⅰd	32.0 — —	両面茶褐色の釉。	明茶色の細粒子。微細な石英が少量混入。	外面回転擦痕と回転斲削り。 内面回転擦痕。	肩部の折れは弱く微弱である。内面の摺り目の単位は不明である。	B区フー29 ケーブル溝(クチャ混じり)
	9	摺鉢Ⅰc	— — —	外面茶黒色の釉。 内面明灰色。	暗い茶紫色の微粒子。	外面回転擦痕。 内面回転擦痕。	口縁をきつく折り曲げて外反させる。肩部下部に丸彫りの圏線を1条施す。	A区ノー31 攪乱層
	10	摺鉢Ⅰ	— 12.0 —	外面褐色の釉。 内面明茶色。	濃い茶紫色の細粒子。微細な石英と石灰質粗砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕と回転斲削り他。 内面回転擦痕とナデ。	底面からの立ち上がり箇所に斲削りを入れ浅く窪ませる。底面は斲削りをナデ消す。内面に6条一組みの摺り目を入れる。劈開面に白色の縞が入り込んでいる。	第1層
	11	摺鉢Ⅱ・Ⅲ	30.8 — —	外面光沢のある淡黄色の釉。 内面淡褐色。	濃い茶紫色の細粒子。混入物は観察できない。	両面とも回転擦痕。	幅広の口唇で口唇に丸彫りの沈線が施すが途中で切れる。内面の摺り目の単位は不明。	B区ノー30 東壁
	12	摺鉢Ⅱ・Ⅲ	— — —	外面暗褐色。 (無釉) 内面茶褐色。	暗茶色の微粒子。微細な石灰質砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転斲削り・ 口ロ口痕。 内面回転擦痕?	胴下部に回転斲削りを入れる。内面には10条一組みの摺り目を深く入れる。	A区ヒー33 第2層
	13	摺鉢Ⅲ	— 14.0 —	外面茶褐色。 内面明茶色。	濃い茶紫色の微粒子。混入物は観察できない。	両面とも回転擦痕。	丸味のある「ハ」の字状の脚台。6mmの孔を外側から穿っている劈開面に身と接合する為に深目の櫛描きを入れる。	B区ノー30 第2層
	14	摺鉢Ⅲ	— 16.0 —	両面とも光沢のある黄灰色の釉。	淡い茶紫色の細粒子。微細な石英。石灰質微砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕。 内面回転擦痕。	「ハ」の字状の脚。置付外端を面取りした後刻目を施す。脚に片切り彫りの圏線を施す。	B区ノー29
	15	摺鉢Ⅲ	— 24.0 —	両面とも淡褐色 (無釉)	瓦質の陶土。淡褐色細粒子。微細な石英と細かい茶色の物質が微量混入。	両面とも回転擦痕。	「ハ」の字状の脚。孔を両面から穿った痕跡があるが、孔のサイズは判らない。	B区ノー30 第2層
第55図 ・ 図版53	16	壺Ⅰa	17.8 — —	外面淡黄灰色の釉 内面淡褐色。	淡茶紫色の微粒子。微細な石英。石灰質微細粒が微量に混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	逆「ハ」の字状に外側に開く外反壺で、肥厚帯直下を斲削りで深く抉り取っている。劈開面に白色の陶土が細く、帯状に入る。	B区ノー30 瓦層
	17	壺Ⅰa	17.6 — —	両面茶褐色と淡黄色の釉。	淡茶紫色の細粒子。石灰質微細な粒・微細な石英・粗い茶色の鉱物が少量混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	大きくゆるやかに外反する壺で、肥厚帯直下に幅7~9mmの斲削りの痕跡が一部観察できる。劈開面に白色の陶土が細かく、短く入る。口唇は帯状に目痕(胎土目)がみられる。	A区フー32 第3層
	18	壺Ⅰa	19.0 — —	両面明茶褐色の釉	淡茶紫色の細粒子。石灰質細粒や粗い白色鉱物が少量混入する。	両面とも回転擦痕。 外面口縁に斲削りを加えた後にナデ消しを入れる。	微弱に外反する壺。肥厚帯に斲削りを加えるが雑である。劈開面に細かくて短かめの白色陶土が散発的に入る。	B区ハー30 第2層

第10表 b 沖縄産無釉陶器観察一覧

図・図版	番号	器形	口径 底径 器高 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
第55図 図版53	19	壺Ⅲ a	13.4 — —	外面灰黄色の釉。 内面明茶色。	茶褐色の微粒子。粗い白色や明茶色の鉱物が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	頸部の長い壺で、口縁が逆「L」字に肥厚する。肥厚帯下端が僅かに下方に突出する。	B区ハ-30 第2層
	20	壺Ⅲ a	8.6 — —	両面とも明茶色の釉。口縁の釉が一部剥げ落ちてアバタ状となる。	茶褐色の微粒子。石灰質微砂粒や細かい茶色の鉱物が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	頸部の長い壺で、口縁が逆「L」字に肥厚する。肥厚帯下端が僅かに下方に突出する。口唇が内側に傾く為、回転斲削りの使用が考えられる。	B区ノ-ハ31 窯内部E層出土
	21	壺Ⅲ b	20.6 — —	外面茶黒色の釉。 内面明灰色。	淡茶紫色の細粒子。粗い白色の鉱物と細かい有色(橙色・茶褐色)の鉱物が少量混入。	両面とも回転擦痕。	頸部がやや短くなる小壺。口唇外端近くは削り取りで浅い圏線を表現する。頸部に丸味のある陽圏線を施す。	B区ネ-29 茶褐色
	22	壺Ⅲ b	14.0 — —	外面淡茶色の釉。 内面明茶色。	明茶色の微粒子。微細な石英を微量混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	頸部がやや短くなる壺。頸部及び胴上部に回転斲削りを入れる為、幅10mmの陽圏線様の仕上げとなる。	B区ノ-29 茶褐色
	23	壺Ⅲ	— — —	外面淡茶色(無釉) 内面明茶色。	茶紫色の微粒子。細かい石灰質微砂粒が微量に混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	頸部下に回転斲削りを入れた後に回転擦痕で消す。胴上部にヘラ記号「八」の字状。浅目の丸籠で3~4条の圏線を密に施す。頸部での最大直径14.8cm。	表探
	24	壺Ⅲ b	— — —	外面黒褐色の釉。 内面淡茶紫色の釉。	茶紫色の微粒子。細かい石灰質微砂粒が微量に混入。	両面とも回転擦痕。	ナデ肩の壺、胴部に縄目の凸帯を貼り付ける。	不明
	25	壺Ⅲ b	11.6 — —	外面黒褐色の釉。 内面灰黒色。	茶紫色の微粒子。微細な石英と石灰質微砂粒が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	頸部がやや短くなる小壺。口縁が「く」の字状に屈曲するが、折れはルーズで丸味を帯びる。口唇外端が上方に僅かに突出。	A区ハ-31 東壁
	26	壺Ⅲ b	14.6 — —	外面黒褐色の釉 内面灰黒色	茶紫色の微粒子。微細な石英と石灰質微砂粒が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	口縁がゆるく外反し頸部の短い壺。口頸部の屈曲はルーズで丸味を帯びる。口唇外端が上方に僅かに突出する。	A区30・31 第2層
	27	壺Ⅳ a	13.6 — —	外面淡灰茶色の釉 内面淡灰色。	茶紫色の微粒子。粗い石灰質微砂粒と淡茶色の鉱物が少量混入。	両面とも回転擦痕。	内面口縁が僅かに丸味をもって突出する。	A区ノ-32 第2層
	28	壺Ⅳ b	— — —	両面とも灰褐色(無釉)	灰褐色の微粒子。細かい灰褐色の鉱物が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	還元焙焼成の為、素地及び内外面は灰色を帯び須恵器と見紛うほど似ている。	A区ネ-34 第2層
	29	壺Ⅴ	14.0 — —	両面褐色の釉。	茶紫色の微粒子。微細な石英と細かい茶色の鉱物が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	口縁を「フ」の字状に折り曲げるため、口唇は幅広となる。	A区ノ-31 トレンチ
	30	壺Ⅵ	16.8 — —	両面とも灰褐色。(無釉)	淡茶紫色の微粒子。混入物はほとんどみえない。	外面回転擦痕・回転斲削り 内面回転擦痕。	酸化焙焼成劈開面は淡茶紫色で両面が灰褐色となる。口造りが特徴的である。肥厚帯直下に斲削りを入れる。一見、須恵器と見紛う資料である。	不明
	31	壺Ⅶ a	15.0 — —	外面灰茶色。(無釉) 内面橙色。	橙色の微粒子。混入物はほとんどみえない。	両面とも回転擦痕。	内傾する壺で、口縁を垂直に撮み上げて仕上げている。	不明
	32	壺Ⅶ b (移入品?)	20.2 — —	両面茶黒色の釉。	濃茶紫色の細粒子。粗い石英を多量に混入。	外面回転擦痕・回転斲削り。 内面回転擦痕。	口縁の肥厚は折り返して歪な梯形状につくる。肥厚帯下端及び直下に斲削りを入れる。劈開面に縞状に白色の陶土が入っている。中国・東南アジアの褐釉陶器かもしれない。産地がよく判らない。	A区ハ-31
第56図 図版54	33	壺胴部	— — —	両面灰褐色の釉。	細かい石英を少量混入。	両面とも回転擦痕。	肩部に横耳を貼り付ける。釉はヒビ割れ状態となっている。	A区ノ-32 第3層
	34	壺底部	— 13.6 —	外面淡褐色の釉。 内面明灰色。	茶紫色の細粒子。石灰質微砂粒が微量に混入する。	外面回転擦痕と斲削り。 内面ロクロ痕・底面斲削り。	底面からの立ち上がりの箇所斲削りを施す。	B区ノ-30 攪乱
	35	壺底部	— 9.6 —	両面灰褐色。(無釉)	茶紫色の細粒子。粗い石英と石灰質の細粒が僅かに混入する。	外面回転擦痕。回転斲削り。 内面ロクロ痕。底面ナデ?	底面は重ね焼き後の切り離して、底面の縁辺は剝離面となっている。	表探
	36	瓶子 a	12.0 — —	外面灰黒色の釉。 内面淡茶紫色。	濃茶紫色の細粒子。細かい茶色の鉱物が僅かに混入する。	両面回転擦痕。	口縁は大きく外側に外傾させる為、口唇が外向きとなる。劈開面は小孔が無数にできアバタ状となる。口縁近くで器厚が厚くなっている。	B区ハ-30 第2層

第10表c 沖縄産無釉陶器観察一覧

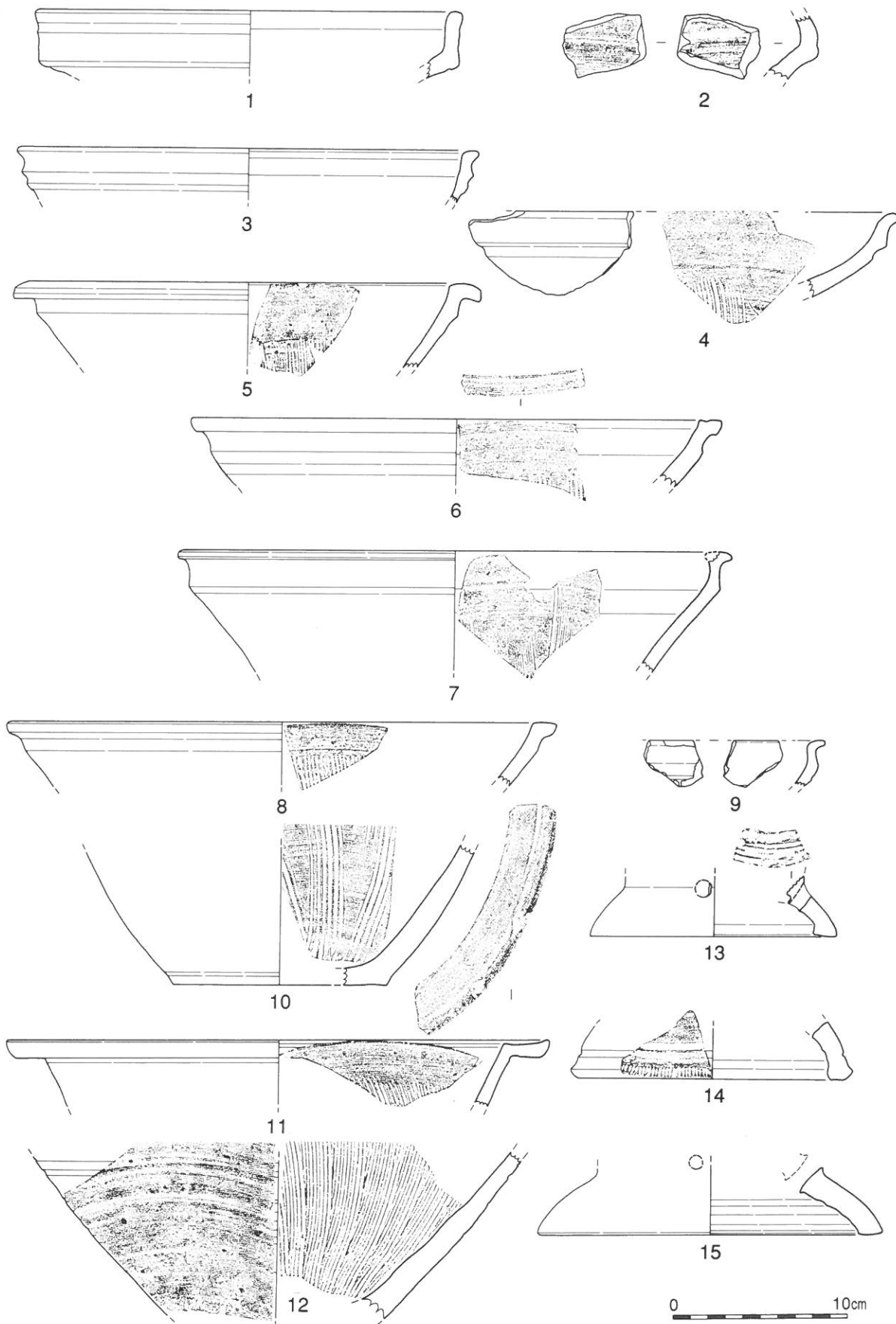
図・図版	番号	器形	口径 底径 器高 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
第56図 図版54	37	瓶子a	8.6 — —	両面茶褐色。 (無釉)	明橙色の微粒子。粗い石英が微量に含まれる。	両面回転擦痕。	口縁を大きく外側に外傾させる為、口唇が外向きとなる。口縁近くで器厚が厚くなってくる。	A区フー31 第2層
	38	瓶子b	7.0 — —	両面灰茶色の釉。内面は途中まで施釉。	濃茶紫色の微粒子。混入物はほとんどみえない。	両面回転擦痕。	口縁を大きく外側に外傾させる為口唇が外向きとなる。器壁が4~6mmと薄い。	A区ヒー31 第3層
	39	瓶子b	7.6 — —	外面及び内面口縁は淡黄茶色の釉を施す。内面は暗褐色。	濃茶紫色の微粒子。僅かに石灰質の粗砂粒やサンゴ片が混入する。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	口縁を大きく外側に外傾させる。口唇は尖り気味に成形する。器厚は4~7mmを測る。胴上部に細い陽圏線を5条施す。	B区 井戸前排水攪乱
	40	瓶子胴部	— — —	外面茶褐色の釉。内面明橙色。	茶紫色の微粒子。石灰質細粒と細かい茶色の鉱物が少量混入	両面回転擦痕・回転磨削り。	最大胴径9cmを測る。胴上部から頸部へ細まっていく。頸の長い瓶が予想される。	A区ノー31 トレンチ
	41	壺胴部	— — —	外面淡灰白色の釉。内面淡茶紫色。	茶紫色の細粒子。混入物はほとんどみえない。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	タマゴ形の器形が予想される壺である。胴上部に陽圏線が一条残されている。	表採
	42	瓶子底部	— 5.8 —	外面淡黄白色の釉。内面灰褐色。	茶紫色の細粒子。石灰質微砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	底面からほぼ垂直に立ち上がりそのまま内側に閉じ気味に丸味を持たせて胴部へ移行する。底面には切り難しの際の剝離がみられる。	A区ヌー31 第1層
	43	瓶子底部	— 9.0 —	外面茶紫色の釉。内面灰褐色。	茶紫色の細粒子。微細な石英が僅かに含まれる。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	底面からの立ち上がりはやや外側に開き気味に立ち上げた後に内側に閉じ気味に丸味を持たせて胴部へ移行させる。底面は凹凸があり、雑な感じを受ける。底面には淡黄色の釉が付着する。	B区ネー29 灰茶褐色
	44	瓶子底部	— 5.2 —	外面淡褐色。 (無釉) 内面淡茶色。	灰褐色の微粒子。混入物はほとんどみえない。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕と指圧	底面からの立ち上がりはやや外側に開き気味に立ち上げた後に内側に閉じ気味に丸味を持たせて胴部へ移行させる。底面の調整は指圧を施した後にナデ消すが消え切っていない。	A区ニー34 第2層
	45	壺底部	— 7.4 —	外面茶黒色の釉。内面淡茶紫色。	茶紫色の微粒子。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	外底面を浅く削り出す。立ち上がりの箇所深い削りを加え高台状に仕上げる。	A区ハー31 第2層
	46	壺底部	— 5.8 —	外面濃茶紫色の釉。内面赤紫色。	茶紫色の微粒子。微細な石英が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	高台をもつ壺。外底面及び高台外面は丁寧に仕上げる。豊付は雑で小さな起伏がある。	B区ネー29 茶褐色
第57図 図版55	47	水甕I	— — —	外面明橙色。 (無釉)	黄茶色の細粒子。微細な石英が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面欠落の為不明	幅広い口唇。口縁下端を軽く摘み出して突出させる。肥厚帯下端に片切り彫りによる圏線を2条施す。	A区ネー31 焼土混じり
	48	水甕II a	— — —	外面茶褐色。 (無釉) 内面暗褐色。	茶紫色の粗粒子。微細な石英や粗い茶色の鉱物が微量ながら混入。	両面とも回転擦痕であるが調整が外面の手法と内面の手法が入れ変わっている。	口唇の幅が6.5cmを測る資料。文様は口唇外端と口縁の両面に片切り彫りや丸彫りで圏線を施す。	表採
	49	水甕III b	23.0 — —	両面とも茶黒色の釉。	茶紫色の細粒子。微細な石英が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	肥厚帯中央から下に雑な回転磨削り、肥厚帯直下に深目の削りを入れる。	B区ヒー30 攪乱層
	50	甕有文胴部	— — —	外面淡褐色。 (無釉) 内面明橙色。	茶紫色の微粒子。粗い茶褐色の鉱物を僅かに含んでいる。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	頸部で締まる甕とみられる資料。外面に丸彫りの圏線と先の平たい叉状工具で波状文を描く。	B区ノー30 第2層
	51	甕有文胴部	— — —	外面灰褐色。 (無釉) 内面明橙色。	茶褐色の細粒子。石灰質の粗粒子が僅かに混入。	外面回転擦痕・指圧。内面回転擦痕。	胴部に三角形の凸帯を貼り付けた後に均一的な間隔で凸帯を下方に押し倒して縄目状の文様をつくっている。	B区ノー29 灰茶褐色
	52	甕子甕I	31.0 — —	外面黒褐色の釉。内面淡褐色。	茶紫色の微粒子。細かい石英と茶色の鉱物を僅かに含んでいる。劈開面はアバタ状	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕	口縁は玉縁状の肥厚を造る。外面は片切り彫りの圏線を肥厚帯直下に3条施し肥厚を強調する。	A区ニー33 第1層
	53	甕子甕II a	38.2 — —	外面淡茶色の釉。内面明橙色。	茶紫色の微粒子。石灰質の細粒が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕	肥厚帯下方に丸彫りの圏線を2条施す。同帯下端は磨削りを加えている。胴上部にも片切り彫りの圏線を1条施している。	B区ネー28 攪乱
	54	甕子甕II b	43.2 — —	両面灰褐色。 外面の文様帯に茶褐色の釉を施す。	茶紫色の細粒子。石灰質の細粒が少量混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。内面回転擦痕。	口唇外端を削りて突出させる。口縁に片切り彫りの圏線を3条施す。頸部に凸帯を1条貼り付ける。	A区 ナー32・33 第3層

第10表 d 沖縄産無釉陶器観察一覧

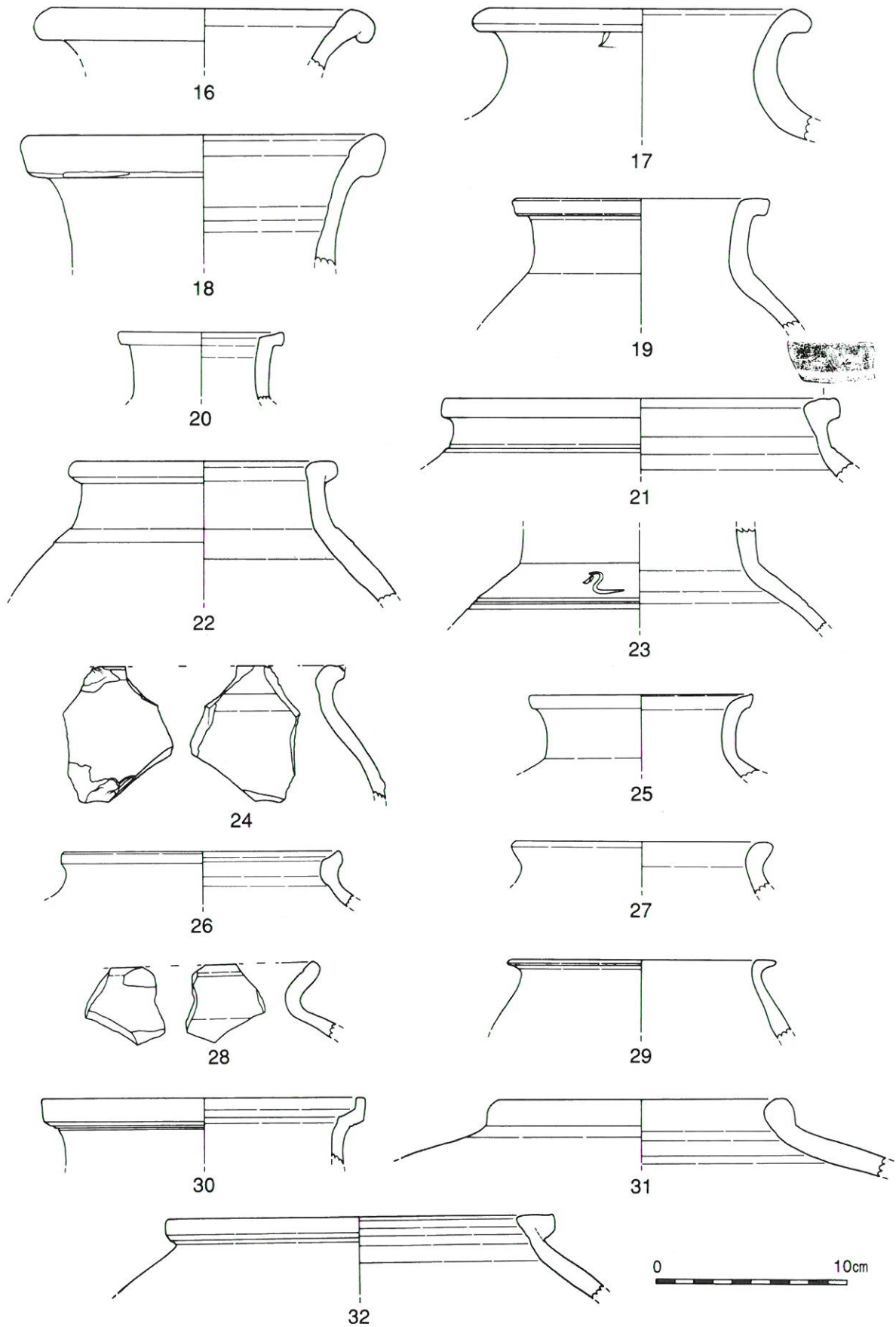
図・図版	番号	器形	口径 底径 器高 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
第57図 ・ 図版55	55	厨子甕胴部	— — —	外面淡茶白色。 (無釉) 内面明橙色。	濃茶紫色の微粒子。 混入物がほとんどみえない。	外面回転擦痕・回転 磨削。内面回転擦痕。	胴上部に圈線と先の平たい又状工具で波状文を描きその直下に凸帯を貼り付けている。この凸帯の面には丸彫りの圈線を1条施している。	B区ノ-30 第2層
	56	厨子甕胴部	— — —	外面茶褐色の釉。 内面淡褐色。	茶紫色の微粒子。 粗い明茶色の鉱物が 僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	外面に菊の葉とみられるものを貼り付けている。	B区ノ-30 第2層 攪乱
	57	厨子甕胴部	— — —	外面黄褐色。 (無釉) 内面明橙色。	橙色の細粒子。 細かい石英と茶褐色 の鉱物が僅かに混入	外面不規則なナデ。 内面回転擦痕。	同上。	B区フ-29 明茶色
	58	水鉢Ⅰa	21.0 — —	両面に茶褐色の釉	明橙色の微粒子。 微細な石英が僅かに 混入	外面回転擦痕。内面 回転擦痕・ロクロ痕	口縁は三角形に肥厚する。胴上部に4本一組みで櫛描きの波状沈線文を描く。口唇に重ね焼きの為の白色土が付着。	西壁
	59	水鉢Ⅰa	24.6 — —	外面淡黄白色と明 茶紫色の釉。 内面明橙色。	明橙色の細粒子。 微細な石英が僅かに 混入	外面回転擦痕・回転 磨削。内面回転擦痕・ロク ロ痕。	口縁は三角形に肥厚する。肥厚帯直下に片切り彫りの篋で深く削りを入れる。5本一組みの櫛で波状文を描く。	表探
	60	水鉢Ⅰb	— — —	両面とも灰茶色。 (無釉)	茶紫色の微粒子。 混入物はほとんどみ えない。	両面とも回転擦痕。	内唇口縁で、内面が僅かに肥厚する。片切り彫りの圈線を2条施した後に圈線間に7本一組みの櫛で波状沈線文を描く。	A区ナ・ニ- 31 クチャ混り (攪乱)
	61	水鉢Ⅰb	19.0 — —	外面淡褐色(無釉) 内面明橙色。	茶紫色の微粒子。 混入物はほとんどみ えない。石灰質の細 粒が僅かに含まれる	外面回転擦痕・回転 磨削。内面回転擦痕。	無文の内唇水鉢。外面は篋削り後に擦痕を加える。削りの面取りの痕跡がみられる。	B区ハ- 30・31
	62	小鉢底部	— 13.4 —	外面茶色の釉。 内面明橙色。	橙色の細粒子。微細 な石灰質粒と粗い茶 褐色の鉱物が微量混 入	外面回転磨削・回転 擦痕 内面回転擦痕・ロク ロ痕	茶色の釉は外底面近くまで施す。外底面は篋削りで終了する。	B区ハ-30 井戸前排水溝 攪 乱
	63	水鉢Ⅱa	31.4 — —	両面とも淡橙色。 口唇は淡灰色。口 縁と口唇の一部に 黄茶色の釉。	淡橙色の細粒子。細 かい石灰質粒と粗い 茶紫色の物質が混入	外面回転擦痕・回転 磨削。内面回転擦痕	口唇外端近くに片切り彫りの圈線を施す。肥厚帯直下大と胴上部に削りを入れて「く」の字状の肩部をつくる。	B区ノ-29 灰茶褐色
	64	水鉢Ⅱa	31.6 — —	外面光沢のある灰 茶色の釉。 内面明橙色。	茶紫色の微粒子。 混入物は観察できな い。	両面とも回転擦痕。	口唇外端近くに片切り彫りの圈線を施す。肥厚帯直下大と胴上部に削りを入れて「く」の字状の肩部をつくる。	B区ネ-28 攪乱層
65	水鉢Ⅱb	42.0 — —	外面灰褐色。 内面淡灰色。 口唇外端と口縁に 茶黒色の釉。	茶紫色の微粒子。 混入物は観察できな い。	外面回転磨削・回転 擦痕。 内面回転擦痕。	肥厚帯下部を篋削り面取りとし、同帯下端と身の間に片切り彫りで深く抉り取っている。外面の調整は口縁の一部を除き、篋削りである。	表探	
第58図 ・ 図版56	66	水鉢底部	— 17.2 —	両面とも明橙色。 (無釉)	明橙色の細粒子。 微細な石英・粗い黄 色や茶褐色の物質が 混入。	外面回転磨削・回転 擦痕。 内面回転擦痕。	外底面は不規則な方向に篋削りを加える。底面からの立ち上りの箇所には篋削りのまま放置されている。水鉢や花鉢の底部資料として今のところ考えられるところである。	A区ネ・ノ-31 攪乱土層
	67	花鉢底部	— 16.4 —	外面灰褐色。 内面茶紫色。	灰褐色の粗粒子。粗 い軽石片と石灰質の 細片を多量に混入。	外面回転磨削・ナ デ。 内面ナデ?	外面に幅2mmの丸篋で斜位の沈線を施す。篋削りは高台外面・畳・高台内面に施されている。劈開面の両側は茶紫色の陶土。芯部は灰褐色で砂質多い陶土を使用する為、芯部は気泡や空気が陶土に多量に混入した状態で焼成され、アバタ状となる。	表探
	68	鍋b	16.0 — —	外面頸下部が明茶 色の釉。両面の口 縁が灰白色の釉。	茶紫色の細粒子。微 細な石英を僅かに含 む。	外面回転擦痕。 内面回転擦痕・回転 磨削?	内面の口頸部に蓋受けの突起を造る。	B区ハ-29 灰茶色
	69	急須突起	— — —	外面灰褐色。 (無釉) 内面明茶色。	茶褐色の微粒子。粗 い石灰質粒が微量に 含まれる。	外面磨削・ナデ・ 指圧。 内面回転擦痕。	貼り付けの突起は篋削りで楕円形状に面取りした後にナデや指圧で成形する。孔は直径6mmを測り、外側から内方向へ穿っている。	B区ハ-30 第2層
	70	急須突起	— — —	両面茶褐色の釉。	茶褐色の粗粒子。微 細な石英が多量に含 まれている為、砂質 多い陶土となる。	外面磨削・ナデ・ 指圧・回転擦痕。 内面ロクロ痕	歪な隅丸楕円形状の突起を貼り付けている。直径5.5mmの孔を外側から穿っている。身の突起を貼り付ける。貼り付け箇所は4本程度の櫛で横方向に櫛目を入れている。	B区ハ-30 茶褐色土層
	71	厨子甕蓋	— — —	蓋上面に茶褐色の 釉。鈔下面、暗褐 色。 内面明橙色。	茶紫色の微粒子。微 細な石英や粗い茶褐 色の鉱物が微量に含 まれる。	蓋上面回転擦痕・回転 磨削。鈔下面回転擦 痕・回転磨削。 内面回転擦痕。	厨子甕の鈔付きの蓋。身との滑り止めの箇所は三角形に突出する。この三角形の突起の外側に片切り彫りで深く抉り取っている。	B区ノ-30 東壁
	72	厨子甕蓋	— — —	蓋上面明橙色。 鈔下面淡褐色。 内面茶褐色。	明橙色の微粒子。石 灰質の微砂粒が僅か に混入。	蓋上面回転磨削・ 回転擦痕。鈔下面 回転擦痕。 内面回転擦痕。	厨子甕の鈔付き蓋。蓋甲の丸味は深く、身と蓋の滑り止めである突起は大きい。最大直径12.8cm。	B区フ-29 明茶色

第10表 e 沖縄産無釉陶器観察一覧

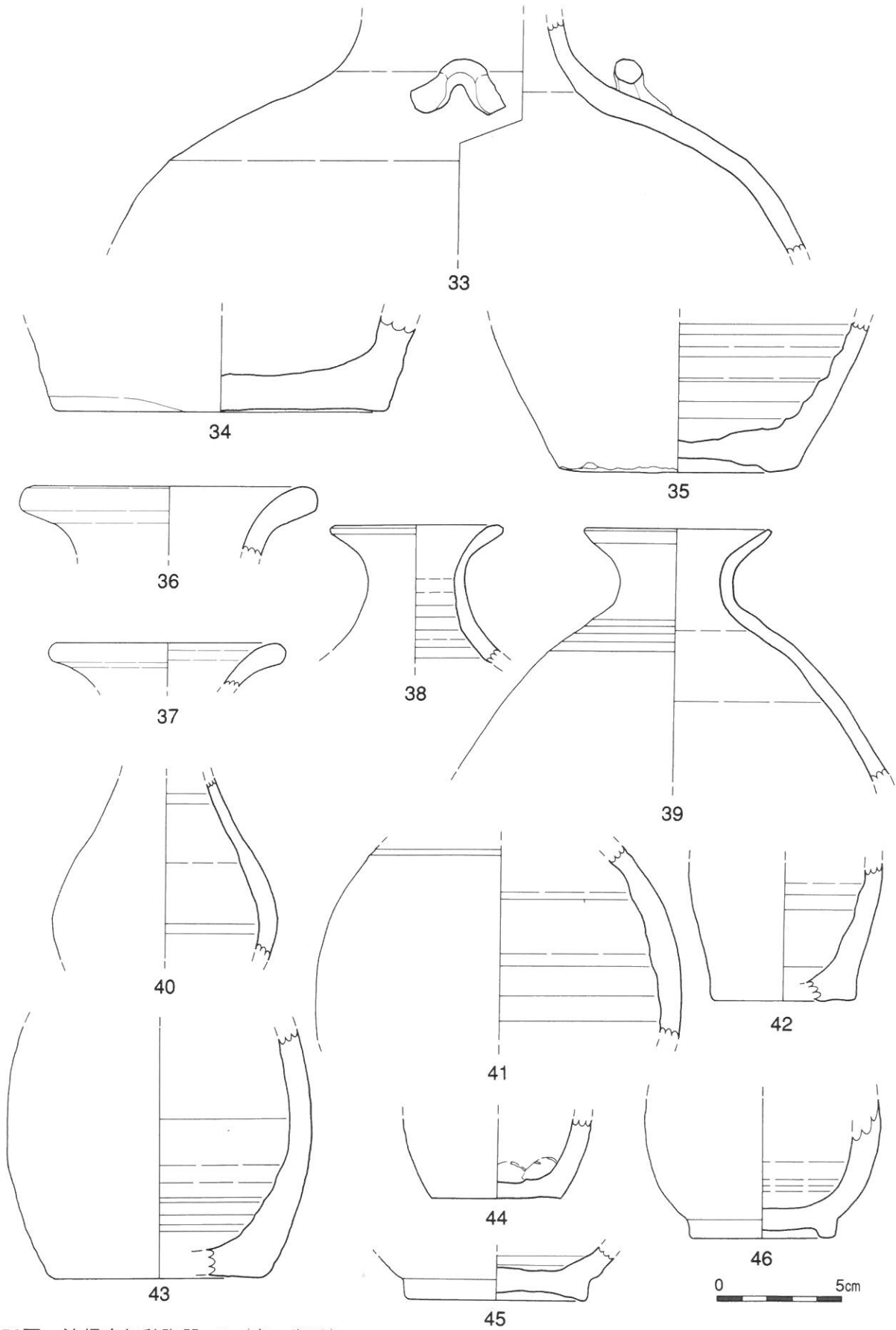
図・図版	番号	器形	口径 底径 器高 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
第58図 ・ 図版56	73	鍋の蓋?	— — —	蓋甲及び高台状の突起褐色の釉が部分的に残存。蓋甲は灰褐色。内面明灰色。	茶紫色の微粒子。細かい石英や石灰質細粒など微量ながら混入。	蓋上面回転磨削・回転擦痕。内面回転擦痕。	高台状の突起は逆「ハ」の字状に上方に開き、調整は磨削りを主体に施す。突起の最大直径は6cmを測る。	A区ノ-31 茶褐色
	74	碗底部	— 4.4 —	外面明橙色・茶褐色(無釉)。内面茶褐色。	茶褐色の細粒子。微細な石灰質の砂粒や粗い貝片などが少量混入する。	外面回転擦痕・回転磨削り。 内面回転擦痕。	高台輪は磨削りのまま終了する。見込みには重ね焼きの胎土目(粗い石英と石灰質粗粒子)がみられる。	B区フ-29 明茶色
	75	灯明皿	11.0 5.8 2.0	外面茶色(無釉)内面明橙色。	明橙色の微粒子。石灰質の細粒子や茶黒色の鉱物が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。 内面回転擦痕。	内彎口縁のベタ底皿。外底面は切り離しの際剥離する。立ち上りの箇所に磨削りを入れる。口縁の内外面及び口唇に煤が炭化し付着する。	B区フ-30 壁
	76	灯明皿	11.0 5.2 2.3	両面黄茶色。(無釉)	灰褐色の細粒子。微細な石灰質砂粒が微量ながら混入。	外面回転磨削り・回転擦痕。 内面回転擦痕。	内彎口縁のベタ底皿。外底面は同心円状に磨削りを施す。内面口縁と口唇に多量の煤が付着し、炭化している。	B区ホ-30 北壁表採
	77	小皿	10.8 4.6 2.6	外面灰褐色。(無釉)内面淡茶色。	茶紫色の微粒子。微細な石英が僅かに混入する。	外面回転擦痕・回転磨削り。 内面回転擦痕。	内彎する小皿。外底面は切り離しの際に剥離。	A区ネ-31 第1層
	78	香炉	11.0 — —	外面明茶色の釉。内面灰褐色。	茶紫色の微粒子。微細な石英と細かい茶色の鉱物が僅かに混入する。	外面回転擦痕。 内面回転擦痕・ロクロ痕。	円筒形の香炉。内面口縁が僅かに肥厚する。外面の釉の大半は剥げ落ちている。	A区ハ-32 第1層
	79	香炉底部	— 10.4 —	両面明茶紫色の釉	茶紫色の微粒子。微細な石英が少量混入。	外面回転磨削り・回転擦痕。 内面回転擦痕・ロクロ痕。	円筒形の香炉。外面は釉を施した後に底部近くに磨削りを入れ釉の掻き取りと面取りを同時に実施。外底面は磨削り後に円盤状の足を貼り付けている。	B区ハ-30・31 第2層
	80	火炉Ⅰ	22.4 — —	外面明黄白色の釉内面明橙色。	明橙色の微粒子。細かい石灰質粒や茶色の細い物質などが僅かに混入。	外面回転擦痕・磨削り・ロクロ痕。 内面回転擦痕。	円筒状の火炉。口縁近くで器壁が僅かに厚くなる。	B区ヘ-29 茶褐色
	81	火炉Ⅱ	10.2 — —	外面暗褐色の釉。内面淡褐色。	明茶紫色の微粒子。細かい石灰質粒や茶色の細い物質が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	口唇を浅目に弧状に磨削り取っている。内面に釉の垂れがみられる。劈開面に白色の陶土が繻文様状に入り込んでいる。	A区ホ-31 攪乱
	82	器種不明鉢?	20.0 — —	外面茶褐色の釉内面灰色。	灰褐色の粗粒子。細かい軽石と石灰質の細粒が少量混入。	両面とも回転擦痕か。	口縁を「へ」の字状に折り曲げている。口唇は磨削りで丸味を出している。劈開面は気泡が多くアバタ状となる。	A区ヌ-34 第2層
	83	器種不明鉢?	22.0 — —	外面淡灰色の釉。内面茶紫色。	茶紫色の微粒子。微細な石灰質の粒が少量含まれている。	外面回転擦痕か。 内面回転擦痕。	口縁が僅かに端反る。口唇は斜位に成形する。	A区ヒ-32 トレンチ第3層
	84	器種不明壺?	21.6 — —	両面茶褐色の釉。	濃茶紫色の微粒子。石灰質の微粒子などが少量混入。	両面とも回転擦痕?・回転磨削り。	内彎口縁で口唇のみ磨削りを施す。口唇は削りで尖らせている。	B区ノ-30 焼土混り
	85	把手大型急須?	— — —	両面灰緑色の釉。	茶紫色の微粒子。混入物はほとんどみられない。	両面ともナデ?。 両側面は磨削り。	幅3.8~4.1cm、厚さ1.0~1.4cmの把手の破片。釉を施す。釉には細かい貫入がみられる。	表採
	86	把手急須	— — —	両面とも茶褐色の釉。	淡い茶紫色の微粒子。混入物はほとんどみられない。	両面ともナデ?。 両側面ともナデ?。	幅2.2cm、厚さ0.8~1.0cmの把手の破片。	A区ネ-31
第59図 ・ 図版57	87	壺・甕の底部	— 19.8 —	外面灰褐色。(無釉)内面明橙色。	淡灰色の微粒子。粗い石英・石灰質細砂粒が僅かに混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。 内面回転擦痕。	外底面は磨削りを施す。底面の縁辺に削りを入れ面取り。立ち上りの部分にも磨削りを施す。	A区ニ-34 第2b層
	88	壺底部	— 23.6 —	外面灰色の釉を施すが大半は剥げ落ちる。内面灰褐色	明茶色の粗粒子。粗い砂粒などを少量に混入。	外面回転擦痕・回転磨削り。 内面回転擦痕。	外底面はナデと指圧を施すが、大部分は剥離面である。劈開面はアバタ状で部分的に大きな気泡の跡がみられる。	A区ネ-32・33 第4層焼土混り



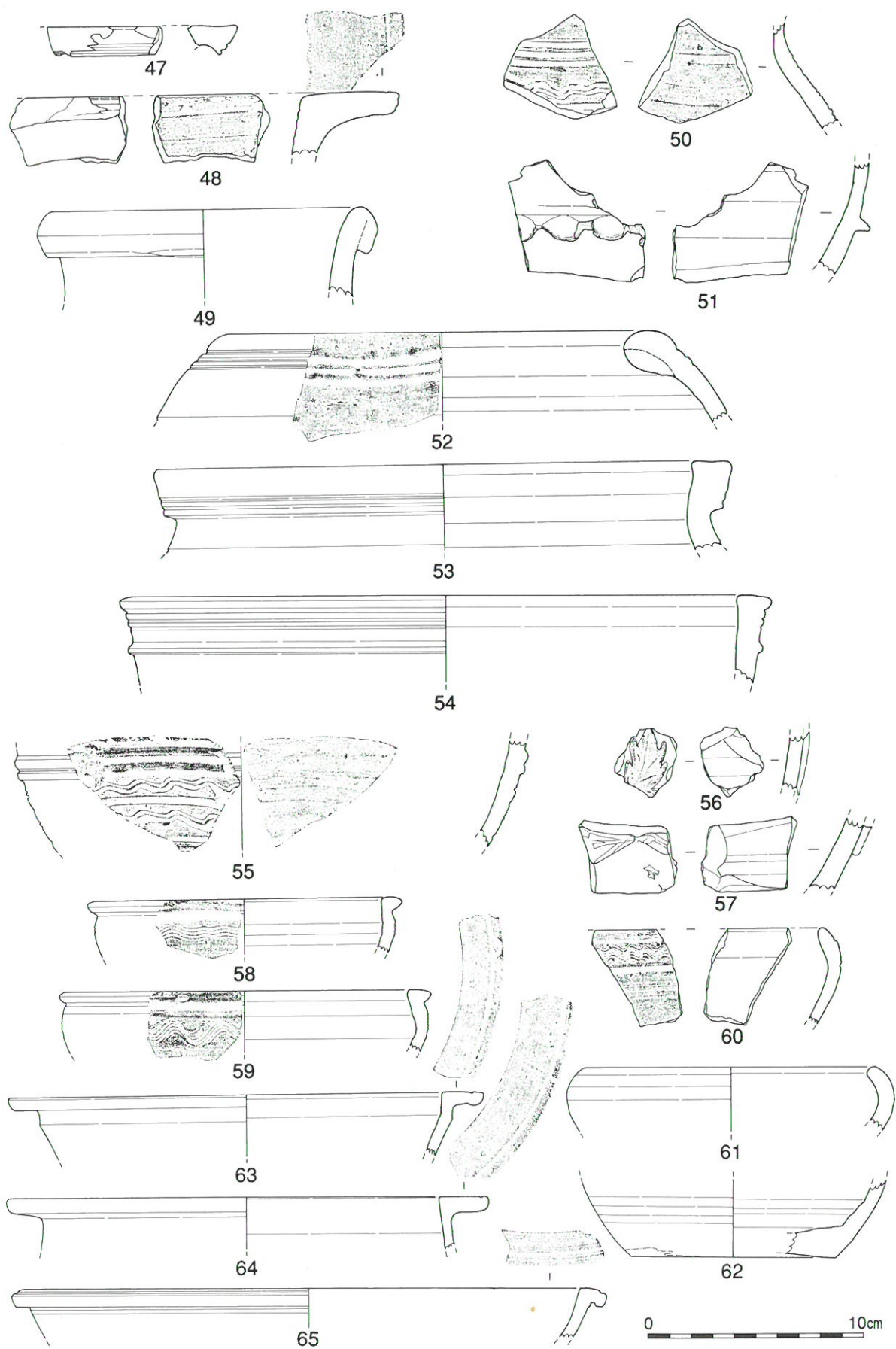
第54図 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢)



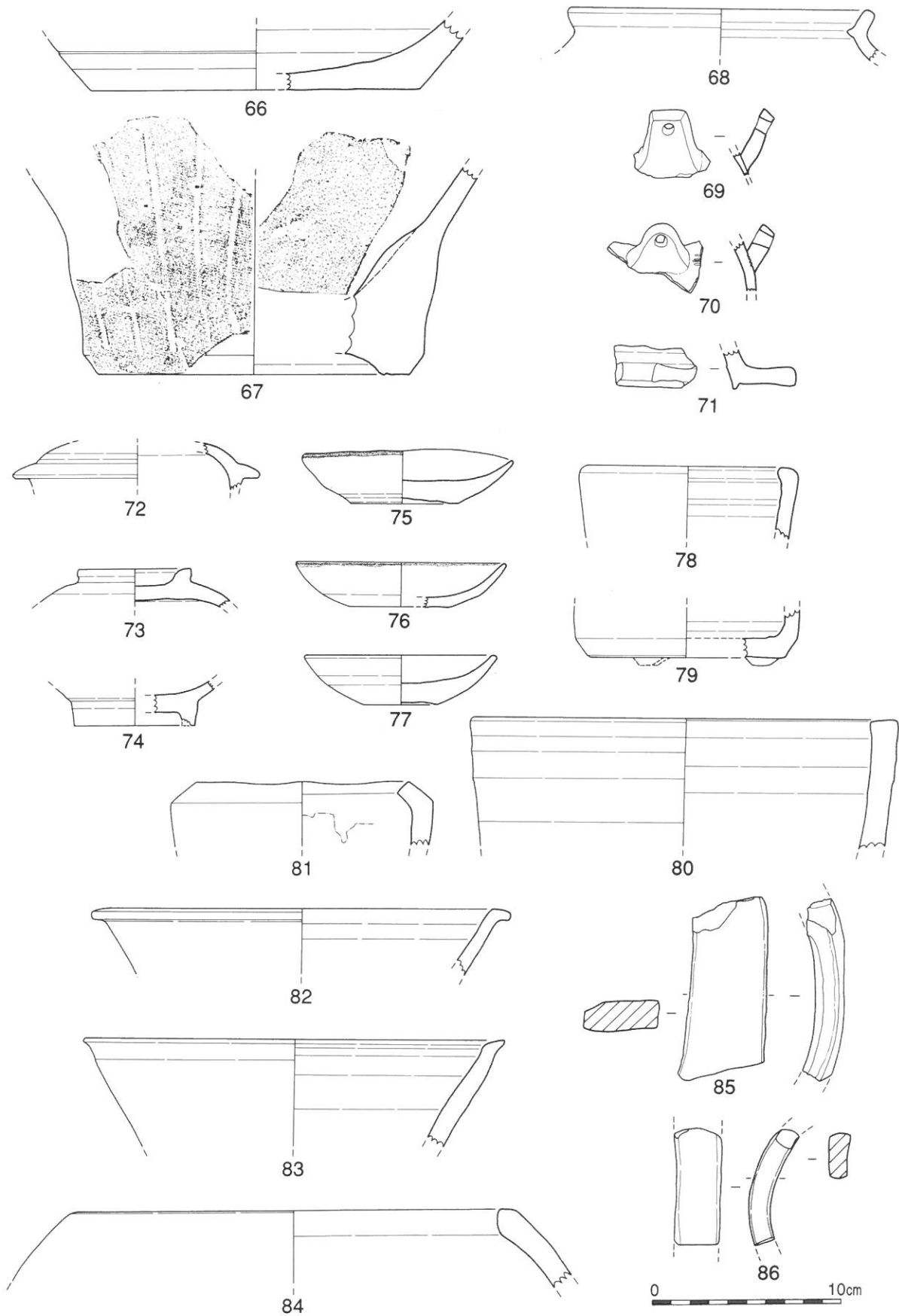
第55図 沖縄産無釉陶器 2 (壺)



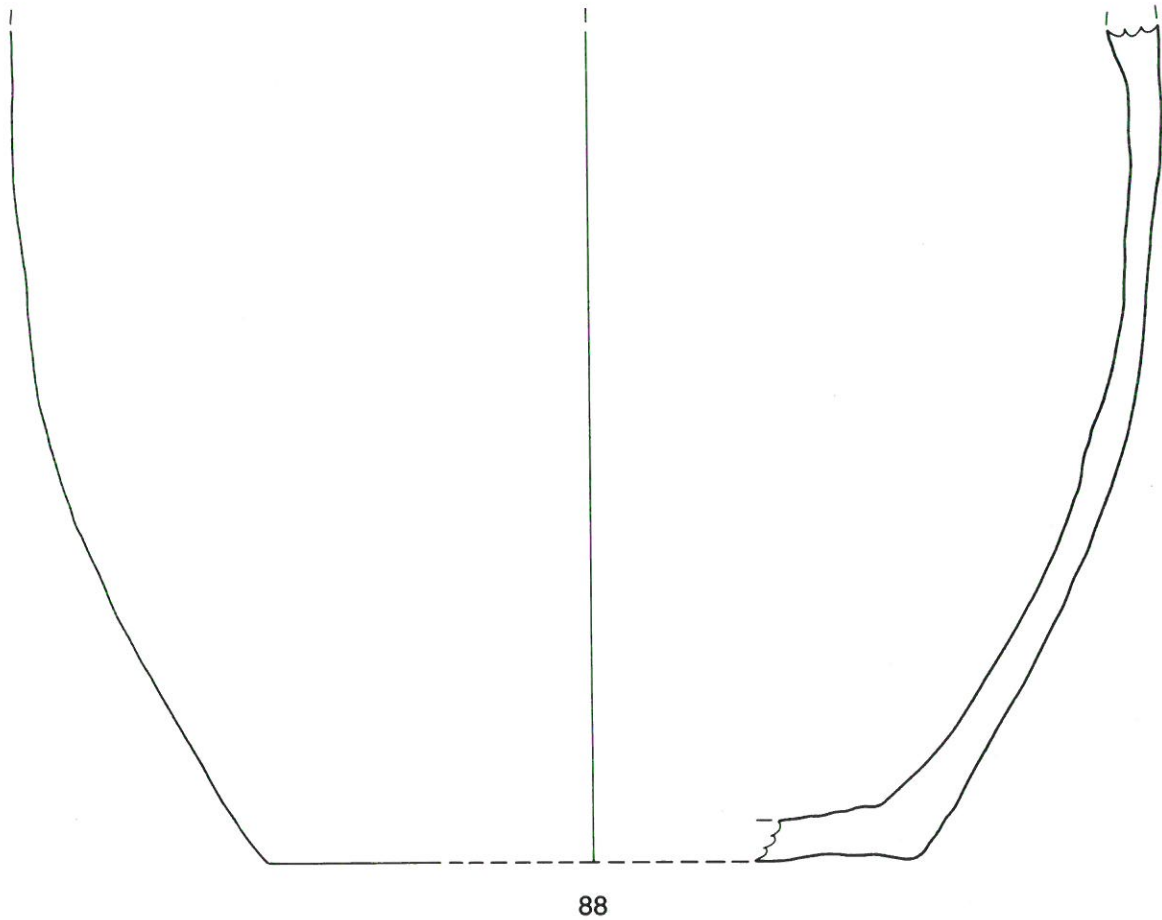
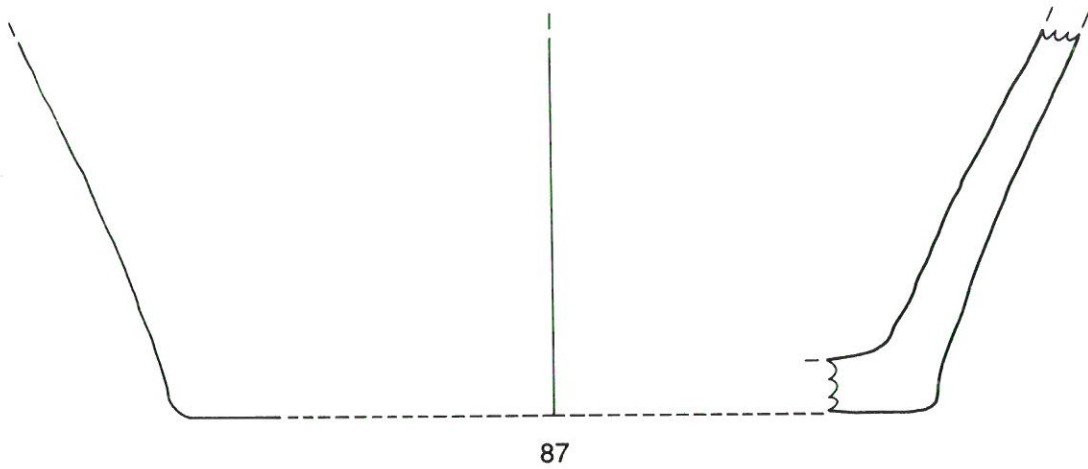
第56図 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)



第57図 沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢・小鉢)



第58図 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手)



第59図 沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)

第14節 土器

土器は2器種が確認され、個数も2点である。壺の破片と鍋の復元資料である。以下、壺・鍋の順に特徴を記述する。

a. 壺

第60図1は壺の頸下部から胴上部にかけての破片である。傾きの具合や器面の調整などから壺であることが確認できた。器面調整は外面が丁寧なナデで仕上げている。内面は剝離や摩耗の為、判然としない。色合いは外面が黒褐色、内面は淡橙色を帯びている。胎土は泥質で粗いが、焼成は良く、硬い。混入物として0.3～1mm程度の貝殻片を多量に含んでいる。他に粗い茶色の物質・微細な石英・サンゴの細片が含まれている。外器面は混入物の剝落で、アバタ状を呈する箇所が認められる。A区ヌー33第4層より出土。

b. 鍋

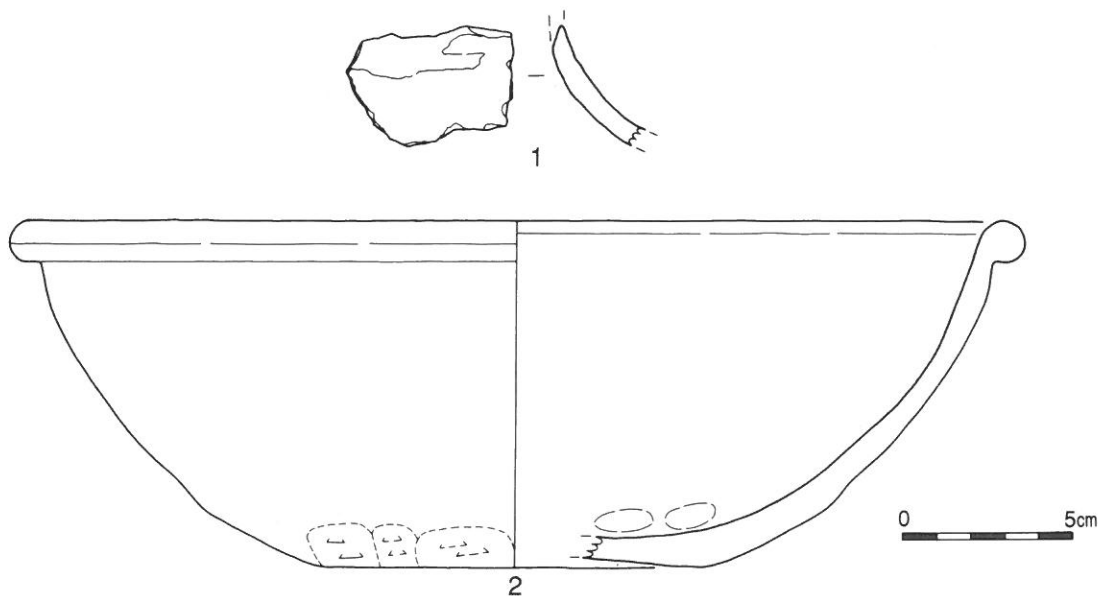
同図2は外底面及び胴下部が煤けている状況から鍋として判断した。器形は浅鉢形（サラダボール状）を呈し、外底面からの立ち上りは外側に大きく開き、丸味を持たせて口縁下端まで移行している。口縁に大きな玉縁状の肥厚を造る。器面は両面ともアバタ状を呈している。調整は外面はナデが主体であるが、外底面および底面からの立ち上りの箇所に篋削りを施した後にナデを加えている。内面は外面よりもやや丁寧なナデを加えている。他に僅かながら指圧痕が認められる。器色は両面とも黄褐色を呈している。外面の胴下部及び外底面は煤けて茶褐色に変色している。胎土は泥質で細かい。焼成は良好で硬い。混入物として石灰質の粗砂粒（0.3～1mm程度）を少量含んでいる。他に粗い茶色の物質を僅かに含んでいる。復元されたサイズは口径29.9cm、底径11.2cm、高さ10.3cmを測る。A区ニー31・32第6層から出土している。

今回出土した土器が、どの時期に所属するかが重要である。グスク土器に所属するのがあるいは宮古や八重山で登場している沖縄産陶器の影響を受けた宮古第二式土器^(註1)やパナリ焼^(註2)の時期と平行するかである。

註

註1. 安里進「(特別寄稿) 沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」 やちむん 第5号 やちむん会 1975年。

註2. 金武正紀「土器→無土器→土器 (八重山考古学編年試案)」 南島考古 No 14 1994年11月。



第60図 土器

第15節 陶質土器

陶質土器の器種として鍋・火炉・水鉢・鉢（深鉢・浅鉢）・急須・小壺の6器種の他に鍋と急須の蓋が確認されている。前回、手焙（火舎）としたグループは、今回は火炉の中を含めることにした。

鍋は沖縄では「サーカーナービ」として俗称されるものである。これらの陶質土器は壺屋においては「アカムネー」・「アカモノー」と総称される土器群である。

陶質土器の主な特徴として胎土は精選され、その成形が轆轤引きで、薄く仕上げるものである。器種は明橙色・明黄色などを帯びるものが主流である。焼成が悪く脆いものが多く、中には陶器に近い陶土で硬く焼成するものもある。今回、復元された資料は1点も得られていないが、県内の各遺跡出土のものでその特徴を記述しながら、湧田出土の資料を処理することにした。個々の特徴については、第11表a～eに示した。

a. 鍋

鍋については、全体的な傾向からすると口頸部で「く」の字状に折れ曲り、口縁に粘土紐状の把手を貼り付けていて、丸味のある底部である。最近の例^(註2)では、安仁屋トゥンヤマ遺跡出土の沖縄産陶器が、陶質土器と同種であることが判明して、安仁屋トゥンヤマ遺跡のものには三角錐状の突起を3個貼り付けて足とするものである。この鍋には三足の足がつくものと足のないものの二者が存在する可能性がある。

鍋の身は第61図1～5に図示し、鍋の蓋は第61図13・第62図16～18に図化した。

b. 火炉

火炉については基本的に壺屋古窯群で良好な資料が得られていて、島弘^(註3)氏の分類概念に従って湧田の資料を取り扱うことにする。

島弘氏分類の火炉はⅠ群～Ⅲ群に分類されていて、Ⅱ群のみa～c種の3種に細分類されている。この分類に湧田出土のものを充てることにする。各群の分類概念は、『壺屋古窯群Ⅰ』（1992年）を参照されたい。

Ⅰ群は第61図6に示す1点である。Ⅱ群aが同図7～9に図化した3点である。Ⅱ群cは同図12に示した1点である。他は把手（同図10・11）の資料と底部（同図14）である。把手資料の11は阿波根古島遺跡^(註4)で出土した火炉（阿波根古島遺跡では火舎b類中に含まれているもの）で、頸部が長く、口縁を玉縁状に肥厚させるタイプの把手と同一のものである。同種の器形で同様の把手を貼り付ける例は御細工所跡^(註5)からも出土している。今後この手のものをひとつの群として把握できるものとして考えたいところである。

c. 水鉢

沖縄では「ミジクブサー」と通称されていることが御細工所跡^(註6)で確認されていて同一器形のものが出土している。湧田のものは第62図19・20に図示したものである。2点とも口縁部に楡描きの波状文と丸彫りの圏線を施す。

d. 鉢

鉢としたものには、深鉢形で花鉢？の口縁とみられるものと浅鉢の口縁？とみられるものの2点である。第62図21に図化したものが花鉢？とみられるもので、口縁内面が肥厚し、その断面形態は「て」の字状の肥厚となる。同図22は浅鉢？の肥厚口縁で、口造りが21と共通した手法で実施されている。

e. 急須

急須には2種の口縁形態が確認されている。口縁形態などからⅠ・Ⅱ類に分けることにした。

・Ⅰ類

Ⅰ類は前回出土したタイプのもので、口縁が微弱に肥厚し、非常に短い頸部を持つ。全体的な器形は

「ハ」の字状に内傾し、胴下部が丸味を帯びるものである（同図24・25）。鳥 弘氏分類^(註7)のAタイプの範疇に所属するとみられるものであろう。

・Ⅱ類

Ⅱ類は、壺屋古窯群Ⅰ^(註8)や伊良波西遺跡^(註9)で出土したタイプで、壺屋古窯群の例からすると口縁の肥厚はなく、口頸部で「く」の字状に折れ、口縁をほぼ垂直（微弱に内傾するものと外側に外傾するものなどもある）に仕上げ頸部が1cm前後と長くなっているものである。（第63図36・37、第62図27・29）。鳥 弘氏分類^(註10)のBタイプに所属するものとみられるものである。

その他に把手破片（第62図26・30）やⅠ・Ⅱ類から除外される小型の急須の注ぎ口が1点得られている。（同図28）。その他に急須の蓋及び撮みの破片が（同図31～34）4点得られている。

f. 壺

非常に薄く仕上げた薄手の小壺とみられるものが2点得られている。第63図38は口縁が僅かに外反するもので小壺とみられる。同図39は口縁が僅かに内側に内傾させている。これも小壺とみられる。

その他に橙茶色の化粧土を外面から外底に塗付した厚手の壺の底部（同図40）が1点得られている。

g. 土製品

球体状の製品が1点得られている。遊具として考えたいところであるが、最近になって当真嗣一氏^(註11)の論文によると、この種の土製のものも火矢（ヒヤー）の弾丸とする説もある。

h. 小 結

陶質土器の中には素地の焼成において軟質と硬質がある。軟質のものが一般的であり、軟質のものは手や指先に粉末化した素地が付着する。硬質のものは陶器質やそれに近い陶土を使用するもので、これを使用した器種は、火炉Ⅰ（第61図6）・火炉Ⅲ（同図12）・火炉底部（同図14）・鉢（第62図21・22）・急須把手（同図26）・急須Ⅱ（同図27）・急須（同図28）・鍋の蓋（同図34・35）であった。

常時、火や火種を保存する火炉に硬質のものが多く、また、煮沸用の急須や鍋にも僅かながら硬質のものが使用されている。鉢については口径が25～33cmと大きい為、軟質では、大型のものは強度の面からも破損する確率が高いものと考えられる為、必然的に硬質の陶土を使用したものと考えられるところである。

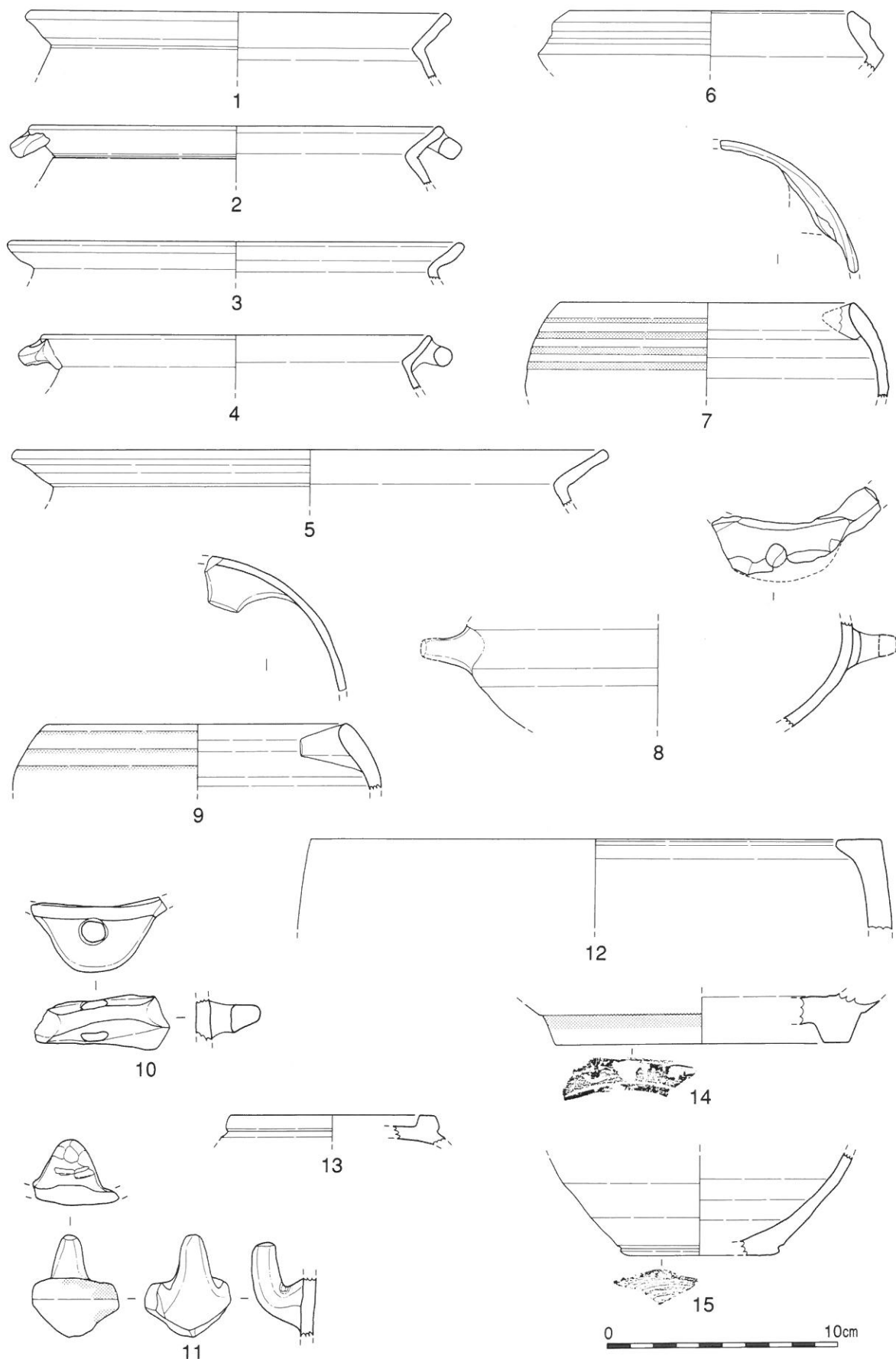
火炉の素地や焼成などについては、阿波根古島遺跡^(註12)（火舎と報告）でも指摘したとおりの結果となったが他器種でも確認されたことは意義ある発見であった。

第11表 陶質土器観察一覧

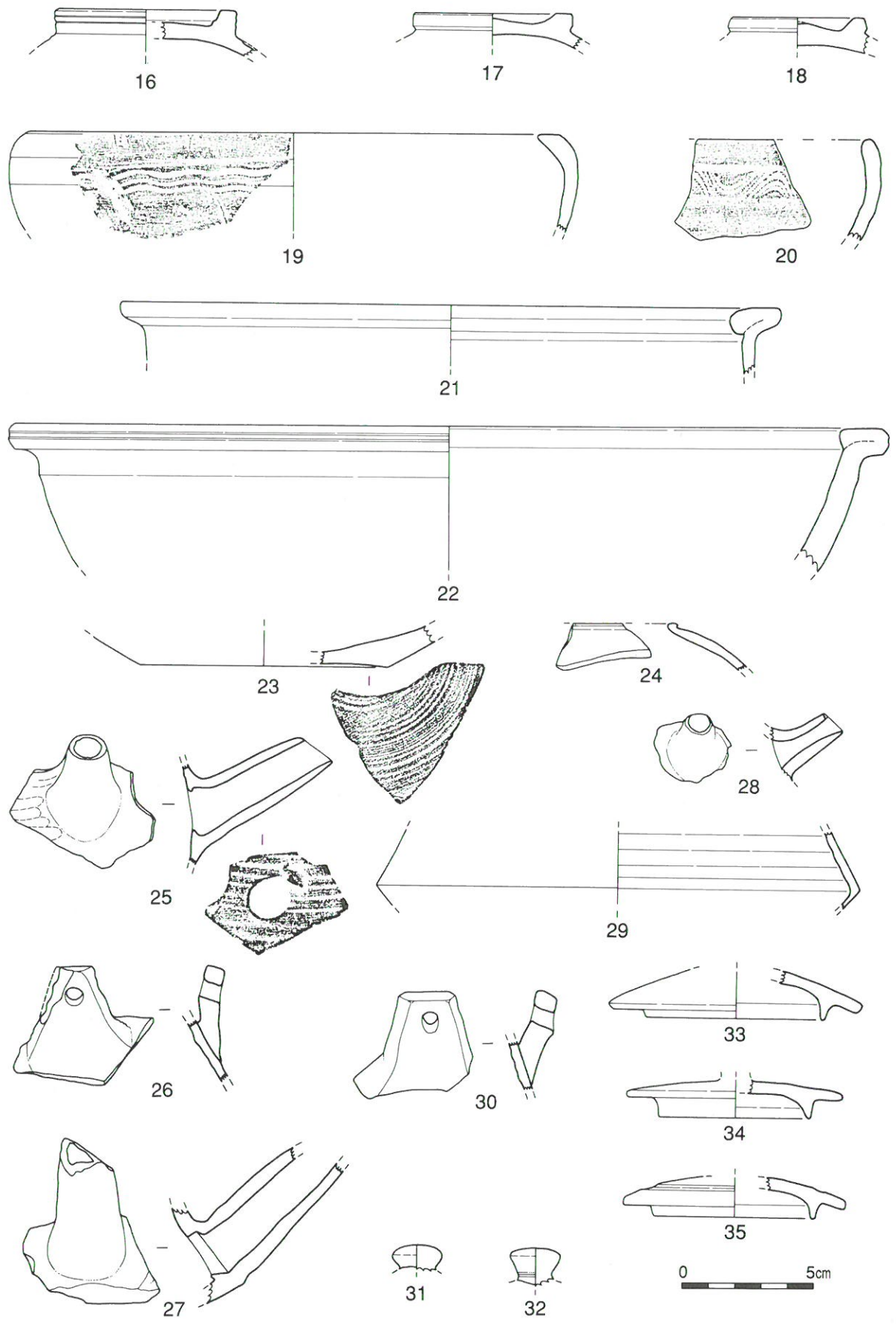
単位：cm

図・図版	番号	分類	口徑 底徑 器高	色調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和剤	文様等	備考	出土地点
第 61 図	1	鍋	18.4 — —	淡橙色	回転擦痕	回転擦痕	A・B	なし	口頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。口縁端部で僅かに肥厚する。	ノ-30 第2層
	2	鍋	18.0 — —	明茶色	回転擦痕・回転 磨削り・指圧・ナデ	同上	A・B・C	口縁に紐状把手	口頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。口縁端部で僅かに肥厚。頸部に削りを入れ屈曲を強調する。口縁端部に炭が付着する。	不明
	3	鍋	19.8 — —	明黄色	回転擦痕・回転 磨削り	同上	A・B・C	なし	口頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。口縁外面は磨削りで丸味をもたせた後に擦痕を加える。内面口縁が僅かに窪む。	ノ-30 第2層
	4	鍋	17.0 — —	淡橙色	回転擦痕・指圧 ・ナデ	同上	A・B	口縁に紐状把手	口頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。口縁内面が微細に窪む。	ノ-30 第2層
	5	鍋	26.0 — —	同上	回転擦痕・回転 磨削り	同上	A・B・C	なし	口頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。外面の口縁及び頸部に磨削りを施す。	ノ-30 第2層
	6	火炉Ⅰ	12.2 — —	淡黄色	同上	同上	A・B	口縁に丸彫りの 圏線	口頸部で内側に屈曲し、内傾する。陶器質に近い陶土を使用し、硬い。	ノ-30 第2層
	7	火炉Ⅱ	12.8 — —	明黄色	回転擦痕・ロク ロ痕	回転擦痕・ロク ロ痕・ナデ・指圧	A・B・C	ロクロ痕に白化 粘土	内彎する口縁。内面口縁に突起を貼り付けるが先が破損する。	ノ-30 第2層
	8	火炉Ⅱ	— — —	同上	回転擦痕・ロク ロ痕・ナデ	回転擦痕	A・B・C	胴部に孔のある 把手	丸味のある胴部片。把手の孔は9mmを測り上方からやや斜めに穿っている。	ハ-30 第2層
	9	火炉Ⅱ	13.0 — —	同上	同上	回転擦痕・ロク ロ痕・ナデ・指圧	A・B・C	内面口縁に突起	内彎する口縁。内面口縁に平面観が梯形状を呈する突起を貼り付ける。	ノ-29 茶褐色
	10	火炉Ⅱ 把 手	— — —	同上	回転擦痕・ナデ	同上	A・B・C・D	胴部に孔のある 把手	半円形状の把手で直径1cmの孔を上方から穿孔する。陶器に近い陶土を使用し、硬い。	ノ-30 第2層
	11	火炉把手	— — —	淡茶色	回転擦痕・ロク ロ痕	磨削り・ナデ	A・B・C・E	内面に突起	「L」字状に折り曲げた三角形の突起を貼り付ける。	コ-32 第2層
	12	火炉Ⅲ	24.8 — —	明黄色	回転磨削り・回 転擦痕?	回転擦痕	A・B・C	なし	口縁内面が内側に突出する為、逆「L」字状となる。陶器に近い陶土を使用し、硬い。劈開面は淡灰色を帯びる。	ノ-29 第1層
	13	鍋の蓋	9.0 — —	同上	回転擦痕・回転 磨削り	同上	A・B・C	高台状の把手	高台状の把手を削り出してつくる。把手外面に削りを入れる。	ノ-30 北壁
	14	炉底部	12.8 — —	明茶色	回転磨削り	ロクロ痕	A・B・C	外面に白化粘土	高台部に白化粘土。置片に糸切りの痕跡あり。陶器質の陶土を使用し硬い。	ニ-33 第2層
	15	器種不明 底部	6.8 — —	明橙色	回転擦痕・回転 磨削り	回転擦痕	A・B・C	なし	立ち上りの箇所削りを入れる。外外面に糸切りの痕跡がある。	ナ・ニ-31 攪乱層
第 62 図	16	鍋の蓋	6.8 — —	明黄褐色	回転磨削り・回 転擦痕	同上	A・B・C	高台状の把手	把手の内側は深く、削り出しの際にズレが生じ雑に仕上げられる。	ハ-30
	17	鍋の蓋	6.0 — —	明茶色	同上	同上	A・B・C	高台状の把手	把手の内側は浅く雑に削り取る。把手外面に深い削りを入れる。	ホ-31 地山攪乱
	18	鍋の蓋	5.0 — —	淡橙色	同上	同上	A・B・C	高台状の把手	把手の内側は丁寧に斜位に削り出す。	井戸前排水溝 攪乱
	19	水鉢	20.0 — —	淡黄色	同上	同上	A・B・C	楕圓さの波状文 と丸彫りの圏線	内彎口縁で口唇を幅広く仕上げる。楕目は三本。	ナ・ニ-31
	20	水鉢	— — —	淡橙色	同上	同上	A・B・C	同上	内彎口縁で口唇を舌状に仕上げる。楕目は五本。	ノ-30攪乱
	21	鉢 花鉢?	25.0 — —	黄茶色	回転擦痕 回転磨削り	回転擦痕	A・B・C・G	なし	口縁の断面が「て」の状に内側に折り曲げている。口縁の一部と頸部に淡褐色の化粧土を塗付。陶器質の陶土を使用。	ネ-33 畦の壁面
	22	鉢	33.4 — —	淡茶色	同上	回転擦痕 回転磨削り	A・B・H	口縁に丸彫りの 圏線	口縁を内側に折り曲げた後に接合面削りを入れる。陶器質の陶土を使用する為、硬い。	ハ-31 畦の壁面
	23	浅鉢底部?	11.4 — —	淡黄褐色	同上	刷毛状調整痕 回転擦痕	A・B・C	なし	外側に大きく直線的に開く底部。	ノ-30 第2層
	24	急須Ⅰ	— — —	淡黄色	同上	回転擦痕 ロクロ痕	A・B	なし	胴部で内側に内傾し丸味をもたせる。口縁は削り出して、肥厚をつくる。	フ-31 第3層
	25	急須Ⅰ 注ぎ口	— — —	明黄色	ナデ仕上げ	同上	A・B・C	なし	丸味のある急須の注ぎ口。注ぎ口は先端で1cmを測る。内面に短径1.5cmと長径1.7cmの孔を穿つ。	フ-31 第2層
	26	急須把手	— — —	淡黄色	ナデ・磨削り	同上	A・B・E	歪な梯形状の把 手	孔を外側から穿つ。孔のサイズは直径7mmを測る。陶器質の陶土を使用する為、硬い。	ニ-33 第2層
	27	急須Ⅱ 急須注ぎ口	— — —	同上	同上	同上	A・B	なし	「く」の字状に折れるタイプの急須。注ぎ口を貼り付けた後に削りを入れる。内面に短径1.3cmと長径1.8cmの孔を振り取るように開けている。煤が付着する。陶器のように硬く焼き上げる。	フ-28 茶褐色攪乱
	28	急須注ぎ口 小振の急須	— — —	淡茶色	同上	回転擦痕	A・C	なし	注ぎ口の貼り付けた上部で折れ曲る。注ぎ口の直径7mmを測る。内面に短径1cmと長径1.2cmの孔を振り取るように内側から開けている。陶器のように硬く焼き上げる。	ニ-33 第1層
	29	急須Ⅱ胴部	— — —	明黄色	同上	ロクロ痕 回転擦痕	A・B・C	なし	「く」の字状に折れる胴部片で、薄造りである。胴部の最大は19.4cmを測る。	ハ-29 茶褐色土層
	30	急須把手	— — —	同上	ナデ・磨削り	同上	A・B・C	梯形状の把手	楕円形状の孔(6~7mm)を外側から穿っている。	ノ-28 茶褐色
31	蓋の撮	— — —	淡橙色	回転擦痕か	—	A・B	なし	鏡頭形の撮。直径は1.8cmを測る。	表採	
32	蓋の撮	— — —	淡黄色と淡灰色	回転擦痕か 回転磨削り	—	A・B・C	なし	鏡頭形の撮。直径は1.8cmを測る。	表採	
33	蓋	9.0/6.8 — —	明黄色	同上	回転擦痕 回転磨削り	A・B・C	なし	丸味のある蓋甲。内面スベリ止めの突起の外側は磨削りを加える。	ノ-28 茶褐色	
34	蓋	9.8/5.8 — —	黄褐色	同上	同上	A	なし	蓋甲をやや直径的に斜めに成形。内面のスベリ止めの突起の外側に削りを加える。陶器のように硬く仕上げられる。	ハ-30 第2層	
35	蓋	9.8/4.2 — —	淡褐色	同上	同上	A・C	幅広い丸彫り の圏線	やや丸味のない蓋甲。陶器質の陶土で焼成する為、硬く仕上がる。	ヌ-32 第2層	
第 63 図 版 60	36	急須Ⅱ	9.6 — —	淡黄色	同上	同上	A・B・C	なし	口頸部で内側にゆるく折り曲げて、口縁をやや内側に内傾させる。	表採
	37	急須Ⅱ 胴部	— — —	明黄色	同上	回転擦痕	A・B・C	なし	頸部に削りを入れる。口頸部でゆるく折り曲げた後に頸部をゆるく外反させる。	ヌ-32 第1層
	38	壺	— — —	明茶色	回転擦痕	同上	A・B・C	なし	薄手の外反翹か。	ヌ-32 第1層
	39	壺	— — —	淡茶色	回転擦痕 回転磨削り	同上	A・B・C	なし	薄手の翹か。	ヌ-31
	40	壺底部	6.8 — —	橙茶色	回転擦痕	同上	A・B	なし	立ち上がりやや内側に縋り気味に直線的である。外面及び底面に橙茶色の化粧土を塗付。	ハ-39 茶褐色攪乱
	41	球状製品	— — —	淡橙色	ナデ	ナデ	A・B・C	なし	直径が1.1~1.3cmを測る。	表採?

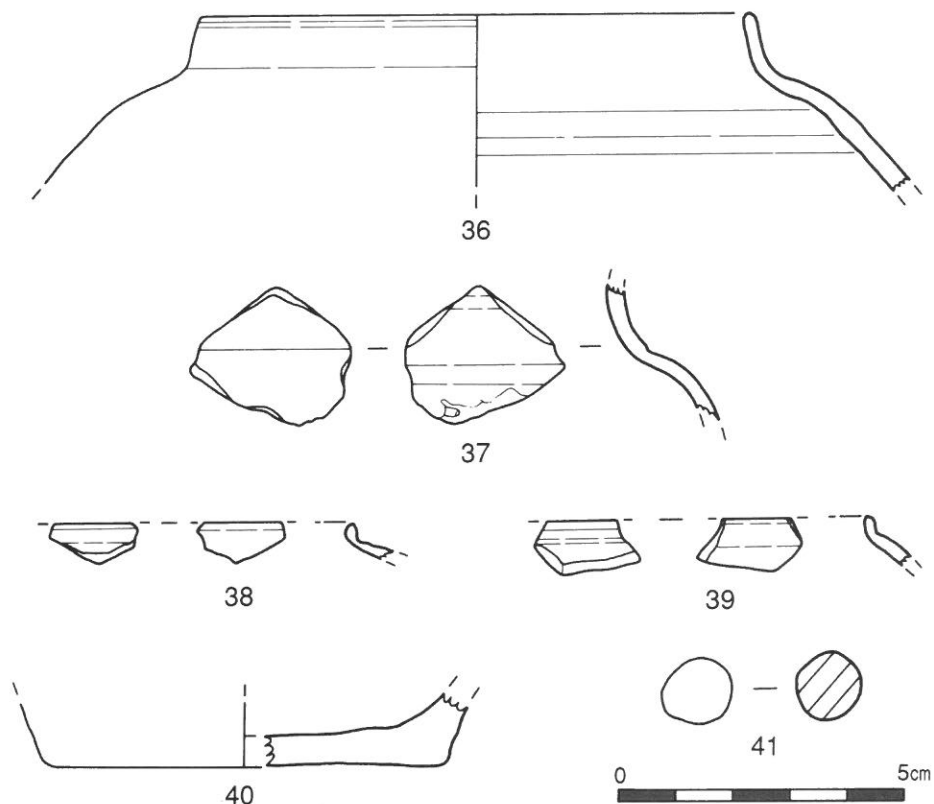
注：混入物が多い順に記した。混入物のAは雲母（細片化）、Bは赤色物質（細粒）、Cは石灰質微砂粒、Dは小型の巻貝、Eは微細な貝片、Gは白色の織状陶土、Hは粗い石英。



第61図 陶質土器 1 (鍋・火鉢)



第62図 陶質土器 2 (鍋の蓋・水鉢・急須・蓋・撮)



第63図 陶質土器3（急須・壺・球状製品）

註

- 註1. 宮城篤正 「陶器、第三章 生業 那覇市史資料編 那覇の風俗 第2巻中の7」1979年。
 註2. 島袋 洋 『安仁屋トゥンヤマ遺跡』 沖縄県教育委員会 1992年。
 註3. 島 弘ほか 『壺屋古窯群Ⅰ』 那覇市教育委員会 1992年。P118～P119参照。
 註4. 金城亀信ほか 『阿波根古島遺跡』 沖縄県教育委員会 1990年。
 註5. 金武正紀・島 弘ほか 『御細工所跡』 那覇市教育委員会 1991年。
 註6. 註5に同じ。
 註7. 註3に同じ。
 註8. 註3に同じ。
 註9. 島 弘・大田宏好ほか 『伊良波西遺跡』 豊見城村教育委員会 1986年。
 註10. 註3に同じ。P117～P118を参照。
 註11. 当真嗣一 「火矢について」『南島考古』第14号（学会創立25周年記念特集号）1994年。
 註12. 註4に同じ。

第16節 瓦質土器

瓦質土器で確認された器種は、鉢（植木鉢、こね鉢、摺鉢、深鉢、浅鉢）、壺、鍋、水盤、大皿、碗、火炉、竈、香炉、茶釜の10器種であった。その他に置き物や用途不明のものが得られている。また、瓦質土器と陶質土器の中間タイプが今回確認された。このタイプの器種は、急須・鍔釜・皿の3器種であった。これについても本項で取り扱うことにする。個々の特徴については、観察表に呈示した。

a. 鉢

① 植木鉢

植木鉢については、文様構成などから a～d 種の4種類に分けた。

- a 種…口縁はほぼ垂直となり、内面口縁の肥厚は微弱である。口縁外面に2条一組みの凸帯と空間をあけて凸帯を1条施すものである。（第64図1）。
- b 種…口縁内面が僅かに肥厚し、口縁の外面に凸帯を2条施すが、凸帯間を篋で削って調整している。凸帯直下に蓮花文と菊葉文を施す。（同図2・6）。
- c 種…口縁は胴部から丸味をもった状態で移行する為、口縁が内彎する。内面口縁の肥厚はない。口縁端部と胴上部に凸帯を各1条ずつ廻らし、凸帯間に菊花文と菊葉文を施す。（同図3）。
- d 種…底面からの立ち上りはやや内側に閉じ気味に直線的に胴下部まで移行し、胴中央で僅かに丸味を出して口縁まで移行する。口縁は内側へ強く内傾させる為、内面口縁が大きく突出し、肥厚する。凸帯は3条施されていて、2条一組みのものが口縁に廻らされ、1条は胴下部に廻らされている。両凸帯間を埋める為に、菊花文や菊葉文を施す。（同図4・5）。

② こね鉢

こね鉢は口縁の形態などから a～d 種の4種類に分類した。

- a 種…口縁が垂直に近い状態で成形されているもの。（第65図7・8）。
- b 種…口縁が内側に軽く内傾するものと微弱に内傾するものがある。（同図9・10）。
- c 種…口縁が内側に一端、内傾させた後に口縁を僅に外反させるもので、口唇外端が尖る。（同図11）。
- d 種…口縁の成形は a 種と同じように垂直に近い形態であるが、内面口縁が僅かながら突出（肥厚）する点で異なっている。（同図12）。

③ 摺鉢

摺鉢もこね鉢と同様に口造りなどで、a～e 種の5種類に分けた。

- a 種…口縁を微弱に内傾させるもの。（第66図13・14）。
- b 種…口縁の傾きは a 種と類似するが、口縁内面が突出（肥厚）するものである。（同図15）。
- c 種…口縁の傾きは a 種と類似するが、口縁下端が胴部側からの篋削りで調整される為、同部位の断面は鋭く尖った三角形となるもの。（同図16）。
- d 種…口縁が内側に軽く内傾させるものである。口唇内端を尖らせるものも含まれる。（同図17・19）。
- e 種…口縁の造りは c 種とは異なり、口縁側からの削りで三角形の尖りを造る。口縁端部で丸味を持たせているもの。（同図18）。

その他に摺鉢の底部片が2点（同図20・21）得られているが、同図20は例外的に底面からの立ち上りが内側に強く締り垂直に近い状態で立ち上っているものである。

④ 深鉢

深鉢としたものは第67図32・33・36に図示した3点で、32は胴部がやや開き気味に口縁近くまで移行

させた後に口縁を軽く外反させている。33は胴部で丸味を持たせた後に頸部で軽く締めてから口縁を微弱に外反させている。36は肩部で「く」の字状に屈曲させているが、稜が潰れて丸味を帯びる。口縁はきつく折って外反させている。

⑤ 浅鉢

浅鉢は器形や口縁形態などから以下に記すように a～i 種の 9 種に分類した。

- a 種…口縁の断面が「く」の字状に折れ、口縁が大きく外側に倒れるもの。(第67図34)。
- b 種…口縁はゆるく外反し、肩部が丸味をもつもの。(同図35)。
- c 種…底面から直線的に開きながら肩部まで移行し、肩部に明瞭な稜をつくる。肩部から頸部では一端内側に締めてから口縁を外反させている。口縁内面にも肥厚を造るもの。(同図37)。
- d 種…胴部から丸味を持たせて肩部まで移行させ、大きく内彎させた後に口縁を内傾気味につくるもの。(同図38)。
- e 種…底面からやや内側に閉じ気味に丸味を持たせて口縁近くまで移行させた後に口縁をきつく内側に内傾させている。口唇は丸味を持たせて成形する。口縁と胴部との区別は圏線で行なわれているもの。(第68図39)。
- f 種…立ち上りの形状は e 種と類似するがやや丸味が欠けていて、口縁の折れも e 種より微弱である。口縁と胴部との区別を圏線を施すことによって行なわれている。口唇を平坦に仕上げる点で e 種と異なっている。(同図41)。
- g 種…底面からの立ち上りは、口縁まで直線的に移行させている。口縁に幅広の圏線を施して、口縁を強調しているもの。(同図42)。
- h 種…底面から開き気味に口縁まで移行させるものと胴中央で内側に閉じるものがある。両者は口縁を稜花状に仕上げる点で共通している。(同図43・44)。
- i 種…口縁に縄目状凸帯と圏線を施し、口縁を強調するもの。(同図45)。

b. 壺

壺は復元可能な資料がない為、口縁形態などで分類した。a・bの2種に分けた。

- a 種…口縁がゆるく外反し、口頸部の屈曲はゆるやかである。(第67図22～25)。
- b 種…口頸部できつく屈曲させる為、口縁が大きく外傾する。(同図26～28)。
有文の胴部片(同図29)が1点得られていたので、これを図化した。

c. 鍋

鍋の口縁破片が2点得られている。第67図30は口縁が外側に開き外反するものである。同図31は胴部から垂直に頸部まで移行し、口縁を軽く外傾させている。口縁内面が浅く窪む。

d. 水盤

水盤としたものは第68図46と50に図化したものである。46は口縁に縄目文と圏線を施している。50は底面からの立ち上りに丸味を持たせて開き気味に口縁まで移行させている。口縁内面が肥厚し、口唇に陽圏線を施している。

e. 大皿

大皿としたものは、高さが4.8～6.6cm、口径が20.8～25cm、底径が15.6～20cmの範囲内に収まるものを

大皿とした。器形は底面から直線的に口縁まで移行するもの（同図48・49）や底面からの立ち上りで一端、くびれるもの（同図47）の2種類が存在する。

f. 碗

碗には大きくみて、口縁が内彎するもの（第68図40・51）と口縁が直口するもの（同図52）の2種類が存在する。口縁形態から前者は内彎口縁碗、後者を直口口縁碗として分類できる。その他に高台のある底部片が得られている。（第70図69・70）。

g. 火炉

火炉として取り扱ったものは外面に有孔の把手を貼り付けるものである。中には内面にも身を受ける為の鏝状の突起や三角形の突起をもつものもある。（第69図53・54・57）。

h. 炉

円筒状の器形を保持するもので、口唇の一端を三日月状に突出させている。（同図55）。

i. 竈

竈として判断したものは、焚口の内面が煤けている点や焚口の縁辺に粘土を貼り付けて縁どりを行なっているなどの点からである。（同図56）。

j. 香炉

香炉には三足香炉と方形状の香炉が得られている。三足香炉は、第69図58・59と第70図68に図示したものである。方形状の香炉は第69図60～63に示す4点の底部片と第70図75に示す口縁である。

k. 茶釜

茶釜の蓋と胴部片が得られている。茶釜の蓋（第70図64）としたものは、蓋中央に孔を穿っているものである。胴部片は2点得られていて鏝を保持する点が特徴である。茶釜の蓋と身は前回も出土している。

l. 蓋

壺などの蓋とみられるものが1点得られている。落し蓋である。（第70図65）。

m. 用途不明

用途が判然とせず不明なものが3点得られている。（第70図71・72・81）。

n. 把手・撮

把手や撮の破片が3点得られている。把手（第70図73）は大型のもので、炉などのものかもしれない。撮（同図74）も大型であり、壺などの蓋の撮かもしれない。もう1点は棒状の把手？（同図77）とみられるものであるがその器種は、判然としない。

o. 置き物

手捏や型に入れて製作されたものである。獅子の耳（第70図76）と足（同図77）の破片が2点得られ

ている。型物とみられるものは2点(同図79・80)得られているが、現段階ではどのような動物になるかは想像がつかない。

p. 陶質土器との中間タイプ

器形の形態や形状が、陶質土器や瓦質土器にも認められないものや、器形が瓦質土器で、胎土は陶質土器にみられるものなどを中間タイプとした。確認された器種は急須(第70図82・83)、罍釜(同図84)、皿(同図85)の3器種であった。これら3点は轆轤成形であり、急須と罍釜は焼成も良く硬い。皿のみ焼成が悪く脆い。皿は指頭に粉末が付着し、陶質土器の胎土と一致している。

q. 小 結

前回の報告^(註1)では、瓦質土器については、各器種の分類を実施する時間的な余裕もない状況であったが、今回もまったく余裕がない状態にある。前回の行政棟からは器種として、甕・鉢(植木鉢、こね鉢、水鉢、浅鉢、摺鉢)・壺(長頸壺、短頸壺)・炉(手焙、火舎を含む)・香炉・碗・杯・皿(灯明皿)・罍釜・漏斗の10器種が確認されていたが、議会棟の発掘調査では、鍋・竈の2器種が確認された。前回、報告した器種の中で鉢の水鉢及び浅鉢(洗)は、今回の分類では浅鉢の中に入れられるグループである。浅鉢(盤)は今回、水盤としたものに属する。また、小型の浅鉢の一部からは大皿として仮に分類したものもある。とにかく、これらについては、湧田の最終的な報告となる警察棟で具体的にこなわれていくものであろう。

今回、注目されたものを1・2点記述してまとめとする。最初に植木鉢の中でa種(凸帯文のみで構成)とc・d種(凸帯文と菊花文+菊葉文の構成)が新しく確認された。従来のタイプはb種のみである。前回の報告では、蓮花文と唐草文としたが、今回、蓮花文と菊葉文とした。これは、菊花文と菊葉文を施したc・d種の葉文とb種の葉文が類似していることから唐草文を菊葉文とした。これらの状況からb種の前段階のタイプとしてa・c・d種の3タイプが先行することが、今のところ予想出来る(以下、菊花文+菊葉文を菊花文とし、蓮花文+菊葉文を蓮花文とする)。つまり菊花文から蓮花文の流れである。また、植木鉢の菊花文や蓮花文は、円筒状の陶土に文様を彫り込んで、これを外器面に押しつけながら円筒文を転して施していることが明らか^(註2)となっている。この手法を仮に「円筒印文」^(註3)と称することも可能であろう。

湧田古窯からは萬曆33年(1605年)の銘入り瓦質土器(浅鉢)が出土^(註4)していて、瓦質土器は17世紀初頭まで確実に存在することは明らかとなっていることを付記する。

註

註1. 沖縄県教育委員会 『湧田古窯(I) -県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-』 1993年。

註2. 発掘担当者のひとりである島袋 洋から教示を戴いた。

註3. メソポタミアのウルク期(紀元前3000頃)になって円筒印章が始まるが、はじめはスタンプ形印章であったようであり、原始農耕社会において発明された印章は紀元前5000年紀の後半に遡る。農耕生活による余剰物質の増大、交易の発達などが、印章の発生をうながしたものとして考えられている(西谷真治『図解考古学辞典』1980年)。ここでは円筒印章とは使用せず、円筒印文と仮称したが、将来、類例資料が増加すれば、湧田窯(生産者集団)の印章として把握できるものとして考えられる。把握できれば湧田産の円筒印章(生産者集団)として考えたいところである。

註4. 註1と同じ。(P138~P141を参照)

第12表 a 瓦質土器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	色調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和剤	文様等	備考	出土地点
第 64 図 版	1	植木鉢a	— — —	暗灰色	回転擦痕	回転擦痕・ ロクロ痕	A・B・D	波状凸帯	口縁端部の波状凸帯のみ口唇部に深めの回転擦痕でつまみ出して成形する。他は貼り付け。	A区ハ-32
	2	植木鉢b	34.4 — —	淡褐色	回転擦痕・ 回転斲削り	同上	A・C	波状凸帯・蓮 花文・菊葉文	凸帯間に斲削りを入れる。口縁端部の波状凸帯は口唇外端を回転斲削りで削り出して成形する。下方の波状凸帯も削りだして成形する。	A区ヌ-33 第3層
	3	植木鉢c	31.2 — —	明灰色	回転擦痕・ 斲削り	ロクロ痕	A・B・C	波状凸帯・菊 花文・菊葉文	口縁凸帯は口縁下部よりつまみ出して成形する。	A区ナ-31 第3層下部
	4	植木鉢d	35.4 16.2 19.8	淡灰色	回転擦痕・ 回転斲削り	回転擦痕・ロ クロ痕・ナデ	A・B・C	波状凸帯・菊 花文・菊葉文	口縁端部をつまみ出して凸帯を成形する。	A区ヒ-31 第3層焼土混 じり
	5	植木鉢d	37.6 22.6 18.1	明橙色	回転擦痕・ナ デ・斲削り	回転擦痕・轆 轤痕	A・C	波状凸帯・菊 花文・菊葉文	口縁端部をつまみ出して凸帯を成形する。文様帯下端の波状凸帯の下端は波目がナデ消されている。	A区ノ-31 石組み直下 の焼土混じ り
	6	植木鉢 底部b	— 50.3 —	暗灰色	同上	回転擦痕・ロ クロ痕・ナデ ・指圧	A・B・C	波状凸帯・蓮 花文・菊葉文	外底面は斲削りと斲ナデで調整する。	A区ヒ-31 第3層焼土混 じり
第 65 図 版	7	こね鉢a	— — —	淡茶色	回転擦痕・ナ デ・指圧・斲 削り	回転擦痕・指 圧・ロクロ痕	A・C		口縁が垂直に立ち肩部で「く」の字状に折れる。	B区ノ-29
	8	こね鉢a	28.0 — —	淡灰色	回転擦痕・ 回転斲削り	同上	A・C・D		口縁がほぼ垂直に立ち肩部で「く」の字状に屈曲する。	B区ノ-29 明茶色土
	9	こね鉢b	36.0 17.0 12.3	明灰色	回転擦痕・ナ デ・斲削り	回転擦痕・ナ デ・ロクロ痕	A・C・B		口縁を内側へ微弱に傾ける。外底面は斲削りとナデを施す。また、線彫りで「末」とも判断できる。文様を描く。	A区ノ-31 溝状遺構焼 土混じり
	10	こね鉢b	29.2 18.0 12.2	淡灰色	ナデ・斲削り ・斲ナデ	ナデ・指圧・ 斲ナデ	A・C・D		口縁が内側に軽く内傾させる。口縁の両面に斲ナデを施す。外底面は雑な斲削りを施す。	不明
	11	こね鉢c	23.2 — —	灰褐色	回転擦痕・斲 ナデ・ナデ	ナデ・斲ナデ ・回転擦痕	A・C・D	内面に丸彫り の圏線	口唇外端を尖らす。内面口縁に圏線とみられるものを施すが判然としない。	A区ニ-31 ・32畦の壁
	12	こね鉢d	34.2 16.0 13.0	淡黄灰色	回転擦痕・ナ デ	ナデ	A・C		口縁が内側へ微弱に傾むける。仕上げは丁寧である。外底面は斲削りを丁寧に施し、平坦に仕上げている。	A区ヒ-31 第3層焼土混 じり
第 66 図 版	13	摺鉢a	30.2 14.8 13.5	淡灰色～ 淡黄灰色	ナデ・斲ナデ	回転擦痕・ナ デ	A・C・D・B	6条一組みの 摺り目	口縁が微弱に内傾する。仕上げは丁寧である。注ぎ口の内面に「己」のヘラ記号を施す。	A区ネ-31 第3層下部
	14	摺鉢a	23.5 13.8 9.1	灰褐色	ナデ	ナデ・指圧	A・C・B	10条一組みの 摺り目	口縁が微弱に内傾する。外底面は斲削りで平坦に仕上げているが、両面は摩耗する。	A区ハ-32 攪乱
	15	摺鉢b	29.8 17.0 12.2	淡灰色	ナデ・斲削り	ナデ	A・C	11条一組みの 摺り目	口縁内面が肥厚する。外底面は斲削りで平坦に仕上げているが、両面は摩耗している。	A区ネ-31 第4層
	16	摺鉢c	23.9 13.6 11.6	淡灰色	同上	ナデ・斲削り	A・C	6条一組みの 摺り目	口縁直下に斲削りを入れて削り出して折れを強調する。外底面は摩耗する。	B区ニ-30 第3層
	17	摺鉢d	30.0 16.6 10.9	橙色	同上	ナデ・回転擦 痕	C・A	7条一組みの 摺り目	口縁が内傾し、肩部が外側に強く突出する。外底面は斲削りを施すが、摩耗傾向にある。	A区ネ-32 第5層
	18	摺鉢e	28.2 — —	明灰色	同上	ナデ・斲削り	C・B	4条一組みの 摺り目	口縁は身から削り出して成形されている。口縁端部は丸味を持たせている。	A区ノ-32 第4層焼土混 じり
	19	摺鉢d	27.6 15.0 11.4	淡褐色		ナデ	C・D・B	5条一組みの 摺り目と2条 一組みの摺り 目	肩上部に斲削りを入れて折れを突出させている。口唇は斜位に削り入れて仕上げる為、口唇内端が尖る。	A区ナ-32 第3層下部
	20	摺鉢	19.0 14.1 12.7	淡黄灰色	ナデ・斲削り ・擦痕	擦痕・ナデ	C・B	9条一組みの 摺り目	底面からの立ち上りは他と比較して内側へ強く寄り垂直に近い状態でそのまま口縁直下に移行する。植木鉢形の器形となる。内面に輪積み痕が認められる。外底面は斲削りを施す。	A区ヒ-32 第4層焼土混 じり

注：混入物は多い順に記した。混入物のAは糞母（細片化）、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質砂粒、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土

第12表 b 瓦質土器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	色 調 (外)	器面調整 (外)	器面調整 (内)	混 和 剤	文 様 等	備 考	出土地点
第 66 図 図版 64	21	摺鉢底部	— 15.6 —	灰褐色	ナデ・甕削り	ナデ	C・B	8条一組みの 摺り目	内底面の摺り目は格子状に施す。	A区ネー32 第5b層
第 67 図 版	22	壺a	24.1 — —	明橙色	同上。	ナデ・指圧	A・C・B・D		口縁がゆるく外反する。口縁端部を甕で削り落して口 唇を尖らせている。	A区ニ—32 第6層
	23	壺 a	18.0 — —	淡橙色	ナデ	ナデ	A・C・D		口縁を大きく外反させる。口唇は甕削りで平坦に調整 するが、削りが徹底していない。	A区ニ—32 第6層
	24	壺 a	11.0 — —	淡灰色	回転擦痕	回転擦痕	C・D		口縁をゆるく外反させる。丁寧な仕上げである。口唇 を尖らせているが削りではなくつまみ出しである。	B区フ—29明 茶色
	25	壺 a	12.4 — —	淡灰紫色	同上	不明 (回転擦痕?)	C		胎土が精選されている。口縁が軽く外反する。	A区ナ—31 ・32 焼土混じり
	26	壺 b	16.4 — —	明灰色	ナデ	ナデ・甕削り	C・A・D		口縁の外反はきつい。胴部に「メ」と「ノ」の組み合 わせのヘラ記号とみられるものが施されている。	A区ナ・ニ— 31第5層
	27	壺 b	14.8 — —	灰褐色	ナデ	ナデ	A・C	6条一組みの 縦位の波状文	口縁の外反はきつい。口頭部の屈曲は「く」の字状と なる。内面に輪積み痕が認められる。	A区ナ—33 第3層下部
	28	壺 b	10.6 — —	淡灰色	ナデ・甕削り	ナデ	C・A		口縁の外反はきつい。口頭部の屈曲が最もきつく鍵状 となる。	A区ナ・ニ— 32第5層 焼 土混じり
	29	壺胴部	— — —	明橙色	ナデ	ナデ・ 回転擦痕	A・D・G	丸彫りの圏線 ほか	構図不詳のものを圏線直上に描く。焼成は比較的に良 く、陶器質の仕上り。劈開面に白色の陶土が縞状に入 いる。最大口径16.8cm。輪積み痕あり。	A区ニ—34 第2b層
	30	鍋	29.0 — —	明黄色— 茶褐色	擦痕	ナデ・指圧	A・C		大きく外側に開く、外反口縁である。	A区ス—34 第3層砂利層
	31	鍋	24.0 — —	黒褐色	ナデ・擦痕・ 削り	同上	A・C		口縁内面が浅く窪む。	A区ノ—33 第5層ニ— び 混じり
	32	深鉢	24.6 — —	灰褐色	同上	ナデ・擦痕	A・C・D		胴下部に削りを入れて窪ませた後にナデを加えている。 胴下部からやや開き気味に口縁まで立ち上ってくる。 口縁が僅かに外反する。底部は丸底が考えられる。	A区ニ—33 ・34 第3層
	33	深鉢	19.4 — —	淡灰色	ナデ・擦痕	同上	C・A		口縁が僅かに外反する。胴部は丸味を帯びている。胴 部に煤が付着する。	A区ネ—31 第3層
	34	浅鉢 a	— — —	明茶色	ナデ・甕削り	ナデ	A・C・D		外傾する浅鉢で口縁が「く」の字状に屈曲する。口頭 部に削り入れる。	B区フ—27 第3層
	35	浅鉢 b	— — —	明橙色	ナデ	同上	C・A		口縁が外反し、肩下部は丸味を持つ。	A区ナ—32 第3層下部
	36	深鉢	32.0 — —	灰茶色—褐色	ナデ・甕削り	同上	C・B・D	口唇に圏線	口縁よりも肩の張る浅鉢。胴上部で33.8cmを測る。	A区ニ—34 第3層
	37	浅鉢 c	27.6 22.0 9.4	明茶色	ナデ・ 回転擦痕	回転擦痕	A・C		口縁よりも肩の張る浅鉢。外底面は甕削りを加えてい る。	A区ネ—31 焼土混じり
	38	浅鉢 d	20.0 — —	淡灰紫色	回転擦痕	同上	C・D		大きく内彎させて丸味を出す浅鉢である。口頭部に浅 い窪みを入れて、口縁と肩部を区別する。口縁はやや 内傾気味である。	A区ナ—33 第3層
	第 68 図 版 66	39	浅鉢 e	26.3 22.6 8.8	明灰色	回転甕削り・ ナデ?	ナデ	C・D・B	口縁に丸彫り 圏線	口縁が内側に内傾する為、内面口縁が肥厚する。外底 面は甕削り。
40		碗 (内彎口縁)	18.5 14.6 10.4	淡灰色	甕削り・ナデ	ナデ・指圧	C・A		底面からほぼ垂直に立ち上り一端くびれさせて、胴下 部から外側にやや開き気味に丸味を持って胴上部へ移 行する。口縁は丸味を持って内傾させる。	A区ノ—31 溝状遺構 焼 土混じり
41		浅鉢 f	23.8 21.0 7.8	明黄色	ナデ・回転擦 痕	ナデ	C・B	丸彫りの圏線	底面からやや内側に閉じ気味に立ち上りそのまま胴部 へ移行する。胴部では微弱に丸味を持って口縁までそ のまま移行させる為、口縁が僅かに内傾する。外底面 は甕削りを丁寧に施した後にナデで調整する。	B区ヘ—21 攪乱茶褐 色混じり
42		浅鉢 g	29.8 23.0 12.5	明灰色	同上	同上	C・B	幅広の圏線	底面から内側に閉じ気味に直線的に立ち上り、そのま ま口縁近くまで移行する。口縁を意識して幅広の圏線 を施す。外底面は甕削り後にナデを施す。	A区ニ—34 第6層

注：混入物は多い順に記した。混入物のAは雲母（細片化）、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質砂粒、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土。

第12表 c 瓦質土器観察一覧

単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	色調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和剤	文様等	備考	出土地点
第 68 図 版	43	浅鉢 h	27~29.8 — —	淡灰色	ナデ・斲削り ・指圧	ナデ・指圧	C・B	口縁を稜花状 に仕上げる	器形は逆「ハ」の字状に開くが、胴下部を削りて屈曲 させている。口唇の平面観は波状となる。	A区ビー31 第3層下焼土 混じり
	44	浅鉢 h	24.6~26.4 16.4 8.7	明灰色	同上	ナデ・指圧・ 斲削り	C・B	口縁を稜花状 に仕上げる	器形は逆「ハ」の字状に開くが、胴下部を削りて屈曲 させている。外底面は削りて平坦となるが摩耗してい る。	A区ビー31 第4層焼土混 じり
	45	浅鉢 i	29.8 21.4 8.0	淡黄灰色	ナデ・擦痕・ 斲削り	擦痕	C・B	縄目状凸帯と 丸彫り圏線	器形は逆「ハ」の字状に開き胴上部で僅かに丸味をも たせている。口縁の縄目文は口縁端部をつまみ出して 凸帯をつくる。外底面は斲削りて平坦に仕上げてい る。	B区ノー30 焼土混じり
	46	水盤	30.8 28.4 5.0	淡灰色	ナデ・斲削り	ナデ	C・B	縄目文と丸彫 りの圏線	底面から肩部までは内側に閉じ気味に僅かに丸味を持 たせている。内底面は摩耗するが、削りを入れた様で ある。	A区ニー31 第3層
	47	大皿	24.8 19.0 4.8	淡灰色	同上	ナデ	C・B		底面からの立ち上りの箇所削りて入れてくびれさせ ている。外底面を丁寧に平坦に仕上げてい る。	A区ネー33 皿の壁面
	48	大皿	20.8 15.6 4.8	淡黄色	ナデ・斲削り ・擦痕	ナデ	C・B		底面からの立ち上りは直線的に開く。外底面を平坦に 仕上げてい る。	A区ビー31 第3層焼土混 じり
	49	大皿	24.8 19.6 6.5	淡橙色	ナデ・斲削り	ナデ	E・D・B		底面からの立ち上りは内側に閉じ気味で直線的であり、 そのまま口縁に移行する。外底面は雑な斲削りをして ナデを加えるが、ナデも雑である。	A区ビー34 第2層
	50	水盤	33.0 25.8 5.3	灰褐色	ナデ	ナデ	C・D	口縁に陽圏線	底面から開き気味に僅かに丸味を持たせて口縁まで移行 する。口縁内面が内側に突出する。	A区ヌー33 第3層下部焼 土混じり
	51	碗 (内縁口縁)	13.6 — —	淡灰色	ナデ	ナデ	C・D		口頸部で軽く折れ曲る。口縁を内側に僅かに内傾させ る。	A区フー31 攪乱層
	52	碗 (直口口縁)	13.0 10.0 5.2	黄灰色	ナデ	ナデ	C・D・B		僅かにくびれの認められる碗で、内側に閉じ気味で直 線的な器形。輪積み痕が認められる。	第2層
第 69 図 版	53	火炉	27.3 16.0 10.5	明橙色	ナデ・斲削り ・指圧	ナデ	C・B	有孔の把手	底面から内側に軽く開き気味に直線的に胴中央部まで移行した後 に内側に閉じ気味に口縁まで移行する。把手の孔のサイズは長径 1.2cm、短径0.7cmで楕円形である。	A区フー32 第2層
	54	火炉	21.6 — —	灰黄色	ナデ・斲削り	ナデ	C・D	有孔の把手	口縁内面に鈎状の凸帯を造った後に凸帯外面を深く抉 り、この抉れの部分に口縁を貼り付けている。口縁に は直径9mmの孔を上と下から穿っている。	不明
	55	炉	24.8 — —	灰色	同上	ナデ・斲削り	C・D・B		円筒気味の炉で口唇の一部が三日月状に突出させてい る。	A区ネー31 瓦集中
	56	竈	— — —	明黄色	ナデ	ナデ	C・A		竈の焚口の破片とみられ、焚き口の周辺は粘土を貼り つけて縁どる。天上が僅かに残っている。焚口の内面 が煤ける。	A区ホー31 地山攪乱
	57	火炉	— — —	明灰色~褐 色	ナデ・斲ナデ	ナデ・指圧・ 削り	C・B	貼り付け突起	内面を1cm程度、丸く削り取った後に直角三角形の突 起を貼り付けている。右側面は抉り(口唇から38.5cm 抉る)取って焚口とする。	A区ヌー33 第3層
	58	香炉	16.0 12.0 7.2	淡灰色	ナデ・斲削り	ナデ・指圧	C・A	足を貼り付け る	底面からは直線的にやや外傾しながら口縁まで移行 する。三角錐状の足である。	B区ハー30 ・31
	59	香炉	11.2 9.8 8.0	淡橙色	ナデ	斲削り	C・D・B	足を抉りて造 る	底面からは直線的にやや外傾しながら口縁まで移行 する。内面は斲削り取って面を造る。外底面も内側 を抉って高台状に仕上げた後に足となる箇所を残して 他を削り取っている。	A区ヌー33 トレンチ 黄 褐色土層
	60	香炉	— — —	灰褐色	ナデ・斲削り	ナデ	C・D・B・A		外面及び底面は丁寧に仕上げ。底面から垂直に立ち上 がる。外底面は斲削りて平坦に仕上げる。	A区ー34 黄褐色土 (茶褐色混 じり)
	61	香炉	— — 4.4	淡灰色	同上	剝離の為不明	C・B・A		外底面は雑な指圧とナデで調整。外面は斲削りとナデ で丁寧に仕上げる面と雑に仕上げる面がみられる。	B区ノー29
	62	香炉	— — —	灰褐色	同上	ナデ	C・B・A		底面の縁辺に削りを入れて面をつくる。	不明
第70図 図版68	63	香炉	— — —	灰褐色	同上	ナデ・斲削り	C・B		底面からやや外側に開き気味に直線的に移行させてい て、肩部とみられる箇所が認められるが判然としない。	A区フー32 トレンチ内
	64	茶釜の蓋	— — —	明灰色	ナデ・斲削り	同上	C・D・B		外側直径12cm、内側直径9.6cm。蓋甲に直径14mmの孔 を穿つ。内面の滑り止めは削り取って仕上げる。	A区ニー34 第1瓦層

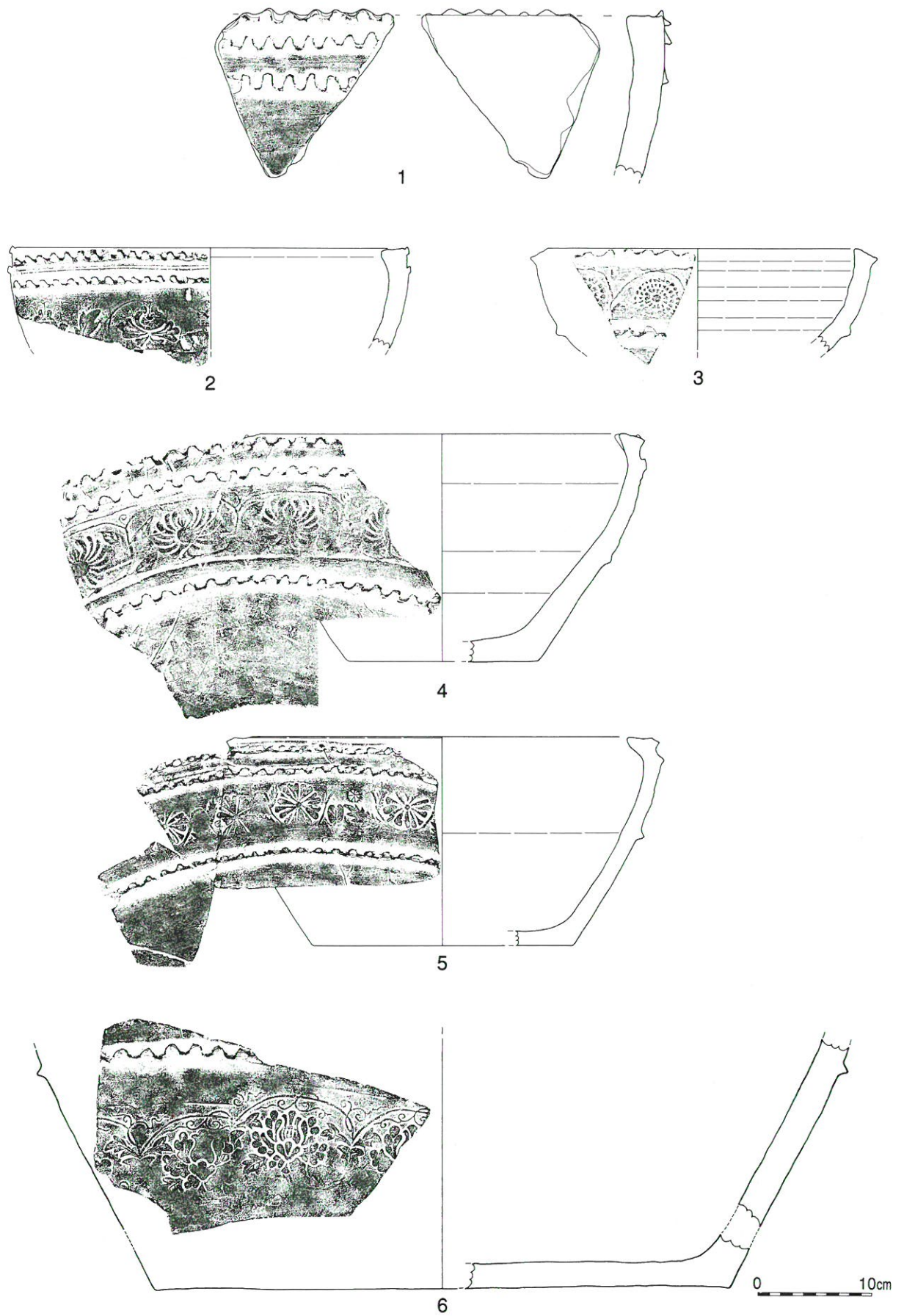
注：混入物は多い順に記した。混入物のAは雲母(細片化)、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質砂粒、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土

第12表 d 瓦質土器観察一覧

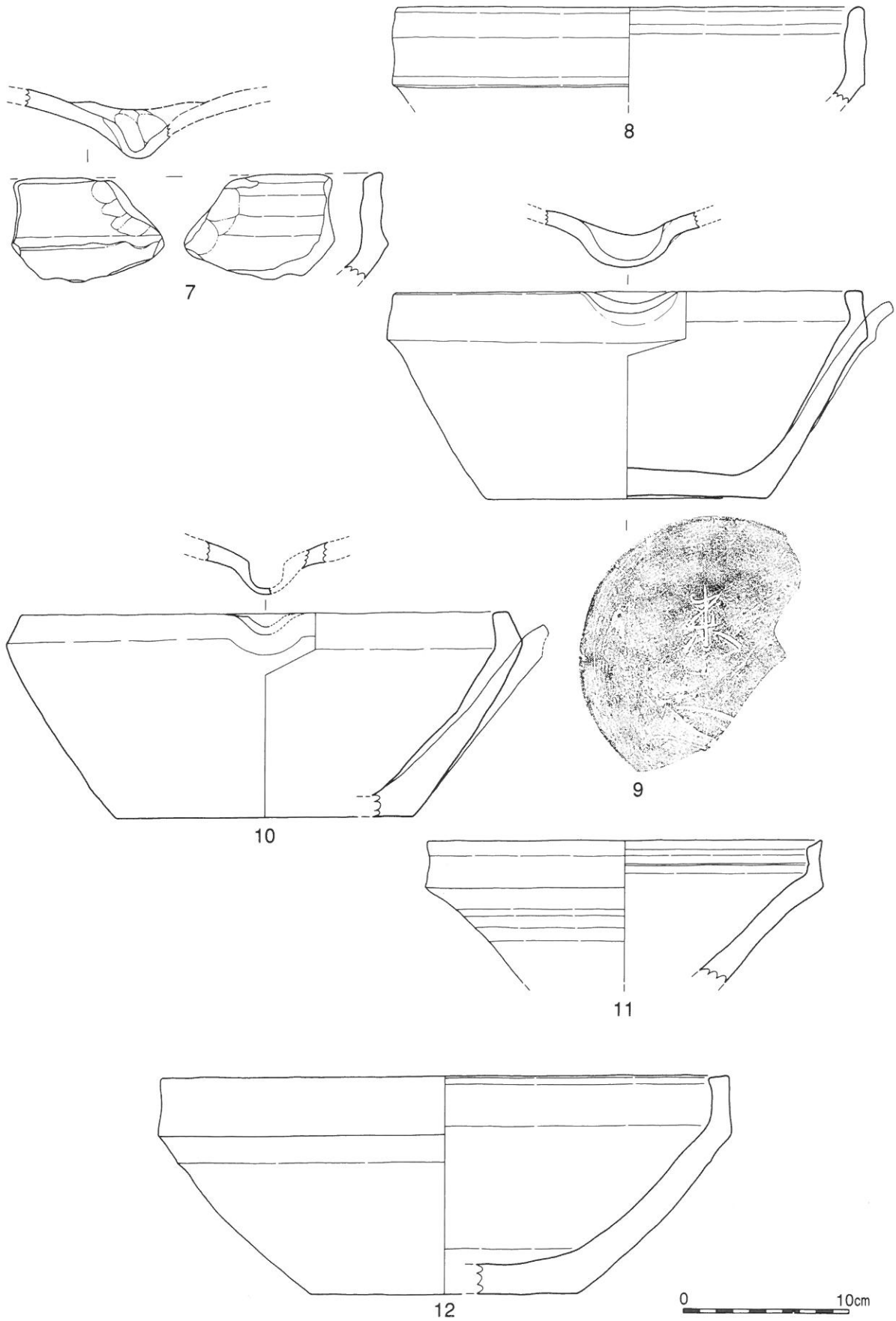
単位：cm

図・図版	番号	分類	口径 底径 器高	色調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和剤	文様等	備考	出土地点
第 70 図 版	65	落し蓋	— — —	淡橙色	ナデ・篋削り	ナデ・削り・指圧	C・A・B	撮を貼り付ける	凹レンズ状の蓋で外面が窪み、内面が丸味を帯びている。直径は10.2cmを求めた。	A区31・32 畦の壁
	66	茶釜	— — —	灰褐色	同上	ナデ	C・A	鈔を造る	鈔端部までの復元直径18.8cm。鈔上面は端部で丸味を出している。丁寧な調整で仕上げる。	試掘4
	67	茶釜	— — —	明灰色	同上	ナデ	C・B	鈔を造る	鈔端部と同下端を欠く。輪積み技法。	A区ヌー32 第3層下部砂利面中
	68	香炉	— 15.6 —	淡灰色	ナデ	ナデ	C・B	足を抉り出して造る。	外底面を深く抉り取って高台状に仕上げた後に足をつくる為に抉り取っている。	A区ヒー32 トレンチ第3層
	69	碗	— — —	明灰色	ナデ・篋ナデ	ナデ	C・B		高台を削り出して造り、高台脇から丸味を持たせている。	A区ヌー34 溝上遺構焼土混じり
	70	碗	— 8.6 —	暗褐色	同上	ナデ	C・B・A		高台を削り出して造り、高台脇から丸味を持たせている。	A区ネー32 砂利層
	71	用途不明	— 5.6 —	橙黄色	ナデ・篋ナデ	破損	A・B・C		外底面は篋削りの後にナデを施したようである。	土取り場の 畦の壁
	72	用途不明	— 6.6 —	灰褐色	ナデ	ナデ	C・B・A		内面に直径2.2cmの丸い窪みがある。	A区ノー31 トレンチ
	73	把手	— — —	淡黄色～ 黄褐色	ナデ・捺痕・指圧	—	C・B・D		厚さ2.2cm、幅3.3cm、長さ10.5cmを測る。	A区ネー31・32 畦の壁
	74	撮	— — —	灰黒色	ナデ・篋ナデ	—	C・D・A		長径4.8cm、短径4.5cmを測る。	A区ヌー32 第3層
	75	香炉	— — —	明茶色	同上	ナデ	C・A・B	綾杉文と半円弧文	香炉の口縁で凸帯を口縁に貼り付けた後に丸彫りや片切り彫りで隅の綾杉文と半円弧文を描く。	A区ネーノー32 第3層下部溝状遺構
	76	置き物	— — —	明黄色	同上	—	C・B		動物の耳の部分とみられるもので、耳の中を窪ませている。	B区ネー30・31 壁
	77	把手?	— — —	明灰色	ナデ	—	C・D・A		円筒状の把手?などが考えられるもので、先端部で直径2.7～2.9cmを測る。	A区ニー31 第1層
	78	置き物	— — —	灰黄色	ナデ・篋削り・捺痕	—	C・B	渦巻文と沈線による鱗状文	置き物(獅子とみられる)の足とみられる。膝の部分に渦巻文。	A区ノー32 第4層焼土
	79	置き物	— — —	明黄色	ナデ・篋削り?	指圧・ナデ	C・B・A	凸帯文	凸帯をつくった後に凸帯の両端にさらに縁どりの為の小さな凸帯をつくる。	A区ニー34 第4層
	80	置き物	— — —	淡灰色	同上	篋削り・指圧	C・B	凸帯文	凸帯及び凹面の状況から型物とみられる。	A区ノー32 焼土混じり
	81	用途不明	— — —	灰褐色	ナデ・篋削り	ナデ・篋削り・指圧	C・B・A		厚さ8.5mmの土製品で、縁辺は篋で削り出して尖らせた後に先端を篋で削り取っている。	A区ネー33 畦の壁
	82	急須	— 14.4 —	明橙色	回転捺痕・ナデ・轆轤痕	回転捺痕・ナデ・篋削り?	A・B・C	内面口縁に凸帯	胴上部から頸部は内傾させた後に口縁をほぼ垂直に立ち上げている。口縁内面に蓋受けの突起を造る。	A区ヒー31 第3層下部焼土混じり
	83	急須	— — —	明橙色	同上	同上	A・B・C	内面に凸帯	同図82と同一個体とみられる。	A区ハー30・31 第2層
	84	鈔釜	— — —	淡橙色	回転捺痕・ナデ・篋削り	ナデ・捺痕・指圧	B・C・A	鈔を貼り付ける	鈔は梯形状の断面を呈し、削りや回転捺痕で丁寧に仕上げている。	A区ヒー31 第4層焼土混じりの下。
85	皿	— 12.0 —	明黄色	篋削り・ナデ	回転捺痕	A・C・D		内縁口縁の皿。	B区ヘー29 灰茶色土層	

注：混入物は多い順に記した。混入物のAは雲母(細片化)、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質砂粒、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土

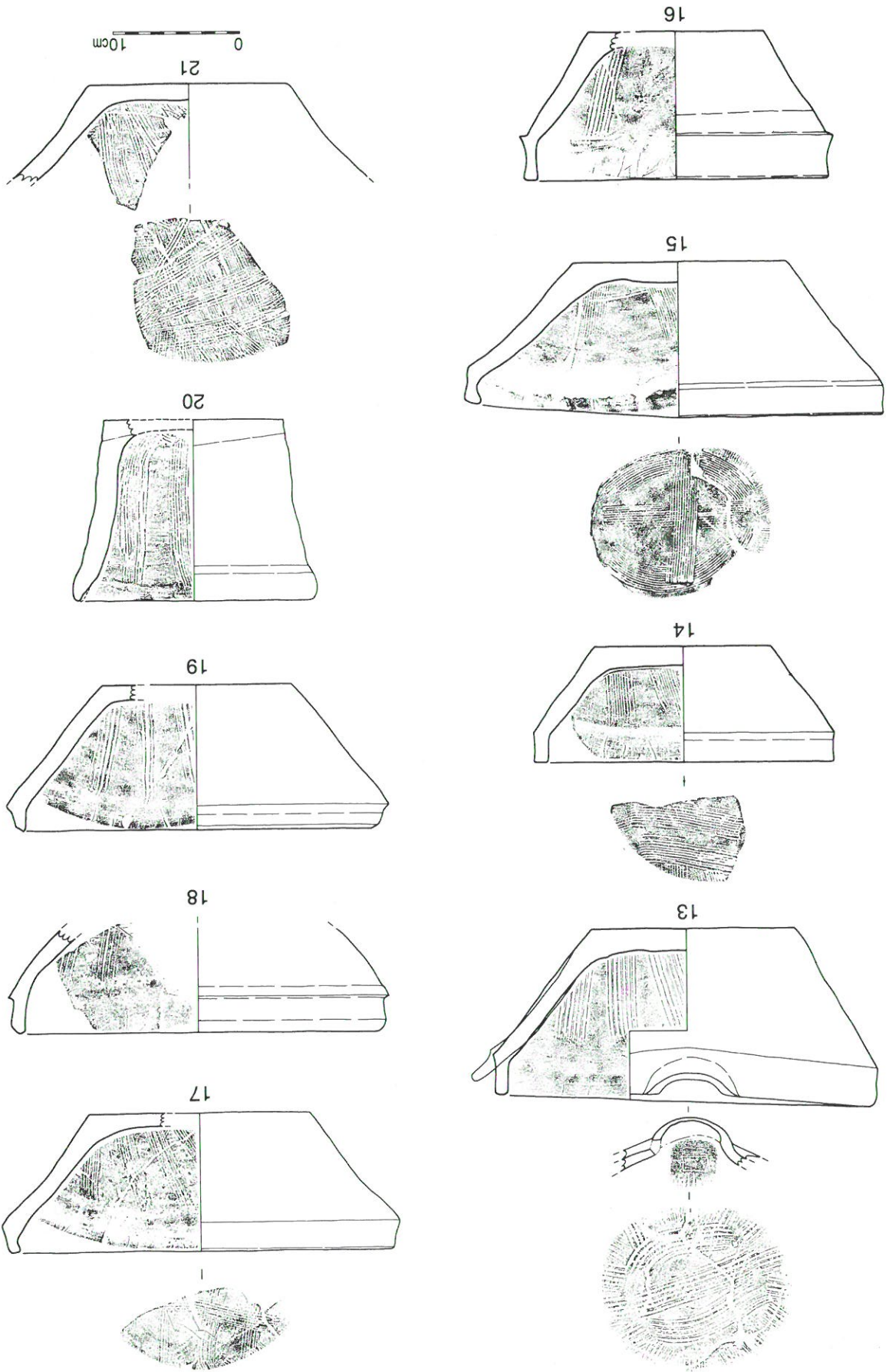


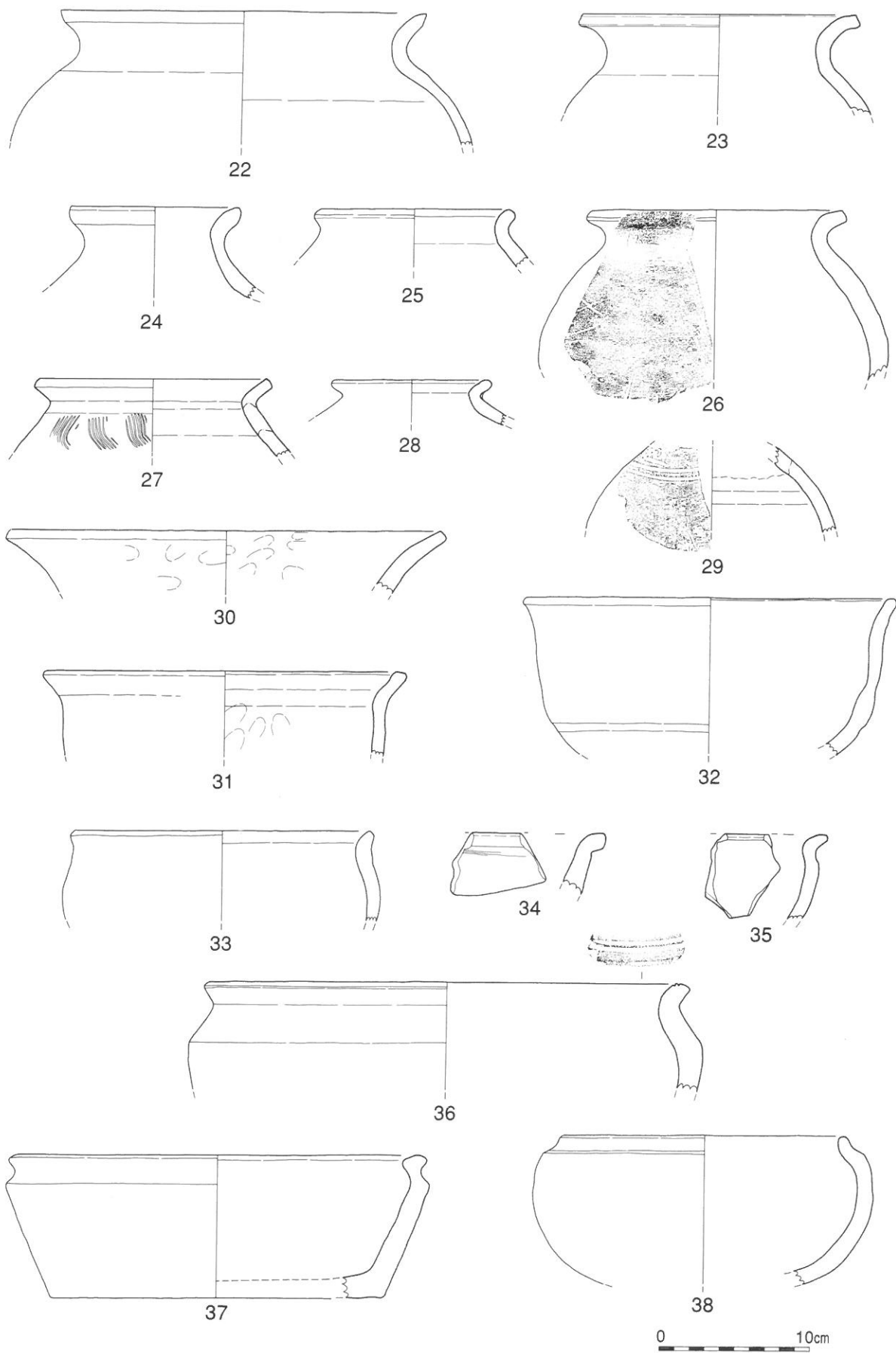
第64図 瓦質土器 1 (植木鉢)



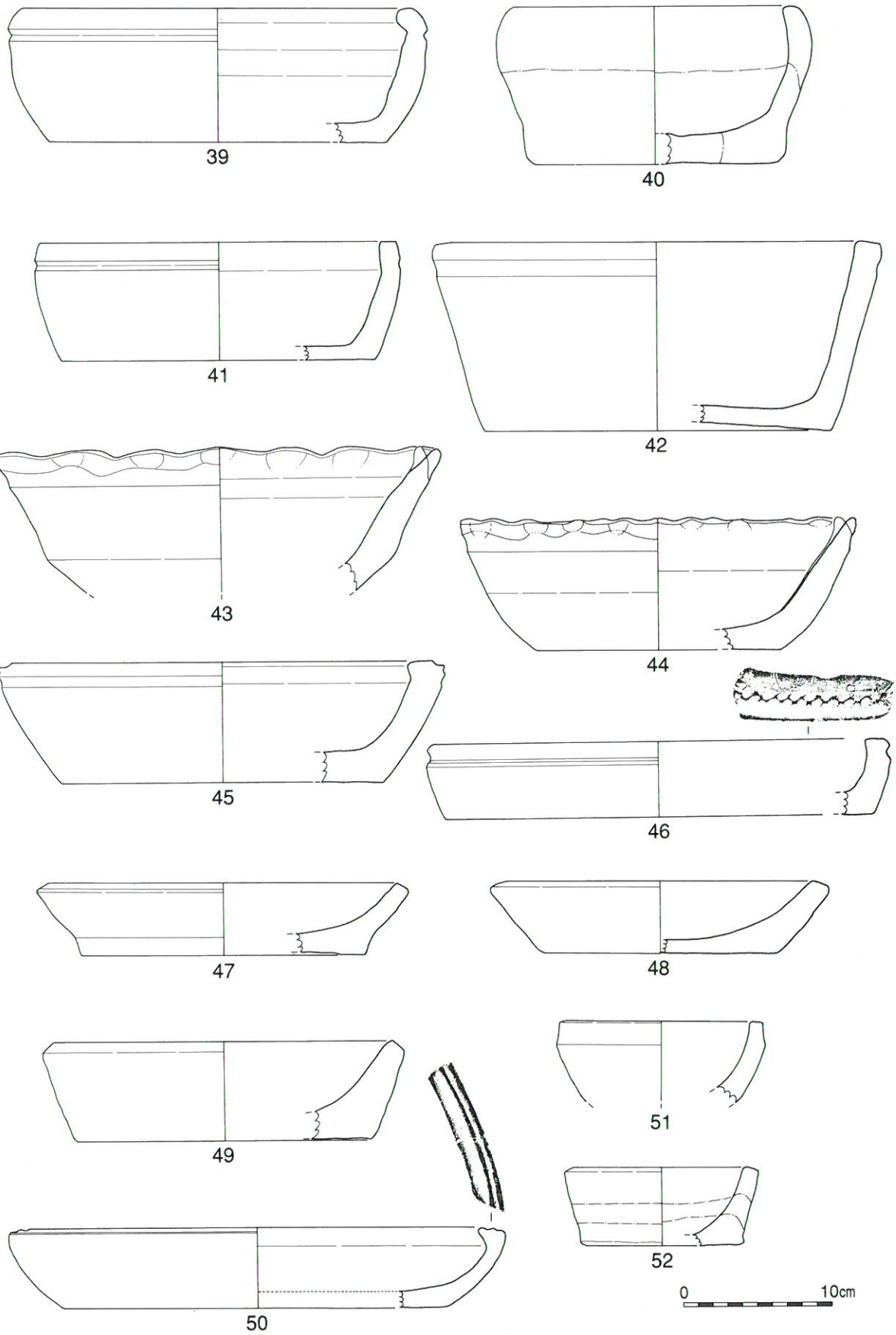
第65図 瓦質土器 2 (こね鉢)

第66图 瓦质土器 3 (摺鉢)

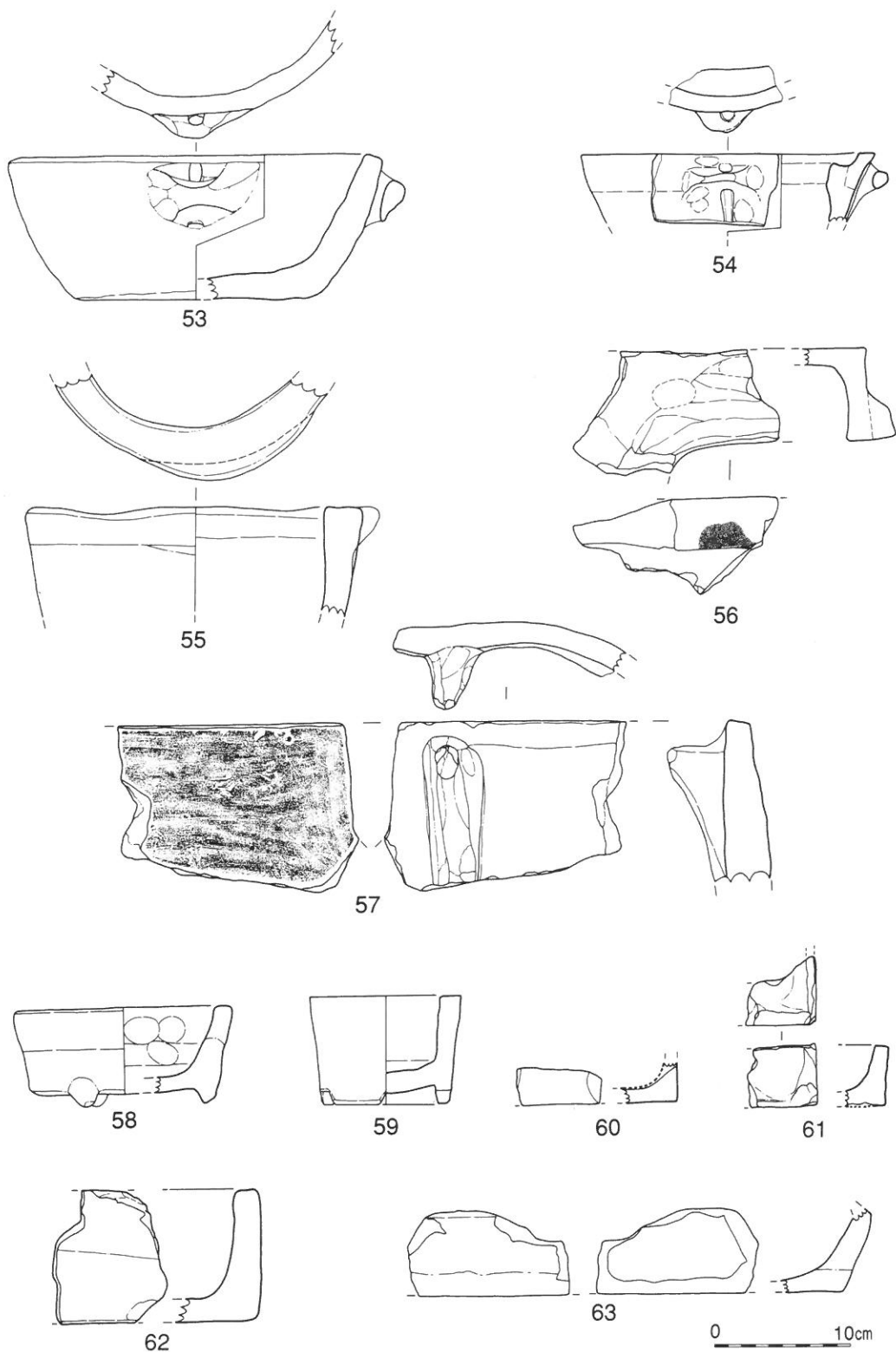




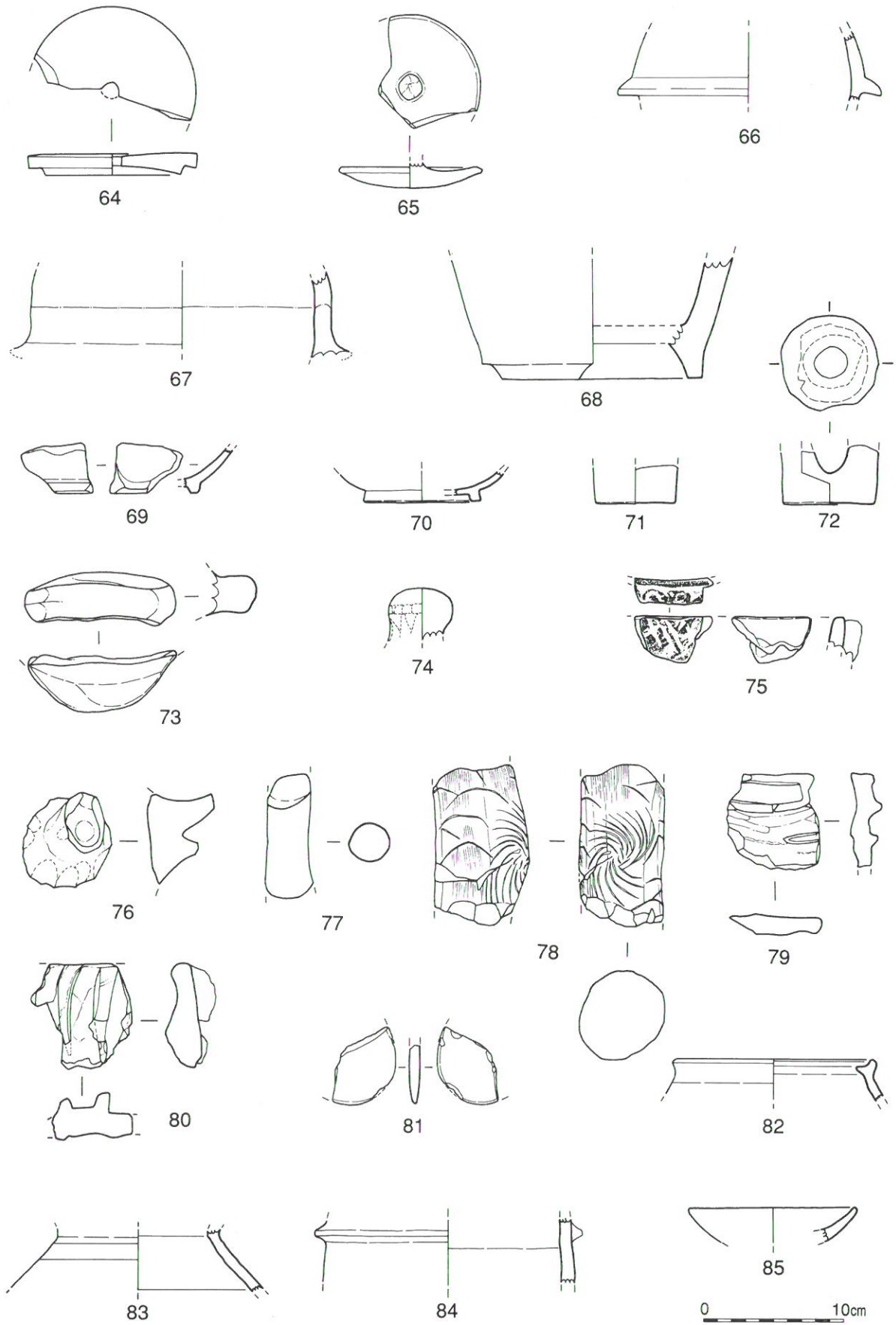
第67図 瓦質土器4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)



第68図 瓦質土器5 (浅鉢・碗・水盤・大皿)



第69図 瓦質土器6 (火炉・竈・香炉)



第70図 瓦質土器7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物・急須・鍔釜・皿)

第17節 青銅製品

第71図の1～10の10点である。

このうち男性用のかんざしは同図1～3の3点で、同図3は頭部を欠損するもので残存部の長さは8.1cm、重さ6.4gで竿部は2部分に分かれ、頭部近くは長さ10.2mmで断面は径2.3mmの円形を呈し、端部は3.5mmを測り、徐々に太くなり先端は尖る。断面は正方形を呈する。表面は青銅のサビとともに金メッキが若干認められる。断面は正方形を呈する。出土地は不明である。

同図1は軸部で残存部の長さ40.2mm、重さ2.4gを測り、頭部に近い竿部は1.6mmの円形で、残り竿部の断面径は頭部側が2.5mm、端部は3.1mmを測り、徐々に太くなり尖る。フー31第2層の出土である。

女性用は同図4が長さ112.6mm、頭部は幅11.4mm、厚さ0.6mm、竿部は断面を六角形に長さ(3.8cm)を整形し、それより先の端部までは面を変えて同様に六角形に整形する。断面の厚さは先端部3.2mm、軸の切り替え部は厚さ3.6mmを測る。ヒー30第2層の出土である。

同図2は竿部で長さ44.8mm、重さ1.5gを測る。断面形はほぼ六角形を呈し、全体にはほぼ同じ厚さで3.3mmを測り、この状況から女性用と思われる。

同図5は頭部の平面は長楕円形を呈し、長径は26.7mm、短径(幅)5.2mm、厚さ2.0mmを測る。竿部の頭部に近い側の断面は円形を呈し、2.2mmを測り、竿部の端はほぼ六角形を呈し、中央が1.5mm、端部が2.3mmを測り、徐々に太くなる。重さは3.8g計る。ニー32第2層の出土である。

耳かきとされるものは同図5～8の4点である。

同図6は完形で頭部の平面は長楕円形を呈し、長径10.5mm、短径(幅)4.0mm、厚さ0.9mmを測り、竿部は頭部に近い所で断面が円形を呈し、厚さ2.8mmを測る。竿部の端部は六角形を呈し、頭部に近い方は3.6mm、端部は2.3mmを測り、徐々に細くなる。重さは6.4gを計る。フー31第3層の出土である。

同図9は竿部のみ残存で断面は六角形を呈し、残存部の長さは5.3mm、厚さは頭部に近い方が2.7mm、端部は0.7mmと徐々に細くなる。重さは1.4gを計る。出土地は不明である。残存部の形状から耳かきの竿部と考えられる。

同図10は耳かきの一部と考えられるもので残存部の最大長15.3mmで断面は六角形を呈し、頭部に近い所は厚さ3.6mm、端部は1.4mmで徐々に細くなる。重さは8.5gを計る。ノー32、33第3層の出土である。

同図8は板状に加工したもので幅4.2mm→3.8mmと徐々に細くなり、断面隅丸方形を呈する。出土地は不明である。

同図7は残存部の最大長9.4mm、直径2.2mm、重さ2.4gを計る。先端部は切断痕がある。用途は不明である。ヌー33第4層の出土である。

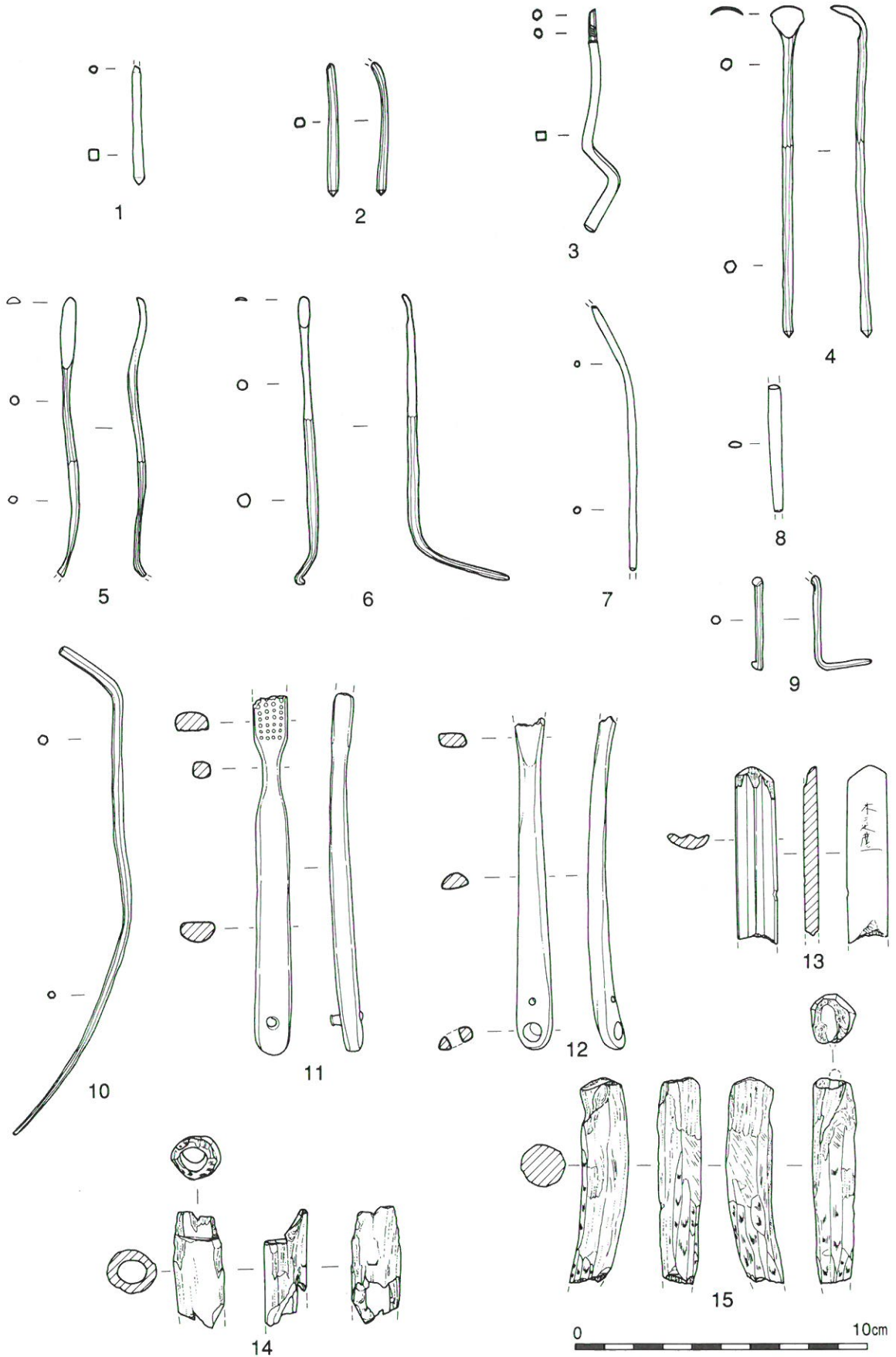
第18節 骨製品

本品は5点出土し、その内訳はハブラシ状製品が2点、用途不明が3点出土した。

第71図11はハブラシ状の製品で若干、頭部を欠損する。残存部の最大長は12.3cm、頭部の幅は1.7cm、柄部の幅は1.2cm、厚さは頭部が5.7mm、柄部6.4mmを測る。頭部は毛の起毛のための孔が4列である。柄部の端に径3.0mmの孔を施し、その中に棒状(樹脂製?)のものがはめられている。表採品である。

同図12は上記と同様で頭部を欠損する。残存部の最大長は11.3cm、柄部の幅は1.3cm、厚さ6mmを測る。柄部の端に径6mmの孔を施し、孔は両方から穿孔する。また、孔のすぐ上に径2.4mmの穿孔の跡が確認されるが、貫通はしてない。ヒー30第2層炉跡?から出土した。これらはウシの骨を用いたものであろう。

同図15はジュゴンの肋骨を用いたもので、ほぼ四面にシャープな削り痕が確認され、近位端側に径4.5mmの孔らしき痕がみられ、また、遠位側には荒い削り痕が確認できる。残存部の最大長68.6mm、最大幅15.0mm、最大厚13.0mmを測る。ネー33溝状遺構、石積みの下から出土した。



第71図 青銅製品・骨製品

同図14はブタの大腿骨の骨体を横位に段違いに切断したもので横幅15.8mm、残存部の長さ38.9mmを測る。ネー34第2層の出土である。類例の報告はなく用途は不明である。

同図13は長管骨を半裁し内側部を双溝状に研磨加工する。また、外面も研磨加工され、「木〇〇」の字が銘記されている。最大幅14.0mm、残存部の長さ58.2mmを測る。フー29茶色土（Ⅱ?）の出土である。用途は不明である。

第19節 古 銭

出土した古銭は総計111個でそのうち訳は古い順にみると永楽通寶、元〇〇寶、紹興〇寶、祥符元寶、嘉祐元寶がそれぞれ1個、洪武通寶が2個、破損あるいは字の不明瞭のためのもの（5個）と鳩目銭が89個、明治以降の半銭、一銭、二銭それぞれ1個出土している。第15表に出土状況載せた。

最も多い鳩目銭についてみると、ネー32の「古銭集中地」のNo1～No5（第16図）で集中枚数は2枚～13枚、一括して出土している。ほかに溝状遺構からも32枚出土し、両方をあわせると鳩目銭の94%がネー32グリットから出土している。第16表に有文銭、第17表に無文銭の観察表を載せた。これによると鳩目銭は大きさが18.5mm～21.1mm、重さは平均1.2グラムを計る。また、文献によると1626年ごろには1個づつ使用し、1699年からは十個か結び縉、重さを一定にして封印して使用した。本品は古銭の分類では私鑄銭に分類される。鳩目銭の分類（「形」、「郭穴」、「比率」）は是光氏の分類に準じた。

層別にみると最も多い鳩目銭は第2層以下に出土し、第2層より上では寛永通寶、半銭、一銭、二銭が確認されている。以上のことより古銭からみると第2層以上の寛永通寶以降の銭と、第2層以下の鳩目銭とそれ以外の銭に分けられ、本遺跡の時代的なメルクマークといえるであろう。

<追記> 湧田古窯跡（Ⅰ）の報告の中で第104図11は九州帝京女子大学の桜木晋一氏によれば、「大世通寶」であろうとのご教示をいただいた。第72図23に再度掲載した。「大世通寶」は1454年に琉球で鑄造されたものである。また報告書作成中、慶応大学教授鈴木公雄先生から古銭について有益な御教示を賜わったことを記して謝意を表します。

註

註1 渡口真清「鳩目銭」沖縄大百科事典 沖縄タイムス社 1983年

註2 是光吉基「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会編 1993年3月

第13表 古銭出土状況

西暦	種類	分類	A 区											B 区					合計						
			第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	灰褐色層	第2層溝状遺構	砂利数遺構	古銭集中					小計	灰褐色	茶褐色		第2層不明	小計				
											No 1	No 2	No 3	No 4	No 5										
1057	嘉祐元寶						1									1					0	1			
1142	紹興〇寶															1					0	1			
1368	洪武通寶		1	1												2					0	2			
1408	永楽通寶				1											1					0	1			
	祥符元寶					1										1					0	1			
1534	鳩目銭	a								18		2	8			1	29				1	1	30		
		b			1	1	1			20		3	4	13	10	5	58	1				1	59		
1636	寛永通寶		2	1												3		2			2	5			
1876	二銭		1													1					0	1			
1887	半銭		1													1					0	1			
1919	一銭		1	1												2					0	2			
	元〇〇寶															1					0	1			
	不明			1	1		3									5			1		1	6			
	合計		3	4	1	3	2	4	2	1	0	39	1	5	12	13	10	6	104	1	2	2	1	6	111

第14表 有文銭観察一覧

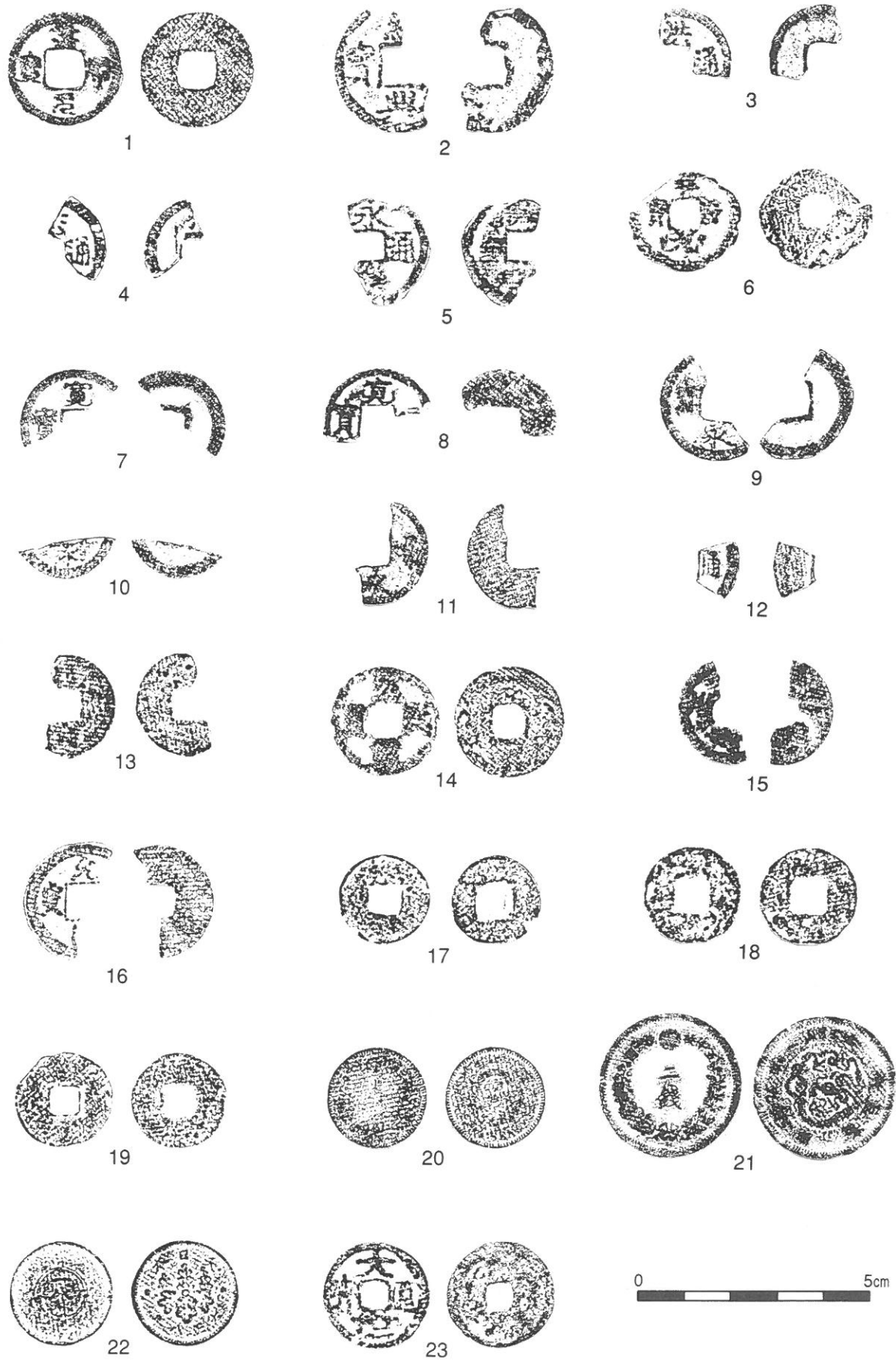
図番号	銭貨名	裏面	完/破	書体	備考	直径mm	孔径mm	重量g	厚mm	出土地	層
1 47	嘉祐元寶		完	篆書	全体の文字が摩耗。	24.8	8.1	3	A	ニ-3 2	灰褐色土
2 11	紹興〇寶		破	楷書	「通」が欠損	29	7.5	3.1	A		砂利敷柱穴 94
3 43	洪〇通〇		破	楷書	裏に文字あり。	24.7	-	0.7	A	ノ-3 3	第3層
4 44	〇〇通〇		破	楷書	「洪」の一部と「武」「寶」の文字欠損。	22.7	-	0.7	B	ハ-3 0	第2層
5 6A	永楽通〇		破	楷書	「寶」が欠損、字は割と明瞭。	25.8	5.2	1.2	A	ネ-3 1	砂利層中
6 14	祥符元寶		破	楷書	薄手。	24.7	6.4	1.8	A	ノ-3 2	第5層
7 12	寛〇〇寶		破	楷書	「永」「通」が欠落。字は明瞭	24.3	4.9	1.5	A	ノ-3 1	第1層
8 13	寛〇〇寶		破	楷書	「永通」が欠落。「ハ」銭。新寛永。	23.5	6.2	1.4	A	ノ-3 2	第1層
9 15	〇永〇寶		破	楷書	「寛」「通」の字を欠く。	24.7	6.1	1.3	B	ヒ-2 9	茶褐色土層
10 16	寛永通寶		破	楷書	「永」以外は欠落。	21.3	-	0.7	B	フ-2 9	茶褐色土層
11 42	〇永通〇		破	楷書	「寛」と「寶」文字欠損。	23.6	6.8	1.1	A	ネ-3 3	第2層
12 39	〇〇通〇		破		「通」の文字のみ残り他は欠損。寛永通寶の感じがする。	26.6	-	0.4	A	ニ-3 2	第3層
13 40	〇〇〇〇		破		摩耗が激しく判読不能。	22.8	6.3	1.4	A	ニ-3 4	第2b層
46	〇〇〇〇		破		摩滅が激しく判読不可。	25.9	-	0.5	A	ヒ-3 4	第4層(?)
14 48	〇〇〇〇		完		摩耗が激しく判読不能。	24.1	7.1	2.5	A	ヌ-3 4	第4層落ち こみ
15 49	〇〇〇〇		破		摩耗が激しく判読不能。	24	-	0.9	A	ヌ-3 4	第4層落ち こみ
16 9	元〇〇寶		破	行書	字は摩滅している。	24.4	6.3	1.8	A	ヌ-3 4	溝状遺構
21 41	二銭		完		近代の銭貨である。	31.7	-	14.2	A	ヌ-3 1	第1層
20 45	半銭		完		近代の銭貨である。	22	-	3.2	B	ヒ-3 0	第2層焼土 混じり
22 10	一銭		完		「大日本大正八年」の文字有り。	23.1	-	3.5	A	ヒ-3 0	第2層

注：「-」は計測不可

第15表 無文銭観察一覧

図番号	銭貨名	完/破	備考	直径mm	孔径mm	直径/孔径	重量g	形	郭穴	比率	厚mm	出土地	層
17	6B 鳩目銭	完		19.6	6.5	3		B	I	1			
1	鳩目銭	破		20.1	6.4	3.1	1.1	B	I	1	A	ヌ-3 2	第2遺構面直上
3	鳩目銭	完		20.2	7.3	2.8	1	B	I	2	A	ヌ-3 3	砂利面中
2	鳩目銭	完		18.9	8.3	2.3	1.1	B	I	2	A	ヌ-3 3	第5層焼土混じり
5	鳩目銭	完		20.7	6	3.5	1.3	B	I	1	A	ネ-3 2	古銭集中 no.5
4	鳩目銭	完	5枚接着	18.8	8.2	2.3	5.2	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中 no.5
30	鳩目銭	完		18.5	8.1	2.3	0.7	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.1
31	鳩目銭	完	2枚接着	20.5	6.3	3.3	2	B	I	1	A	ネ-3 2	古銭集中層no.1
32	鳩目銭	完	2枚接着	20.5	8.3	2.5	2.6	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.1
33	鳩目銭	完		18.5	7.5	2.5	0.6	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.2
34	鳩目銭	完		21.1	8.1	2.6	0.9	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.2
35	鳩目銭	完	2枚接着	20.8	6.9	3	2.7	B	I	1	A	ネ-3 2	古銭集中層no.2
36	鳩目銭	完	6枚接着	19.4	6.4	3	7.3	B	I	1	A	ネ-3 2	古銭集中層no.2
37	鳩目銭	完	13枚接着	18.9	6.7	2.8	16.1	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.3
38	鳩目銭	完	10枚接着	20.3	7.1	2.9	12.3	B	I	2	A	ネ-3 2	古銭集中層no.4
19	鳩目銭	完	2枚接着	20	7.8	2.6	2.5	B	I	2	A	ネ-3 2	溝状遺構内
20	鳩目銭	完	10枚接着	20.8	6.8	3.1	12.1	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
21	鳩目銭	完	2枚接着	20.3	6.5	3.1	2.8	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
22	鳩目銭	完	9枚接着	20.2	8	2.5	11.2	B	I	2	A	ネ-3 2	溝状遺構内
23	鳩目銭	完	5枚接着	19.5	6.8	2.9	6.1	B	I	2	A	ネ-3 2	溝状遺構内
24	鳩目銭	完	4枚接着	19.7	7.5	2.6	4.5	B	I	2	A	ネ-3 2	溝状遺構内
25	鳩目銭	完	2枚接着	20.3	6.4	3.2	2.2	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
26	鳩目銭	完	2枚接着	20.1	6.3	3.2	2.6	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
27	鳩目銭	完		20	6.4	3.1	1.1	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
28	鳩目銭	完		20.9	7	3	1.1	B	I	2	A	ネ-3 2	溝状遺構内
29	鳩目銭	完		21	6.3	3.3	1.5	B	I	1	A	ネ-3 2	溝状遺構内
17	鳩目銭	完		20.2	7	2.9	1.2	B	I	2	A	ネ-3 2	焼土混じり
18	鳩目銭	完	10枚接着	19.5	8	2.4	10	B	I	2	A	ネ-3 2	焼土混じり
7	鳩目銭	完		20.7	7.3	2.8	1.2	B	I	2	A	ヒ-3 1	第4層
8	鳩目銭	完		18.7	7.6	2.5	1.1	B	I	2	B	フ-2 9	灰褐色土層

注：「形」「郭穴」「比率」は是光(1993)による。「比率」は直径÷孔径



第72図 古銭拓影

第20節 キセル

陶製のものが5点（雁首4点、吸い口1点）得られており、第73図に示した。1・2は無釉のもので、3～5は施釉された資料である。

1・2はパイプ形とされるもので、行政棟地区^(註1)でも出土している。近世の時期における比較的ポピュラーなタイプのもののようである。1は正面図の上部は暗褐色をなし、下部から裏側にかけて自然釉が掛かり黒色を呈している。裏側には白っぽい粘土のようなものの付着もみられる。本来、七角形に面取りされたものようであるが、角がなくなり丸くなっている。2は火皿部・接続部とも八面に面取りされるものようである。接続部の上面が若干下がり、裏側が部分的に膨らんでいるためやや歪な形になっている。火皿部の先端は破損している。1よりも短い資料である。

3・4もパイプ形であるが、施釉するものである。2点とも面取りはされず、丸くつくられている。3は瑠璃釉が施されるもので、胎土は黄白色の細かなものである。外面は接続部の端部を除き全釉。内面は火皿部が施釉され、接続部が無釉である。火皿部の半分程度、接続部の上方が破損しているものの、全体の様子は窺い知ることができる。形状的には1・2と同様である。4は白濁色の釉を施すもので、細かな貫入が認められる。接続部は内外面とも端部を除き全釉。火皿部は欠失しており状況は不明。接続部の形状は3と異なり、接続部端の方へ太くなるようにつくられている。胎土は灰白色でやや粗め。

5は灰釉が施されている吸い口の資料である。口の部分は破損しているが、外面は全釉のようである。内面および接続部断面は無釉。胎土は灰白色で、やや細かい。接続部端は周囲に砂粒状のものが付着している。図の下方から裏側にかけて、風化のためか釉が白く濁った感じになっている。

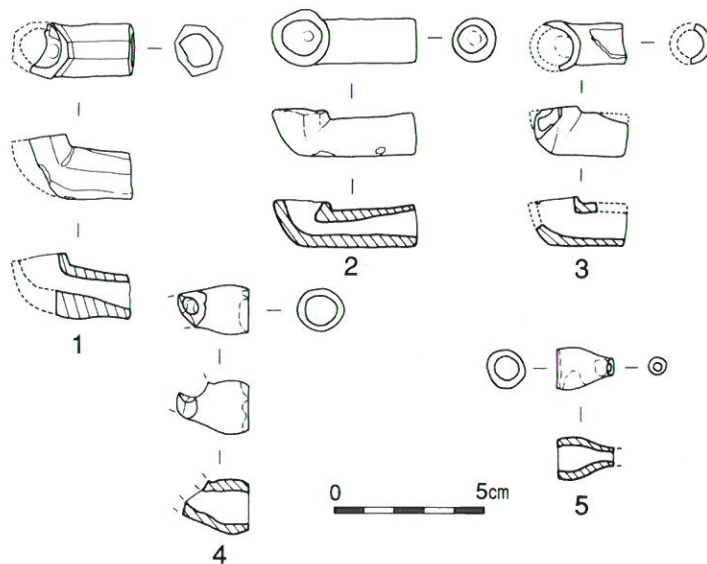
類例資料が壺屋古窯跡群^(註3)Iなどから報告されている。

註

註1. 「古我地原内古墓—沖縄自動車道（石川—那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)—」『沖縄県文化財調査報告書第85集』 沖縄県教育委員会 1987年12月。

註2. 「湧田古窯跡（I）—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—」『沖縄県文化財調査報告書第111集』 沖縄県教育委員会 1993年3月。

註3. 「壺屋古窯群I—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査—」『那覇市文化財調査報告書第23集』 那覇市教育委員会 1992年3月。



第73図 キセル

第21節 円盤状製品

本製品は、磁器、陶器、瓦などを円盤状に打割調整した二次製品である。今回の調査で本製品は総数212点出土している。区別の出土状況は、A区105点、B区79点、区不明28点となっており、遺跡の本体であるA区からの出土が最も多く全体の49.5%を占めている。

種類別の内訳は、磁器28点、施釉陶器12点、無釉陶器71点、褐釉陶器11点、陶質土器1点、土器2点、瓦87点となっており、瓦と無釉陶器で全体の74.5%を占めている。

大きさ別の出土状況を第16表に示したが、これによると3cm、4cm台で全体の59.4%と半数以上を占め、次に5cm台、2cm台と続く。第74図はサイズ別と各種類の関係をグラフ化したものである。1cm、2cm台では磁器が約半数を占めているが、3cm、4cm台とサイズが大きくなるにしたがい無釉陶器、瓦の占める割合が高くなる。

部位別にみると、口縁部1点、胴部191点、底部10点、瓦の縁を利用したもの10点である。胴部の利用が殆どであるが、僅かに口縁部や瓦の縁を利用した資料が見られた。

断面形を見てみると凹3点、平98点、湾曲111点となっており、湾曲が全体の52.4%を占める。

平面形の比率は、円形22.6%、方形11.8%、楕円形27.4%、不定形38.2%である。また、剥離方向では外→内が62.3%と全体の半数以上を占め、両面24.5%、内→外13.2%と続く。

今回の調査でも、前回と同様に瓦、無釉陶器を利用した資料が主体となっていた。これは遺跡の性格との関連を示唆するものであろう。また、サイズと種類に相互関係が見られるものの、本製品の用途についての傾向までは見いだすことができなかった。これまでの資料及び、新たな資料を含め検討する必要がある。なお、個別の観察は第17表に示した。

参考文献

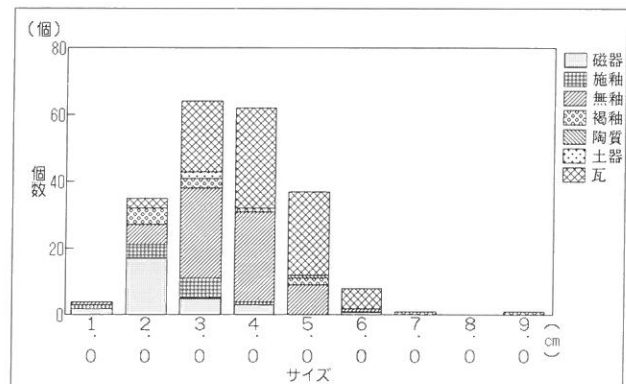
- ・「湧田古窯跡（I）」『沖縄県文化財調査報告書第111集』沖縄県教育委員会、1993年
- ・「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書第18集』那覇市教育委員会、1991年
- ・「壺屋古窯群I」『那覇市文化財調査報告書第23集』那覇市教育委員会、1992年

第16表 円盤状製品出土状況

単位：cm

サイズ	磁器	施釉	無釉	褐釉	陶質	土器	瓦	合計
1.0	2	1	1					4
2.0	17	4	6	5			3	35
3.0	5	6	27	3		2	21	64
4.0	3	1	27	1			30	62
5.0			9	2	1		25	37
6.0	1		1				6	8
7.0							1	1
8.0								0
9.0							1	1
合計	28	12	71	11	1	2	87	212

第74図 大きさと種類の相関



第17表 a 円盤状製品観察一覧

単位: mm、9

製品番号	種類	器形	部位	完	長さ	短径	厚さ	重さ	形	継施	断面	釉色	観察事項	版	カド	層
1	褐釉陶器	不明	胴部	完	3.75	3.4	0.7	11.9	方形	外→内	湾曲	褐色	剥離は丁寧。	B	ノ-30	第2層
2	褐釉陶器	不明	胴部	完	4.58	4.85	0.6	16	不定形	両面	湾曲	褐色	剥離は丁寧。	B	ハ-29	茶褐色
3	褐釉陶器	不明	胴部	完	5.9	5.8	0.9	41.6	円	外→内	湾曲	褐色	剥離は丁寧。 第75図10。	B	7-29	
4	褐釉陶器	不明	胴部	完	2.85	2.6	0.7	7.3	不定形	両面	平	褐色	剥離は粗い。	A	ナ-33	第3層 下部
5	褐釉陶器	不明	胴部	破	5.9	2.55	0.7	15.9	円	両面	湾曲	褐色	剥離は丁寧。	A	ヌ-33	第3層 瓦だまり
6	褐釉陶器	不明	胴部	破	2.85	2.6	0.8	8.9	方形	内→外	湾曲	褐色	剥離は粗い。	B	ハ-29	明茶
7	褐釉陶器	不明	胴部	破	2.6	2.4	1	8.4	円	外→内	湾曲	褐色	剥離は丁寧。	A	ニ-33	第3層?
8	褐釉陶器	不明	胴部	破	2.15	1.9	0.7	4.2	楕円	内→外	湾曲	褐色	剥離は丁寧。			
9	褐釉陶器	不明	胴部	破	2.75	2.8	0.9	9.9	不定形	内→外	平		剥離は粗い。 第75図9。	A	ヒ-33	第3層
10	褐釉陶器	不明	胴部	破	3.15	2.85	0.7	10.4	方形	外→内	平		剥離は粗い。	A	ハ-31	第3層
11	褐釉陶器	不明	胴部	未	3.65	4.2	0.8	15	不定形	外→内	湾曲	褐色		B	ノ-30	第2層
12	瓦	丸瓦	縁	完	7.05	6.5	1.7	90.6	方形	外→内	湾曲		中間色。剥離は丁寧。 第76図21。	A	7-31	第2層 トレンフ
13	瓦	丸瓦	縁付近	未	5.4	5.6	1.3	35.4	不定形	両面	湾曲		赤色。	B	ノ-30	第2層
14	瓦	丸瓦	胴部	破	4.75	5	1.3	34	楕円	両面	平		灰色。剥離は丁寧。		ホ-30.31	第2層
15	瓦	不明	胴部	破	5.7	5.5	1.9	61.9	不定形	内→外	平		赤色。剥離は粗い。			
16	瓦	平瓦	縁	完	5.9	5.9	1.4	47.9	円	外→内	平		中間色。剥離は粗い。	A	ヒ-33	第3層
17	瓦	平瓦	縁	完	4	3.95	1.2	27.2	方形	両面	湾曲		赤色。剥離は丁寧。	B	ヒ-30	第2層
18	瓦	平瓦	縁	完	6.05	6.9	1.6	87	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	ノ-31	トレンフ
19	瓦	平瓦	縁	完	3.8	3.8	1.3	20.8	円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	B	ノ-29	明茶
20	瓦	平瓦	縁	破	4.85	5.75	1.3	36	不定形	外→内	平		赤色。剥離は粗い。	A	ニ、331	攪乱
21	瓦	平瓦	縁	破	4.8	4.65	1.3	39.9	楕円	両面	平		赤色。剥離は粗い。	B	ニ-30.31	壁
22	瓦	平瓦	縁	未	5.2	4.8	1.2	33.4	不定形	外→内	平		赤色。	A	ノ-31	第2層
23	瓦	平瓦	縁	未	5.2	5.2	1.4	42.4	不定形	内→外	平		灰色。	B	7-30	壁トレンフ
24	瓦	平瓦	胴部	完	6.6	6.95	1.9	91	方形	外→内	平		赤色。剥離は粗い。	B	ノ-30	第2層
25	瓦	平瓦	胴部	完	5.85	6	1.4	58	不定形	両面	平		中間色。剥離は粗い。	B	ヒ-30	第2層
26	瓦	平瓦	胴部	完	5.5	4.8	1.7	62.7	楕円	外→内	湾曲		灰色。剥離は丁寧。 第76図20。	A	ヌ-32	第3層
27	瓦	平瓦	胴部	完	4.3	4.6	1.7	44.7	不定形	外→内	湾曲		灰色。剥離は丁寧。釉がかかっている。	A	ハ-32	攪乱
28	瓦	平瓦	胴部	完	5.1	4.5	1.4	37.8	不定形	両面	平		灰色。剥離は丁寧。	A	イ-33	第3層 瓦列
29	瓦	平瓦	胴部	完	4.65	4.6	1.6	43	不定形	内→外	平		灰色。剥離は粗い。	A	ハ、ヒ33	第3層 トレンフ
30	瓦	平瓦	胴部	完	5.4	5.95	1.9	74.4	不定形	両面	平		赤色。剥離は粗い。	A	7-31	第2層 トレンフ
31	瓦	平瓦	胴部	完	4.35	4.5	1.1	25	円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。摩耗している。	B	ノ-30	瓦
32	瓦	平瓦	胴部	完	4.75	4.7	1.4	46.5	不定形	両面	湾曲		赤色。剥離は粗い。	A	イ-33	溝状遺構
33	瓦	平瓦	胴部	完	3.35	3.4	1.4	18.1	楕円	両面	平		赤色。剥離は丁寧。	B	ノ-30	第2層
34	瓦	平瓦	胴部	完	5.4	4.7	1.6	51.4	楕円	外→内	湾曲		赤色。剥離は粗い。		セクショナルト	瓦列
35	瓦	平瓦	胴部	完	3.25	2.9	1.3	15.9	円	外→内	湾曲		赤色。剥離は丁寧。	B	ノ-30	第2層
36	瓦	平瓦	胴部	完	3.5	3.7	1.5	23.5	円	両面	平		赤色。剥離は丁寧。	B	ヌ、ノ30	攪乱
37	瓦	平瓦	胴部	完	4.05	4	1.4	29.2	不定形	外→内	湾曲		中間色。剥離は粗い。	B	ヒ-29	濃灰褐色
38	瓦	平瓦	胴部	完	4.3	4.1	1.6	36.1	楕円	両面	湾曲		中間色。剥離は丁寧。	A	ヒ-31	第3層 下部、焼土混じり
39	瓦	平瓦	胴部	完	5.5	5.2	1.2	53.4	楕円	外→内	湾曲		中間色。剥離は丁寧。	A	ノ-31	溝状遺構 内焼土混じり
40	瓦	平瓦	胴部	完	4.7	4.5	1.2	35.3	楕円	内→外	湾曲		灰色。剥離は丁寧。	A	ホ-31	表採
41	瓦	平瓦	胴部	完	4.7	4.4	1.3	41.3	不定形	両面	平		灰色。剥離は粗い。	B	ノ-30	第2層
42	瓦	平瓦	胴部	完	5.7	6	1.3	55.7	不定形	両面	湾曲		灰色。剥離は丁寧。 第76図19。		ノ/30.31	
43	瓦	平瓦	胴部	完	3.9	4.1	1.6	37.2	方形	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	B	ハ-29	灰褐色
44	瓦	平瓦	胴部	完	5.05	5.3	1.4	44	楕円	両面	湾曲		灰色。剥離は丁寧。	A	ヌ、ニ-33	セクショナルト
45	瓦	平瓦	胴部	完	4.2	4	1.4	29.6	楕円	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	A	ニ-34	第2層
46	瓦	平瓦	胴部	完	5	4.9	1.4	44.5	楕円	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	ノ-31	トレンフ
47	瓦	平瓦	胴部	完	4.2	4.5	1.6	33.7	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	ホ-31	表採
48	瓦	平瓦	胴部	完	5.5	5.2	1.5	52.3	不定形	両面	平		灰色。剥離は粗い。	B	ヌ、ノ30	攪乱
49	瓦	平瓦	胴部	完	6.1	5.8	1.4	52.8	不定形	外→内	平		中間色。剥離は粗い。	B	ハ-29	表採
50	瓦	平瓦	胴部	完	5.5	5.15	1.4	54.6	方形	両面	平		灰色。剥離は丁寧。	B	ハ-29	灰茶褐色
51	瓦	平瓦	胴部	完	4.9	4.45	1.5	37.4	楕円	両面	平		灰色。剥離は丁寧。 第76図18。	A	ハ-32	第3層
52	瓦	平瓦	胴部	完	5.4	5.25	1.9	65.3	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	ニ-34	第3層 下部
53	瓦	平瓦	胴部	完	3.45	3.6	1.7	21.9	円	外→内	湾曲		灰色。剥離は粗い。	A	ニ-33	第2層
54	瓦	平瓦	胴部	完	5.2	5.15	1.5	50.7	楕円	外→内	湾曲		中間色。剥離が粗い。	A	ノ-33	第3層
55	瓦	平瓦	胴部	完	4.8	5.25	1.5	36.8	楕円	内→外	平		中間色。剥離が粗い。	A	ヒ-31	第3層

第17表 b 円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

番号	種類	器形	部位	完	長径	短径	厚さ	重さ	形	縁筋	断面	釉色	観察事項	版	グッド	層
56	瓦	平瓦	胴部	完	4.1	4	1.2	21.6	楕円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	A	ニ-31	第3層 下部, 暗 灰褐色
57	瓦	平瓦	胴部	完	4.25	3.9	1.3	24.2	楕円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	A	ヒ-32	第2層
58	瓦	平瓦	胴部	完	3.7	3.6	1.5	22.6	方形	両面	平		赤色。剥離は丁寧。	A	ヌ-34	第3層
59	瓦	平瓦	胴部	完	4	4.1	1.5	27.2	不定形	外→内	平		赤色。剥離は粗い。	A	ニ-32	第1層
60	瓦	平瓦	胴部	完	3.1	3.3	1	12.4	不定形	外→内	平		赤色。剥離は粗い。剥離後 摩耗。	A	ニ-33	第1層
61	瓦	平瓦	胴部	完	3	3.15	1.2	12.1	円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。 第76図16。			第2層
62	瓦	平瓦	胴部	完	2.7	3.15	1.3	12.4	楕円	両面	平		赤色。剥離は丁寧。	A	ニ-33	第3層
63	瓦	平瓦	胴部	破	9	8.85	1.9	185	不定形	両面	湾曲		赤色。剥離は丁寧。 第76図22。	A	ヌ-34	瓦混じり
64	瓦	平瓦	胴部	破	4.85	4.85	1.1	31.7	楕円	外→内	湾曲		赤色。剥離は丁寧。	A	ヌ-34	第2層 砂利混じり
65	瓦	平瓦	胴部	破	6.5	2.7	1.3	26.8	楕円	両面	湾曲		赤色。剥離は丁寧。	B	ノ-30	瓦
66	瓦	平瓦	胴部	破	5.1	5.15	1.2	37.2	不定形	外→内	湾曲		赤色。剥離は丁寧。摩耗し ている。	A	ノ、ハ31	窯内E1号 窯?
67	瓦	平瓦	胴部	破	4.2	4	1.5	25.4	不定形	内→外	平		赤色。剥離は粗い。	A	7-31	第2層
68	瓦	平瓦	胴部	破	6.7	5.1	1.3	42.2	楕円	内→外	平		灰色。剥離が粗い。	B	ノ-30	瓦
69	瓦	平瓦	胴部	破	4.4	3.95	1.5	43.2	方形	内→外	平		灰色。剥離は丁寧。			西壁
70	瓦	平瓦	胴部	破	4.05	4.1	1.5	31.7	不定形	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	A	ニ-34	第3層 下部
71	瓦	平瓦	胴部	破	3.4	2.65	1.1	17.5	楕円	両面	平		灰色。剥離は粗い。	B	ハ-30	第3層 木の根攪 乱
72	瓦	平瓦	胴部	破	5.6	5.4	1.6	48.1	方形	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	A	ヌ-33	第3層
73	瓦	平瓦	胴部	破	5.3	5	1.6	52.6	楕円	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	B	ヌ30.31	地山直上
74	瓦	平瓦	胴部	破	4.1	3.95	1.3	21.6	円	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	B	7-29	灰褐色
75	瓦	平瓦	胴部	破	5.5	5.1	1.3	36.9	方形	外→内	湾曲		赤色。剥離は丁寧。	A	ヒ-33	第3層 トレン ク
76	瓦	平瓦	胴部	破	5.1	4.7	1.2	32.3	不定形	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。			表採
77	瓦	平瓦	胴部	破	5.3	4.7	1.5	37.4	楕円	外→内	平		中間色。剥離は丁寧。剥離 後摩耗。	B	ハ-30	第2層 攪乱
78	瓦	平瓦	胴部	破	4.3	4.05	1.1	20.9	楕円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	B	ノ-30	第2層
79	瓦	平瓦	胴部	破	5.3	5	1.5	37.8	不定形	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	A	ヒ-31	第3層 下部, 焼 土混じり
80	瓦	平瓦	胴部	破	3.35	3.2	1.8	22.4	方形	外→内	平		赤色。剥離後摩耗。	B	ハ-29	灰茶
81	瓦	平瓦	胴部	破	2.9	3.4	1.7	18.4	方形	両面	平		赤色。剥離後摩耗。 第76図17。			表採
82	瓦	平瓦	胴部	破	3.3	3	1.3	12.7	円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。	B	ハ-29	茶褐色
83	瓦	平瓦	胴部	破	4.4	4.6	1.3	29.5	方形	両面	平		中間色。剥離は丁寧。	A	ノ-31	溝状遺構 焼土混じり
84	瓦	平瓦	胴部	未	3.6	3.9	1.2	23	方形	両面	湾曲		灰色。	A	ノ-32	壁
85	瓦	平瓦	胴部	未	3.9	3.7	1.2	27.3	不定形	両面	平		灰色。	A	ハ-31	地山直上 、黄褐色
86	瓦	平瓦	胴部	未	3.35	3	1.6	19.2	不定形	内→外	平		灰色。			表採
87	瓦	平瓦	胴部	未	6.95	6.25	1.8	83.4	不定形	両面	平		灰色。			表採
88	瓦	平瓦	胴部	未	4.9	5	1.6	46.4	不定形	内→外	平		灰色。	B	ハ-30	第3層 木の根攪 乱
89	瓦	平瓦	胴部	未	2.7	3.1	1.7	17.2	不定形	外→内	平		灰色。	A	7-31	第2層
90	瓦	平瓦	胴部	未	4.7	3.75	1.2	23.1	不定形	両面	平		灰色。	A	ニ-31	瓦
91	瓦	平瓦	胴部	未	3.7	3.05	1.5	17.8	不定形	外→内	平		灰色。	A	ノ-33	第3層 下部
92	瓦	平瓦	胴部	未	4.8	4.25	1.7	48.4	不定形	内→外	湾曲		中間色。剥離が粗い。			第2層
93	瓦	平瓦	胴部	未	4.7	5.2	1.2	33.4	不定形	両面	平		赤い。	A	ハ-31	攪乱
94	瓦	平瓦	胴部	未	3.9	3.9	1.5	25.3	不定形	両面	平		赤い。	A	ニ-33	焼土混じり
95	瓦	平瓦	胴部	未	3.7	3.75	1.5	21.3	不定形	両面	平		赤い。			木の根攪 乱
96	瓦	平瓦	胴部	未	3.35	3.7	1.3	16.2	不定形	外→内	平		赤い。	B	ニ-30	地山直上 、壁
97	瓦	平瓦	胴部	未	3.55	3.35	1.3	16.9	不定形	外→内	平		赤い。		ハ30.31	第2層
98	瓦	平瓦	胴部	未	3.1	3.3	1.3	18.7	方形	外→内	平		赤い。	A	ヌ-32	第1層
99	現代磁器		底部	破	6.55	6.5	1.1	63.6	楕円	内→外	凹		剥離は粗い。	B	ノ-29	
100	現代磁器	不明	胴部	破	3	3	0.7	8	楕円	内→外	湾曲	表:青白 色,裏:白	剥離は丁寧。	A	ニ-31	表採
101	現代磁器	不明	胴部	破	3.8	1.55	0.5	4.2	円	外→内	湾曲	表:青 裏:白	剥離は丁寧。	B	ハ-29	明茶
102	現代磁器	不明	胴部	破	2.85	1.5	0.7	3.8	不定形	内→外	湾曲		剥離は丁寧。			表採
103	現代磁器	不明	胴部	未	2.6	2	0.7	5	不定形	内→外	湾曲	表裏:緑	剥離は丁寧。	A	ニ、ノ31	攪乱土管
104	荒焼		掃鉢	完	4.25	4.45	0.8	21.4	楕円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	B	ノ-30	瓦

第17表 c 円盤状製品観察一覧

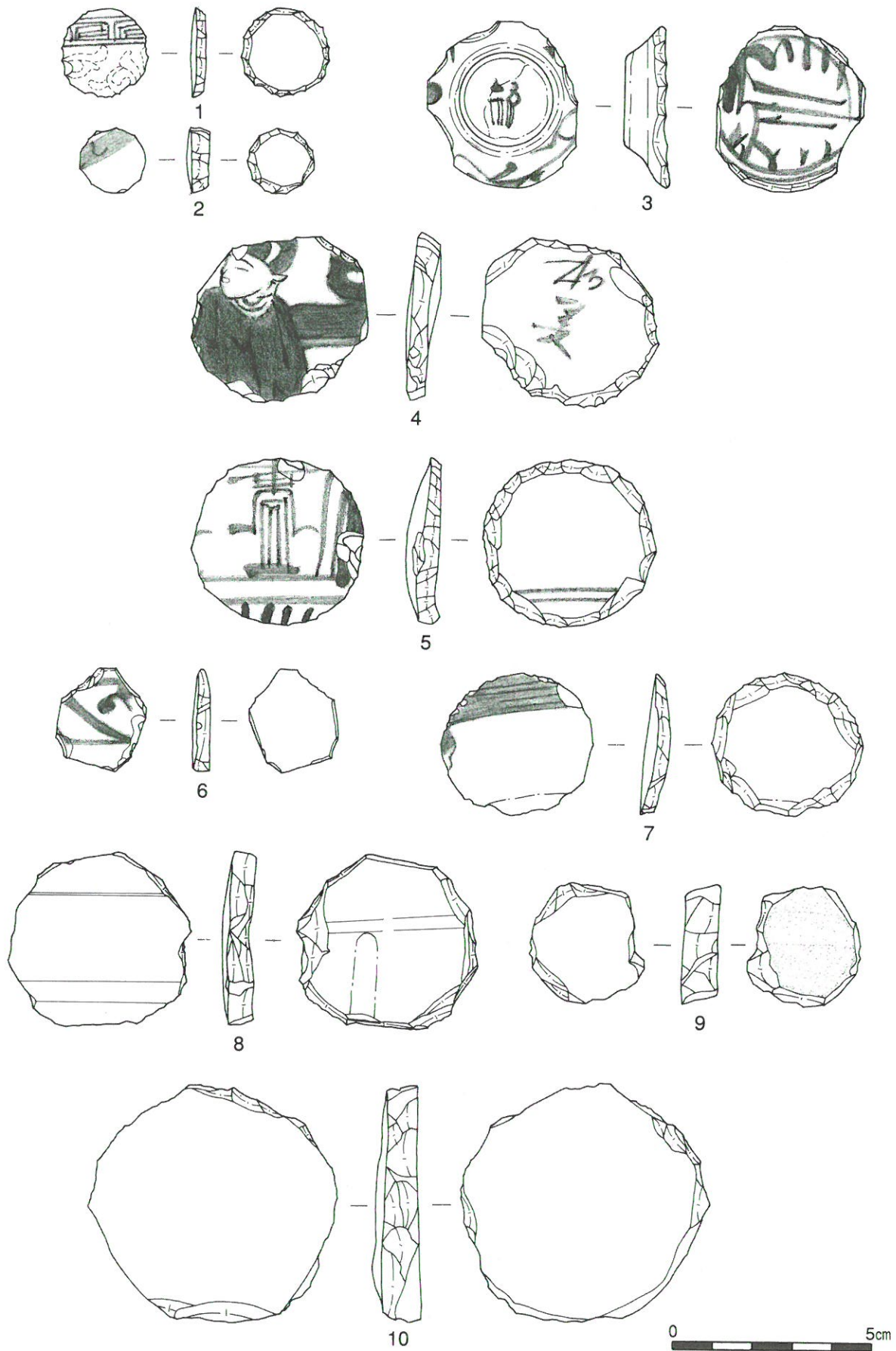
単位：mm、g

製品番号	種類	器形	部位	状態	長径	短径	厚さ	重さ	形	縁部	断面	釉色	観察事項	塚	グッド	層
105	荒焼	摺鉢	胴部	完	4.1	4.25	0.8	21.5	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
106	荒焼	摺鉢	胴部	完	3.85	3.85	0.8	16.7	楕円	両面	湾曲		剝離は粗い。 第76図12。	A	フ-34	第1層
107	荒焼	摺鉢	胴部	完	3.55	3.45	0.8	14.2	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	A	フ-32	第3層
108	荒焼	摺鉢	胴部	完	3.8	3.8	1	19.7	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。		フ30.31	第2層
109	荒焼	摺鉢	胴部	完	3.6	3.2	0.8	13.7	不定形	外→内	平		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
110	荒焼	摺鉢	胴部	完	3.7	3.95	0.8	15.4	楕円	外→内	平		剝離は丁寧。摺鉢の使用痕あり。 第76図13。			表採
111	荒焼	摺鉢	胴部	破	4.55	5.35	1	32.1	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	瓦
112	荒焼	摺鉢	胴部	破	3.7	4	0.7	15.3	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
113	荒焼	摺鉢	胴部	破	3.5	3.7	0.8	14.7	円	外→内	平		剝離は丁寧。	B	フ、フ30	攪乱
114	荒焼	摺鉢	胴部	破	3.15	3.4	1	13.2	円	外→内	平		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
115	荒焼	摺鉢	胴部	破	4.3	3.3	0.8	11.3	円	外→内	平		剝離は丁寧。	A	フ-31	第2層
116	荒焼	摺鉢	胴部	破	3.55	1.7	0.8	5.7	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
117	荒焼	摺鉢	胴部	未	4.4	4	0.8	17.2	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
118	荒焼	不明	胴部	完	5.45	5.15	1.1	44.5	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。			表採
119	荒焼	不明	胴部	完	5.5	5.45	1.2	55.5	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-29	茶褐色
120	荒焼	不明	胴部	完	4.9	5.85	1.1	46.2	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
121	荒焼	不明	胴部	完	5.3	5.4	1.4	55.4	楕円	内→外	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-29	茶褐色
122	荒焼	不明	胴部	完	4.8	5	1.2	39.5	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。 第76図14。	B	フ-29	明茶
123	荒焼	不明	胴部	完	4.5	5.05	1.4	46.8	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-29	明茶
124	荒焼	不明	胴部	完	4.3	5	1.3	43.9	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
125	荒焼	不明	胴部	完	4.55	4.3	1.1	31.3	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ、フ30	攪乱
126	荒焼	不明	胴部	完	4.4	4.45	1	32.4	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	A	フ-32	第2層
127	荒焼	不明	胴部	完	4.4	4.75	1	32.1	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	第2層
128	荒焼	不明	胴部	完	4.4	4.2	1	27.7	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	A	フ-32	第2層
129	荒焼	不明	胴部	完	3.85	3.8	1	23	楕円	両面	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-29	灰茶
130	荒焼	不明	胴部	完	3.2	3.6	0.9	16.2	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	茶褐色
131	荒焼	不明	胴部	完	4	3.7	1.2	19.2	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。剝離後摩耗。	A	フ-34	第2層
132	荒焼	不明	胴部	完	3.4	3.55	1	16.7	楕円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	茶褐色
133	荒焼	不明	胴部	完	3.4	3.15	1	15.3	楕円	外→内	平		剝離は丁寧。	B	フ-29	明茶
134	荒焼	不明	胴部	完	2.55	2.75	0.8	8.5	円	内→外	平		剝離は丁寧。	B	フ-30	攪乱焼土?木の根
135	荒焼	不明	胴部	完	2.65	2.65	0.7	6.1	楕円	外→内	平		剝離は丁寧。 第76図11。	B	フ、フ30	攪乱
136	荒焼	不明	胴部	完	5.4	5.2	1.2	45.4	不定形	外→内	湾曲		剝離は粗い。	B	フ-29	攪乱
137	荒焼	不明	胴部	完	5.1	5.4	1.1	39.8	不定形	内→外	平		剝離は粗い。	A	フ-32	第3層
138	荒焼	不明	胴部	完	4.7	4.8	1.1	31.9	方形	両面	平		剝離は粗い。	A	フ-33	第3層
139	荒焼	不明	胴部	完	4.45	4.5	1	27.6	不定形	外→内	平		剝離は粗い。	A	フ-31	第1層
140	荒焼	不明	胴部	完	4.6	4.5	1.1	24.6	円	外→内	平		剝離は丁寧。	A	フ-34	焼土混じり
141	荒焼	不明	胴部	完	3.95	4.1	1	21.7	円	外→内	平		剝離は丁寧。	A	フ-32	第1層
142	荒焼	不明	胴部	完	2.7	2.5	0.8	8.2	不定形	両面	平		剝離は粗い。	A	フ-31	第2層
143	荒焼	不明	胴部	完	2.5	2.45	1	8.1	楕円	外→内	湾曲		剝離は粗い。	A	フ-31	攪乱
144	荒焼	不明	胴部	完	3.9	3.55	0.8	14.2	円	外→内	平		剝離は粗い。	B	フ-30	第2層
145	荒焼	不明	胴部	破	6.9	6.6	1.9	116	円	外→内	湾曲		剝離は粗い。 第76図15。	A	フ-31	攪乱
146	荒焼	不明	胴部	破	5.75	5	1.1	33.6	楕円	外→内	平		剝離は粗い。	B	フ-30	第2層
147	荒焼	不明	胴部	破	4.3	5.1	1.3	32.3	不定形	外→内	湾曲		剝離は粗い。		フ30.31	第2層
148	荒焼	不明	胴部	破	3.85	4.45	1	25.4	楕円	内→外	湾曲		剝離は粗い。	A	フ32.33	第2層
149	荒焼	不明	胴部	破	4.45	3.2	0.8	15.8	楕円	外→内	平		剝離は粗い。	B	フ-30	第2層
150	荒焼	不明	胴部	破	3.8	3	1	15.6	方形	両面	平		剝離は丁寧。	B	フ-29	灰茶
151	荒焼	不明	胴部	破	3.2	2.9	1.1	13.6	楕円	両面	平		剝離は丁寧。剝離後摩耗。	B	フ-30	第2層
152	荒焼	不明	胴部	破	3	3	1	13.7	楕円	外→内	平		剝離は丁寧。	A	フ-31	第3層
153	荒焼	不明	胴部	破	4.25	2.9	1.1	14.5	楕円	外→内	平		剝離は丁寧。			
154	荒焼	不明	胴部	破	4.7	4.7	1	30.1	不定形	外→内	平		剝離は粗い。	B	フ-30	第2層
155	荒焼	不明	胴部	破	5.3	2.7	0.7	14.6	円	外→内	湾曲		剝離は丁寧。			表採
156	荒焼	不明	胴部	破	5.1	2.3	0.8	12.7	不定形	外→内	湾曲		剝離は丁寧。	B	フ-30	
157	荒焼	不明	胴部	破	4.85	3.45	1	28.1	方形	外→内	湾曲		剝離は粗い。	A	フ-32	第3層
158	荒焼	不明	胴部	未	5.6	6.3	1.2	45	不定形	外→内	湾曲			A	フ-32	第3層
159	荒焼	不明	胴部	未	4.45	4.4	1.2	36.4	方形	外→内	湾曲			A	フ-31	
160	荒焼	不明	胴部	未	4.25	4.3	1.2	23.6	不定形	外→内	湾曲			B	フ-30	第2層
161	荒焼	不明	胴部	未	3.9	4.4	1	21.2	不定形	両面	湾曲			B	フ-29	灰茶
162	荒焼	不明	胴部	未	3.5	4.25	1.2	28.9	不定形	両面	平	表裏:黒		B	フ-29	茶褐色
163	荒焼	不明	胴部	未	4.2	3.7	1	27.5	不定形	外→内	平			A	フ-31	表採
164	荒焼	不明	胴部	未	3.45	3.6	0.9	13.9	不定形	外→内	湾曲			B	フ-30	第2層
165	施釉陶器	不明	口縁部	未	2.5	2.2	0.4	3.3	不定形	両面	湾曲		表に文様。 第75図6。	A	フ-31	第2層
166	施釉陶器	不明	底部	破	3.6	3.9	0.9	14.3	不定形	外→内	湾曲	黒	剝離は丁寧。			
167	施釉陶器	不明	胴部	完	3.45	3.7	0.4	7.8	楕円	外→内	湾曲	表裏:灰	表に文様。剝離は丁寧。 第75図7。	A	フ-31	第3層
168	施釉陶器	不明	胴部	完	3.4	3.3	0.9	13.8	楕円	外→内	湾曲	表裏:灰	剝離は丁寧。	B	フ-30	瓦層
169	施釉陶器	不明	胴部	完	2.65	2.55	0.5	4.8	円	外→内	湾曲	褐色	剝離は丁寧。	A	フ-33	第2層
170	施釉陶器	不明	胴部	完	1.7	1.7	0.4	1.7	円	外→内	湾曲	黒	剝離は丁寧。	A	フ-33	第1層

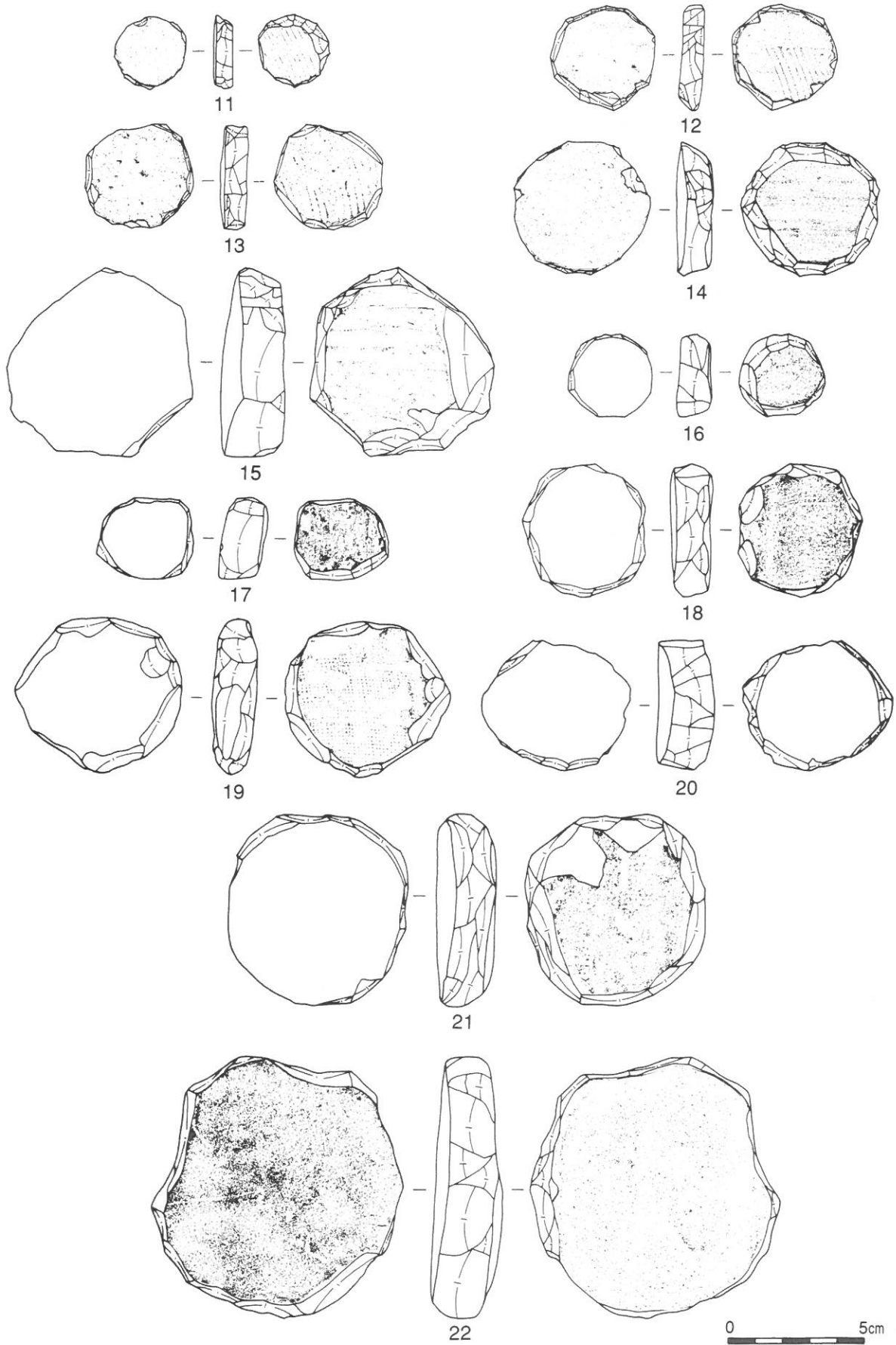
第17表 d 円盤状製品観察一覧

単位：mm、g

番号	種類	器形	部位	完/破	長径	短径	厚さ	重さ	形	縁部	断面	釉色	観察事項	塚	グッド	層
171	施釉陶器	不明	胴部	完	4.2	4.5	0.6	17.8	不定形	外→内	湾曲	褐色	裏に釉だれ。剥離は粗い。第75図8。	A	7-32	第2層
172	施釉陶器	不明	胴部	破	3.4	2.5	0.5	5.8	円	外→内	湾曲	黒	剥離は丁寧。	A	7-33	第1層
173	施釉陶器	不明	胴部	破	2.35	2.15	0.5	1.9	方形	内→外	湾曲	表裏:灰	剥離は丁寧。	A	7-31	第3層下部, 暗灰色土
174	施釉陶器	不明	胴部	破	3.55	3.65	0.8	12	円	両面	湾曲	裏:黒	剥離は粗い。			第2層
175	施釉陶器	不明	胴部	破	3.1	3.35	0.5	9.7	不定形	外→内	湾曲	灰	剥離は丁寧。	A	7-31	第2層 瓦だまり
176	施釉陶器	不明	胴部	未	2.4	2.1	0.8	5.2	不定形	内→外	湾曲	表裏:黒		A	7-33	第1層 攪乱
177	磁器	不明	胴部	完	2.35	2.25	0.5	3.3	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-33	第2層
178	色絵	不明	胴部	完	2.26	2.15	0.4	2.2	円	外→内	湾曲		表に雷文帯と「点描地文」。剥離は丁寧。第75図1。	A	7-31	第2層
179	染付	皿	底部	完	4.4	4.1	0.7	16	楕円	内→外	平		中国産。表に人物像、裏に「和美」の銘。剥離は丁寧。18C頃。湧田1993年第57図参照。第75図4。	A	7-31	第1層
180	染付	小杯	底部	破	2.65	2.6	0.3	6.3	円	外→内	凹		中国産。剥離は粗い。17C代。湧田1993年第59図参照。	A	7-31	2号窯か? 木の根
181	染付	小碗	底部	完	4.1	3.65	0.4	11.1	楕円	内→外	凹		表に「福」。剥離は粗い。第75図3。	A	7-31	第2層
182	染付	不明	底部	完	2.7	2.2	0.8	6	不定形	両面	平		剥離は粗い。	A	7-31	第2層
183	染付	不明	底部	破	2.15	1.15	0.3	1.2	円	外→内	平		剥離は丁寧。	A	7-32	第2層
184	染付	不明	底部	未	2.85	3.2	0.8	8.9	不定形	内→外	平			B	7-30	茶褐色土
185	染付	不明	底部	未	2.85	2.7	0.7	6.9	不定形	両面	平			A	7-32	第2層
186	染付	不明	胴部	完	3.5	3.65	0.6	8.8	方形	外→内	湾曲		剥離は丁寧。			攪乱
187	染付	不明	胴部	完	2.55	2.5	0.5	4.7	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-31	攪乱 けり混じり
188	染付	不明	胴部	完	2.45	2.4	0.4	3.2	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-31	第1層
189	染付	不明	胴部	完	2	2.25	0.7	3.6	楕円	外→内	湾曲		福建・広東系。「蓮弁文」の崩れた文様。剥離は粗い。湧田1993年第54図参照。		7-30, 31	第2層
190	染付	不明	胴部	完	1.6	1.55	0.5	1.9	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。第75図2。			
191	染付	不明	胴部	破	2.35	1.5	0.5	2.5	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-33	第1層
192	染付	不明	胴部	破	1.9	0.9	0.5	0.9	円	両面	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-32	第2層 下部, 砂利混じり
193	染付	不明	胴部	未	2.9	2.8	0.4	4.8	不定形	外→内	湾曲			A	7-32	第1層
194	染付	不明	胴部	未	2.4	2.3	0.4	3.9	方形	外→内	湾曲			B	7-30	第3層
195	染付	不明	胴部	未	2.6	2.45	0.65	5.2	不定形	外→内	湾曲			A	7-31	第2層
196	染付	碗	胴部	完	4.1	4.25	0.7	14.9	円	外→内	湾曲		福建・広東系。表に「寿字文」。剥離は丁寧。18~19C前半。湧田1993年第54図参照。第75図5。	A	7-32	第3層
197	染付	碗	胴部	完	3.55	3.4	0.4	7	円	外→内	湾曲		福建・広東系。表に「寿字文」。剥離は丁寧。18~19C前半。湧田1993年第54図参照。	A	7-31	第3層 焼土混じり
198	染付	碗	胴部	完	2.95	2.5	0.4	4.5	楕円	外→内	湾曲		福建・広東系。「蓮弁文」の崩れた文様。剥離は丁寧。18~19C頃。	B	7-28	茶褐色
199	土器	不明	胴部	完	3	3.3	0.9	11	楕円	両面	平		剥離は粗い。	A	7-33	第3層
200	土器	不明	胴部	破	3.9	6	0.8	21.6	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。			表採
201	陶質土器	不明	胴部	未	5.4	5.8	1.3	41.6	不定形	外→内	湾曲			B	7-30	第2層
202	白磁	不明	底部	未	3.2	2.95	1.2	21.1	不定形	両面	平					表採
203	無釉陶器	不明	胴部	完	3.3	3.35	0.5	7.1	円	外→内	湾曲		剥離は丁寧。	B	7-30	第2層
204	無釉陶器	不明	胴部	破	4.05	4.8	0.7	19.1	楕円	外→内	湾曲		剥離は粗い。	A	7-31	第2層
205	無釉陶器	不明	胴部	破	3.7	3.4	0.9	15.1	円	両面	湾曲		剥離は粗い。	A	7-33	第2層
206	無釉陶器	不明	胴部	破	2.7	3.8	0.9	9.8	円	両面	湾曲		剥離は丁寧。	A	7-32	第2層
207	無釉陶器	不明	胴部	破	1.95	3.35	1.3	12	円	外→内	湾曲		剥離は粗い。	A	7-34	第2層
208	無釉陶器	不明	胴部	未	4	4.63	0.9	23.6	不定形	両面	湾曲			B	7-30	瓦層
209	無釉陶器	不明	胴部	未	3.9	4.4	0.8	19.2	方形	外→内	湾曲			A	7-32	第3層
210	無釉陶器	不明	胴部	未	3.65	3.2	0.8	12.2	不定形	内→外	湾曲			B	7-28	灰茶褐色
211	無釉陶器	不明	胴部	未	2.8	3.3	0.8	11.1	不定形	外→内	湾曲			B	7-30	壁
212	無釉陶器	不明	胴部	未	3.05	3.1	0.9	12.2	不定形	外→内	湾曲			A	7-31	攪乱 けり混じり



第75図 円盤状製品 1



第76図 円盤状製品2

第22節 埴 塼

1点だけ確認でき、第77図1に示した。丸底状の底部から直線的に外側へ開いて口縁部に至る。口縁はラフなつくりの平縁で、口唇部は舌状を呈す。推算口径が約4cm、高さが約2cmで、行政棟地区から報告されているものからすると小型のものである。また、底面部の厚みが1cm以上あり、実際の内側の深さは1cm弱である。内底面に近い部分に外側から径約5mmの孔を穿つ。全体が黒灰色になっており、内外面に釉状に溶解したものの付着する部分も見受けられる。ハ-34第3層から出土。

第23節 石製品

第77図2・3の2点が出土した。

同図2は円形状に加工したもので推算外径59.2mm、内径22.7mm、最大厚9.7mm、重さ10.1gを計る。石質は硬砂岩の可能性が高い。ヒ-31第4層焼土の出土である。用途は不明である。

同図3は硯の墨受け部の角部分にあたるもので厚さは最少厚6.8mm、縁の部分は9.4mm、重さ14.2gを計る。石の色は灰紫色を呈し、縦位に研磨痕が認められる。表面採集である。

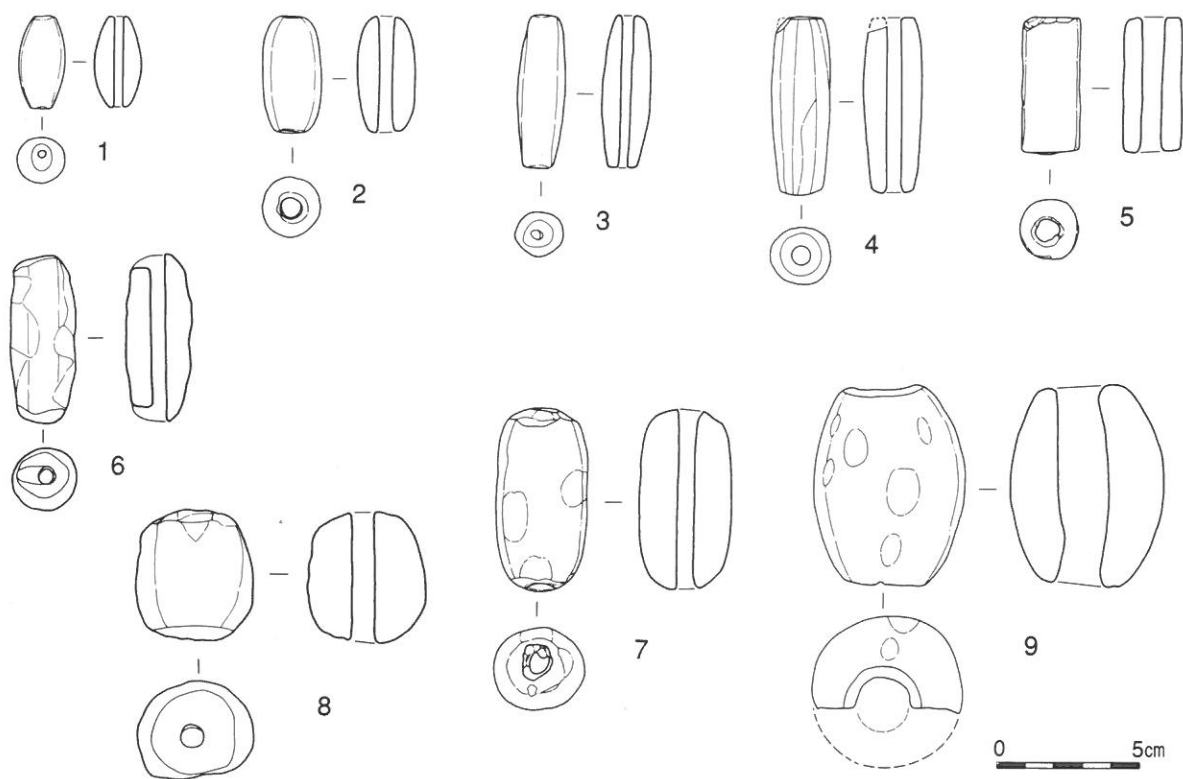
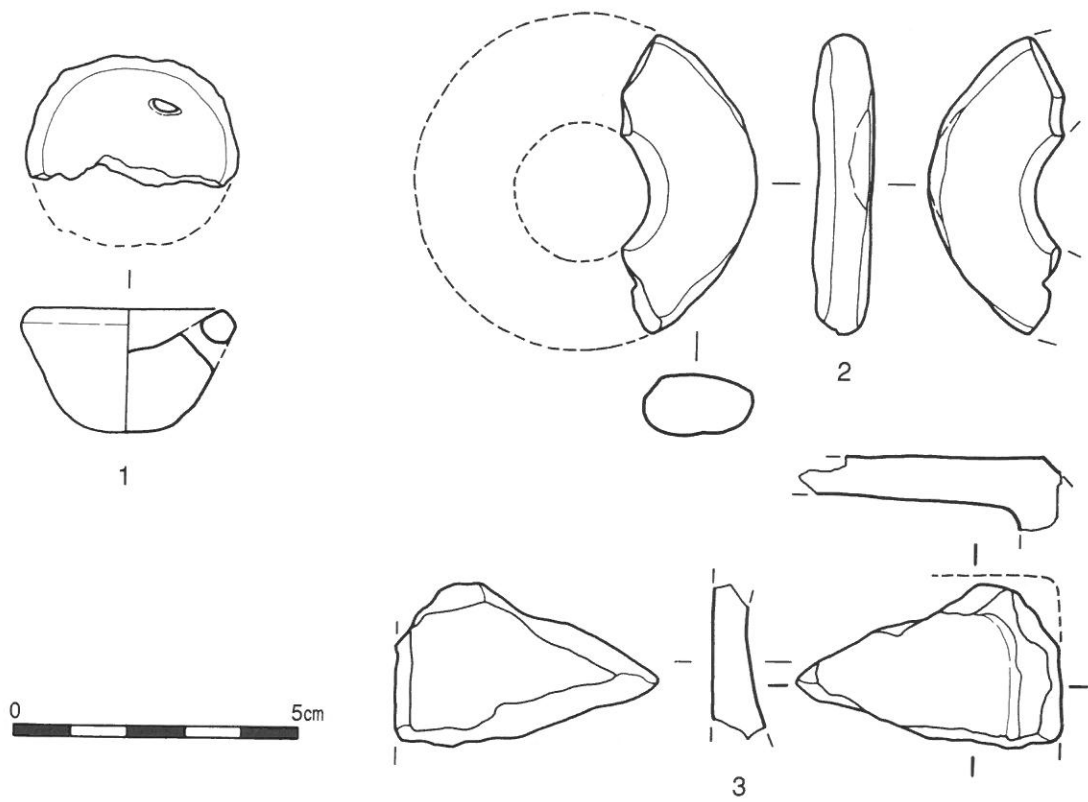
第24節 土 錘

本品は出土総数36個でA区は第2層-2個、第3層-6個、第4層-4個、第5層-5個、攪乱-1個、B区-第2層-1個、不明-1個、区不明-9個が出土した。

これによると8.2g~101.6gまで出土するが、完形を重さ別にみると最も多い重量は20g台-14個、10g台-9個、10g以下-4個、30g台-4個、50g台-1個、60g台-4個、80g-1個である。また大きさとみると壺屋古窯^(註1)で仮分類したaタイプ(短径/長径の比率が1.2~1.9)では30×17.1mmが最も小さく、68.6×52.3mmが最も大きい。bタイプ(短径/長径の比率が2.0~3.5)では32.9×16.6mmが最も小さく、67×21.5mmが最も大きい。量的にはaタイプ-15個、bタイプ-21個である。大きさについては細分が可能と思われ、第78図に大きさと重量の散布グラフを示した。また、土錘の作り方をみると横に切り痕のあるものは表面を削り痕で調整し、また、孔の部分は丸味があるものは表面を指圧などで調整する傾向がみられる。本遺跡では後者の方が21個と主流を示す。質を比較すると壺屋古窯のものは陶質であるが、本遺跡出土のものは瓦質である点で異なる。

註

註1 那覇市教育委員会「壺屋古窯群Ⅰ」『那覇市文化財調査報告書第23集』1992年3月



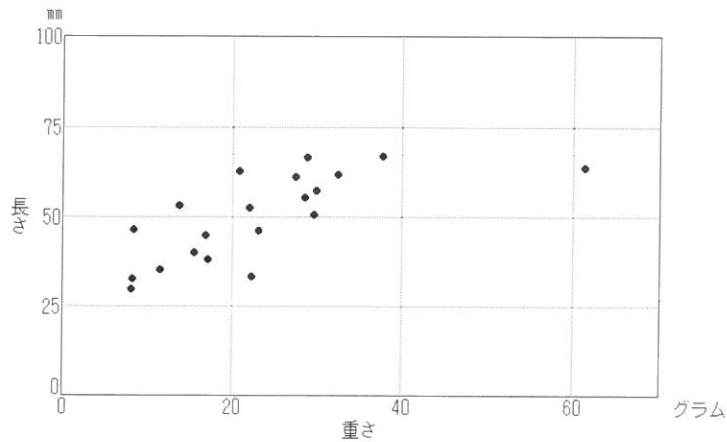
第77図 上：坩堝（1）、石製品（2、3） 下：土錘

第18表 土錘観察一覧

単位：mm、9

計測	地点	グリッド	層	層備考	完	長さ	最大幅	比率	孔径	孔2	重さ	色調	孔	観察事項	備考
1	A	ヒ-31	第4層		完	67	21.5	3.1	7	b	37.6	灰褐色	切り痕	焼成は良好。	
2	B	ハ-29	第2層	明茶褐色	完	55.3	20.2	2.7	4.3	b	28.5	明灰褐色	切り痕	焼成は良好、砂質、表面に若干削りの跡。	
3	A	ヒ-31	第3層下	焼土混じり①	完	52.6	22.4	2.3	8.4	b	22	明茶褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。	
4	A	ハ-32	第3層		完	53.2	15.9	3.3	3.9	b	13.7	明茶褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。	図3
5	A	ネ-31	第5層b		完	50.7	22.7	2.2	4.9	b	29.5	灰褐色	丸味	焼成は良好、両端に溝。	
6	A	ノ-31		溝状遺焼土混じり	破	54.9	22.2	2.5	5.7	b	25.8	灰褐色	切り痕	焼成は良好、白い混入物が確認できる。	
7					破	62.5	48.3	1.3	15.3	a	101.6	茶褐色	丸味	焼成はやや脆い。	
8	A	ネ-31	第5層b		破	59	44	1.3		a	50.6	暗灰褐色	丸味	焼成やや良好。	
9	A	ヌ-31	第5層	焼土混じり	破	45.7		0		a	9.9	灰褐色	切り痕	焼成やや良好。	
10	A	ニ30.31	第3層下部	暗灰褐色	破	34.2	32.2	1.1	8.3	a	23.1	灰褐色	丸味	焼成やや良好、砂質。	
11	A	ノ32.33	第5層		完	32.9	16.6	2		b	8.3	茶褐色	切痕	焼成は弱い。	図1
12	A	ネノ32.33	第4層	焼土混じり	破	45.6	40.2	1.1	9.6	a	66.2	灰褐色	丸味	焼成は良好。	図8
13	A	ヒ-31	第3層下	暗灰褐色土	完	62.9	19.1	3.3	5.1	b	20.8	明灰褐色	丸味	焼成は良好、砂質。	
14					完	30	17.1	1.8	6.2	a	8.2	灰褐色	丸味	焼成は良好。	
15	A	-31	攪乱		破	45.4		0		a	21.4	灰褐色	丸味	焼成はやや脆い。	
16	A	ニ-32	第3層		破	49.5	15	3.3	4.8	b	11.7	茶褐色	不明	焼成は脆い。	
17			表採		完	46.6	15.2	3.1	4.1	b	8.5	灰褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。	
18	A	ニ-34	第4層		完	61.7	19.4	3.2	5.4	b	32.4	黒褐色	切り痕	焼成は良好、表面は削り痕がある、自然釉。	図4
19					破	58.3	38.2	1.5	11.4	a	11.4	暗灰褐色	丸味	焼成は良好。	
20	A	ノ-32			破	68.6	52.3	1.3	17.8	a	89.2	茶褐色	丸味	焼成は弱い。	図9
21					破	58.7	33.4	1.8	9	a	62.5	暗灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。	
22	A	ヌ-32	第3層下部	砂利面中	完	57.5	20.4	2.8	4.8	b	29.8	灰褐色	丸味	焼成はやや良好、表面は手の握りが明瞭、両端の孔から溝がある。	図6
23	A	ノ-31		溝状遺構内焼土混	完	52.6	18.7	2.8	4.4	b	22	灰褐色	切り痕	焼成はやや良好。	
24	A	ニ30.31		壁地山直上	完	33.4	22.8	1.5	8	a	22.2	暗灰褐色	丸味	焼成良好。	
26	A	ノ-32	第5層		完	66.6	18.8	3.5	7.1	b	28.7	暗灰褐色	丸味	焼成良好、指跡。	
27	A	ヌ-34	第2層	砂利混じり	完	63.7	31.5	2	5.8	b	61.3	灰褐色	丸味	焼成はやや良好。	図7
28					完	61.2	21.9	2.8	4.3	b	27.4	灰褐色	丸味	焼成はやや良好。	
29	A	-33	第3層下部		完	46.2	19.5	2.4	7.9	b	23.1	灰褐色	切り痕	焼成は良好。	
30	B	ノ-29		茶褐色	破	36.6	16.3	2.2	3.9	b	10.6	灰褐色	切り痕	焼成は良好。	
31					破		26.5	0	10.9	a	12.2	茶褐色	切り痕？	焼成は非常に良好、陶質ばい。孔は他に比べて大きい。	
32	A	ネ-37		焼土混じり	完	44.8	20.2	2.2	4.2	b	16.8	明灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。	
33			表採		完	35.3	18.2	1.9	5.4	a	11.6	明灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。	
34	A	ノ-32	第2層		完	38.1	20.6	1.8	8.6	a	17.2	茶褐色	切り痕	焼成は良好。孔は中に細くなる。	
35					破	42.4	37.9	1.1	3.3	a	22.8	明灰褐色	丸味	焼成は良好。	
36	A	ハ31.32	第4層		完	40.1	19.8	2	6.4	b	15.6	灰褐色	丸味	焼成は良好、砂質。	図2

注：「孔2」の項は短径/長径の比率でaタイプ（1.2~1.9）、bタイプ（2.0~3.5）として分類



第78図 土錘の長さとうりの相関

第25節 窯道具

4点だけ確認でき、第79図1～4に示した。3に示した小型のハマは注意されるが、他の3点はいずれも行政棟地区から報告されているものの中に類例資料が認められる。以下に今回得られたものの特徴について略述する。

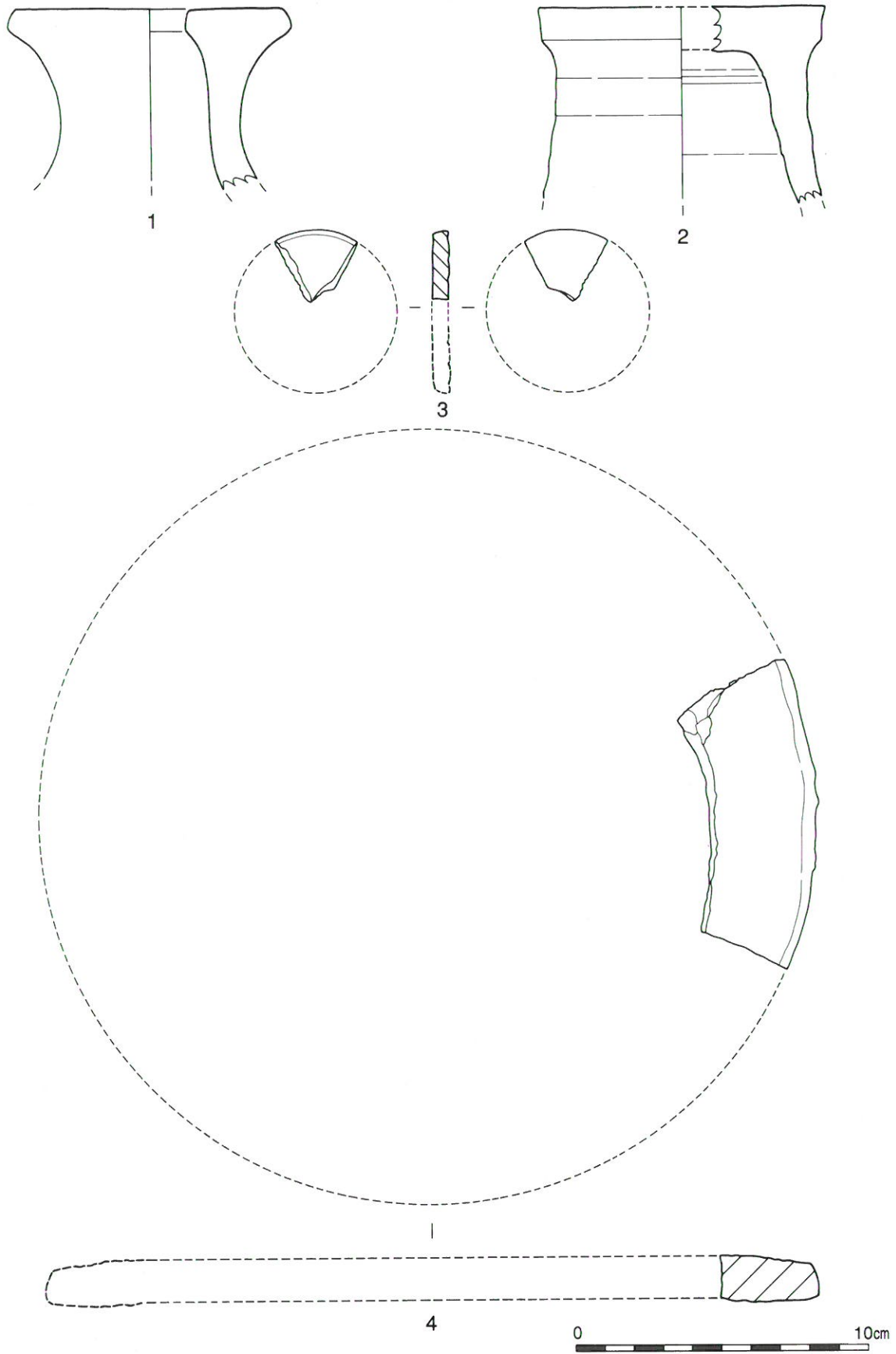
1・2はトチン、3・4はハマの資料である。1は瓦質のもので全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。円盤部は平滑な面を有し、端部は丸味を持って整形している。端部下方から内側へゆるやかなカーブを描くように底面部に向かい、脚部中央付近で最も径を減じる。円盤部の径は9cmを測り、ほぼ中央に径約2cmの孔があいている。灰色の焼きあがり、脚部は中空。調整痕の状況からすると脚部と円盤部は張り付けのようである。脚部下方が破損しており、高さは不明である。2は陶器質の橙褐色の焼きあがりをなすもので、1よりも堅く焼き締まる。胎土中にわりと大粒の鉱物が散見される。円盤部の周縁は約1cm幅ではほぼ平坦面に整形し、その下方は若干内側へすぼまるものの、そこから底面部へは外側へ開き気味になる。脚部の内外面はロクロ引きのままで、円盤部には糸きり痕が明瞭に残る。円盤部は中央部の方へ若干くぼむ感じになり、ヘラ状の工具による弧状の沈線が1本認められる。推算の径は約9cmで、1と同じような大きさである。

3は小型のハマで推算の径は約5cmである。表面は丁寧にナデているが、裏面はそれほど意識されていない。縁部は裏面の方が小さくなるように斜めに削って調整しているが、わりと雑である。表面には縁部と同心円状の沈線が約5mm間隔で2本認められるが、本来何本施されたかは不明。6mm前後の厚みを有し、胎土には白色の微砂粒が比較的多く含まれる。黒褐色を呈し、わりと堅い感じのものである。4は径の推算が約26cmを測る大型のものである。つくりは雑で、両面の調整もあまり意識されていない。焼成時の影響が若干歪になり、はらみの部分も見受けられる。表面には同心円状の沈線が密に施されており、胎土には白色の微砂粒を多量に含む。類例の資料が行政棟地区や黒石川窯跡^(註1)、壺屋古窯群Ⅰ^(註2)などから得られている。

註

註1. 「黒石川窯址 沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書」『石垣市文化財調査報告第15号』 石垣市教育委員会 1993年3月。

註2. 「壺屋古窯群Ⅰ 一個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査」『那覇市文化財調査報告書第23集』 那覇市教育委員会 1992年3月。



第79図 窯道具

第26節 脊椎動物遺体

金子 浩 昌

1. はじめに

湧田古窯跡から出土した動物遺体についての第2報であるが、現在議会棟のある場所であって、前回報告した地点に接続する。前回と同様に獣骨特にブタを中心とした獣骨が多く出土していて、この時期の動物相を特徴付けている。計測部記号はA. V. d. Driesh (1976) による。

出土した動物遺体の種名表

A. 節足動物門

イワガニ科

モクズガニ

B. 脊椎動物門

I. 軟骨魚綱

サメ目

メジロザメ科

属・種不明

II. 硬骨魚綱

スズキ目

ハタ科

属・種不明

フエフキダイ科

ハマフエフキダイ

III. 哺乳綱

1. クジラ目

ゴンドウクジラ科

属・種不明

2. 食肉目

イヌ科

イヌ

ネコ科

ネコ

3. 奇蹄目

ウマ科

ウマ

4. 偶蹄目

イノシシ科

ブタ

ウシ科

ウシ

A. Phylum ARTHROPODA

Family Grapsidae

Eriocheir japonicus

B. Phylum VERTEBRATA

I. Class Chondrichthyes

Order Lamniformes

Family Charcharhinidae

Gen. et sp. indet.

II. Class Osteichthyes

Order Perciformes

Family Serranidae

Gen. et. sp. indet.

Family Ltjanidae

Lethrinus mebulosus

III. Class Mammalia

1. Order Cetacea

Family Globicephalidae

Gen. et. sp. indet.

2. Order Canivora

Family Canidae

Canis familiaris

Family Felidae

Felis catus

3. Order Perissodactyla

Family Equidae

Equus caballus

4. Order Artiodactyla

Family suidae

Sus scrofa var. domesticus

Family Bovidae

Bos taurus

2. 動物遺体の概要

A. 節足動物

甲殻類

モクズガニ *Eriocheir Japonicus*

左側の可動指1点がある。

B. 脊椎動物

a. 魚類

・メジロザメ科 *Charcharhinidae*

椎体が4点出され、椎体径32mmが最大である。

・ハタ類 *Sevrnidae*

大型の歯骨が出土している。

・ハマフエフキダイ *Lethrinus mebulosus*

大型の歯骨1点がある。

第19表 魚類出土量

出土地層序				A 区			B 区			その他		合計	
				表採	第2層		第3層	第1層	第4層	不明	表採		不明
						b層							
部位	種不明	脊椎		3				1			4		
サメ目	メジロザメ科	種不明	脊椎			1					1		
スズキ目	フエキダイ科	ハマフエキダイ	顎骨	R							0		
		種不明	顎骨	R							0		
	ブダイ科	ハコブブダイ	咽頭骨	R						1		0	
		種不明	咽頭骨	R					1			0	
		種不明	顎骨	R	1			1				0	
	ハタ科	種不明	顎骨	R		1						0	
ワケ目	ハリセンボ科	ハリセンボ	顎骨								0		
種不明	脊椎					1			1		1		
	尾椎									1	1		
	破片			1	3						4		
個体数				1	1	1	1	1	1	1	8		

凡例： R 前上顎骨 L 前上顎骨 R 上咽頭骨 L 上咽頭骨
 R 歯骨 L 歯骨 下咽頭骨

b. 哺乳類

・イヌ *Canis familiaris*

イヌの遺骸は全層を通じて10数点を検出しているのみであり、個体数を推定できる程のまとまった標本もなかった。頭蓋骨片1点と肋骨5点、肩甲骨、上腕骨、尺骨、寛骨各1点という数である。やはり遺跡と直接的なつながりがないということなのであろう。

第24表 ウマ歯牙出土量

出土地 層位		右											左											合 計								
		i1	i2	i3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	i1	i2	i3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3									
上 顎 骨	攪乱																							0								
	第3層	1											1	1											1							
	第5層											1											1									
	焼土混じり																					2	2	2	2	9						
	第6層											2	2											4								
	不明																							0								
	攪乱											1	1											2								
	第2層	1											2	2											5							
	c											2	2	1	1	1											7					
	合計	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	5	5	3	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3	3	0
	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
下 顎 骨	攪乱																							1								
	第1層																							0								
	第3層																							1	1							
	第5層																							1								
	b																							1	1	1	1					
	第2層											1	1	3	3											11						
	c	1											3	5	5	1											23					
不明																							1									
合計	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	6	6	3	3	2	0	1	1	0	0	0	0	0	1	3	3	5	5	2	45		
	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	

・ブタ Sus Scrota var. domesticus

先に報告した本遺跡出土の標本と同じような性格の遺骸が出土している。ブタの出土も初期の堆積層にまで遡れるようで、A区で第6層、B区第4層、第5層で頭骨片が含まれ、第3層上部、B区第2層で多く出土していることを認めることができる。

(頭蓋)

頭頂骨がよく残されている。大型のもので、後頭骨鱗頭骨鱗部幅は65.0mmに達し、その全長は220mmに達するであろう。矢状縫合の化骨は不完全。萌出している臼歯の咬耗はほとんど見られず、エナメル質部分の咬耗を僅かにみる程度である。上下顎骨のM3は未萌出のものが大部分である。犬歯は雌雄共に細めで華奢である。

(四肢骨)

上腕骨遠位骨端滑車上孔はすべての標本が閉鎖している。四肢骨の近位骨端、遠位骨端の化骨している標本はない。

上顎・下顎骨及び歯の計測値 (歯冠長×歯冠幅)

R (dm⁴~M²) 46.61 瓦溜り

dm⁴: 12.73×9.53

M¹: 15.19×11.57

M²: 18.68×14.14

R (P⁴M^{1,2}) 44.56

M¹: 32.92

L (P¹⁻⁴M^{1,2}(3)) 瓦溜り

P¹~M² : 74.29

(<P²P³P⁴>dm⁴M^{1,2}) 瓦溜り

M³は歯槽内完全埋没

湧田古窯跡 瓦溜り

現生リュウキュウイノシシ

P₄~M₂ : 47.87

P₄~M₂ : 40.43

M₁ : 15.81×9.79

M₁ : 12.65×8.68

M₂ : 20.22×12.72

M₂ : 16.76×11.00

M₁骨体厚 : 18.80

M₁骨体厚 : 18.00

骨体高 : 44.0

骨体高 : 32.57

M₁の++++段階で M₃歯槽閉鎖の切れがみられる。

イノシシ下顎骨dm₄~M₂ R-32 第3層下部

dm₄~M₂ : 30.12

dm₄ : 15.97×7.46

M₁ : 13.91×9.32

M₃ : 28.43×14.05

下顎犬歯	{	L 幅12.11 (最大) ♂	焼土層
		L 幅10.92 (最大) ♂	第2層 歯は全体に細く湾曲が強い。
		R 幅10.79 (最大) ♀	ネ-33 第2層

橈骨	{	R SD : 16.38	
		R SD : 11.48	焼土混じり
		L SD : 17.76	表採

尺骨	{	R DPA 24.21	ヒ-30 第2層
		L DPA 45.0±	ハ-30 第2層 骨体の湾曲が認められる。

脛骨	{	L SD : 19.49	ノ-28 灰褐色層 イノシシに比べて幅広く湾曲が弱い。
		SD : 14.93	ノ-30 暗褐色土層

・ウシ *Bos taurus*

A区第5層で僅かであるが出土していて、ウシ飼育の遡れる時期が推定される。それ以後第3層の上部から第2層に多く、標本の大部分がここから出土している。B区での出土は少ないが、第2層b・c層が中心になっている。

ブタに次ぐ量の遺骸が出土しているが、その全体量は少なく、また部位によって保存の状況は異なる。頭蓋はほとんど検出することがなかった。角などほとんどみられないのは、別に処理されているからであろう。しかし、下顎骨の出土は目立った。下顎歯の多かったのもそのためであり、下顎の部分が運ばれているとすれば、何らかの調理に使われていたからであろう。

椎骨の出土は少ない。運び込まれる骨はごく限られていたのであろう。

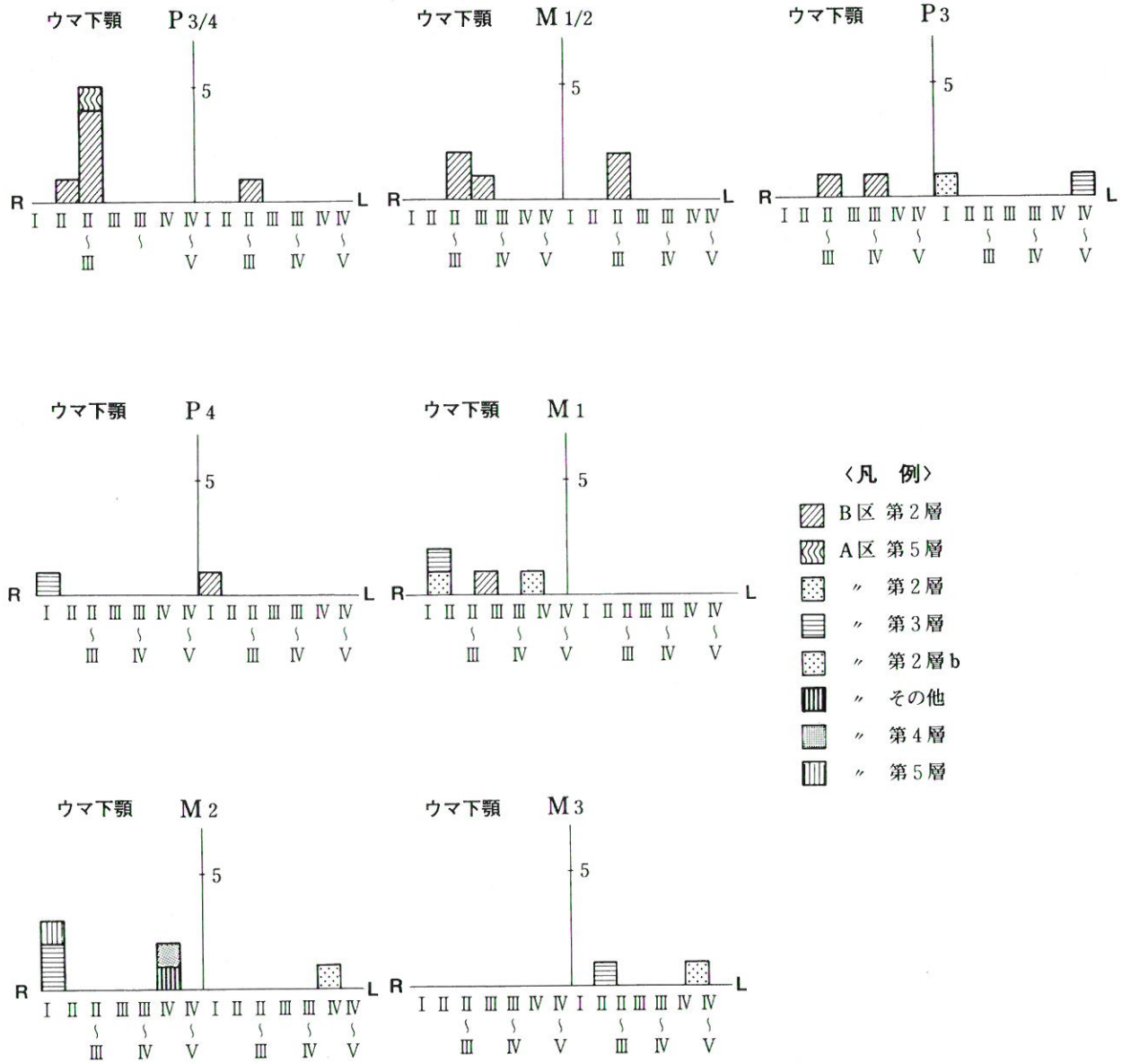
歯牙の出土状況は別表に示したが、M₃の少ないことが目につく。乳歯も少ない。

肩甲骨	L {	GLP : 84.84	ヒ-31 第4層焼土混じり。
		BG : 56.82	
		SLC : 57.82	

第27表 プタ歯牙出土量

部位	右													左													左右不明	合計																			
	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3																									
上顎骨	出土地 層序	i	i	2	i	3	c	m1	m2	m3	m4													i	i	2	i	3	c	m2	m3	m4															
	第1層										1																																				
	第2層				♀1																																										
		b																																													
	第3層																																														
		下部																																													
	第4層																																														
	第5層																																														
	不明																																														
	B区	第2層																																													
b																																															
c																																															
合計	2	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	5	10	7	2	5	2	0	0	0	0	0	2	5	3	2	6	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0			
未明出																																															
雄																																															
雌																																															
下顎骨	攪乱																																														
	表採																																														
	第1層																																														
	第2層																																														
		b																																													
	第3層																																														
		下部																																													
	第5層																																														
	第6層																																														
		下部																																													
不明																																															
B区																																															
その他	表採																																														
	第2層																																														
合計	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3	1	3	1	1	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	5	1	1	0	0	0	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0
未明出																																															
雄																																															
雌																																															

凡例：<>未明出、♂雄、♀雌



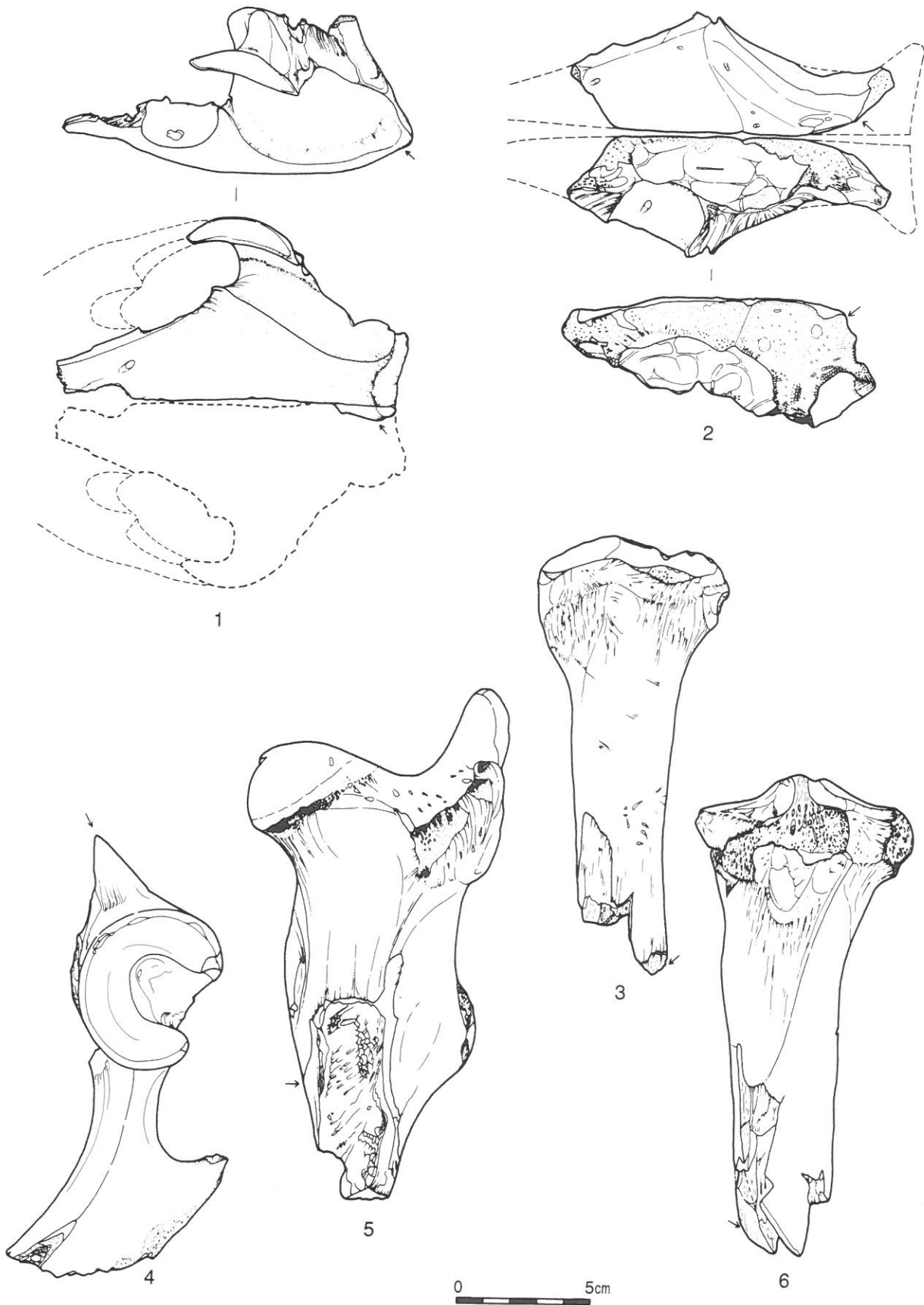
第80図 ウシ歯の年齢構成グラフ

3. 収 束

本古窯跡で出土した動物遺体は、伴出する輸入陶磁器の年代から16世紀頃と考えられており、また先に県庁舎行政棟建設地において知られた古窯跡に伴う動物遺体と同じ性格をもつものであった。獣骨であるブタ類を中心としてウシ、ウマなどの大型家畜が主体であって、ここでの肉の扱い方をよく示していた。これに付いては既に前回の報告の際ふれておいたことであった。

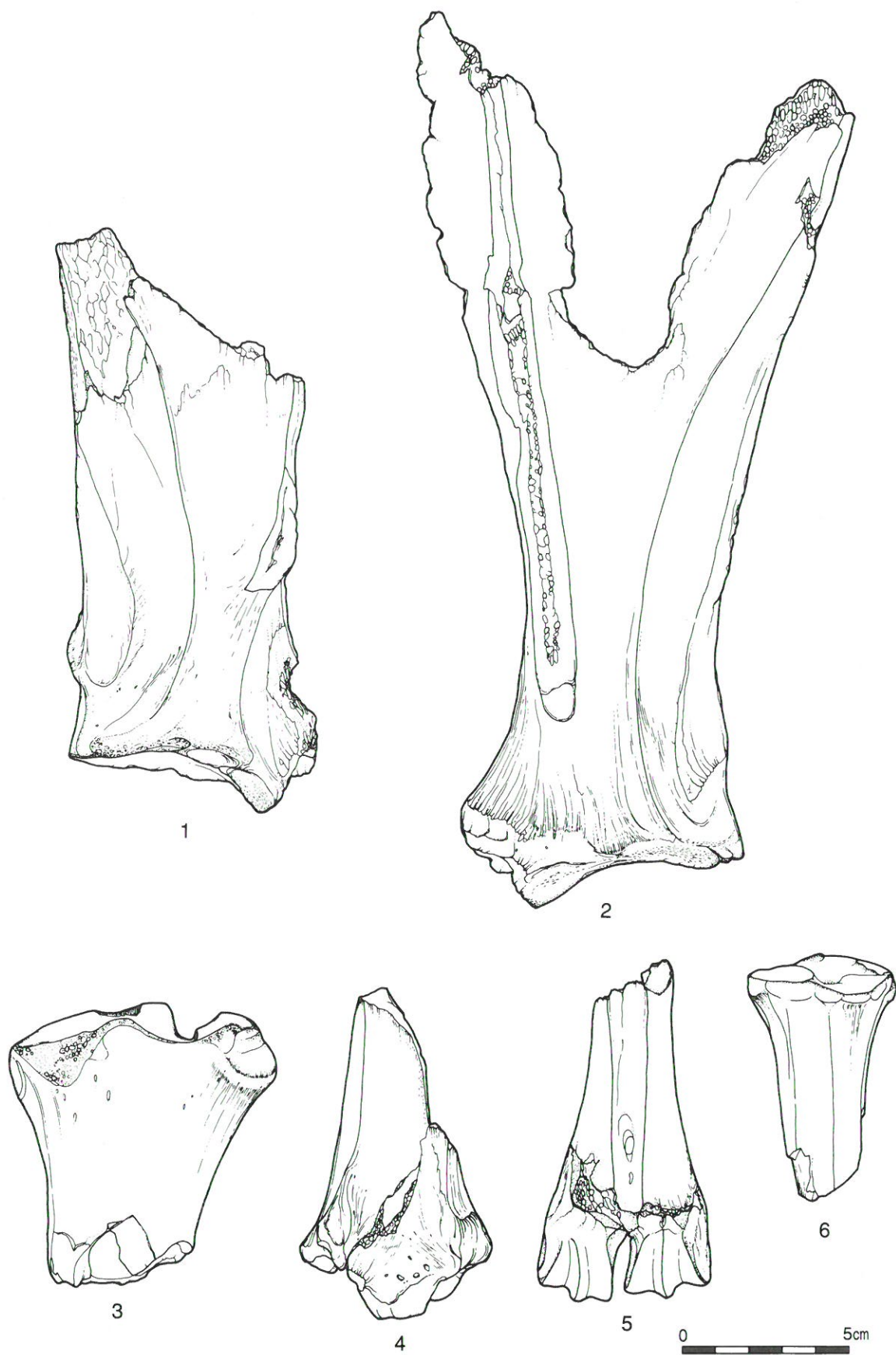
参考文献

- 金子浩昌 「伊波仲門中墓出土のブタ遺存体」『石川市古我地原内古墓 沖縄自動車道（石川ー那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）』 沖縄県文化財調査報告書第85集 P177、沖縄県教育委員会 1987年12月。
- 金子浩昌 「湧田古窯跡出土の脊椎動物遺体」『湧田古窯跡（I）ー県庁舎行政棟建設に係る発掘調査ー』 沖縄県文化財調査報告書第111集 P176～192、沖縄県教育委員会 1993年3月。



第81図 切痕をもつ骨

1、2：ブタ頭蓋、3：ウマL 橈骨近位端、4：ウマR 寛骨白部、5：ウマL 大腿骨近位部
6：ウマL 脛骨近位端



第82図 切痕をもつ四肢骨 (ウシ)

1 : R肩甲骨、2 : L肩甲骨、3 : L橈骨近位端、4 : R脛骨遠位端、5 : R中足骨遠位端
6 : R中足骨近位端

第27節 貝類遺存体

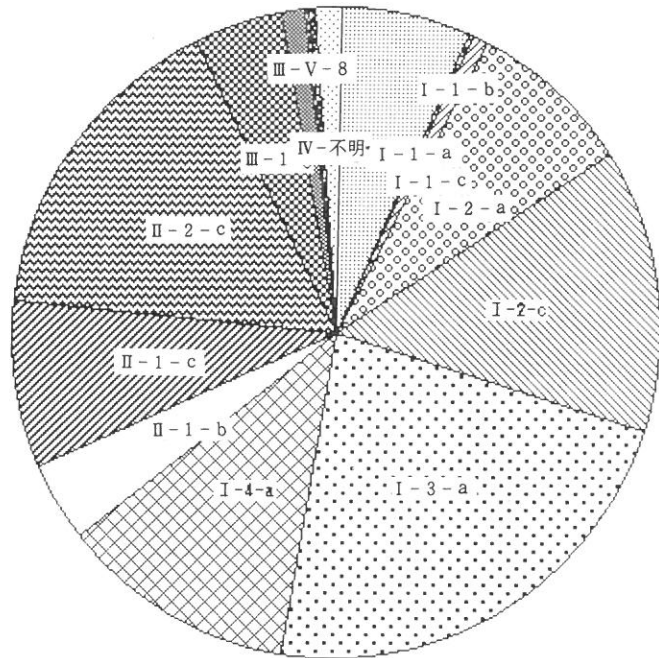
出土した貝は32科89種で出土量は、個体と他の遺跡に比べたら少い。

最少個体数の算出方法は「喜如嘉貝塚」1994年に準じた。出土した貝の量は、ほぼ同時期の首里城跡や御細工所跡^(註1)に比べたら多い方であるが、発掘面積と比較すると非常に少ない。

出土量を層別に見ると第2層が最も多く、次に第3層と続く。表採は総数にしては多いが、攪乱などを含めている。

貝種別にみるとチョウセンサザエが最も多く49個体、次にマガキガイ34個体、サラサバテイラ31個体、ウラキツキガイ28個体、オハグイロガイ24個体、チョウセンサザエ20個体である。

この時代において、貝類は食用の主流ではなかったと思われるが、出土した貝をみると前述の2遺跡から出土する貝と同じ貝が好まれて採取されていることから嗜好性を優先にして採集したと思われる。また、ヤコウガイは破片の数が多い。これは首里城跡や御細工所跡、孔子廟などの近世の王朝関連の遺跡で目につく貝で、ほぼ同時期のヒヤジョウ毛遺跡等^(註3)では非常に少ない。したがって、食用かそれ以外の用途があるのか、今後検討を要する問題である。



第83図 生息地別出土状況

註

註1 沖縄県教育委員会「首里城跡—観会門・久慶門内側地域の復元整備事業に係る遺構調査」沖縄県文化財調査報告書第88集 1988年

註2 那覇市教育委員会「御細工所跡」那覇市文化財調査報告書第18集 1991年

註3 那覇市教育委員会「ヒヤジョウ毛遺跡—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ—」那覇市文化財調査報告書第26集 1994年3月

第Ⅵ章 総括

本地区は、標高約7.5mを測る微丘陵の北端に位置する。調査の結果、低地部分は2次堆積層となっており、本遺跡に関する遺構は検出されていない。一方、微丘陵部分では各種の遺構が検出されており、この丘陵一帯で遺跡が展開していたものとみられる。以上のことから、本地区は湧田古窯跡の縁辺部にあたる事が判明した。次に層位・遺構・遺物の状況についてみると、確認された遺物包含層は4枚である。第2層は調査区のほぼ全面を被覆しており、遺物としては中国産陶磁器は17世紀後半から18世紀に属する福建・広東系の粗製の印青花碗・鉢類、18世紀から19世紀に属する草花文・「寿」字文の碗類、仙芝祝寿文を描く小碗などであり、沖縄産陶器は、湧田系の灰釉及び壺屋系の施釉陶器と壺・甕などの無釉陶器が出土している。第3層は土取り場遺構を被覆する層であり、第2層出土の遺物および、中国産陶磁器では、明代に属する青磁・白磁・染付が出土している。第4層では、明代の陶磁器類と灰色瓦・磚・レンガ等の瓦類と摺鉢・こね鉢・壺等などの瓦質土器が出土しており、遺構もこの層より検出されていることからこの第4層が本地区の生活層と考えられる。第4層は焼土・灰混じりの薄い土層が幾重にも堆積しており、この層中より瓦列遺構・瓦敷遺構・ピット群が検出されている。またこれらの遺構群とはほぼ同レベルからサンゴ層から成る固く締まった砂利面が広がっていること等からこの砂利面を含む遺構面が本地区の生活面と考えられる。第4層中ではこの生活面はピット群に伴う遺構面が同層の上面より、さらに瓦敷遺構に伴う遺構面が下位のレベルで検出されている。但しこの2枚の遺構面にはレベル的な上下関係は認められるが、これらの遺構面を包含する第4層の堆積状況を考慮すると、時間的な差は極めて小さいものと考えられる。次にこの第4層検出の遺構についてみると、張床土壙、瓦列遺構、瓦敷遺構等はいずれも瓦類を伴うことから瓦窯生産に関わる遺構と見られる。遺構の性格については瓦列・瓦敷遺構は何らかの施設に伴う遺構であると考えられるが、詳細については不明である。張床土壙は、土壙内に灰色粘土が塗られており、また土取り場跡と近接していることから、原料となる粘土の精製に関わる遺構であると考えられる。

以上のことから、本地区の操業期間について考えると、生活層である第4層は、輸入陶磁器は、青磁では剣先蓮弁文碗、染付では蕉葉文碗や見込み花文碗など16世紀代に属する遺物で構成されている点を考慮すると主たる操業期間は16世紀代と考えられ、その後この層を覆う第2層の年代の上限が17世紀後半代と見られることから、本地区における瓦生産は16世紀末から17世紀代までには廃絶したものと考えられる。最後に本地区と前回調査した行政棟地区との関係について言及すると、位置・遺構・遺物の性格からⅠ地区からの延長と考えられる。

第36表 巻貝出土状況

巻貝 番号	科名	貝種名	棲息場所	試掘		表採		第1層		第2層			第3層		第5層	窯内E層	不明	合計		個体数																											
				完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片		完形殻頂破片	完形殻頂破片																									
1	エキノカサガイ科	リュウキュウノアツ	I-1-a					1											1	0	0	1																									
2	ニシキウス科	ニシキウス	I-2-a					1												1	0	0	1																								
3		ムラサキウス	I-3-a					1												1	0	0	1																								
4		キンタカハマ	I-4-a			1	6	4		1										1	6	5	7																								
5		ササハノテ	I-4-a	1	1	2	16	4		1				1	1					3	28	38	31																								
6	リュウテン科	チョウセンサザ I	I-3-a	1		4	13	5	2		5	12	2		2	5	1		1		2	2	1	16	33	9	49																				
7		チョウセンサザ Iの蓋	I-3-a			4	3	1	1		5	2			1						2	2		13	7	1	20																				
8		カンキク	II-1-b				2				2	5			1	4						1			3	12	0	15																			
9		ヤコウガイ	I-4-a				4	9			1	12						1						2	0	8	24	8																			
10		ヤコウガイの蓋	I-4-a				1	4			1	2	11				2							2	1	7	17	8																			
11		コシカサザ I	I-2-a									1													1	0	1	1																			
12	アマオブネ科	アマオブネ	I-1-b							1															1	0	0	1																			
13	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8								1														1	0	0	1																			
14	トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	IV-5.6			1																			1	0	0	1																			
15	オニツノガイ科	オニツノガイ	I-2-c				1	1			1													2	1	0	4	3	4																		
16		クワノミカニモリ	I-1-a			1			1															1		2	1	0	3																		
17		ヨコワカニモリ	I-2-c																					1		0	1	0	1																		
18	ウミナシ科	ハナタリ	III-1-c								1													1		0	2	0	2																		
19		センニンガイ	III-0-c					1			2															0	2	1	2																		
20		ウミナシ	II-1-c				2																	1		0	3	0	3																		
21		イネウミナシ	III-1-c				3		1		2															0	6	0	6																		
22	スイショウガイ科	ムカサトモトガイ	I-2-c			1																			1	0	0	1																			
23		マガキガイ	I-2-c			1	6	1		1	1	16		1	2		1							1	1	4	30	2	34																		
24		ネジマガキガイ	I-2-c								1															0	1	0	1																		
25		スイショウガイ	II-2-c			1	2																		1	2	0	3																			
26		クモガイ	I-2-c				1					2					1									0	3	1	3																		
27		スイジガイ	I-2-c						1		1	1														0	1	2	1																		
28		オハクロガイ	II-2-c			8	4		2	2	5	1		1											1	16	8	0	24																		
29	タカラガイ科	ナツメドキ	I-2-a			1																				1	0	0	1																		
30		スソツメダカラ	I-2-a																						1		1	0	0	1																	
31		ハチジョウダカラ	I-2-a												1											0	0	1	0																		
32		ヤクシマダカラ	I-2-a													1		1								1	0	1	1																		
33		コモンダカラ	I-2-a						1						1											2	0	0	2																		
34		ハナマルユキ	I-3-a				1				3	1	2		1											5	2	2	7																		
35		キイロダカラ(フジダカラ)	I-1-a			2																			1		3	0	0	3																	
36		ハナヒラダカラ	I-1-a			1			2		1					4										1		9	0	0	9																
37		ヒメホシダカラ	I-2-a																							1	0	0	1																		
38		タカラガイ科不明																							1	0	0	1	0																		
39	タマガイ科	シロハリアキトミガイ	I-2-c				1				1															1	1	0	2																		
40		トラダマ	II-1-c								1															1	0	0	1																		
41	オキニシ科	シワクチナルトホラ	I-4-a									1														0	0	1	0																		
42	アッキガイ科	アカイガレイシ	I-3-a									1														0	0	1	0																		
43		ツノレイシ	I-3-a								1	1														1	1	0	2																		
44		シラクモガイ	I-3-a				1						1													1	1	1	2																		
45	オリエレヨフハイ科	イネヨフハイ	II-1-c				2																			2	0	0	2																		
46	エゾハイ科	ヒメホシダカラ	I-2-a				1																			1	0	0	1																		
47		シマハッコウハイ	II-1-c													1										2	0	3	0	3																	
48	イトマキホラ科	イトマキホラ	I-2-a								2	5	1													2	5	1	7																		
49		ナカイトマキホラ	I-2-a								1		1													1	0	1	1																		
50		リュウキュウツノマダガイ	I-3-a				1																		1		2	0	0	2																	
51		ツノマダモトキ	I-3-a				1																			1	0	0	1																		
52	フデガイ科	イモフデガイ	I-1-c								1															1	0	0	1																		
53	イモガイ科	クロミナシ	I-2-c										1			2										0	2	1	2																		
54		クロフモトキ	I-2-c								1																1	0	0	1																	
55		マダライモ	I-1-a				1		2			1														2	2	0	4																		
56		サキカタイモ	I-1-a				3				1															4	0	0	4																		
57		ヤナキシホライモ	I-2-a								1	1														1	1	0	2																		
58		アラレイモ					2																			2	0	0	2																		
59		ゴマフイモ																								1	0	0	1																		
合計						2	1	0	39	67	30	9	5	4	37	66	67	3	4	0	1	4	2	0	1	1	13	16	4	1	2	2	0	1	0	1	0	0	10	16	5	116	183	115	299		
個体数						3			106		14			103		7		5						1			29		3															26		299	299

*表採の中には壁、攪乱、ケーブル砂層、トレンチを含む。

貝出土状況

貝種名	棲息場所	表採			第1層			第2層						第3層						不明			合計					個体数																							
		完形		殻頂	破片	完形		殻頂	破片	完形		殻頂	破片	完形		殻頂	破片	完形		殻頂	破片	完形		殻頂	破片	完形			殻頂	破片																					
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R																					
ニエガイ	I-2-a								1																1			0	2	0	0	0	2																		
ユウキウサルホウ	II-2-c																											0	0	0	1	2	1																		
メワケガイ	II-2-c											1																0	0	0	1	0	1																		
ロチヨウガイ	I-4-a		1	4						1		1	1															1	1	4	1	2	5																		
ソガイの一種	I-2-a			1						1		1															1	1	0	3	0	1	4																		
セマガキ	I-2-a							1																				1	0	0	0	0	1																		
ヲキツガイ	II-2-c	2	4	3	6	1				2																		3	2	2	3		11	13	14	15	3	28													
クサル	I-2-a	1																																1	0	0	0	0	1												
ユウキウサルホウ	II-2-c																												0	0	0	0	1	0																	
ワラガイ	II-2-c																										1	1	0	0	0	0	0	1	0																
ヤコウ	I-2-c																												0	0	0	0	1	0																	
メジヤコ	I-2-a			1	1					1																			0	0	3	1	2	3																	
レジヤコ	I-2-c																												0	0	1	2	9	2																	
不明																																		1	0	0	0	0	2	0											
ソハマケリ	I-1-c										1	2																							1	2	0	0	0	2											
スオガイ	II-1-c		1																																0	1	0	0	0	1											
レナソシ	III-0-c			2																															0	0	4	0	1	4											
ノメガイ	II-1-c																																		3	0	0	0	0	3	0										
ソシイナミガイ	II-1-c								1																											0	0	0	1	0	1										
ラスシケマンガイ	III-1-c		1		1																														1	2	1	1	2	2	4	4	4	2	8						
ルオミナエシ	I-2-a																																			1	0	0	0	1	0	1									
イノカガミガイ	II-1-c	1	1																																1	2	0	0	0	2											
ヲオガイ		12	10	1	1																														15	12	3	2	1	18											
トコエシ	II-2-c																																		1	0	1	0	0	0	1										
キシソミガイ	II-1-c				1	1																													1	2	2	2	1	4											
ヨウセンハマケリ	II-1-c	2	1	3	2	1																													3	4	4	4	6	5	6	10	7	7	15						
ヲサガイ																																				1	0	0	0	0	1										
ナスマダレガイ類の一種																																				1	0	0	0	0	1										
ユウガイ																																					1	0	0	0	1	0									
合計		18	19	15	12	7	1	0	2	1	1	7	11	14	10	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	5	2	7	3	3	1	2	2	1	0	10	12	7	9	13	43	46	48	38	39	108
個体数		42			4			27			1			2			13			4			23			116					108																				

*表採の中には壁、攪乱、ケーブル砂層、トレンチを含む。

圖 版



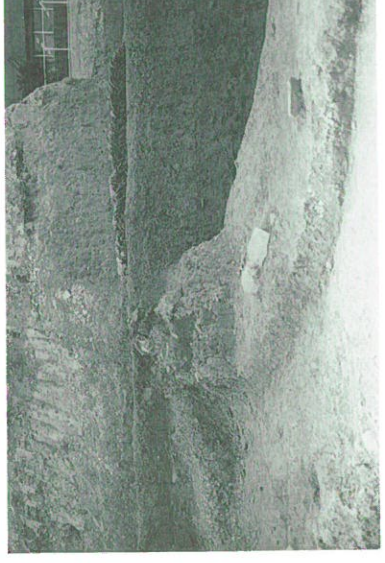
図版 1 作業風景



図版 2 発掘の状況



図版 3 作業風景



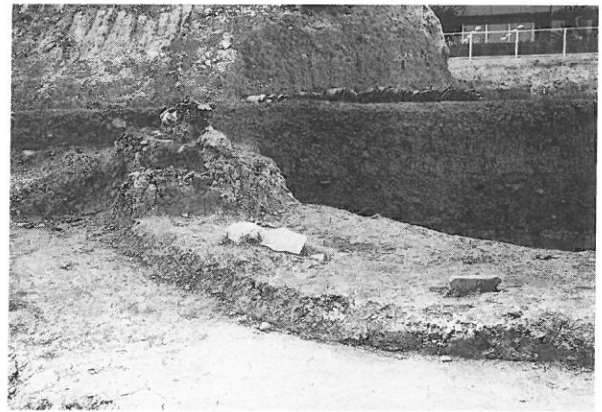
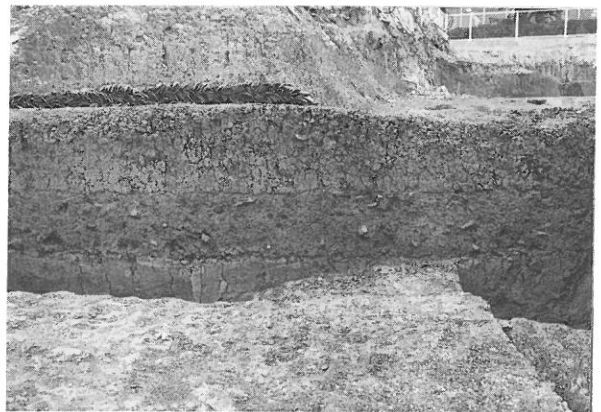
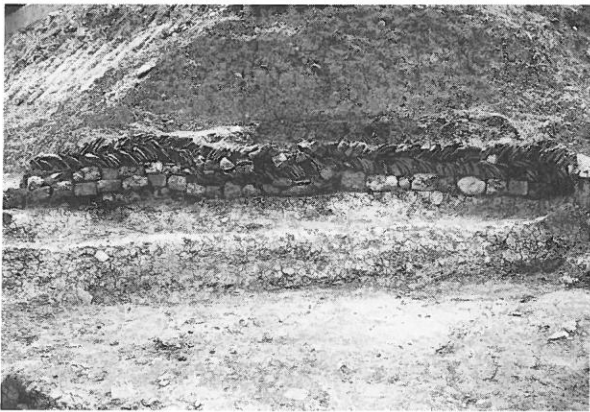
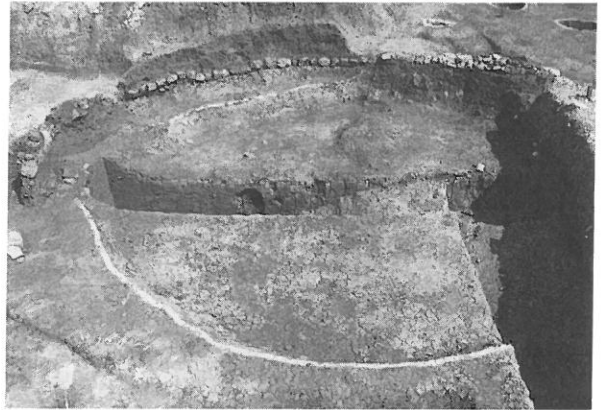
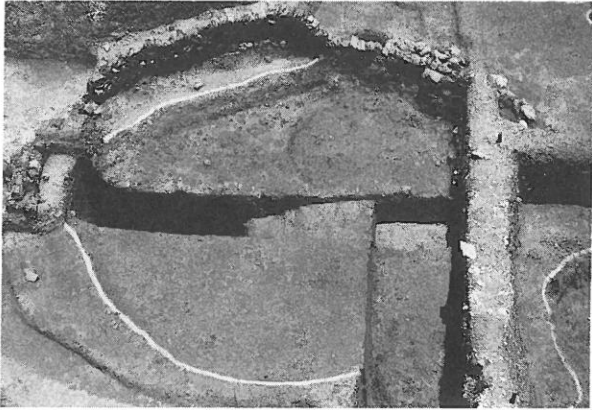
図版4 層序 上：二一31～33東壁 中：ネ一31～33東壁 下：ヌ～ノ一33南壁



図版5 遺構の全体状況



図版 6 遺構の検出状況



図版7 張床土壇



図版 8 ピット群検出状況



図版9 土取り場跡の検出状況



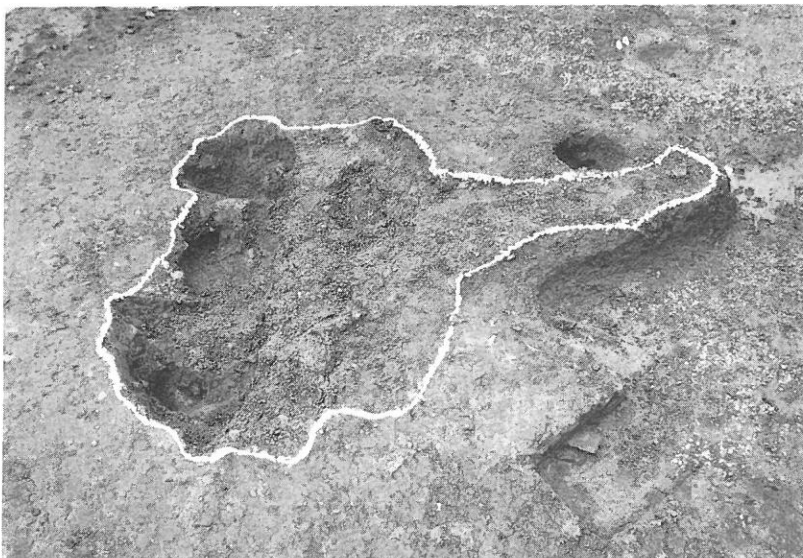
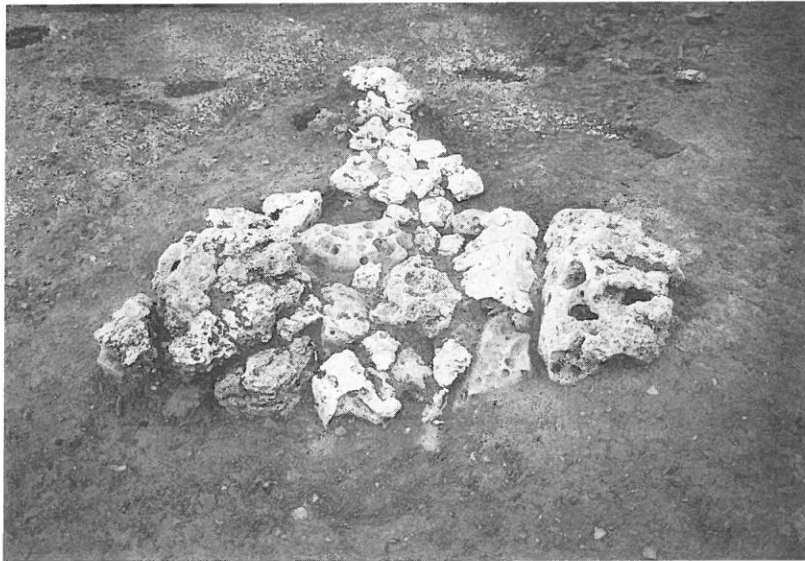
図版10 砂利敷遺構の状況



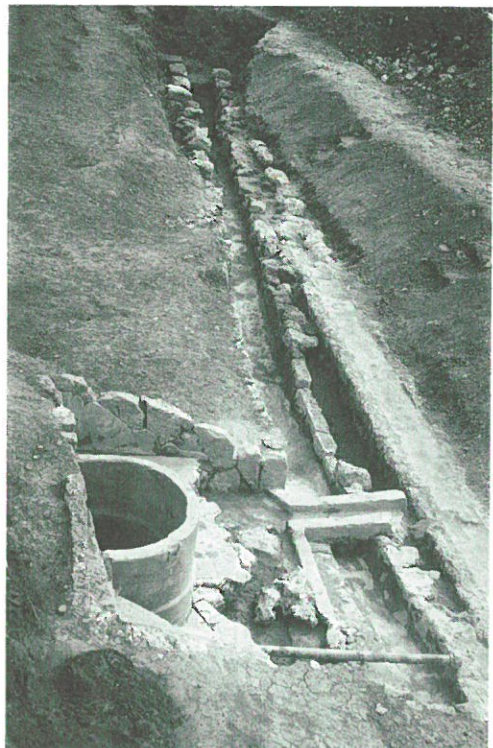
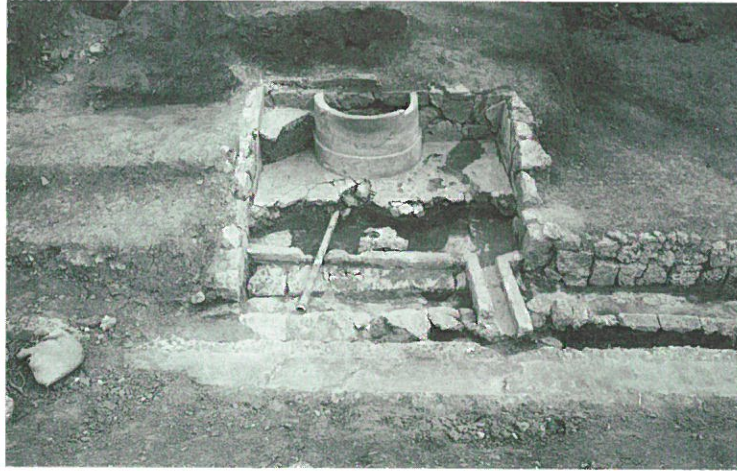
図版11 瓦敷遺構の状況



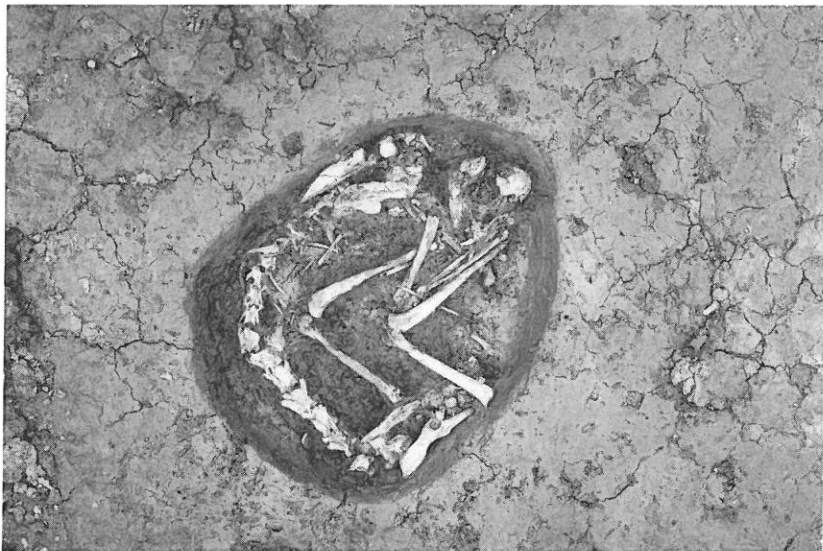
図版12 溝状遺構



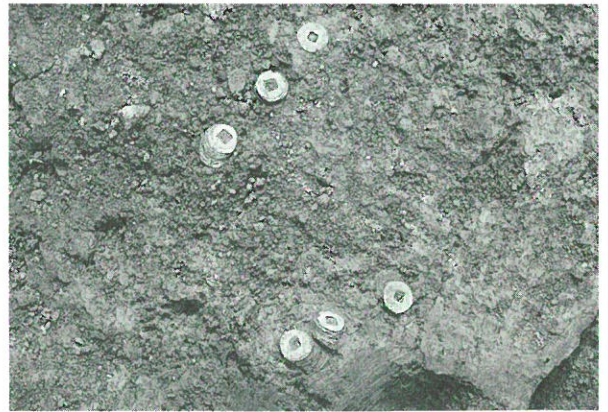
図版13 敷石遺構の状況



図版14 B区井戸の状況



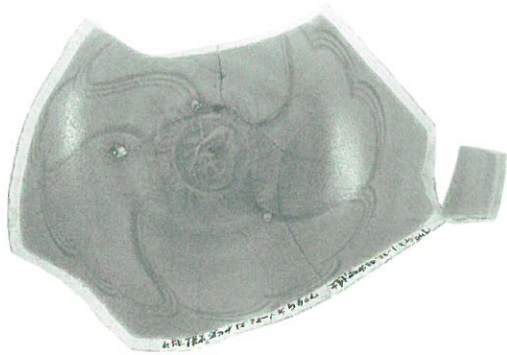
図版15 B区ネコ検出状況



図版16 遺物出土状況



图版17 青磁 1 (碗)



17

18



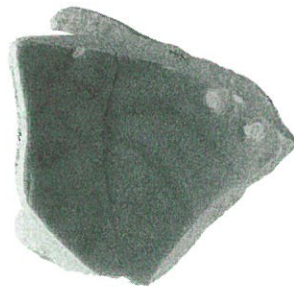
13



15



14

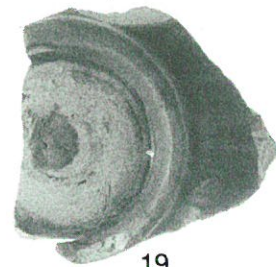


20

12



16



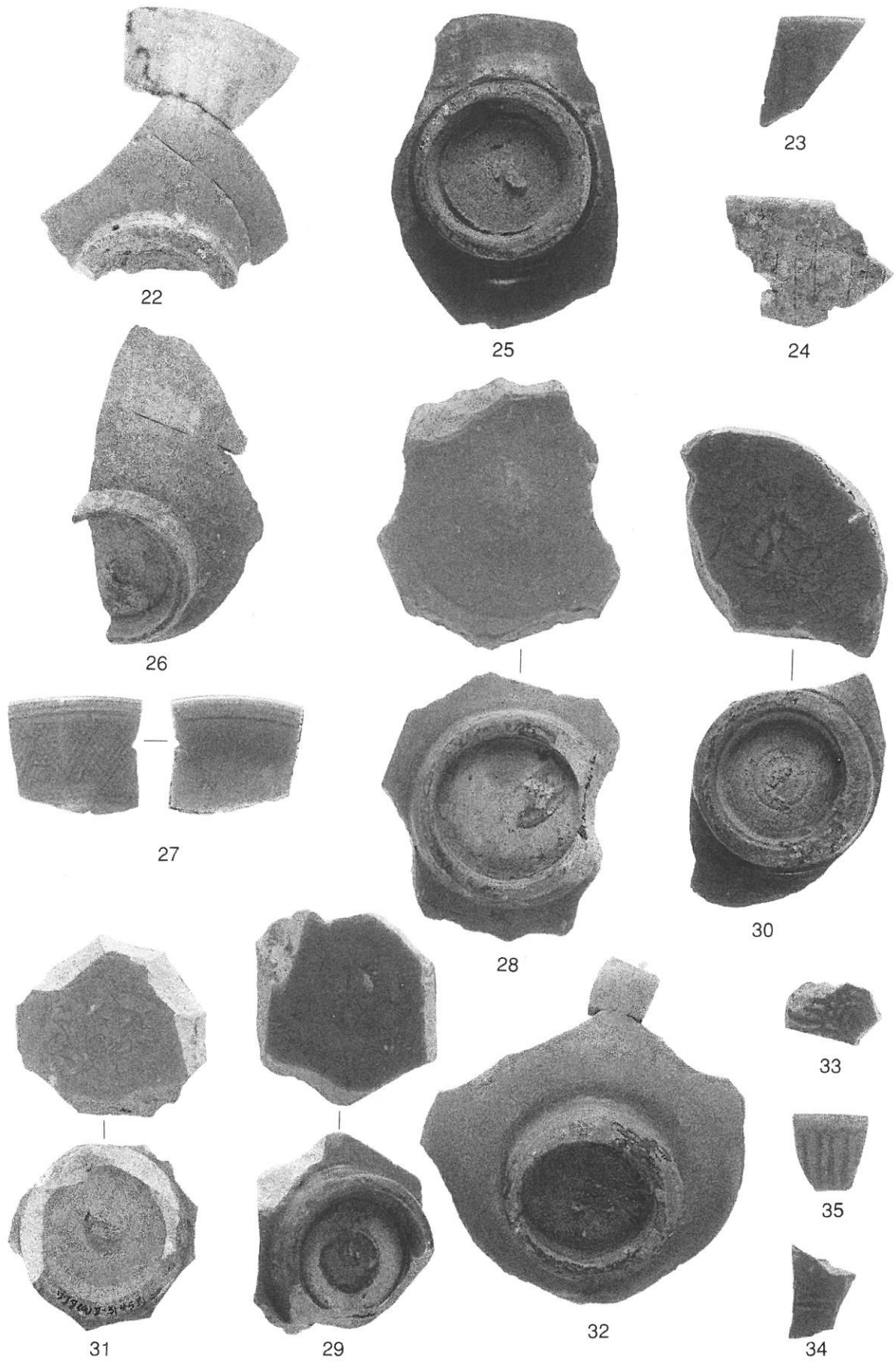
19



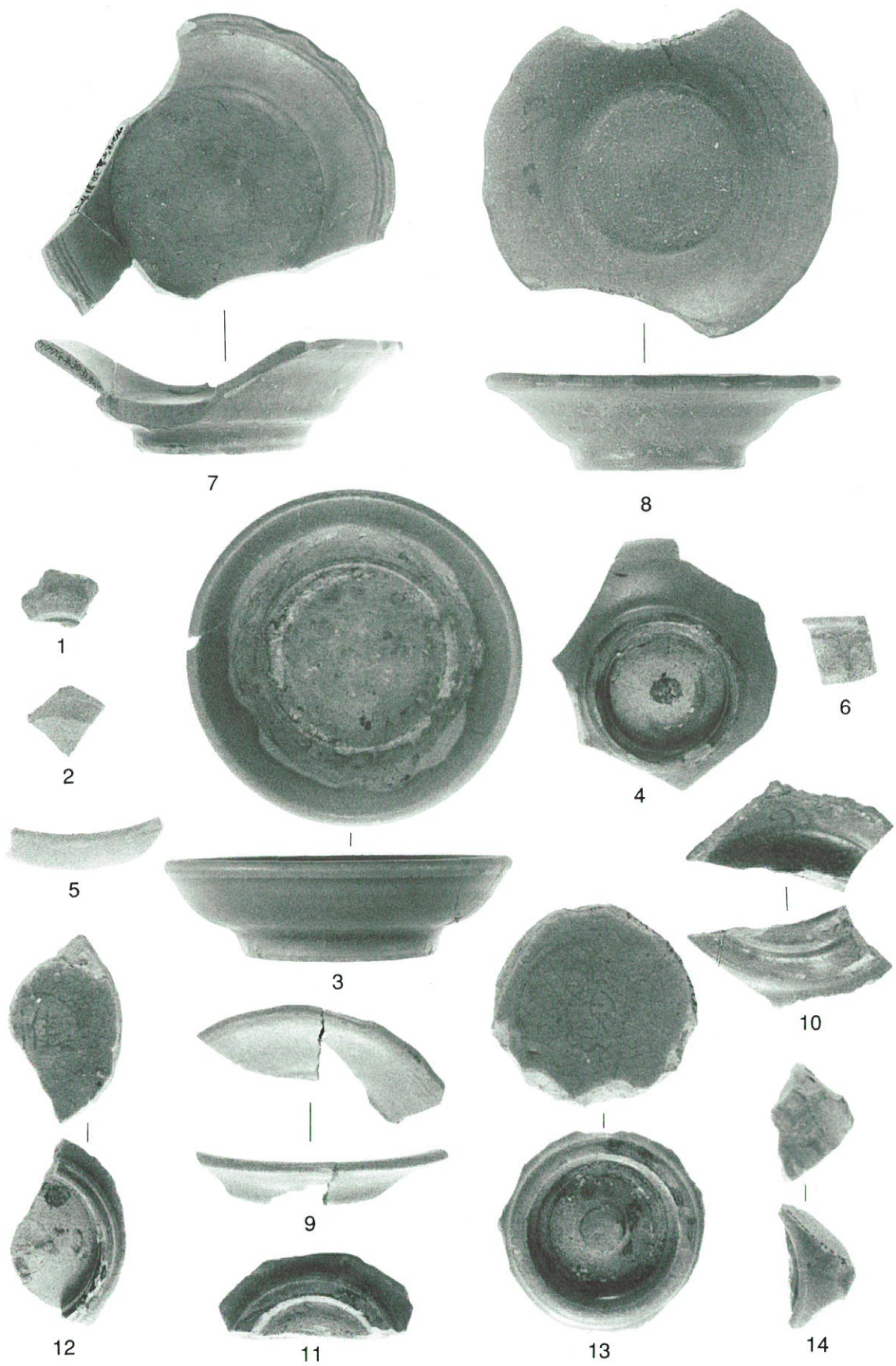
20'



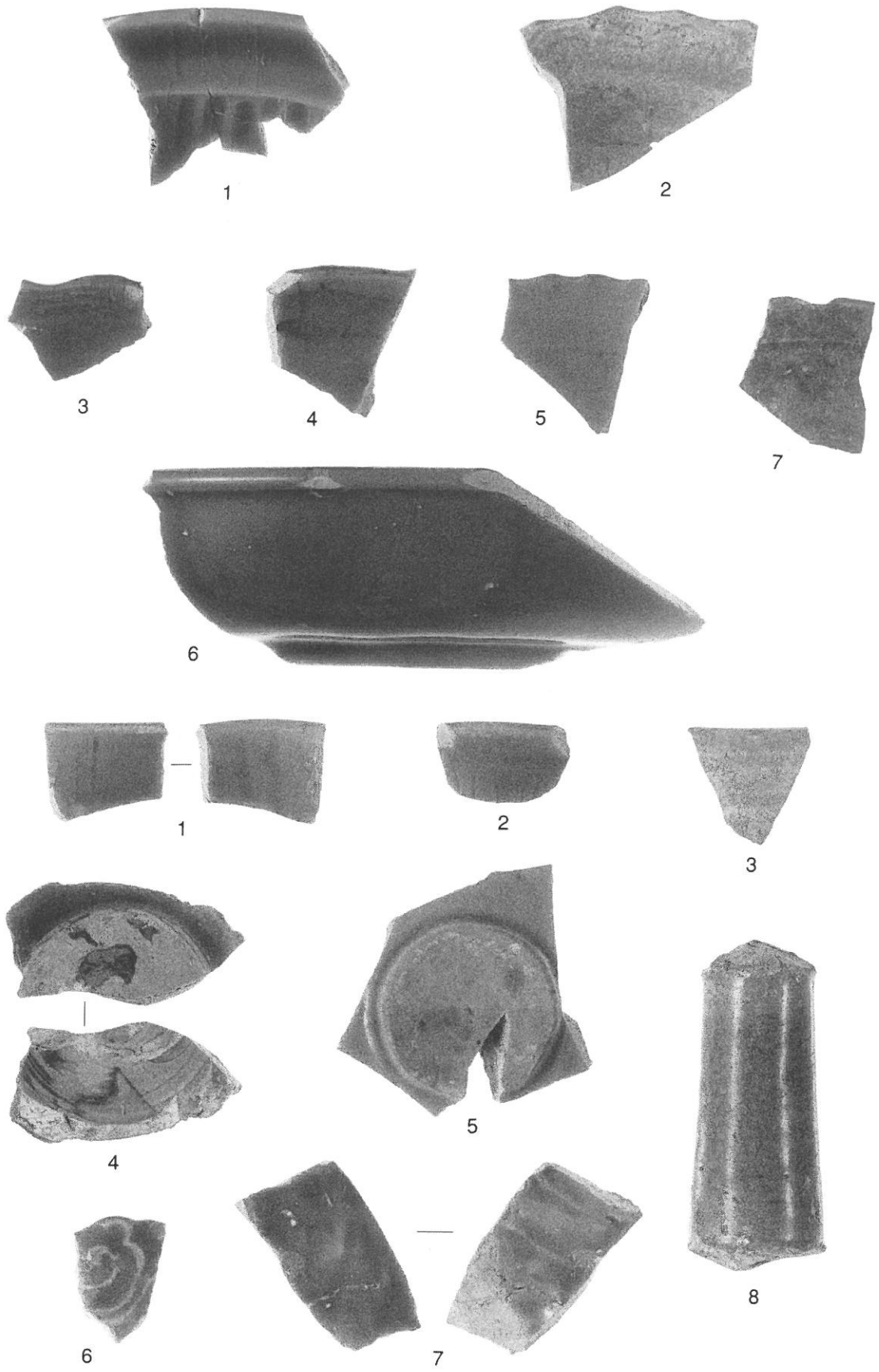
21



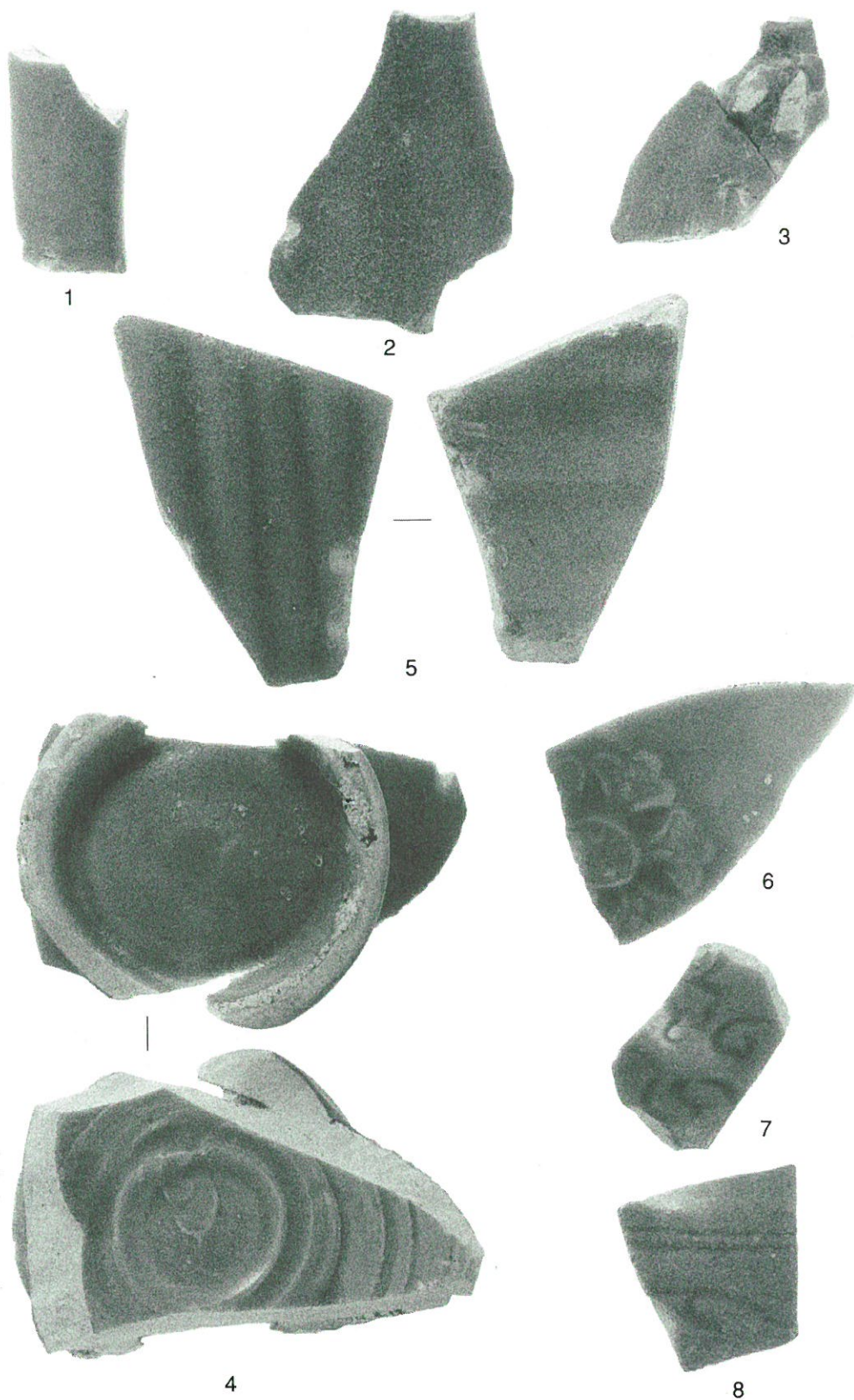
图版19 青磁 3 (碗)



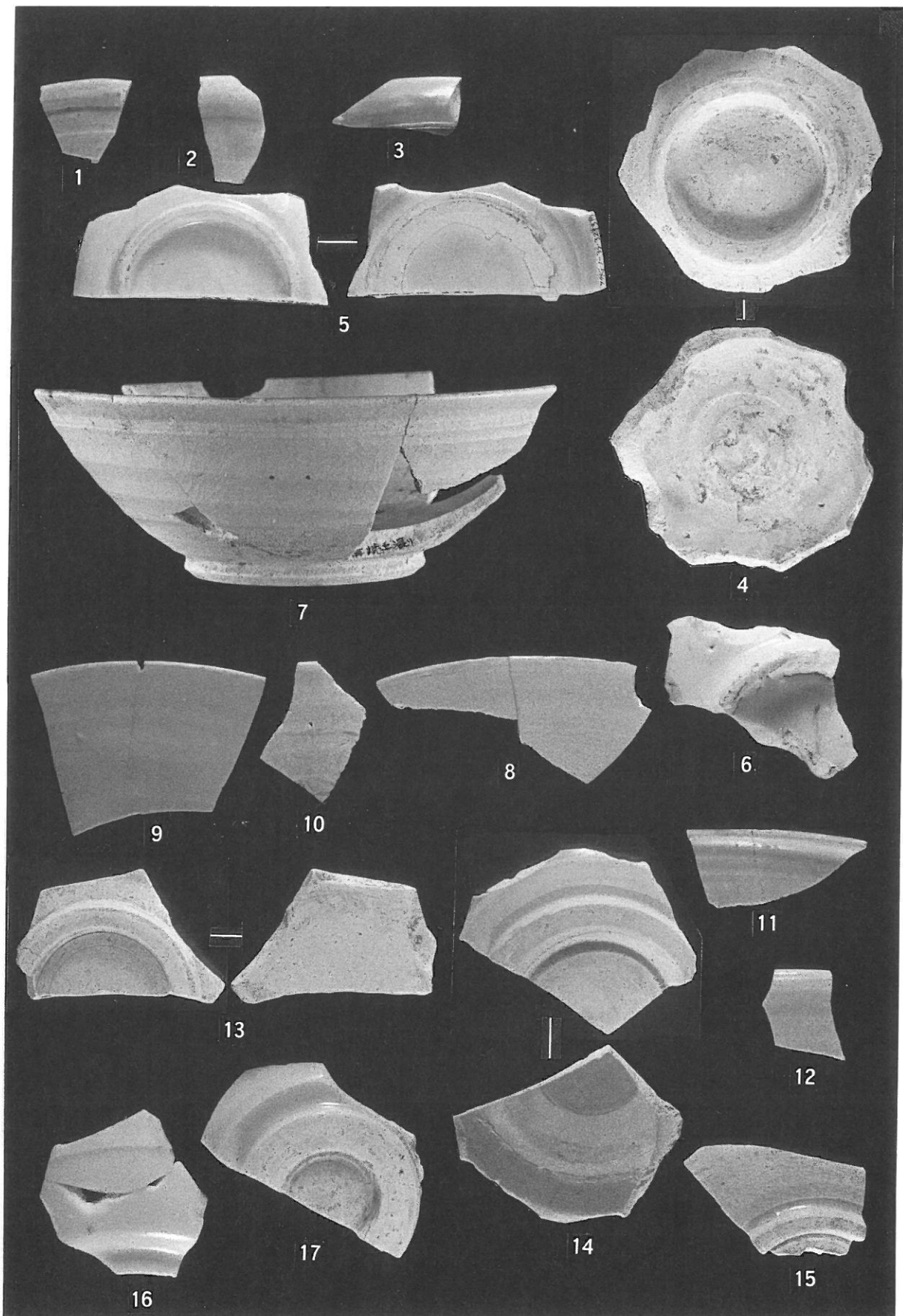
图版20 青磁 4 (Ⅲ)



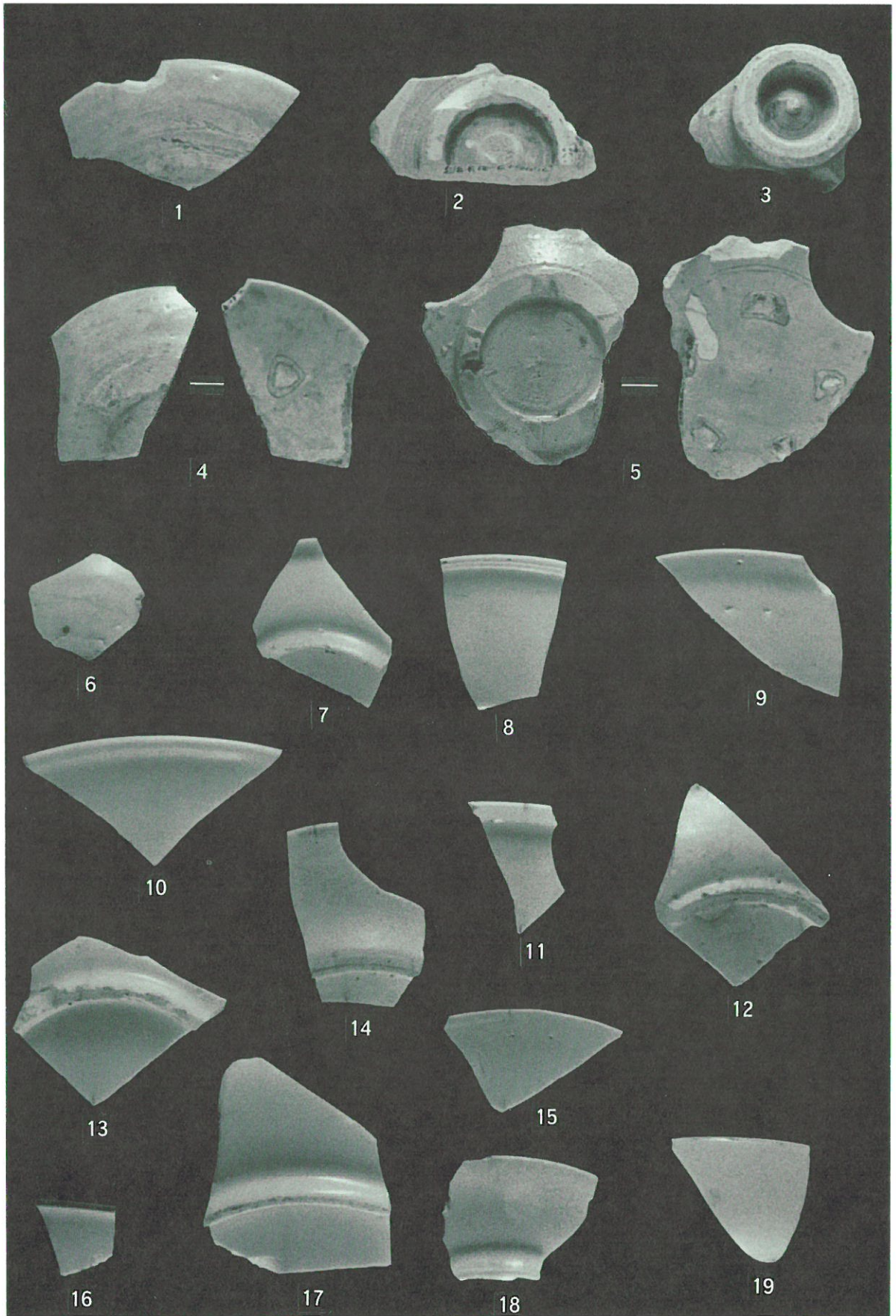
図版21 青磁 5・7 (盤・香炉・その他)



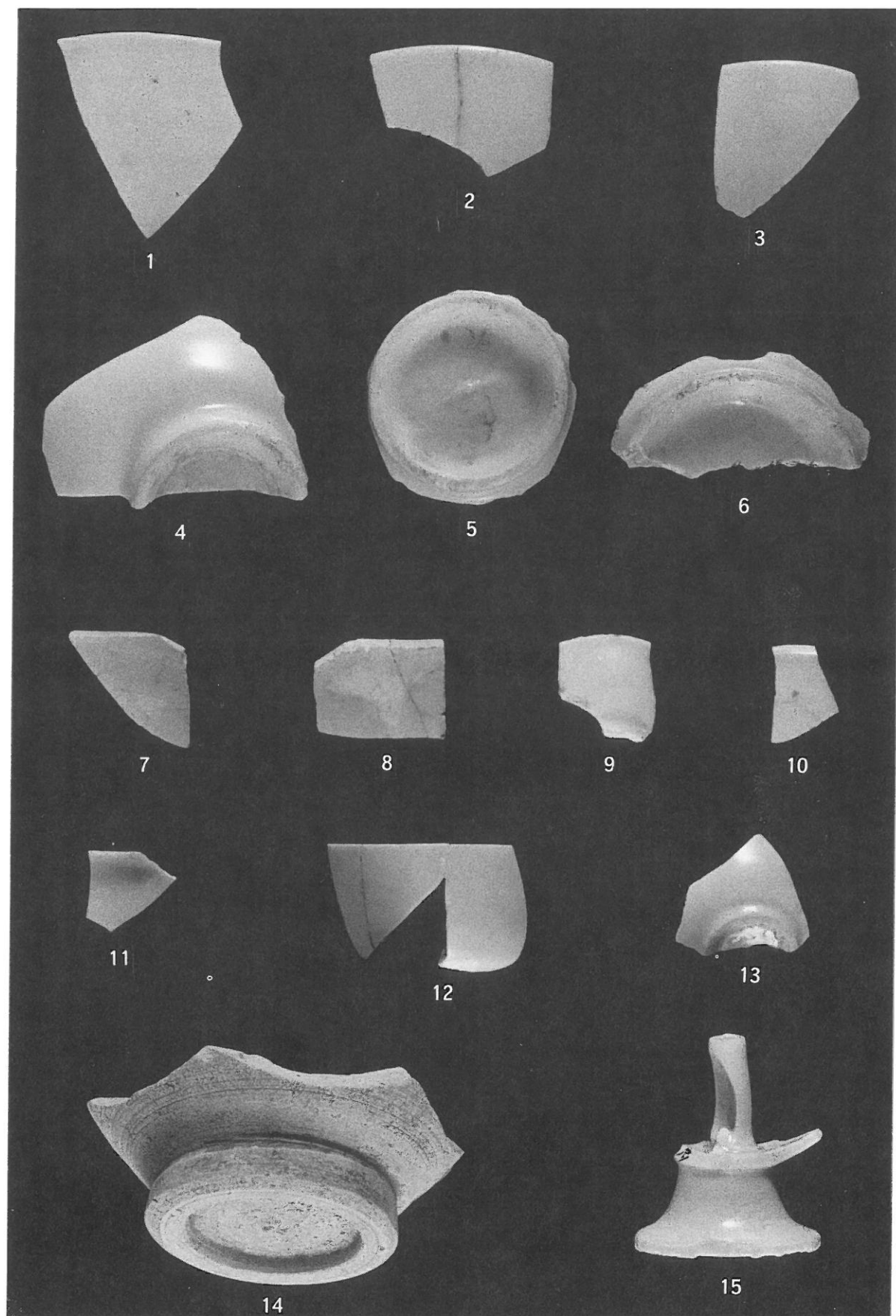
图版22 青磁 6 (袋物)



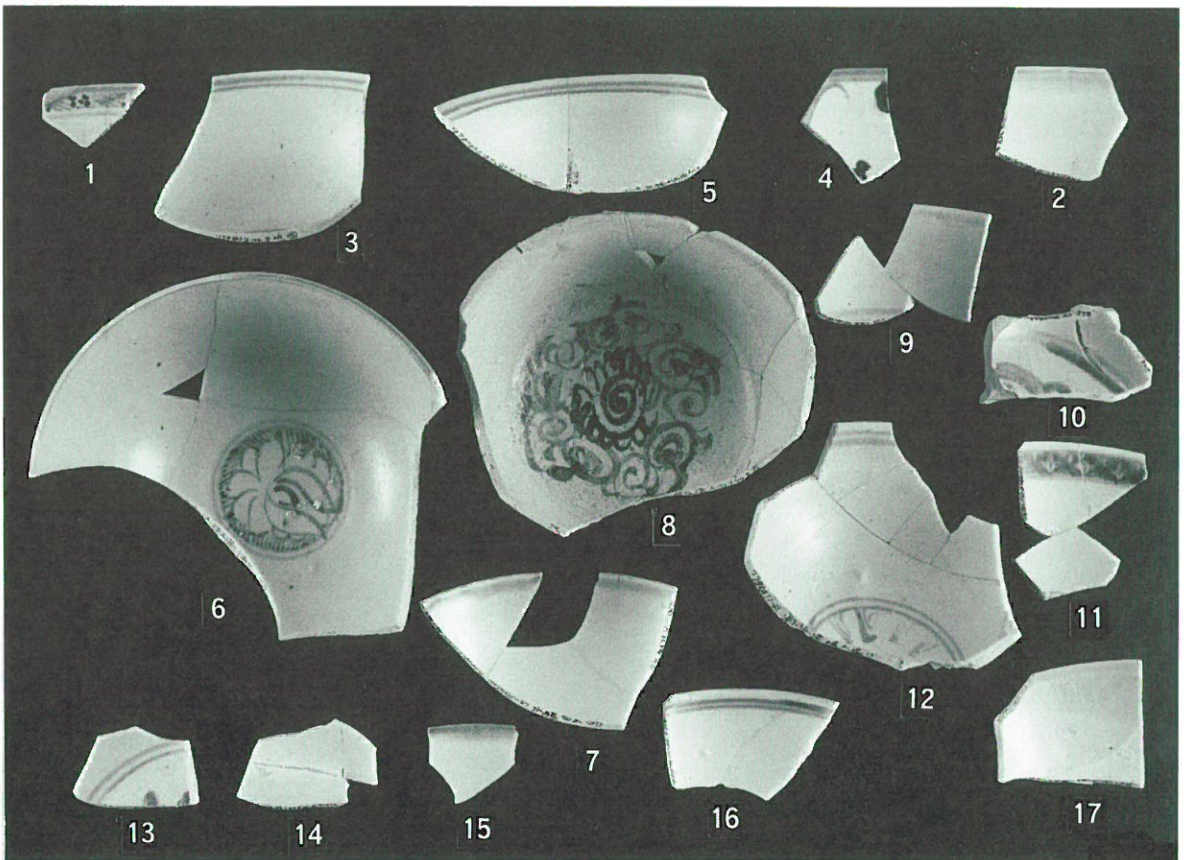
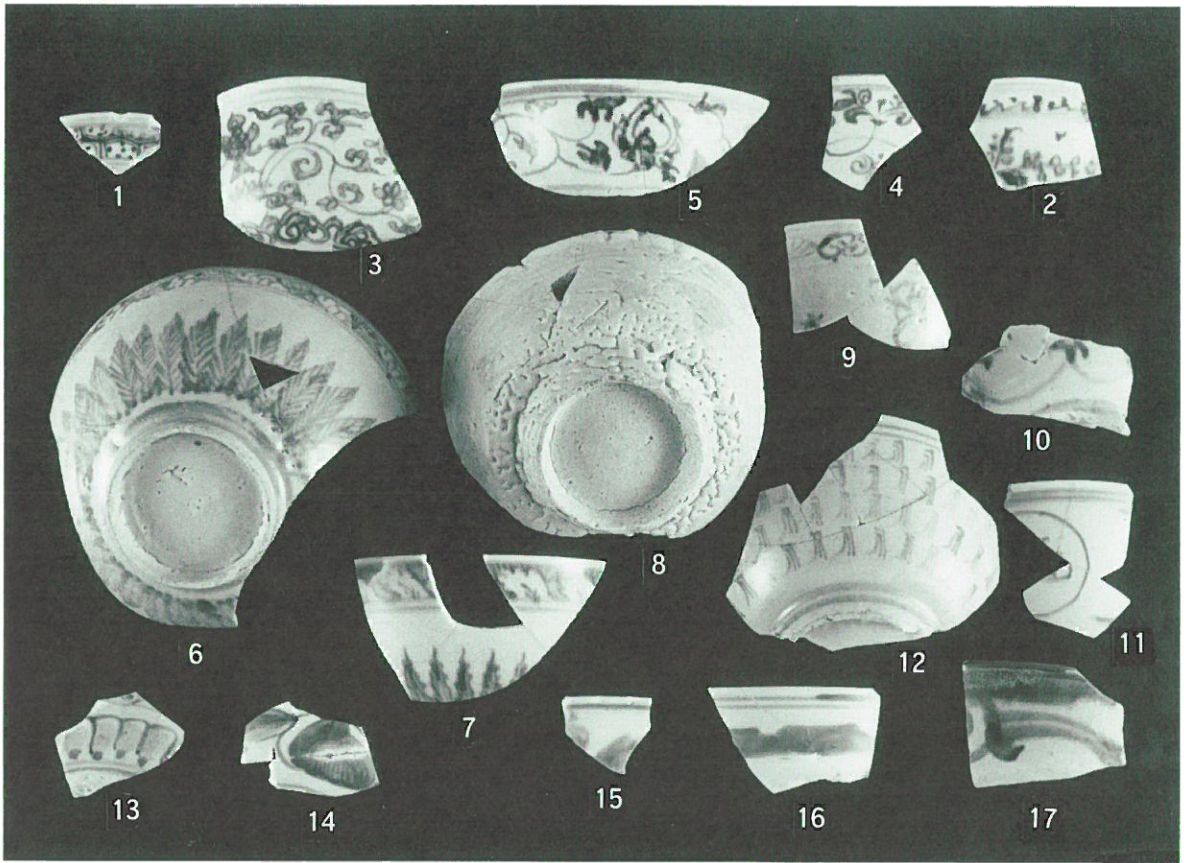
图版23 白磁 1 (碗)



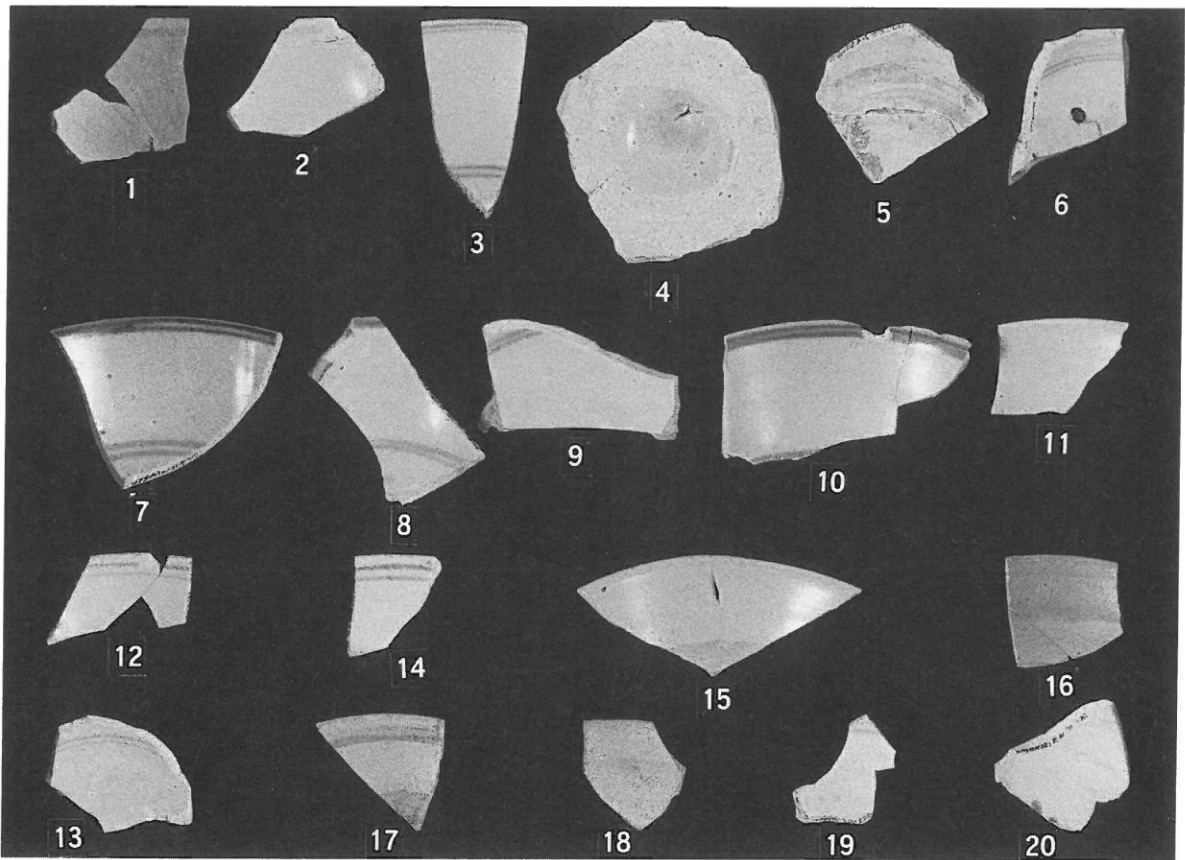
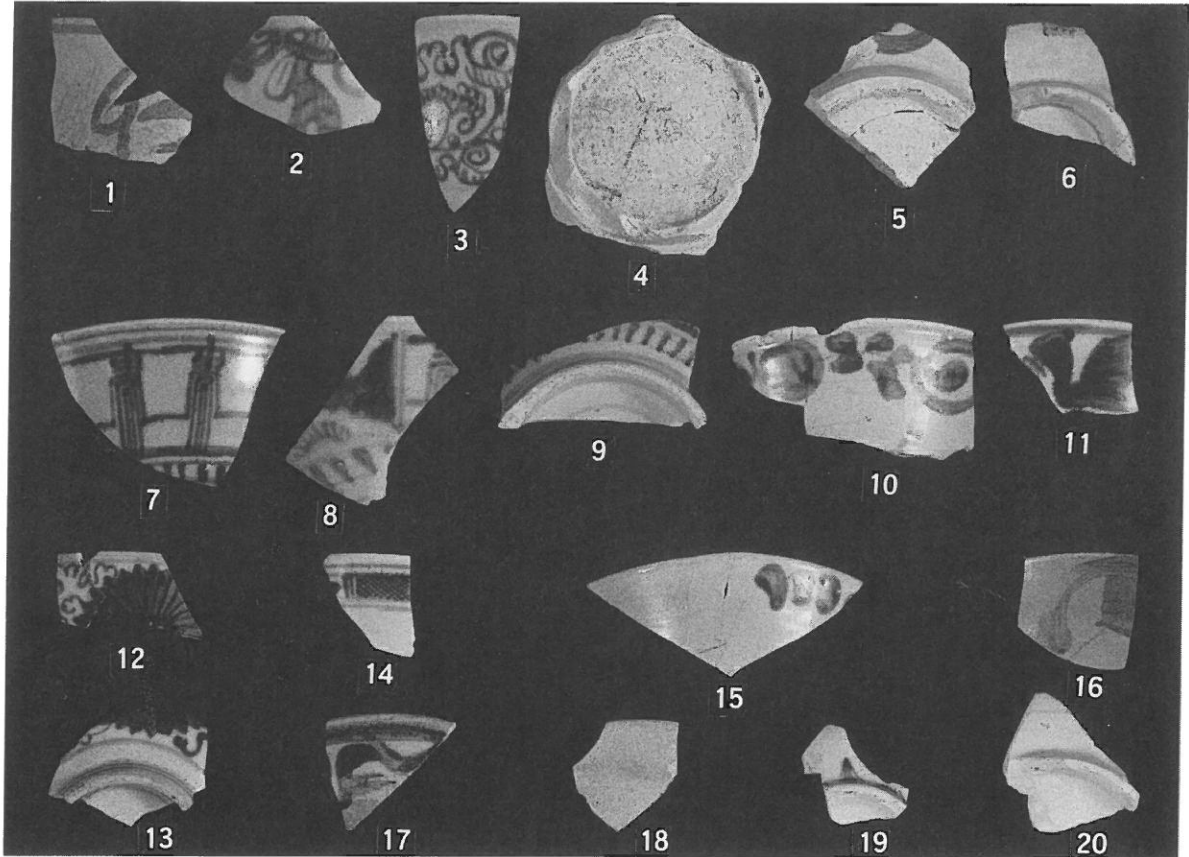
图版24 白磁 2 (Ⅲ)



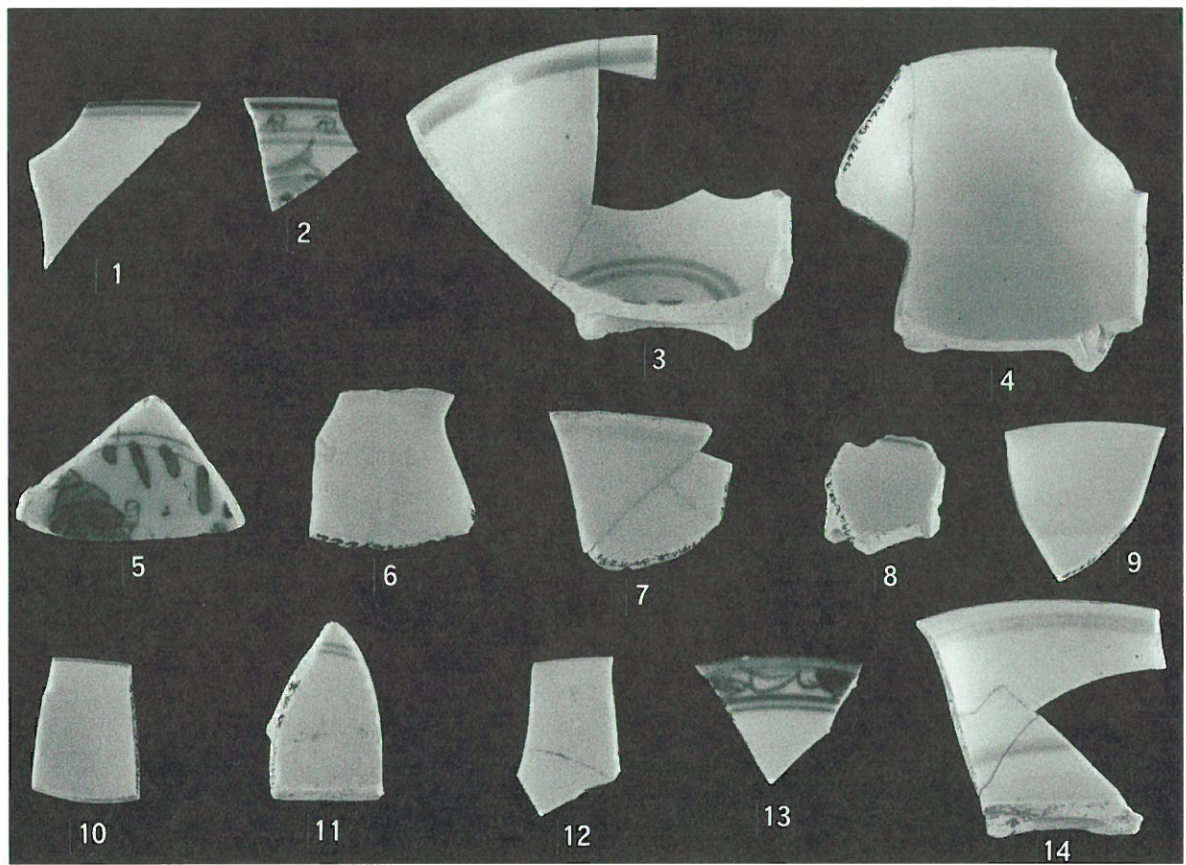
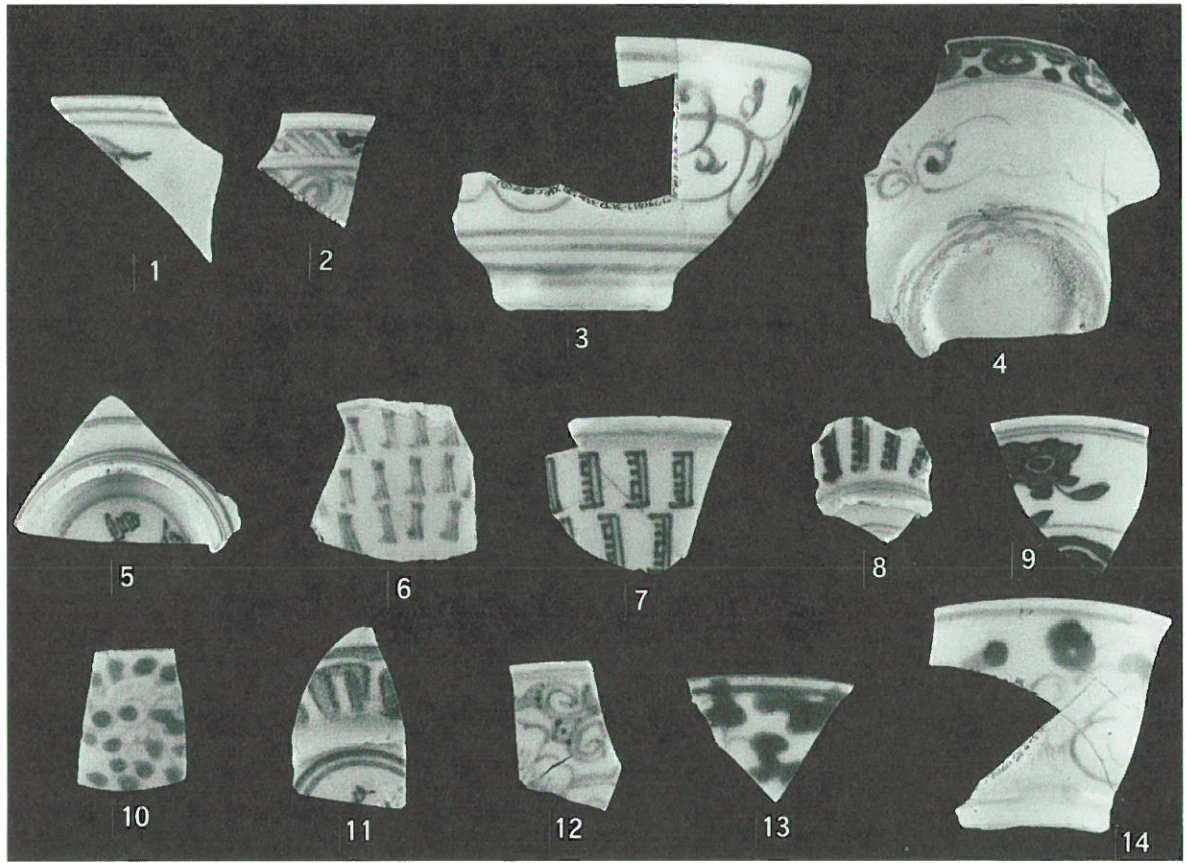
图版25 白磁 3 (小碗·杯·袋物·灯明具)



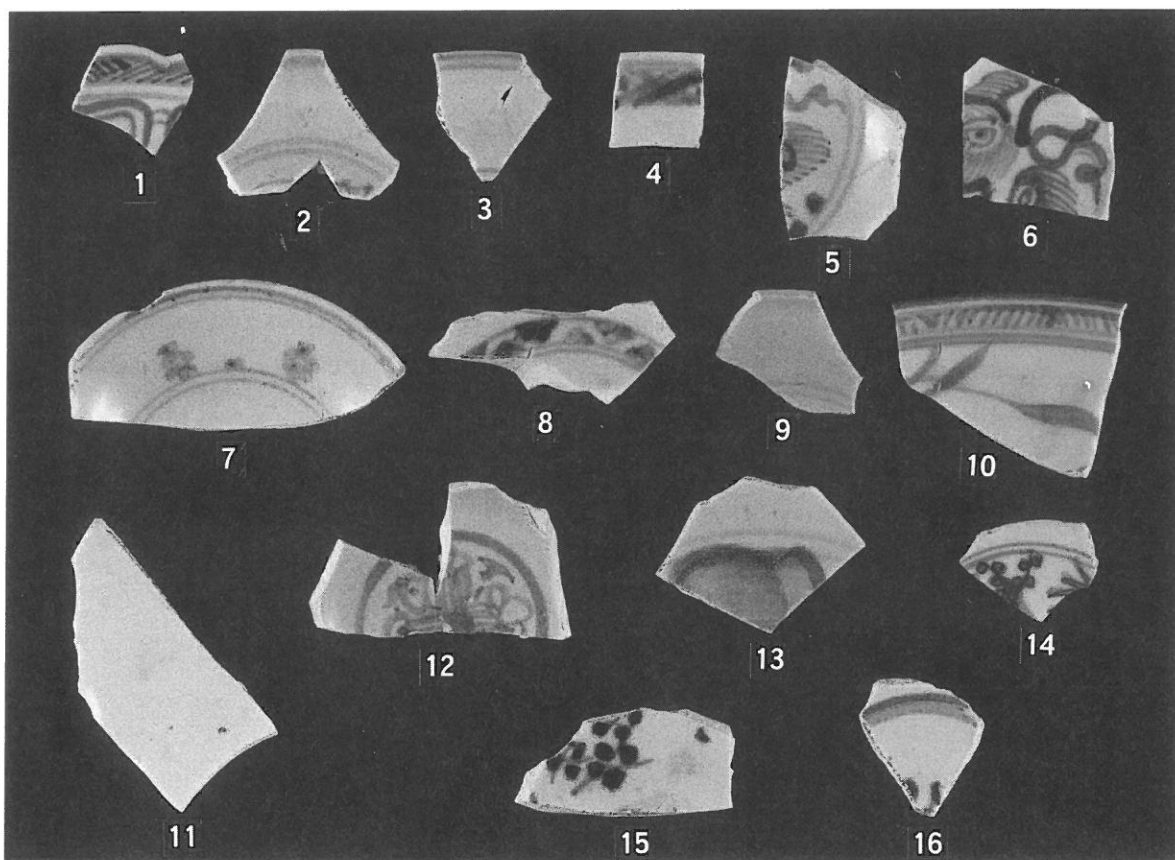
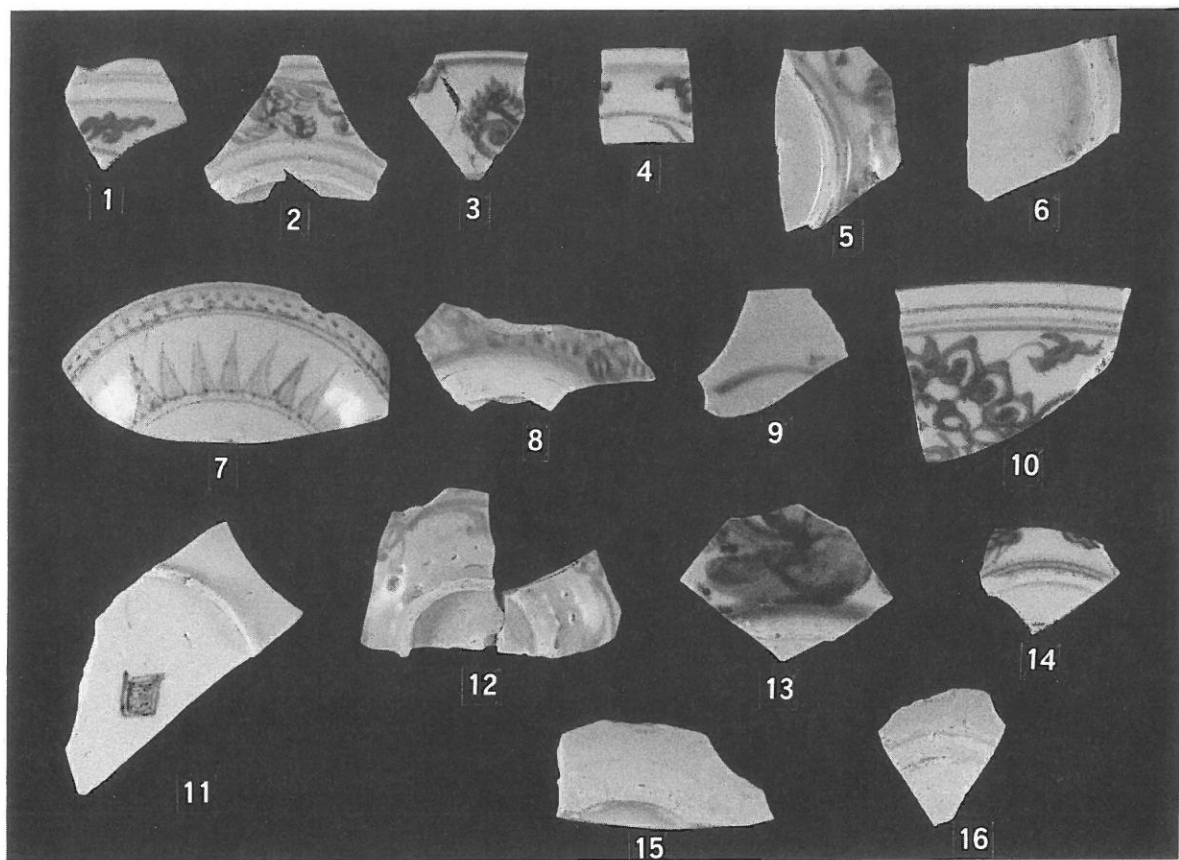
図版26 染付 1 (碗) (上:外面、下:内面)



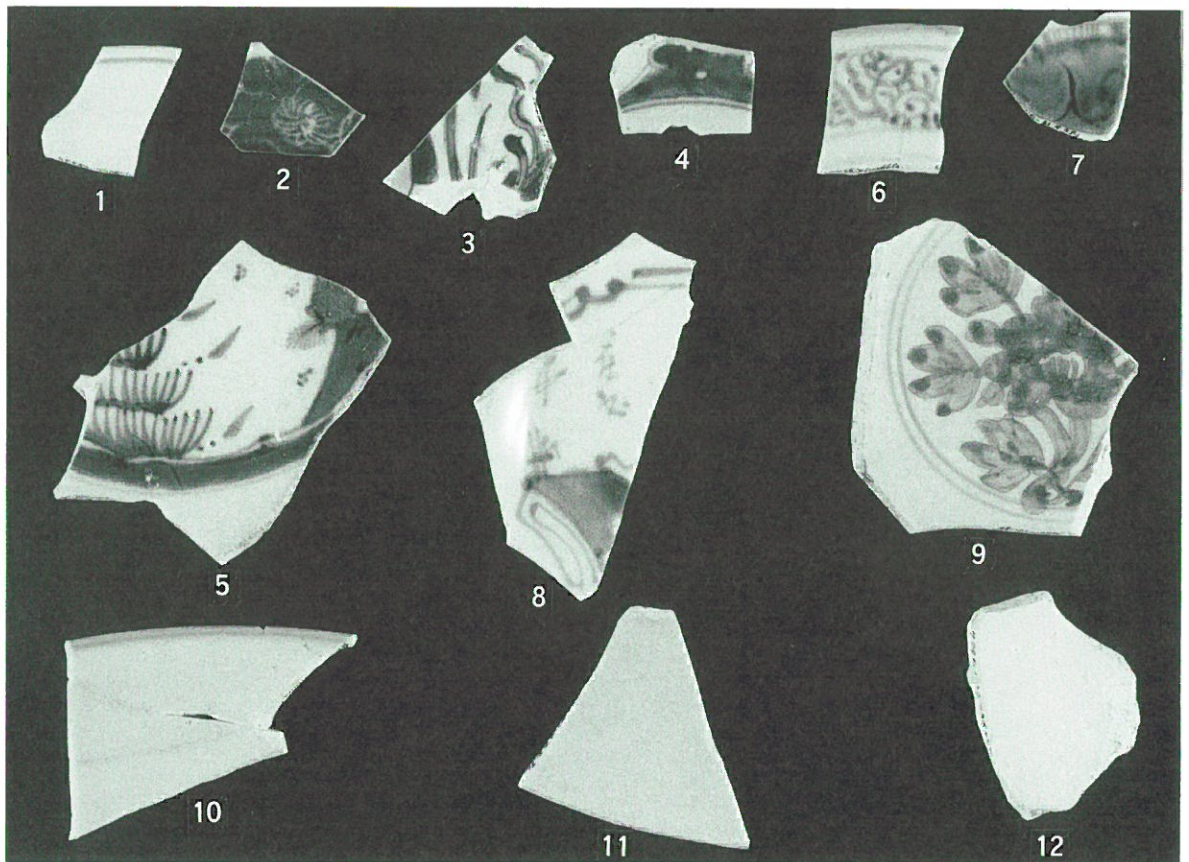
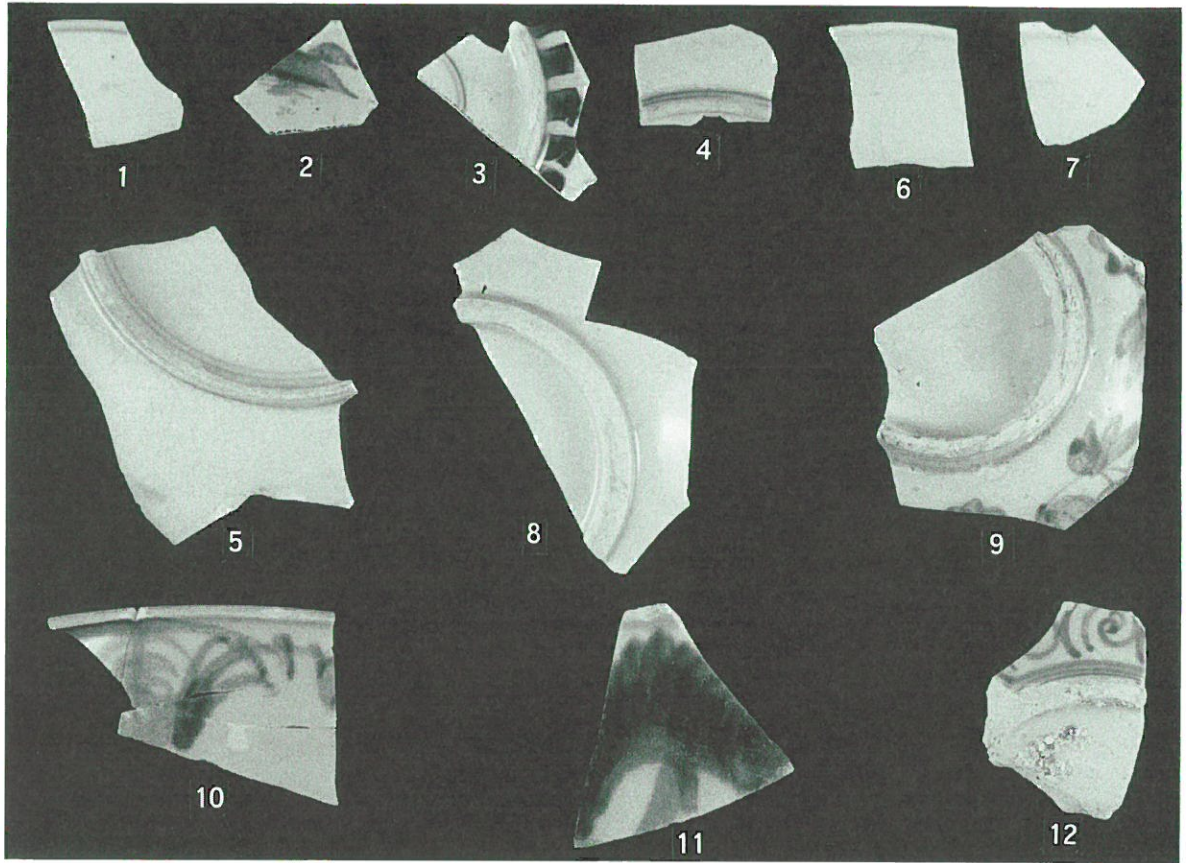
図版27 染付 2 (碗) (上：外面、下：内面)



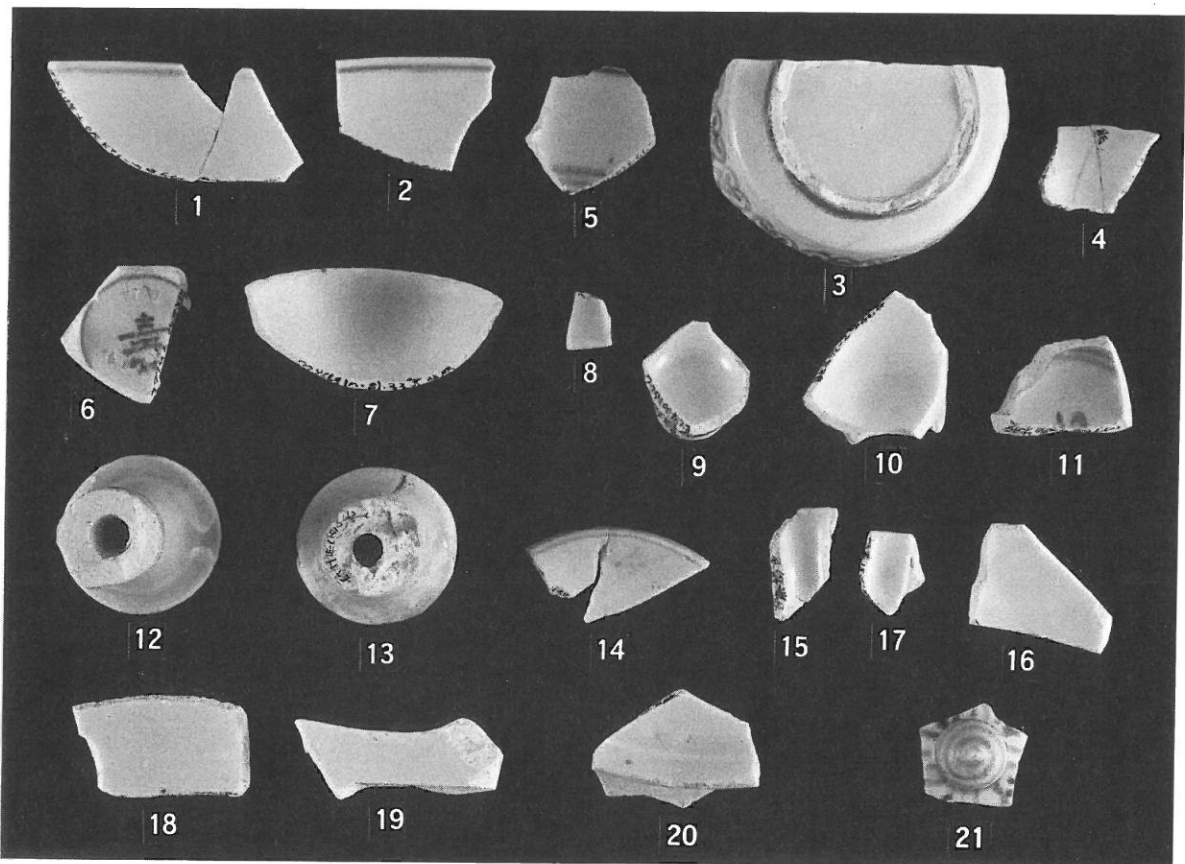
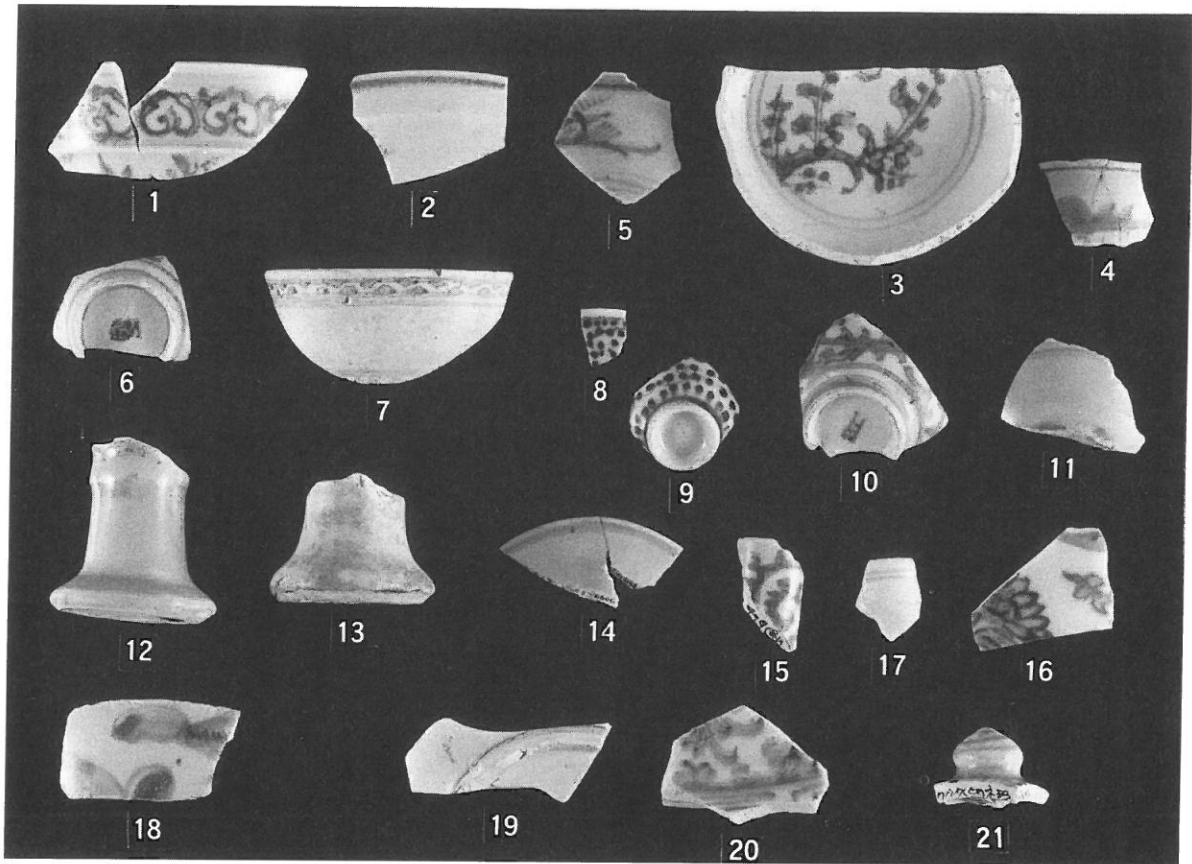
图版28 染付 3 (小碗) (上:外面、下:内面)



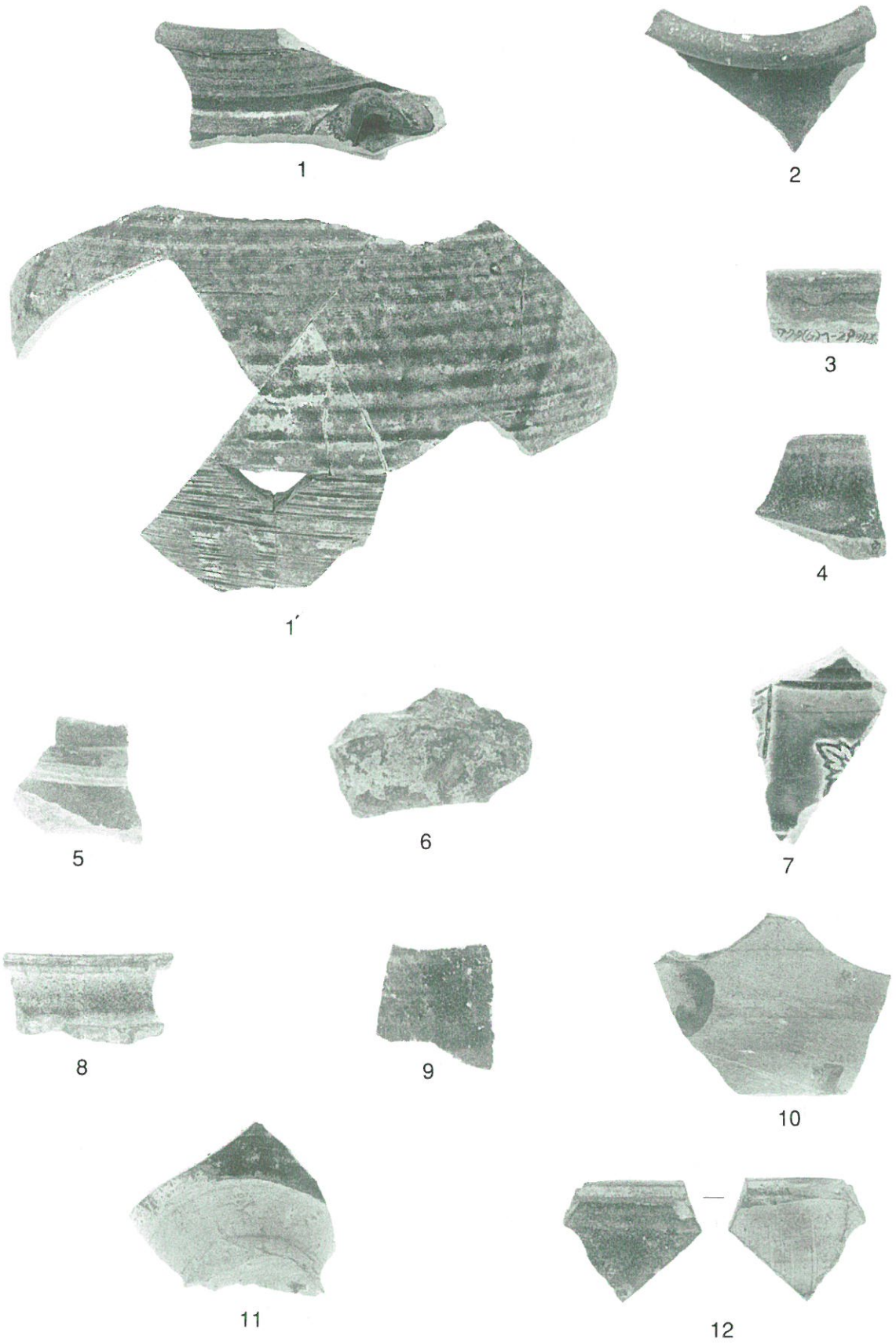
図版29 染付 4 (皿) (上：外面、下：内面)



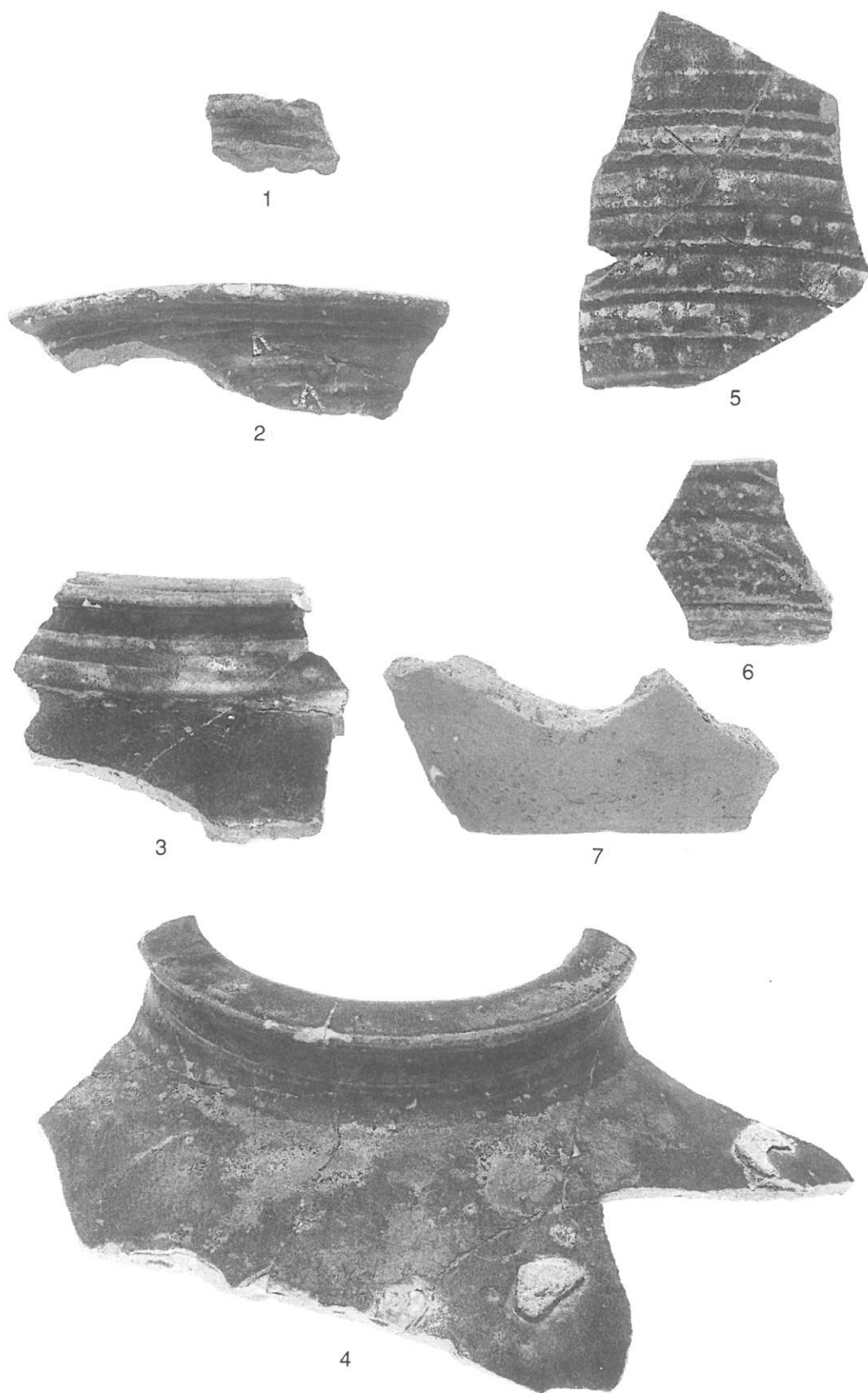
図版30 染付 5 (皿・鉢・袋物) (上:外面、下:内面)



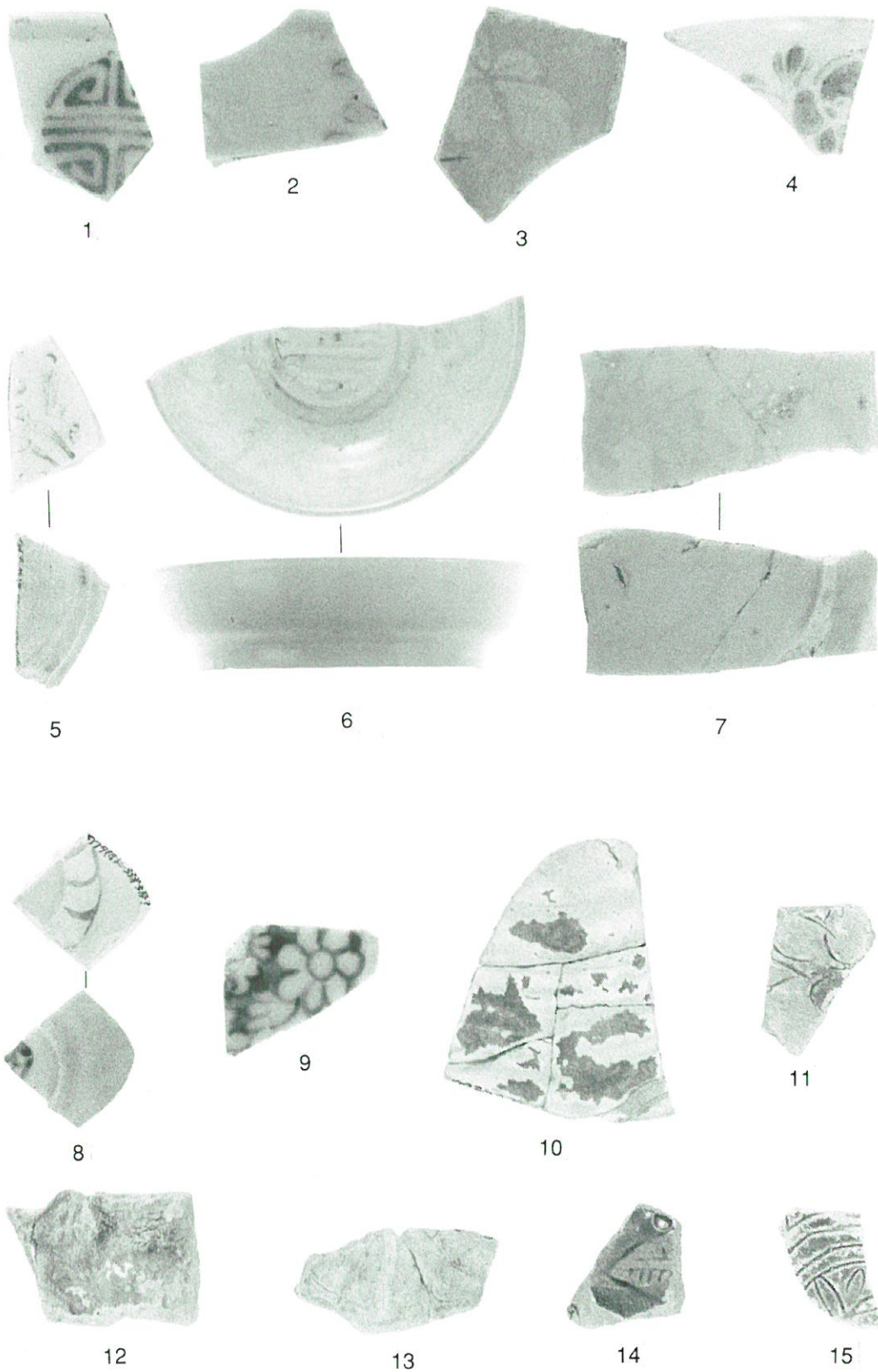
図版31 染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋) (上：外面、下：内面)



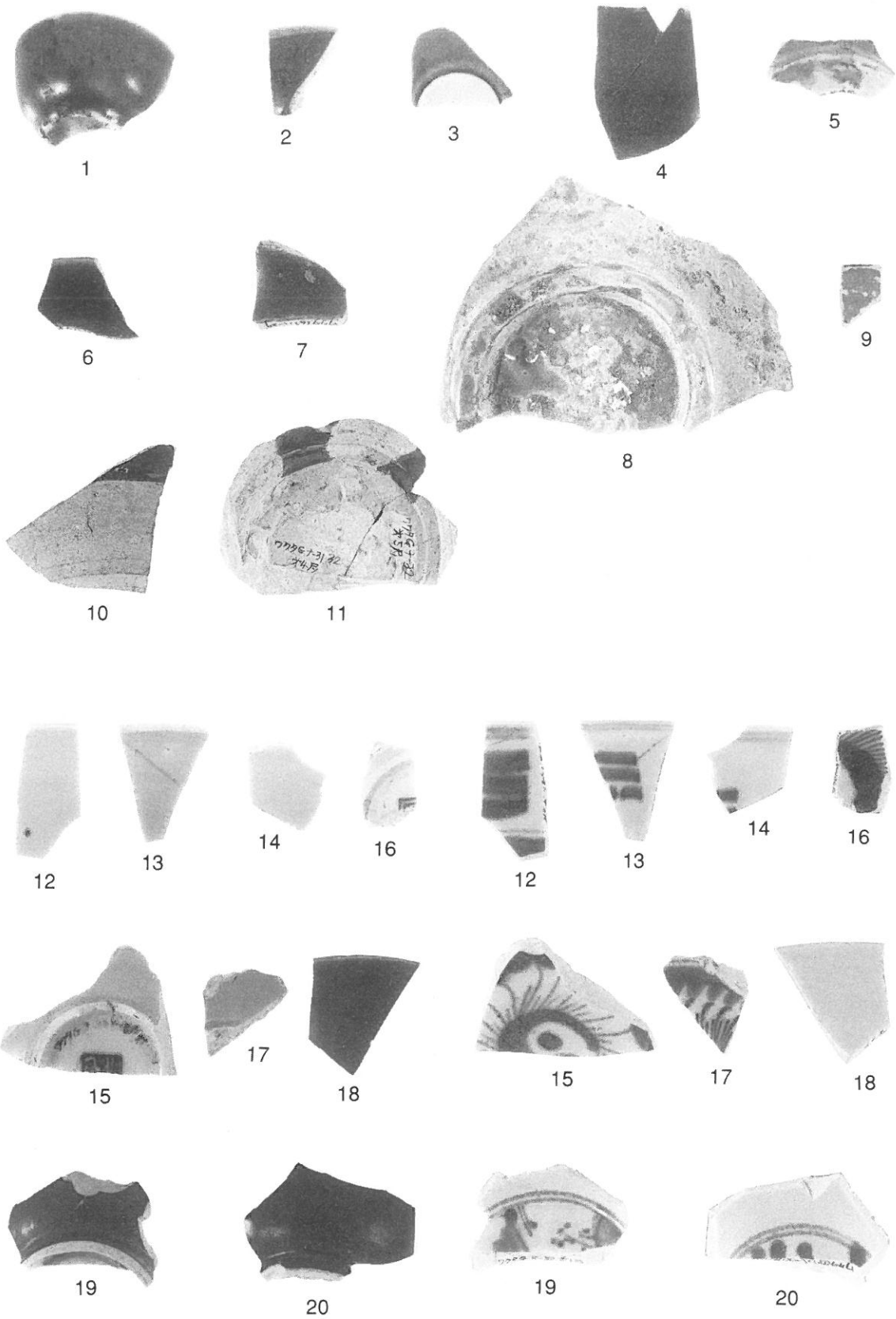
图版32 褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)



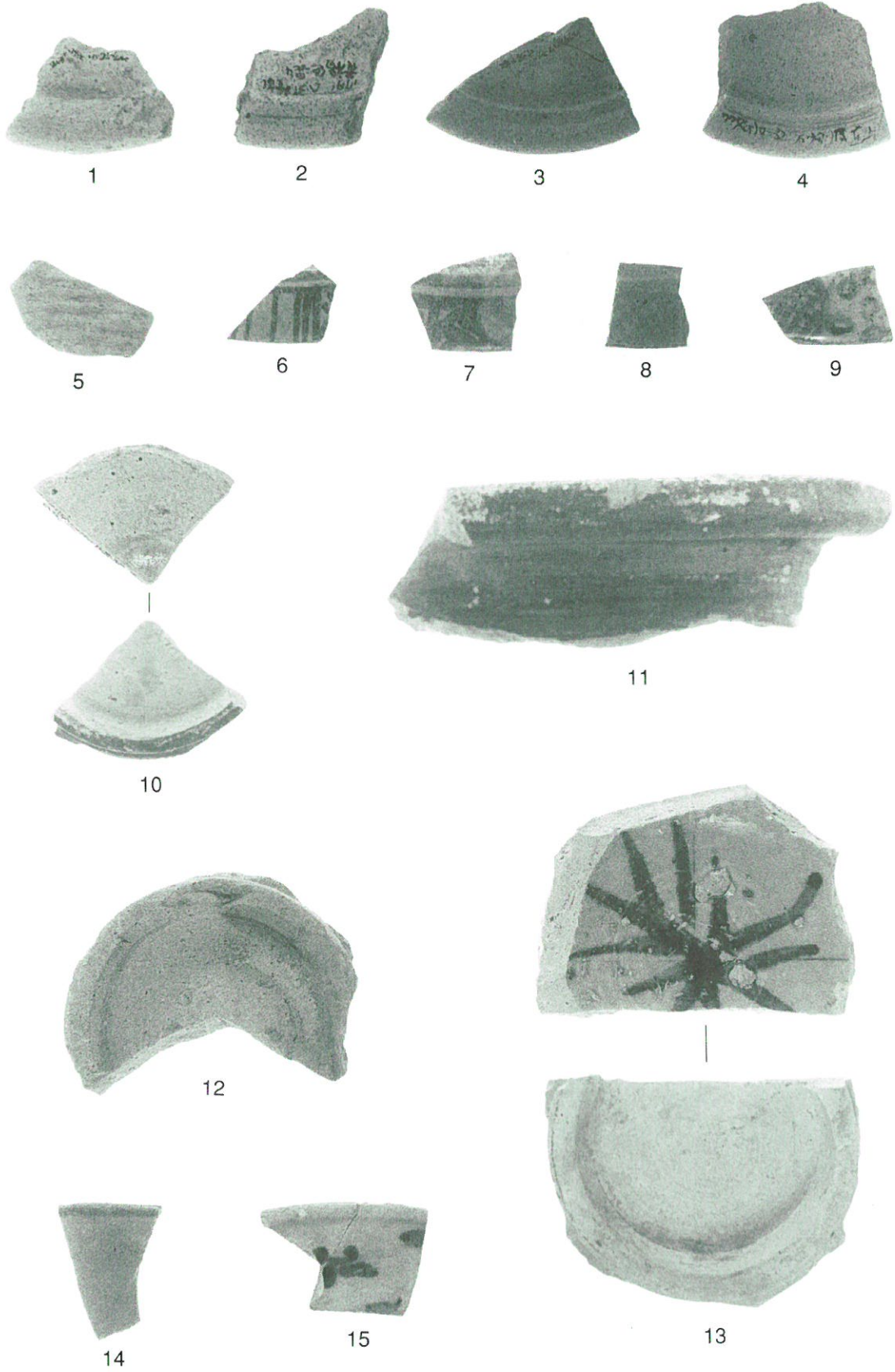
图版33 褐釉陶器 2 (水甕·壺)



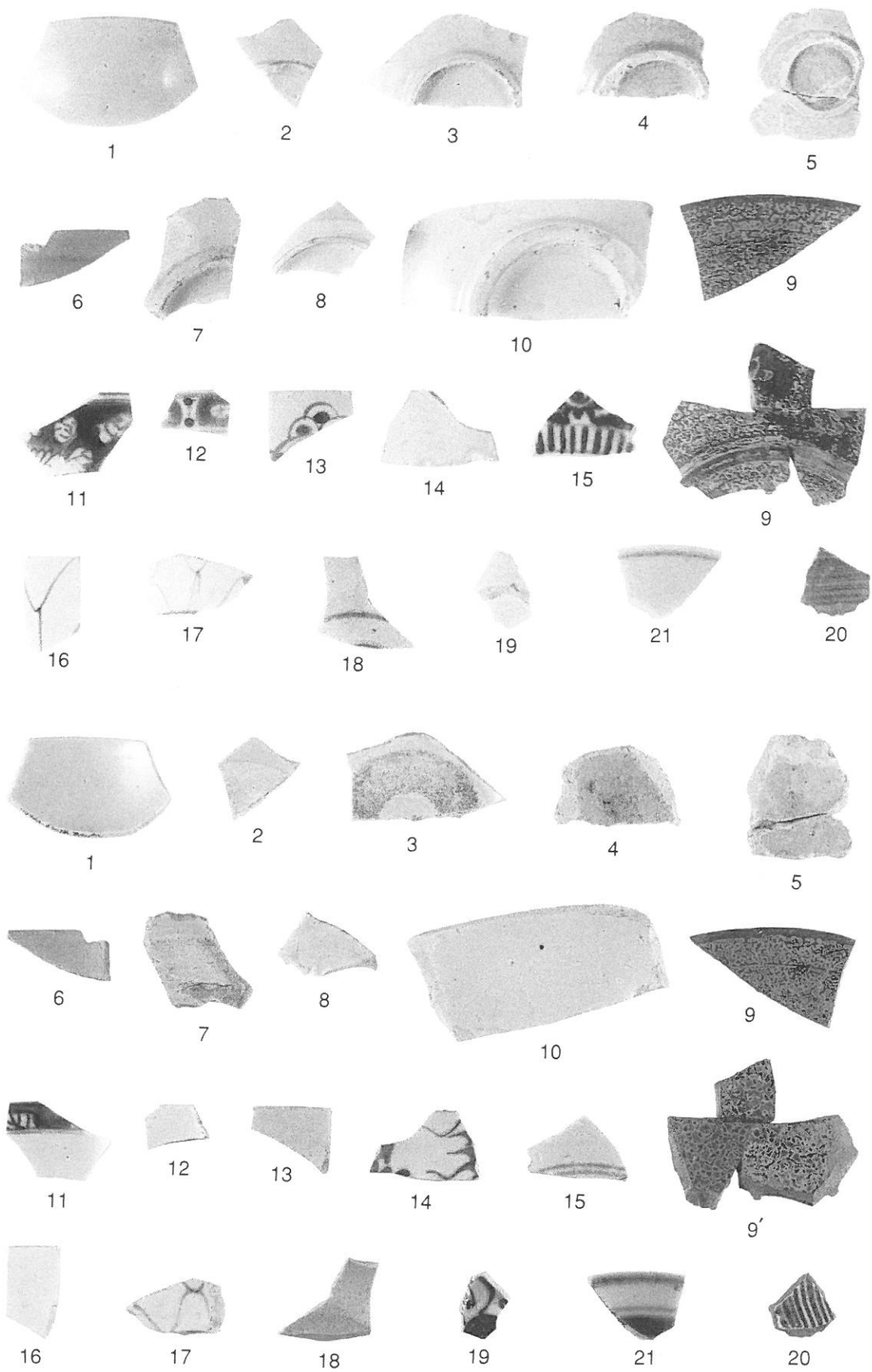
図版34 色絵と三彩



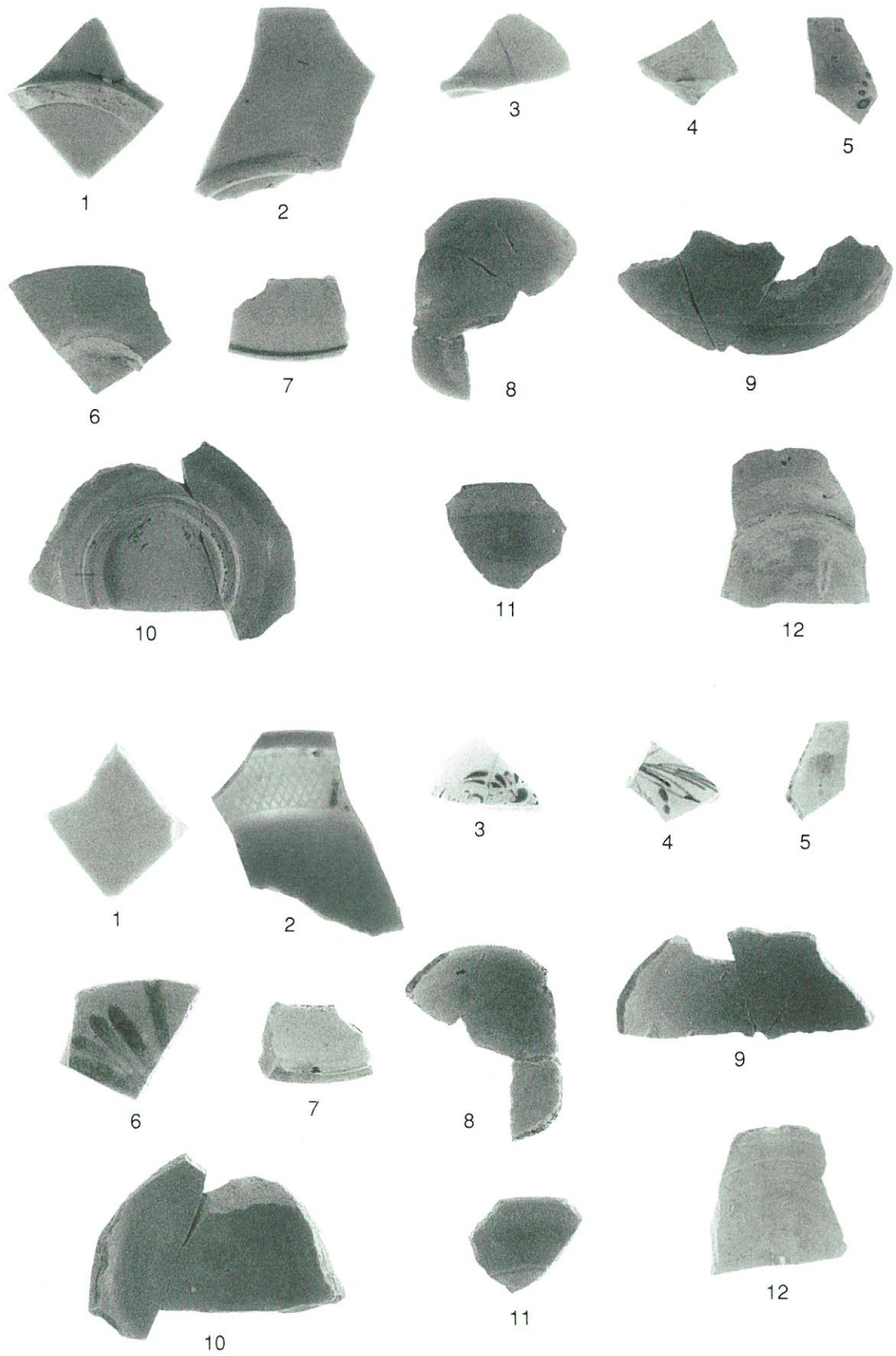
図版35 上：瑠璃釉、下：その他の陶磁器（青磁・鉄釉染付—下左：外面、下右：内面）



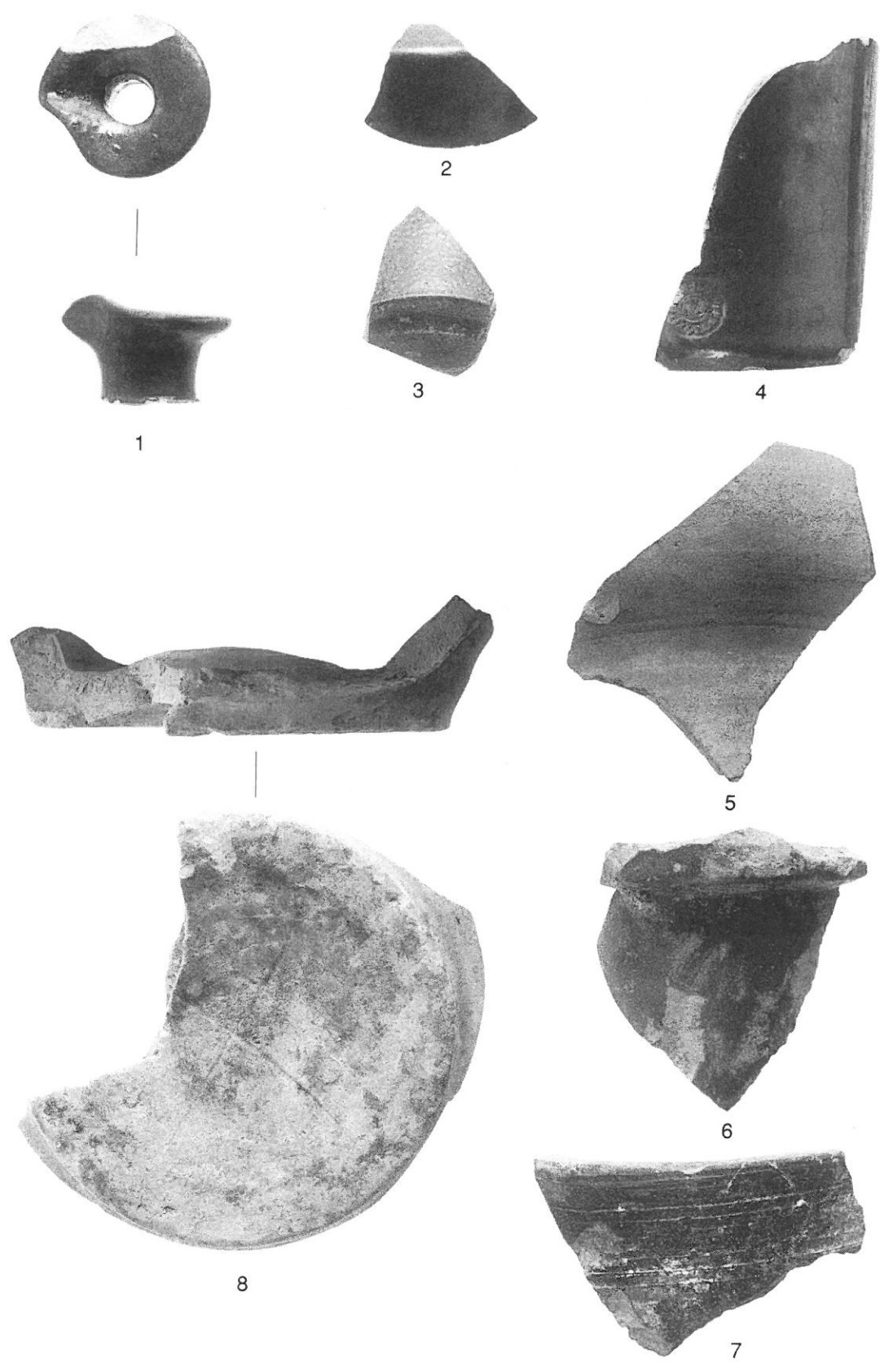
図版36 東南アジア陶器



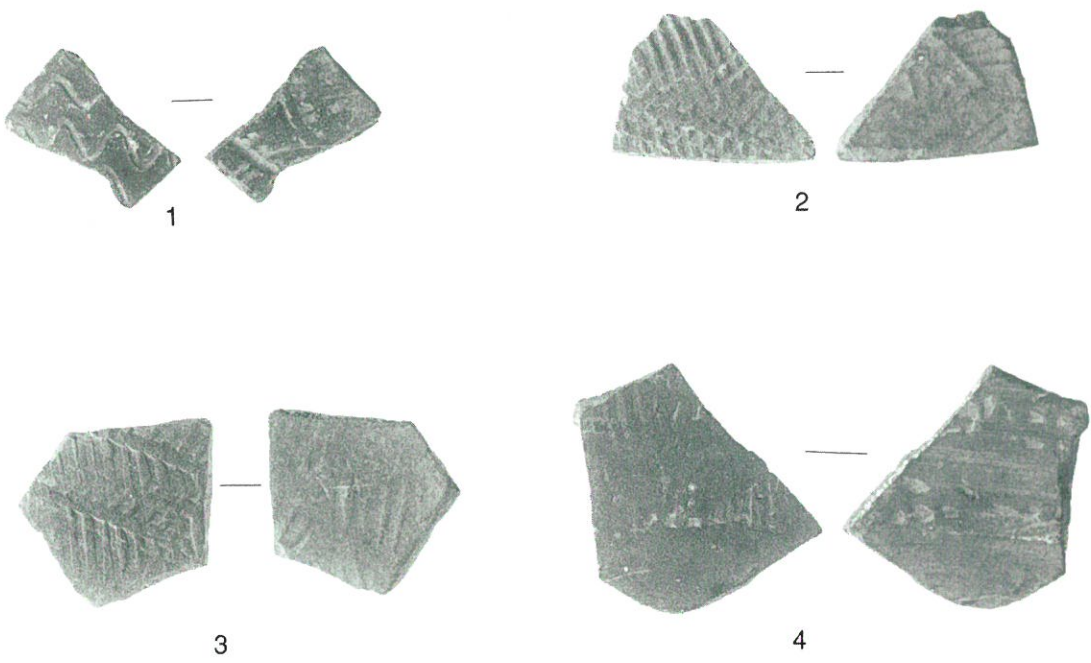
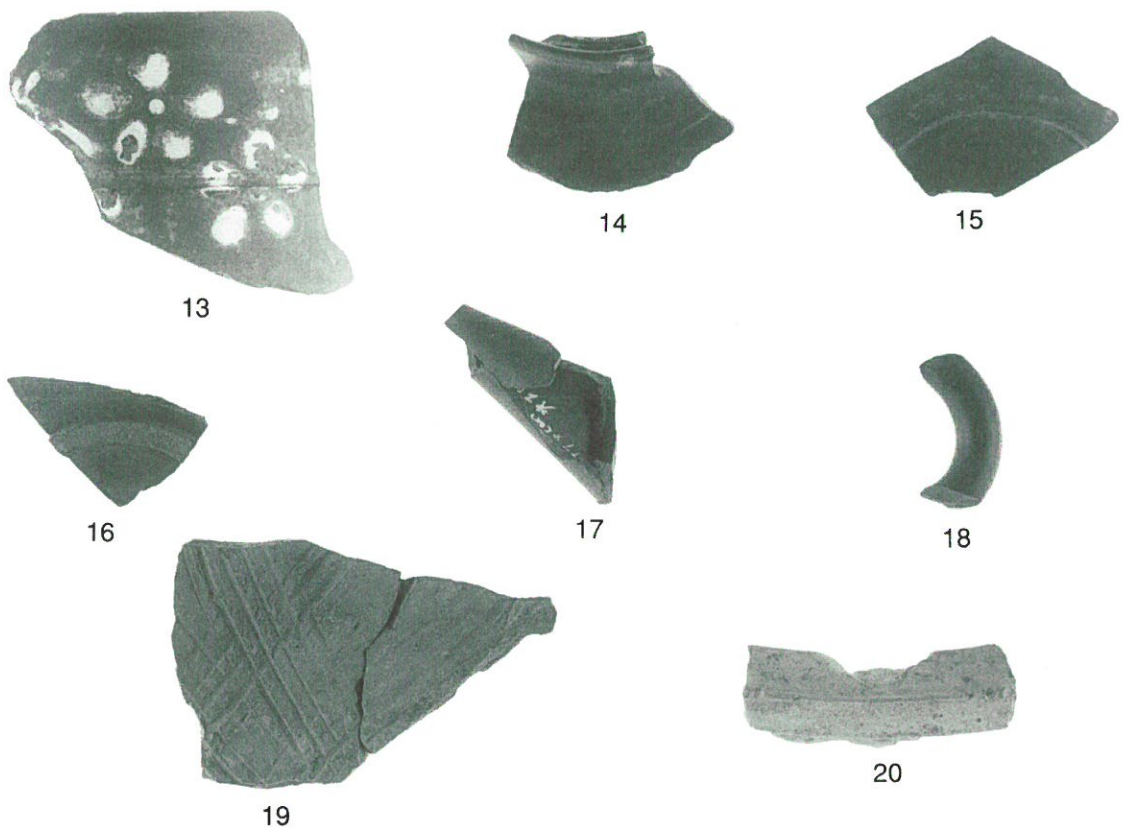
图版37 本土産陶磁器 1 (上：外面、下：内面)



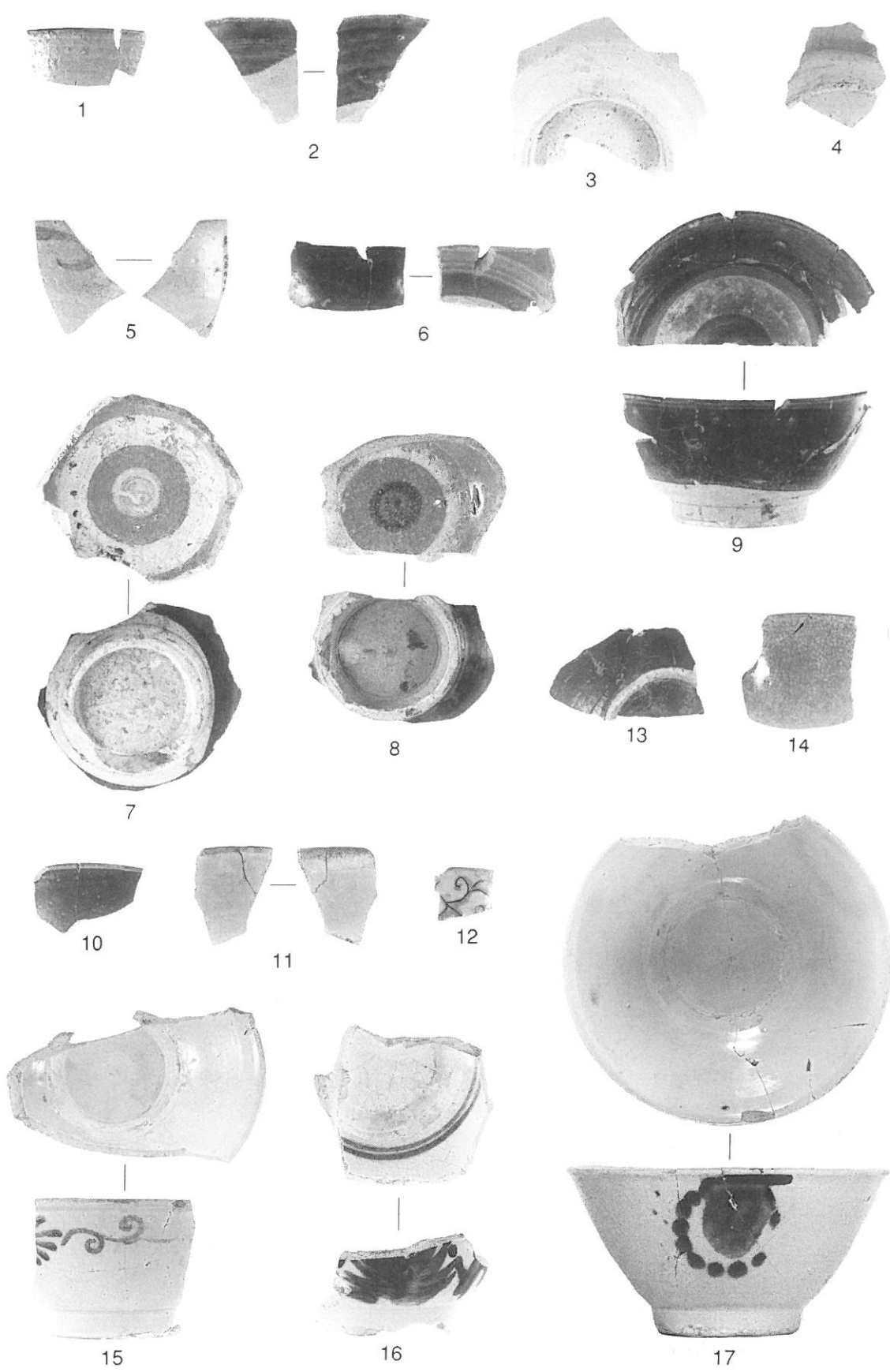
图版38 本土産陶磁器 2 a (上：外面、下：内面)



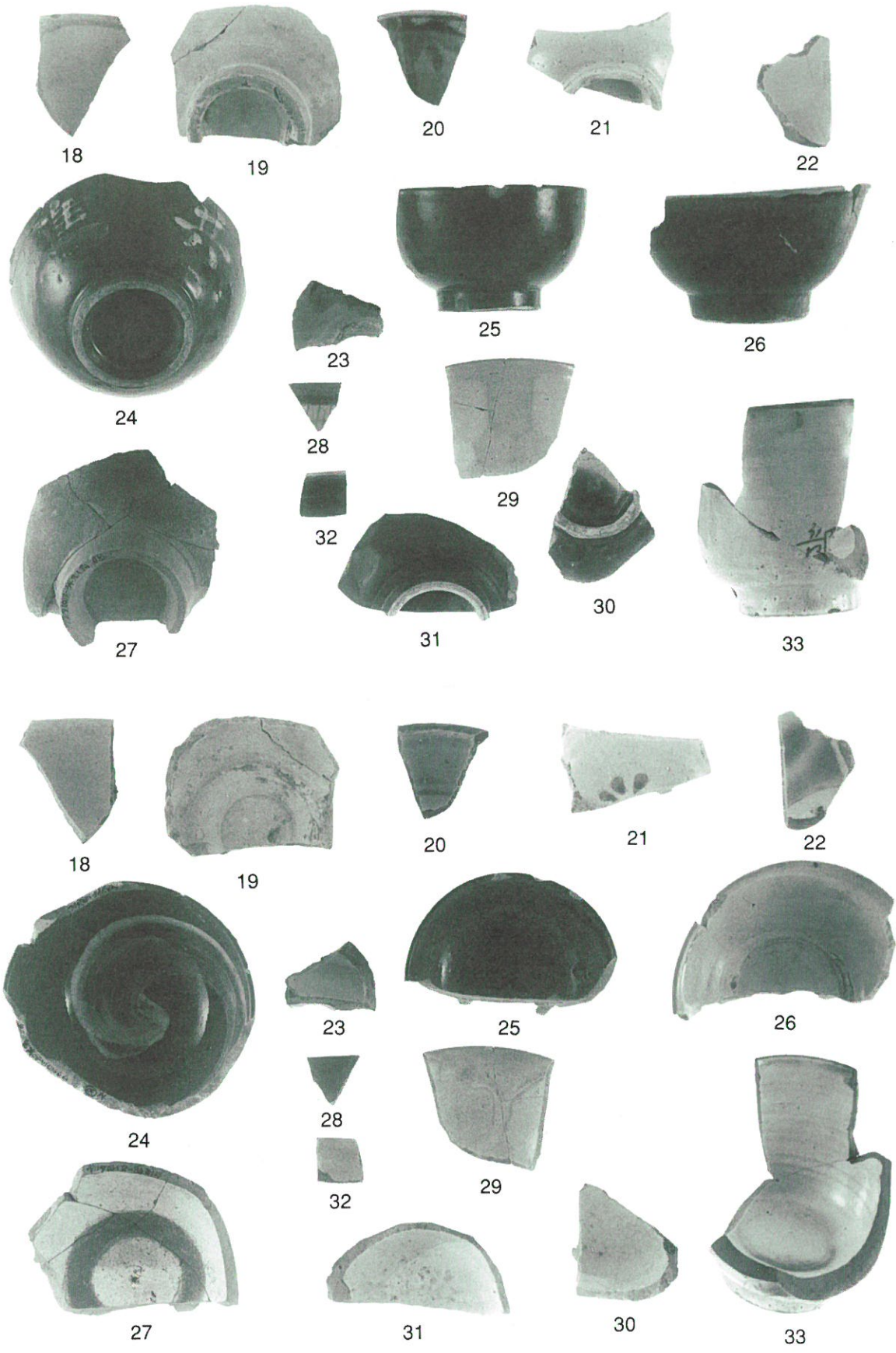
図版39 本土産陶磁器 3



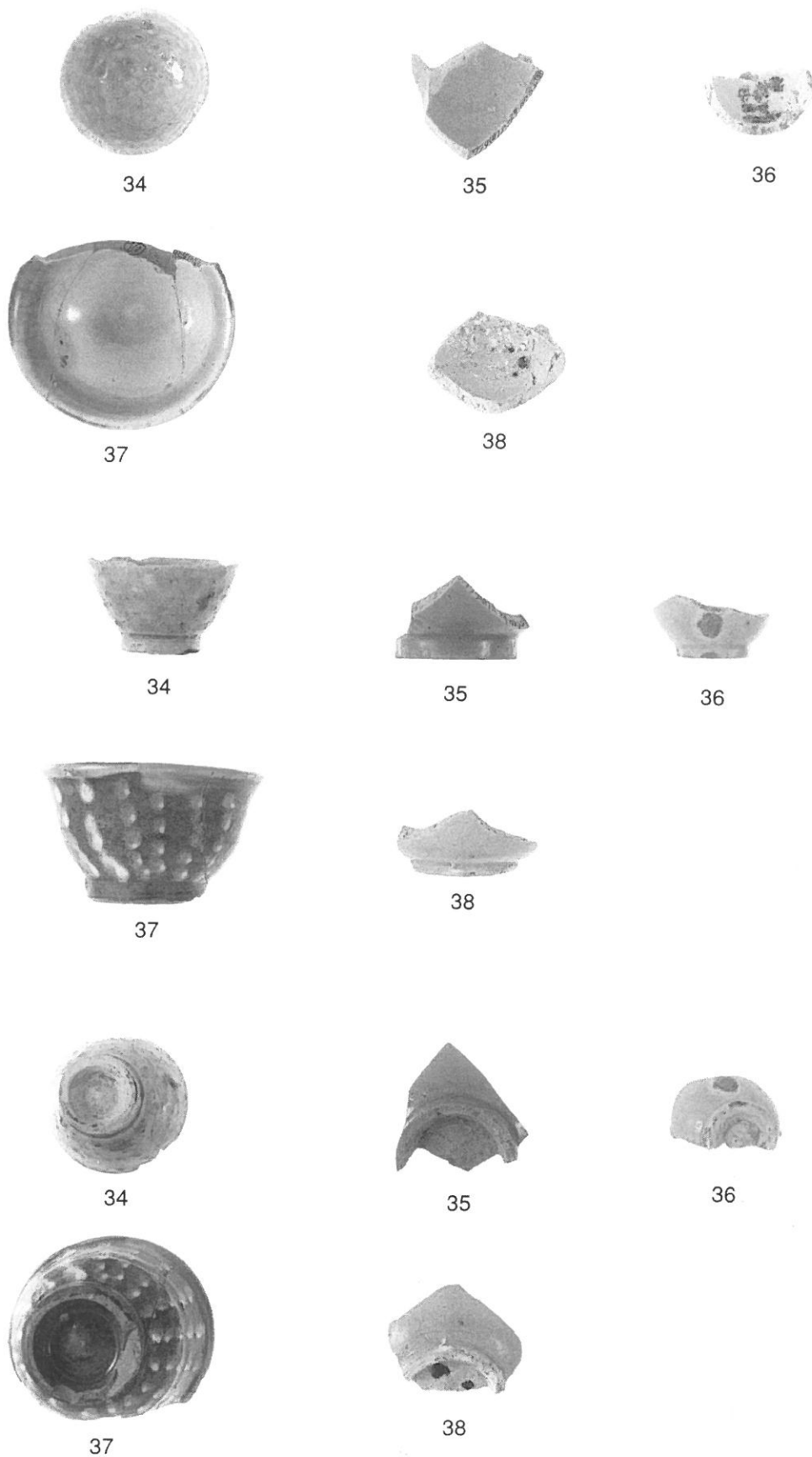
図版40 上：本土産陶磁器 2 b、下：須恵器



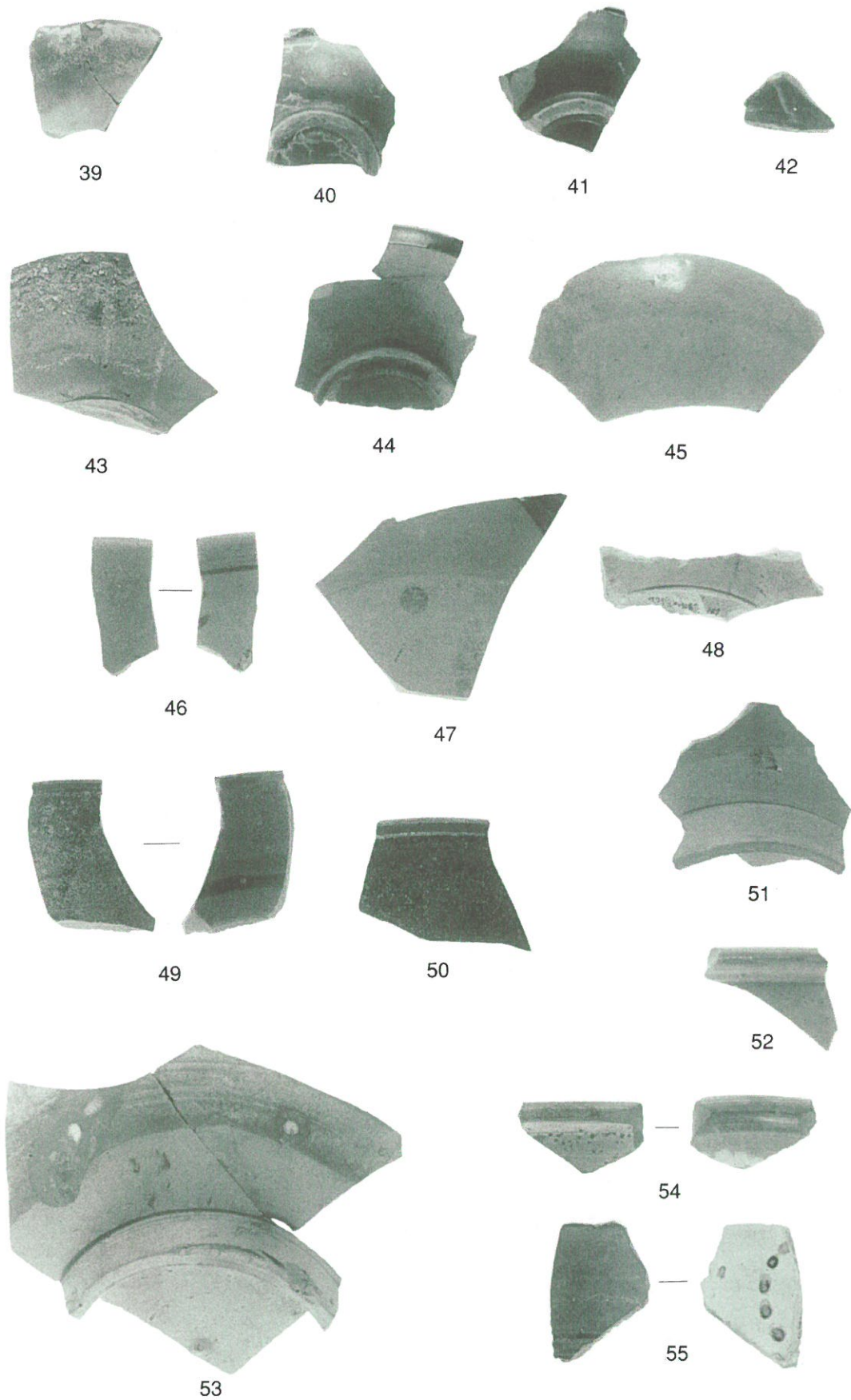
図版41 沖縄産施釉陶器 1 (碗)



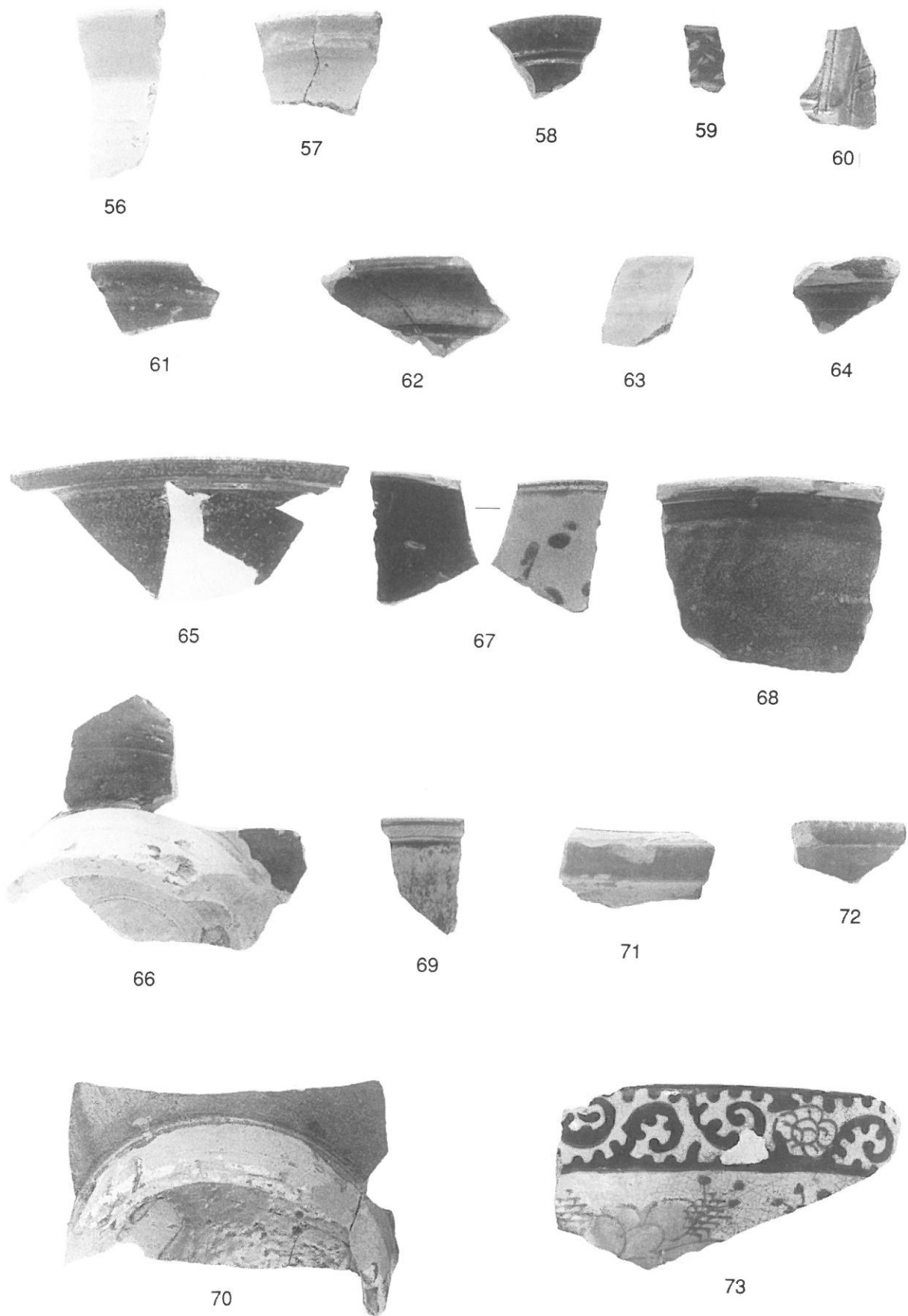
図版42 沖縄産施釉陶器 2 (小碗) (上:外面、下:内面)



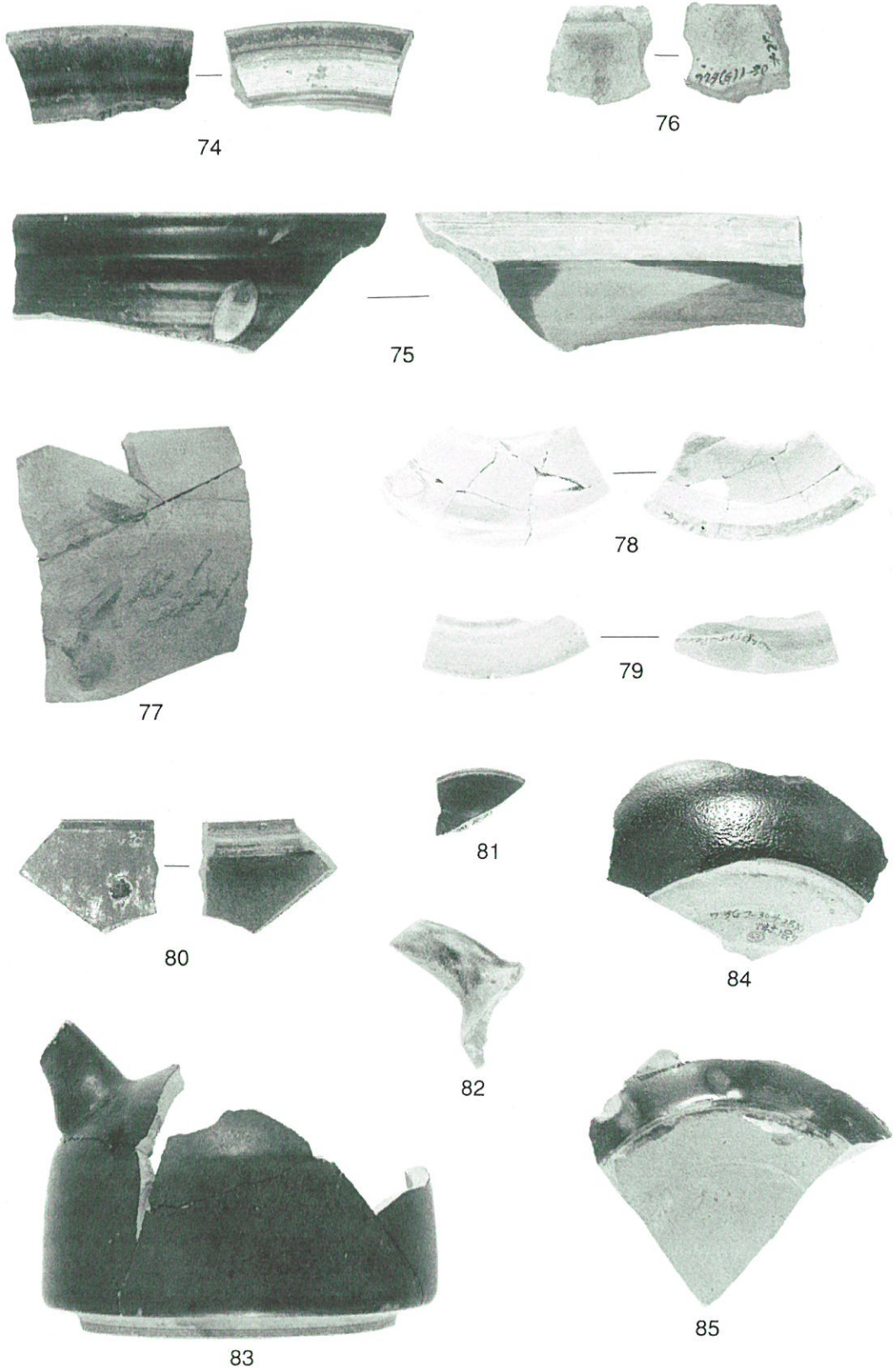
図版43 沖縄産施釉陶器 3 (小杯) (上：内面、中：側面、下：外面)



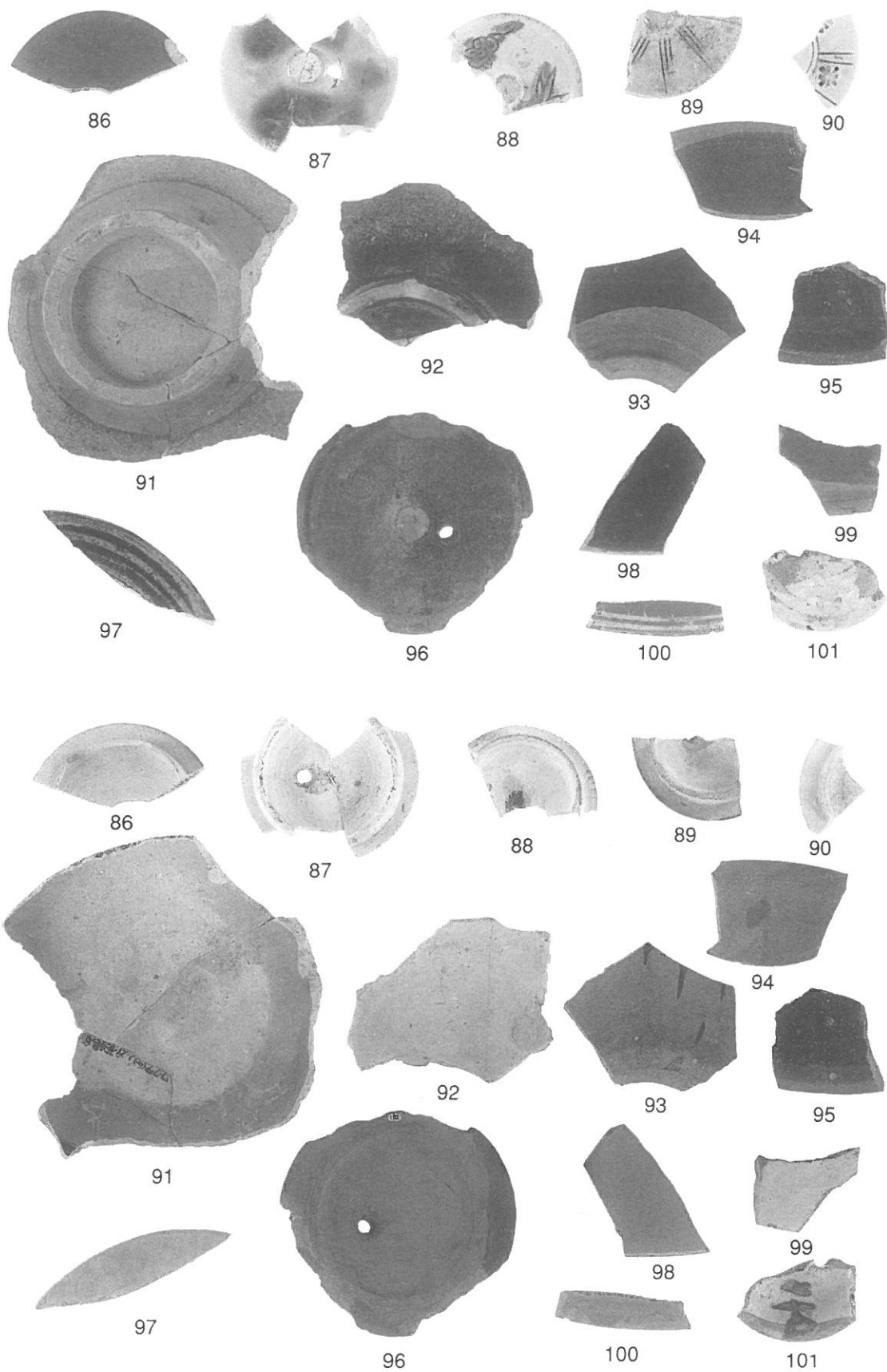
図版44 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)



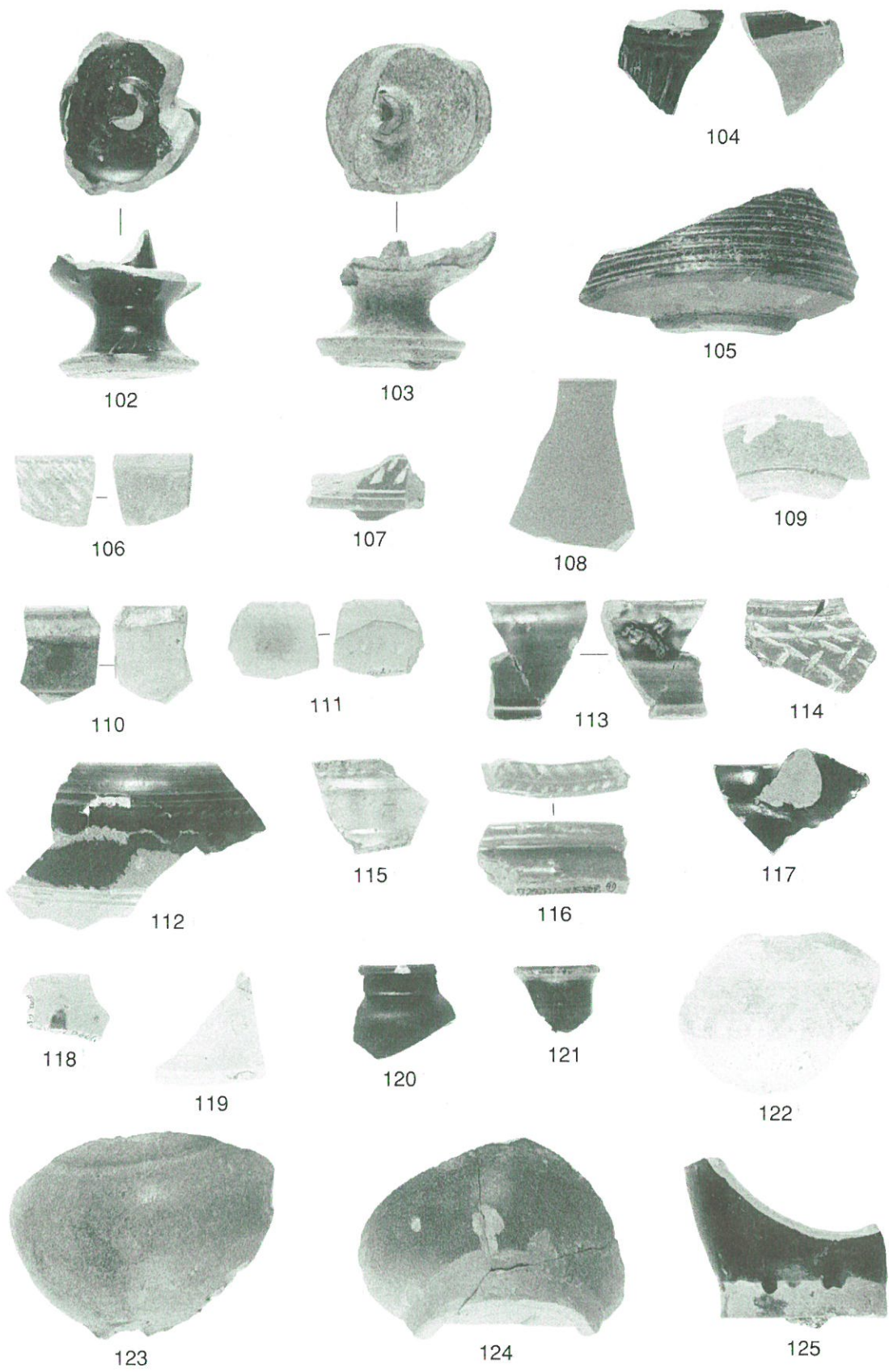
図版45 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)



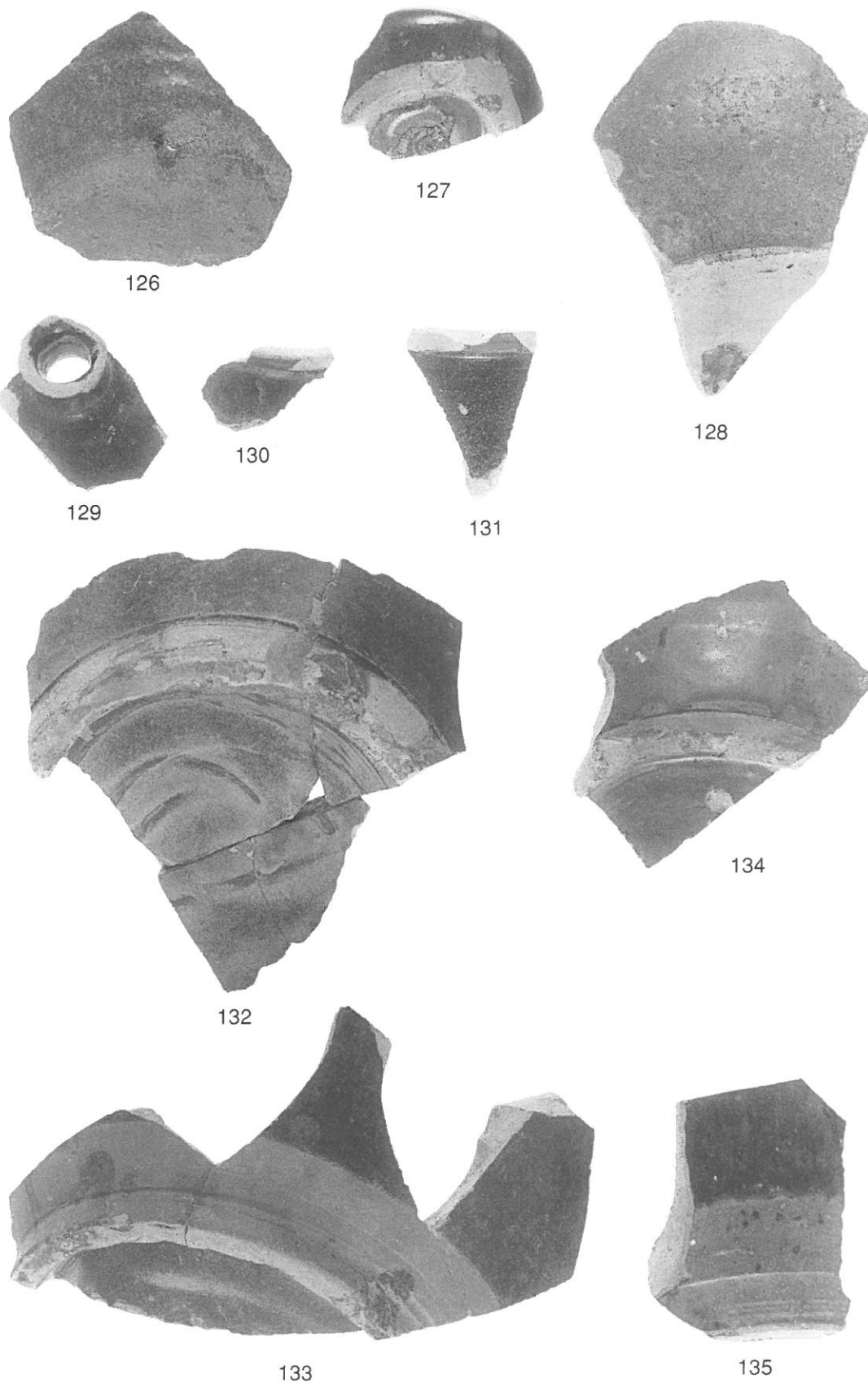
図版46 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)



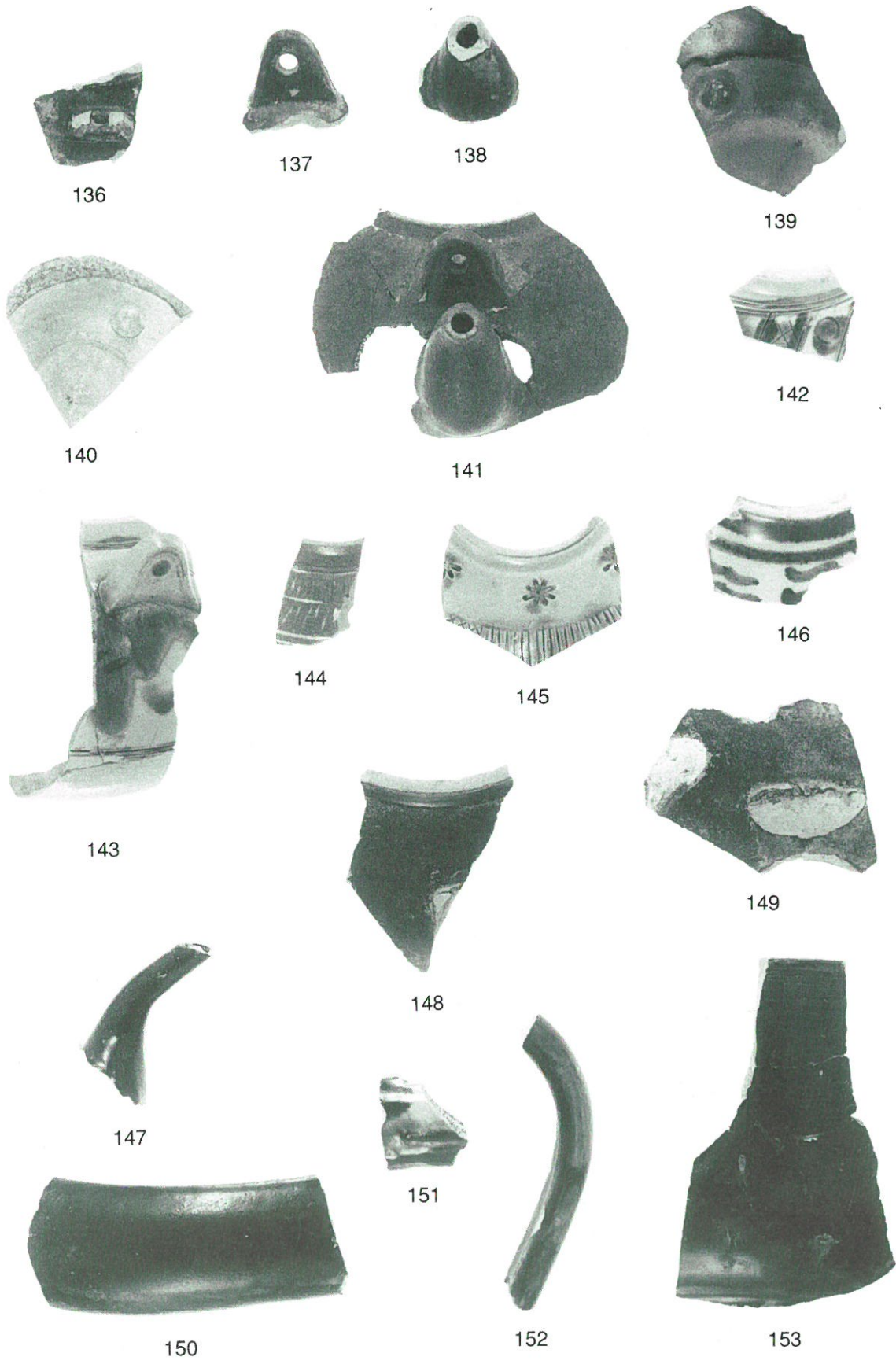
図版47 沖縄産施釉陶器 7 (蓋類) (上：外面、下：内面)



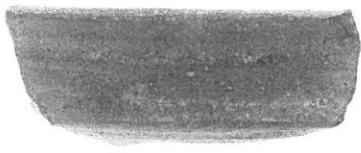
図版48 沖縄産施釉陶器 8 (乗燭・火取・香炉・火炉・花瓶・茶入)



図版49 沖縄産施釉陶器 9 (水注・壺・油壺)



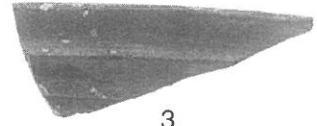
図版50 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)



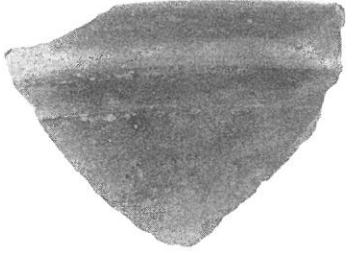
1



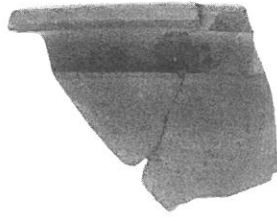
2



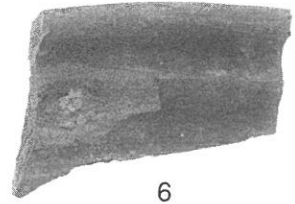
3



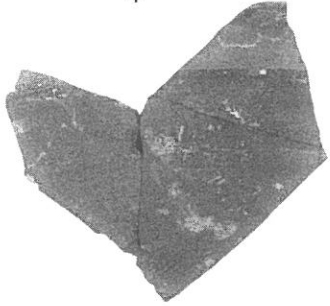
4



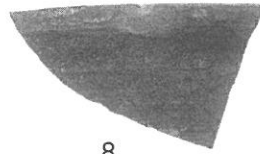
5



6



7



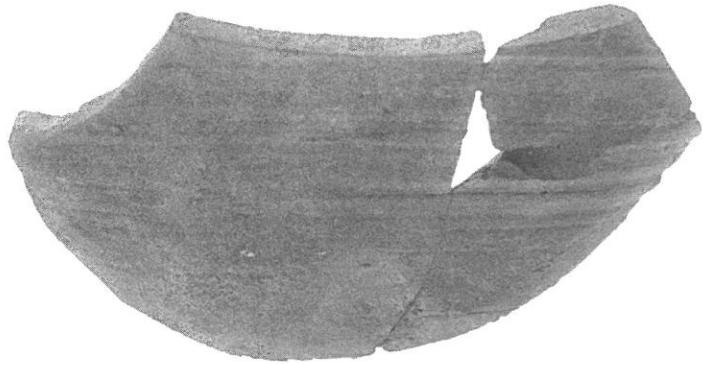
8



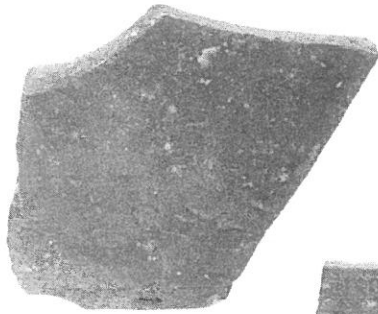
9



11



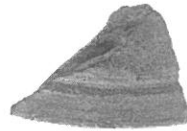
12



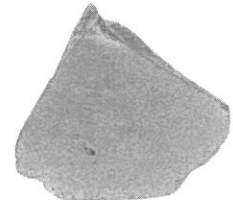
10



13

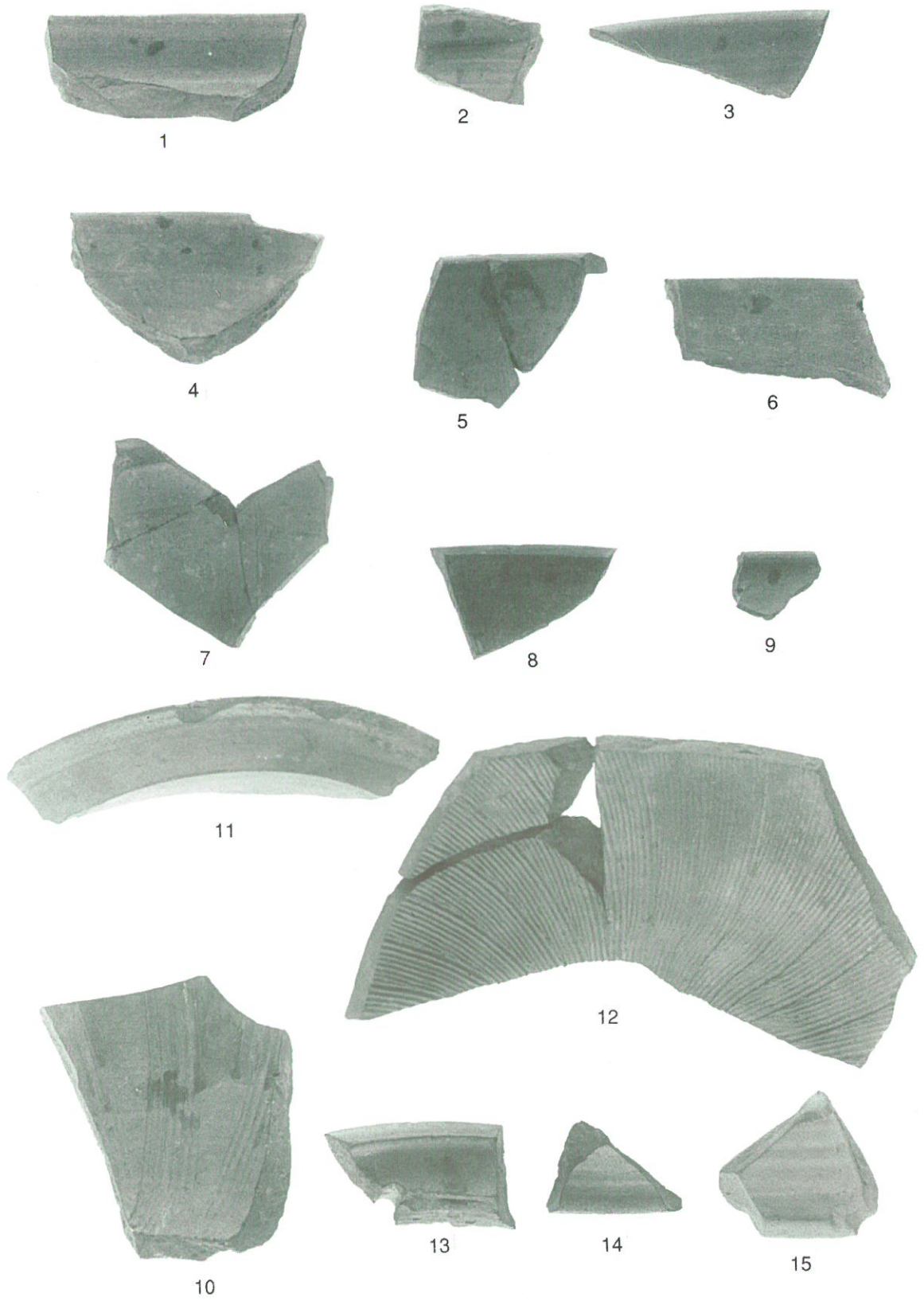


14

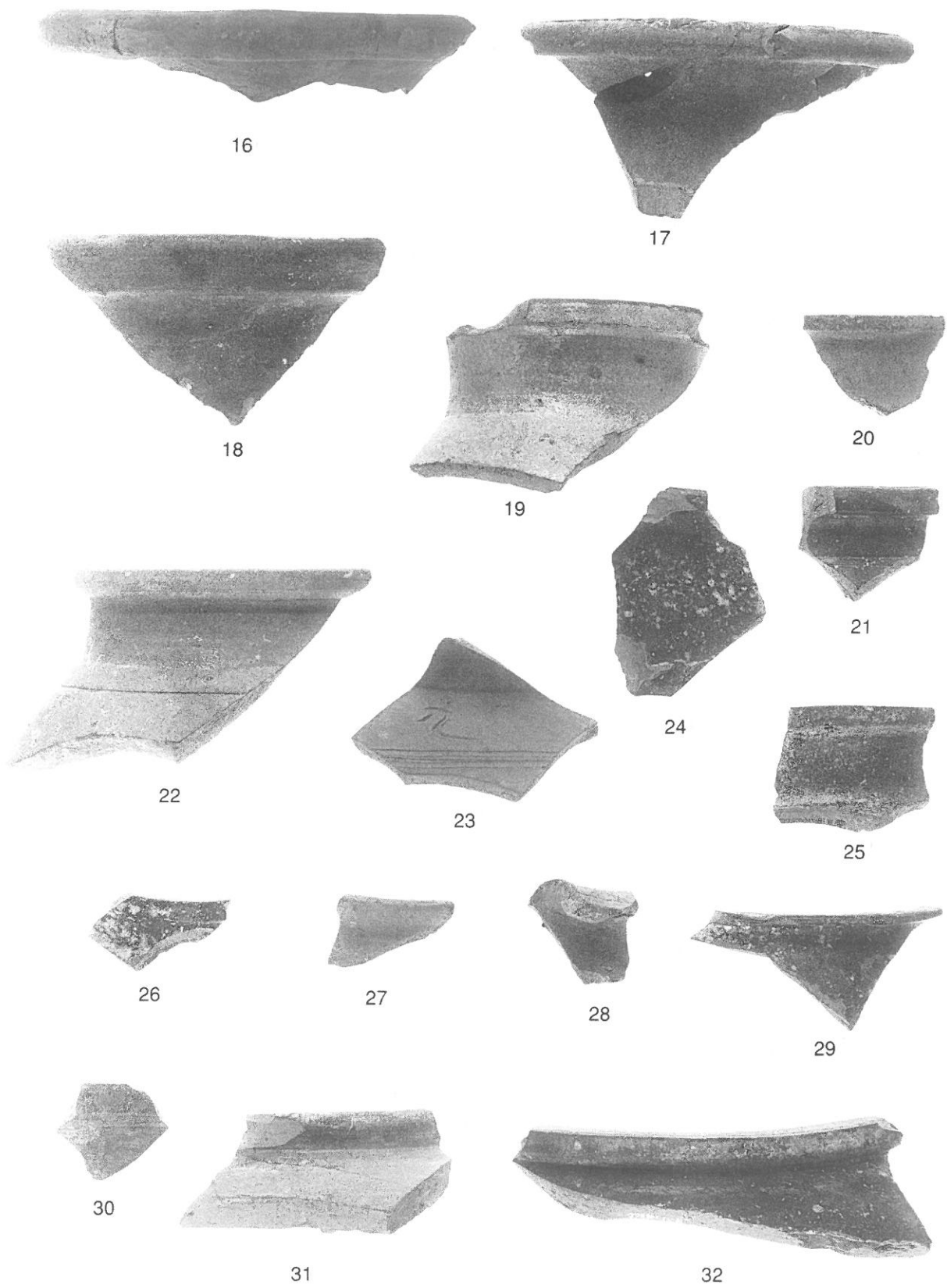


15

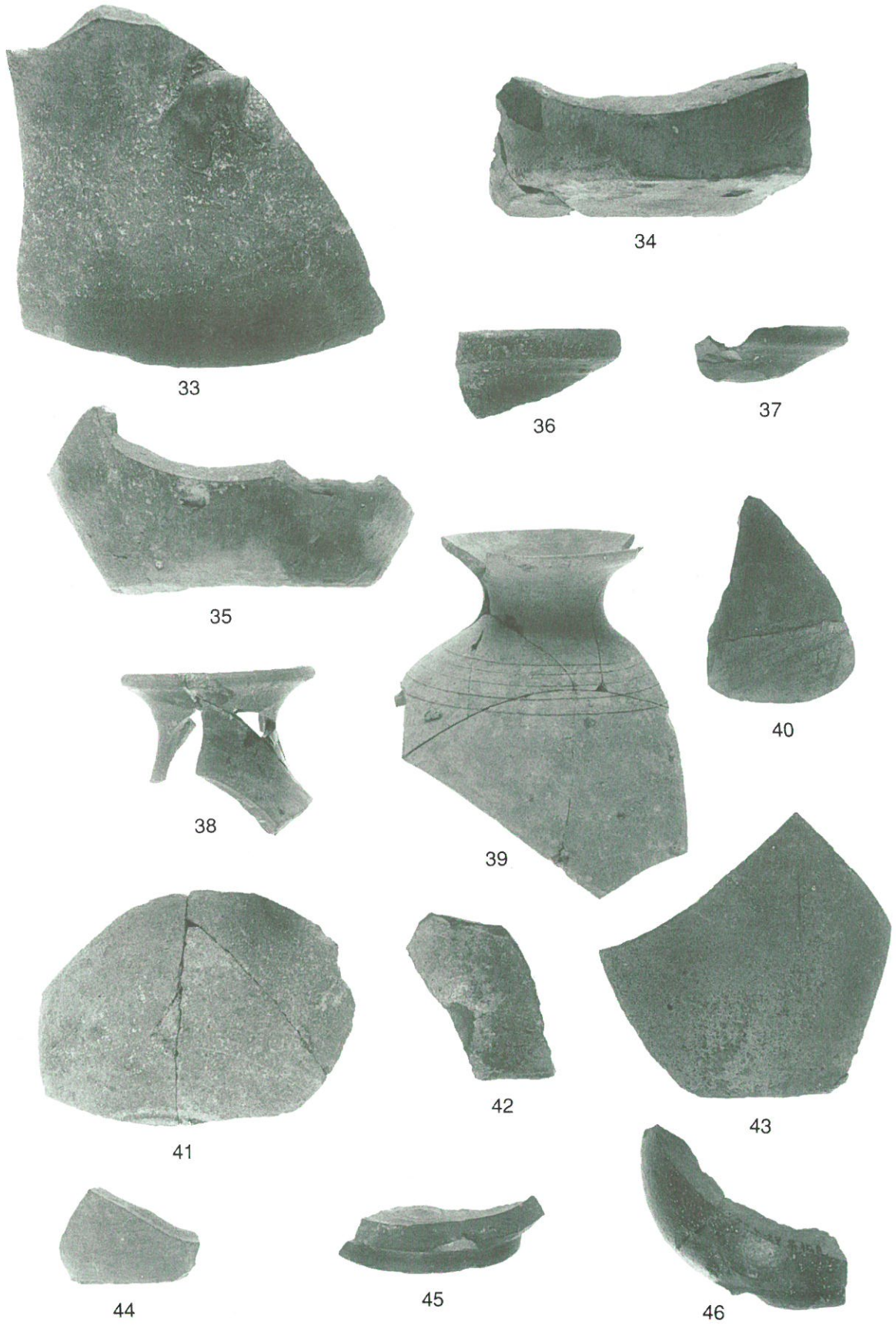
図版51 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢-外面)



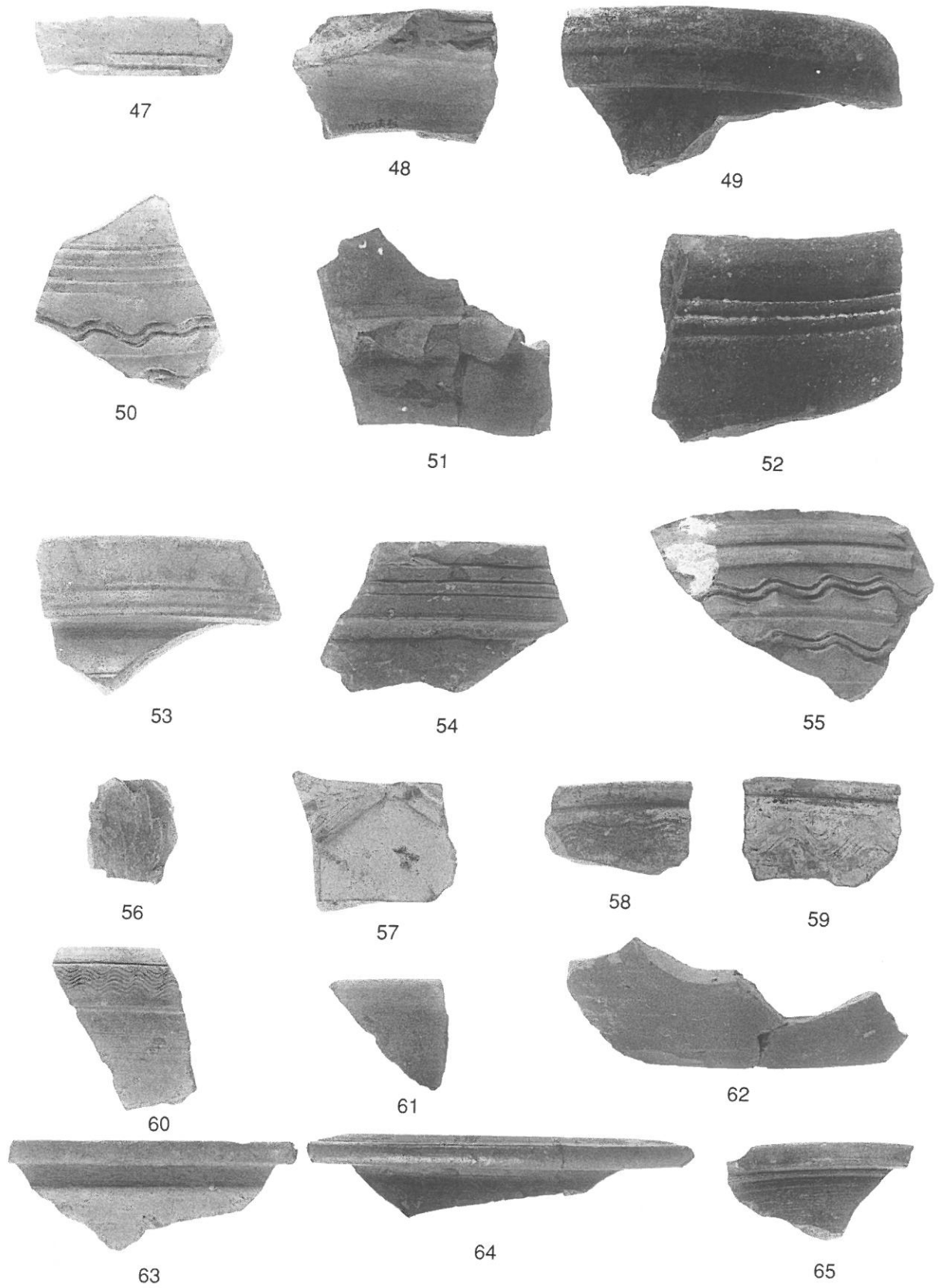
図版52 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢-内面)



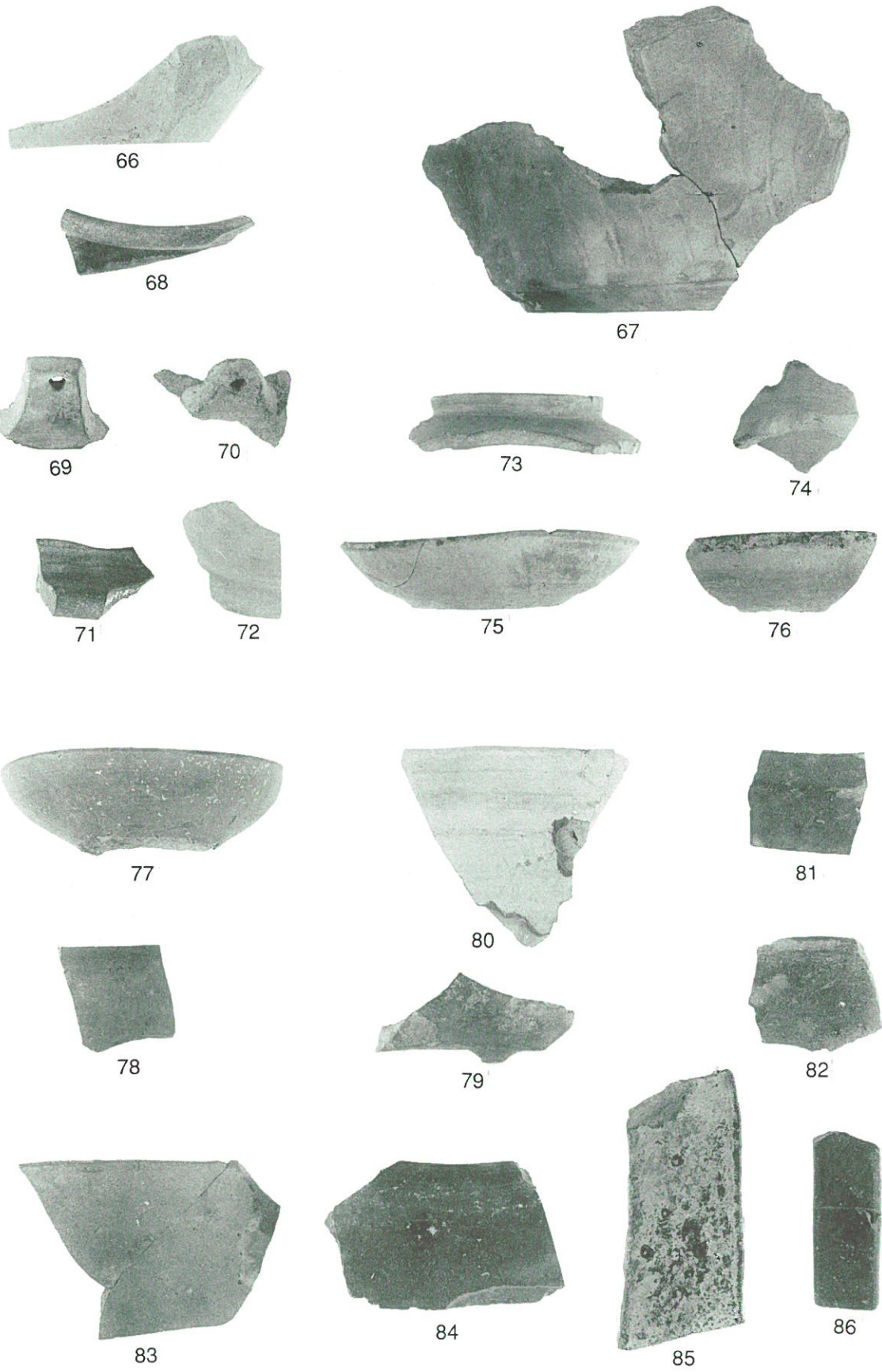
図版53 沖縄産無釉陶器 2 (壺)



図版54 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)



図版55 沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢・小鉢)



図版56 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手)



87



88

図版57 沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)

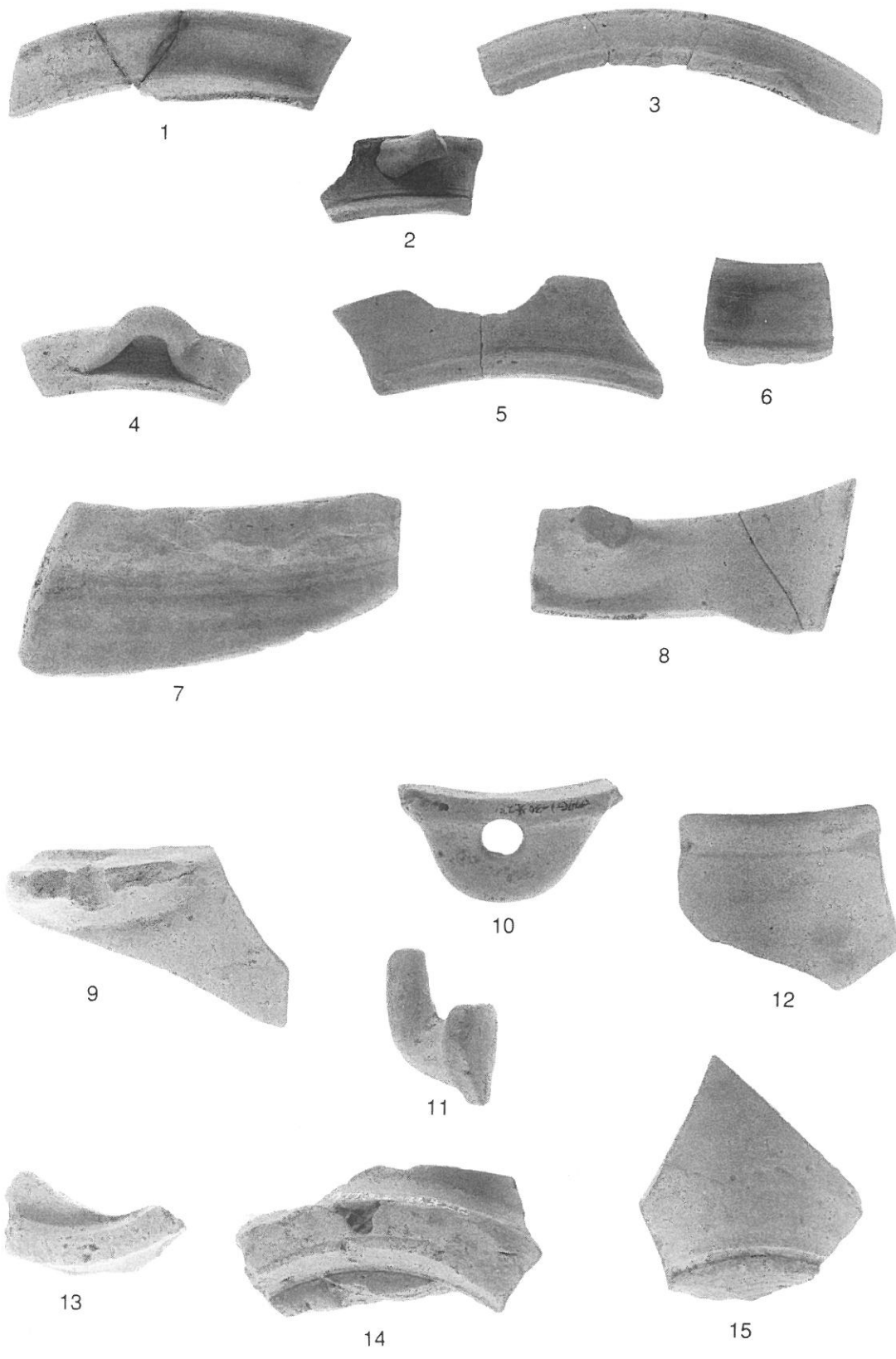


1

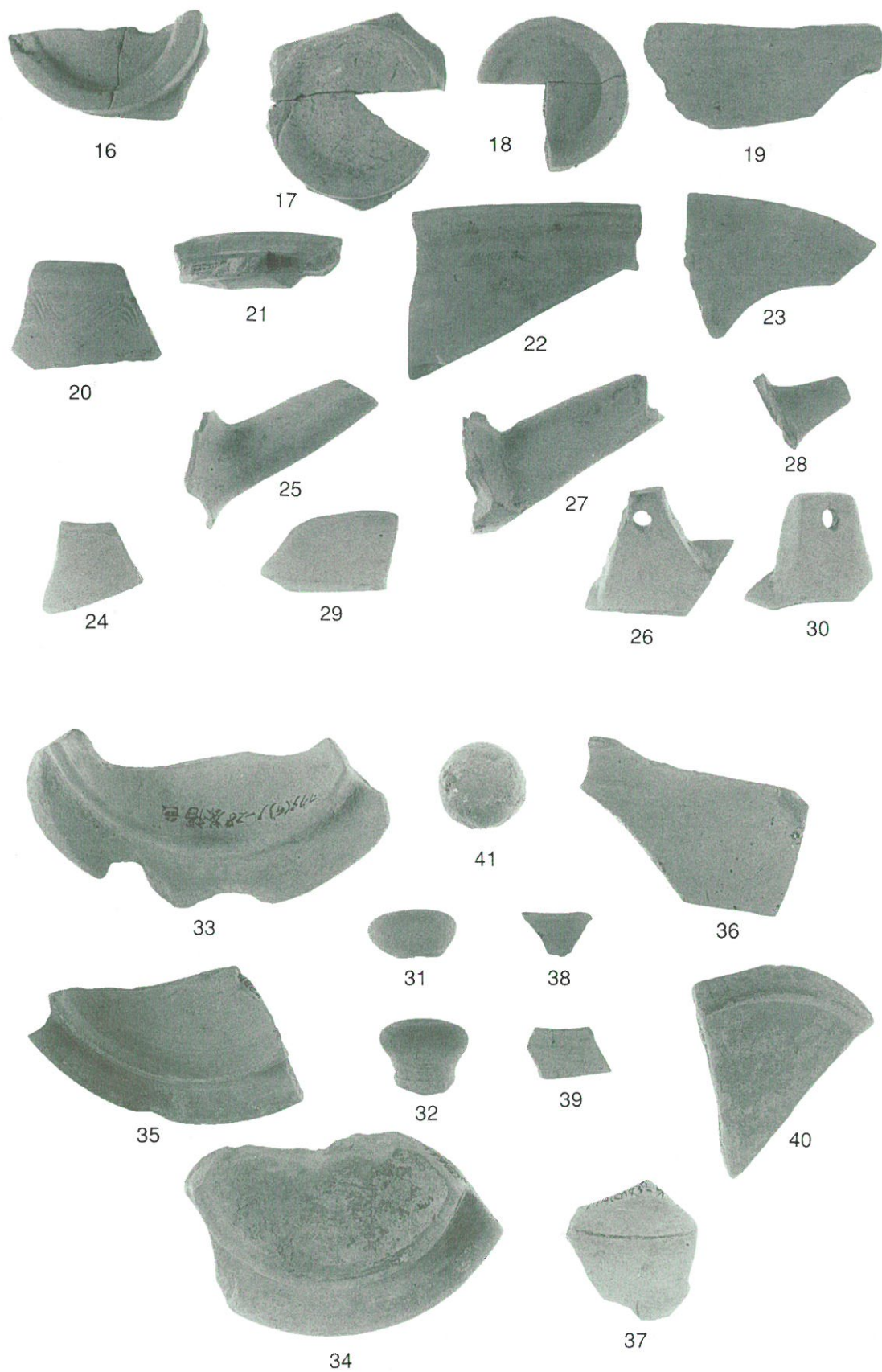


2

图版58 土器



图版59 陶質土器 1 (鍋・火炉)



図版60 陶質土器 2・3 (鍋の蓋・水鉢・急須・蓋・撮・壺・球状製品)



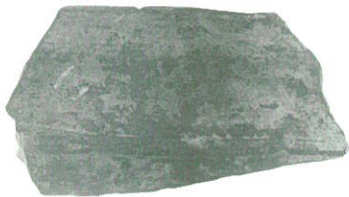
図版61 瓦質土器 1 (植木鉢)



7



10



8



9

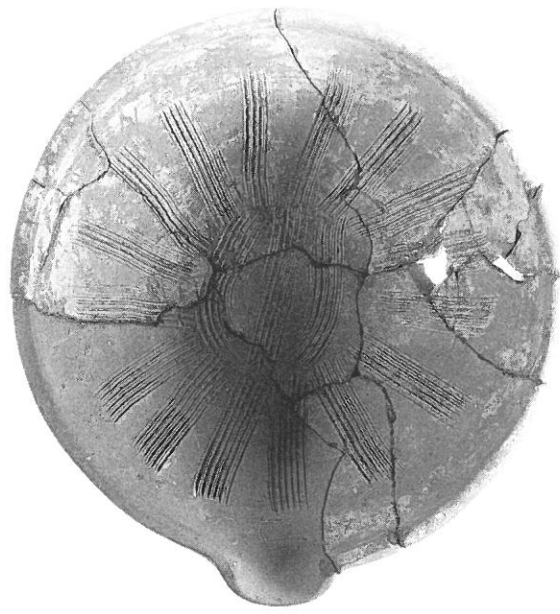


11

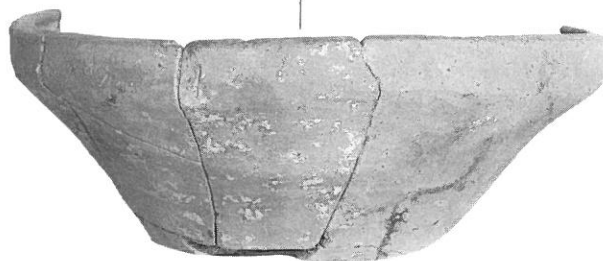
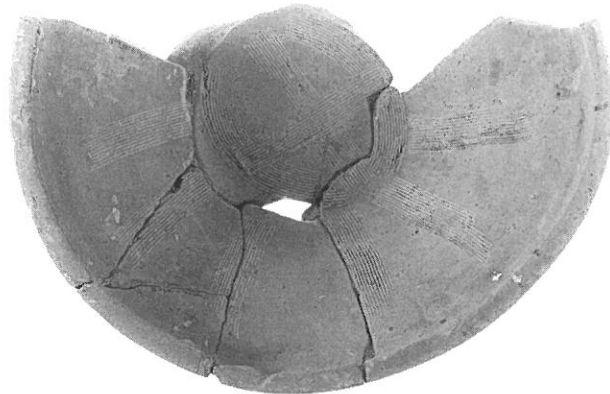


12

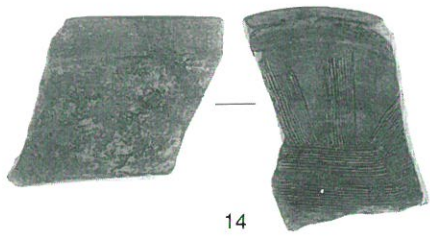
図版62 瓦質土器 2 (こね鉢)



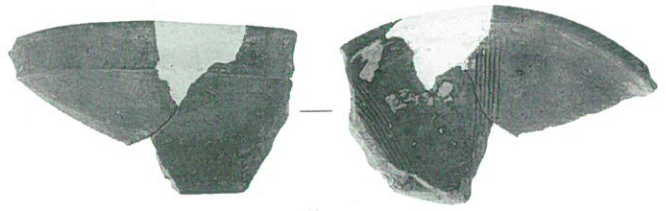
13



15



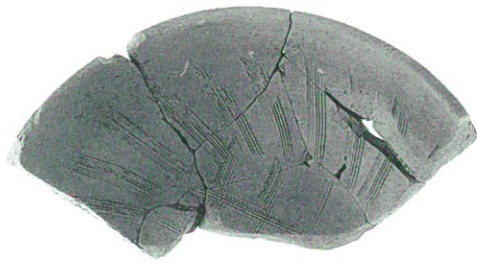
14



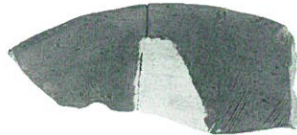
16



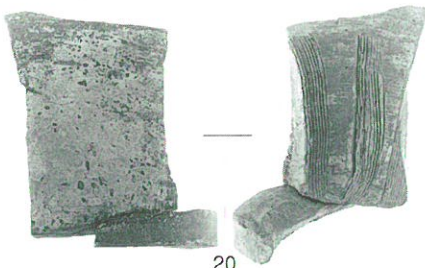
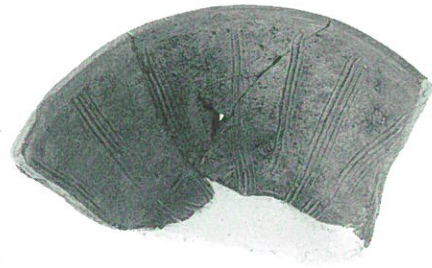
17



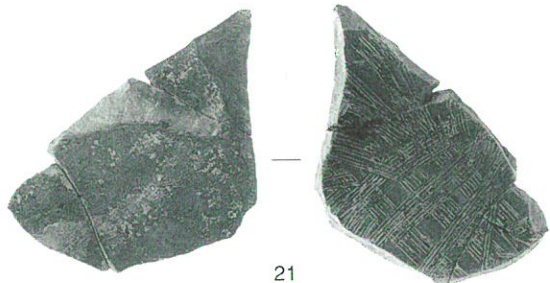
18



19

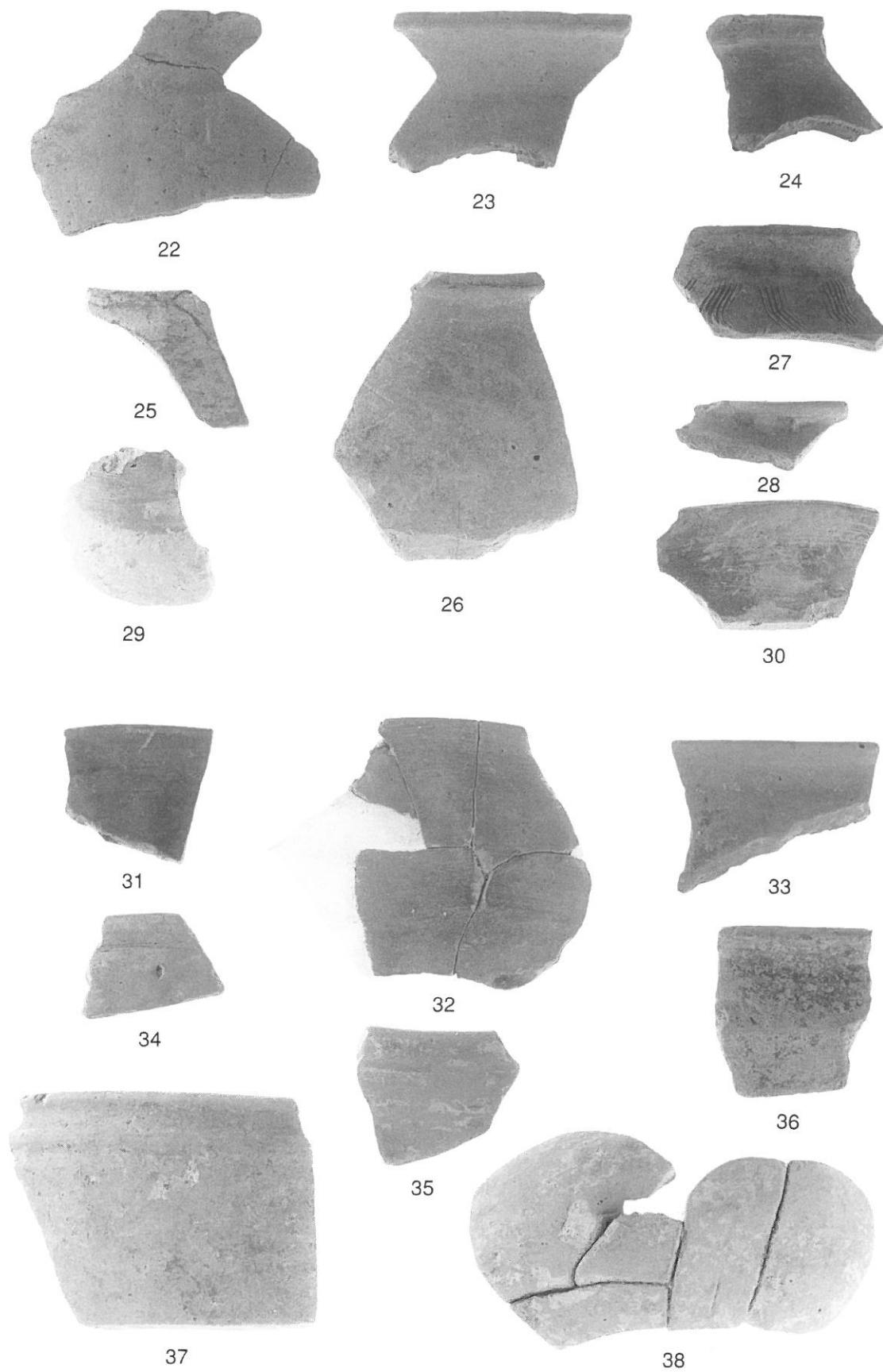


20



21

図版64 瓦質土器 3 (摺鉢)



図版65 瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)



39



40



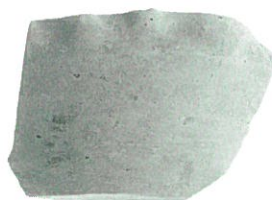
41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52

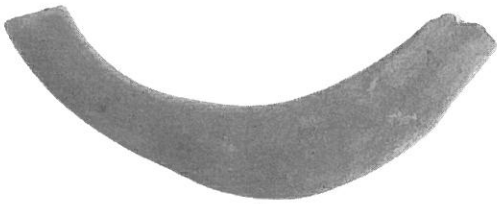
図版66 瓦質土器 5 (浅鉢・碗・水盤・大皿)



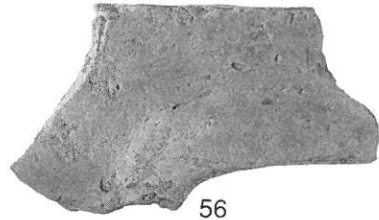
53



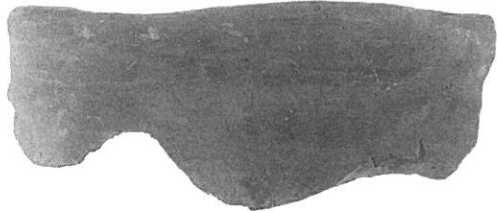
54



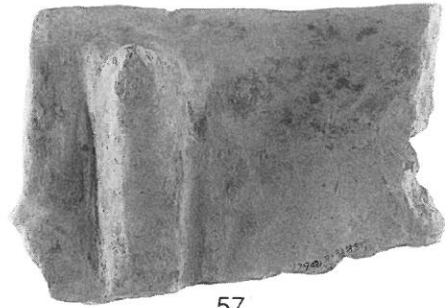
55



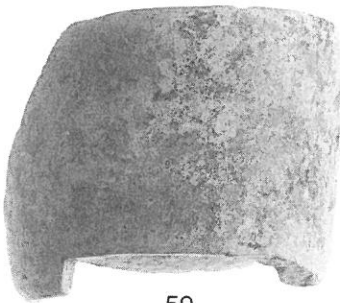
56



57



58



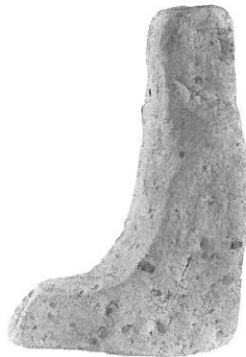
59



60



61

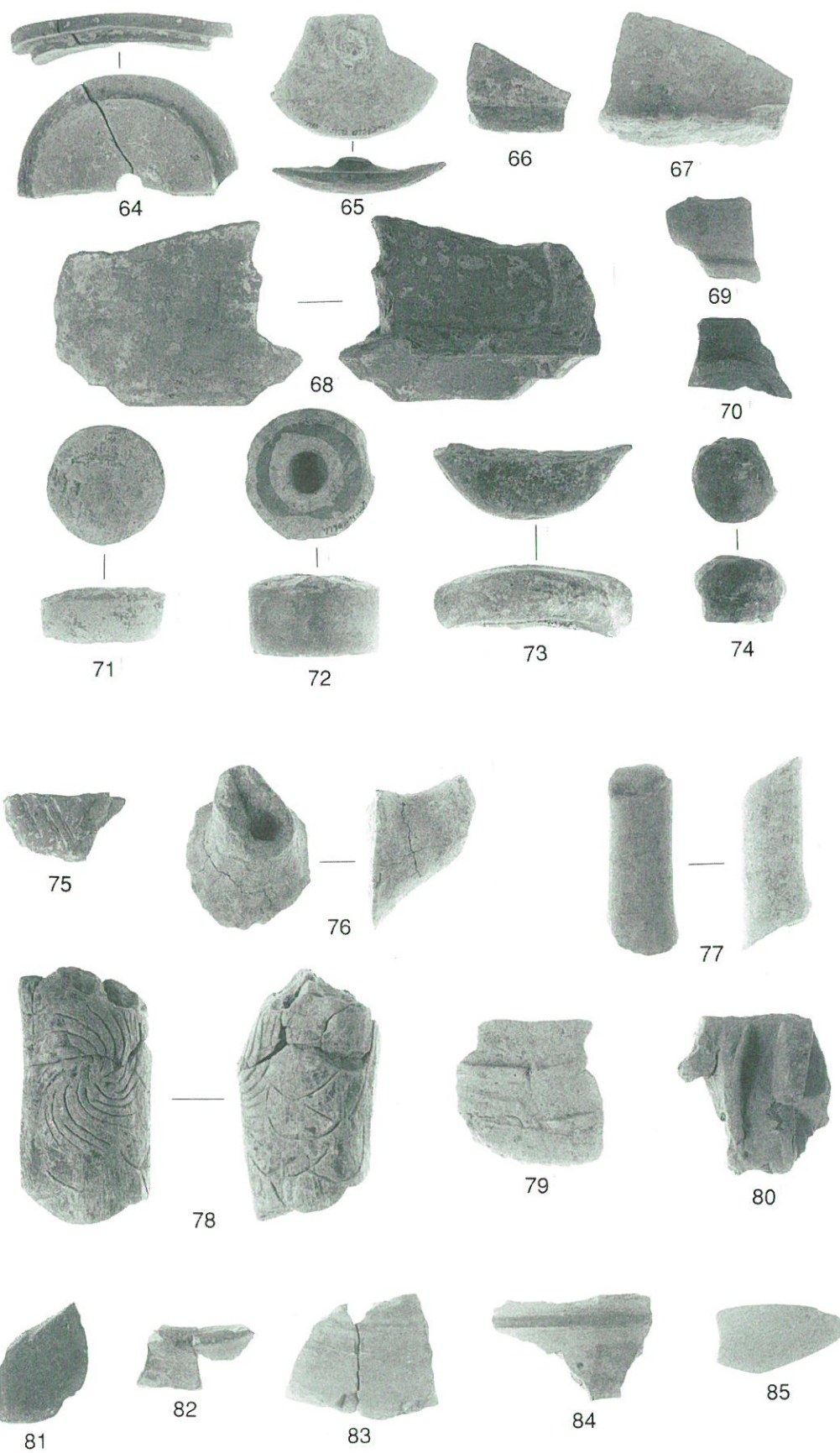


62

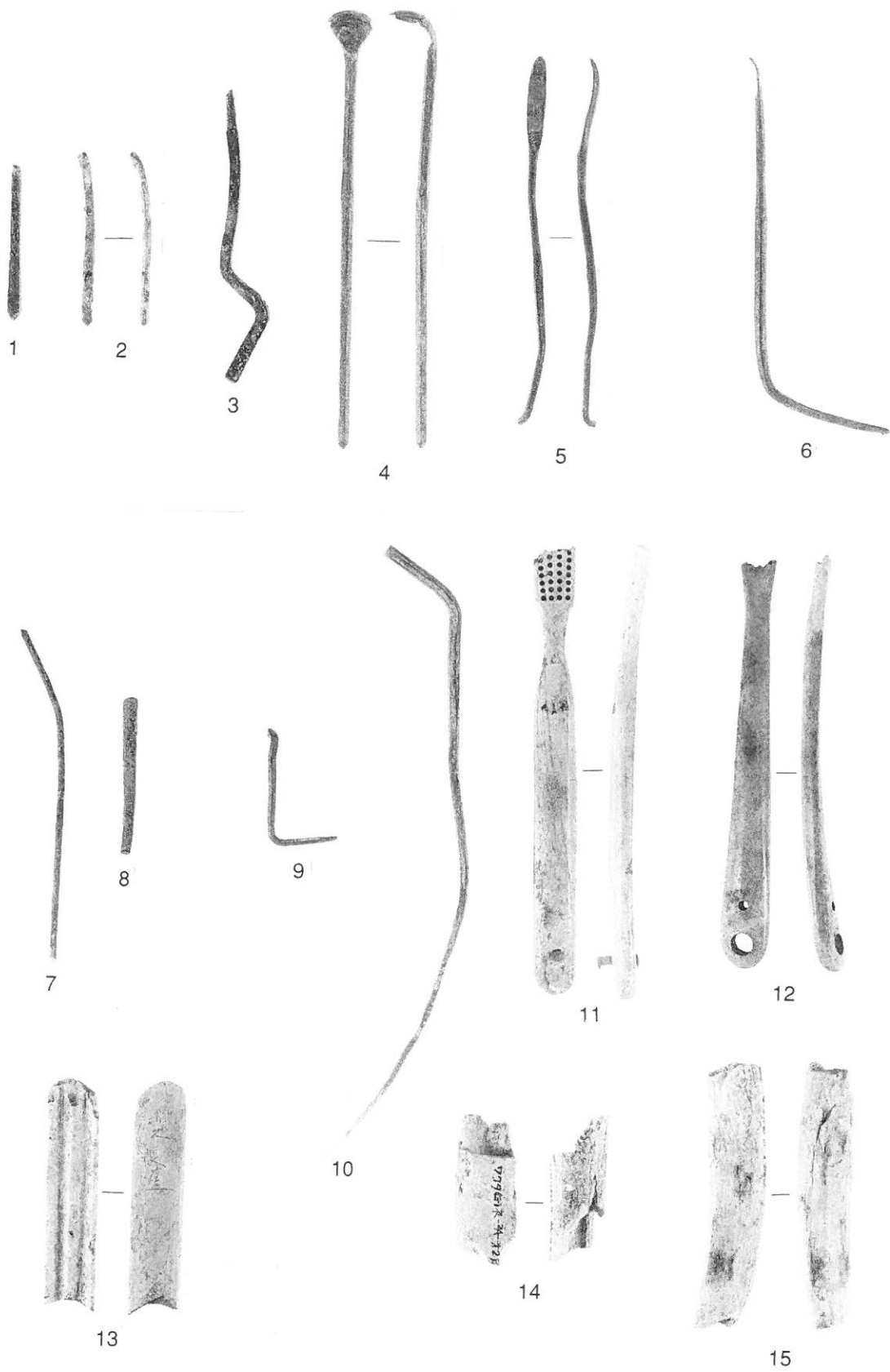


63

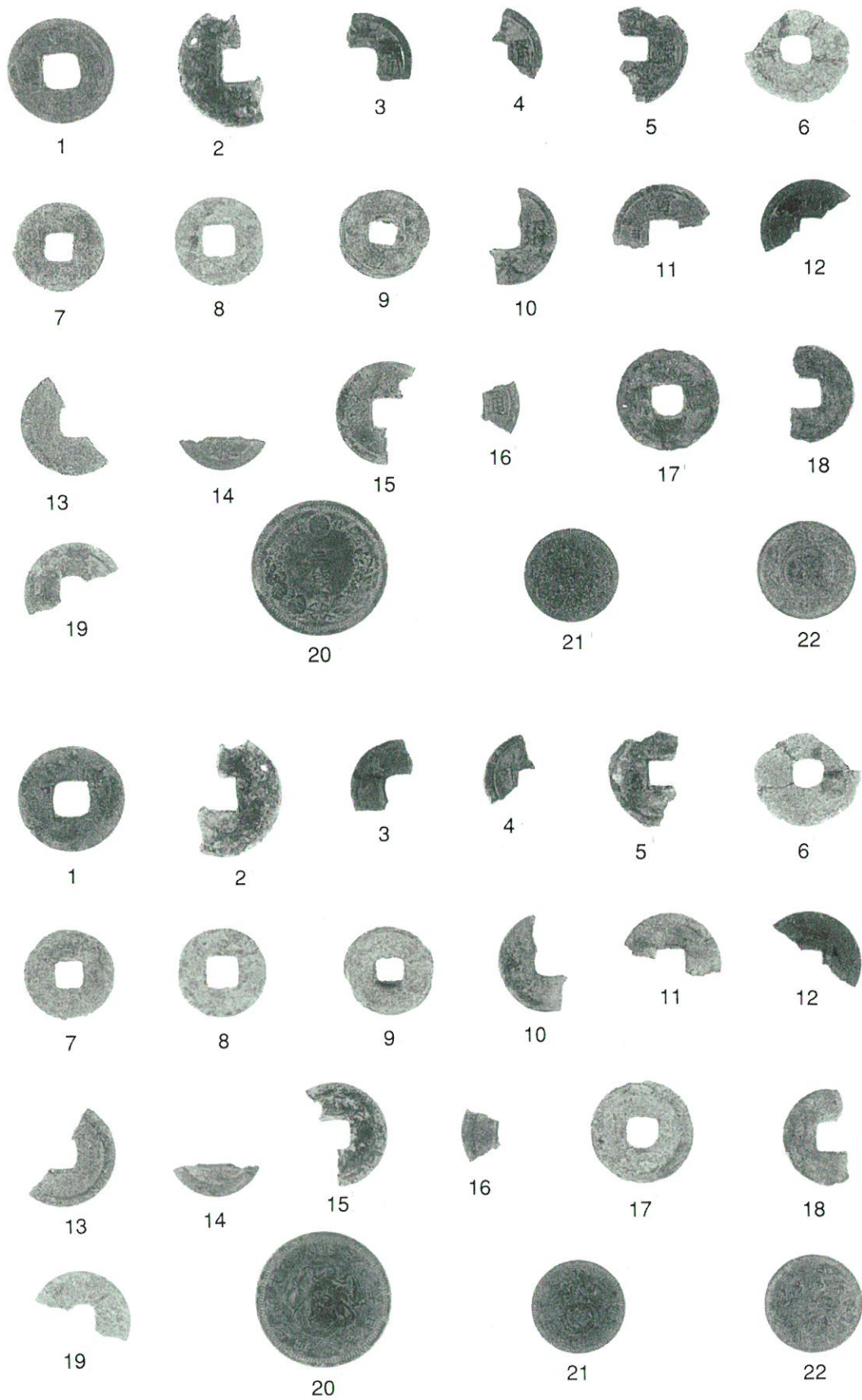
図版67 瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉)



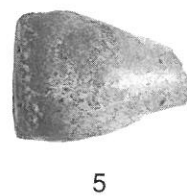
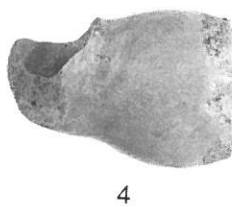
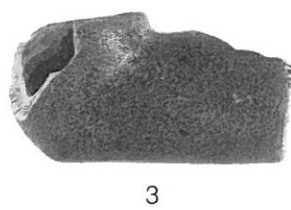
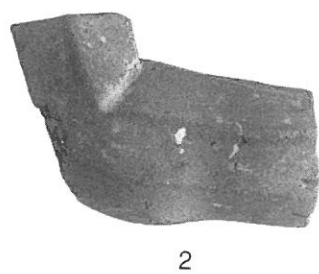
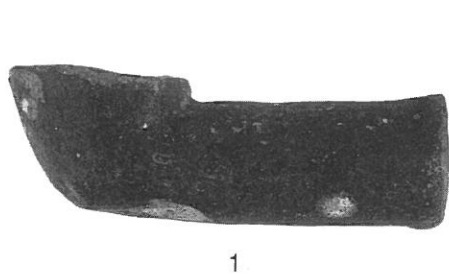
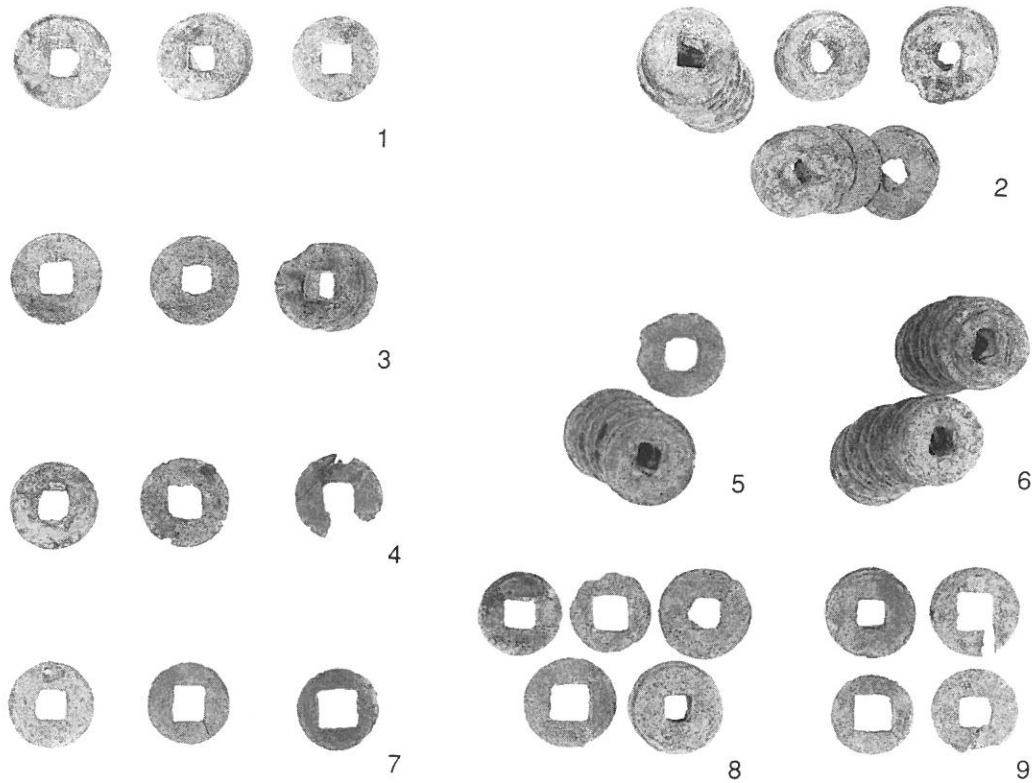
図版68 瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物・急須・鍔釜)



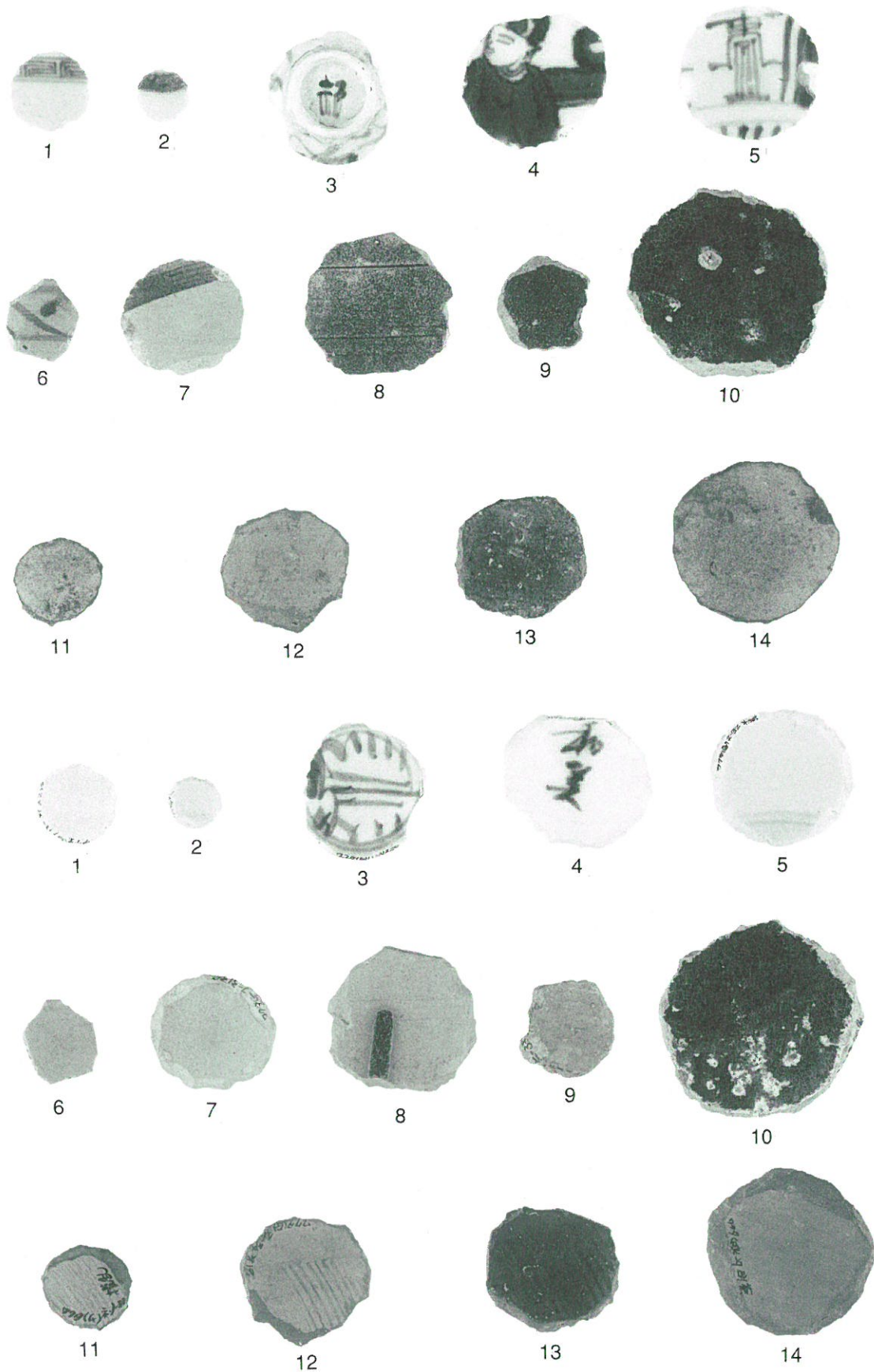
图版69 青铜製品・骨製品



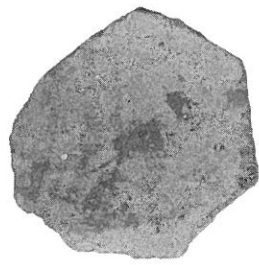
圖版70 古錢 (上：表面、下：裏面)



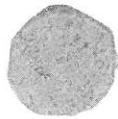
図版71 上：古銭（鳩目銭）、下：キセル



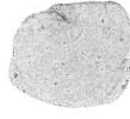
図版72 円盤状製品 1 (上：外面、下：内面)



15



16



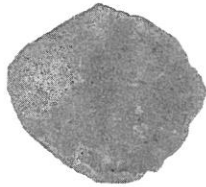
17



18



19



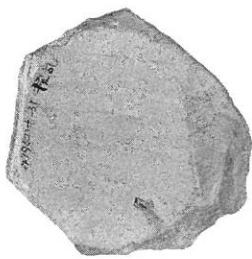
20



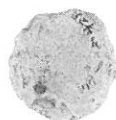
21



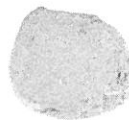
22



15



16



17



18



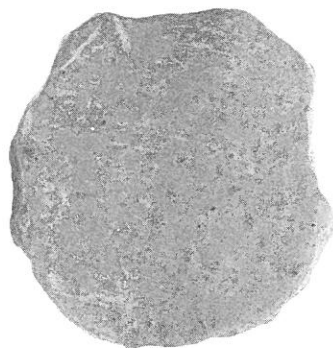
19



20

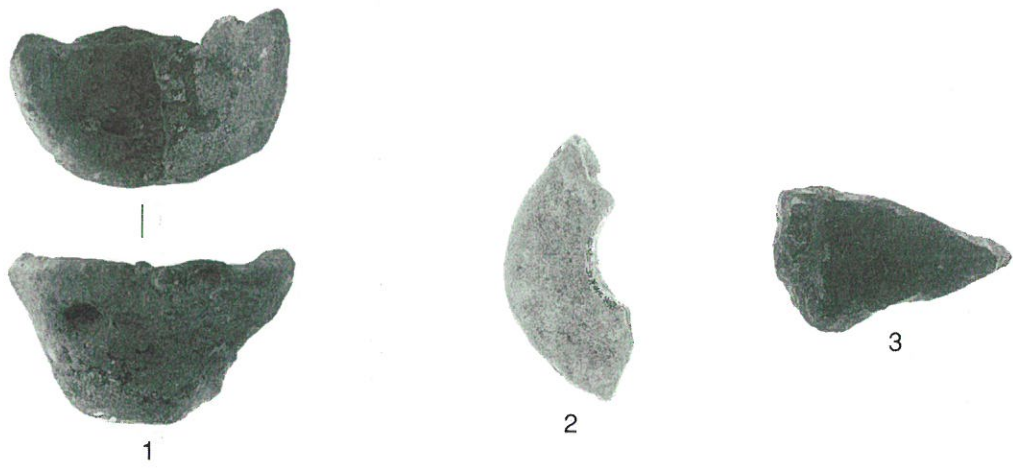


21



22

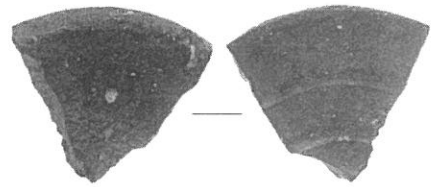
図版73 円盤状製品 2 (上:外面、下:内面)



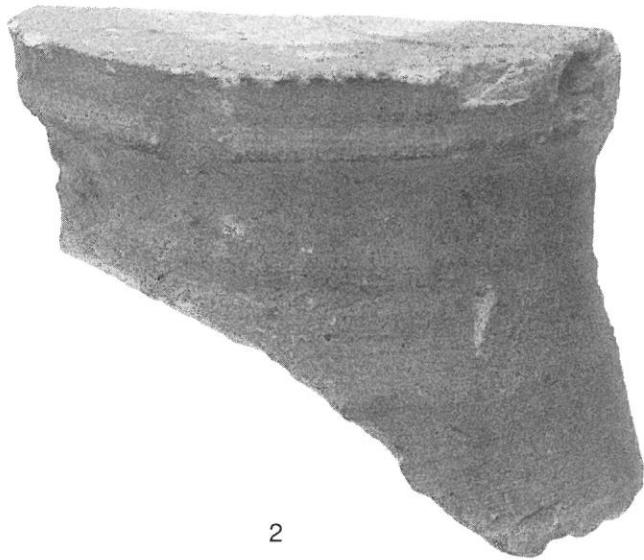
图版74 上左：坩埚、上右：石製品、下：土錘



1



3



2



4

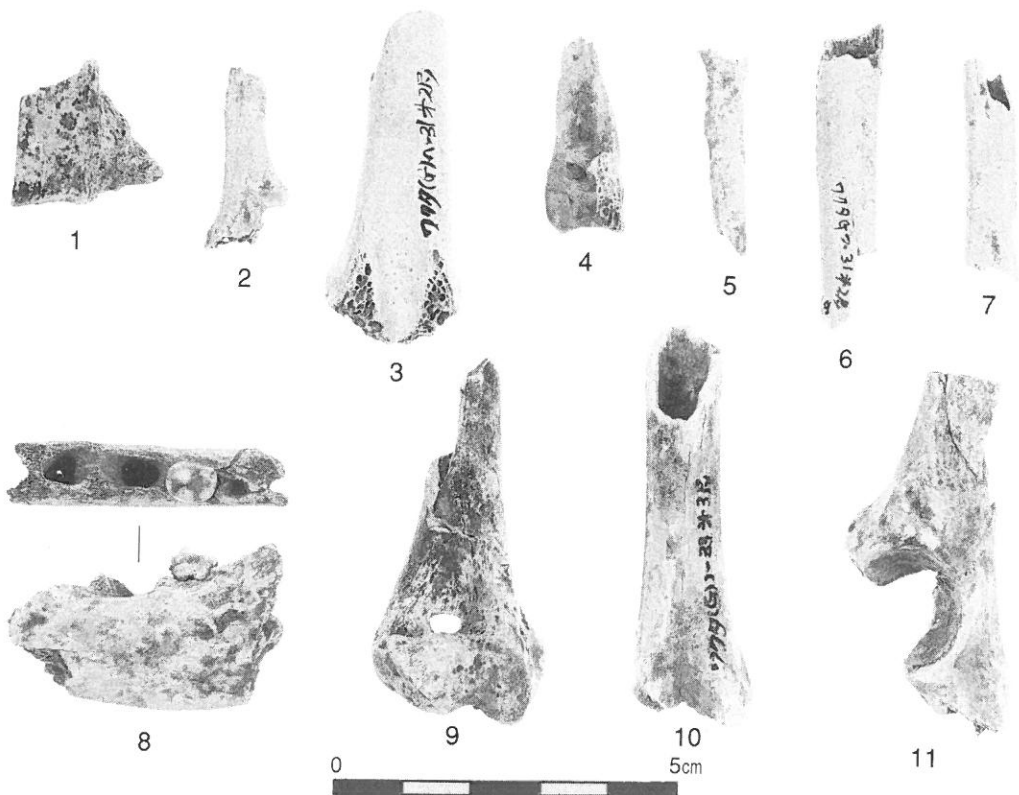
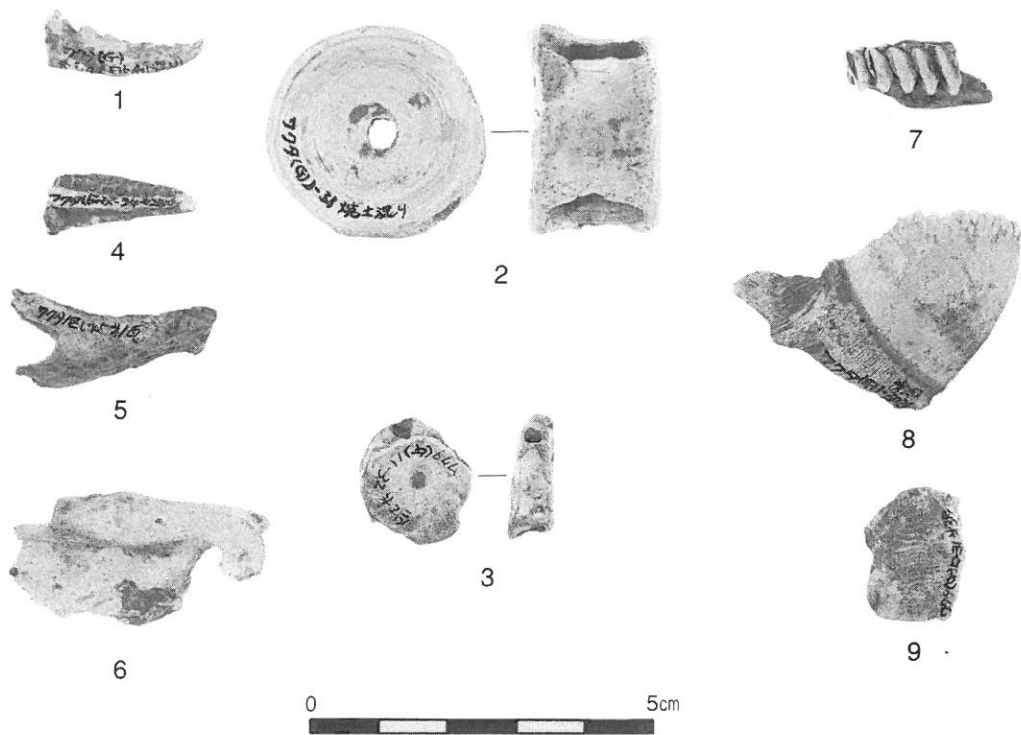
図版76

上：カニ・魚

1. オカガニ 可動指
2. メジロザメ科 脊椎骨
3. ネズミザメ科 脊椎骨
4. ハタ科 右 歯骨片
5. フェフキダイ科 右 歯骨
6. ハマフェフキダイ 右 口蓋骨
7. ナンヨウブダイ 右 上咽頭骨
8. ブダイ科 右 歯骨
9. ハリセンボン科 顎骨片

下：トリ・イヌ

1. ニワトリ 中足骨 右 骨体 \updownarrow
2. トリ 中手骨 右 骨体
3. トリ 大腿骨 左 遠位端
4. トリ 大腿骨 右 遠位端
5. トリ 脛骨 左 近位端
6. トリ 脛骨 左 骨体
7. トリ 中足骨 左 骨体
8. イヌ 下顎骨 右 M₂
9. イヌ 上腕骨 右 遠位端
10. イヌ 上腕骨 左 骨体～遠位部
11. イヌ 寛骨 左 臼部



図版76 上：カニ・魚、下：トリ・イヌ

図版77 ゴンドウクジラ

1・2. ゴンドウクジラ 上顎骨 右 破片



図版77 ゴンドウクジラ

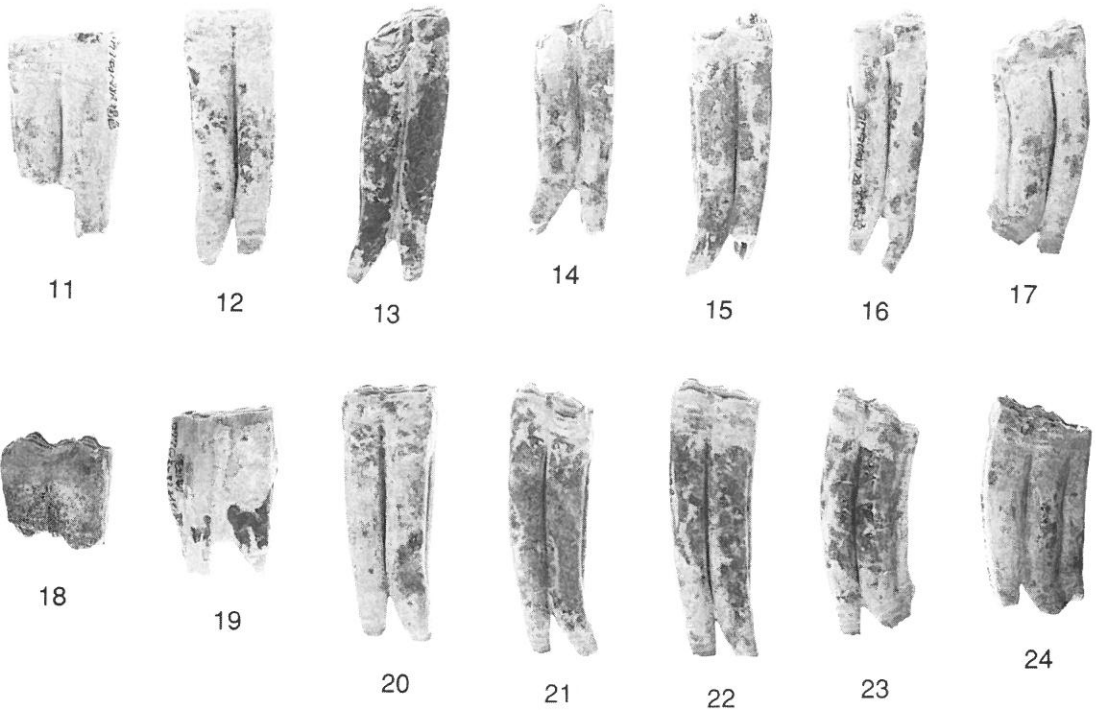
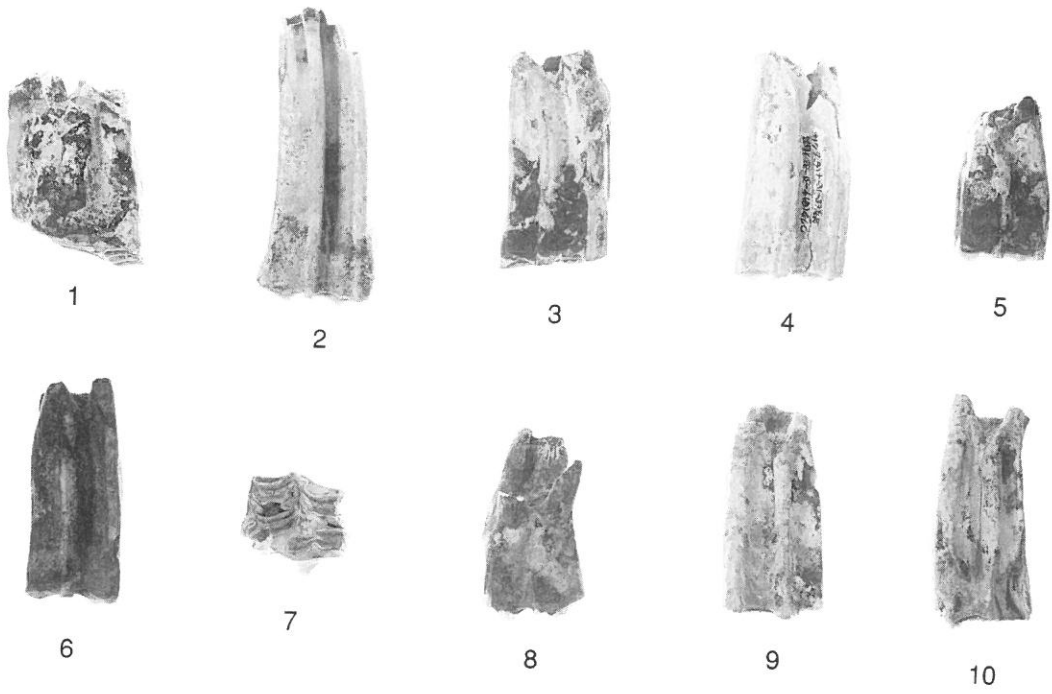
図版78 ウマ歯

上：上顎骨

1. ウマ 上顎骨 右 P^2
2. ウマ 上顎骨 右 P^3 or P^4
3. ウマ 上顎骨 右 P^3 or P^4
4. ウマ 上顎骨 右 P^3 or P^4
5. ウマ 上顎骨 右 M^1
6. ウマ 上顎骨 右 M^1 or M^2
7. ウマ 上顎骨 左 dm^4
8. ウマ 上顎骨 左 $P^3 \sim M^2$
9. ウマ 上顎骨 左 $P^3 \sim M^2$
10. ウマ 上顎骨 左 $P^3 \sim M^2$

下：下顎骨

11. ウマ 下顎骨 右 P_2
12. ウマ 下顎骨 右 P_3 or P_4
13. ウマ 下顎骨 右 P_3 or P_4
14. ウマ 下顎骨 右 M_1 or M_2
15. ウマ 下顎骨 右 M_1 or M_2
16. ウマ 下顎骨 右 M_1 or M_2
17. ウマ 下顎骨 右 M_3
18. ウマ 下顎骨 左 dm_4
19. ウマ 下顎骨 左 P_2
20. ウマ 下顎骨 左 P_3 or P_4
21. ウマ 下顎骨 左 M_1 or M_2
22. ウマ 下顎骨 左 M_1 or M_2
23. ウマ 下顎骨 左 M_3
24. ウマ 下顎骨 左 M_3

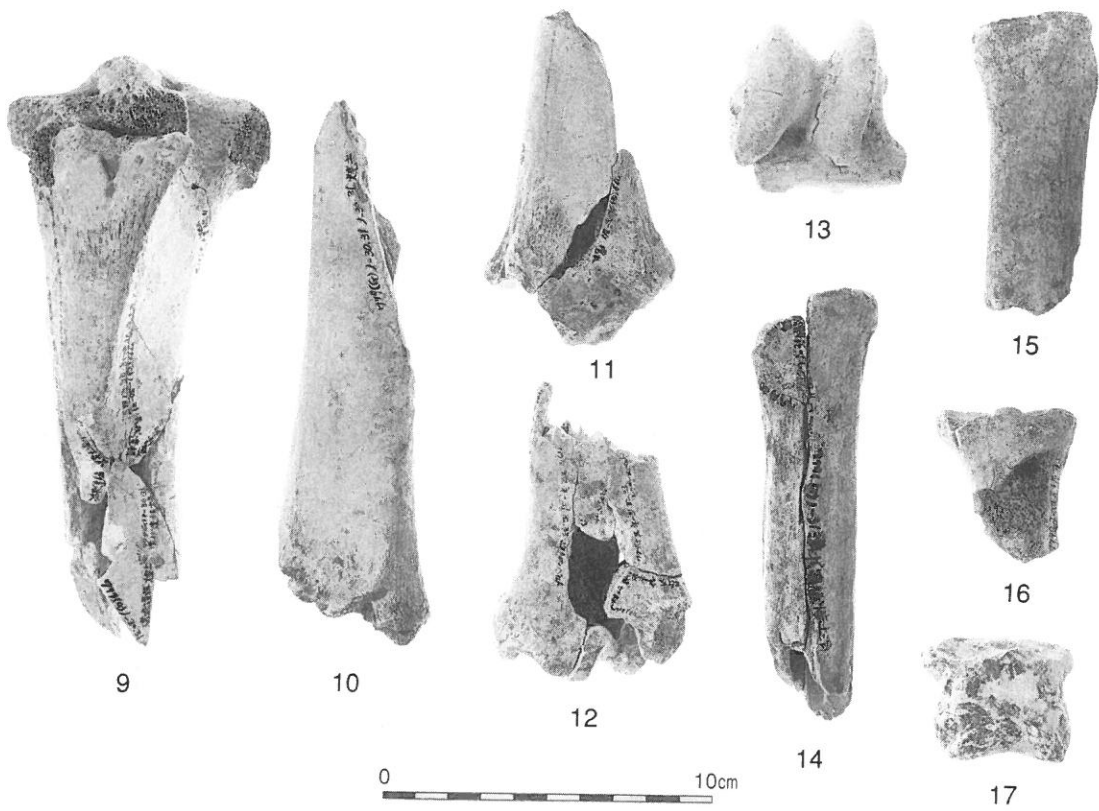


図版78 ウマ歯

図版79 ウマ・ウシ

1. ウマ 下顎骨 右
2. ウマ 下顎骨 右
3. ウシ 橈骨 左 近位端
4. ウマ 橈骨 (橈尺骨) 左 近位端～骨体
5. ウマ 中手骨 左 遠位端
6. ウマ 寛骨 右 臼部～下部
7. ウマ 大腿骨 左 近位骨端はずれ
8. ウマ 大腿骨 左 近位端

9. ウシ 脛骨 左 近位端～骨体
10. ウシ 脛骨 右 骨体～遠位部
11. ウシ 脛骨 左 遠位端
12. ウマ 脛骨 右 遠位端
13. ウマ 距骨 右 完存
14. ウマ 中足骨 左 近位端～骨体
15. ウマ 中足骨 左 近位端
16. ウマ 基節骨 右 近位端
17. ウマ 中節骨 左 完存



図版79 ウマ・ウシ

図版80 ブタ

1. ブタ 頭蓋骨 左右 頭頂骨
2. ブタ 頭蓋骨 左右 頭頂骨
3. ブタ 頭蓋骨 項稜
4. ブタ 頭蓋骨 右 頬骨
5. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
6. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
7. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
8. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨

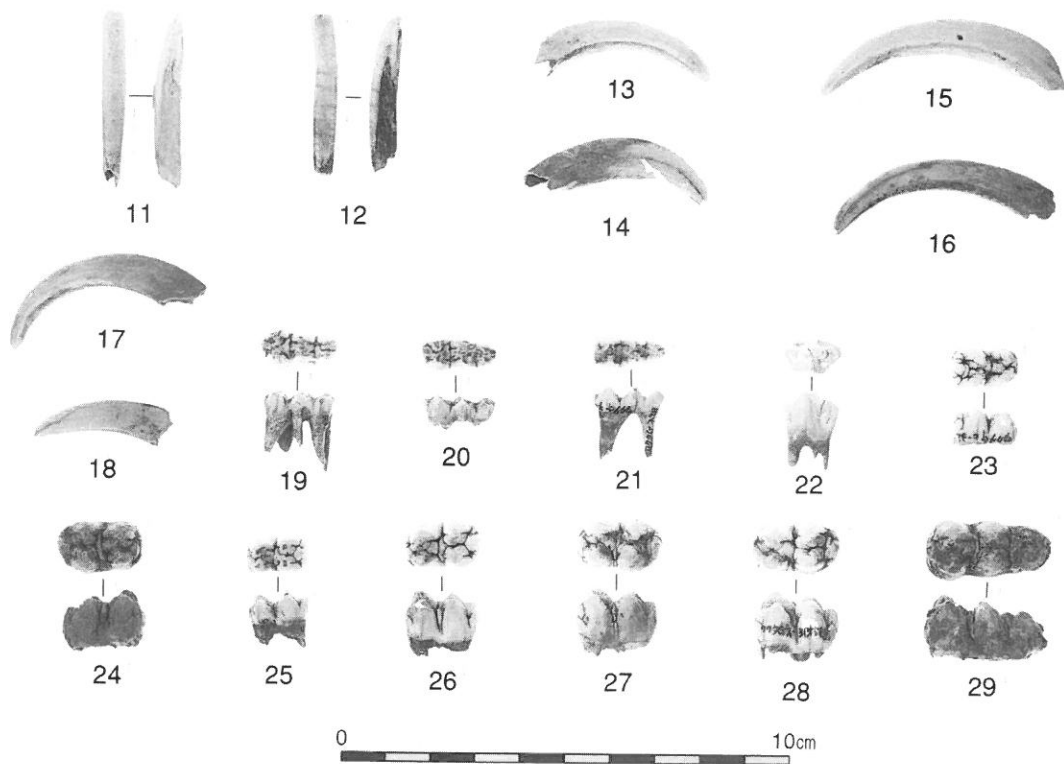
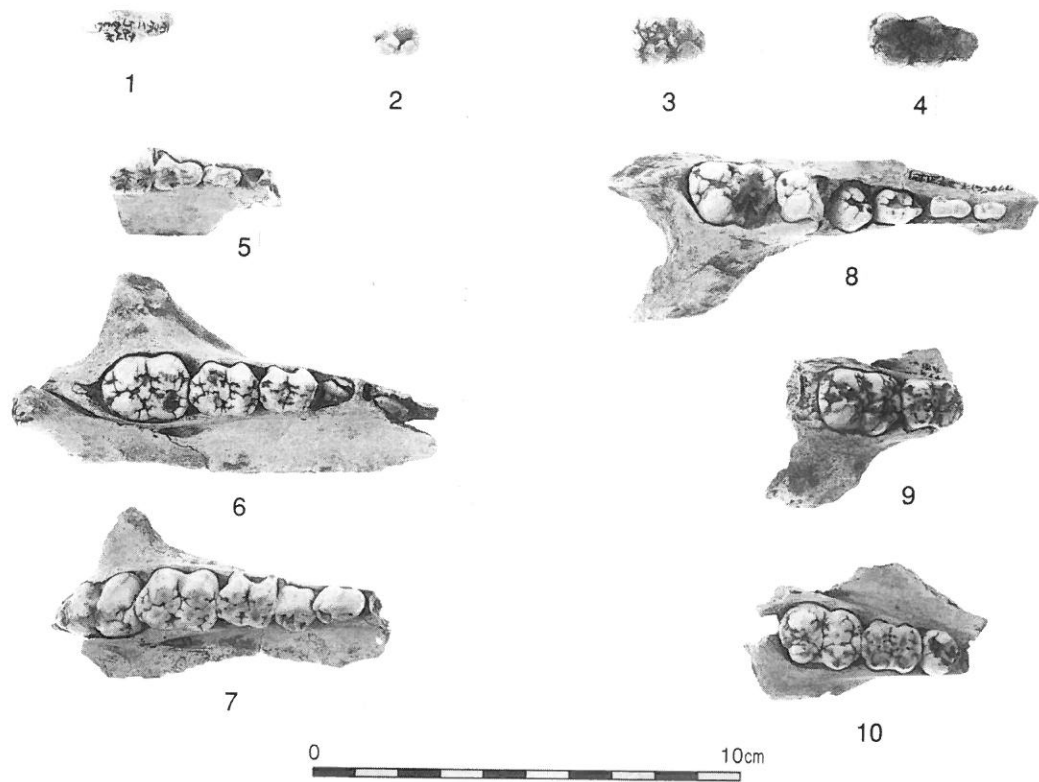
図版81 ブタ歯

上：上顎骨

1. ブタ 上顎骨 左 I^2
2. ブタ 上顎骨 左 P^3
3. ブタ 上顎骨 左 M^2
4. ブタ 上顎骨 右 M^3
5. ブタ 上顎骨 右 $dm^{2.3.4}$
6. ブタ 上顎骨 右 $dm^{<2.3>4} M^{1.2}$
7. ブタ 上顎骨 右 $P^{3.4} M^{1.2.3}$
8. ブタ 上顎骨 左 $P^{1.2<3.4>} M^{1.2.<3>}$
9. ブタ 上顎骨 左 $M^{1.2<3>}$
10. ブタ 上顎骨 左 $P^4 M^{1.2<3>}$

下：下顎骨

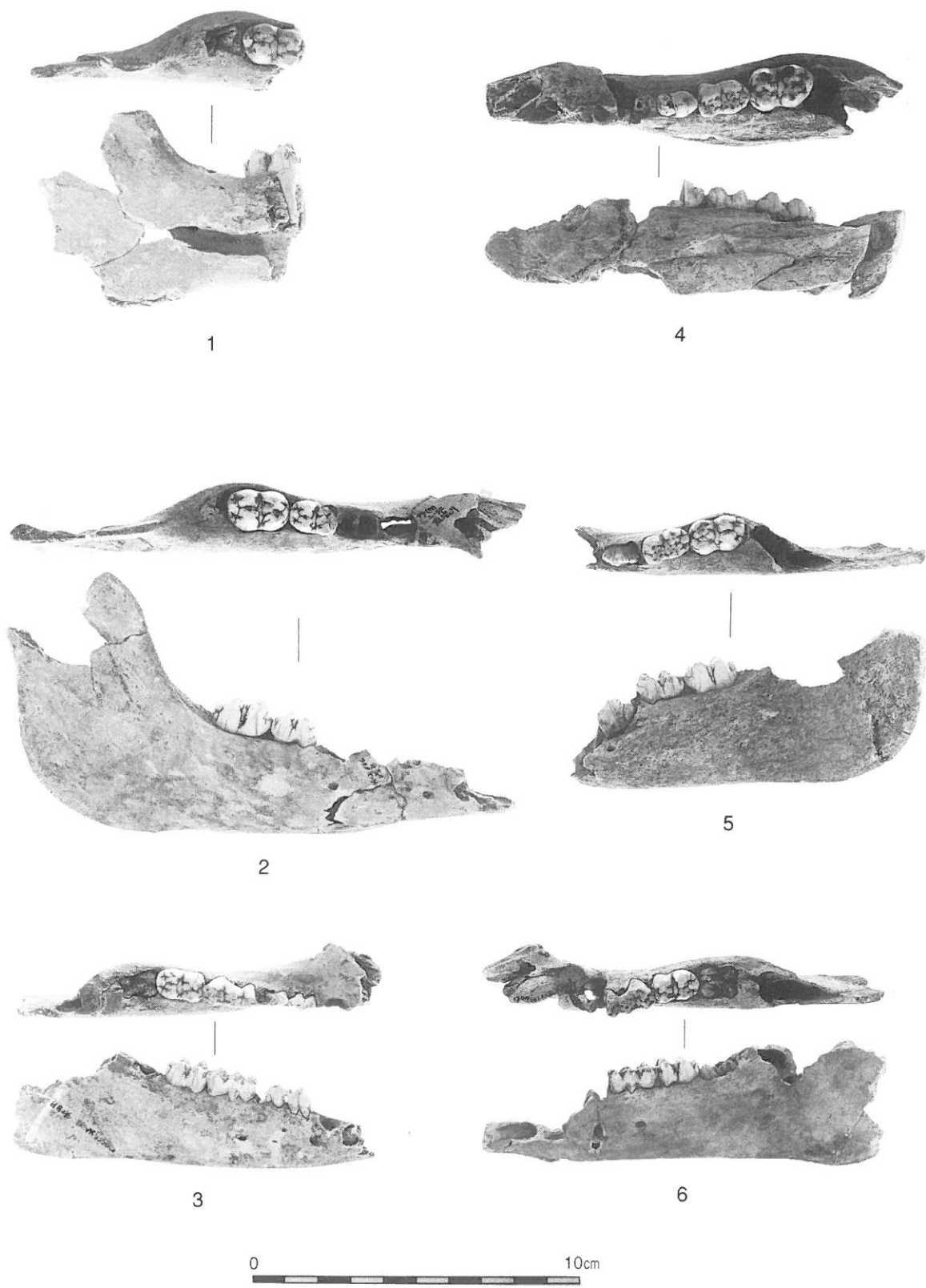
11. ブタ 下顎骨 左 I_1
12. ブタ 下顎骨 左 I_1
13. ブタ 下顎骨 右 犬歯 ♂
14. ブタ 下顎骨 右 犬歯 ♀
15. ブタ 下顎骨 左 犬歯 ♂
16. ブタ 下顎骨 右 犬歯 ♂
17. ブタ 下顎骨 左 犬歯 ♂
18. ブタ 下顎骨 左 犬歯 ♂
19. ブタ 下顎骨 右 dm_4
20. ブタ 下顎骨 右 dm_4
21. ブタ 下顎骨 左 dm_4
22. ブタ 下顎骨 左 P_4
23. ブタ 下顎骨 左 M_1
24. ブタ 下顎骨 右 M_1
25. ブタ 下顎骨 右 M_2
26. ブタ 下顎骨 左 M_2
27. ブタ 下顎骨 左 M_2
28. ブタ 下顎骨 左 M_2
29. ブタ 下顎骨 左 M_3



図版81 プタ歯 (上：上顎骨、下：下顎骨)

図版82 ブタ歯

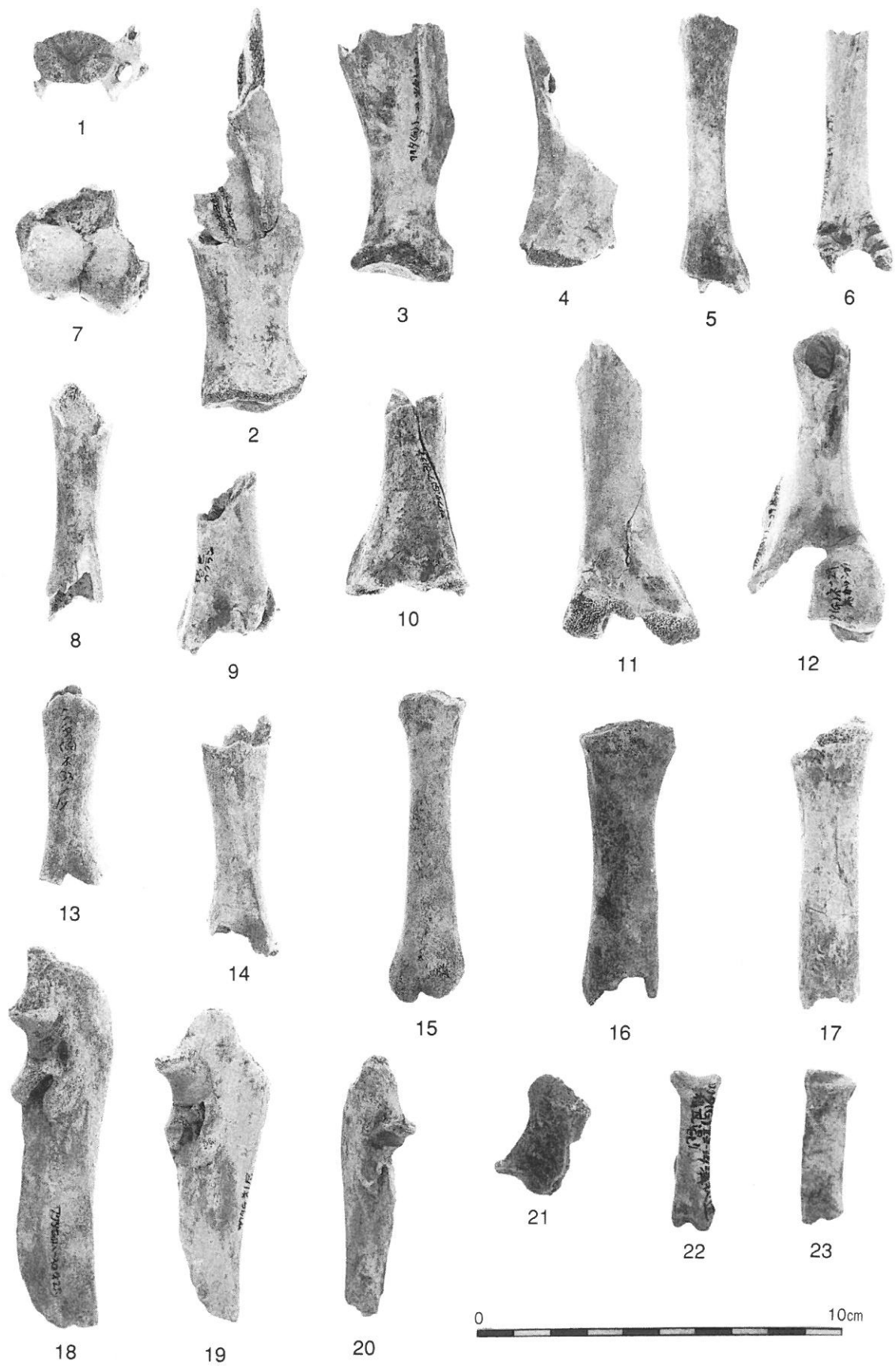
1. ブタ 下顎骨 右 $M_{2<3>}$
2. ブタ 下顎骨 右 $M_{1.2<3>}$ ♀
3. ブタ 下顎骨 右 $\langle C \rangle dm_{2.3.4} M_{1<2>}$ ♀
4. ブタ 下顎骨 左 $P_4 M_{1.2}$ ♀
5. ブタ 下顎骨 左 $\langle P_4 \rangle M_{1.2}$
6. ブタ 下顎骨 左 $dm_4 M_{1<2>}$ ♀



図版82 ブタ歯

図版83 ブタ

1. ブタ 頸椎
2. ブタ 肩甲骨 右 骨体～遠位端
3. ブタ 肩甲骨 右 遠位端
4. ブタ 肩甲骨 右 遠位部
5. ブタ 上腕骨 左 近位部～遠位部 (幼)
6. ブタ 上腕骨 左 骨体～遠位部 (幼) キズあり
7. ブタ 上腕骨 右 遠位骨端のみ
8. ブタ 上腕骨 右 骨体 (幼) キズあり
9. ブタ 上腕骨 右 遠位部
10. ブタ 上腕骨 右 遠位部
11. ブタ 上腕骨 左 遠位部
12. ブタ 上腕骨 右 骨体～遠位端
13. ブタ 上腕骨 左 骨体
14. ブタ 上腕骨 右 骨体
15. ブタ 橈骨 右 両端はずれ (幼)
16. ブタ 橈骨 左 近位端～骨体
17. ブタ 橈骨 右 近位部～骨体
18. ブタ 尺骨 左 近位部～骨体
19. ブタ 尺骨 左 近位部～骨体
20. ブタ 尺骨 右 近位部～骨体 (幼)
21. ブタ 尺骨 左 近位骨端はずれ
22. ブタ 中手骨 左 III
23. ブタ 中手骨 左 IV



図版83 プタ

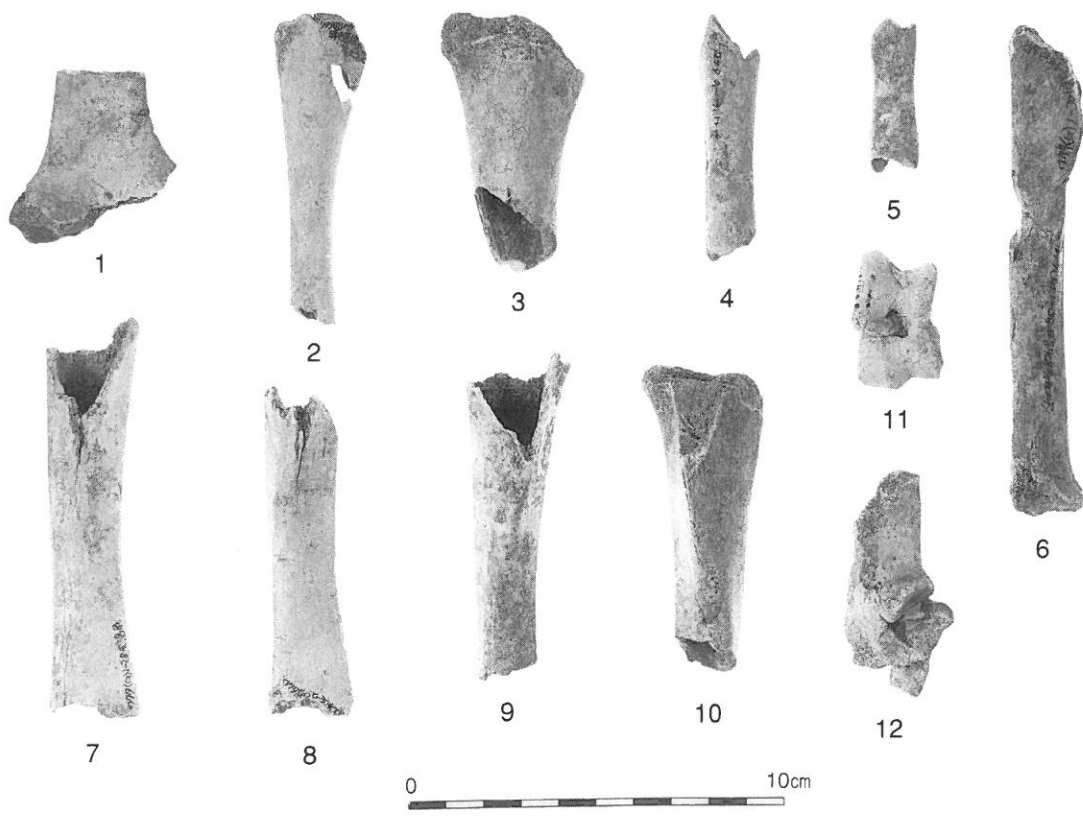
図版84

上：ブタ

1. ブタ 寛骨 左 上部 キズあり
2. ブタ 大腿骨 左 近位部～骨体
3. ブタ 大腿骨 左 近位骨端はずれ
4. ブタ 大腿骨 左 骨体
5. ブタ 大腿骨 左 骨体 (幼)
6. ブタ 脛骨 左 近位部～遠位部
7. ブタ 脛骨 左 近位部～遠位部
8. ブタ 脛骨 左 骨体 キズあり
9. ブタ 脛骨 左 近位部～骨体
10. ブタ 脛骨 右 近位骨端はずれ
11. ブタ 距骨 右 完存
12. ブタ 踵骨 左 近位部～遠位部 キズあり

下：ヤギ

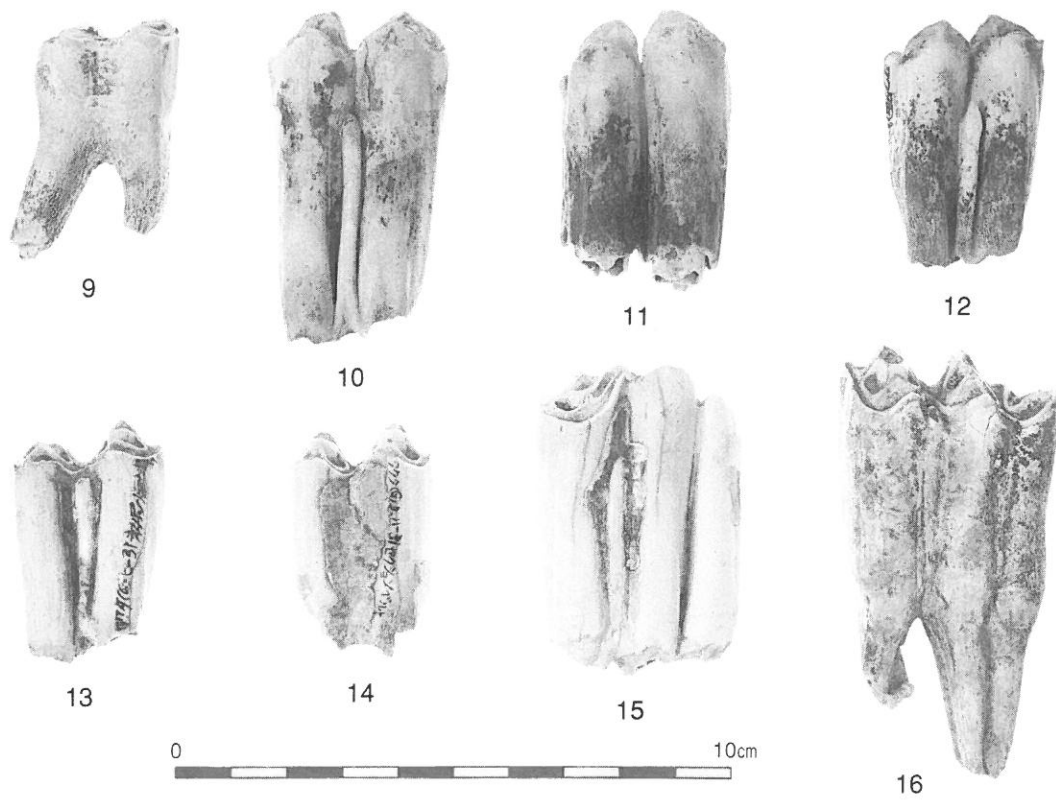
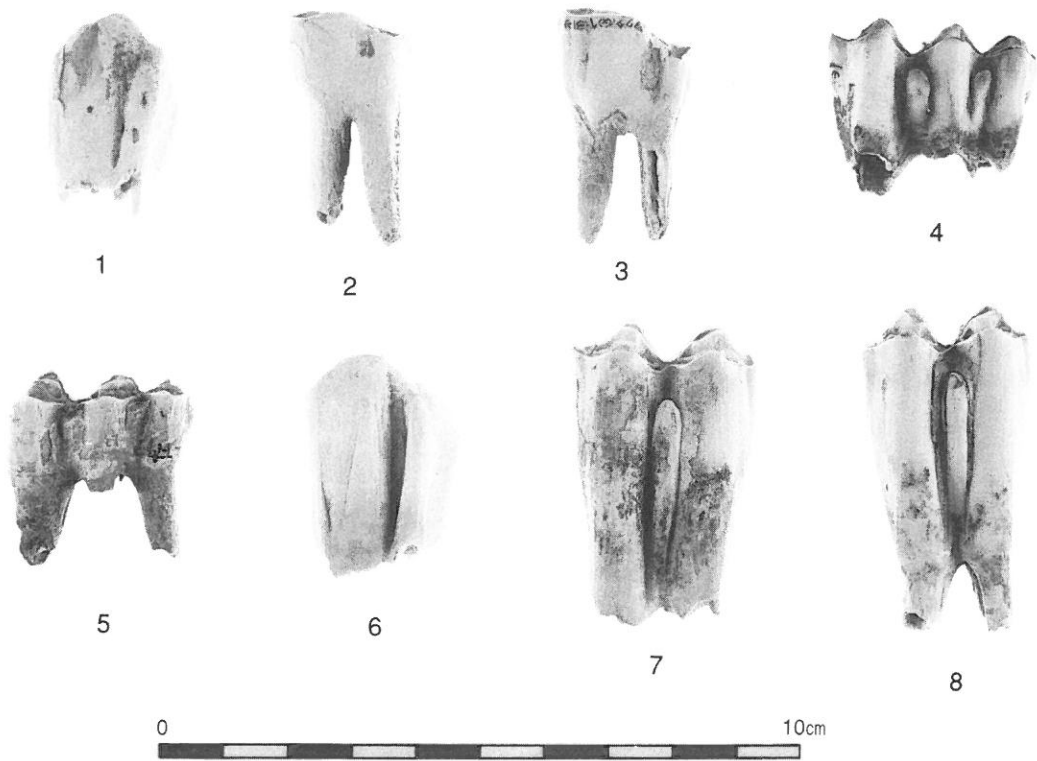
13. ヤギ 下顎骨 左 P₃
14. ヤギ 下顎骨 左 P₄
15. ヤギ 下顎骨 左 M₁
16. ヤギ 下顎骨 左 M₂
17. ヤギ 下顎骨 左 M₃
18. ヤギ 寛骨 左 腸骨 上部
19. ヤギ 寛骨 左 腸骨 上部
20. ヤギ 寛骨 右 腸骨 上部



図版84 上：ブタ、下：ヤギ

図版85 ウシ歯

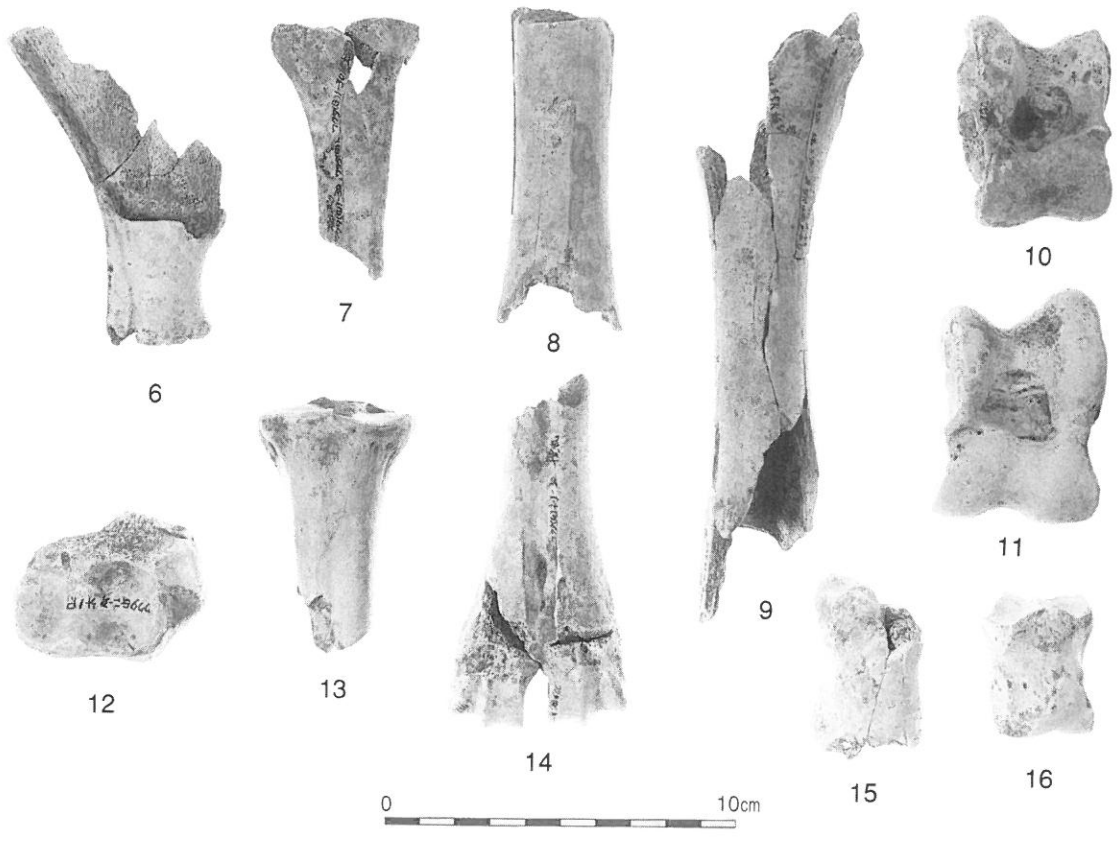
1. ウシ 下顎骨 左 P₃
2. ウシ 下顎骨 左 P₃
3. ウシ 下顎骨 左 P₃
4. ウシ 下顎骨 右 dm₄
5. ウシ 下顎骨 右 dm₄
6. ウシ 下顎骨 左 P₄
7. ウシ 下顎骨 右 M₁
8. ウシ 下顎骨 右 M₁
9. ウシ 下顎骨 右 M₁
10. ウシ 下顎骨 右 M₂
11. ウシ 下顎骨 右 M₂
12. ウシ 下顎骨 右 M₂
13. ウシ 下顎骨 右 M₂
14. ウシ 下顎骨 右 M₂
15. ウシ 下顎骨 左 M₃
16. ウシ 下顎骨 左 M₃



図版85 ウシ歯

図版86 ウシ

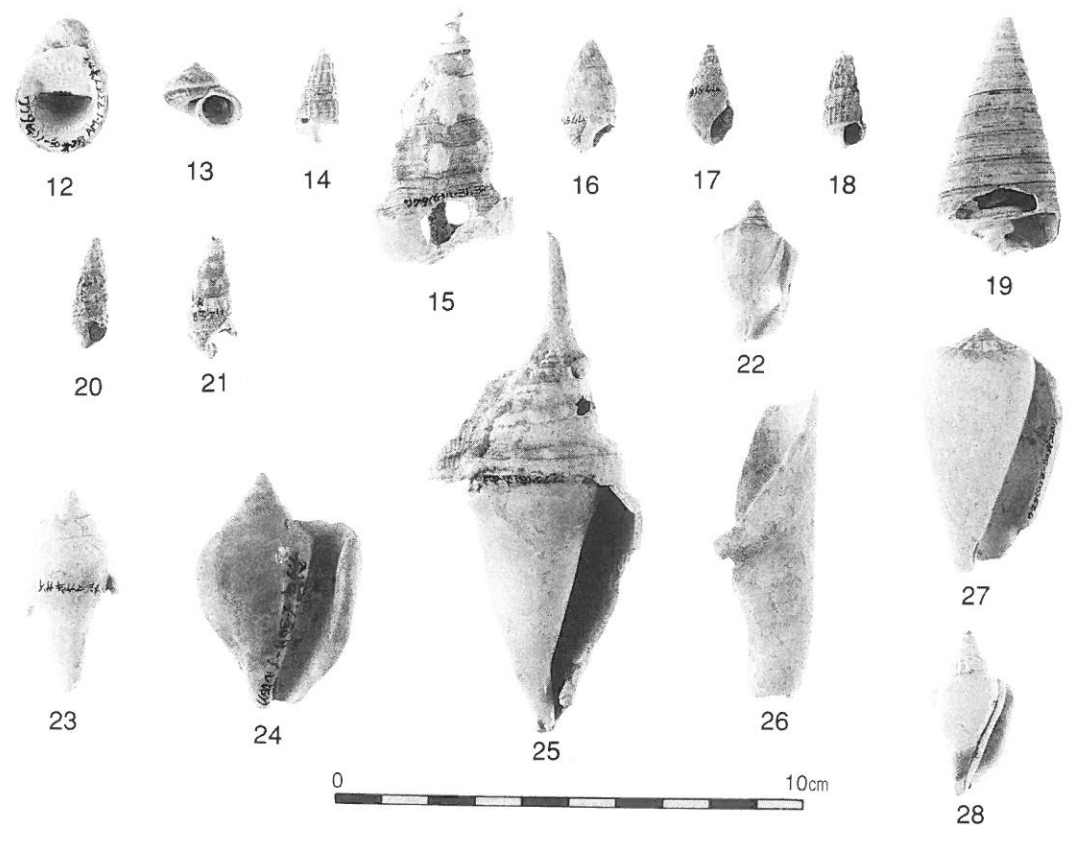
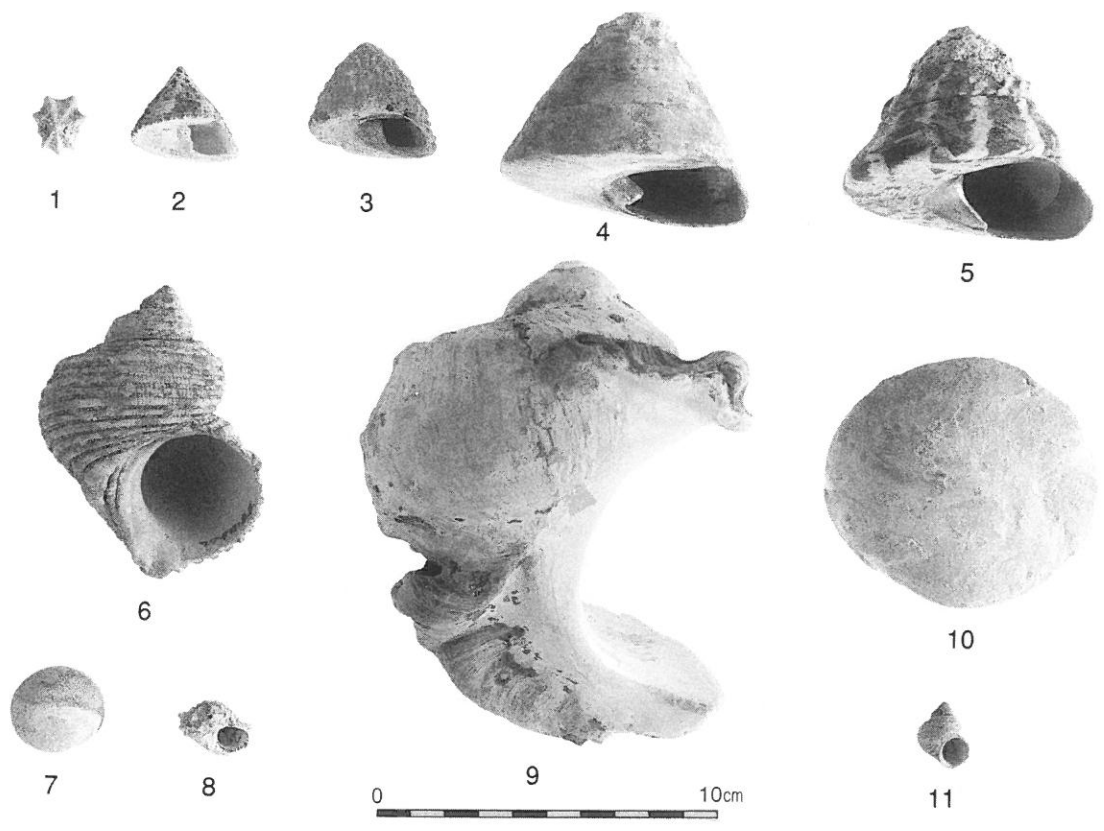
1. ウシ 頭蓋骨 角心↑
2. ウシ 下顎骨 右 P₂
3. ウシ 肩甲骨 右 骨体～遠位端
4. ウシ 肩甲骨 右 近位部～遠位端 キズあり
5. ウシ 肩甲骨 左 近位部～遠位端 キズあり
6. ウシ 肩甲骨 右 骨体～遠位端 (幼)
7. ウシ 橈骨 右 近位骨端はずれ (幼)
8. ウシ 中手骨 左 骨体
9. ウシ 大腿骨 左 近位部～遠位部
10. ウシ 距骨 右 完存
11. ウシ 距骨 左 完存
12. ウシ 中心足根骨+第4足根骨 左
13. ウシ 中足骨 右 近位端
14. ウシ 中足骨 左 骨体～遠位端
15. ウシ 基節骨 右 近位端～遠位部
16. ウシ 中節骨 左 完存



図版86 ウシ

図版87 巻貝

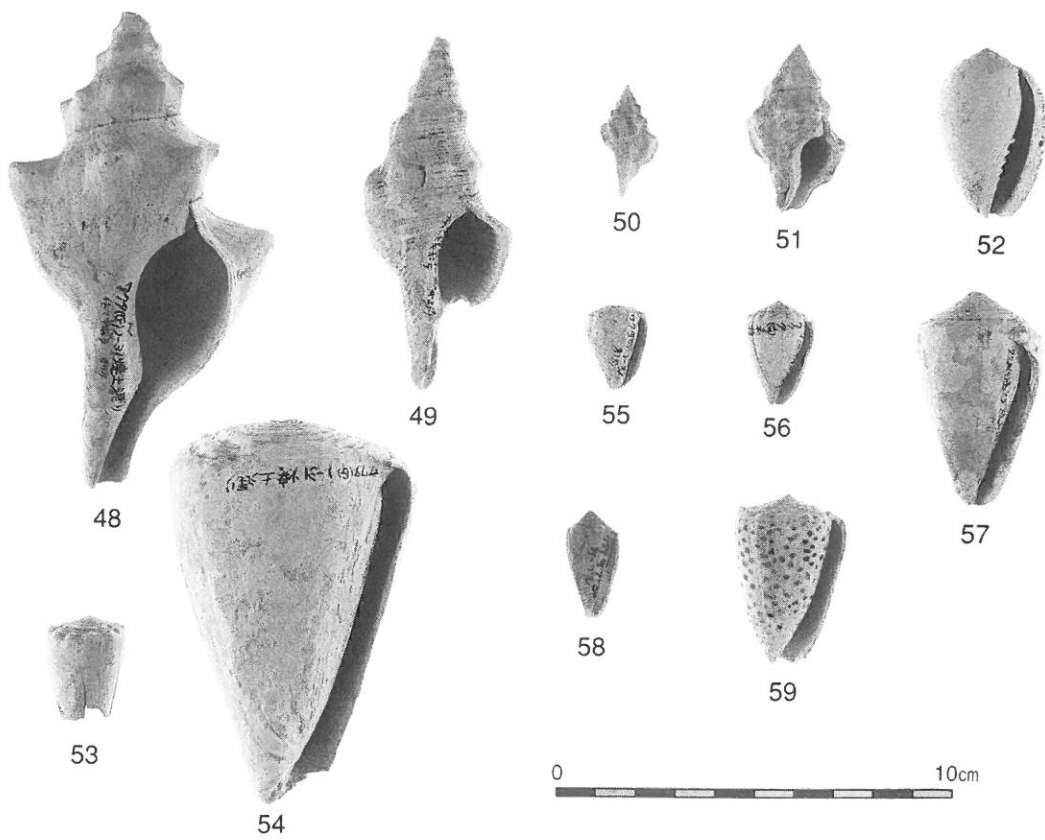
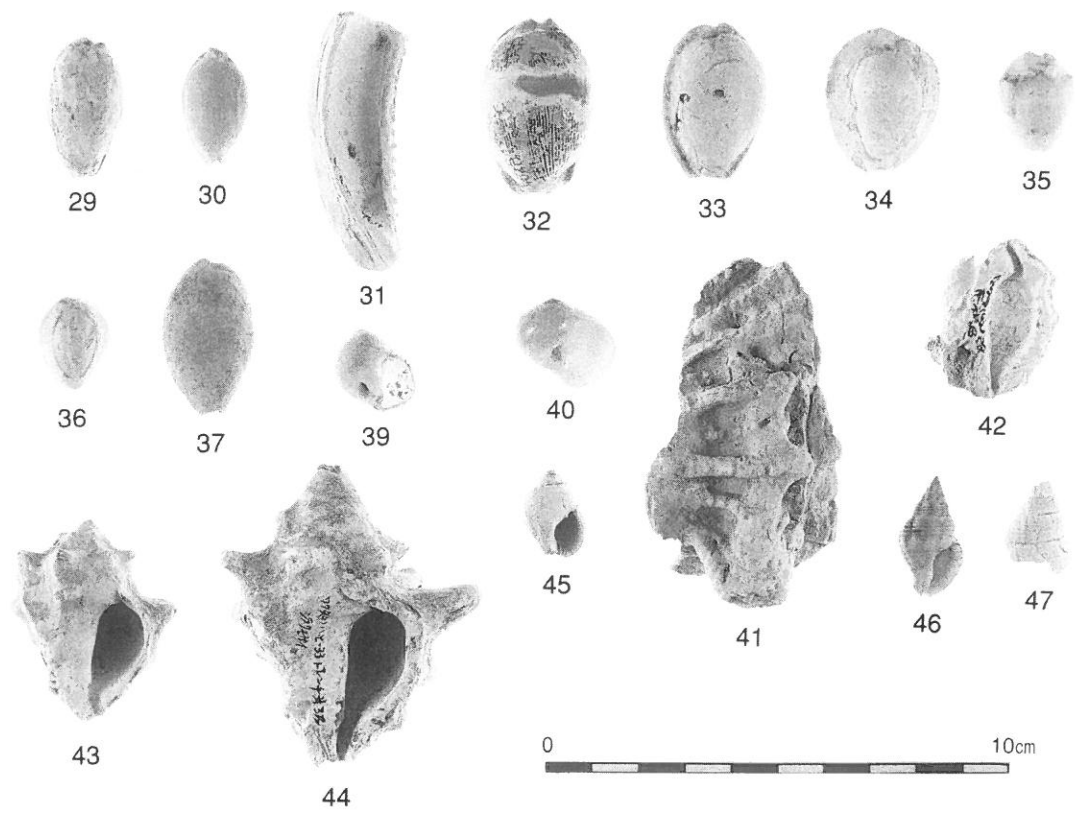
1. リュウキュウウノアシ
2. ニシキウズ
3. ムラサキウズ
4. ギンタカハマ
5. サラサバテイラ
6. チョウセンサザエ
7. チョウセンサザエの蓋
8. カンギク
9. ヤコウガイ
10. ヤコウガイの蓋
11. コシダカサザエ
12. アマオブネ
13. オキナワヤマタニシ
14. トウガタカワニナ
15. オニノツノガイ
16. クワノミカニモリ
17. ヨコワカニモリ
18. ヘナタリ
19. センニンガイ
20. ウミニナ
21. イボウミニナ
22. ムカシタモトガイ
23. マガキガイ
24. ネジマガキガイ
25. スイショウガイ
26. クモガイ
27. スイジガイ
28. オハグロガイ



图版87 卷貝

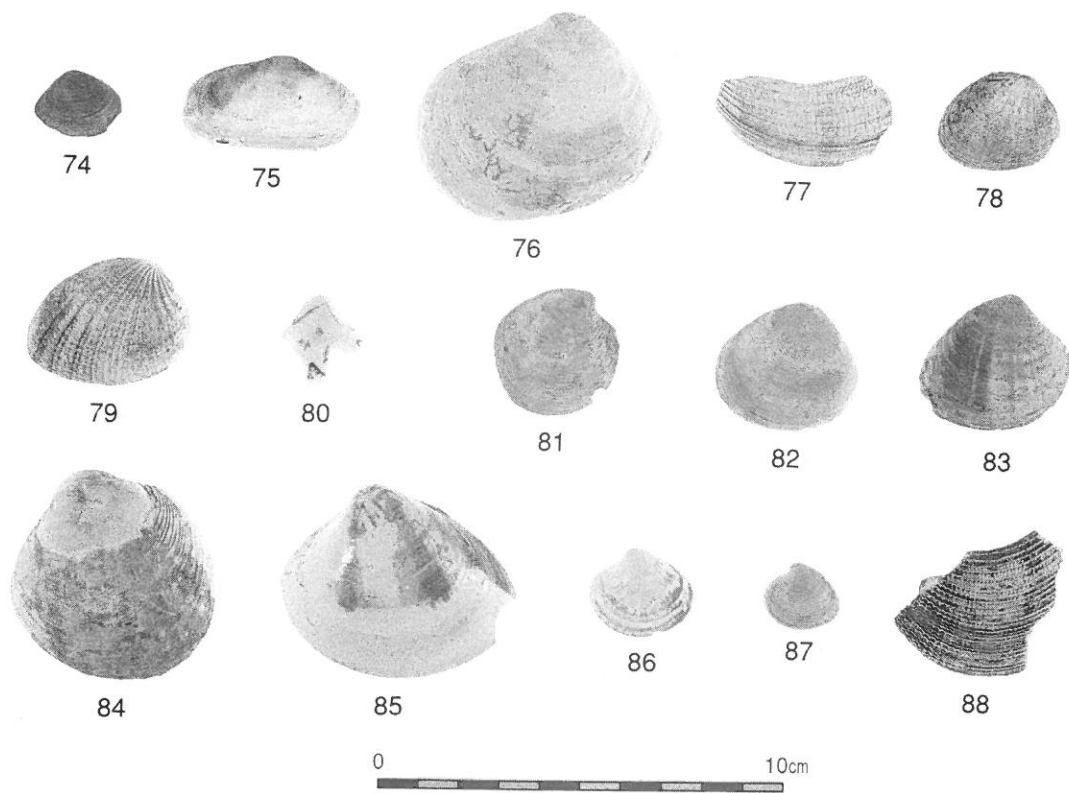
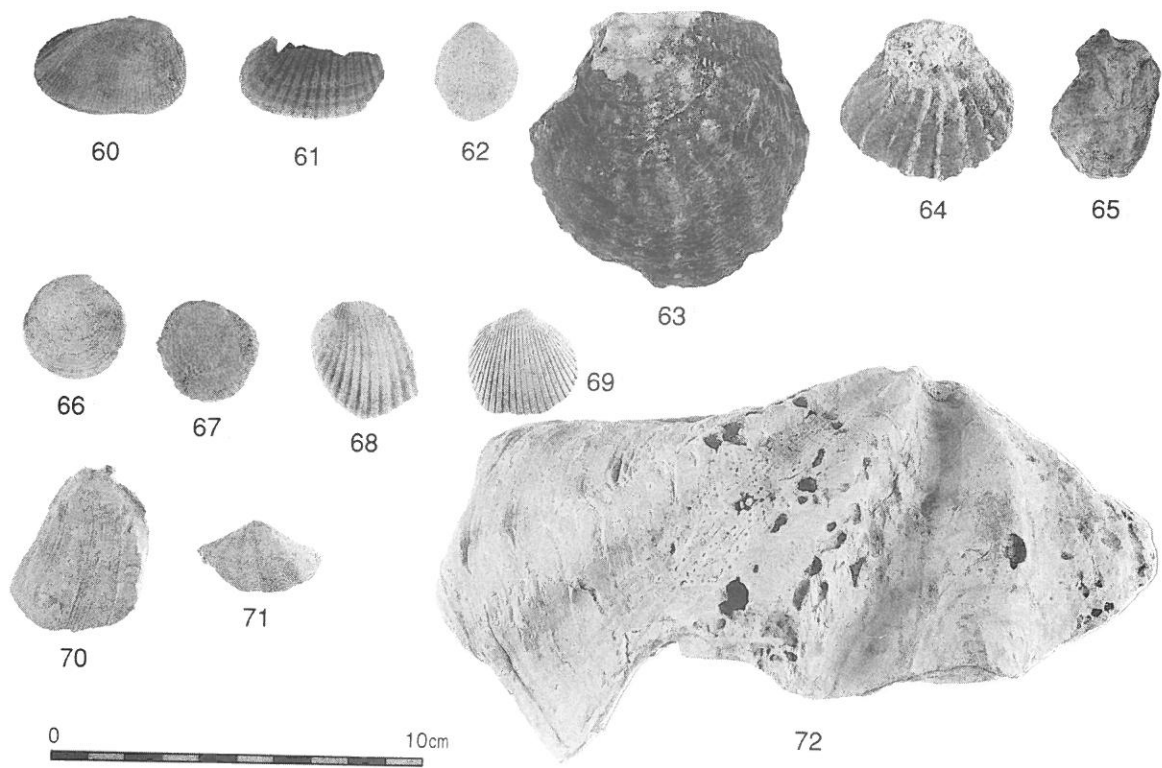
図版88 巻貝

29. ナツメダカラガイモドキ
30. スソヨツメダカラ
31. ハチジョウダカラ
32. ヤクジマダカラ
33. コモンダカラ
34. ハナマルユキ
35. キイロダカラ (フシダカ)
36. ハナビラダカラ
37. ヒメホシダカラ
39. シロヘソアキトミガイ
40. トラダマ
41. シワクチナルトボラ
42. アカイガレイシ
43. ツノレイシ
44. シラクモガイ
45. イボヨフバイ
46. ヒメホラダマシ
47. シマベッコウバイ
48. イトマキボラ
49. ナガイトマキボラ
50. リュウキュウツノマタガイ
51. ツノマタモドキ
52. イモフデガイ
53. クロミナシガイ
54. クロフモドキ
55. マダライモ
56. サヤガタイモ
57. ヤナギシボリイモ
58. アラレイモガイ
59. ゴマフイモ



図版89 二枚貝

60. ベニエガイ
61. リュウキュウサルボウ
62. ソメワケグリ
63. クロチョウガイ
64. メンガイの一種
65. ニセマガキ
66. ウラキツキガイ
67. キクザル
68. リュウキュウザルガイ
69. カワラガイ
70. シャゴウ
71. ヒメジャコ
72. ヒレジャコ
74. イソハマグリ
75. マスオガイ
76. シレナシジミ
77. ヌノメガイ
78. ホソスジイナミガイ
79. アラスジケマンガイ
80. マルオミナエシ
81. オイノカガミガイ
82. シラオガイ
83. オトコエシ
84. オキシジミガイ
85. チョウセンハマグリ
86. サラサガイ
87. イナズマスダレガイ類の一種
88. カゴガイ



图版89 二枚貝

沖縄県文化財調査報告書第121集

湧田古窯跡（Ⅱ）

—県庁舎議会棟建設に係る発掘調査—

印刷 平成6年3月20日

発行 平成6年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098(866)2731~2733

印刷 株式会社 近代美術

〒901-11 南風原町字兼城206-9

TEL 098(889)4113